笛吹市文化財調査報告書　第11集

山梨県笛吹市

車地蔵遺跡・石動遺跡
北中原遺跡・中新居遺跡

一宮町末木地区畑総事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010
山梨県峡東農務事務所
笛吹市教育委員会

序

笛吹市は、平成16年10月に石和町・御坂町・一宮町・八代町・境川村の合併によって誕生し、さらに平成18年8月に芦川村が編入合併して現在に至ります。当市は、豊かな自然と歴史・文化の息づくまちです。数多くの埋蔵文化財包蔵地が所在する本市では、国指定史跡甲斐国分寺跡・国分尼寺跡をはじめとする遺跡が約730箇所も存在します。遺跡・社寺・古民家建造物、天然記念物等の保護・保存に誠心誠意努めております。

このたび刊行の運びとなりました本書は、山梨県営担い手育成畑地帯総合整備事業一宮末木地区支線道路改良工事に伴って実施した、一宮町内に所在する車地蔵遺跡・石動遺跡・北中原遺跡・中新居遺跡発掘調査の成果を記したものです。平成9年から12年にかけて旧一宮町教育委員会、平成17年に笛吹市教育委員会が発掘調査を実施しました。

調査の結果、奈良から平安時代にかけての住居跡をはじめ、土坑墓、溝、鋳造関連遺構等を発見しました。なかでも古代から中世にかけての鋳造関連遺構の発見は、県内初の事例であり、廃棄された鉄鍋鋳型などが多量に出土しました。国分寺周辺域の生業と鋳物師集団の動向の一端を示す貴重なものでもあります。

調査終了後は他の市内遺跡発掘調査との調整を図りつつ、報告書作成のための整理作業を順次進めて参りました。調査実施から10年という歳月を経ましたが、本書が笛吹市ひいては山梨県の歴史研究の一助となれば幸いです。

末筆となりましたが、発掘調査から報告書刊行までご指導・ご鞭撻をいただきました関係諸機関・関係各位に、厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

笛吹市教育委員会
教育長　山田武人

例　言

1. 本書は、山梨県笛吹市一宮町末木地内に所在する、車地蔵遺跡・石動遺跡・北中原遺跡・中新居に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、山梨県営担い手育成畑地帯総合整備事業一宮末木地区支線道路3･4･6･9･13･14号改良工事に伴うもので、一宮町教育委員会及び笛吹市教育委員会が山梨県峡東農務事務所からの委託されて実施した。調査費用はすべて事業者負担によるものである。
3. 発掘調査は1997～2000、2005年に実施した。調査体制は「第1章1. 調査に至る経緯・調査経過」で示した。
4. 整理・報告書作成は平成10・12・14・18・19年度に実施した。本書に係る出土遺物及び記録類は、笛吹市教育委員会で保管している。
5. 本書の執筆は、瀬田正明、野崎進、望月秀和が分担し、各報文末に担当を明記した。編集は、望月がおこなった。なお、附編1の金属分析はJFEテクノリサーチ株式会社に、附編2・3の植物遺体及び骨の同定・分析は中山誠二氏・植月学氏(山梨県立博物館)に寄稿して頂いた。
6. 本書に使用した地図は、一宮町役場発行の都市計画基本図、国土地理院発行「石和」1/200,000を加工・加筆して作成した。
7. 出土した金属製品の保存処理は、(財)帝京大学山梨文化財研究所に委託した。
8. 発掘調査及び報告書作成にあたり、以下の方々・機関からご教示、ご高配を賜った。
記して厚く感謝申し上げるしだいである。

穴澤義功・出月洋文・今福利恵・閏間俊明・岡野秀典・沓名貴彦・小野正文・櫛原功一
坂本美夫・佐々木満・末木　健・鈴木　稔・谷口一夫・長沢宏昌・中山誠二・新津　健
畑　大介・林部　光・平川　南・平野　修・保坂康夫・宮沢公雄・室伏　徹・森原明廣
八巻与志夫・山下孝司

(財)帝京大学山梨文化財研究所　山梨県教育委員会学術文化財課　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県立考古博物館　山梨県立博物館

凡　例

1. 本書中の遺構・調査坑等の表記については、以下の通りである。
SI - 住居跡　SK - 土坑　SD - 溝　SX - 不明遺構　Pit - ピット　Tr - トレンチ
S - 石　K - 撹乱
2. 遺構・遺物図版の縮尺は、原則下記の通りだが、各図版中に示したスケールを参照されたい。
遺構　住居跡 - 1/60　カマド - 1/30　土坑・Pit - 1/40　溝 - 1/60・1/80
遺物　1/4(小形品は1/3・1/2・原寸)
3. 遺構図中の方位は、国家座標(旧測地系)を示し、標高は海抜高で表している。
4. 遺構番号及びトレンチ名は、原則調査時に付したものをそのまま使用しており、調査や整理時の検討で欠番とした。
5. 調査時の情報欠落により、一部不備点があるがそのまま掲載している。
6. 本書における時期については、『山梨県史資料編2　原始・古代』と森原明廣1994「山梨県地域における古代末期の土器様相」(『丘陵』第14号)掲載の編年から比定した。
7. 石材については『標準原色図鑑全集6　岩石鉱物』保育社を参照した。
8. 本書の図版中に示したトーン・網等、土層及び遺物観察表の表記については、以下の通り。

遺物図版

煤・黒変：やや薄い黒塗り　施釉ライン：一点破線　擦痕(転用等)範囲：破線

〈断面〉

須恵器：ベタ塗り　陶器(灰釉・緑釉等)：濃い網目　磁器(青磁・染付等)：薄い点網

土層観察表

締まり

◎：非常に締まりあり　○：締まりあり　△：やや締まりにかける

混入物

◎：多量に含む　○含む　△：少量含む　□：微量含む

遺物観察表　（胎土表記）

赤：赤色粒子（スコリア等）　白：白色粒子（長石・石英等）　黒：黒色粒子（角閃石等）　金：金雲母

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
第一章 調査の概要
1. 調査に至る経緯と調査経過 …… 1
2. 地理的環境と周辺の遺跡 …… 3
3. グリッドの設定と座標 …… 9
第二章 車地蔵遺跡支線6号地〔1997年度調査〕
1. 調査概要 ……11
2. 調査トレンチ ……11
3. 発見した遺構・遺物 ……45
4. まとめ ……48
第三章 石動遺跡支線4・6・9号地区 北中原遺跡(第3次)〔1998年度調査〕
Ⅰ. 1998年度調査について ……49
Ⅱ. 支線4号地区調査(石動遺跡) ……50
1. 調査トレンチ ……50
2. 発見した遺構・遺物 ……50
Ⅲ. 支線6号地区調査(石動遺跡) ……58
1. 調査トレンチ ……58
2. 発見した遺構・遺物 ……61
Ⅳ. 支線9号地区調査(石動・北中原遺跡) ……79
1. 調査トレンチ ……79
2. 発見した遺構・遺物 ……83
Ⅴ. まとめ ……118
第四章 石動遺跡支線3号地区〔1999年度調査〕
1. 調査概要 ……119
2. 調査トレンチ ……119
3. 発見した遺構・遺物 ……123
4. まとめ ……148
第五章 石動・中新居遺跡支線13号地区〔2000年度調査〕
1. 調査概要 ……159
2. 調査トレンチ ……159
3. 発見した遺構・遺物 ……162
4. まとめ ……172
第六章 北中原遺跡(第4次)支線14号地区〔2005年調査〕
1. 2005年度調査について ……183
2. 基本層序 ……183
3. 遺構 ……183
4. 遺物 ……186
附　編
附編1 笛吹市一宮畑総末木地区(北中原遺跡) 金属分析調査 ……228
附編2 笛吹市石動遺跡出土の動物遺体について ……243
附編3 北中原遺跡（第4次）出土の植物遺体について ……247
附編4 石動遺跡南西興業地区発掘調査報告 ……252
報告書抄録

奥付

挿図目次

第1図　遺跡位置図 …… 2
第2図　道路建設範囲図 …… 3
第3図　末木地区周辺字名図 …… 6
第4図　周辺遺跡図 …… 8
第5図　調査地区グリッド範囲図 …… 9
車地蔵遺跡支線6号地区〔1997年度調査〕
第6図　グリッド図及びトレンチ位置図 ‥11
第7図　遺構位置図(1) ……12
第8図　遺構位置図(2) ……13
第9図　SI1 ……16
第10図　SI2 ……17
第11図　SI3・SI4(1) ……18
第12図　SI3・SI4(2) ……19
第13図　SI5(1) ……20
第14図　SI5(2) ……21
第15図　SI6・SI8 ……23
第16図　SI9(1) ……25
第17図　SI9(2)・SI10 ……26
第18図　SK1～3 ……27
第19図　SK4 ……29
第20図　SK5～8 ……30
第21図　道路状遺構、SX1・2 ……31
第22図　遺構外遺物 ……32
第23図　土製品・金属製品・瓦・石製品 ‥33
石動遺跡・北中原遺跡〔1998年度調査〕
第24図　トレンチ位置図 ……49
(支線4号地区)
第25図　調査区・遺構実測図 ……51
第26図　出土遺物(1) ……52
第27図　出土遺物(2) ……53
(支線6号地区)
第28図　遺構位置図(1) ……59
第29図　遺構位置図(2) ……60
第30図　SI1(1)・2 ……62
第31図　SI1(2) ……63
第32図　SI3・4 ……65
第33図　SI5・6 ……66
第34図　SI7 ……67
第35図　SD1・3 ……69
第36図　SD2・SD4、1号石列 ……70
第37図　SD2～3・遺構外、出土遺物 ‥‥71
(支線9号地区)
第38図　遺構位置図(1) ……80
第39図　遺構位置図(2) ……81
第40図　SI1・2(1) ……84
第41図　SI2(2) ……85
第42図　SI3・SK4、SI4(1) ……87
第43図　SI4(2)、SI5 ……88
第44図　SI6・7 ……89
第45図　SK1～3・6、Pit、道路状遺構 ‥‥90
第46図　1～3号集石 ……92

第 47 図　鋳造関連遺構 (1)……93
第 48 図　鋳造関連遺構 (2)……94
第 49 図　鋳造関連遺構 (3)……95
第 50 図　鋳造関連遺構 (4)……96
第 51 図　鋳造関連遺構 (5)……97
第 52 図　鋳造関連遺構 (6)……98
第 53 図　鋳造関連遺構 (7)……99
第 54 図　鋳造関連遺構 (8)……100
第 55 図　SD1 ～ 3……102
第 56 図　遺構外遺物……103
第 57 図　金属製品・瓦……104
第 58 図　石製品……105
石動遺跡支線 3 号地区〔1999 年度調査〕
第 59 図　トレンチ配置図……119
第 60 図　遺構位置図 (1)……121
第 61 図　遺構位置図 (2)……122
第 62 図　SI1・2……124
第 63 図　SI3(1)……125
第 64 図　SI4(1)・SK5……126
第 65 図　SI3(2)・SI4(2)……127
第 66 図　SI5・6……128
第 67 図　SI7……130
第 68 図　SK2(獣骨埋葬土壙)……131
第 69 図　SK3、3 号集石……132
第 70 図　SK4・6 ～ 8、Pit……134
第 71 図　1・2 号集石……135
第 72 図　4 号集石……136
第 73 図　SD6、5 ～ 7 号集石……138
第 74 図　8 号集石(土坑墓)……139
第 75 図　9・12 号集石、SD(1)……141
第 76 図　SK1、SD2 ～ 4……142
第 77 図　SD3、Pit、遺構外 (1)……143
第 78 図　遺構外 (2)……144
第 79 図　金属製品・石製品……145
石動遺跡・中新居遺跡支線 13 号地区〔2000 年度調査〕
第 80 図　トレンチ配置図……159
第 81 図　遺構位置図 (1)……160
第 82 図　遺構位置図 (2)……161
第 83 図　SI1 ～ 3、SD1・2……164
第 84 図　SI4・SD11、SI5……165
第 85 図　SI4(2)……166
第 86 図　SI6(1)、SD3……167
第 87 図　SI6(2)……168
第 88 図　SK1・埋甕・1 ～ 3 号集石……170
第 89 図　4 ～ 6 号集石……171
第 90 図　SD4 ～ 8……173
第 91 図　SD1(2)、遺構外、縄文土器、土製品、金属製品……174
北中原遺跡(第 4 次)〔2005 年調査〕
第 92 図　基本層序……183
第 93 図　第 4 次調査の調査区と遺構分布図……195
第 94 図　SI1、SK3 ～ 5 実測図……196
第 95 図　SI1 カマド実測図……197
第 96 図　SI2 実測図、同カマド実測図……198
第 97 図　SI2 個体別分布図……199
第 98 図　SI3 実測図、同カマド実測図……200
第 99 図　SI3 個体別分布図……201
第 100 図　SI4 実測図……202
第 101 図　SI5、P14 実測図、同個体別分布図①……203
第 102 図　SI5 個体別分布図②……204
第 103 図　SI5 カマド実測図……205
第 104 図　SI6、SK10 ～ 13 実測図、同カマド実測図……206
第 105 図　SI6 個体別分布図……207
第 106 図　SI7、SK14 ～ 24 実測図……208
第 107 図　SI7 カマド実測図……209
第 108 図　SD1、SK2、P1 ～ 3 実測図……210
第 109 図　地下式坑実測図……211
第 110 図　抜根痕、SK5・6、P4 ～ 7 実測図……212
第 111 図　土器 (1)S I 1・2①……213
第 112 図　土器 (2)SI2 ②・3①……214
第 113 図　土器 (3)SI3 ②・4……215
第 114 図　土器 (4)SI5 ①……216
第 115 図　土器 (5)SI5 ②・6①……217
第 116 図　土器 (6)SI 6 ②・7①……218
第 117 図　土器(7)SI7②、SD 1、SK、遺構外①……219
第 118 図　土器(8)遺構外②、瓦、土製品……220
第 119 図　石製品……221
〔附編 4　石動遺跡南西興業地区〕
第 1 図　調査区位置図……252
第 2 図　トレンチ位置図……252
第 3 図　遺構位置図……252
第 2 図　SI1・2・3……254
第 3 図　SK・Pit および遺構外……255

表目次

表 1　周辺遺跡一覧……7
車地蔵遺跡支線 6 号地区〔1997 年度調査〕
表 2　トレンチ一覧……34
表 3　遺構一覧……34
表 4　遺物観察表……34
表 6　土製品観察表……38
表 7　金属製品観察表……38
表 8　瓦観察表……38
表 9　石製品観察……38
石動遺跡・北中原遺跡〔1998 年度調査〕
(支線 4 号地区)
表 10　遺物観察表……54
表 11　瓦観察表……54
(支線 6 号地区)
表 12　トレンチ一覧……68
表 13　遺構一覧……68
表 14　遺物観察表……72
表 15　金属製品観察表……73

表 16　瓦観察表 ……73
（支線 9 号地区）
表 17　トレンチ一覧 ……82
表 18　遺構一覧 ……82
表 19　鋳造関連遺物観察表 ……101
表 20　遺物観察表 ……106
表 21　土製品観察表 ……108
表 22　金属製品観察表 ……108
表 23　瓦観察表 ……108
表 24　石製品観察表 ……108
石動遺跡支線 3 号地区〔1999 年度調査〕
表 25　トレンチ一覧 ……140
表 26　遺構一覧 ……140
表 27　遺物観察表 ……146
表 28　土製品観察表 ……147
表 29　金属製品観察表 ……147
表 30　石製品観察表 ……147
石動・中新居遺跡支線 13 号地区〔2000 年度調査〕
表 31　トレンチ一覧 ……162
表 32　遺構一覧 ……162
表 33　遺物観察表 ……175
表 34　縄文土器観察表 ……176
表 35　土製品観察表 ……176
表 36　金属製品観察表 ……176
北中原遺跡（第 4 次）〔2005 年調査〕
表 37　土坑一覧 ……187
表 38　ピット一覧 ……187
表 39　遺物観察表 ……187
表 40　縄文土器観察表 ……194
表 41　瓦観察表 ……194
〔附編 4〕石動遺跡南西興業地区
表 1　土器観察表 ……256
表 2　金属製品観察表 ……256

写真目次

車地蔵遺跡支線 6 号地区〔1997 年度調査〕
PL1 ～ PL9……39 ～ 47
石動遺跡・北中原遺跡〔1998 年度調査〕
PL10 ～ PL12　（支線 4 号地区）……55 ～ 57
PL13 ～ PL17　（支線 6 号地区）……74 ～ 98
PL18 ～ PL26　（支線 9 号地区）……108 ～ 117
石動遺跡支線 3 号地区〔1999 年度調査〕
PL27 ～ PL36……148 ～ 158
石動・中新居遺跡支線 13 号地区〔2000 年度調査〕
PL37 ～ PL42……177 ～ 182
北中原遺跡（第 4 次）〔2005 年調査〕
PL43 ～ PL49……220 ～ 226

第一章　調査の経緯と地理的・歴史的環境

1．調査に至る経緯と調査経過

平成8年度、畑地帯総合整備事業（担い手育成型）一宮末木地区が新規採択された。

本地区は、モモ・ブドウ等を中心とした果樹地帯であり、盛んに果樹の栽培が行われているが、農業従事者の高齢化、輸入自由化等の影響により、将来の農業経営に不安が抱かれていた。中核農家は十分な農地面積を有しておらず、経営は不安定な状況であった。

本事業は農道及び農業用排水路を改良・新設し、経営規模の拡大や生産性を向上させることによって、計画的な栽培による経営の安定化・合理化と作物の品質向上を図ることを目的とした。

事業は平成19年3月まで行われ、改良・新設された農道は6533 m（延長）、排水路3543m（同）、受益面積は116haとなった。

事業開始にあたって、文化財保護法による通知が必要であることを回答した。

この結果を踏まえ、事業者と教育委員会とで協議を行い、包蔵地に該当する農道・排水路については工事着手前に法による通知を行い、工事により包蔵地に影響が出る場合は教育委員会が主体となって記録保存のための発掘調査を行うことになった。

年度ごとの調査経過は以下のとおりである。

・平成9年度　支線6号道路地区の北半分を対象として車地蔵遺跡の発掘調査を行った。

調査期間　平成10年1月19日～3月16日

・平成10年度　支線6号道路の南半分と支線4・9号道路を対象として石動遺跡・北中原遺跡の発掘調査を行った。

調査期間　平成10年8月25日～平成11年3月13日

・平成11年度　支線3号道路を対象として石動遺跡の発掘調査を行った。

調査期間　平成11年11月15日～平成12年1月19日

・平成12年度　支線13号道路を対象として石動遺跡・中新居遺跡の発掘調査を行った。

調査期間　平成12年10月17日～12月26日

・平成13年度　排水路3号が雨宮氏屋敷跡に該当し、工事立会いを行った。

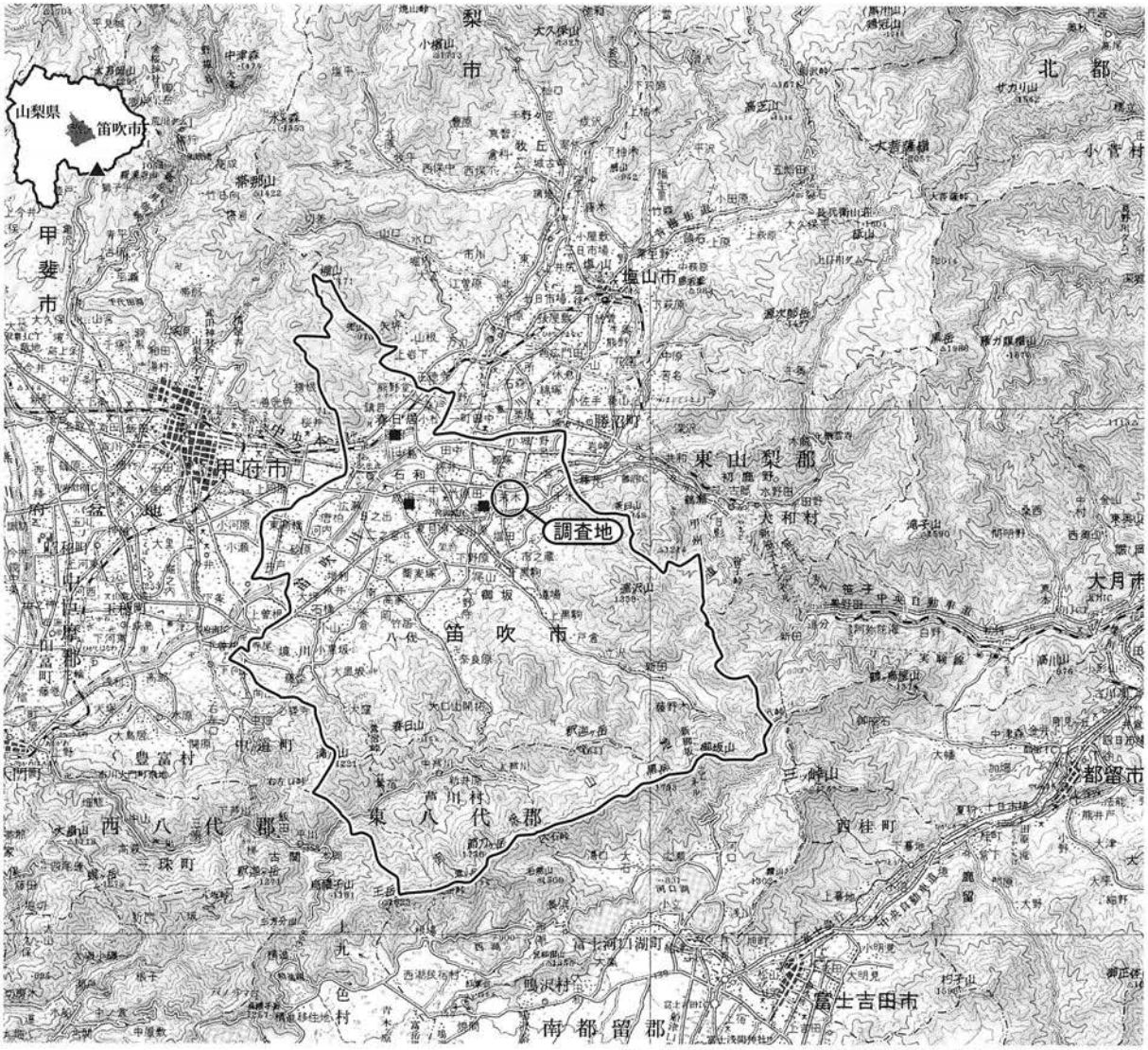
・平成14年度　排水路2号が国分寺南遺跡に該当し、工事立会いを行った。

・平成16年度　支線14号道路を対象として北中原遺跡の発掘調査を行った。

調査期間　平成17年1月17日～4月27日

・平成17年度　支線12号道路が薬師堂遺跡に該当し、試掘調査を行ったが、遺構・遺物は発見されなかった。

（瀬田）



（S=1/500,000　国土地理院発行20万分の１を加工・加筆）

第１図　笛吹市位置図

〈調査体制〉北中原遺跡　第４次調査

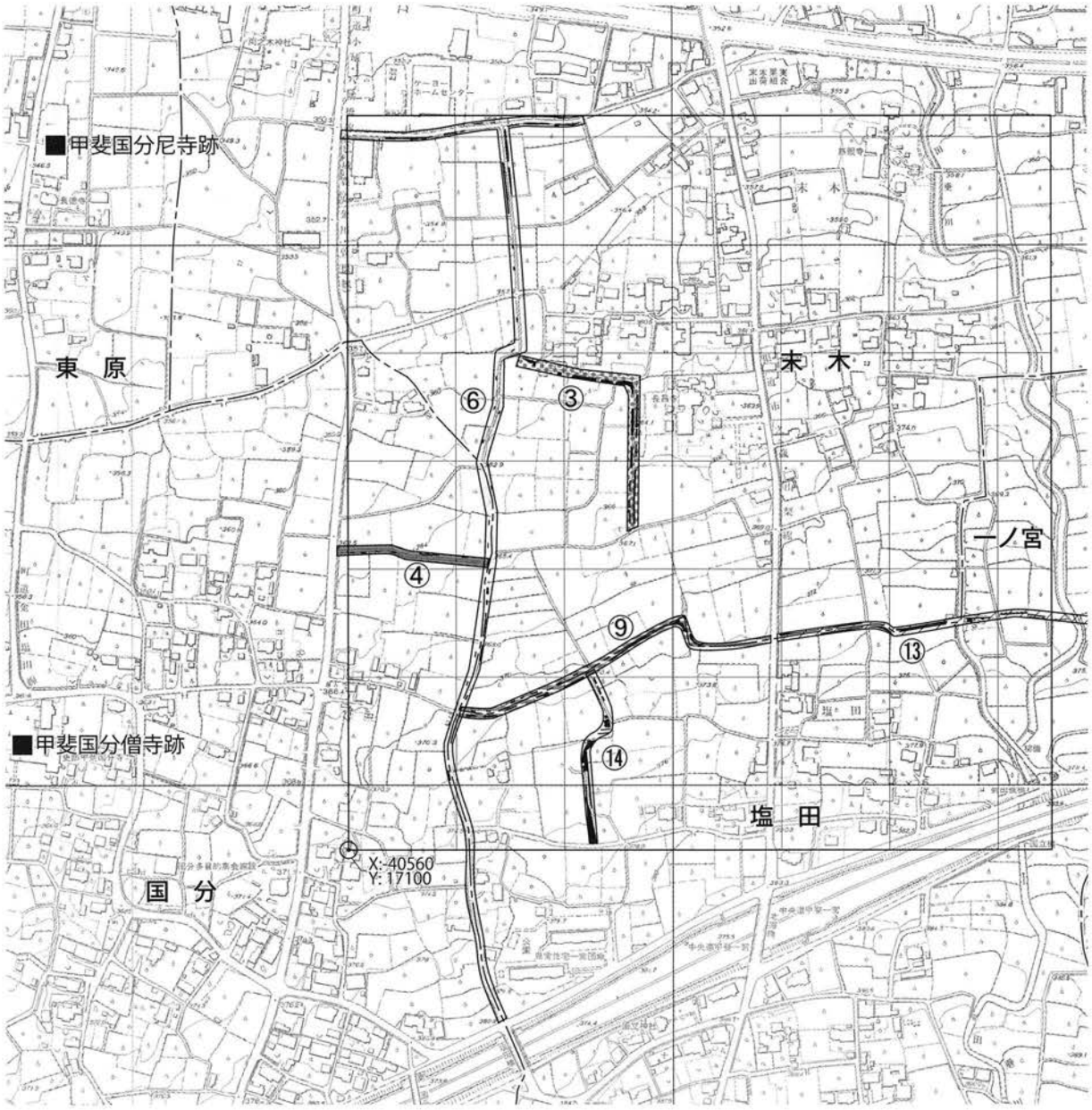
調査担当	野崎　進			
調査員	津田　元栄			
調査作業員	久保田明義	古屋袈裟夫	山口英雄	
整理作業員	雨宮　ゆり	大久保房子	宮川菊江	

2．地理的環境と周辺の遺跡

（1）地理的環境

笛吹市の地理　今回報告する車地蔵遺跡・石動遺跡・北中原遺跡・中新居遺跡は、山梨県笛吹市一宮町末木字車地蔵、字石動、字北中原、字中新居（以下、末木地区）に所在する。山梨県のほぼ中央に位置する笛吹市は、平成16年10月12日に、笛吹川流域の6町村（東八代郡石和町・御坂町・一宮町・八代町・境川村、東山梨郡春日居町）の合併により発足した。平成18年8月1日には、東八代郡芦川村が編入し、総面積201.92k㎡（山梨県の面積の約4.5％）、標高は256m（石和町井戸周辺）～1,793m（御坂黒岳）を測るに至った。

本市は、甲府盆地の東端に位置する。北方の秩父山地と大菩薩嶺、南東の御坂山塊へと連なる急峻な丘陵山岳地帯と、河川によって形成された扇状地帯および沖積平地帯から構成されている。地形としては西方の盆地低部へ向けて広がりをみせており、市域における標高の最高値は黒岳（御坂黒岳）で



第2図　道路建設範囲(支線位置)図

1,793m、最低値は笛吹川流域の沖積平地部（石和町井戸周辺）で約256 mを測る。本市における平成18年の土地利用状況は、宅地14.9k㎡（7.4％）、農用地41.6 k ㎡（20.6％）、森林等118.1 k ㎡（58.5％）であり、約2割を占める農用地の大半は、盆地特有の扇状地帯に広がる桃・ブドウを中心とした果樹畑である。本市では昭和30年代頃から扇状地に適した果樹栽培が広まり、今日に至っては国内有数の一大果樹生産地帯となった。また、春には桃の花で彩られ、観光スポットとしても生産出荷量に劣らず注目され、賑わいをみせている。

市名の由来となった笛吹川の本流は、秩父山地より発する延長46.5km、流域面積1,040 k ㎡を測る。本市域を西流した後は、盆地南辺を流れて南巨摩郡鰍沢町で釜無川と合流し、富士川となって最後は駿河湾へ注いでいる。境川・鼓川・兄川・重川・日川・金川など複数の支流があり、本市域を特徴づける扇状地形の形成要因となっている。

なお、扇状地上には多数の遺跡が存在し、特に古代には国分二寺、国府、国衙といった甲斐国の中枢機関が置かれ、その周辺は遺構・遺物が極めて濃密に分布する、県内有数の数を誇る埋蔵文化財包蔵地をもつ市として周知されている。さらに笛吹川流域の扇状地扇端部、沖積地では、発掘調査によって微高地の掘削や谷部の埋め立てた痕跡、表層条里と看取できる条里型土地区画が認められる。金川以西では、永井・増田条里（八代町）・埋没条里（御坂町）等があり、金川以東には、坪井条里・中尾条里・金田本都塚条里などが表層条里として認識されている。国府（春日居町）や国分二寺周辺においても条里型土地区画がみられ、国分二寺周辺の方形区画は、南北軸の傾きが国分二寺の主軸と一致していることから、計画的に配置されたことがうかがえる。調査遺跡周辺では、御手洗川右岸の亀沢遺跡及び今宮遺跡で水田跡を検出しており、調査成果等から、これら条里の施工時期は9世紀前半と推定される。しかしながら、河川の氾濫は土地の形成要因である一方、発掘調査で明らかとなった居住域の盛衰や耕地の消滅・開墾など、この地での生活に多大な影響を及ぼした要因の一つでもある。

調査遺跡周辺の地理　笛吹川以南の一帯は、金川・大石川・京戸川・日川等によって形成された重合扇状地帯となっている。笛吹市一宮町字末木地区（以下、末木地区）は、この重合扇状地帯のなかでも最大規模である金川扇状地扇央部に位置し、標高は約290 ～ 500 m、北西方向に下る比較的緩やかな傾斜地に集落が展開している。末木地区は金川右岸にあたるものの、流路からは約800 ～ 900 mほど離れているため、農業用水としては旭山山麓から発し、黒駒から金川の水を引く宮渠が注いでいる田垂川が利用されてきている。田垂川は、末木地区の東端を流れ、一ノ宮・神沢地区とのほぼ境を成し、古くから用水として利用されてきた河川である。利水によるものなのか、この流路は人為的に変移させた可能性が窺え、現在も慈眼寺（一宮町末木336所在）や、御手洗川へ合流する手前の車居遺跡第1･2次調査地点（笛吹市2006）の付近で特異的に流曲した地形がみられる。また、「多々禮川」と称され、タタラに由来すると指摘されており、今回報告する石動遺跡から出土した鉄滓・製鉄炉壁・鋳型など鋳造に関連した遺物は、その傍証となっている。

本地区の西には、国分二寺が置かれた国分・東原地区、北には御手洗川の

以南を境にして本都塚・北都塚地区、東には先述の通り一ノ宮・神沢地区、南には支線9号線・13号線あたりを境にして塩田地区と隣接している（第2図参照）。

（2）歴史的環境

『倭名類聚抄』の記載では、古代の山梨（甲斐国）は4郡（巨摩郡・山梨郡・八代郡・都瑠郡）に分けられており、本市域は八代郡及び山梨郡比定地にあたり、末木地区は山梨郡林部郷に含まれるとされている。

甲斐国分二寺と周辺遺跡　末木地区は、末木遺跡（国道20号線建設工事に伴う調査）において、県内で最も早い時期にあたる1970年代から発掘調査が行われている地域である。前述の通り、甲斐国分二寺が造営された国分・東原地区に隣接している。二寺周辺一帯では、座標軸より5度余り東偏する一定の方画地割が認められ、本地区もその地割内に位置している。今回調査した遺跡は、甲斐国分二寺の創建期にあわせて出現する集落遺跡で、二寺の造営・維持に関連して出現した新興集落地として「国分寺集落」または「国分寺関連遺跡群」と呼称されている。なお、周辺地域一帯は遺構・遺物が濃密に分布するため、遺跡分布範囲（第3図）は、字名や寺院地範囲等で区切っている。以下、国分二寺の盛衰とあわせ、調査遺跡および周辺遺跡の様相についてふれておきたい。

二寺創建以前　遺構は希薄、もしくは明確に確認できていないが、国分寺周辺において、縄文時代中期頃の土器片、土偶などが出土している。弥生時代になると、筑前原遺跡で住居跡を検出しているほか、塩田地区では塩田の壺と称されている前期の遺物がされている。松原遺跡・金山遺跡等で古墳時代前期段階の集落が確認されている。古墳時代後期には笛吹川以南の地域で、金川や京戸川の流域において小規模古墳が集中し、末木地区周辺では国分古墳群が形成されている。しかしながら、古墳時代中期以降の二寺周辺域おいて、創建時まで遺構・遺物がほとんど確認できない空白地帯となっており、聖武天皇の詔通り、在地の人々の迷惑にならない土地選定が実施されたことが窺える。

創建期（奈良時代）平安時代は、古代甲斐国の中心地域の様相を示す濃密な遺構・遺物の分布が窺えるものの、遺構としては、廃材の活用、もしくは国分寺廃退の表れなのか、カマドの構築材として瓦を転用する事例が多く確認されている。10世紀後半～11世紀頃までは、住居使用期間については明確ではないが、遺構数については最盛となり、広範囲で遺構・遺物が分布する。以降、国分寺集落は居住域としては衰退傾向となるが、西田町遺跡、大原遺跡などでは中世にいたるまで断続的な変遷がみられる。

古代の交通路　甲斐路ルート上の黒駒付近（笛吹市御坂町）から、国分二寺付近を通り鞍掛遺跡の西方を北上する道は、富士山と金峰山を結ぶ修験者の通用道路であることから道者街道と呼ばれ、山岳信仰の盛行に伴い、重要度を増したと思われる。

古代において本遺跡付近は、山梨郡の東部、林部郷（一宮町東原付近）に属していたと推定されている。さらに、塩田には飛鳥時代創建と言われる楽音寺や、橋立には甲斐国の惣社とも言われる甲斐奈神社が残る。

中世には、当地域は一宮庄に属していたと推定される。一宮庄は、末木にある長昌寺所蔵の大般若経の奥書で、明応5年（1497）書写のものに「山梨

第3図　遺跡の位置および周辺遺跡分布図

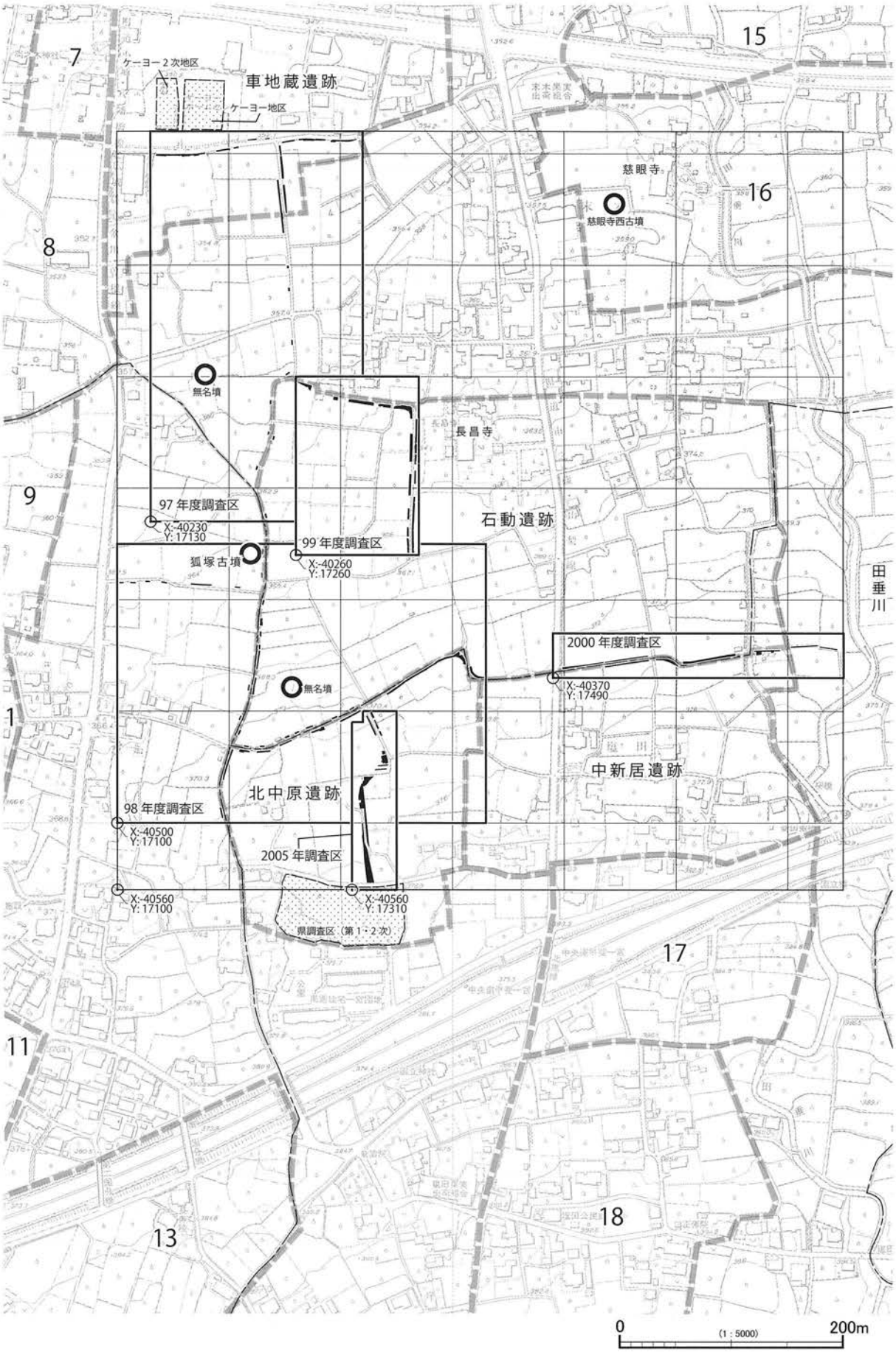
第１表　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代
1	甲斐国分寺跡	奈良・平安・中世
2	甲斐国分尼寺跡	奈良・平安・中世
3	筑前原遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
4	甲斐国分尼寺跡北遺跡	奈良・平安・中世
5	矢倉遺跡	古墳・奈良・平安・中世
6	松原遺跡	古墳・奈良・平安・中世
7	両ノ木神社遺跡	奈良・平安
8	竜ノ木遺跡	古墳・奈良・平安・中世
9	金山遺跡	古墳・奈良・平安・中世
10	国分寺西遺跡	縄文・奈良・平安
11	国分寺南遺跡	縄文・奈良・平安・近世
12	豆塚遺跡	縄文・古墳・平安
13	笠木地蔵遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世
14	鞍掛遺跡	弥生・古墳・奈良・平安
15	慈眼寺北遺跡	古墳・平安
16	薬師堂遺跡	奈良・平安・中世
17	北堀遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
18	天神原遺跡	弥生・奈良・平安
19	木地蔵遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世
20	楽音寺遺跡	縄文・奈良・平安・中世
21	今宮遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世
22	車居遺跡	古墳・奈良・平安・中世
23	天神堂遺跡	縄文・奈良・平安
24	古屋氏屋敷	中世
25	新巻屋敷	中世
26	新巻本村遺跡	中世
27	筑前北遺跡	弥生・奈良・平安
28	国分古墳群	古墳

郡一宮庄傘木村瑞光山長昌禅寺」（傘木は末木の当て字）とあるのが初見である。尚、当地域が山梨郡から八代郡になるのは、慶長年間以降とする説もある。

甲斐国一宮とされる浅間神社は、貞観６（864）年の富士山の噴火を契機に摂社である山宮神社（伝垂仁天皇８年建立）から遷宮されたと言われている。この浅間神社の祭祀で最も重要な神事が「御幸祭」である。二宮美和神社（笛吹市御坂町）、三宮玉諸神社（甲府市）の三社合同で行われる夏・冬２回の公祭で、現在も「おみゆきさん」と呼称され受け継がれている。「御幸祭」が初めておこなわれたのは、諸国一宮制の成立時期である11世紀までさかのぼると考えられている。御幸祭が通る道が「御幸道（みゆきみち）」と呼ばれ（一道とも言う）、かつては浅間神社から国分尼寺付近を通り、そのまま西側の金川に向かったと言われている。尚、この一帯はしばしば洪水に見舞われた地域である。明治40年８月の水害では京戸川と大石川の合流地点から下流（御手洗川沿岸）で大規模な氾濫が生じた。その状況を伝える『一宮町誌』に掲載された浅間神社罹災状況写真からは、惨状とともにこの地域における土地様相の変容を窺うことができる。

本市域は、かつて国分二寺、国府、国衙といった甲斐国の中枢機関が置かれ、さらには国中（甲府盆地地域）と郡内（大月・都留・富士五湖地域）、及び官道（東海道）を結ぶルートが通る要衝地であり、古代甲斐国の中心地域であったことは推測できよう。しかしながら、今日に至るまでの環境変化の影響か、未だ国分二寺以外の明確な官衙遺構、御坂山地から盆地へ降りてきた後の道路遺構の確認ができていない。複雑な環境変化が認められる本市ではあるものの、郡・官衙・寺院を繋ないでいた古代ルートの発見は、国府・

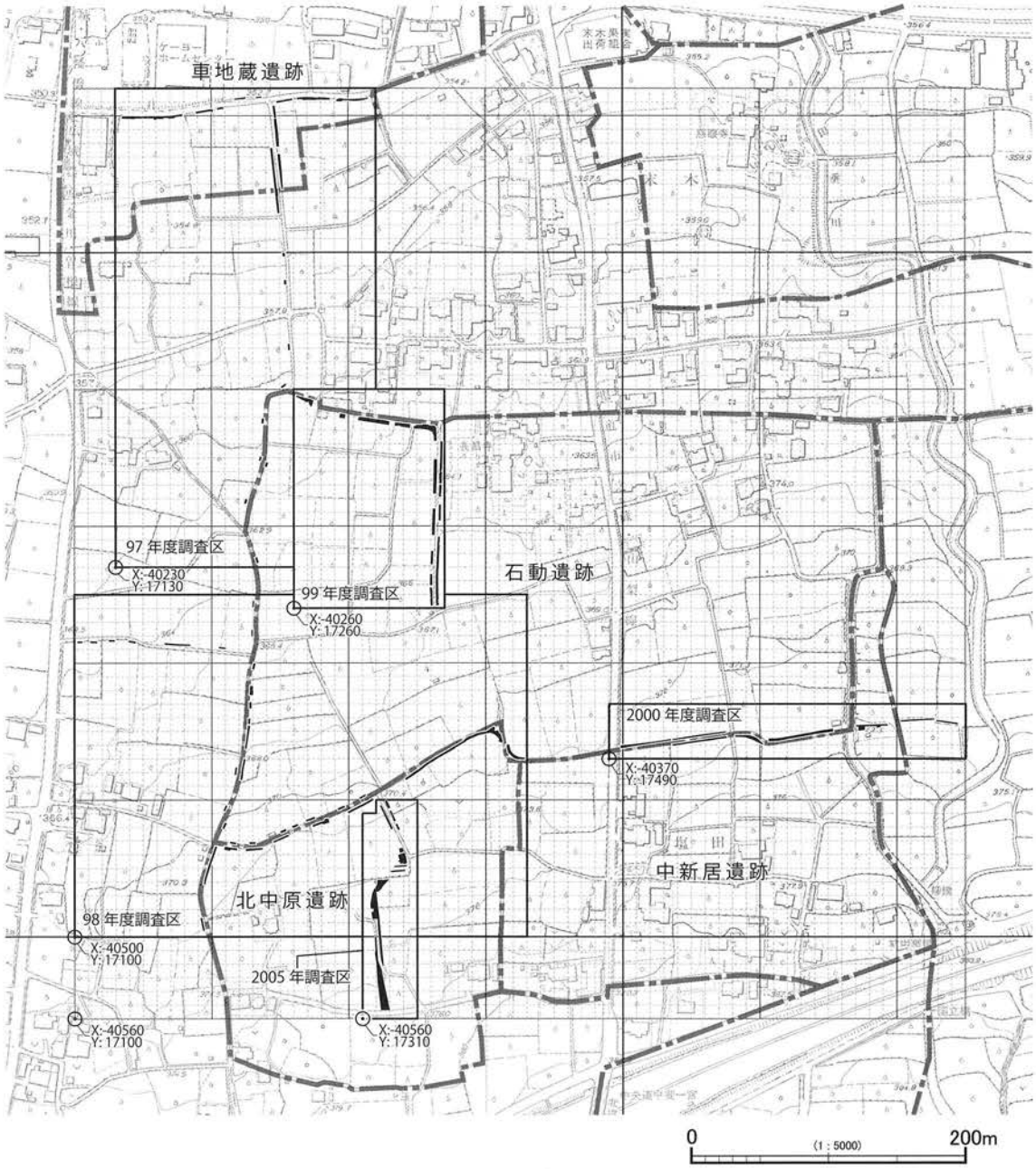

7
15
ケーヨー２次地区
車地蔵遺跡
ケーヨー地区
慈眼寺
16
慈眼寺西古墳
8
無名墳
長昌寺
9
97 年度調査区
X:-40230
Y:17130
石動遺跡
99 年度調査区
X:-40260
Y:17260
狐塚古墳
田垂川
2000 年度調査区
X:-40370
Y:17490
無名墳
1
中新居遺跡
北中原遺跡
98 年度調査区
X:-40500
Y:17100
2005 年調査区
X:-40560
Y:17100
X:-40560
Y:17310
県調査区（第１・２次）
17
11
18
13
0
(1：5000)
200m

第4図　調査区範囲図

国衙の位置、遺構の発見につながる可能性があることから、古代甲斐国の研究及び今後の市内遺跡調査の課題のひとつとなっている。

3．グリッドの設定と座標

旧一宮町では、甲斐国分寺・尼寺の周辺の調査に対応するため、国家座標値を基にグリッドを設定している。基本的に一宮町内における調査記録は国家座標（旧日本測地系）上で行ってきた。2000年より、世界測地系（日本測地系2000）で表示するようになったが、甲斐国分二寺周辺はまだ世界測地系に対応していない。また、本書掲載の調査記録についても、調査時には旧測地系でグリッドを設定したことや、国分二寺周辺調査との整合性を保つことを考慮し、旧測地系のまま報告した。なお、調査区はすべて国家座標に準じてグリッドを設定しているものの、グリッドの名称は調査単位で任意に付していることをご留意いただきたい。（望月）



第5図　調査グリッド図

参考文献

浅間神社 2005『甲斐國一之宮　淺間神社誌』
芦川村村誌編纂委員会 1992『芦川村誌』上巻
一宮町 1965『一宮町誌』
一宮町教育委員会 1996『一宮町埋蔵文化財発掘調査概要報告書－平成6年度－』
猪股喜彦 1996「金川扇状地の土地開発－甲斐国分寺周辺の集落－」
『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集
猪股喜彦 2002「甲斐国分寺地域における集落構造と展開に関する若干の考察」
『山梨県考古学協会誌』第13号
春日居町誌編纂委員会　1988　『春日居町誌』

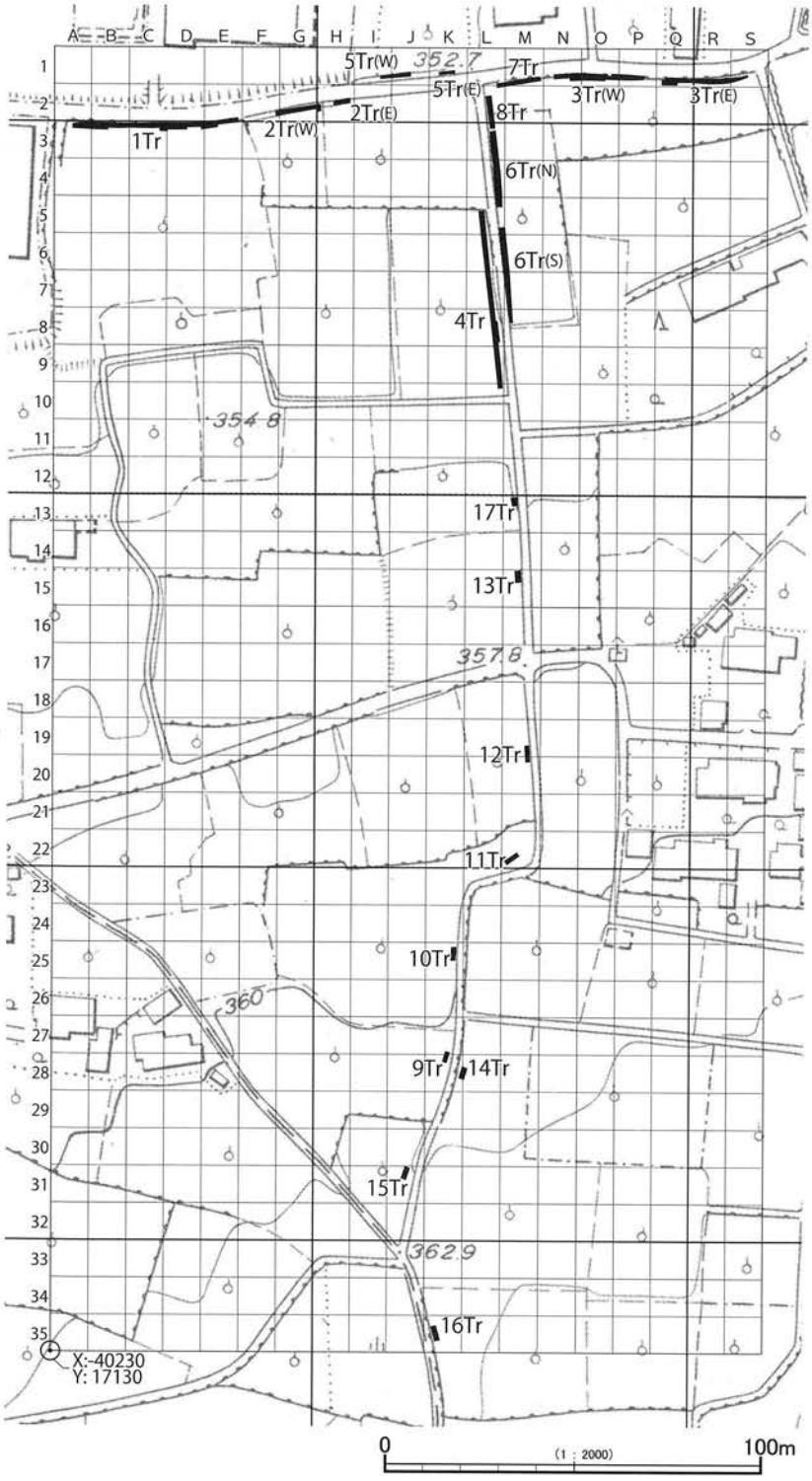
角川書店　1984　『角川日本地名大辞典　19　山梨県』
弦間耕一　2002　「笛吹川の砂鉄と武藤半三郎」『甲斐路』100
斉藤享治　1998　『大学テキスト　日本の扇状地』　古今書院

平凡社　1995　『山梨県の地名』
山梨県　1984　『土地分類基本調査　甲府　5万分の1』
山梨県教育委員会　1973　『甲斐国埋没条里遺構等の調査』
山梨県埋蔵文化財センター　1994　『年報』10

第二章　車地蔵遺跡支線6号地区〔97年度調査区〕

1．調査概要

この調査は、車地蔵遺跡地内における畑地帯総合整備事業・一般農道支線6号建設に先立ち、平成9年(1997)に一宮町教育委員会が実施した。建設予定地の既存道路(T字状に東西約200m、南北約350m)の拡幅部分に、17トレンチを設定し、約376㎡を調査した。なお、対象地は北に下る傾斜地であり、調査範囲北端(5Tr)と南端(16Tr)では、約12mの標高差があった。

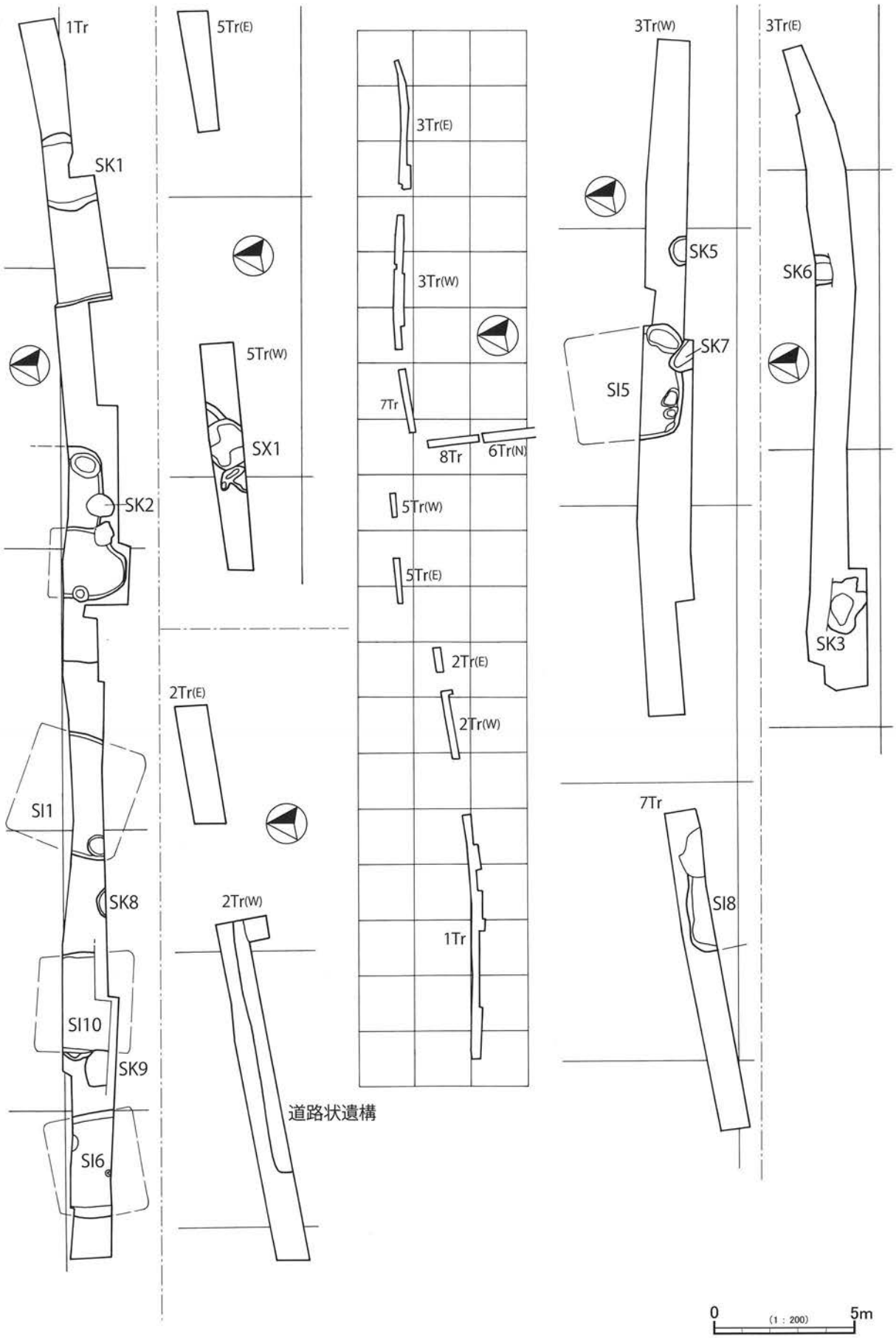


第6図　グリッド及びトレンチ位置図

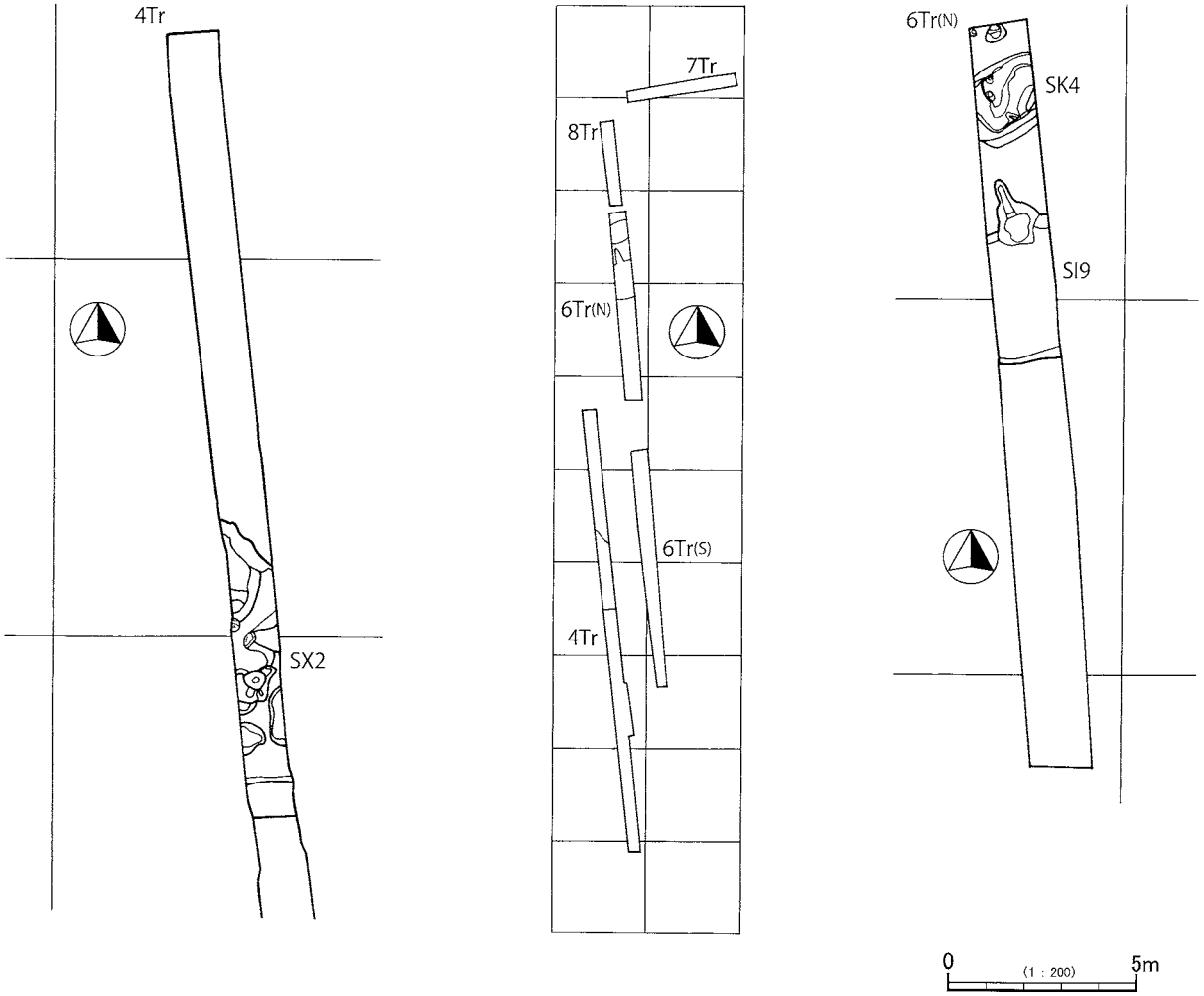
2．調査トレンチ〔第7･8図〕

1Tr　A-3～E-3・E-2グリッド、東西に延びる既存道路南側に位置する。東西方向約45m、幅約2mの範囲を調査し、必要に応じて部分的に拡張を行った。掘削は地表面から最深120cmを測った。地表面からの深さ約80cmで暗褐色土または黒褐色土の遺構確認面となり、住居跡6軒(SI1･2･3･4･6･10)、土坑3基(SK1･2･8)を検出した。他、遺構外遺物として土師器坏(95～100･103～104)、土師器皿(105)、須恵器甕(102)、灰釉陶器(101)が出土した。なお、103～105は墨書土器であり、判読はできないが103･104は体部、105は底部に墨筆が確認できた。

2Tr　F-2～H-2グリッド、東西に延びる既存道路南側に位置する。東西約20mの範囲を2Trとしたが、畑境(石垣)は崩せなかったため、これを境に西側を2Tr(W)(約12.5m×1m)、東側を2Tr(E)(約4.5m×1m)とした。掘削は地表面から最深134cmを測った。明確な遺構


1Tr
SK1
SK2
SI1
SK8
SI10
SK9
SI6
5Tr(E)
5Tr(W)
SX1
2Tr(E)
2Tr(W)
道路状遺構
3Tr(E)
3Tr(W)
7Tr
8Tr
6Tr(N)
5Tr(W)
5Tr(E)
2Tr(E)
2Tr(W)
1Tr
3Tr(W)
SK5
SK7
SI5
7Tr
SI8
3Tr(E)
SK6
SK3
0
(1 : 200)
5m

第7図　遺構位置図(1)



第8図　遺構位置図(2)

は少なく、地表面から約70cmの深さで黒褐色土及び礫を含む暗褐色土層となり、2Tr(W)で道路跡を確認した。他、遺構外遺物として須恵器壷(106)が出土した。

3Tr　N-1 ～ S-1 グリッド、東西道路に位置する。既存道路南側約 53 m の範囲を 3Tr としたが、畑進入路部分は耕作の都合上調査できず、これを境に西側を 3Tr(W)(約 24.5m × 1.5m)、東側を 3Tr(E)(約 23m × 1.5m) とした。掘削は地表面から最深 66cm を測った。地表面から約 40cm の深さで黒褐色土及び礫を含む暗褐色土の遺構確認面となり、住居跡 1 軒 (SI5)、土坑 4 基 (SK3･5･6･7) を検出した。また、農業用水管 (以下、畑管) の埋設によって、遺構の一部が壊されていた。他、遺構外遺物として土師器坏 (107 ～ 109)、陶器片 (110) などが出土した。

4Tr　L-5 ～ L-9 グリッド、南北に延びる既存道路西側に位置する。南北約 48m、幅約 1.5m の範囲を調査した。掘削は地表面から最深 164cm を測った。明確な遺構は検出できなかったが、地表面から約 50cm の深さで暗褐色土層となり、不明遺構 (SX 1) とした落ち込みを確認した。

5Tr　I-1 ～ K-1 グリッド、東西に延びる既存道路北側に位置する。東西約 40 m、幅約 2 m の範囲を 5Tr としたが、畑進入路部分工作の都合上調査できず、これを境に西側を 5Tr(W)(約 8m × 2m)、東側 5Tr(E)(約 4.5m × 2m) とした。掘削は地表面から最深 122cm を測った。明確な遺構は検出できなかったが、地表面から約 50cm の深さで黒褐色土層となり、5Tr(W) で不明遺構 (SX2) とした落ち込

みを確認した。他、5Tr(W) から灰釉陶器壺 (111)、石英 (127) などが出土した。

6Tr L-3 ～ M-8 グリッド、南北に延びる既存道路東側に位置する。南北約 53m、幅約 2m の範囲を 6Tr としたが、畑進入路部分は耕作の都合上調査できず、これを境に北側を 6Tr(N)(約 21m × 2m)、南側を 6Tr(S)(約 26m × 2m) とした。掘削は地表面から最深 2 m、6Tr(S) で最深 1 m を測った。地表面から約 70cm の深さで、黒褐色土の遺構確認面となり、6Tr(N) から住居跡 1 軒 (SI9)・土坑 1 基 (SK4) を検出した。他、灯明皿 (112)、仏飯具 (113)、釘 (120･121) などが出土した。

7Tr L-1・2 ～ M-1 グリッド、東西に延びる既存道路南側に位置する。東西約 12m、幅 2m の範囲を調査し、掘削は地表面から最深 1 m を測った。地表面から約 45cm の深さで、暗褐色土の遺構確認面となり、調査範囲の大半が撹乱を受けていた。住居跡 1 軒 (SI8) を検出した。

8Tr L-2 ～ 3 グリッド、南北に延びる既存道路東側に位置する。南北約 9m、幅 2m の範囲を調査し、掘削は地表面から最深 144cm を測った。地表面から約 80cm の深さで褐色土層となったが、遺構は確認できなかった。

9Tr K-27 ～ 28 グリッド、南北に延びる既存道路西側に位置する。南北約 3.3m、幅 1.5m の範囲を調査し、地表面から最深 48cm まで掘削した。地表面からの深さ約 40cm で褐色土層となったが、遺構は確認できなかった。

10Tr K-25 グリッド、南北に延びる既存道路西側に位置する。南北約 3.7m、幅 1.5m の範囲を調査し、地表面から最深 40cm まで掘削した。地表面から約 34cm の深さで褐色土層となったが、遺構は確認できなかった。他、小片であるが、土師器坏底部に墨筆が確認された墨書土器 (114)、金属製品 (122･124) が出土した。

11Tr M-22 グリッド、東西に延びる既存道路北側に位置する。東西約 4m、幅 1m の範囲を調査した。地表面から最深 60cm まで掘削した。地表面から約 50cm の深さで褐色土層となったが、遺構・遺物は確認できなかった。

12Tr M-19 ～ 20 グリッド、南北に延びる既存道路西側に位置する。南北約 4.5m、幅 1.2m の範囲を調査し、掘削は地表面から最深 60cm まで掘削した。地表面から約 30cm の深さで褐色土層となったが、遺構・遺物は確認できなかった。

13Tr M-15 グリッド、南北に延びる既存道路西側に位置する。3.3m、幅 1.5m の範囲を調査した。地表面から最深 56cm まで掘削した。地表面から約 40cm の深さで褐色土層となったが、遺構は確認できず、かわらけ (115) が出土した。

14Tr L-28 ～ 29 グリッド、南北に延びる既存道路東側に位置する。南北約 3m、幅約 1.3m の範囲を調査し、地表面から最深 54cm までまで掘削した。地表面から約 40cm の深さで褐色土層となったが、遺構は確認できなかった。

15Tr J-31 グリッド、南北に延びる既存道路西側に位置する。南北約 3m、幅約 1.5m の範囲を調査し、地表面から最深 56cm まで掘削した。地表面から約 40cm の深さであり褐色土層となったが、遺構・遺物は確認できなかった。

16Tr K-35 グリッド、東西に延びる既存道路南側に位置する。南北約 4m、幅約 1.5m の範囲を調査し、地表面からは最深 100cm まで掘削した。地表面から約 75cm の深さであり褐色土層となったが、遺構確認はできなかった。他、小片であるが土師器坏 (116) と不明金属製品 (123) が出土した。

17Tr L-13 グリッド、東西に延びる既存道路南側に位置する。南北約 3.3m、幅約 1.5m の範囲を調査し、地表面から最深 60cm まで掘削した。地表面から約 34cm の深さであり褐色土層となったが、遺構は確認できなかった。

3．発見した遺構・遺物

・SI1〔第9図〕

位置と検出状況　B･C-3グリッド、1Trの中央からやや西に位置する。重複する遺構はなく、東壁と西壁を確認した。規模は不明だが、東西の壁間は約4.2m、確認面から床面までの深さは約25cmを測った。**遺構の特徴**　褐色ブロックを少量含む床面を確認した。カマドは西壁に位置し、炭化物と焼土、及び構築材と思われる礫を確認した。また、カマドの南側では土坑を確認した。**出土遺物**　須恵器蓋(1)、土師器皿(2)･甕(7)、灰釉陶器埦(3～5)、脚高高台付坏(6)などが出土した。本遺構からは灰釉陶器椀は3点出土したが、いずれも成形が粗く、歪みがある。また4は内面に転用痕(内面見込み部の磨滅)や、内面口縁付近に煤もしくは漆の付着がみられた。**遺構の時期**　カマド出土遺物の時期から、10C後半～11Cとしておく。

・SI2〔第10図〕

位置と検出状況　D-3グリッド、1Trの中央からやや東に位置する。西側は重複するSI3、南壁中央付近はSK2に壊されており、南壁・東壁・西壁を確認した。規模は不明だが、方形を呈すと思われ、東西の壁間は約3.6mを測った。確認面から床面までの深さは、約25cmを測った。**遺構の特徴**　検出した範囲にはカマド施設はなかった。東隅で土坑を検出した。**出土遺物**　土師器坏(8～10)･高台付坏(11～13)･羽釜(15)、灰釉陶器皿(14)、などが出土した。11は内外面に暗文状のヘラ描き模様があり、外面は雲または風、内面には鳥・羽を模しているようなモチーフが窺える。**遺構の時期**　出土遺物の時期から、11C頃としておく。

・SI3〔第11･12図〕

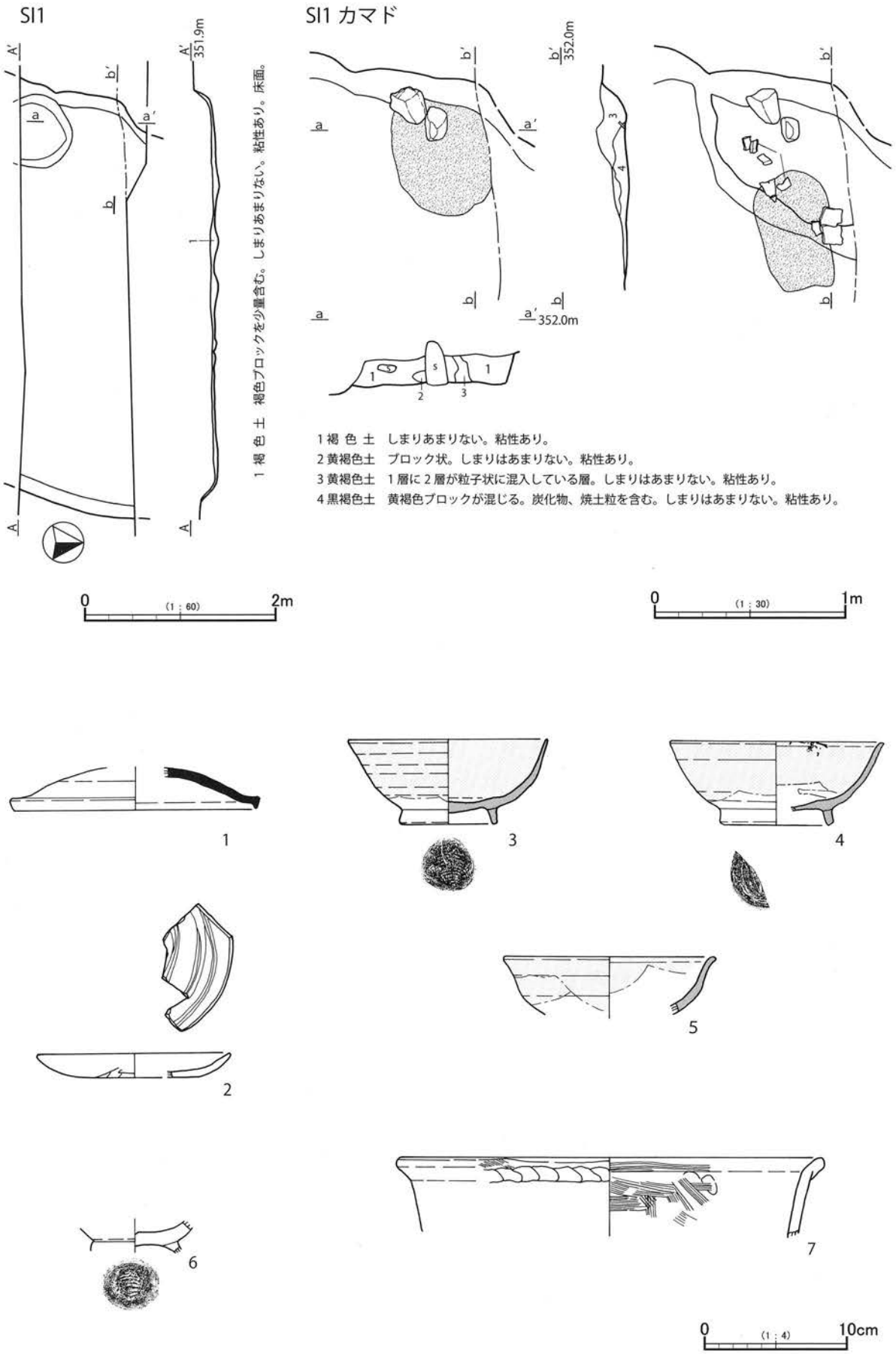
位置と検出状況　C･D-3グリッド、1Trの中央に位置する。重複するSI2を壊していた。規模は不明であるが、東西2.5m、南北は確認範囲で2.2mを測った。確認面から床面までの深さは、約10cmを測った。**遺構の特徴**　カマドは南西隅に位置し、焼土と多数の礫の堆積を確認した。平瓦(126)も出土しており、礫とともにカマド構築材に用いられたものと考えられる。他、床下から土坑と少量の焼土･炭化物を検出した。**出土遺物**　土師器坏(16～20)･高台付坏(23･24)･甕(25～29)･羽釜(29～31)、緑釉陶器埦(21)、灰釉陶器埦(22)、平瓦(126)などが出土した。**遺構の時期**　出土遺物から、11C前半～中頃としておく。

・SI4〔第11･12図〕

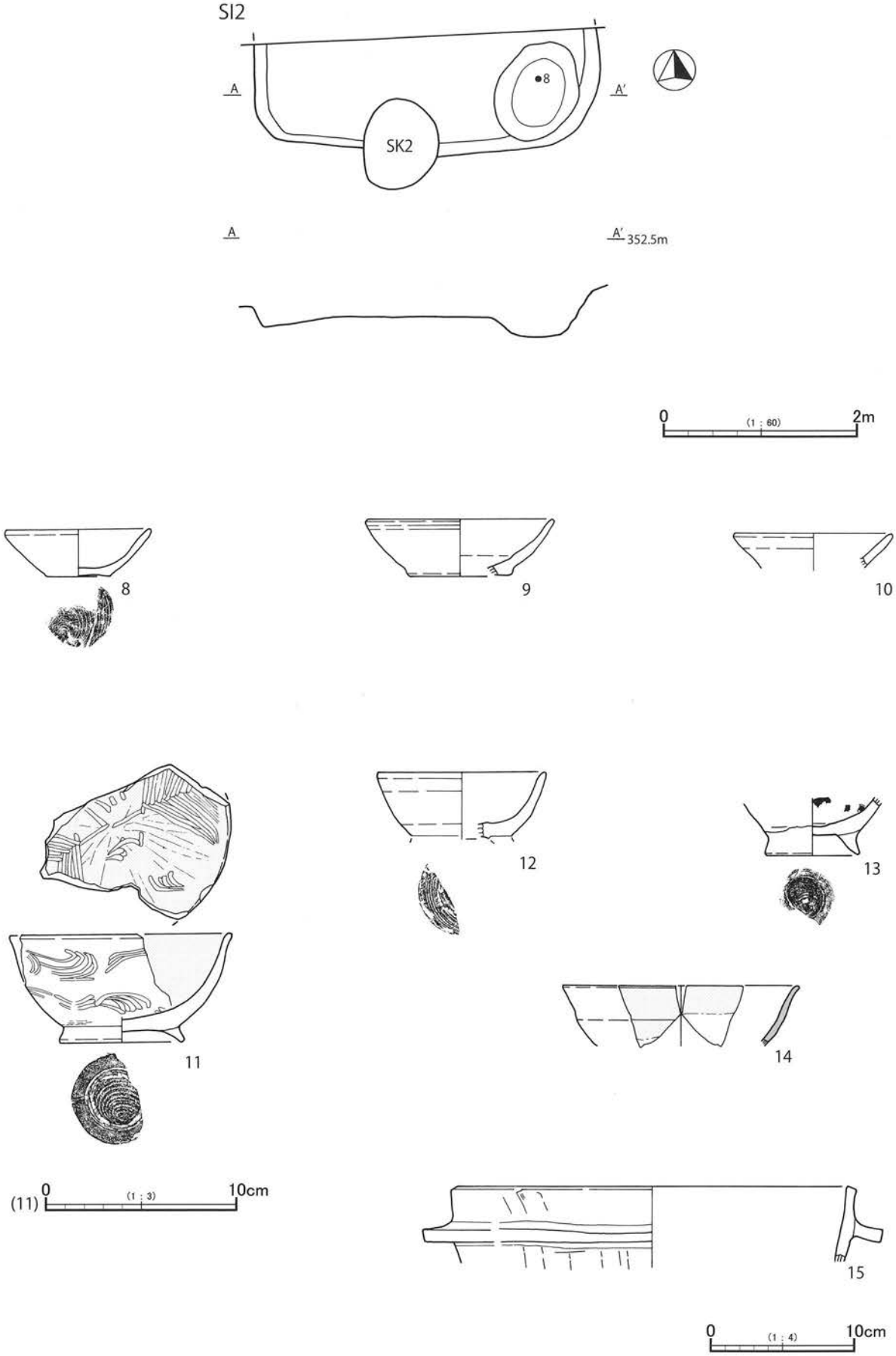
位置と検出状況　D-2･3～E-2･3グリッド、1Trの東側に位置する。重複するSK1に壊されていた。確認範囲では西壁のみを確認し、遺構遺存部分は東西約3.5mを測った。確認面から床面までの深さは、約15cmを測る。**遺構の特徴**　確認範囲にカマドはなかったが、焼土を少量検出している。また、中央部には多数の礫が確認されている。**出土遺物**　土師器坏(32)･脚高高台付坏(34)、灰釉陶器埦(33)、鉄滓(125)などが出土した。**遺構の時期**　遺存状況が悪く、明確ではないが、出土遺物の時期から11C後半頃としておく。

・SI5〔第13･14図〕

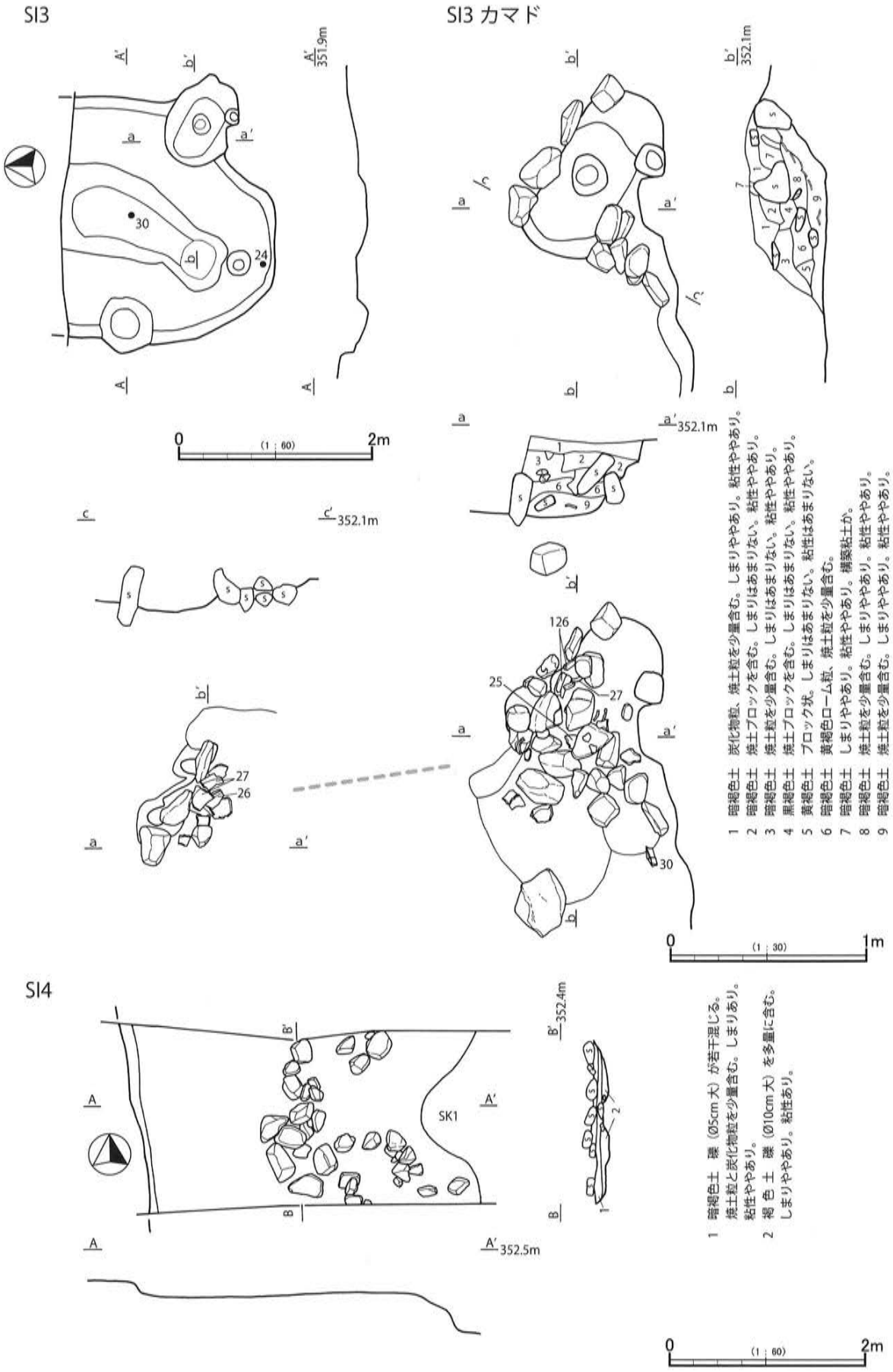
位置と検出状況　O-1グリッド、3Tr(W)の中央に位置する。重複するSK7に南壁の一部を壊されており、東壁・西壁・南壁を確認した。方形を呈すと考えられ、東西の壁間は約4m、南北は確認範囲で1.5mを測った。明確な貼り床は確認できなかったが、確認面からの深さは約25cmを測った。


SI1
SI1 カマド
1 褐 色 土　褐色ブロックを少量含む。しまりあまりない。粘性あり。床面。
1 褐 色 土　しまりあまりない。粘性あり。
2 黄褐色土　ブロック状。しまりはあまりない。粘性あり。
3 黄褐色土　1 層に 2 層が粒子状に混入している層。しまりはあまりない。粘性あり。
4 黒褐色土　黄褐色ブロックが混じる。炭化物、焼土粒を含む。しまりはあまりない。粘性あり。
A' 351.9m
b' 352.0m
a' 352.0m
0 (1 : 60) 2m
0 (1 : 30) 1m
0 (1 : 4) 10cm

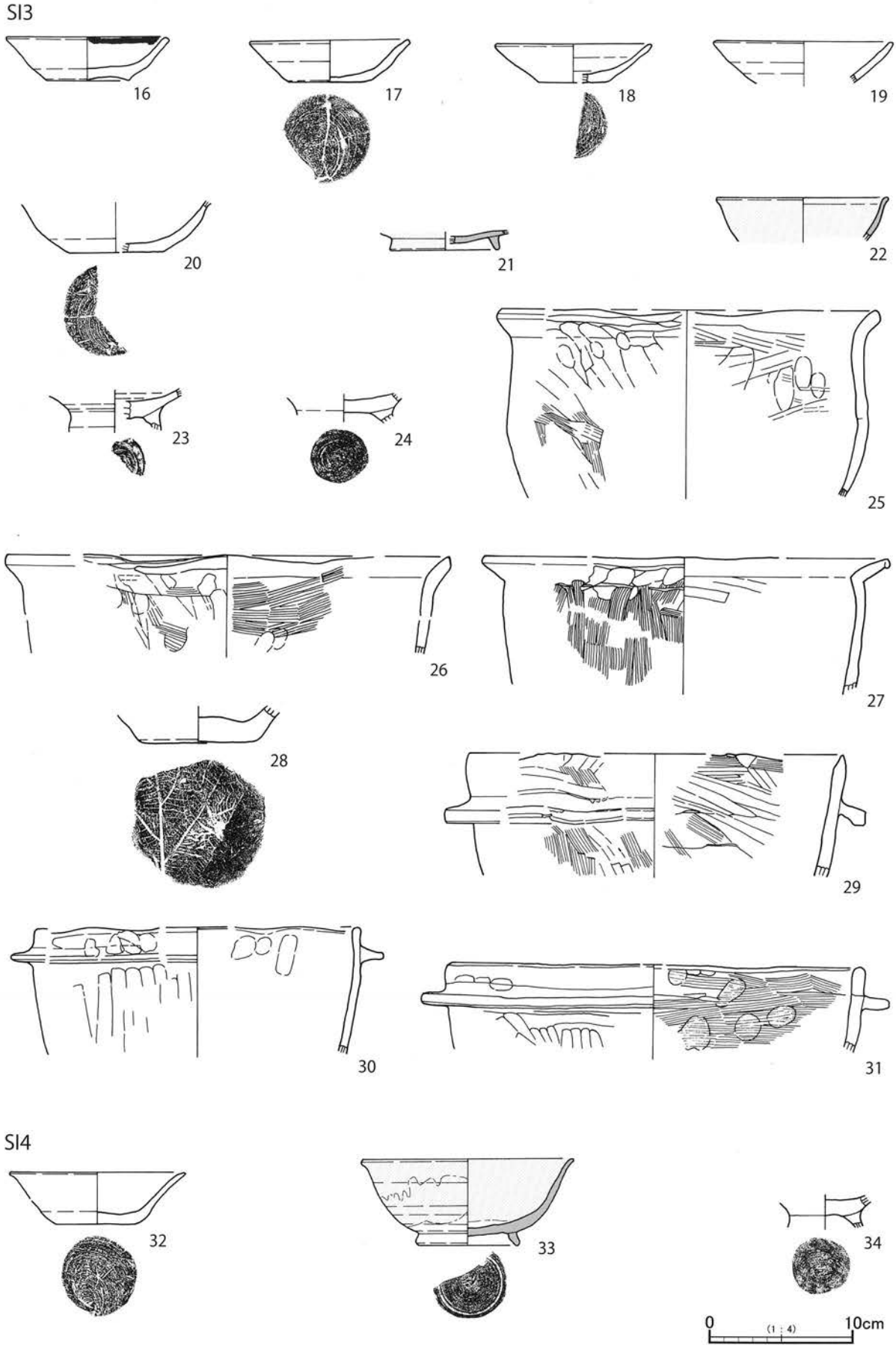
第9図　SI1


SI2
A
A'
8
SK2
A
A' 352.5m
0
(1 : 60)
2m
8
9
10
11
12
13
14
(11) 0
(1 : 3)
10cm
15
0
(1 : 4)
10cm

第10図　SI2

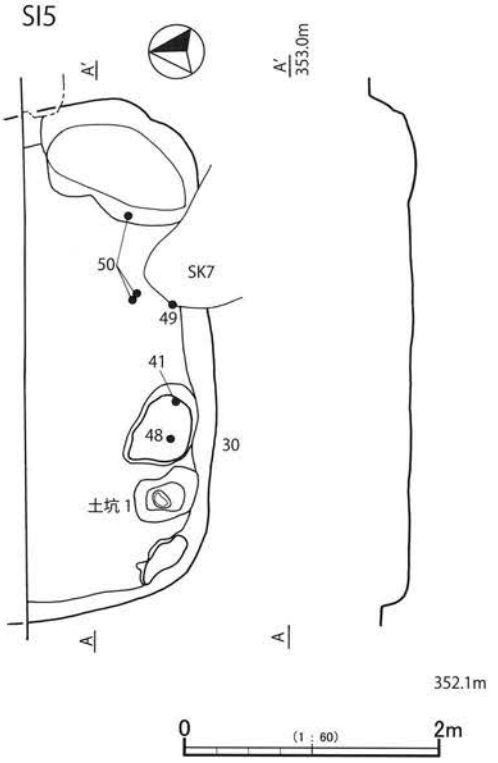

SI3
SI3 カマド
SI4
A'
351.9m
b'
352.1m
c'
352.1m
B'
352.4m
A'
352.5m
SK1
0
(1 : 60)
2m
(1 : 30)
1m
1 暗褐色土 炭化物粒、焼土粒を少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
2 暗褐色土 焼土ブロックを含む。しまりはあまりない。粘性ややあり。
3 暗褐色土 焼土粒を少量含む。しまりはあまりない。粘性ややあり。
4 黒褐色土 焼土ブロックを含む。しまりはあまりない。粘性ややあり。
5 黄褐色土 ブロック状。しまりはあまりない。粘性はあまりない。
6 暗褐色土 黄褐色ローム粒、焼土粒を少量含む。
7 暗褐色土 しまりややあり。粘性ややあり。構築粘土か。
8 暗褐色土 焼土粒を少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
9 暗褐色土 焼土粒を少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
1 暗褐色土 礫（Ø5cm大）が若干混じる。焼土粒と炭化物粒を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。
2 褐色土 礫（Ø10cm大）を多量に含む。しまりややあり。粘性あり。

第11図 SI3・4(1)

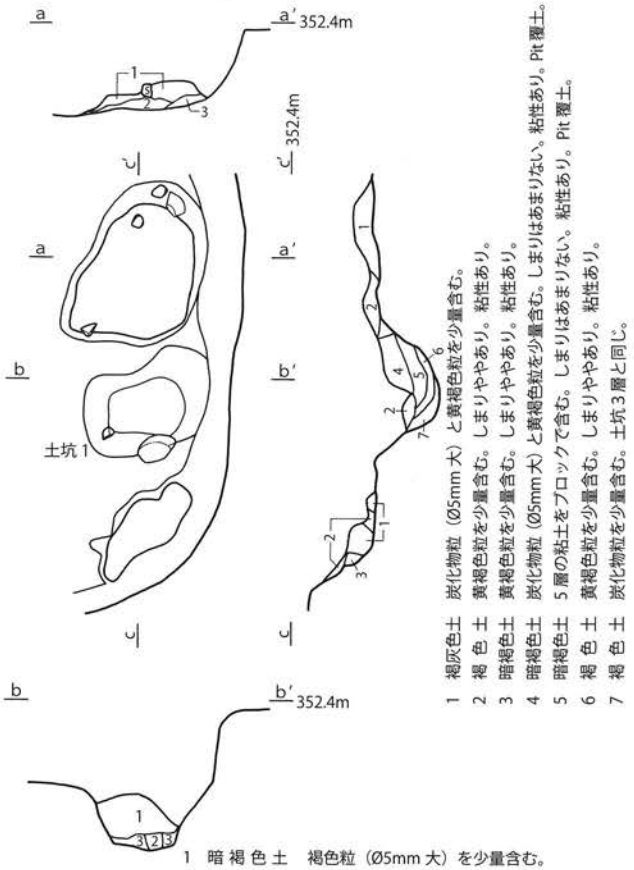

SI3
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
SI4
32
33
34
0
(1 : 4)
10cm

第12図　SI3・4(2)

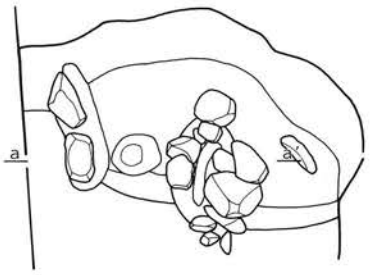
SI5



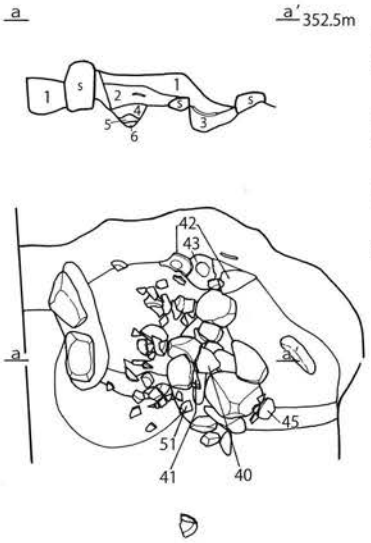
SI5 内　土坑 1・粘土溜まり



SI5 カマド

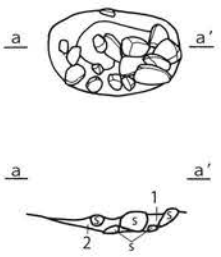


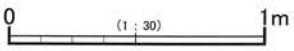
1　暗 褐 色 土　褐色粒（Ø5mm 大）を少量含む。
　しまりはあまりない。粘性ややあり。
2　灰黄褐色土　粘土ブロック。しまりあり。粘性あり。
3　褐　色　土　2 層の粘土をブロック状に含む（Ø1cm 大）。
　炭化物粒（Ø5mm 以下）を少量含む。しまりはあまりない。
　粘性ややあり。



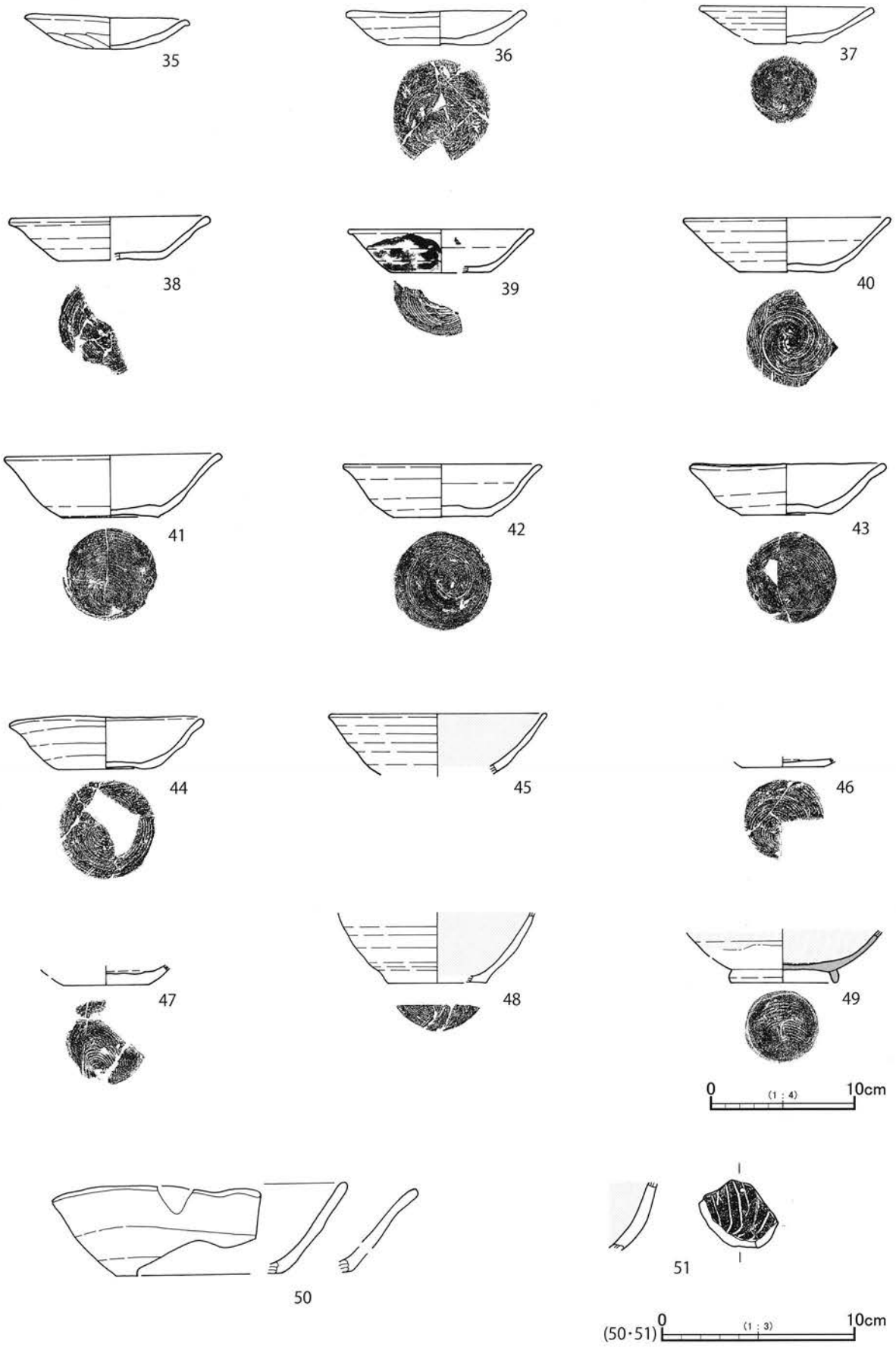
1　暗褐色土　しまりはあまりない。粘性ややあり。
2　黒褐色土　炭化物ブロック、暗褐色ブロックを含む。
　しまりはあまりない。粘性ややあり。
3　暗褐色土　しまりはあまりない。粘性ややあり。
4　暗褐色土　焼土粒（Ø1cm）を少量含む。
　しまりはあまりない。粘性ややあり。
5　暗褐色土　焼土粒（Ø5cm 以下）を含む。
　しまりなし。粘性ややあり。
6　黒 色 土　炭化物層。しまりなし。粘性ややあり。

SI5 内　土坑 2





第13図　SI5(1)


35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
0
(1 : 4)
10cm
50
51
(50・51)
0
(1 : 3)
10cm

第14図　SI5(2)

遺構の特徴　カマドは東南隅に位置し、礫と焼土の堆積を確認した。袖部には石と粘土を用いており、燃焼部では支柱石の痕跡と思われる凹みを確認した。遺構南西では粘土の集積および覆土に炭化物粒と粘土ブロックを含むピットを検出した。**出土遺物**　土師器坏・皿類(35～48･50･51)、灰釉陶器埦(49)などが出土した。土師器はカマド部分からの出土が多く、器面が黒変しているものや煤けていた。50の土師器坏はやや片口状、51の土師器坏片は黒色処理された内面に線刻がみられた。**遺構の時期**　伴出関係は明確ではないが、カマド付近の出土遺物から、10C後半頃としておく。

・SI6〔第15図〕

位置と検出状況　A-3グリッド、1Trの西側に位置する。重複はなく、東壁・西壁を確認した。規模は不明であるが、東西壁間は約3.8ｍを測った。明確な貼り床ではないが、暗褐色土の床面を検出し、確認面からの深さは約15cmを測った。**遺構の特徴**　検出した範囲にカマド施設はなく、性格については不明であるが、遺構内でピット1基と、溝状の落ち込みを検出した。**出土遺物**　土師器蓋(52)･坏(53～59)･甕(60)などが出土した。52の土師器蓋は、外面に暗文があり、口縁部の曲はほぼ垂直で端部が面をなしている。54～58の土師器坏は、全体的な器面の劣化と灯明痕と思われる黒変があるものがみられた。なお、11C代の遺物に9C代の遺物が混在したが、確認範囲が狭小であったため、別遺構との重複などについては不明である。**遺構の時期**　8C後半～9C代の遺物が混在したものの、11C後半頃としておく。

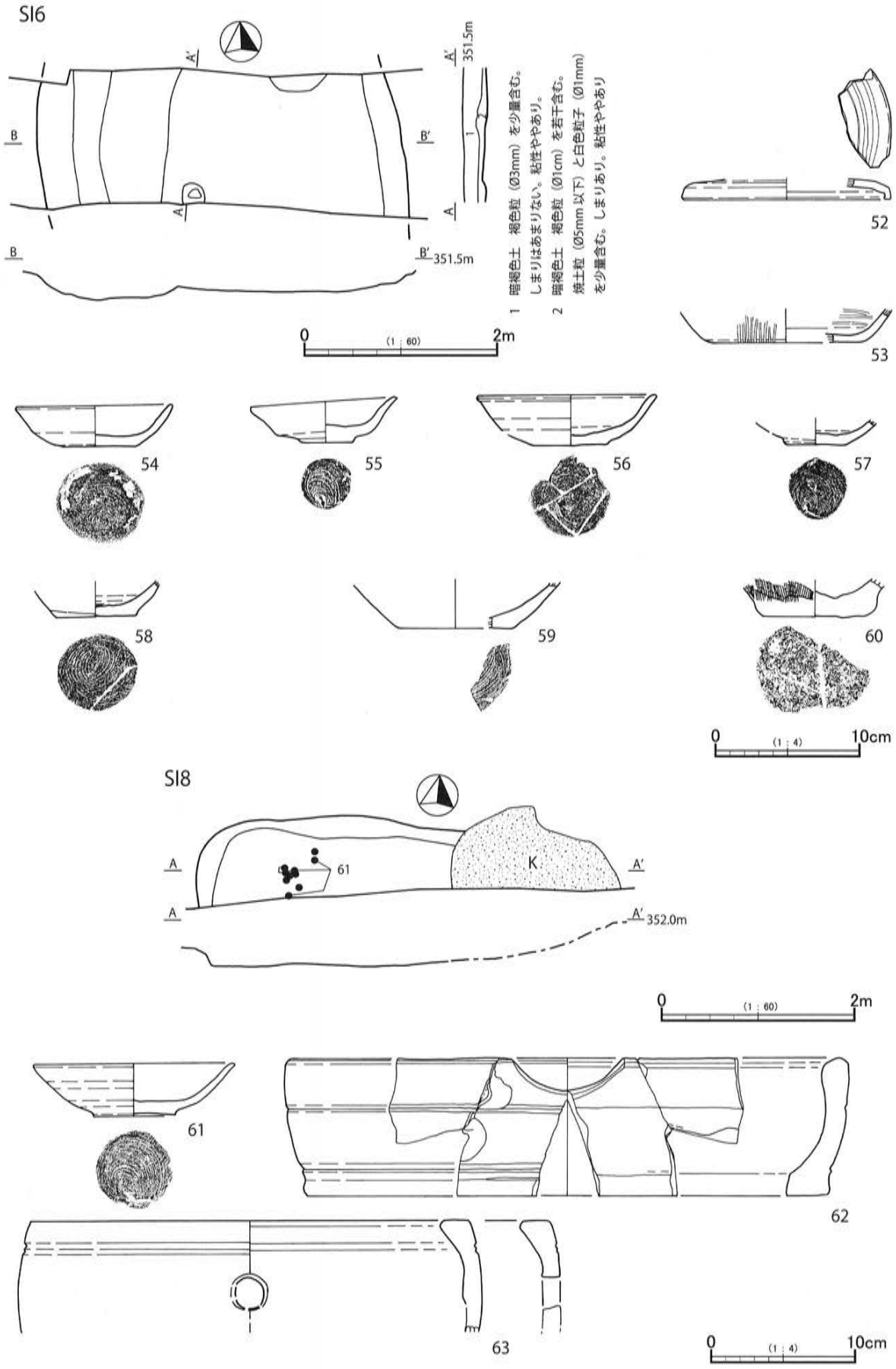
・SI7〔第18図〕　調査時には住居跡としていたが、調査終了後に土坑と断定したため、SK3とした。

・SI8〔第15図〕

位置と検出状況　M-1グリッド、7Trの東側に位置する。重複する遺構はないが、撹乱により東側が壊されていた。規模は不明であるが西壁と北壁を確認し、確認範囲では東西約2.7ｍ、南北85cm、確認面からの深さは約20cmを測った。**遺構の特徴**　検出した範囲にはカマド施設はなく、出土遺物も少なかった。**出土遺物**　土師器坏(61)が出土した。また後世の混入物であるが、器台形土製品と称されるもの(62･63)が出土した。これらは瓦質で外面が黒変しており、63の胴部には通器孔、62は口縁部がU字状に開いている。敷輪（シキワ）と呼ばれる焜炉や七輪の上において釜などをかける補助的な道具であり、五徳の一種として熱源の口径と鍋釜の底径や底の丸みを合わせ、胴部の通気孔により熱効率をよくする機能をもつもので、大正時代以降、戦後までの遺物とされている。**遺構の時期**　遺物が少なく明確ではないが、11C後半頃としておく。

・SI9〔第16･17図〕

位置と検出状況　L-3･4グリッド、6Tr(N)の中央から北側にかけて位置する。重複する遺構はなく、確認範囲では北壁のカマド部分と南壁を検出した。規模は不明であるが、南北の壁間は約3.5ｍ、確認面から床面の深さ80㎝まで掘削した。**遺構の特徴**　カマドは北壁に位置し、袖部・支柱石・煙道部と焼土･炭化物の堆積を確認した。袖部の構築材には粘土と礫が用いられており、その他天井石等に用いられたと推測する礫の堆積を確認した。**出土遺物**　須恵器坏(64・65)、土師器坏(66)・甕(67･69)・柱状高台坏(68)などが出土した。**遺構の時期**　11C前半頃の遺物が混在したが、カマド出土遺物の時期から、


SI6
A'
B
B'
A
351.5m
1 暗褐色土　褐色粒（Ø3mm）を少量含む。しまりはあまりない。粘性ややあり。
2 暗褐色土　褐色粒（Ø1cm）を若干含む。焼土粒（Ø5mm 以下）と白色粒子（Ø1mm）を少量含む。しまりあり。粘性ややあり
0
(1 : 60)
2m
52
53
54
55
56
57
58
59
60
0
(1 : 4)
10cm
SI8
A
A'
K
61
352.0m
0
(1 : 60)
2m
61
62
63
0
(1 : 4)
10cm

第15図　SI6・8

8C 中頃としておく。

・**SI10〔第17図〕**

位置と検出状況　B-3 グリッド、1Tr の西側に位置する。部分的に撹乱を受け、重複する SK9 に西壁の一部を壊されていた。規模は不明だが東壁・西壁を確認し、東西の壁間は約 3.8m を測った。明確な貼り床ではないが、ややしまりがあり黒褐色土ブロックを含む褐色土層を確認し、確認面からの深さは約 20cm を測った。**遺構の特徴**　検出した範囲にカマド施設はなく、西壁にやや段差が確認できたが、性格については不明である。**出土遺物**　土師器坏 (70 ～ 79)・甕 (80) などが出土した。70･71 の土師器坏には墨書があり、79 は墨痕が確認できた。墨書については磨滅や破損部で判読できなかったが、いずれも 10C 前半頃の土師器坏体部に書かれている。76 の内面口縁部に灯明痕を確認した。**遺構の時期**　出土遺物の時期から、10C 前半頃としておく。

・**SK1〔第18図〕**

位置と検出状況　E-2･3 グリッド、1Tr の東側に位置する。重複する SI4 を壊していた。不整であるが円形を呈すと思われ、確認範囲で直径 2.1m を測った。確認面からの深さは約 65cm を測る。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・**SK2〔第18図〕**

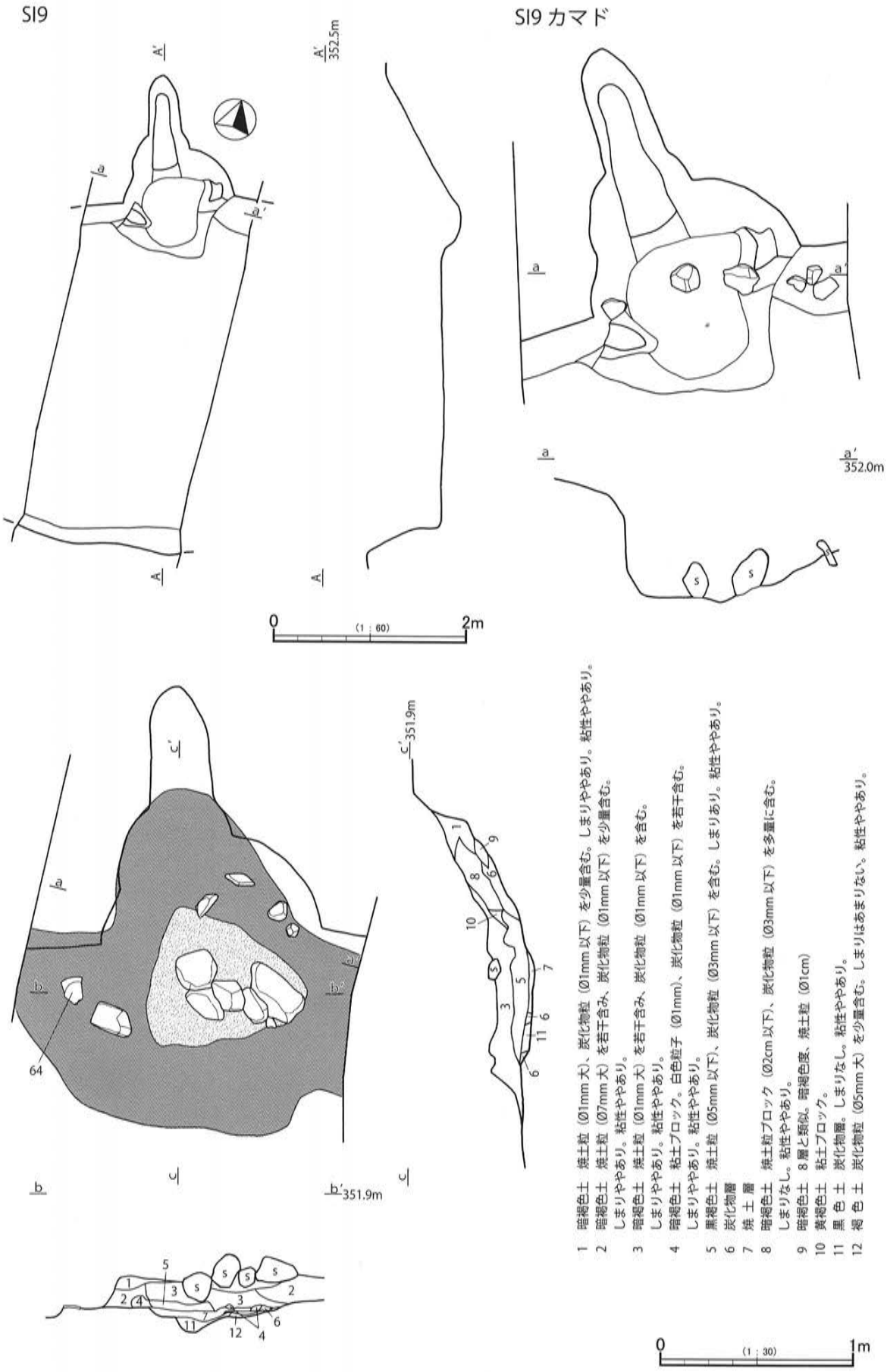
位置と検出状況　D-3 グリッド、1Tr の中央よりやや東側に位置する。重複する SI2 を壊していた。楕円形を呈し、長形 1.5m、短径 1.1m を測った。確認面からの深さは約 20cm を測る。**遺構の特徴**　覆土に礫を含んでいたが、性格については不明である。**出土遺物**　脚高高台坏が 1 点出土したが、小片のため図化しなかった。**遺構の時期**　出土遺物が少なく明確ではないが、11C 代以降としておく。

・**SK3〔第18図〕**

位置と検出状況　Q-1 グリッド、3Tr(E) の西側に位置する。重複する遺構はなかった。プランは不整形で、北側は畑管で壊されていた。確認範囲では直径 3 m ほどの規模で、確認面からの深さは約 1m を測った。**遺構の特徴**　内部は部分的にフラスコ状になっており、覆土には多量の礫や、炭化物や焼土ブロックが包含されていた。なお、プラン確認段階ではカマドと想定して SI7 と遺構番号を付したが、調査進展により土坑と断定し、SK3 とした。但し、甕や羽釜が出土し、焼土や炭化物も確認されていることから、住居跡のカマド施設を壊していた可能性も窺える。**出土遺物**　土師器坏 (81･82)・甕 (83)・羽釜 (84) が出土した。**遺構の時期**　出土遺物から、11C 前半頃としておく。

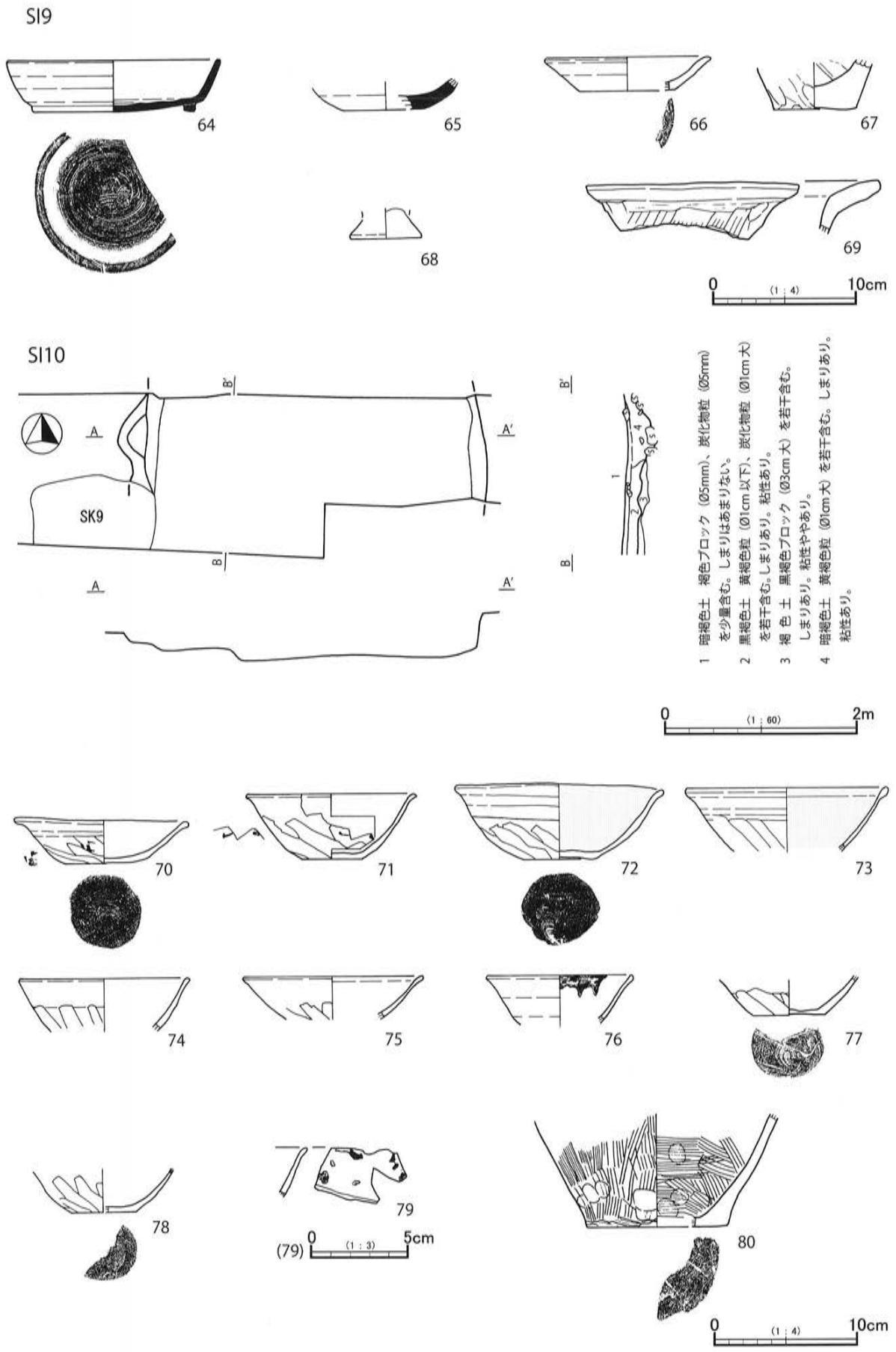
・**SK4〔第19図〕**

位置と検出状況　L-3 グリッド、6Tr(W) の北側に位置する。重複する遺構はなかった。楕円形を呈すと思われ、確認範囲では東西約 2m、確認面からの深さは 1.2m を測った。**遺構の特徴**　遺構の断面観察により、覆土が南から北側へ自然埋没している状況が窺えることと、覆土中にかわらけ (85･88)、陶器 (89)、青磁 (90)、石臼 (128) などを含んでいることから、中世の廃棄坑と推測される。**出土遺物**　前述のかわらけ・陶磁器類・石臼の他、土師器坏 (86･87)、須恵器壺 (91)・坏 (92) が出土した。陶磁器類は、15C 末 ～ 16C 前半頃に比定される。**遺構の時期**　若干 10C 後半 ～ 11C 代の遺物が混在するが、かわらけと陶磁器類の出土から、近世としておく。



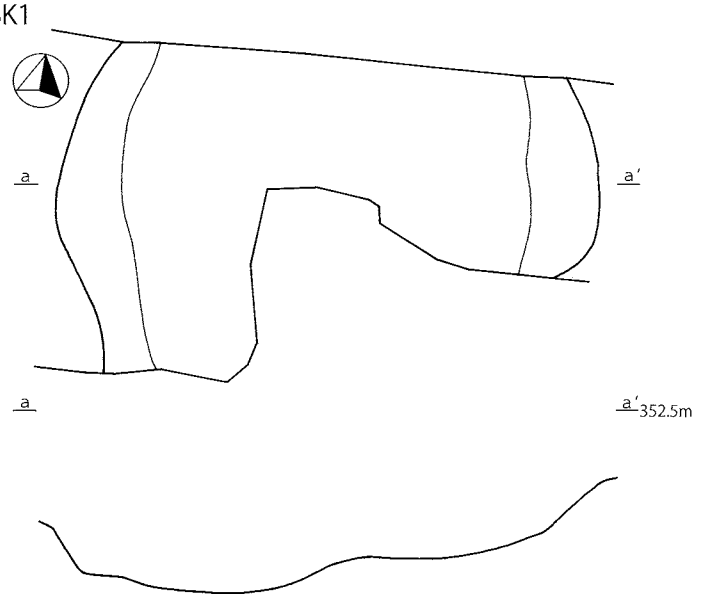
1　暗褐色土　焼土粒（Ø1mm 大）、炭化物粒（Ø1mm 以下）を少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
2　暗褐色土　焼土粒（Ø7mm 大）を若干含み、炭化物粒（Ø1mm 以下）を少量含む。
　しまりややあり。粘性ややあり。
3　暗褐色土　焼土粒（Ø1mm 大）を若干含み、炭化物粒（Ø1mm 以下）を含む。
　しまりややあり。粘性ややあり。
4　暗褐色土　粘土ブロック。白色粒子（Ø1mm）、炭化物粒（Ø1mm 以下）を若干含む。
　しまりややあり。粘性ややあり。
5　黒褐色土　焼土粒（Ø5mm 以下）、炭化物粒（Ø3mm 以下）を含む。しまりあり。粘性ややあり。
6　炭化物層
7　焼 土 層
8　暗褐色土　焼土粒ブロック（Ø2cm 以下）、炭化物粒（Ø3mm 以下）を多量に含む。
　しまりなし。粘性ややあり。
9　暗褐色土　8 層と類似。暗褐色度、焼土粒（Ø1cm）
10　黄褐色土　粘土ブロック。
11　黒 色 土　炭化物層。しまりなし。粘性ややあり。
12　褐 色 土　炭化物粒（Ø5mm 大）を少量含む。しまりはあまりない。粘性ややあり。

第16図　SI9(1)

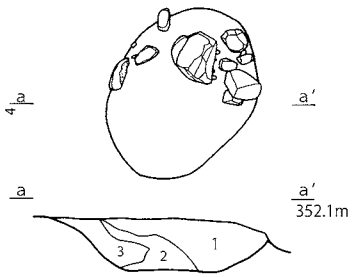

SI9
64
65
66
67
68
69
0
(1 : 4)
10cm
SI10
A
A'
B
B'
SK9
1 暗褐色土　褐色ブロック（Ø5mm）、炭化物粒（Ø5mm）を少量含む。しまりはあまりない。
2 黒褐色土　黄褐色粒（Ø1cm 以下）、炭化物粒（Ø1cm 大）を若干含む。しまりあり。粘性あり。
3 褐 色 土　黒褐色ブロック（Ø3cm 大）を若干含む。しまりあり。粘性ややあり。
4 暗褐色土　黄褐色粒（Ø1cm 大）を若干含む。しまりあり。粘性あり。
0
(1 : 60)
2m
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
(79)
0
(1 : 3)
5cm
80
0
(1 : 4)
10cm

第17図　SI9(2)・10

SK1

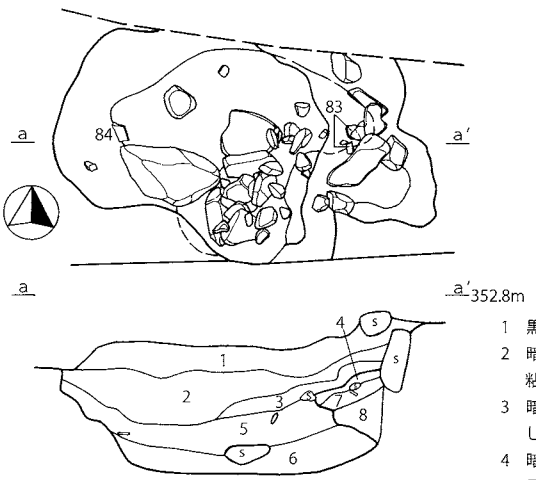


SK2



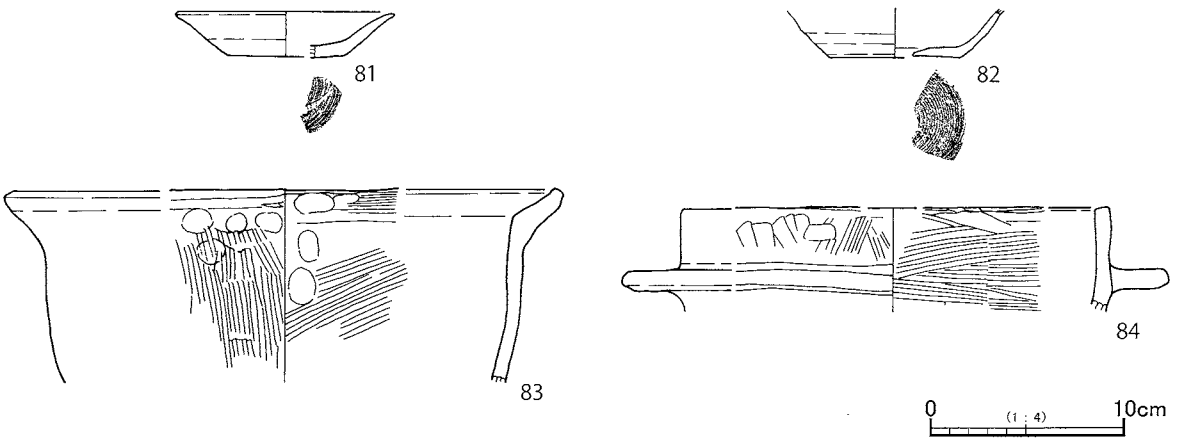
1　暗褐色土　礫（Ø3cm 大）を含む。しまりややあり。粘性ややあり。
2　褐 色 土　礫（Ø4cm 大）を含む。しまりなし。粘性はあまりない。
3　黒褐色土　褐色粒（Ø1cm 以下）と礫（Ø2cm 大）を含む。しまりあり。粘性ややあり。

SK3



1　黒褐色土　しまりはあまりない。粘性ややあり。
2　暗褐色土　ロームブロック（Ø5cm 以下）を少量含む。しまりはあまりない。粘性ややあり。
3　暗褐色土　ロームブロック（Ø3cm 以下）と炭化物粒（Ø1mm 大）が少量混じる。しまりはあまりない。粘性ややあり。
4　暗褐色土　焼土ブロック、炭化物を多量に含む。しまりはあまりない。粘性あり。
5　黒褐色土　ロームブロック、炭化物を多量に含む。しまりはあまりない。粘性あり。
6　黒褐色土 夾雑物は少なく、表面がしまる。
7　黄褐色土 焼土ブロックを含む。火床面。
8　黄褐色土 砂質土。地山。

0　(1：40)　1m



第18図　SK1～3

・**SK5**〔**第20図**〕

位置と検出状況　Q-1グリッド、3Tr(W)の中央からやや東に位置する。重複する遺構はなかった。トレンチの南壁際で検出し、円形を呈す土坑と思われる。確認範囲では直径80cm、確認面からの深さは12cmを測った。**出土遺物**　土師器甕片(93)が出土した。**遺構の時期**　出土遺物が少なく、時期は明確ではないため、9～10C頃としておく。

・**SK6**〔**第20図**〕

位置と検出状況　R-1グリッド、3Tr(E)の中央からやや東に位置する。重複する遺構はなかった。トレンチの北壁際で検出し、南側は畑管により壊されていた。確認範囲では東西約1m、確認面からの深さは12cmを測った。**出土遺物**　須恵器甕片(94)が出土した。内外面が磨耗しており、転用硯や石皿など用途に使用された可能性が窺える。**遺構の時期**　出土遺物が少なく、時期は明確ではないため、9～10C頃としておく。

・**SK7**〔**第20図**〕

位置と検出状況　O-1グリッド、3Tr(W)の中央からやや東に位置する。重複するSI5の南壁の一部を壊している。平面形は不整形で、確認範囲では最長約1.2m、確認面からの深さは26cmを測った。遺構の性格は不明である。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・**SK8**〔**第20図**〕

位置と検出状況　B-3グリッド、1Trの西側に位置する。規模は不明であるが、円形を呈すと思われ、確認範囲では最長約75cm、確認面からの深さは約20cmを測った。遺構の性格は不明である。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・**SK9**

位置と検出状況　B-3グリッド、1Trの西側に位置する。SI10の西壁の一部を壊していた。確認範囲では最長約1.3mを測ったが、規模や遺構の性格は不明である。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・**道路跡**〔**第21図**〕

位置と検出状況　G-2･3グリッド、2Tr(W)に位置する。トレンチ南壁際で確認し、確認範囲では長さ約9.3m、幅5cmを測った。**遺構の特徴**　礫がなく、ややしまった面が確認でき、かつての畑地に伴う道路の一部と推測される。**遺構の時期**　出土遺物がはなく、明確な時期は不明であるが、近世・近代まで下る可能性が窺える。

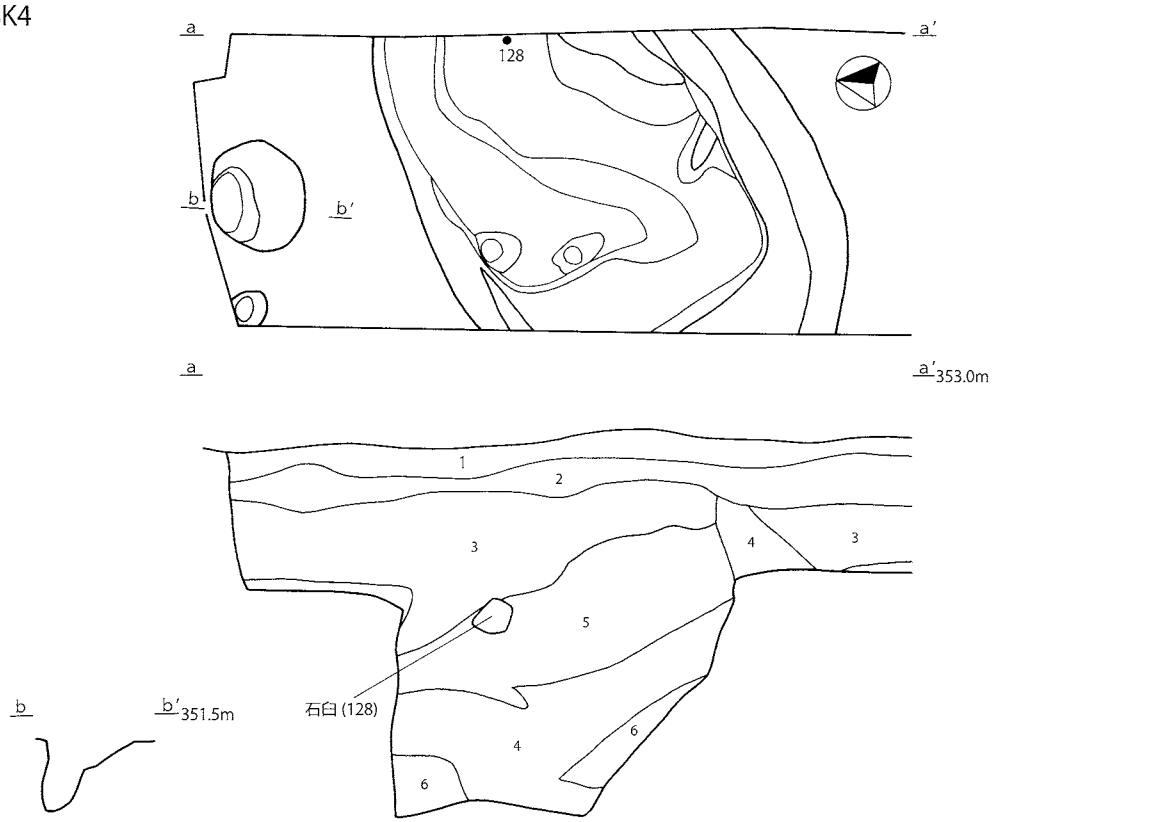
・**不明遺構1**〔**第21図**〕

位置と検出状況　I･J-1グリッド、5Tr(W)の中央に位置する。遺構単位が明確ではなく、確認面からの深さは約20cmと浅い。遺構の性格は不明である。また、自然地形や耕作痕であった可能性もある。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・**不明遺構2**〔**第21図**〕

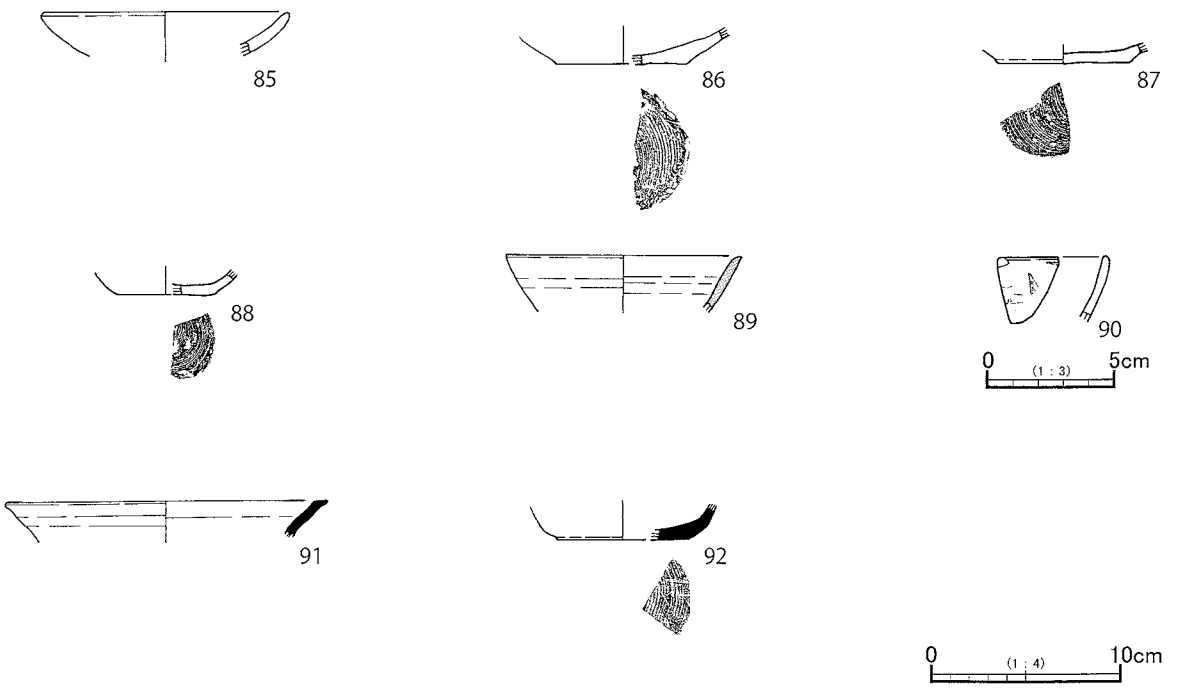
位置と検出状況　L-6･7グリッド、4Trの中央からやや北に位置する。南北約8mの範囲に複数の掘り込み、または落ち込みがあり、確認面からの深さは約50cmを測った。遺構の性格は不明である。**遺構の時期**　出土遺物がなく、時期は不明である。

SK4



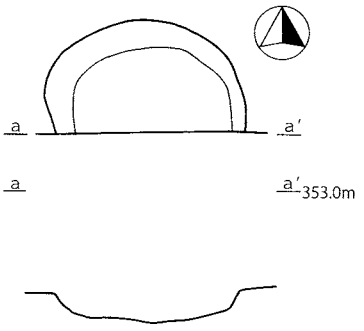
1　黒褐色土　耕作土。
2　暗褐色土　礫（Ø30cm 以下）が若干混じる。粘土粒（Ø5mm 大）を含む。しまりややあり。粘性あり。
3　暗褐色土　礫（Ø30cm 以下）が混じる。しまりややあり。粘性あり。
4　黒褐色土　褐色粒（Ø1cm 大）を少量含む。しまりややあり。粘性あり。
5　黄褐色土　礫（Ø40cm 以下）を多量に含む。しまりなし。粘性なし。
6　褐 色 土　黒褐色土層（4 層）をブロック状（Ø10cm 以下　）に含む。

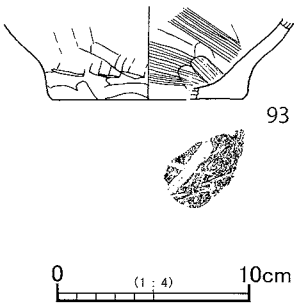
0　(1：40)　1m



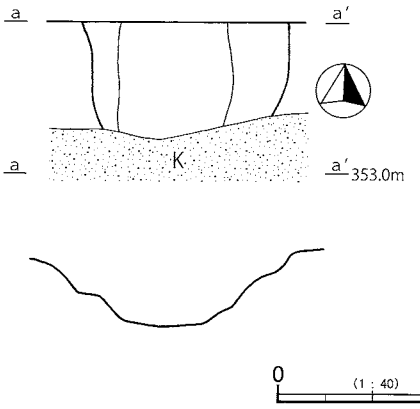
第19図　SK4

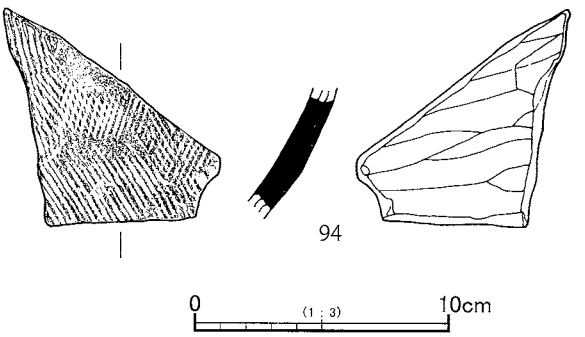
SK5



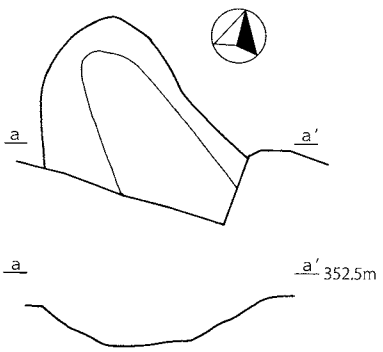


SK6

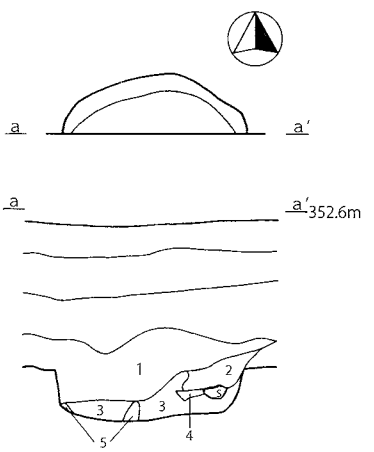




SK7



SK8



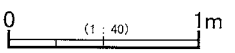
1 暗褐色土　礫（Ø10cm 以下）を含む。粘土粒（Ø5mm 以下）と明黄褐色粒（Ø1mm 大）を多量に含み、焼土粒（Ø5mm 以下）を少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。

2 暗褐色土　礫（Ø1cm 以下）が少量混じる。粘土粒（Ø5mm以下）と明黄褐色粒（Ø1mm 大）を多量に含み、焼土粒（Ø5mm 以下）を少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。

3 黒褐色土　礫（Ø3cm 大）が若干混じる。炭化物粒（Ø2mm以下）を多量に含む。しまりはあまりない。粘性ややあり。

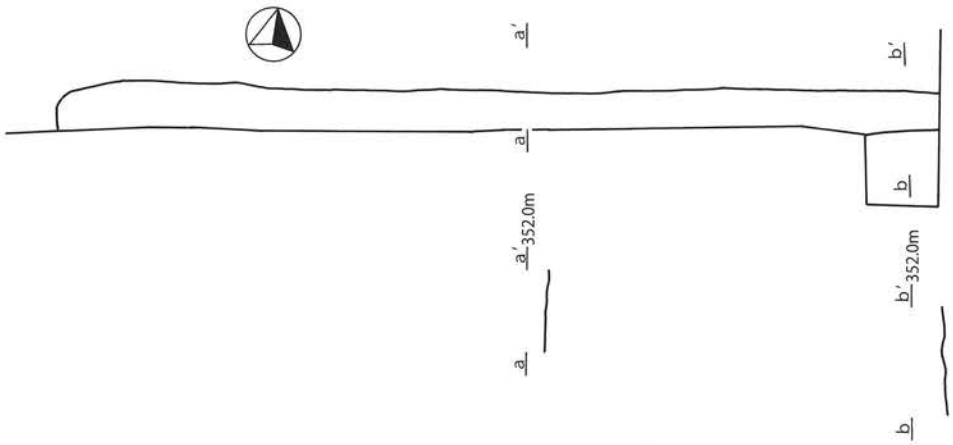
4 暗褐色土　礫（Ø2cm大）が少量混じる。しまりはあまりない。粘性あり。

5 黄褐色土　ブロック状。しまりなし。粘性はあまりない。

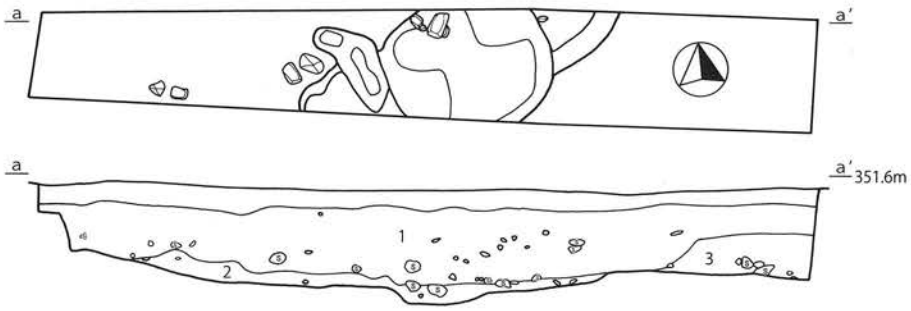


第20図　SK5～8

道路状遺構

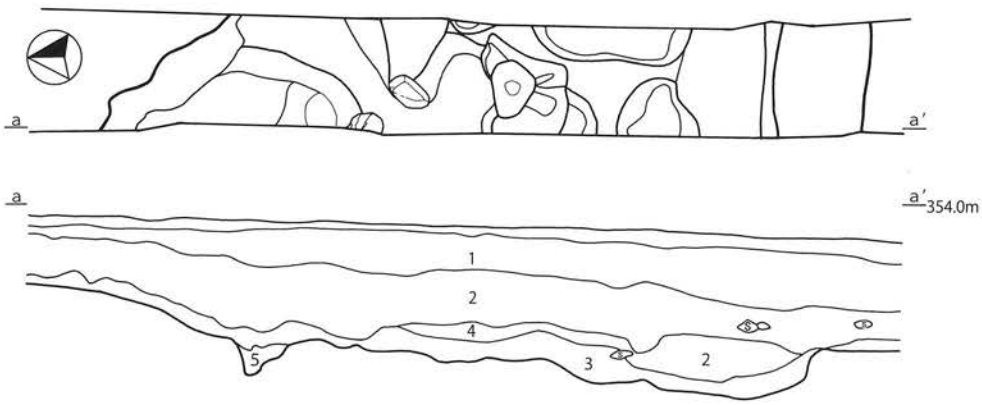


SX1

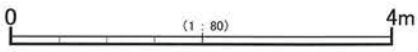


1　黒褐色土　礫（Ø15cm 以下）が混じる。しまりあり。粘性ややあり。
2　暗褐色土　礫（Ø20cm 以下）が混じる。褐色ブロック（Ø10cm 大）しまりあり。粘性あり。
3　黒褐色土　礫（Ø15cm 以下）が混じる。酸化鉄粒（Ø5mm 大）を若干含む。しまりあり。粘性あり。

SX2

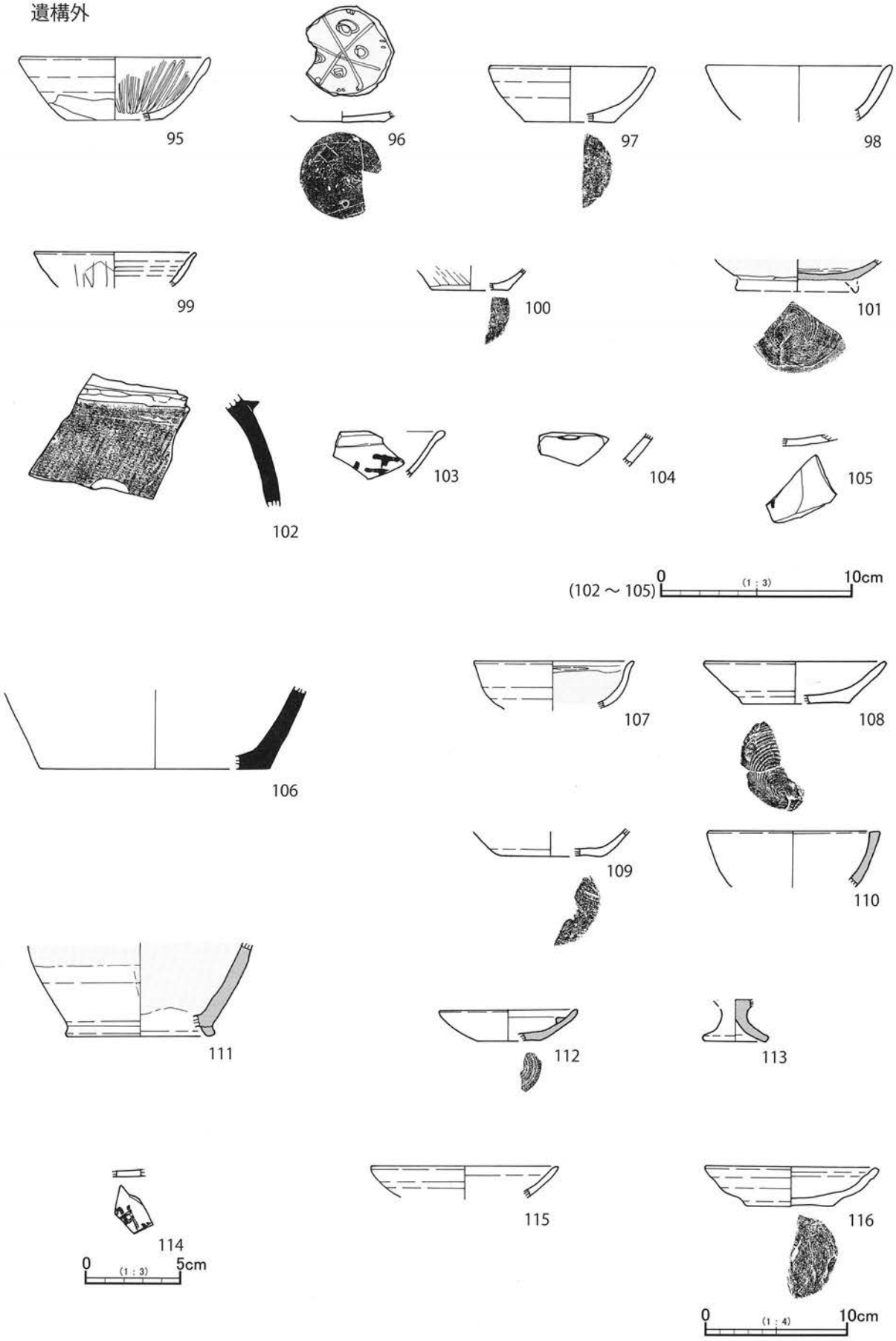


1　暗褐色土　褐色粒（Ø2cm 大）を若干含む。しまりあり。粘性ややあり。
2　暗褐色土　褐色粒（Ø1cm 大）を少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
3　黒褐色土　黒褐色粘土ブロック、褐色ブロックを含む。しまりややあり。粘性あり。
4　暗褐色土　褐色ブロック（10YR4/6、Ø2cm 大）を若干含む。粘性が強い。
5　暗褐色土　黄褐色ブロック（Ø3cm 大）を若干含む。しまりややあり。粘性ややあり。



第21図　道路状遺構SX1・2

遺構外


95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
(102～105)
0
(1：3)
10cm
106
107
108
109
110
111
112
113
114
0
(1：3)
5cm
115
116
0
(1：4)
10cm

第22図　遺構外

土製品・転用品

117　118　119

(117 ～ 119) 0 (1 : 3) 10cm

金属製品

120　121　122　125

123　124

(125) 0 (1 : 3) 5cm

(120 ～ 124) 0 (1 : 2) 5cm

瓦

126

石製品

127　128

0 (1 : 3) 5cm

(126・128) 0 (1 : 4) 10cm

第23図　土製品・転用品・金属製品・瓦・石製品

表２　車地蔵遺跡支線６号地区　トレンチ一覧

位　置	遺構名
1Tr	SI1 ～ 4・6・10、SK1・2・8・9
1Tr(E)	遺構なし
2Tr(W)	道路跡
3T r (E)	SK3・6
3Tr(W)	SI5、SK5・7
4Tr	SX2
5Tr	SX1
6Tr (N)	SI9、 SK4
6Tr (S)	遺構なし
7Tr	SI8
8Tr	遺構なし
9Tr	遺構なし
10Tr	遺構なし
11Tr	遺構なし
12Tr	遺構なし
13Tr	遺構なし
14Tr	遺構なし
15Tr	遺構なし
16Tr	遺構なし
17Tr	遺構なし

表３　車地蔵遺跡支線６号地区　遺構一覧

遺構名	位　置	時　期
SI1	1Tr	10C 後半～ 11C
SI2	1Tr	11C 頃
SI3	1Tr	11C 前半～中頃
SI4	1Tr	11C 後半頃
SI5	3Tr(W)	10C 後半頃
SI6	1Tr	11C 後半頃
SI8	7Tr	11C 後半頃
SI9	6Tr	8C 中頃
SI10	1Tr	10C 前半頃
SK1	1Tr	不明
SK2	1Tr	11C 代以降
SK3	3T(E)	11C 前半頃
SK4	6Tr (N)	中世
SK5	3Tr(W)	9 ～ 10C 頃
SK6	3T(E)	9 ～ 10C 頃
SK7	3Tr(W)	不明
SK8	1Tr	不明
SK9	1Tr	不明
SX1	5Tr	不明
SX2	4Tr	不明
道路跡	2Tr	不明

表４　車地蔵遺跡支線６号地区　遺物観察表

図	番号	遺　構	種　別	器　種	口径 (cm) 器高 (cm) 底径 (cm)	焼成	胎　土	整　形　技　法	色　調	備　考
9	1	SI1	須恵器	蓋	(17.0) - -	良	密、白	(外) ロクロナデ、回転ヘラ削り (内) ロクロナデ	灰オリーブ	表土出土
9	2	SI1	土師器	皿	(13.6) (1.7) -	良	密、赤	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、同心円状暗文 (底) ヘラ削り	橙色	
9	3	SI1	灰釉陶器	埦	14.0 6.0 6.8	良	緻密	(外) ロクロナデ、施釉・ふき取りか (内) ロクロナデ、全面施釉 (底) 回転糸切痕	灰白色	歪みがあり 外面施釉は粗い
9	4	SI1	灰釉陶器	埦	(15.0) (5.9) (8.0)	良	緻密	(外) ロクロナデ、施釉 (内) ロクロナデ、施釉 (底) 回転糸切痕	灰白色	つけがけ，内面見込み部無釉 転用痕あり 口縁付着物（漆か）
9	5	SI 1	灰釉陶器	埦	(14.8) - -	良	緻密、白・黒	(外) ロクロナデ、施釉 (内) ロクロナデ、施釉	灰白色	
9	6	SI1	土師器	脚高高台坏	- - -	良	密、赤	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	浅黄橙色	外面及び底面がやや黒変 灯明痕、二次利用か
9	7	SI1	土師器	甕	(30.0) - -	良	密、白・黒	(外) 指頭痕、ナデ (内) ハケメ、ナデ	橙色	
10	8	SI2	土師器	坏	(10.2) (3.3) (4.5)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	橙色	
10	9	SI2	土師器	坏	(13.2) (7.0) (4.0)	良	密、赤・白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	鈍黄色	
10	10	SI2	土師器	坏	(11.2) - -	良	密、赤・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	内面黒変、灯明痕か
10	11	SI2	土師器	高台付坏	(11.6) (5.5) (6.6)	良	密、白・黒	(外) ロクロナデ、ミガキ、紋様状暗文 (内) ロクロナデ、ミガキ、内黒、紋様状暗文 (底) 回転糸切痕、付高台	橙色	内面黒色処理 内面見込み部が強く黒変 灯明痕か
10	12	SI2	土師器	高台付坏	(11.6) - -	良	密、赤・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	高台部欠 内面やや黒変、 灯明痕か？
10	13	SI2	土師器	高台付坏	- - 6.6	良	密、赤・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ	橙色	内面灯明痕、 外面・底部の一部が黒変
10	14	SI2	灰釉陶器	埦	(16.4) - -	良	緻密・黒	(外) ロクロナデ、施釉　(内) ロクロナデ、施釉	灰白色	内面体部下半は無釉 刷毛塗りか
10	15	SI2	土師器	羽釜	(28.2) - -	良	密、白・金	(外) ナデ、ハケメ (内) ナデ	橙色	
12	16	SI3	土師器	坏	11.6 3.1 5.9	やや不良	やや粗、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 磨滅・回転糸切痕か	鈍黄橙色	灯明痕 被熱により全面的に劣化
12	17	SI3	土師器	坏	(11.2) (3.1) 5.8	良	密、赤・黒	(外) ナデ (内) ナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	橙色	
12	18	SI3	土師器	坏	(11.0) (2.8) (4.8)	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	全体的に劣化 底部はほぼ磨滅
12	19	SI3	土師器	坏	(12.6) - -	良	密、赤・白・金	(外) ナデ (内) ナデ	橙色	内・外面の一部が黒変 灯明痕か
12	20	SI3	土師器	坏	- - (6.6)	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	
12	21	SI3	緑釉陶器	皿	- - (7.8)	良	緻密、白	(外) ロクロナデ、施釉 (内) ロクロナデ、施釉 (底) 付高台、施釉	灰オリーブ色	全面施釉
12	22	SI3	灰釉陶器	埦	(12.0) - -	良	緻密、黒	(外) ロクロナデ、施釉 (内) ロクロナデ、施釉	灰色	施釉後、外面ふき取りか
12	23	SI3	土師器	脚高高台坏	- - -	良	密、白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ、付高台	橙色	
12	24	SI3	土師器	脚高高台坏	- - -	良	密、赤・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ、付高台	橙色	

図	番号	遺構	種別	器種	口径 (cm) 器高 (cm) 底径 (cm)	焼成	胎土	整形技法	色調	備考
12	25	SI3	土師器	甕	(26.6) - -	良	密、赤・白・金	(外) ナデ、ハケメ、指頭痕 (内) ナデ、ハケメ、指頭痕	明赤褐色	
12	26	SI3	土師器	鉢	(31.2) - -	良	密、赤・白・金	(外) ナデ、ハケメ、指頭痕 (内) ナデ、ハケメ、指頭痕	明赤褐色	外面が若干煤けている
12	27	SI3	土師器	甕	(28.6) - -	良	密、赤・白・金	(外) ナデ、ハケメ、指頭痕 (内) ナデ、ハケメ	明赤褐色	
12	28	SI3	土師器	甕	- - 8.6	良	密、赤・白・金	(外) ナデ (内) ナデ (底) 木葉痕	鈍褐色	内面が若干煤けている
12	29	SI3	土師器	羽釜	(26.2) - -	良	やや粗、白・金	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ナデ、ヘラナデ	橙色	
12	30	SI3	土師器	羽釜	(22.8) - -	良	密、赤・白・金	(外) ハケメ、指頭痕、ナデ (内) 指頭痕	明赤褐色	内面劣化 外面が若干煤けている
12	31	SI3	土師器	羽釜	(29.0) - -	良	密、白・黒・金	(外) ハケメ、指頭痕、ナデ (内) ハケメ、指頭痕	明赤褐色	外面が煤けている
12	32	SI4	土師器	坏	(12.4) (3.7) 5.6	良	密、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	橙色	
12	33	SI4	灰釉陶器	埦	(15.0) (6.1) (7.4)	良	緻密、白	(外) ロクロナデ、施釉 (内) ロクロナデ、施釉 (底) ナデ、付高台、無釉	灰白色	つけがけ 内面見込み部無釉 転用痕
12	34	SI4	土師器	脚高高台坏	- - -	良	密、赤・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ナデ、付高台	橙色	内面一部黒変 外面及び底面がやや煤けている
14	35	SI5	土師器	皿	(11.5) (2.4) 3.6	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) ヘラ削り	明赤褐色	歪みあり 黒斑あり
14	36	SI5	土師器	坏	12.6 2.4 6.8	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	褐色	歪みあり 全体的にやや黒変
14	37	SI5	土師器	坏	(12.2) (2.6) 5.0	良	やや粗、赤・白・小礫	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	明褐色	
14	38	SI5	土師器	坏	(14.0) (3.0) (7.8)	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	鈍褐色	歪みあり 全体的にやや黒変
14	39	SI5	土師器	坏	(13.0) (3.0) (6.8)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	外面の大半が黒変 内面は部分的に煤けている
14	40	SI5	土師器	坏	(14.6) (3.8) 6.6	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	(内) 橙色 (外) 鈍黄褐色	黒斑あり 全体的にやや煤けている
14	41	SI5	土師器	坏	15.3 4.3 6.7	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	明褐色	黒斑あり 底部 2 度切、成形時の補修か 全体的にやや煤けている
14	42	SI5	土師器	坏	13.9 3.7 6.8	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	黒斑あり 全体的にやや煤けている
14	43	SI5	土師器	坏	13.6 3.6 6.5	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	黒斑あり 外面口縁の一部が黒変 全体的にやや煤けている
14	44	SI5	土師器	坏	13.6 3.8 6.7	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	明褐色	歪みあり
14	45	SI5	土師器	坏	(15.5) - -	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、内黒	橙色	黒斑あり 内面黒色処理
14	46	SI5	土師器	坏？	- - (5.8)	良	密、赤・白・	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	橙色	
14	47	SI5	土師器	坏	- - (6.0)	やや不良	密、赤・白・	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	橙色	黒斑あり
14	48	SI5	土師器	坏	- - (6.8)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、内黒 (底) 回転糸切痕	橙色	内面黒色処理
14	49	SI5	灰釉陶器	埦	- - 7.6	良	緻密・白	(外) ロクロナデ、回転ヘラ削り、施釉 (内) ロクロナデ、施釉 (底) 付高台、静止糸切り	灰白色	刷毛塗りか 内面見込み部に転用痕あり 打ち掻きか
14	50	SI5	土師器	坏	- (4.7) -	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ナデ	明褐色	片口 外面黒変、被熱
14	51	SI5	土師器	坏	- - -	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) 線刻、内黒	褐色	線刻 内面黒色処理
15	52	SI6	土師器	蓋	(14.6) - -	良	緻密、赤・白	(外) ロクロナデ、ヘラ削り、暗文 (内) ロクロナデ	橙色	かえりは弱く、端部がやや角張る 内面が若干煤けている
15	53	SI6	土師器	坏	- - (10.4)	良	緻密、赤・白	(外) ロクロナデ、暗文 (内) ロクロナデ、暗文 (底) ヘラ削り	橙色	体部暗文（またはミガキ）は外面縦位、内面横位

図	番号	遺構	種別	器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	焼成	胎土	整形技法	色調	備考
15	54	SI6	土師器	坏	10.9 2.9 5.6	良	粗、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	鈍黄橙色	全体的に劣化している
15	55	SI6	土師器	坏	10.2 3.1 3.7	良	密、白・赤	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	歪みあり 底部が若干柱状をなす
15	56	SI6	土師器	坏	(12.5) (3.5) 5.4	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	体部外面一部黒変 全体的に劣化している
15	57	SI6	土師器	坏	- - 4..1	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	(内) 鈍黄橙色 (外) 明褐色	
15	58	SI6	土師器	坏	- - 5.6	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	内面が若干煤けている 灯明痕か
15	59	SI6	土師器	坏	- - (8.2)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	
15	60	SI6	土師器	甕	- - (8.0)	良	粗、赤・白・黒	(外) ハケメ (内) ハケメ、ナデ (底) 木葉痕	明赤褐色	劣化著しい
15	61	SI8	土師器	坏	(14.0) (3.6) 5.6	良	密、赤・白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	内・外面の一部が黒変 灯明痕か 全体的に劣化している
15	62	SI8	瓦質土器	シキワ	(39.0) (9.6) (36.0)	良	密、赤	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ	橙色	黒変　敷輪（シキワ） 七輪の上に載せて使う 大正期か
15	63	SI8	瓦質土器	シキワ	(14.6) - -	良	密、赤・白・金	(外) ナデ (内) ロクロナデ	明赤褐色	黒変　敷輪（シキワ） 七輪の上に載せて使う 大正期か
17	64	SI9	須恵器	坏	(15.2) (3.7) (11.4)	良	密、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、回転ヘラ削り、付高台	灰白色	盤状、角高台 高台より底部が僅かに突出
17	65	SI9	須恵器	坏	- - (5.6)	不良	やや粗、赤・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ナデ	灰白色	焼成不良による劣化
17	66	SI9	土師器	皿	(11.6) (2.4) (6.6)	良	密、金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	黒褐色	全面黒変 内面口縁に付着物 灯明痕か
17	67	SI9	土師器	小甕	- - (5.8)	良	密、赤・白・金	(外) ナデ、指頭痕 (内) 指ナデ (底) ナデ	橙色	手づくねか
17	68	SI9	土師器	柱状高台坏	- - (5.0)	やや不良	やや粗、赤・白	(外) ナデ (内) ナデ (底) ナデ	橙色	
17	69	SI9	土師器	甕	- - -	良	密、白	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ナデ	赤褐色	内面剥離、被熱による劣化か
17	70	SI10	土師器	坏	12.4 3.3 5.4	良	密、白・赤・黒	(外) ヘラ削り、墨書『□』田か？ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、ヘラ削り	橙色	底部黒変、灯明痕か 内面見込み部及び 口縁が煤けている
17	71	SI10	土師器	坏	(11.9) (4.6) (4.2)	良	密、白・赤・黒	(外) ヘラ削り、墨書『□』 (内) ロクロナデ (底) ヘラ削り	鈍橙色	
17	72	SI10	土師器	坏	14.7 5.4 5.2	良	やや密、白・黒・金	(外) ヘラ削り (内) ロクロナデ、内黒 (底) 回転糸切痕、ヘラ削り	橙色	内面黒色処理
17	73	SI10	土師器	坏	(14.2) - -	良	密、赤・金	(外) ヘラ削り (内) ロクロナデ、内黒	明赤褐色	
17	74	SI10	土師器	坏	(12.0) - -	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ	橙色	黒斑あり
17	75	SI10	土師器	坏	(12.6) - -	良	密、金・白	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ	橙色	
17	76	SI10	土師器	坏	(10.4) - -	良	密、赤・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	内面口縁にスス付着 外面の一部が黒変 灯明痕
17	77	SI10	土師器	坏	- - (5.0)	良	密、赤・金	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、ヘラ削り	明赤褐色	
17	78	SI10	土師器	坏	- - (4.4)	良	密、黒・金	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、ヘラ削り	橙色	
17	79	SI10	土師器	坏	- - -	良	密、白・赤	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、墨痕または墨書	橙色	
17	80	SI10	土師器	甕	- - (9.6)	良	密、白・赤・金	(外) ハケメ、指頭痕 (内) ハケメ、指頭痕 (底) 木葉痕	明赤褐色	内・外面がやや黒変
18	81	SK3	土師器	坏	(11.6) (2.3) (6.4)	良	密、赤・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	
18	82	SK3	土師器	坏	- - (7.0)	良	密、赤・白・金	(外) ナデ (内) ナデ (底) 回転糸切痕、穿孔か	橙色	底部中央に穿孔か？
18	83	SK3	土師器	甕	(29..4) - -	良	密、赤・白・黒	(外) ハケメ、指頭痕、指ナデ (内) ハケメ、指頭痕、指ナデ	橙色	内面がやや黒変

図	番号	遺構	種別	器種	口径 (cm) 器高 (cm) 底径 (cm)	焼成	胎土	整形技法	色調	備考
18	84	SK3	土師器	羽釜	(22.2) - -	良	密、赤・白・金	(外) ハケメ、指ナデ	明赤褐色	
19	85	SK4	土師質土器	小皿	(13.0) - -	良	密、黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	浅黄橙色	1512 末～ 1612 前半頃か
19	86	SK4	土師器	坏	- - (7.0)	良	密、白・赤	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	外面一部赤色、 焼成時の焼きムラか
19	87	SK4	土師器	坏	- - (7.0)	良	密、赤・白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	
19	88	SK4	土師器	坏	- - (5.0)	良	密、赤・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	灰黄褐色	
19	89	SK4	陶器	埦	(12.4) - -	良	密、赤	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	
19	90	SK4	青磁	埦	- - -	良	密、白	(外) 施釉、陰刻か (内) 施釉	緑色	龍泉窯か 1512 頃
19	91	SK4	須恵器	壺か	(16.9) - -	良	密、白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	灰色	
19	92	SK4	須恵器	坏	- - (7.0)	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ、火襷 (内) ロクロナデ、火襷 (底) 回転糸切痕	灰色	内面見込み部に転用痕あり
20	93	SK5	土師器	甕	- - (10.5)	良	密、白・赤・金	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ (底) 木葉痕、工具痕か	橙色	
20	94	SK6	須恵器	甕	- - -	良	密、白・赤	(外) タタキ目 (内) ヘラナデか	灰黄色	外面及び内面が磨滅している 転用痕か
22	95	1 Tr	土師器	坏	(13.6) (4.5) (6.6)	良	密、白・赤・黒・金	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ、暗文 (底) ヘラ削り	明赤褐色	
22	96	1 Tr	土師器	坏	- - 6.0	良	密、白・赤・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、暗文、内黒 (底) 回転糸切痕、ヘラ削り	橙色	見込み部に暗文状ヘラ描き
22	97	1 Tr	土師器	坏	(11.8) (4.0) (6.4)	良	密、白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 磨滅・回転糸切痕か	明赤褐色	底部劣化が著しい 外面がやや煤けている
22	98	1 Tr	土師器	坏	(13.2) - -	良	密、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	外面黒変
22	99	1Tr	土師器	坏	(11.6) - -	良	密、赤・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り、線刻 (内) ロクロナデ、暗文	橙色	体部外面に 5 条の線刻あり
22	100	1Tr	土師器	坏	- - (5.6)	良	密、赤・黒・金	(外) ロクロナデ、ヘラ削り、線刻か (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、指頭痕	橙色	
22	101	1 Tr	灰釉陶器	埦	- - (8.6)	良	緻密、白・金	(外) ロクロナデ、回転ヘラ削り (内) ロクロナデ、施釉 (底) 回転糸切痕、	灰黄色	付け高台欠落 見込み部無釉 擦痕あり、転用硯か
22	102	1 Tr	須恵器	壺	- - -	良	密、白・黒	(外) タタキ目、突帯 (内) ナデ、ヘラナデ	灰色	
22	103	1Tr	土師器	坏	- - -	良	密、赤・黒	(外) ロクロナデ、墨書『□』 (内) ロクロナデ	橙色	体部外面に墨書あり
22	104	1Tr	土師器	坏	- - -	良	密、赤	(外) ロクロナデ、墨書『□』 (内) ロクロナデ	橙色	体部外面に墨書
22	105	1Tr	土師器	皿	- - -	良	密、赤・黒	(外) ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) ヘラ削り、墨書『□』	橙色	底部外面に墨書
22	106	2Tr	須恵器	壺	- - (16.4)	良	密、白	(外) 回転ヘラ削り (内) ナデ、指ナデ (底) 磨滅	灰色	
22	107	3Tr	土師器	坏	(11.4) - -	良	密、白・赤	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、ミガキ、内黒	明赤褐色	内面黒色
22	108	3Tr	土師器	坏	(12.9) (3.0) (7.6)	良	密、白・赤	(外) ナデ (内) ナデ (底) 回転糸切痕	明赤褐色	底部がやや黒変
22	109	3Tr	土師器	坏	- - (7.0)	良	やや粗、白・金	(外) ナデ (内) ナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	明赤褐色	
22	110	3Tr	陶器	埦	(12.2) - -	良	密、白	(外) ロクロナデ、施釉 (内) ロクロナデ、施釉	浅黄色	近代か
22	111	5Tr	灰釉陶器	壺	- - (10.6)	良	緻密、白	(外) 回転ヘラ削り、施釉 (内) ロクロナデ (底) 付高台か	灰黄色	
22	112	6Tr	陶器	灯明皿	(9.9) (2.2) (4.4)	良	緻密	(外) ロクロナデ、施釉 (内) ロクロナデ、施釉 (底) 回転糸切痕	褐色	近世
22	113	6Tr	陶器	仏飯具	- - 4.6	良	密、白	(外) ロクロナデ、施釉 (内) ロクロナデ、施釉 (底) ナデ	灰白色	表面劣化 近世か
22	114	10Tr	土師器	坏	- - -			(内) ロクロナデ (底) ヘラ削り、墨書『□』	橙色	
22	115	13Tr	土師質土器	皿	(13.4) - -	良	密、白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	浅黄橙色	かわらけ
22	116	16Tr	土師器	皿	(12.4) (2.7) (6.8)	良	密、白・赤・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	鈍橙色	外面一部黒変

図	番号	遺構	種別	器種	口径 (cm) 器高 (cm) 底径 (cm)	焼成	胎土	整形技法	色調	備考
23	117	SI1	土師器	高杯か	- - (7.6)	良	密、赤・白	(外) ヘラナデ、ナデ (内) ナデ (底) 指頭痕、ナデ	明褐色	てづくねか

表5　車地蔵遺跡支線6号地区　瓦　観察表

図	番号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	製作技法	色調	備考
23	126	SI3	平瓦	1160.0	20.4	15.3	3.0	(凸面) 縄叩き目 (凹面) 布目痕、ヘラ削り	橙色密、赤・白・小礫	

表6　車地蔵遺跡支線6号地区　土製品等　観察表

図	番号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	製作技法	色調	備考
23	118	SI3	土製円盤	23.96	4.9	4.3	1.1	(外) ナデ　(内) ナデ		断面が磨滅している 工具等に利用か
23	119	SI6	転用硯	29.36	6.6	4.1	0.7	(外) タタキ目　(内) 当て具痕、ナデ		内外面擦痕、磨滅 周辺打ち掻き、転用硯か

表7　車地蔵遺跡支線6号地区　石製品等　観察表

図	番号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	石質	備考
23	127	5Tr	-	39.49	5.2	2.4	2.9	石英	
23	128	SK4	石臼	8540	30.1	17.3	12.9	安山岩	

表8　車地蔵遺跡支線6号地区　金製品等　観察表

図	番号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	材質	備考
23	120	6Tr	釘	4.91	縦 3.8	1.0	0.7		
23	121	6Tr	釘	46.49	(15.6)	1.9	1.0		
23	122	SI10	不明	53.82	2.7	8.1	0.9		塩か？
23	123	16Tr	不明	4.63	2.6	2.3	0.5		
23	124	SI10	不明	5.14	2.9	3.6	0.3		
23	125	SI4	鉄滓	63.23	5.8	4.3	2.0		

PL 1　車地蔵遺跡　支線6号地区

SI1　東から

SI1 カマド　東から

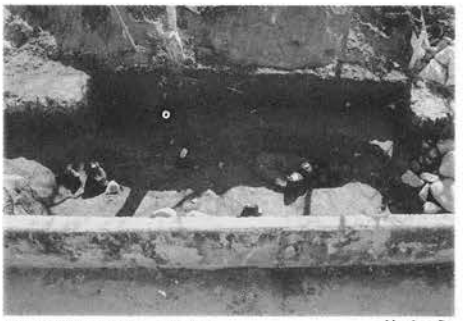
SI2・3　北西から

SI3 カマド　北西から

SI2・3 完掘状況　北西から

SI4　東から

SI5　北から


SI5 遺物出土状況　北から

SI5 カマド　西から

SI5 粘土　北から

PL2　車地蔵遺跡　支線6号地区

SI6　西から

SI8　東から

SI9　南から

SI9 カマド　南から

SI10　西から

SK1　東から

SK3　北西から

SK3　北から

SK3　北西から

SK3 完掘状況　北西から

PL3　車地蔵遺跡　支線6号地区

SK4　西から

SK4　西から

1Tr　東から

1Tr　西から

3Tr　西から

2Tr(E)　東から

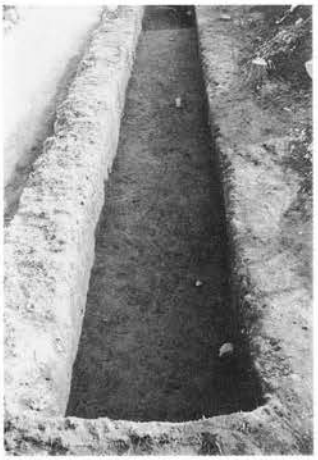
3Tr　西から

2Tr(W)　東から

2Tr(W)　西から

3Tr　東から

PL4　車地蔵遺跡　支線6号地区


4Tr　北から

4Tr　北から

4Tr　北から

5Tr　東から

1Tr　北から

6Tr(S)　北から

8Tr　北西から

8Tr　南西から

9Tr　北から

10Tr　北から

11Tr　北東から

12Tr　南から

13Tr　北から

14Tr　南から

15Tr　南から

16Tr　南から

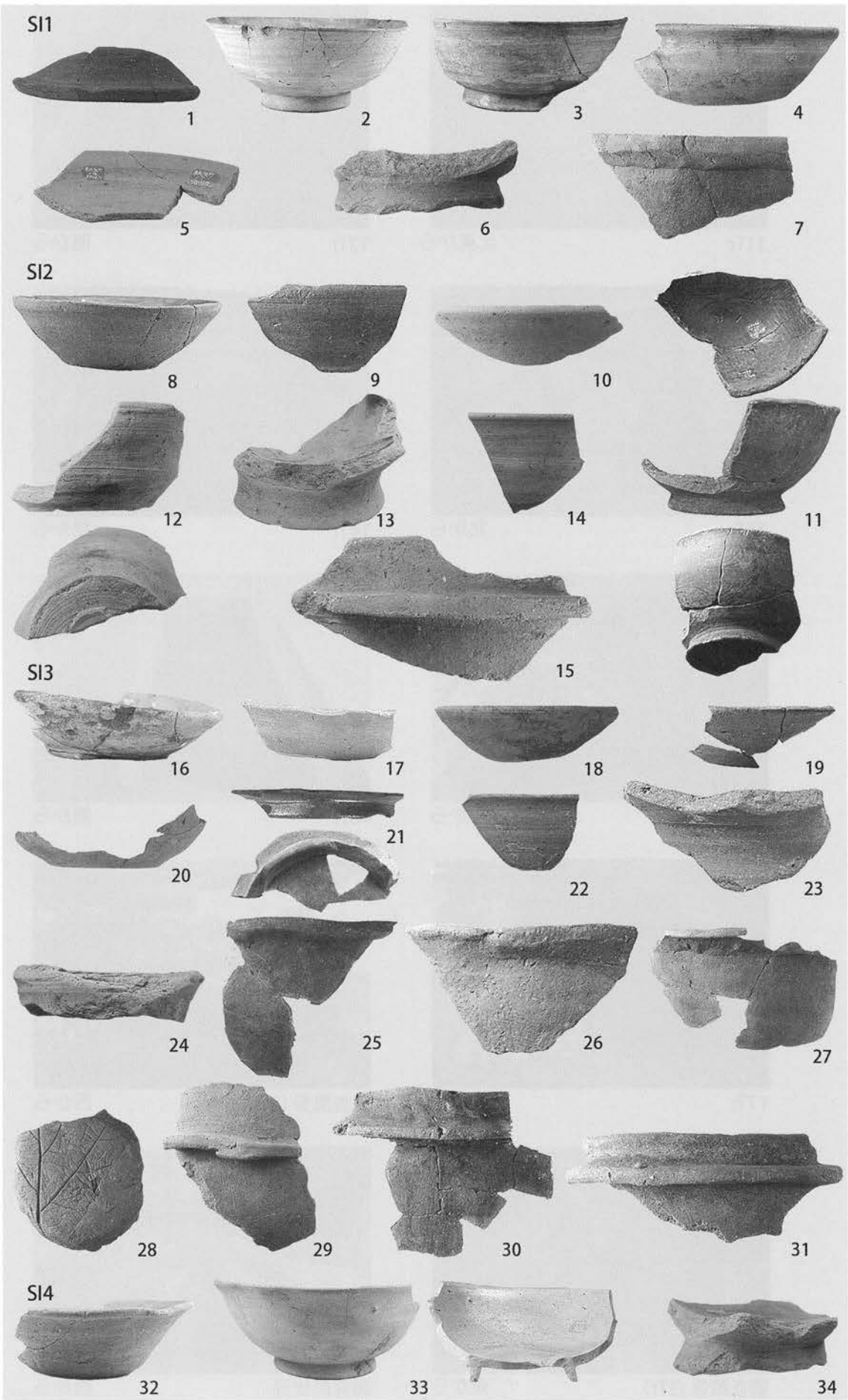
17Tr　北から

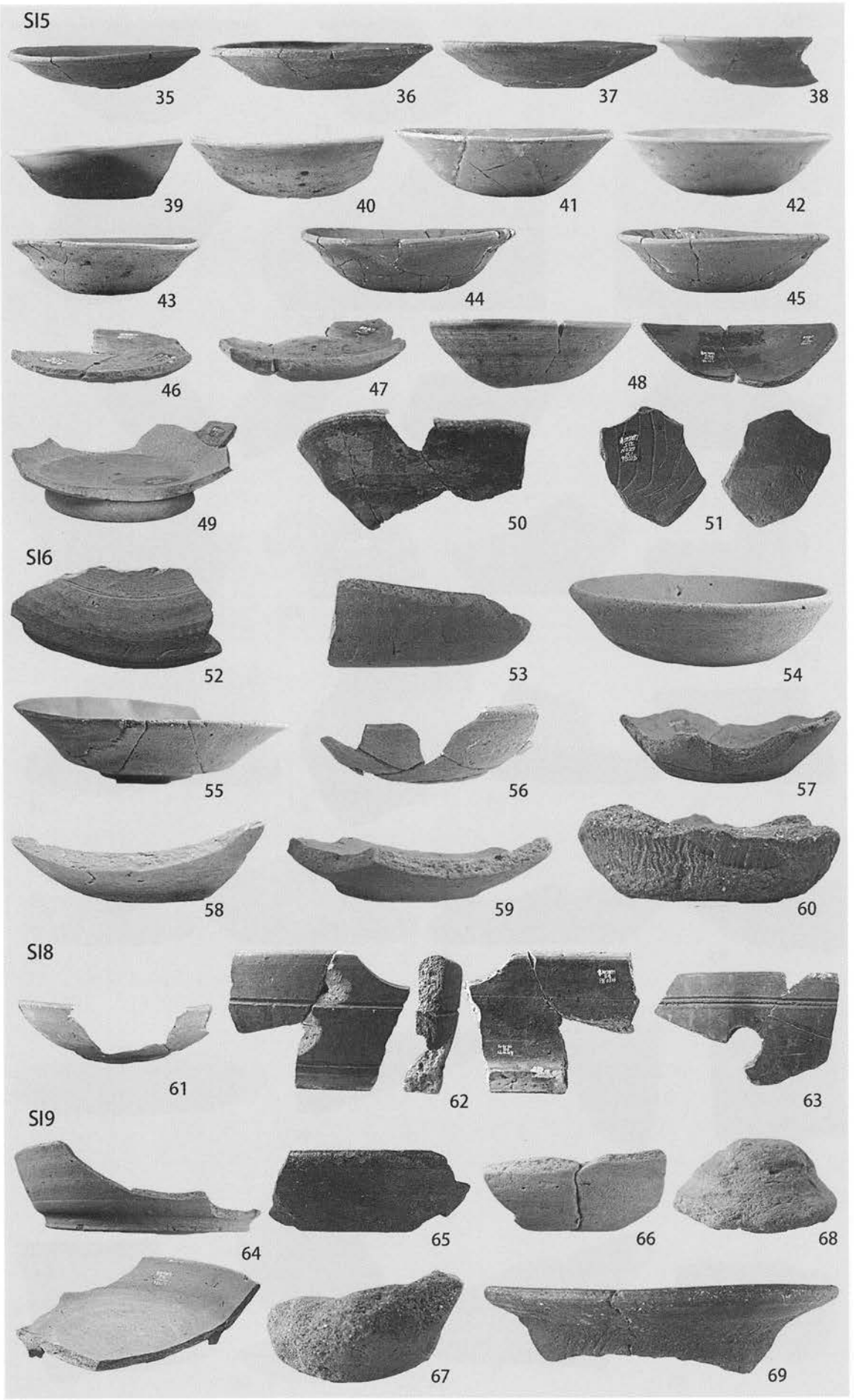
調査風景 (2Tr)　西から

調査風景 (3Tr)　東から

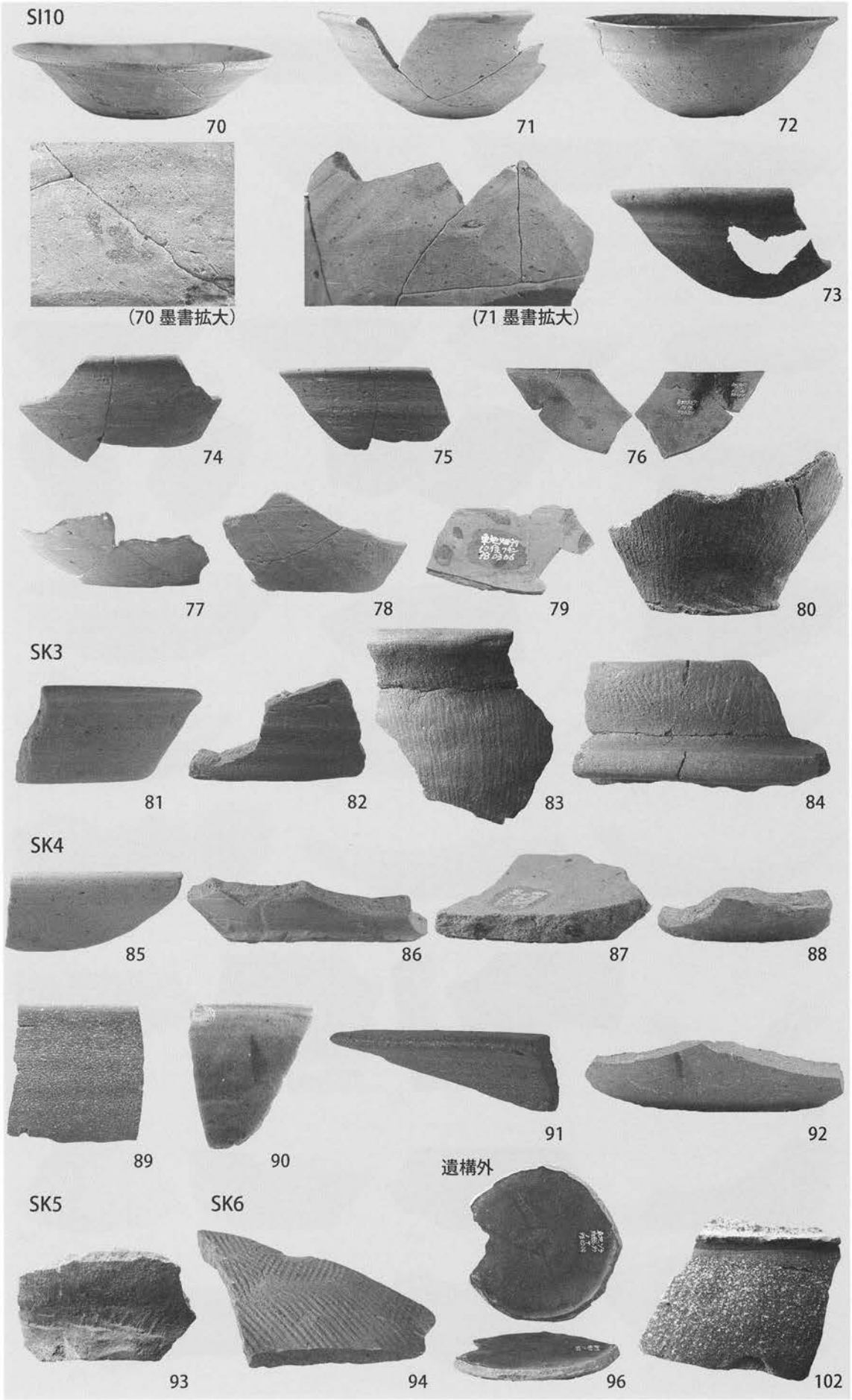
調査前状況　西から

PL 6 車地蔵遺跡 支線6号地区



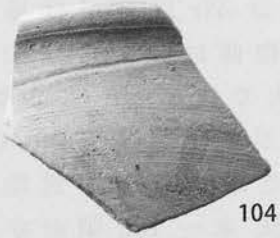

SI5
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
SI6
52
53
54
55
56
57
58
59
60
SI8
61
62
63
SI9
64
65
66
68
67
69

PL 8 車地蔵遺跡 支線6号地区



PL9　車地蔵遺跡　支線6号地区

遺構外・墨書土器


104

105

106

114

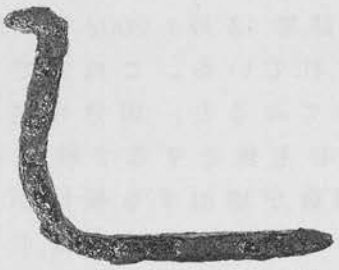
117

118

119

金属製品

120


121

122

125

123

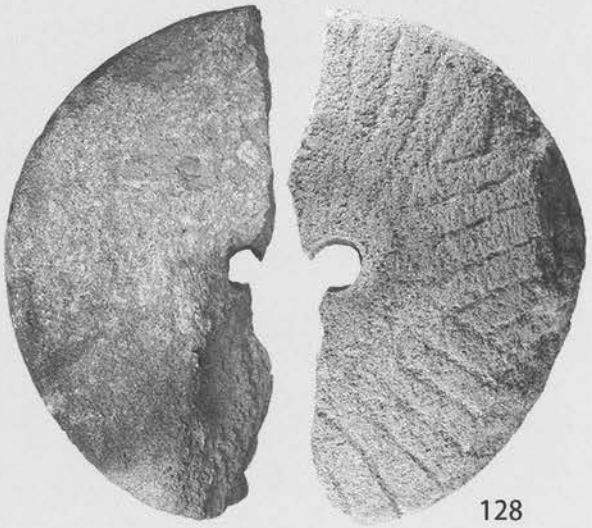
124

瓦

126

石製品

127


128

4．まとめ

調査の結果、住居跡9軒、土坑9基を発見した。遺構は4Tr以南では確認できなかったが、調査範囲が狭小であったため、分布の範囲については明確ではない。出土遺物からの年代観の順にまとめると、古代ではSI9が8C中頃、SK5･6が9～10C頃、SI10が10C前半頃、SI5が10C後半頃、SI1が10C後半～11C頃、SI3が11C前半～中頃、SI4･6･8が11C後半頃、SI2が11C頃であった。中世段階の明確な遺構は発見できなかったが、中世～近代では15C末～16C頃のかわらけや陶器が出土したSK4を検出した。その他、灯明皿・仏飯器・石臼などが出土した。また、報文中でも述べたが、大正期～戦後にかけての遺物と考えられる瓦質状土製品（シキワ）などが出土した。

車地蔵遺跡ではこれまでに、昭和49年の山梨県教育委員会による現国道20号部分（勝沼バイパス274･269･259地点）の調査をはじめ、一宮町教育委員会が実施したケーヨー地区、ケーヨー2次W・E区、向洋産業地区で発掘調査を行っている。一宮町教育委員会が調査実施した地区は、本調査区の隣接地にあたるが、残念ながらいずれも正式な報告書が刊行できていない。調査概要については、猪股善彦氏(「甲斐国分寺地域における集落構造と展開に関する若干の考察」『山梨県考古学協会誌第13号』2002等)が、住居跡98軒、掘立柱建物4棟を検出した旨が報告されている。これまでの調査成果から車地蔵遺跡における遺構の分布傾向をみてみると、国分寺創建期にあたる8C中頃から9C頃にかけてと、10～11C代を主体とする2時期を画期と推察できる。前者は集落の成立期、後者は遺構数が増加する傾向があり、集落の構造に何らかの変化があったことが考えられる。しかしながら、正規報告がされていないため詳細な分析ができず、想像の域をでない状況にある。今後の課題としては、まず国分寺周辺の発掘調査報告の早期刊行であり、その上で遺構の分布・変遷の分析を行い、掘立柱建物が存在する遺跡の性格についての検討や、集落の範囲的（位置的）単位での検討から、国分二寺との関連性を考えていきたい。

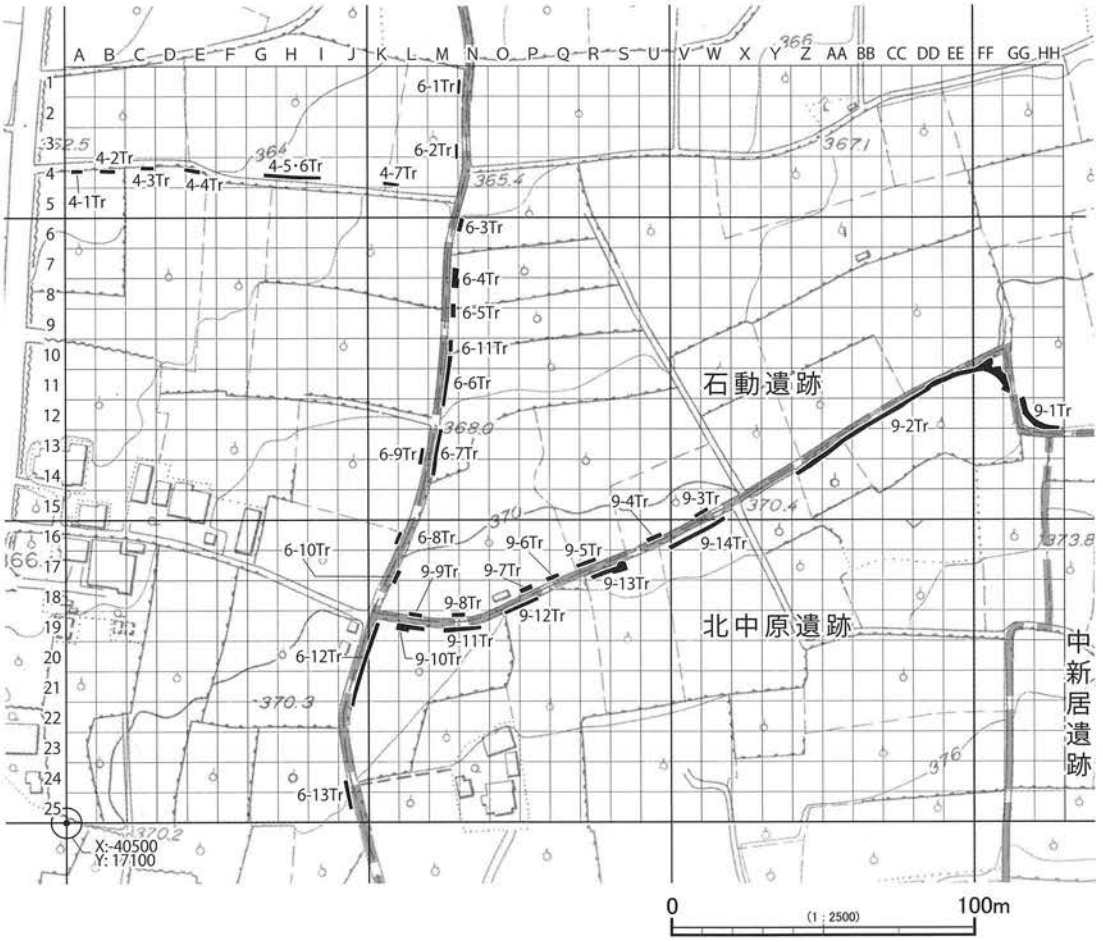
（望月）

第三章　石動遺跡支線4･6･9号地区、北中原遺跡（第3次）〔98年度調査区〕

Ⅰ．1998年度調査について

本調査は、石動遺跡及び北中原遺跡地内における畑地帯総合整備事業・一般農道支線4･6･9号建設に先立ち、平成10年(1998)度に一宮町教育委員会が実施した。調査は支線ごとに4号地区、支線6号地区、支線9号地区と区分し、工期と調整しながら順次進め、98年度調査全体では、奈良時代から中近世に至るまでの遺構を確認し、住居跡15軒、土坑6基、ピット4基、溝8条、石列3条、鋳造関連遺構等を検出した。本書では整理の都合上、調査当時に付番した番号は変更せずに報告した。トレンチ名については各地区の支線番号を付し、4-1～7Tr・6-1～13Tr・9-1～14Trとした。遺構名については略記を使用し、調査地区ごとにSI1・SK1～とした。

なお、支線9号線は、石動遺跡・北中原遺跡の境界にあたり、道路南側に設定したトレンチ分は、北中原遺跡(第3次)となる。本書中の北中原遺跡(第3次)に該当する部分については、同調査名を付して示した。また、各調査区については遺構一覧表(表12･17)・トレンチ一覧表(表11･16)をご参照の上、ご留意いただきたい。



第24図　トレンチ位置図

Ⅱ．支線4号地区

建設範囲の既存道路（東西約140m間）の拡幅部分に7箇所のトレンチを設定し、約46㎡を調査した。本書で報告するなかでは甲斐国分僧寺跡に最も近い位置にあたり、標高は約364mを測る。調査の結果、溝1条と瓦の出土を確認した。

1．調査トレンチ

4-1Tr A-4グリッド、既存道路の南側に位置する。東西約4m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深120cm掘削した。遺構は、東西方向の溝1条(SD1)を確認した。遺物はSD1以外では土師器坏(4)・甕(5)、陶器椀(6)・灰釉陶器壺(7)など、10C代の遺物が出土した。

4-2Tr B-4グリッド、既存道路の南側に位置する。東西約5m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深100cm掘削した。明確な遺構の痕跡は確認できなかったが、調査時の所見や出土遺物から、4-1・3Trで確認したSD1の延長部分の内であると推定した。遺物は土師器蓋(8・9)・坏(10～16)・高台付坏(20)、須恵器坏(17)・甕(18)など、8C後半～9C頃の遺物が出土した。なお、15は墨書土器で、欠損部により文字は判読できなかったが、底部に「□呂？」を確認した。その他、軒平瓦(26)・平瓦(27)・丸瓦(28)など国分寺に関連する遺物が出土した。

4-3Tr C-4グリッド、既存道路の南側に位置する。東西約4m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深110cmまで掘削した。遺構は、東西溝1条(SD1)を確認した。調査時の所見から、4-1Trより延長するSD1と推定しており、遺物は須恵器坏(21)・甕(22・23)、中世の鍋(24)が出土している。23の須恵器甕は、頸部に凸帯があり、群馬県等で確認されている頸部凸帯文付甕に類似する。

4-4Tr D・E-4グリッド、既存道路の東側に位置する。東西約5m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深100cmまで掘削した。礫が多く、明確な遺構はなかった。遺物は、灰釉陶器椀(25)が出土した。

4-5・6Tr G・H・I-4グリッド、既存道路の北側に位置する。トレンチ設定後に両端を拡張し、あわせて東西約19m、幅1.1mの範囲を調査した。地表面から最深45cmまで掘削したが、耕作による撹乱以外は確認できなかった。

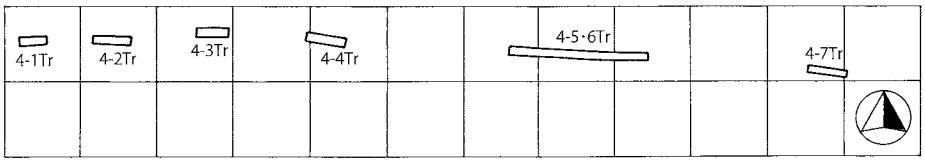
4-7Tr K・L-4グリッド、既存道路の北側に位置する。東西約5m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深45cm掘削した。遺構・遺物は確認できず、地山面には人頭大の礫が混在した。

2．発見した遺構・遺物

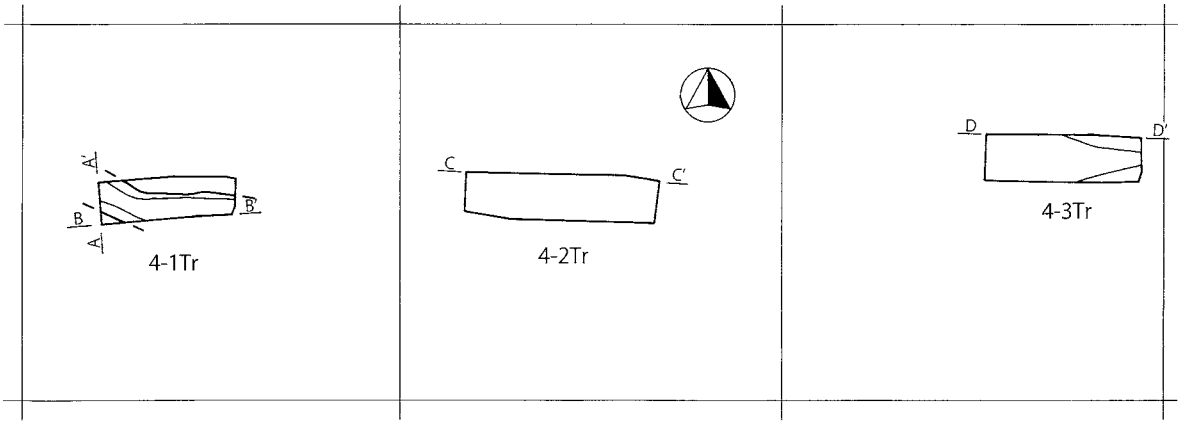
・SD1〔第25・26図〕

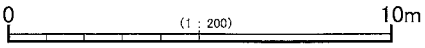
位置と検出状況 A～C-4グリッド、4-1Tr、4-2Tr(内部にあたると推定)、4-3Trで確認した。東西方向に延びる遺構と推定されるが、規模は不明である。

出土遺物 いずれも小片で時期差が認められるが、土師器坏(1～3)が出土した。1は内面見込み部まで暗文が施されている。2は暗文はなく、底部ヘラ削りしている。3は口縁部が玉縁状に肥厚している。また、溝内部と推定した4-2Trからは、墨書土器(15)や瓦(26～28)なども出土した。**遺構の時期** 出土遺物を考慮し、幅をもたせて8C末～9C頃としておく。

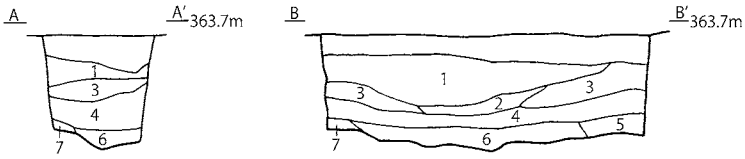


SD1



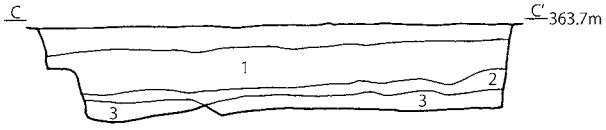


4-1Tr



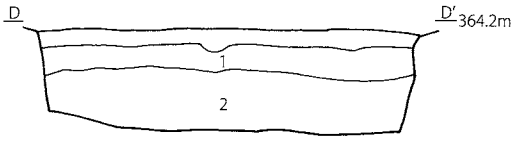
1　暗褐色土　しまりなし。
2　黒褐色土　しまりなし。
3　黒褐色土　ややしまりあり。
4　褐 色 土　ややしまりあり。
5　褐 色 土　黒色土を含む。
6　褐 色 土　黄色土を含む。
7　黄 色 土　砂質。

4-2Tr

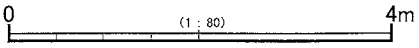


1　暗褐色土
2　褐 色 土　ややしまりあり。
3　褐 色 土　黄色土、黒色土粒を含む。

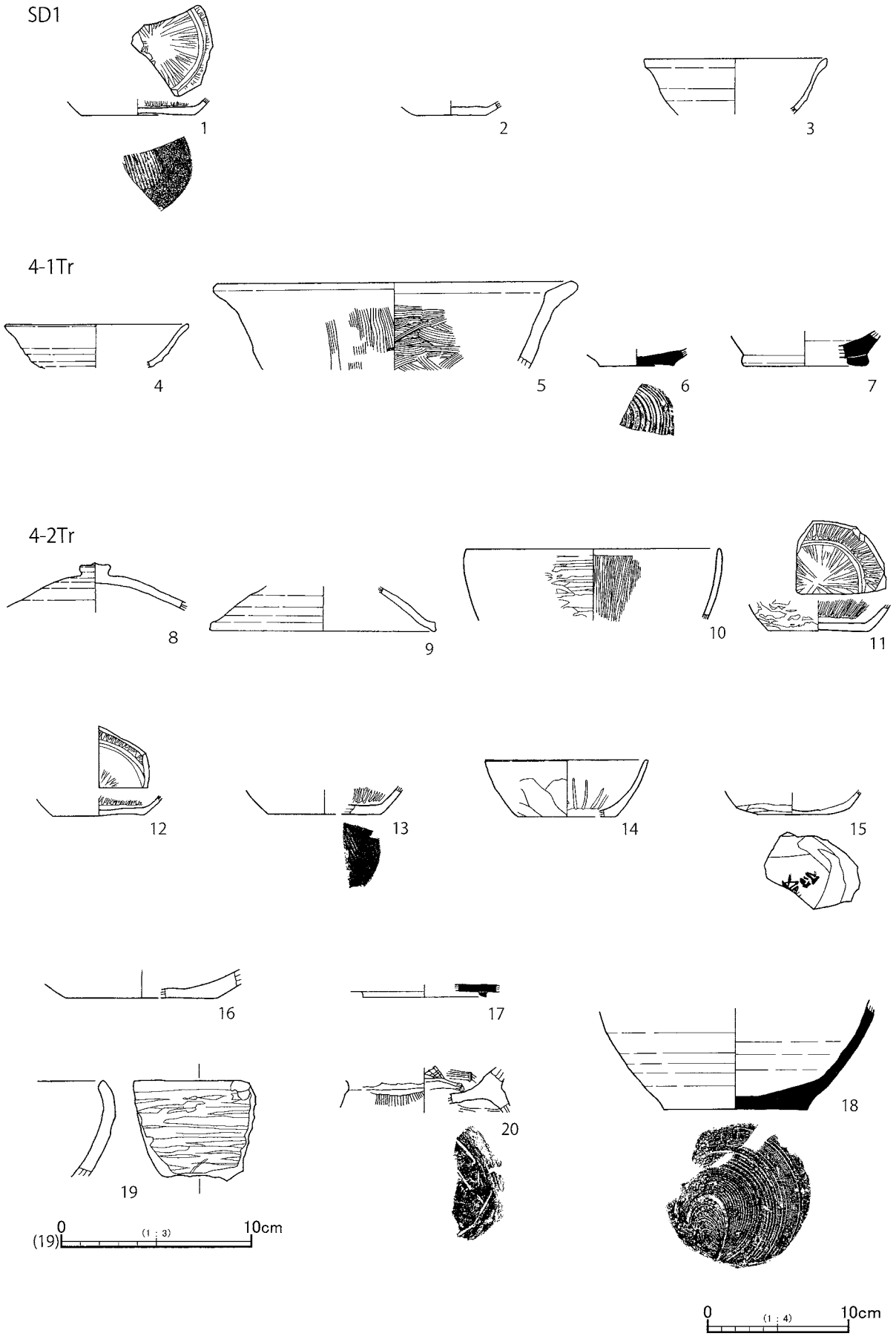
4-3Tr



1　暗褐色土
2　暗褐色土　人頭大の霊を多量に含む。

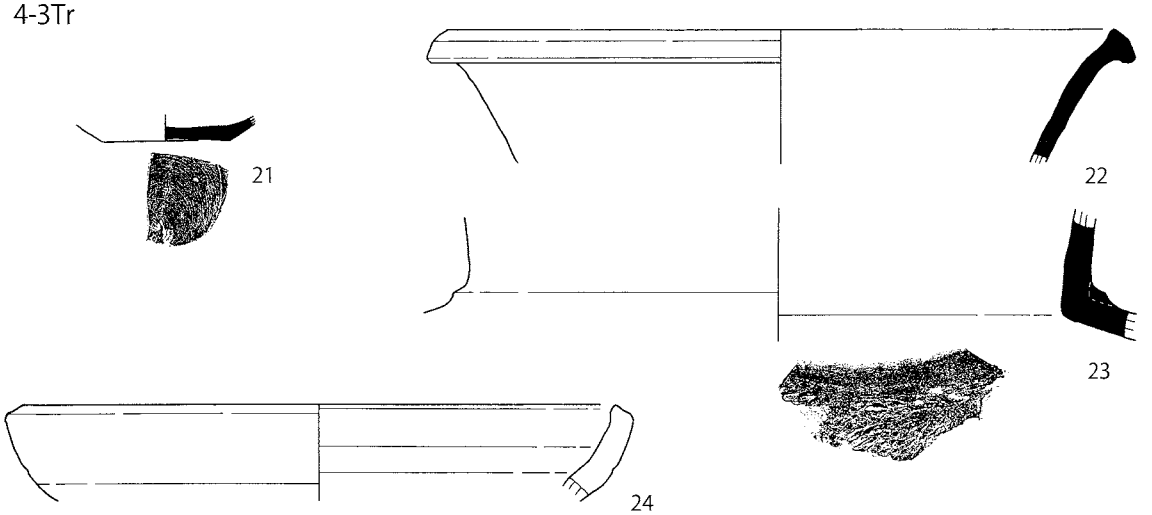


第25図　調査区・遺構実測図

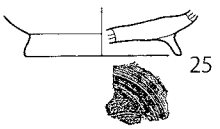

SD1
1
2
3
4-1Tr
4
5
6
7
4-2Tr
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
(19)
0
(1 : 3)
10cm
0
(1 : 4)
10cm

第26図　出土遺物(1)

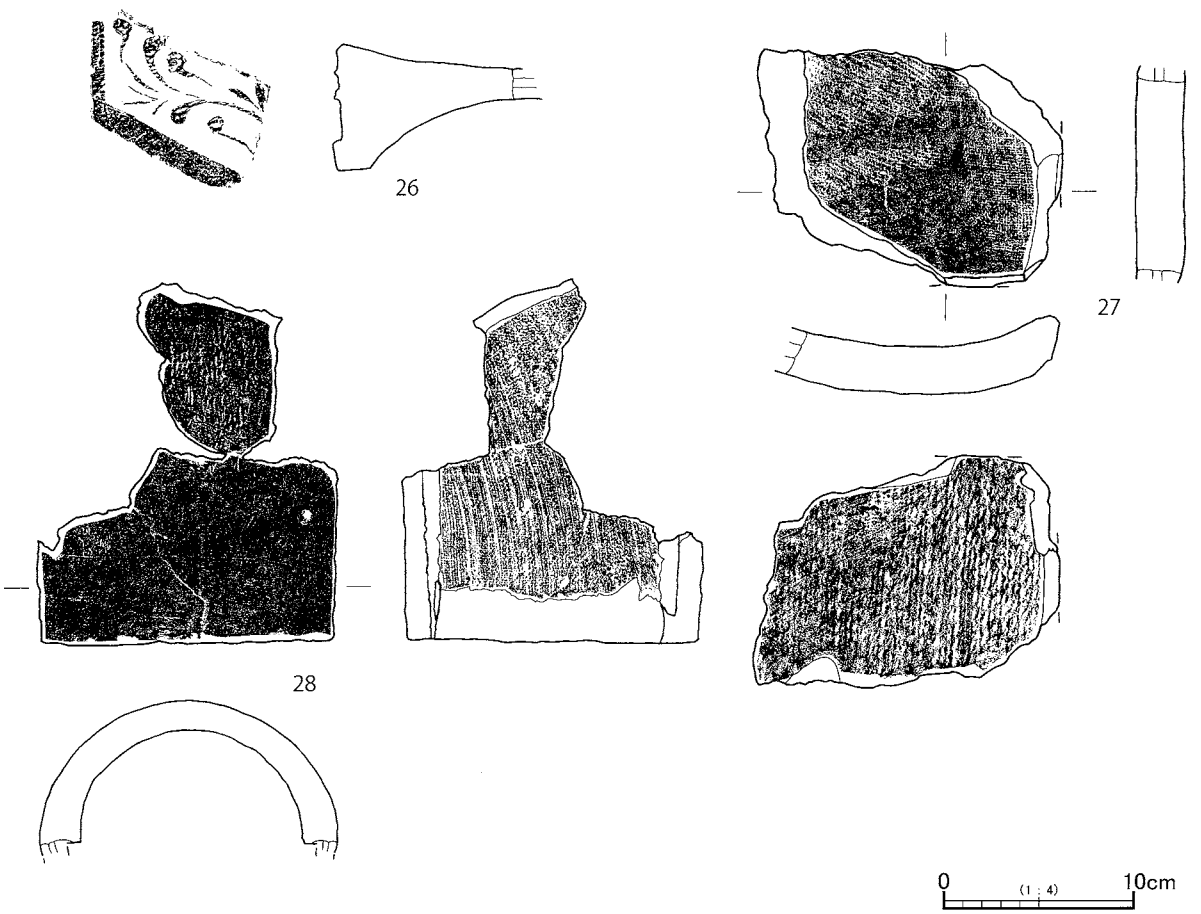
4-3Tr



4-4Tr



瓦



第27図　出土遺物(2)

表9　石動遺跡支線4号地区　遺物観察表

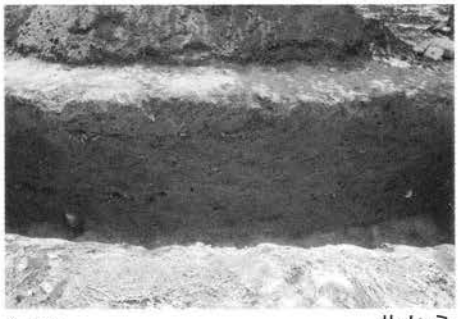
図	番号	遺構	種別	器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	焼成	胎土	整形技法	色調	備考
26	1	4 - 1溝	土師器	坏	- - (8.0)	良	緻密、赤・白	(外) ヘラ削り (内) ロクロナデ、暗文 (底) 静止糸切痕、ヘラ削り	橙色	底部は中央が凹み、 ヘラ削り後も糸切痕が残る
26	2	4 - 1溝	土師器	坏	- - (4.8)	良	緻密、赤・白	(外) ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) ヘラ削り	浅黄色	
26	3	4 - 1溝	土師器	坏	(13.0) - -	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	口縁部は肥厚し、先端がやや尖る 外面下半に強いロクロ目
26	4	4 - 1Tr	土師器	坏	(13.0) - -	良	密、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	外面下半に強いロクロ目
26	5	4 - 1Tr	土師器	甕	(25.6) - -	良	粗、白・金	(外) ハケメ (内) ハケメ、ナデ	鈍赤褐色	ハケメ線は細かく、 口縁部が短い
26	6	4 - 1Tr	陶器	椀	- - (5.4)	良	やや密、白	(外) ロクロナデ、火襷 (内) ロクロナデ、火襷 (底) 回転糸切痕	浅黄橙色	焼成は良いが、土師のような色調 をしている
26	7	4 - 1Tr	灰釉	壺	- - (9.0)	良	密、黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 付高台	灰褐色	
26	8	4 - 2Tr	土師器	蓋	- - -	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ、暗文　ナデ (内) ロクロナデ、暗文	鈍橙色	内外面に同心円状 又は渦巻状暗文あり
26	9	4 - 2Tr	土師器	蓋	(16.0) - -	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ、暗文	橙色	内面に同心円状又 は渦巻状暗文あり 縁端部が小さく折り返っている
26	10	4 - 2Tr	土師器	坏	(17.8) - -	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ、ミガキ (内) ロクロナデ、暗文	橙色	
26	11	4 - 2Tr	土師器	坏	- - (7.0)	良	密、赤・白	(外) ヘラ削り、ミガキ (内) ロクロナデ、暗文	橙色	内面、放射状暗文
26	12	4 - 2Tr	土師器	坏	- - (6.3)	良	密、白・金	(外) ヘラ削り、ミガキ (内) ロクロナデ、放射状暗文	明赤褐色	表面が劣化している
26	13	4 - 2Tr	土師器	坏	- - (8.0)	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ、暗文 (底) ヘラミガキ	橙色	底部はヘラ削り・ミガキ後も
26	14	4 - 2Tr	土師器	坏	(11.4) (4.1) (6.8)	良	やや密、赤・白	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ、暗文	橙色	暗文の条が少ない 内面の一部が黒変　灯明か
26	15	4 - 2Tr	土師器	坏	- - (8.0)	良	密、赤・白・黒・ 金	(外) ヘラ削り (内) 暗文 (底) ヘラミガキ、墨書『□□（？呂）』	橙色	底部はやや丸みあり また中央がやや凹む
26	16	4 - 2Tr	土師器	坏	- - (10.6)	良	やや粗、赤・白	(外) ヘラ削り (内) ナデ、内黒 (底) ヘラ削り	橙色	
26	17	4 - 2Tr	陶器	椀か	- - (9.0)	良	やや密、白	(内) ロクロナデ (底) ロクロナデ、付高台	灰白色	表面が劣化している
26	18	4 - 2Tr	須恵器	鉢	- - 10.2	良	やや粗、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	褐灰色	
26	19	4 - 2Tr	土師器	仏鉢型土器	- - -	良	密、白	(外) ロクロナデ、ミガキ (内) ロクロナデ、ミガキ、内黒	橙色	仏鉢状 内面黒色処理 外面の一部が煤けている
26	20	4 - 2Tr	土師器	高台付坏	- - -	良	粗、白・金	(外) 縦ハケメ (内) 横ハケメ (底) 木葉痕、脚部内側に横ハケメ	明赤褐色	被熱により劣化 部分的に煤けている
27	21	4 - 3Tr	須恵器	坏	- - (6.6)	良	密、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、指頭痕	暗灰黄色	
27	22	4 - 3Tr	須恵器	甕	(37.0) - -	良	密、白	(外) ロクロナデ、自然釉 (内) ロクロナデ	褐灰色	内面自然釉（黄色のまだら状）
27	23	4 - 3Tr	須恵器	甕	- - -	良	やや密、白・黒	(外) ナデ (内) 頸部にナデ、体部に当て具痕	褐灰色	頸部凸帯付甕 群馬県所産か
27	24	4 - 3Tr	土師器	鍋	(31.0) - -	良	やや密、白	(外) ナデ、縦ハケナデ (内) ナデ	鈍褐色	内耳土器か
27	25	4 - 4Tr	灰釉陶器	椀	- - (8.2)	良	緻密、白	(外) ナデ (内) ナデ (底) 回転糸切痕、付高台	鈍黄橙色	

表10　石動遺跡支線4号地区　瓦観察表

図	番号	遺構	種類	重量(g)	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	焼成	胎土	製作技法	色調	備考
27	26	4 - 2Tr	軒平瓦	560	10.9	10.4	6.7	良	やや粗、白・金	(凸面) ヘラ削り (凹面) ハケ目	鈍橙色	
27	27	4 - 2Tr	平瓦	620	11.4	14.8	2.5	良	密、白・黒	(凸面) 縄叩き目 (凹面) 布目痕、ヘラ削り	灰褐色	
27	28	4 - 2Tr	丸瓦	720	18.9	15.6	1.6	良	密、白	(凸面) ヘラ削り (凹面) 布目痕、ヘラ削り	黄灰色	

PL 10　石動遺跡98年度調査　支線4号地区

4-1Tr　東から


4-1Tr　北から

4-1Tr・SD1　東から

4-2Tr　東から

4-3Tr　西から

4-4Tr　西から

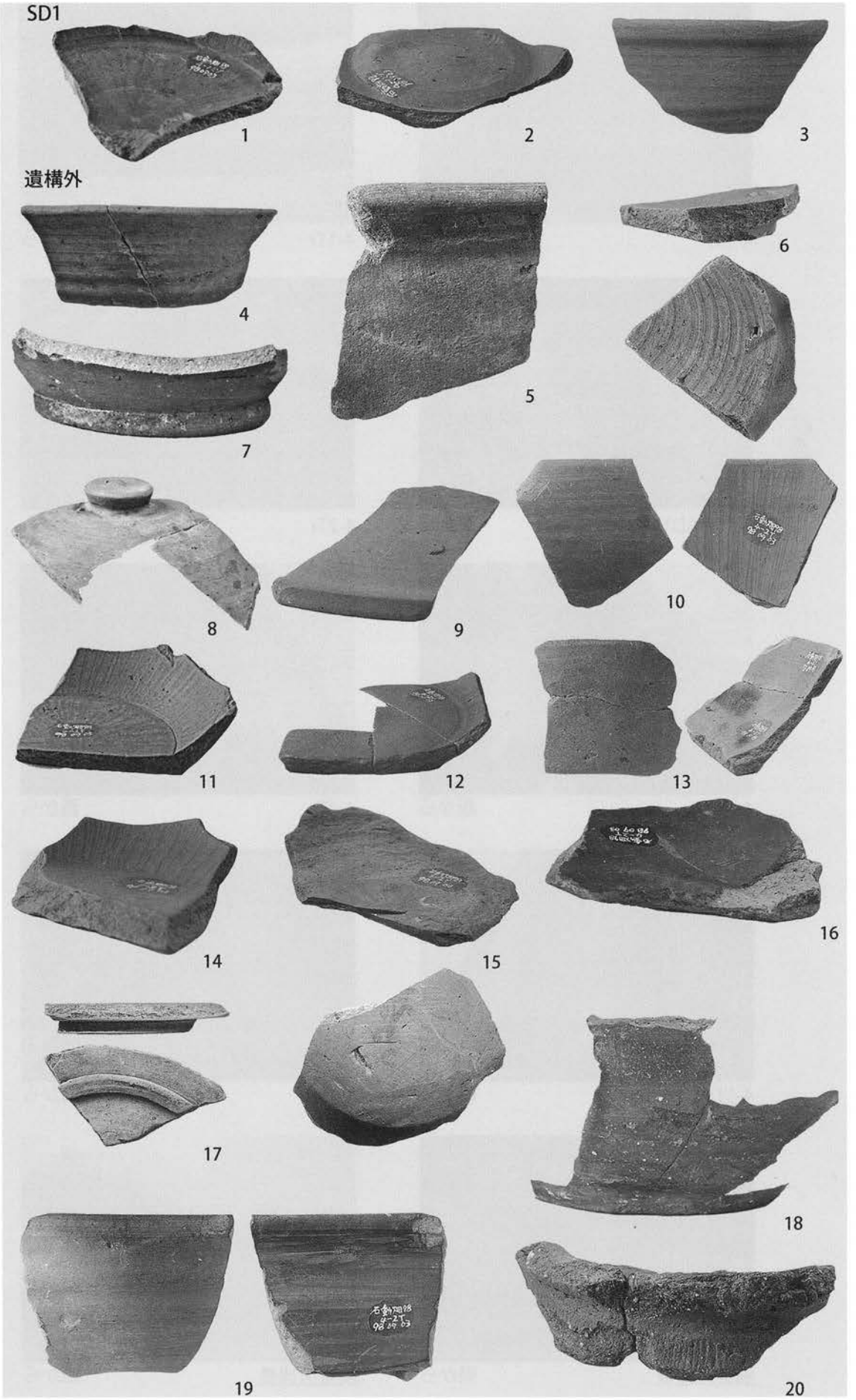
4-5Tr　西から

4-7Tr　西から

調査区遠景　東から

調査区遠景　西から

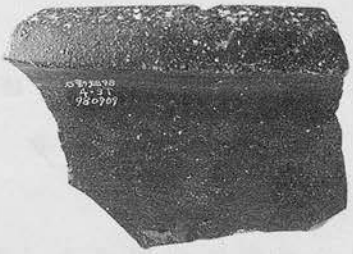
PL 11　石動遺跡98年度調査　支線4号地区

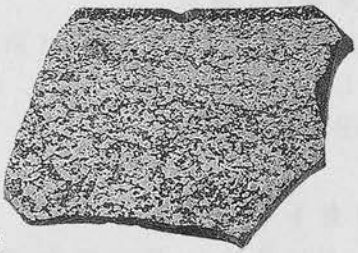


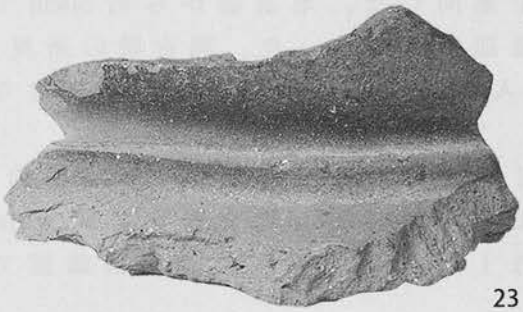
PL 12　石動遺跡98年度調査　支線4号地区

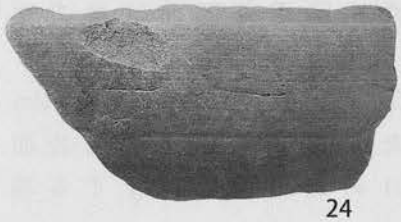
遺構外

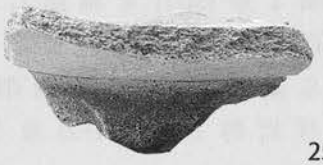
21


22




23

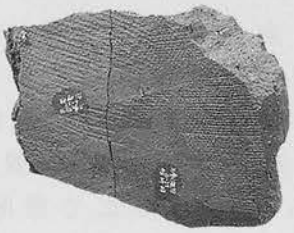

24


25

瓦

26

27


28

Ⅲ．支線6号地区

建設範囲の既存道路（南北約200m間）の拡張部に、13箇所のトレンチを設定し、約162㎡を調査した。調査の結果、住居跡9軒、溝4条、石列1条を検出した。

1．調査トレンチ

6-1Tr N-1グリッド、既存道路の西側に位置する。南北約4.7m、幅約1mの範囲を調査し、地表面から最深80cmまで掘削した。地表面から約50cmで礫を含む暗褐色土層となり、明確な遺構は確認できなかった。調査時の所見では、溝の内部である可能性も推察したが、人為的な遺構の存在は確認できなかった。

6-2Tr M-3･4グリッド、既存道路の西側に位置する。南北約4.5m、幅約1mの範囲を調査し、地表面から最深45cmまで掘削した。地表面から約30cmの深さで人頭大の礫が多く混在する暗褐色土となり、明確な遺構は確認できなかった。

6-3Tr M･N-6グリッド、既存道路の西側に位置する。南北約4.2m、幅約1.3mの範囲を調査し、地表面から最深45cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約40cmの深さであり、溝1条(SD1)を確認した。

6-4Tr M-7･8グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約6.5m、幅約2mの範囲を調査し、地表面から最深60cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約30cmの深さであり、住居跡2軒(SI1･2)及びSD1の延長部と推定する溝を検出した。

6-5Tr M-8･9グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約4.5m、幅約1.5mの範囲を調査し、地表面から最深75cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約45cmの深さ、住居跡1軒(SI6)、溝1条(SD3)を検出した。

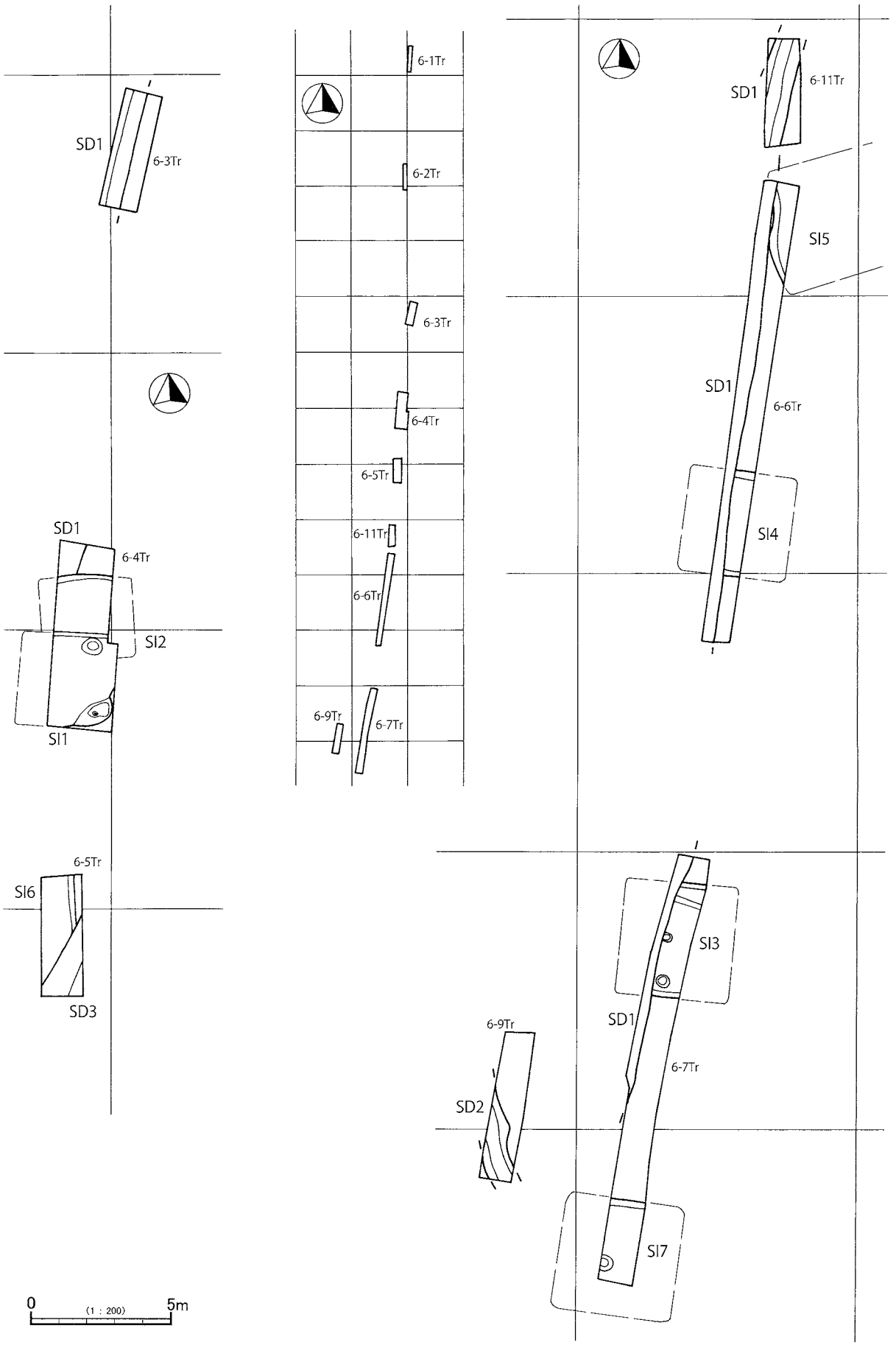
6-6Tr M-10～M-12グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約16.5m、幅約1.2mの範囲を調査し、地表面から最深1mまで掘削した。遺構確認面は地表面から約60cmの深さであり、住居跡2軒(SI4・5)、及びSD1の延長部と推定する溝を検出した。また、遺構外より内面に刻書「大」がある土師器坏片(47)や羽釜(48)など、10C後半頃の土師器が出土した。

6-7Tr M-13･14グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約15.5m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深65cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約20cmの深さであり、住居跡2軒(SI3･7)、及びSD1の延長部と推定する溝を検出した。

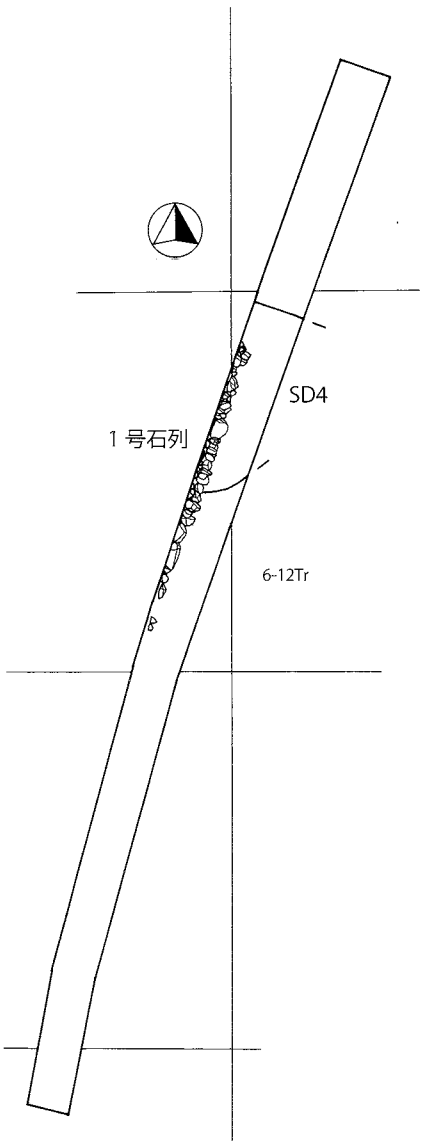
6-8Tr K･L-16グリッド、既存道路の東側に位置する。南北方向に約4.3m、幅約1.3mの範囲を調査し、地表面から最深90cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約30cmの深さであり、溝1条(SD2)を検出した。なお、本トレンチはほぼSD2の内部に位置していた。

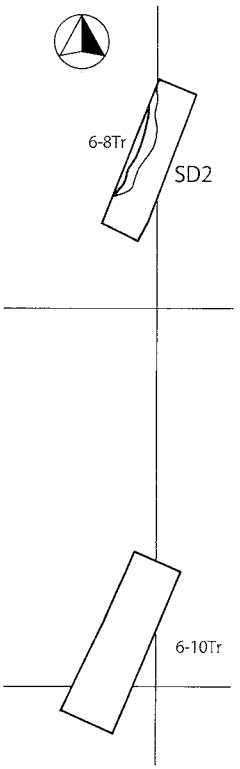
6-9Tr L-13･14グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約5.4m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深1mまで掘削した。遺構確認面は地表面から約50cmの深さであり、SD2の延長部と推定する溝を確認した。

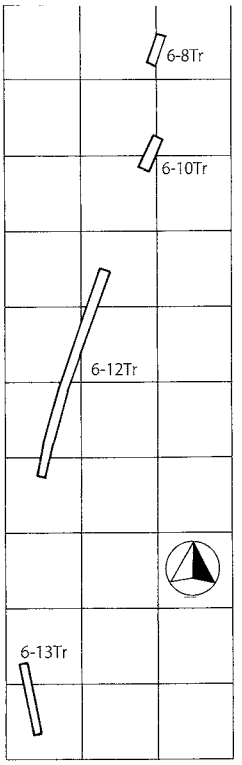
6-10Tr K-17･L-17･K-18グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約4.6m、幅約1.5mの範囲を調査し、地表面から最深65cmまで掘削した。遺構は確認できなかった。

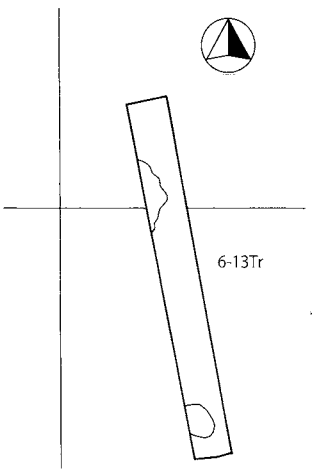

SD1
6-3Tr
SD1
6-4Tr
SI2
SI1
6-5Tr
SI6
SD3
6-1Tr
6-2Tr
6-3Tr
6-4Tr
6-5Tr
6-11Tr
6-6Tr
6-9Tr
6-7Tr
SD1
6-11Tr
SI5
SD1
6-6Tr
SI4
SI3
SD1
6-9Tr
6-7Tr
SD2
SI7
0
(1 : 200)
5m

第28図　遺構位置図(1)









0 (1 : 200) 5m

第29図　遺構位置図(2)

6-11Tr　M-10グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約3.7m、幅約1mの範囲を調査し、地表面から最深60cmまで掘削した。遺構確認面は明確ではないが、地表面から約40cmの深さでSD1の延長部と推定する溝を検出した。他、土師器坏(49)が出土した。

6-12Tr　K-19･20･J-20～22グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約29m、幅約2mの範囲を調査し、地表面から最深150cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約1mの深さであり、溝1条(SD4)と石列を検出した。他、土師器坏(50)、リング状の不明金属製品(52)などが出土した。

6-13Tr　J-24･25グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約9.5m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深55cmまで掘削した。明確な遺構はなかったが、地表面から約20cmの深さで硬化面を確認した。他、丸瓦(53)が出土した。

2．発見した遺構・遺物

・SI1〔第30･31図〕

位置と検出状況　M-8グリッド、6-4Tr、に位置する。重複するSI2を壊していた。調査範囲においては北壁を確認し、カマド位置から南壁ラインを推定すると、南北壁間は約3.5mを測った。確認面から床面までの深さは、約35cmであった。**遺構の特徴**　カマドは南西隅に位置し、炭化物と焼土及び構築材の一部と考えられる礫を確認した。**出土遺物**　土師器皿(1～3･8)・坏(4～7･9～16)鉢(17)・脚高高台坏(18)・甕(19･20)・羽釜(21)などが出土した。主にカマド周辺でまとまって出土しており、土師器坏は口縁が玉縁化しており、器面が黒変したり、煤けていたりした。**遺構の時期**　出土遺物の時期から、10C後半頃に位置付けておきたい。

・SI2〔第30図〕

位置と検出状況　M-7グリッド、6-4Trに位置する。調査範囲においては、重複するSI1に壊されていた。ほぼ床面のみであり、遺存部分は南北約2mを測った。**遺構の特徴**　検出した範囲には、カマド施設等はなかった。SI1に伴う棚状施設などの可能性も考えられる。**遺構の時期**　SI1とは別遺構とすれば、出土遺物がないため明確ではないが、重複関係からSI1構築以前としておきたい。

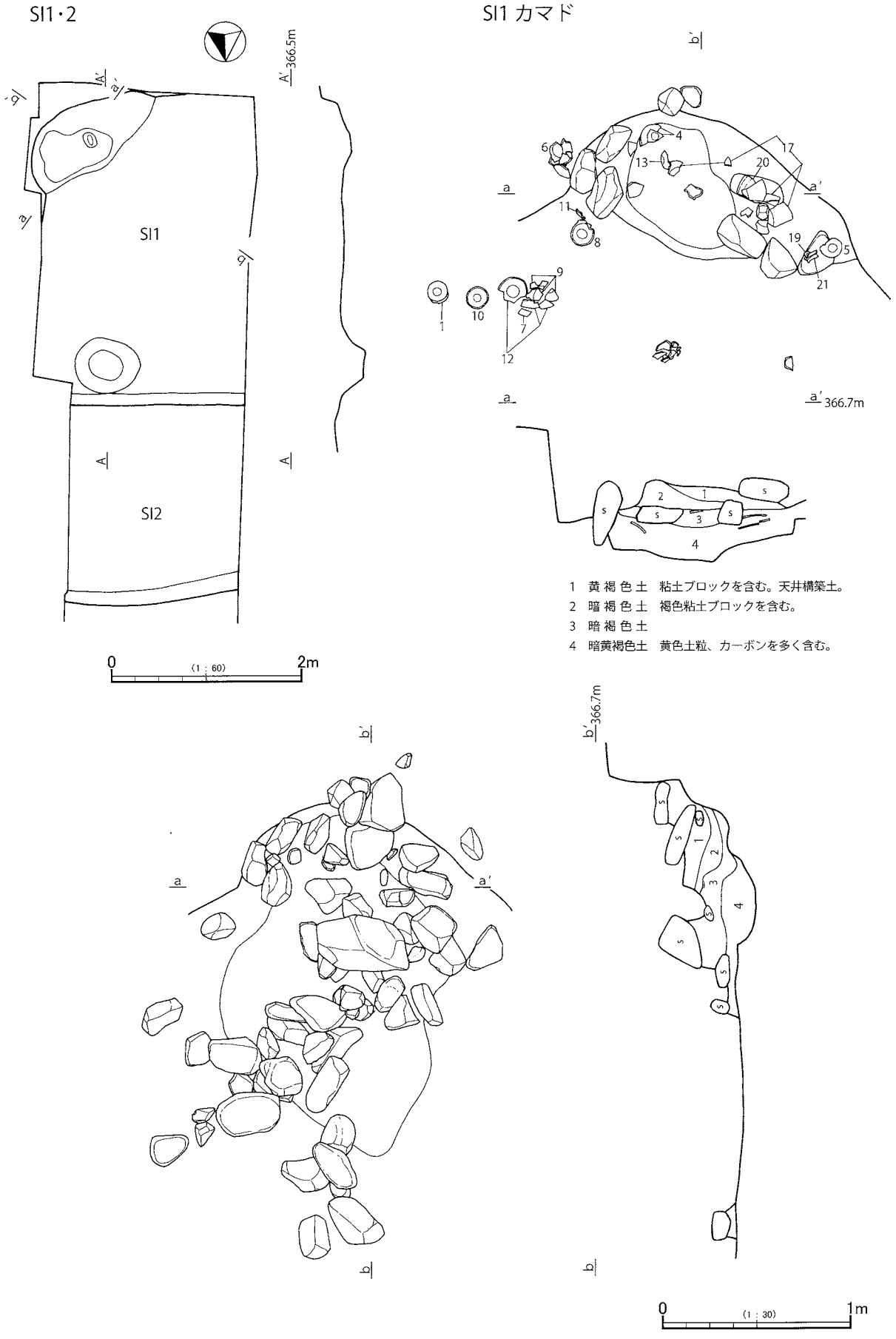
・SI3〔第32図〕

位置と検出状況　M-13グリッド、6-7Trの北側に位置する。重複するSD1に西側を壊されており、調査範囲では北壁と南壁を確認した。検出した範囲では南北の壁間は約3.5m、確認面から床面までの深さは約30cmを測った。

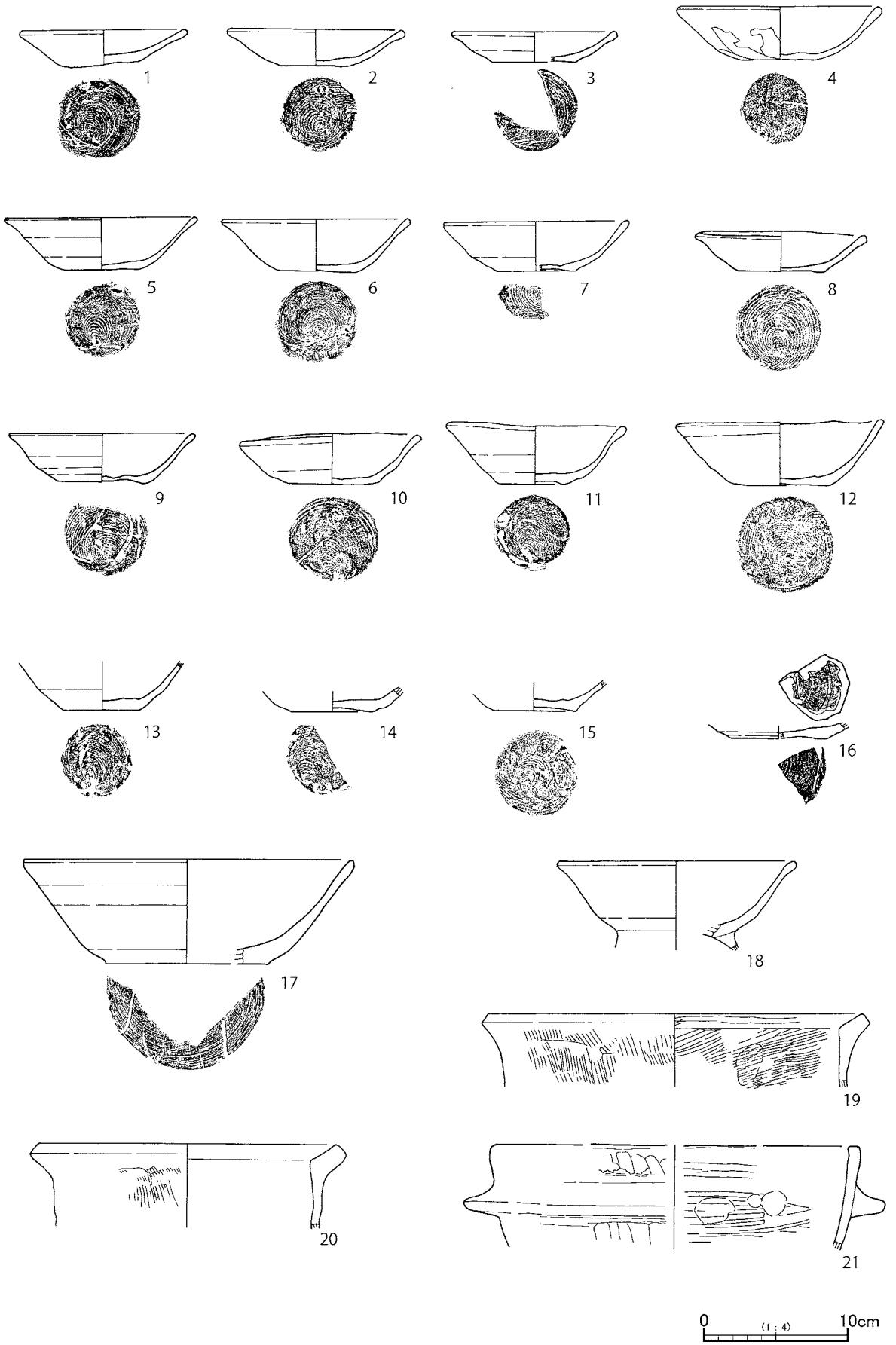
遺構の特徴　検出した範囲にカマド施設はなかった。中央と南端でピットを確認したが、いずれも床面からの深さは30cm未満と浅く、性格は明確ではない。北側では棚状施設的な約10cm程度の段差が確認できた。**出土遺物**　灰釉陶器椀(22)、土師器甕(23)が出土した。やや厚みのある付高台で、外面残存部には釉を確認できないが、内面は刷毛塗りされており、見込み部は無釉となっている。23の土師器甕は外面だけでなく、底部にヘラ状またはハケ状の調整痕がみられる。**遺構の時期**　出土遺物が少なく、明確ではないが、10C末頃としておく。

・SI4〔第32図〕

位置と検出状況　M-11グリッド、6-6Trの南側に位置する。重複するSD1に



第30図 SI1(1)・SI2



第31図　SI1(2)

西側を壊されており、調査範囲では北壁と南壁を確認した。検出した範囲では、南北の壁間は約3.7 m、確認面から床面までの深さは、約50cmを測った。**遺構の特徴**　検出した範囲にカマド等の施設はなかった。**出土遺物**　いずれも小片であったが、脚高高台坏(24)・甕(26)、灰釉陶器壺(25)、などが出土した。**遺構の時期**　出土遺物が少なく明確ではないが、10C後半頃としておく。

・SI5〔第33図〕

位置と検出状況　M-10グリッド、6-6Trの北側に位置する。SD1に西側を壊されており、調査範囲では西壁を確認した。確認面から床面までの深さは約30cmを測った。**遺構の特徴**　検出した範囲にはカマド等の施設はなかった。**出土遺物**　土師器皿カ(27)・灰釉陶器埦(28)、甕(29)などが出土した。27は墨書土器であり、外面底部に墨筆が確認できるが破片のため判読できなかった。三日月状の短い付高台で、底部は回転糸切痕を残している。**遺構の時期**　出土遺物の時期から、10C後半頃に位置付けておきたい。

・SI6〔第33図〕

位置と検出状況　M-8･9グリッド、6-5Trに位置する。南側は重複するSD3に壊されていた。調査範囲においては東壁を確認した。**遺構の特徴**　検出した範囲では、カマド等の施設はなかった。**出土遺物**　土師器皿(30)・坏（31･32)・灰釉陶器埦(33)などが出土した。土師器坏はいずれも底部には回転糸切痕が残り、器面はやや劣化していた。33の灰釉陶器は口縁部で小さく外反する器形で、内外面を付け掛け施釉されている。また、トチンの跡や別個体の口縁部が外面に付着していることから、重ね焼されたものと推測される。**遺構の時期**　出土遺物から、11C中頃としておきたい。

・SI7〔第34図〕

位置と検出状況　M-14グリッド、6-7Trの南端に位置する。重複する遺構はなく、調査範囲では北壁を確認した。検出した範囲では確認面から床面までの深さは約15cmを測ったが、土層観察から地表面から約10cmの深さから一部覆土が確認され、床面までは約35cmを測る。**遺構の特徴**　検出した範囲にはカマド施設はなかった。トレンチの西壁にかかる位置でピット1基を確認したが、性格については不明である。**出土遺物**　土師器皿(34)・坏(35～37)・脚高高台付坏(38)・甕(39)などが出土した。土師器坏皿は底部には回転糸切痕がみられ、口縁部が玉縁化している。体部ヘラ削り調整されたものと、ロクロナデだけしか見られないものが伴出している。また、器面に黒変したものや煤けたものがあり、灯明に使用されていたことが推測される。**遺構の時期**　出土遺物の時期から、10C中～末頃としておく。

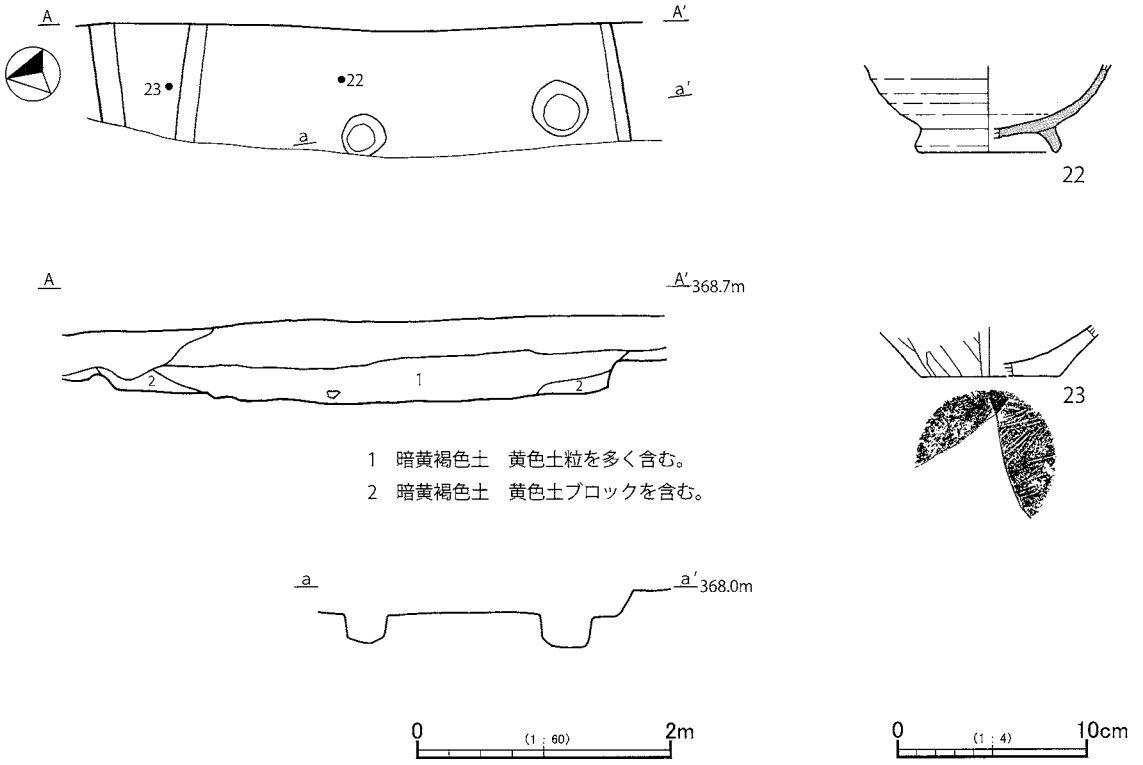
・SD1〔第35図〕

位置と検出状況　N-6･7･M-7･10･11･12･13グリッド、6-3･4･6･7･11Trで確認した。南北方向に延び、重複するSI1･2･3･4･5を壊していた。なお、調査範囲ではSI1･2･6との重複関係は明確ではないが、SD1は上層に位置するため、他遺構への影響は少なかったと思われる。**遺構の特徴**　検出状況から、旧道に伴う側溝と推定した。**遺構の時期**　出土遺物はないが、検出した遺構の中で最も新しい時期に位置付けられ、近世・近代まで下る可能性がある。

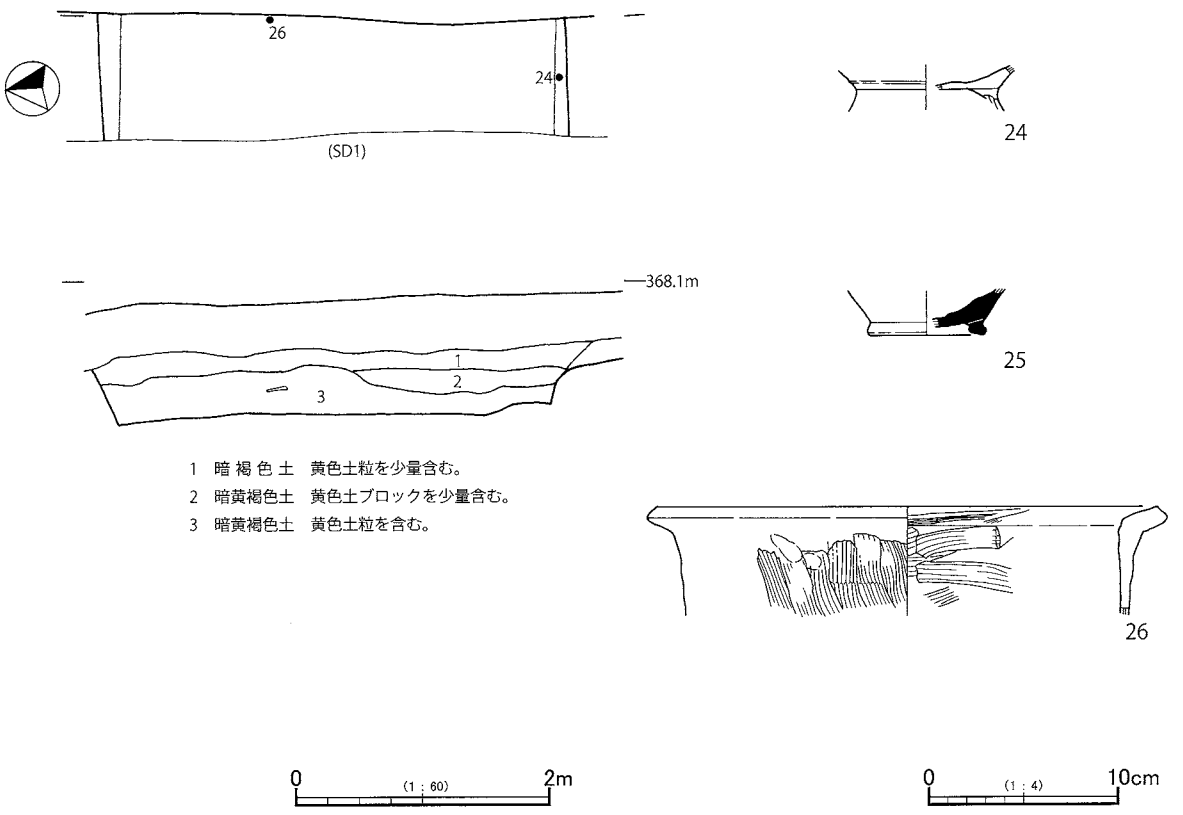
・SD2〔第36･37図〕

位置と検出状況　L-13･14･16･K-16グリッド、6-8･9Trで確認した。南北方向に延びる溝で、検出した範囲では南北約3mを測った。**遺構の特徴**　SD1の西側

SI3

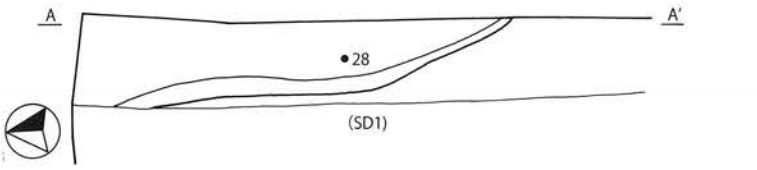


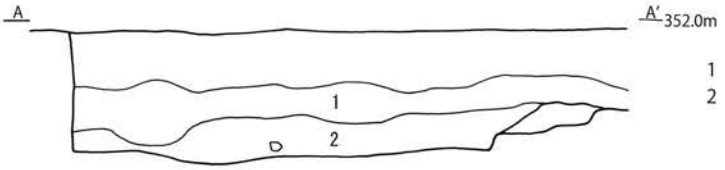
SI4



第32図　SI3・4

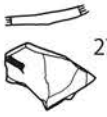
SI5

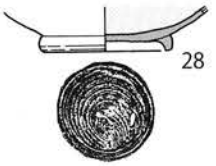


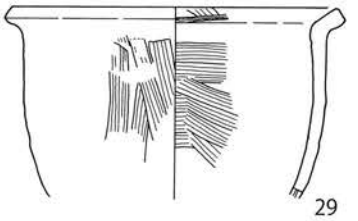


1　暗 褐 色 土　黄色土粒を含む。
2　暗黄褐色土　黄色土粒を多く含む。

0 (1 : 60) 2m



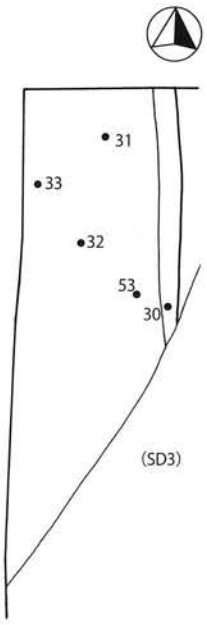


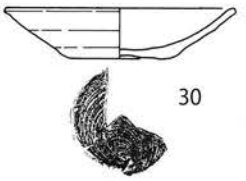


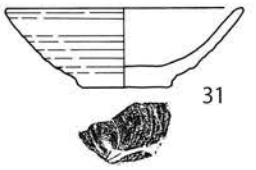
0 (1 : 3) 5cm

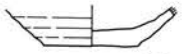
0 (1 : 4) 10cm

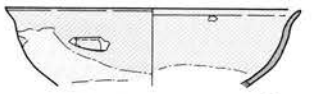
SI6









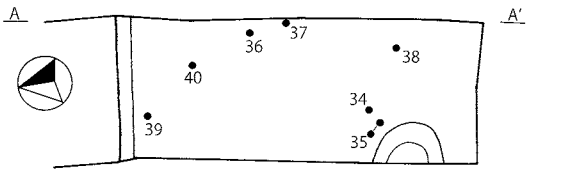


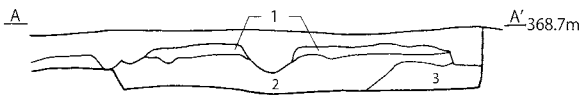
0 (1 : 60) 2m

0 (1 : 4) 10cm

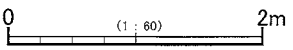
第33図　SI5・6

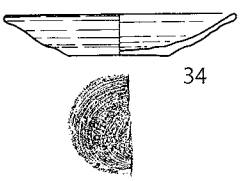
SI7

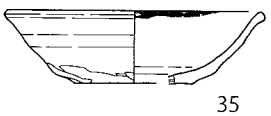


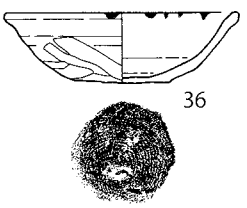


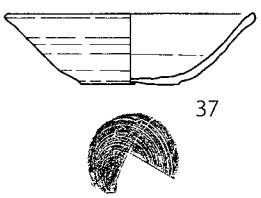
1　暗褐色土
2　暗黄褐色土　黄色土ブロックを少量含む。
3　暗黄褐色土　黄色土ブロックを多量に含む。

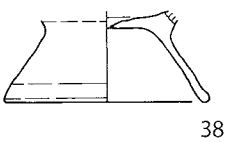


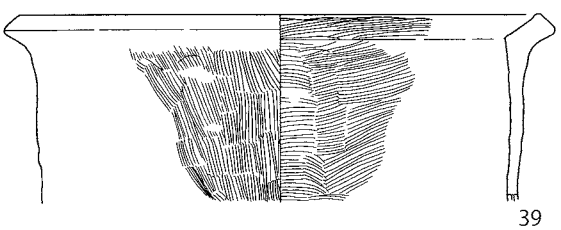


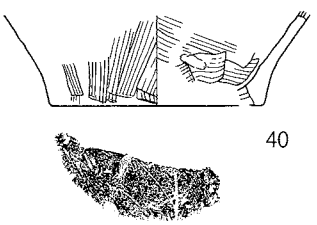


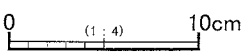












第34図　SI7

に位置したが、軸方向や検出レベルが異なり、旧道に伴う溝ではないと思われ、性格は不明である。**出土遺物**　6-9Tr 確認部から、柱状高台坏 (41・42)、釘 (51) などが出土した。**遺構の時期**　出土遺物が少なく明確ではないが、11C 代としておきたい。

・SD3〔第35・37図〕

位置と検出状況　M-9 グリッド、6-5Tr で確認した。重複する SI6 を壊していた。検出した範囲では南北約 3.5m、確認面からの深さは約 20cm を測った。**遺構の特徴**　遺構の性格は不明である。**出土遺物**　土師器甕 (43)、陶器甕 (44) など、10C 後半頃の遺物が出土している。**遺構の時期**　出土遺物は SI6 からの流れ込みである可能性が考えられ、重複関係から段階的な位置付けとして SI6 廃絶後としておきたい。

・SD4〔第36図〕

位置と検出状況　J-20・K-20 グリッド、6-12Tr で確認した。上層に 1 号石列が位置する。東西方向に延びる溝と推測し、検出した範囲では最大幅約 5m、確認面からの深さは約 60cm を測った。**遺構の特徴**　性格については不明であるが、断面観察から南側から自然埋没した状況が窺える。

・1号石列〔第36図〕

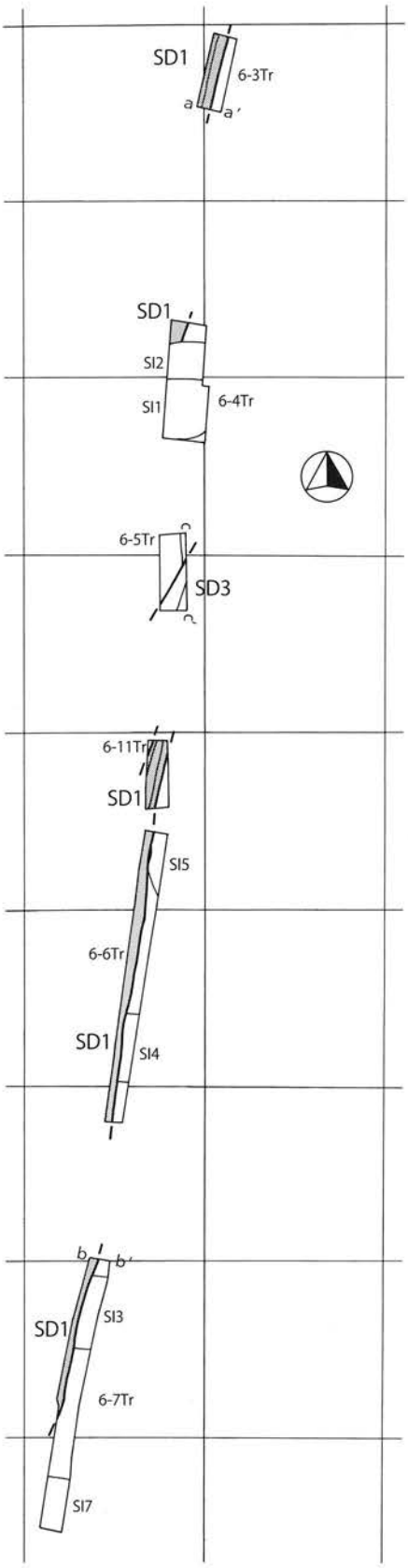
位置と検出状況　J-20・K-20 グリッド、6-12Tr の中央に位置する。SD4 の上層に位置するが、重複はしていない。検出した範囲では、南北約 3.5m を測った。**遺構の特徴**　調査時の所見から、古い畑境の石垣の一部であり、畑の拡張によって埋没したと推察している。**遺構の時期**　出土遺物はないが、近世・近代まで下る可能性がある。

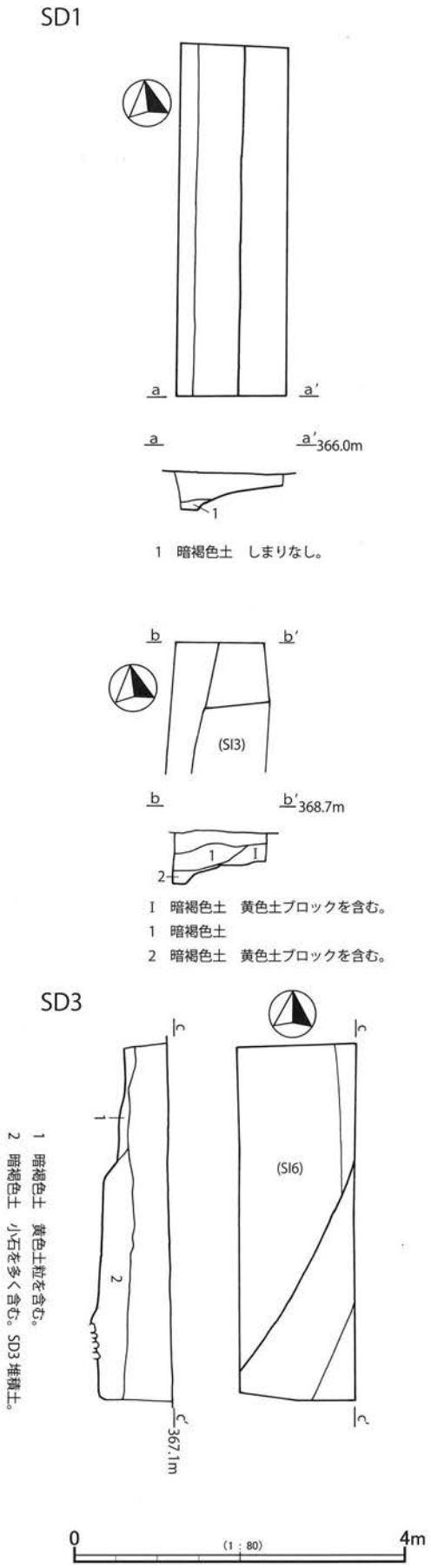
表 11　石動遺跡支線 6 号地区　トレンチ一覧

位置	遺構名
1Tr	遺構なし
2Tr	遺構なし
3Tr	SD1
4Tr	SI1・2、SD1
5Tr	SI6、SD3
6Tr	SI4・5、SD1
7Tr	SI3・7、SD1
8Tr	SD2
9Tr	SD2
10Tr	遺構なし
11Tr	SD1
12Tr	SD4、1 号石列
13Tr	硬化面

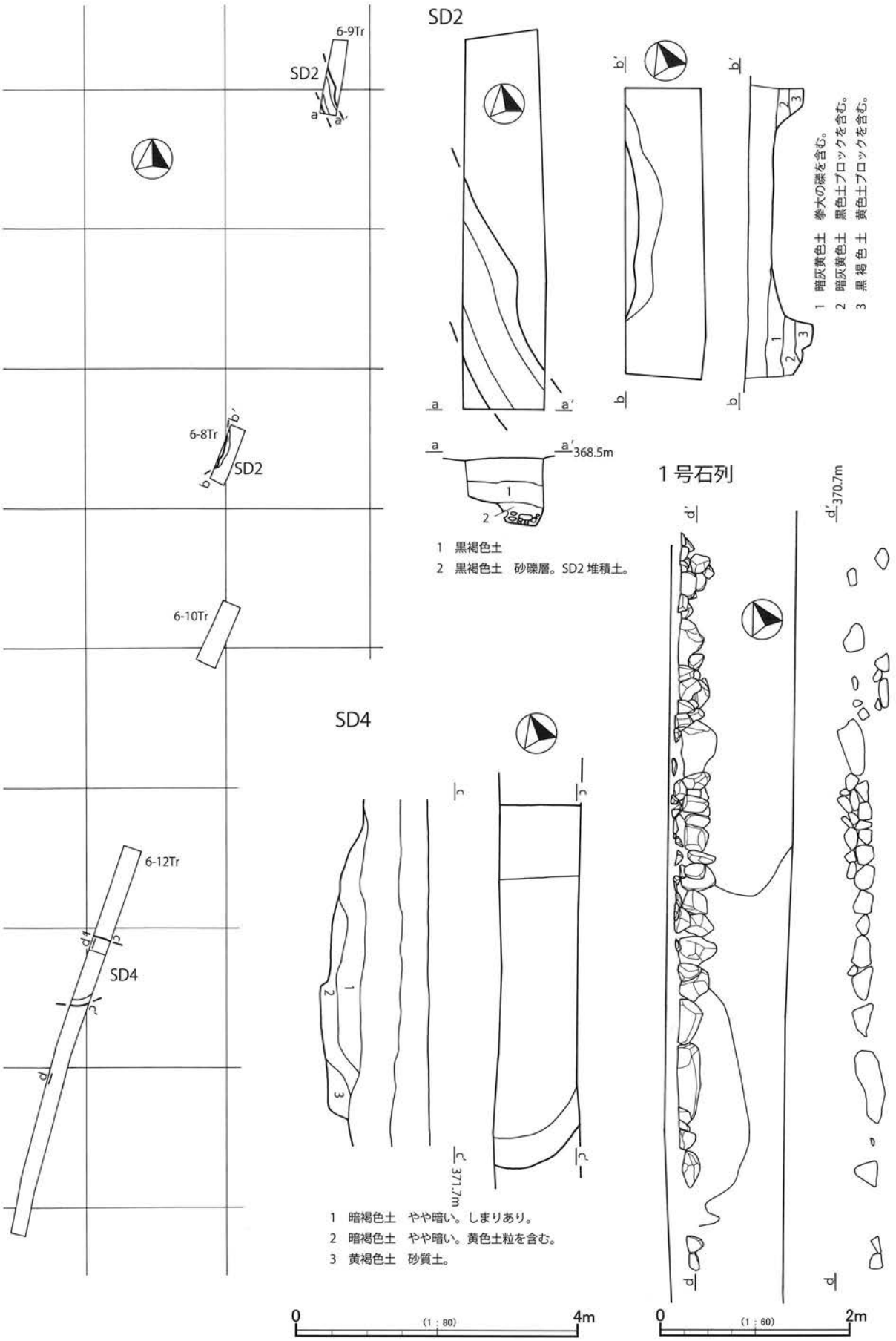
表 12　石動遺跡支線 6 号地区　遺構一覧

遺構名	位置	時期
SI1	4Tr	10C 後半頃
SI4	6Tr	10C 後半頃
SI5	6Tr	10C 後半頃
SI7	7Tr	10C 中～末頃
SI3	7Tr	10C 末頃
SD2	8・9Tr	11C 代
SI6	5Tr	11C 中頃
SI2	4Tr	SI1 構築以前
SD3	5Tr	SI6 廃絶後
SD4	12Tr	不明
硬化面	13Tr	不明
SD1	3・4・6・7・11Tr	近世・近代か
1 号石列	12Tr	近世・近代か

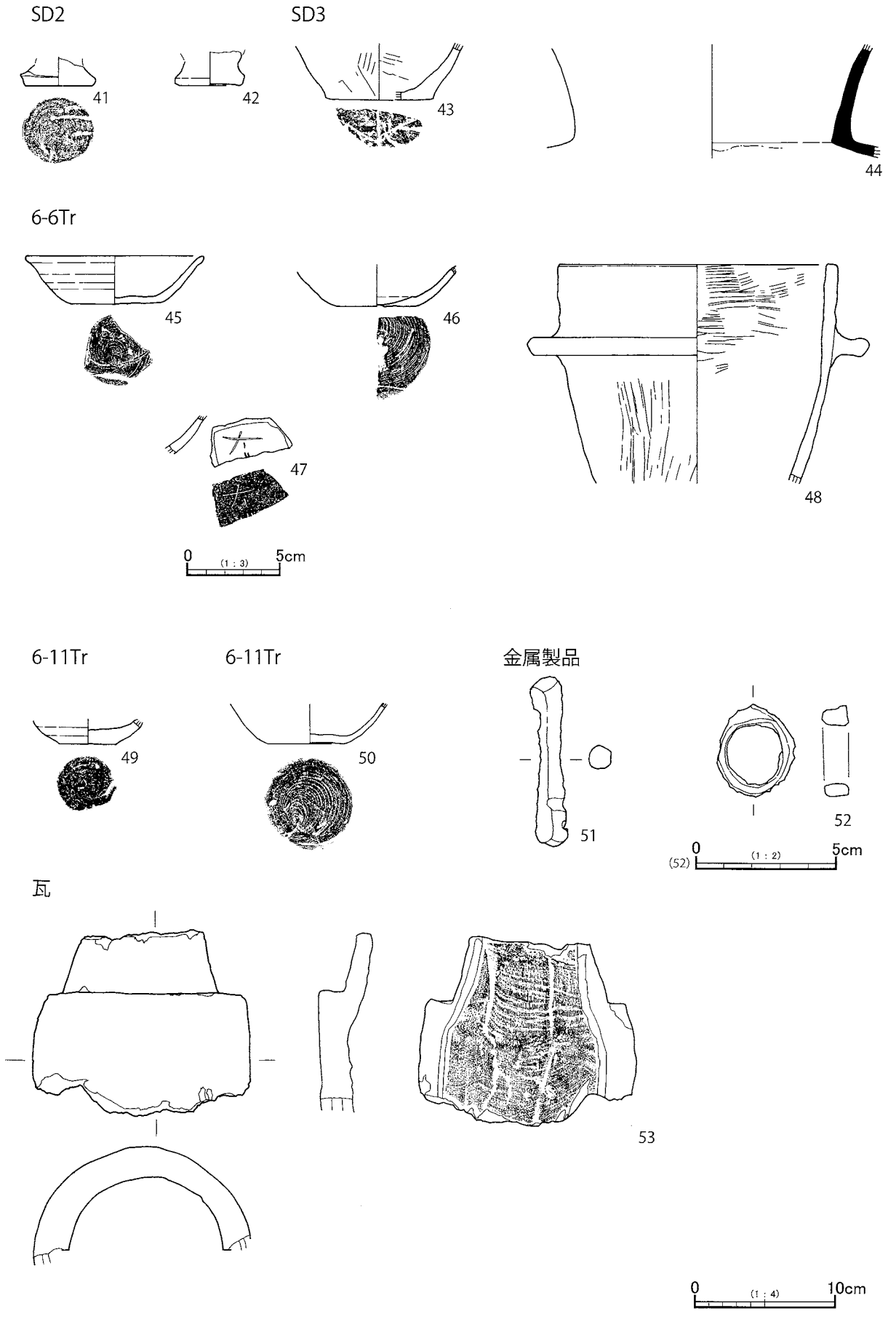

SD1
6-3Tr
a
a′
SD1
SI2
SI1
6-4Tr
6-5Tr
c
c′
SD3
6-11Tr
SD1
SI5
6-6Tr
SD1
SI4
b
b′
SD1
SI3
6-7Tr
SI7


SD1
a
a′
a
a′
366.0m
1
1　暗褐色土　しまりなし。
b
b′
(SI3)
b
b′
368.7m
1
I
2
I　暗褐色土　黄色土ブロックを含む。
1　暗褐色土
2　暗褐色土　黄色土ブロックを含む。
SD3
c
c′
1
2
367.1m
(SI6)
1　暗褐色土　黄色土粒を含む。
2　暗褐色土　小石を多く含む。SD3 堆積土。
0
(1：80)
4m

第35図　SD1・3



第36図　SD2・4、1号石列



第37図　SD2・3、遺構外　出土遺物

表 13　石動遺跡支線 6 号地区　遺物観察表

図	番号	遺構	種別	器種	口径 (cm) 器高 (cm) 底径 (cm)	焼成	胎土	整形技法	色調	備考
31	1	SI1	土師器	皿	11.6 2.6 6.5	良	密、赤・白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	黄橙色	口縁の一部を打ち掻き 内面がやや煤けている 灯明皿
31	2	SI1	土師器	皿	12.2 2.5 4.9	良	密、赤・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	黒斑あり 内面がやや煤けている
31	3	SI1	土師器	皿	(11.6) (2.1) (6.0)	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	黒斑あり
31	4	SI1	土師器	坏	(14.2) (3.8) 5.0	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、ヘラ削り	明赤褐色	全体にやや黒変・煤けている
31	5	SI1	土師器	坏	(13.5) (3.9) 5.2	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	明赤褐色	内面がやや煤けている
31	6	SI1	土師器	坏	13.0 3.6 5.2	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	赤橙色	黒斑あり 内面及び外面の一部が黒変 口縁の一部を打ち掻き、灯明か
31	7	SI1	土師器	坏	(13.0) (3.5) (5.6)	良	密、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	内面の一部及び 外面口縁部がやや黒変
31	8	SI1	土師器	皿	11.9 2.6 6.0	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	明赤褐色	口縁の一部を打ち掻き 内面がやや煤けている 灯明皿
31	9	SI1	土師器	坏	13.0 3.5 6.0	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	内面がやや煤けている
31	10	SI1	土師器	坏	12.5 3.6 6.2	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	口縁の一部を打ち掻きか
31	11	SI1	土師器	坏	12.5 4.1 4.9	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	橙色	全体に歪みあり
31	12	SI1	土師器	坏	14.4 4.4 6.7	良	やや粗、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	底面及び外面体部の一部、 及び内面口縁部が黒変
31	13	SI1	土師器	坏	- - 5.4	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕，スノコ状圧痕	橙色	内面が黒変、煤けている
31	14	SI1	土師器	坏	- - (5.8)	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	外面一部黒変
31	15	SI1	土師器	坏	- - 6.2	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕（2 回）	鈍黄色	内・外面がやや黒変 底部 2 度切り 補修痕あり
31	16	SI1	土師器	坏	- - (6.7)	良	密、白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、線刻 (底) 回転糸切痕	橙色	内面見込み部に線刻あり
31	17	SI1	土師器	鉢	(23.0) (7.3) (11.4)	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	橙色	黒斑あり 外面黒変（廃棄後か） 内面やや煤けている
31	18	SI1	土師器	脚高 高台坏	(16.6) - -	やや粗	やや密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ	橙色	内面見込み部から体部下半が黒変 被熱により、全体的に劣化している
31	19	SI1	土師器	甕	(27.0) - -	良	やや密、赤・白・金	(外) タテハケ (内) ヨコハケ、指頭痕	鈍黄色	部分的に煤けている
31	20	SI1	土師器	甕	(22.0) - -	良	やや密、白・金・黒	(外) ロクロナデ、タテハケ (内) ロクロナデ	赤色	末広口縁
31	21	SI1	土師器	羽釜	(25.6) - -	良	やや粗、白・金	(外) ハケメ、指頭痕 (底) ハケメ、指頭痕	橙色	
32	22	SI3	灰釉陶器	埦	- - (7.6)	良	緻密、金・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、施釉 (底) ロクロナデ、付高台	淡黄色	内面見込み部は無釉 やや擦痕あり
32	23	SI3	土師器	甕	- - (7.4)	良	粗、赤・白・黒・金	(外) ハケメ、指頭痕 (内) 劣化剥離 (底) ハケメ	明赤褐色	内面黒変 表面は劣化で剥離している 底部調整か
32	24	SI4	土師器	脚高 高台坏	- - -	良	密、赤・白・金・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ、付高台	鈍黄橙色	内面が煤けている
32	25	SI4	灰釉陶器	壺	- - (6.2)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、付高台	灰黄色	
32	26	SI4	土師器	甕	(27.4) - -	良	やや粗、赤・白・黒・金	(外) タテハケ、指頭痕 (内) ヨコハケ＜指頭痕	赤色	内・外面に黒斑あり
33	27	SI5	土師器	皿か	- - -	良	密、赤・白・金・黒	(外) ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、墨書『□』	橙色	
33	28	SI5	灰釉陶器	埦	- - 6.8	良	緻密、白・黒	(外) ロクロナデ、施釉 (内) ロクロナデ、施釉 (底) 回転糸切痕、付高台	浅黄色	内面見込み部無釉・磨滅 体部打ち掻き 転用硯

図	番号	遺構	種別	器種	口径 (cm) 器高 (cm) 底径 (cm)	焼成	胎土	整形技法	色調	備考
33	29	SI5	土師器	甕	(18.0) - -	粗	やや粗、白・金	(外) タテハケ (内) ヨコハケ	赤褐色	部分的にやや黒変
33	30	SI6	土師器	皿	(12.2) (2.7) (5.2)	良	やや粗、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	内面がやや煤けている
33	31	SI6	土師器	坏	(12.6) (4.2) (5.0)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	
33	32	SI6	土師器	坏	- - (5.0)	やや粗	やや粗、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	全体的に劣化している
33	33	SI6	灰釉陶器	椀	(15.6) - -	良	緻密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、施釉 (内) ロクロナデ、施釉	淡黄色	つけがけ 外面に別個体の口縁破片が付着 重ね焼きで傾き、接触したものか
34	34	SI7	土師器	皿	(12.2) (2.2) (5.4)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、見込み部粘土補充か (底) 回転糸切痕	橙色	黒斑あり　全体的にやや煤けている 見込み部中央に粘土貼り付け痕あり
34	35	SI7	土師器	坏	(13.6) (3.8) 6.4	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、ヘラ削り	橙色	口縁部に灯明痕
34	36	SI7	土師器	坏	12.4 3.8 5.0	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、ヘラ削り	橙色	小さい黒斑あり 内面口縁部の一部が黒変 内面の一部が剥離、灯明か
34	37	SI7	土師器	坏	13.1 3.8 5.1	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	明赤褐色	
34	38	SI7	土師器	脚高 高台坏	- - 10.7	良	やや密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ	橙色	
34	39	SI7	土師器	甕	(29.0) - -	良	粗、白・金	(外) タテハケ (内) ヨコハケ	褐色	全体的に黒変している
34	40	SI7	土師器	甕	- - (11.0)	良	やや密、赤・白・金	(外) タテハケ (内) ヨコハケ (底) 木葉痕	暗褐色	全体的に黒変している
37	41	SD2	土師器	脚高 高台皿	- - 5.0	良	やや粗、赤・白・金	(外) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	底部摩耗
37	42	SD2	土師器	脚高 高台皿	- - 4.8	良	やや粗、赤・白・金	(外) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	底部摩滅
37	43	SD3	土師器	甕	- - (7.6)	良	やや粗、白・金	(外) ハケメ (内) ハケメ、ナデ (底) 木葉痕	褐色	
37	44	SD3	陶器	甕	- - -	良	密、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、当て具痕	灰色	外面及び内面（頸部まで）施釉か
37	45	6 - 6Tr	土師器	坏	(12.9) (3.5) (6.6)	良	密、赤・白・金・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	
37	46	6 - 6Tr	土師器	坏	- - (5.5)	良	緻密、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	
37	47	6 - 6Tr	土師器	坏	- - -	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、線刻『大』？または『夲』？か	橙色	内面線刻あり
37	48	6 - 6Tr	土師器	羽釜	(20.0) - -	粗	粗、赤・白・黒・金	(外) タテハケ (内) ヨコハケ	鈍赤褐色	内面劣化・剥離 外面は羽部以下が黒変
37	49	6 - 11Tr	土師器	坏	- - 4.0	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	鈍黄橙色	全体的に表面が劣化
37	50	6 - 12Tr	土師器	坏	- - 5.5	良	密、赤・白・金・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	橙色	

表 14　石動遺跡支線 6 号地区　金属製品　観察表

図	番号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	材質	備考
37	51	SD2	釘	12.21	6.1	1.2	0.8		
37	52	6 - 12Tr	責金具	6.71	2.6	3.4	0.8		

表 15　石動遺跡支線 6 号地区　瓦　観察表

図	番号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	焼成	胎土	製作技法	色調	備考
37	53	6 - 13Tr	丸瓦	700	18.9	12.7	2.2	良	やや密、金・白	(凸面) 縄叩き目、ナデ (凹面) 布目痕、ヘラ削り	浅黄色	

PL13　石動遺跡98年度調査　支線6号地区

SI1・2(6-4Tr)　北から

SI1　西から

SI1 カマド　西から

SI1 遺物出土状況　西から

SI1 カマド　西から

SI1 ピット　西から

SI3　北西から

SI4　北から

SI5　北から

SI6　南から

PL 14　石動遺跡98年度調査　支線6号地区

SI6 遺物出土状況　西から

SI7　南から

6-1Tr　南から

6-2Tr　北から

6-3Tr　北から

6-5Tr　南から

6-6Tr　南から

6-7Tr　南から

6-9Tr・SD2　南から

6-8Tr　東から

PL15　石動遺跡98年度調査　支線6号地区

6-9Tr　南から

6-10Tr　南から

6-11Tr　南から

6-11Tr　西から

6-12Tr　北から

6-12Tr　北西から

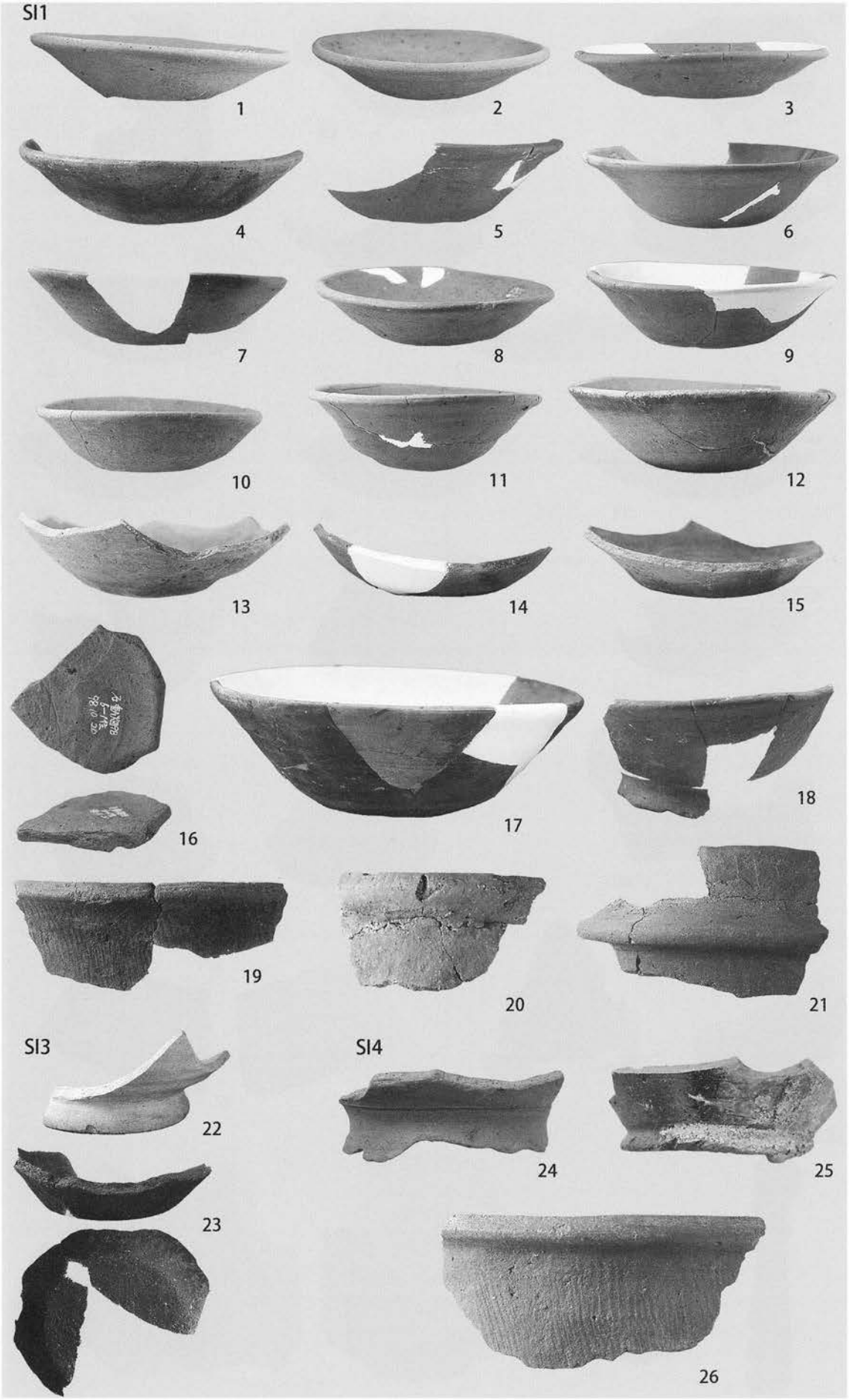
6-12Tr　北から

6-12Tr　1号石列　北から

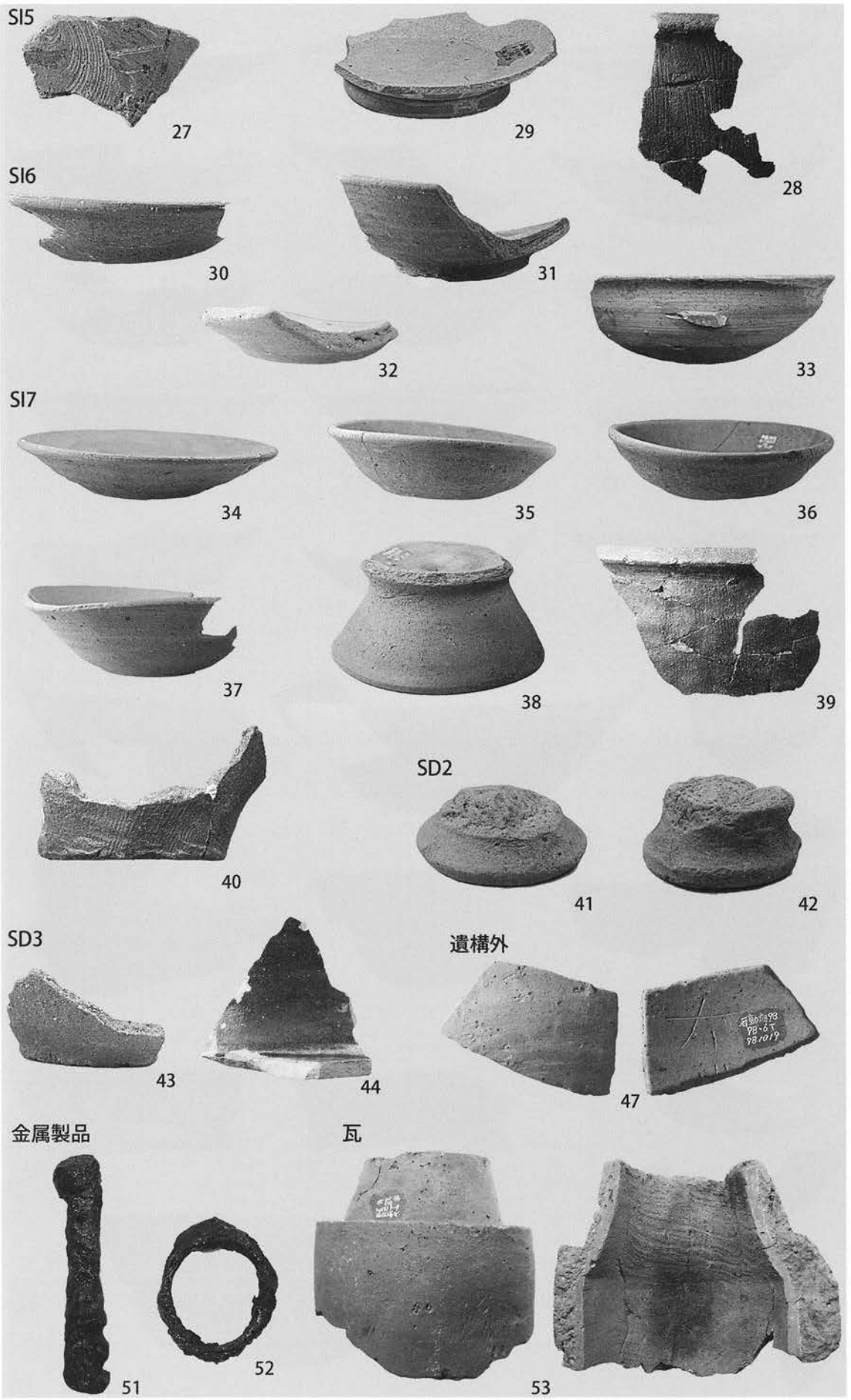
6-13Tr　北から

6-13Tr　東から

PL 16　石動遺跡98年度調査　支線6号地区



PL17 石動遺跡98年度調査 支線6号地区



Ⅳ.支線9号地区

建設範囲の既存道路(北東方向約230m間)の拡幅部分に、14箇所のトレンチを設定し、約290㎡を調査した。調査の結果、住居跡7軒、土坑6基、ピット4基、集石3基、溝3条、鋳造関連遺構を検出した他、旧河道を確認した。

前述のとおり、支線9号は石動遺跡・北中原遺跡の境界にあたるため、道路を境に北側は石動遺跡支線9号地区、南側に設定したトレンチ分は、北中原遺跡(第3次)となる。

本書では北中原遺跡（第3次）地区から検出した遺構は、同調査名を付している。また、下記に遺構一覧表(表17)・トレンチ一覧表(表16)を示したのであわせてご参照のうえ。ご留意いただきたい。

1.調査トレンチ

～石動遺跡支線9号地区～

9-1Tr　GG-12･HH-12グリッドに位置する。既存道路に沿って、幅約2mの弧状のトレンチを設定した。約40㎡の範囲を調査し、地表面から最深60㎝まで掘削した。遺構確認面は地表面から約20cmの深さであり、住居跡1軒(SI1)、土坑1基(SK1)、溝2条(SD1･2)、旧河道を確認した。

9-3Tr　V-15･W-15グリッドに位置する。既存道路に沿って約5m、幅1mの範囲を調査し、地表面から最深45cm掘削した。地山には礫が混在しており、遺構は確認できなかった。土師器坏・甕が僅かに出土したが、小片のため、図化しなかった。

9-4Tr　V-16グリッドに位置する。既存道路に沿って約5.3m、幅1.3mの範囲を調査し、地表面から最深85cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約20cmの深さであり、住居跡1軒(SI3)、土坑1基(SK)を検出した。他、遺構外遺物として土師器坏(76)などが出土した。

9-5Tr　R-17･S-17グリッドに位置する。既存道路に沿って約6.5m、幅1.3mの範囲を調査し、地表面から最深22cmまで掘削した。部分的に硬化面が確認でき、道路状遺構と推定した。

9-6Tr　Q-17･R-17グリッドに位置する。既存道路に沿って約4m、幅1.5mの範囲を調査し、地表面から最深34cmまで掘削した。トレンチ西半分は礫層で、遺構はなかったが、焙烙塝(77)、砥石(100)が出土した。

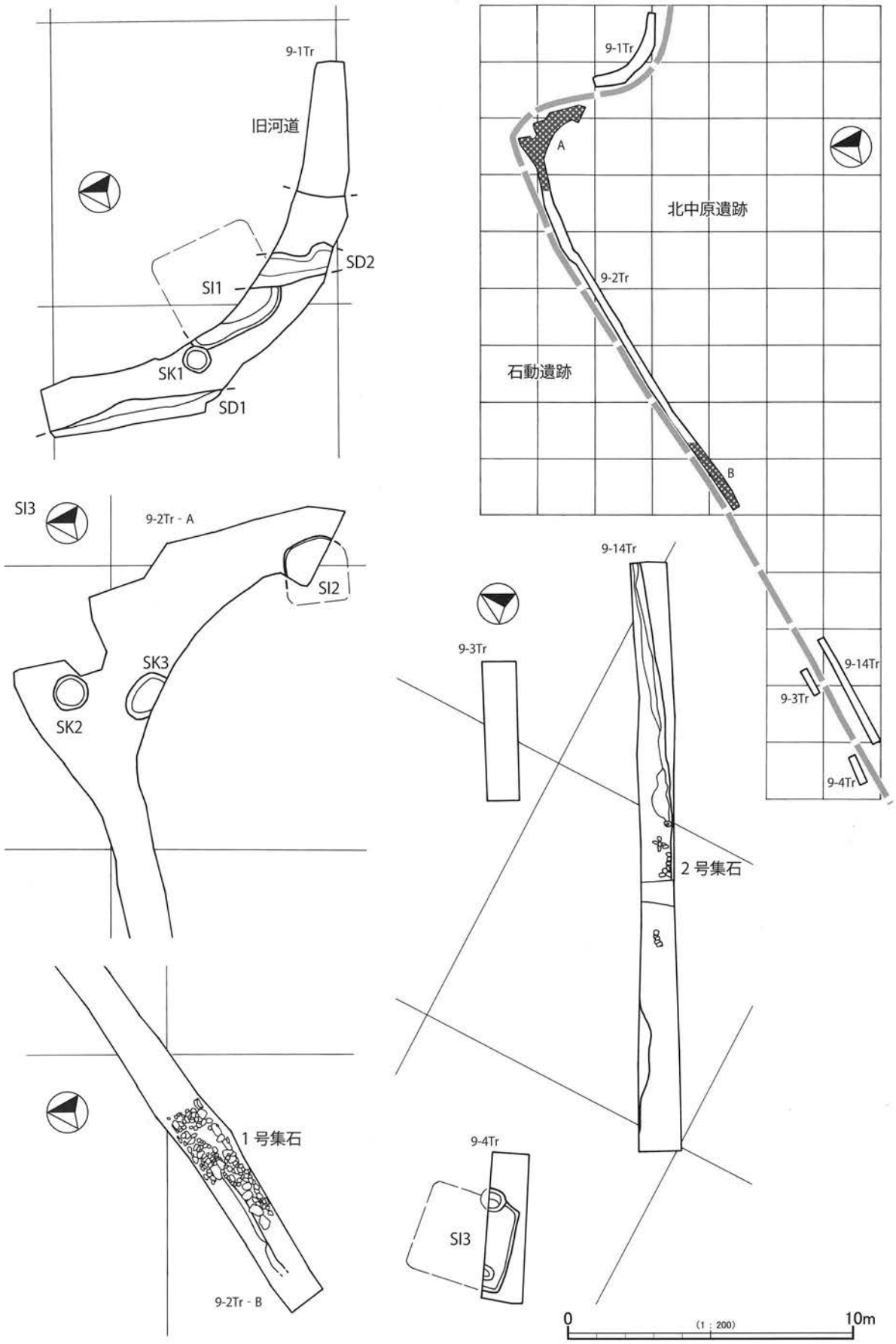
9-7Tr　Q-18グリッドに位置する。既存道路に沿って約4m、幅1.5mの範囲を調査し、地表面から最深38cmを測った。遺構はなく、地山に多量の礫が混在していた。

9-8Tr　N-19･O-19グリッドに位置する。既存道路に沿って約4.3m、幅1.4mの範囲を調査し、地表面から最深65cm掘削した。遺構はなく、全面的に礫が多く混在していた。

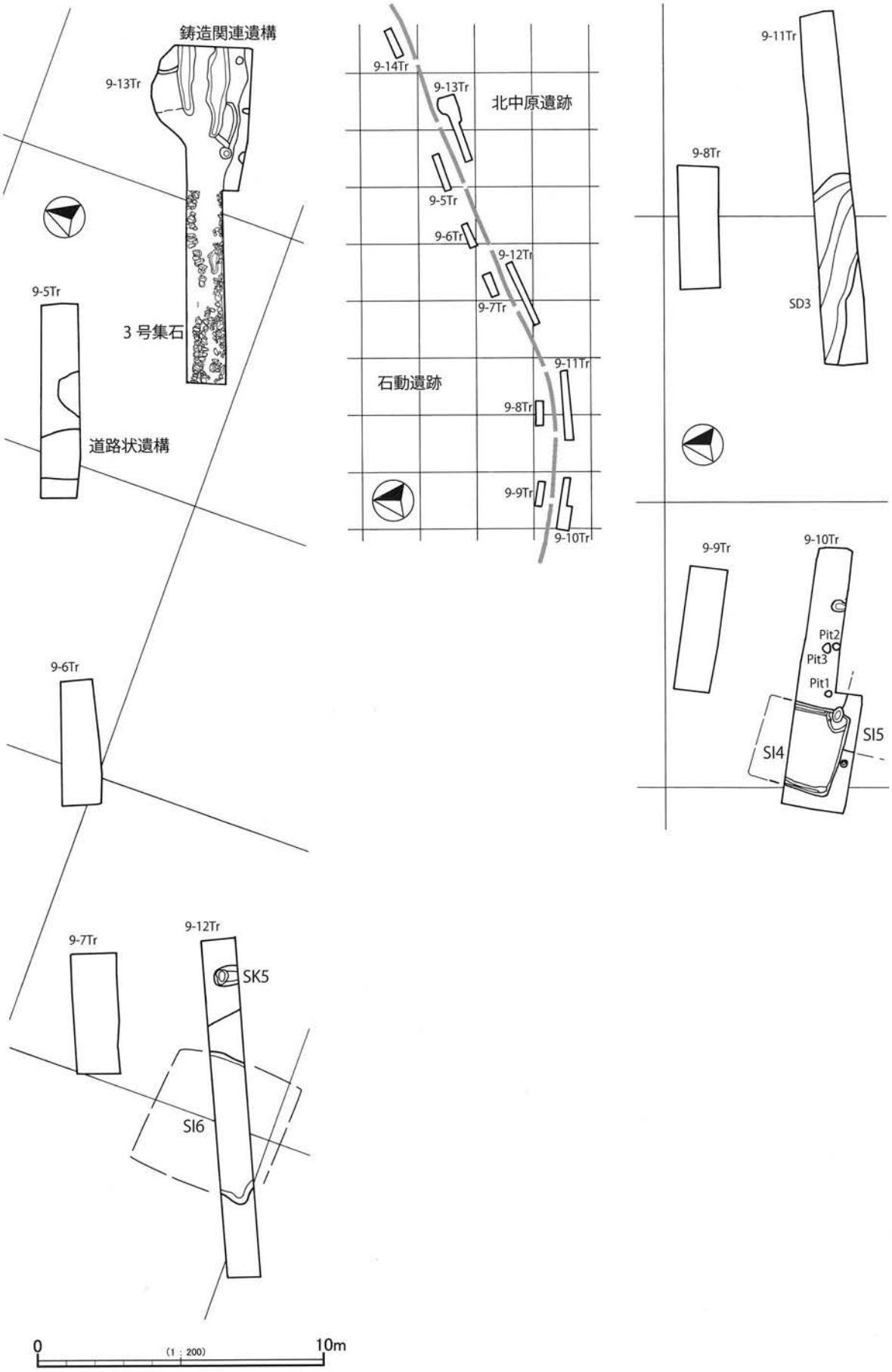
9-9Tr　M-19グリッドに位置する。既存道路に沿って約4.3m、幅1.3mの範囲を調査し、地表面から約50cmまでを掘削した。遺構は確認できなかった。内耳塝と思われる土器片(78)、釘(89)が出土した。

～北中原遺跡（第3次）～

9-2Tr　Z-13･14･AA-13･BB-12･13･CC-12･DD-11･12･EE-11･FF-10･11･GG-11グリッドに位置する。既存道路に沿って約90m、幅約1.3～2mのトレンチを設定した。調査面積は約130㎡、地表面から最深70cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から


9-1Tr
旧河道
SD2
SI1
SK1
SD1
9-1Tr
A
北中原遺跡
9-2Tr
石動遺跡
B
SI3
9-2Tr - A
SI2
SK3
SK2
9-14Tr
9-3Tr
9-14Tr
9-3Tr
9-4Tr
2号集石
1号集石
9-4Tr
SI3
9-2Tr - B
0
(1 : 200)
10m

第38図　遺構位置図(1)


鋳造関連遺構
9-13Tr
3 号集石
9-5Tr
道路状遺構
9-6Tr
9-7Tr
9-12Tr
SK5
SI6
9-14Tr
9-13Tr
北中原遺跡
9-5Tr
9-6Tr
9-12Tr
9-7Tr
9-11Tr
石動遺跡
9-8Tr
9-9Tr
9-10Tr
9-11Tr
9-8Tr
SD3
9-9Tr
9-10Tr
Pit2
Pit3
Pit1
SI5
SI4
0
(1：200)
10m

第39図　遺構位置図(2)

約 45cm の深さで、住居跡 1 軒 (SI2)、土坑 2 基 (SK2・3)、集石遺構 1 基 (1 号集石) を確認した。SI2 出土の炉壁片や、遺構外遺物に銅が付着した須恵器小皿 (73)・土師器坏 (74) などがあることから、鋳造に関連する遺構の存在が推測される。他、遺構外遺物として土師器甕の胴部片を使用した土製円盤 (75) などが出土した。

9-10Tr L・M-19 グリッドに位置する。既存道路に沿って約 9m、幅 1 m のトレンチ設定を行い、地表面から最深 106cm まで掘削した。なお、検出した遺構については一部拡張を行って調査した。遺構確認面は地表面から約 40cm の深さであり、住居跡 2 軒 (SI4・5) を検出した。他、天聖元寳 (96)、鉄滓 (86) が出土した。

9-11Tr N・O-19 グリッドに位置する。既存道路に沿って約 12m、幅 1.4m の範囲を調査し、地表面から最深 120cm 掘削した。遺構確認面は地表面から約 40cm で、溝 1 条 (SD3) を検出した。他、遺構外遺物として香炉片 (80) などが出土した。

9-12Tr P-18・19・Q-18 グリッドに位置する。既存道路に沿って約 12m、幅 2m の範囲を調査し、地表面から最深 120cm 掘削した。遺構確認面は、地表面から約 80cm の深さで、住居跡 2 軒 (SI6・7)、土坑 1 基 (SK6) を検出した。他、遺構外遺物として須恵器蓋 (81)、緑釉陶器椀 (82)、焙烙鍋 (83) などが出土した。

9-13Tr S・T-17 グリッドに位置する。既存道路に沿って約 12m、幅 1.4m のトレンチを設定し、部分的に拡張を行った。掘削深度は地表面から最深 150cm を測った。地表面から約 40cm の深さで石列 (1 号石列) を確認し、約 1m の深さで鋳造関連遺構を確認した。他、遺構外遺物として土師器坏 (61 ～ 63・67・68)、高台付坏 (64)、柱状高台坏 (65)、須恵器壺 (66)・甕 (69)、釘 (90)、永楽通寳 (97)、鉄滓 (93)、銅製品 (94)、丸瓦 (98) などが出土した。

9-14Tr V-16 グリッドに位置する。既存道路に沿って約 21m、幅 1m の範囲を調査し、地表面から最深 165cm まで掘削した。遺構確認面は地表面から約 60cm の深さで、石列 1 箇所を検出した。溝 1 条 (SD4) を検出した。他、遺構外遺物として、土師器坏 (84)、釘 (87) が出土した。

表 16　石動遺跡支線 9 号地区　トレンチ一覧

位 置	遺構名	遺跡名
1Tr	SI1、SK1、SD1・2、旧河道	石　動
2Tr	SI2、SK2・SK3、1 号集石	北中原
3Tr	遺構なし	石　動
4Tr	SI3、SK4	石　動
5Tr	道路状遺構	石　動
6Tr	遺構なし	石　動
7Tr	遺構なし	石　動
8Tr	遺構なし	石　動
9Tr	遺構なし	石　動
10Tr	SI4・5、Pit1 ～ 4	北中原
11Tr	SD3	北中原
12Tr	SI6・7、SK5	北中原
13Tr	鋳造関連遺構、3 号集石	北中原
14Tr	2 号集石	北中原

表 17　石動遺跡支線 9 号地区　遺構一覧

遺構名	位 置	時 期	遺跡名
SI1	1Tr	9C 後半～ 10C 代	石　動
SI2	2Tr	不明	北中原
SI3	4Tr	10C 後半頃	石　動
SI4	10Tr	10C 前半頃	北中原
SI5	10Tr	SI4 廃絶以降	北中原
SI6	12Tr	11C 中頃	北中原
SI7	12Tr	SI6 廃絶以降	北中原
SK1	1Tr	不明	石　動
SK2	2Tr	不明	石　動
SK3	2Tr	不明	石　動
SK4	4Tr	不明	石　動
SK5	10Tr	不明	北中原
SK6	12Tr	不明	石　動
鋳造関連遺構	13Tr	中世段階	北中原
SD1	1Tr	10C 後半頃	石　動
SD2	1Tr	10C 中頃	石　動
SD3	11Tr	不明	北中原
1 号集石	2Tr	不明	北中原
2 号集石	14Tr	不明	北中原
3 号集石	13Tr	近世・近代頃	北中原
Pit1 ～ 4	10Tr	不明	北中原
旧河道	1Tr	不明	石動
道路状遺構	5Tr	不明	石動

2．発見した遺構・遺物

・SI1〔第40図〕

位置と検出状況　GG･HH-12グリッド、9-1Trに位置する。重複するSK1に北西隅、SD2に南壁の一部を壊されていた。調査範囲においては南壁と西壁を確認した。規模は不明であるが、西壁の長さは約3.5 m、確認面から床面までの深さは約25cmを測った。**遺構の特徴**　検出した範囲ではカマド等の施設はなく、周溝状の落ち込み確認できた。**出土遺物**　甕(1･2)が出土した。1の甕はハケメがなく、成形後内外面に横ナデ調整が施されている。県北西部で出土するロクロ甕とは異なり、成形後に回転台に乗せ、回転横ナデを施したものと考えられる。**遺構の時期**　出土遺物から、9C後半～10C代としておく。

・SI2〔第40･41図〕　北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況　FF･GG-11グリッド、9-2Tr東端に位置する。調査範囲では重複はなく、北壁から東壁までを確認した。検出した範囲では西壁1.7m、確認面からの深さ約30cmを測った。**遺構の特徴**　調査時の所見から住居としたが、検出した範囲ではカマド施設等はなく、明確な貼り床等も確認できなかった。覆土中から炉壁片が出土しており、遺構の性格としては鋳造に関連する捨て場遺構、または少量ではあるが板状の金属片の出土や焼土炭化物が散在している状況から、鋳込み場の一画にあたる可能性も考えられる。**出土遺物**　9C中頃の土師器皿(8)と、炉壁(3～7)、用途不明鉄製品(91･92)、古銭(95)が出土した。3～5･7の内表面は指ナデや指頭痕等が確認できた。還元により胎土が灰色化し、表面に細かい発泡がみられた。6は炉底に近い部分であり、内面は発泡と溶融物の付着がみられた。95の古銭は元祐通寶である。初鋳年は1086年とされており、出土品は篆書の小平銭であった。なお、トレンチ出土であるが、73･74の土師器には溶解した銅の付着があり、トリベなどの用途で鋳造に関連した遺物と考えられる。**遺構の時期**　年代を示す出土遺物は少なく、遺構の年代は時期不明である。

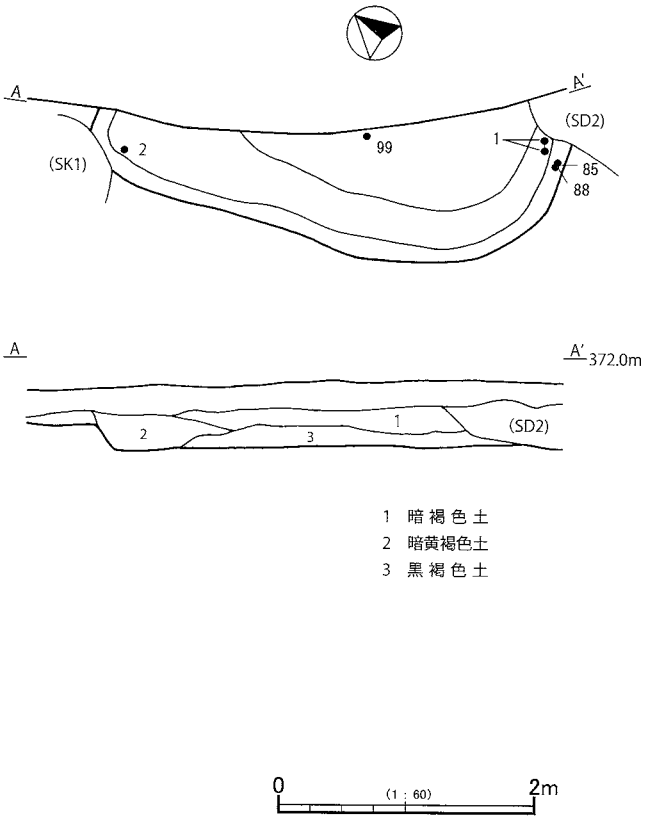
・SI3〔第42図〕

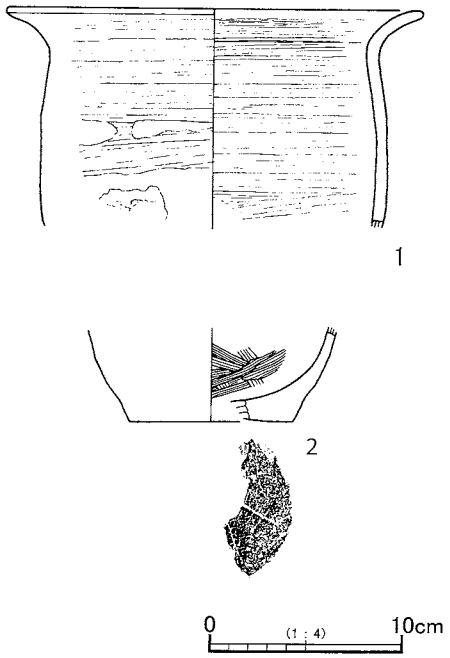
位置と検出状況　V-16グリッド、9-4Trに位置する。重複するSK4に東壁の一部を壊されていた。調査範囲においては東壁・西壁・南壁を確認し、南北の壁間は約3.5m、確認面から床面までの深さは、約35cmを測った。**遺構の特徴**　検出した範囲にカマド施設等はなかった。遺構西端で深さは20cmのピットを検出したが、性格は明確ではない。**出土遺物**　土師器皿(9)・坏(10・11)・脚高高台坏(12・13)・小型甕(14)が出土した。全体的に灯明痕や煤けた遺物が多くみられた。**遺構の時期**　出土遺物から、10C後半頃としておく。

・SI4〔第42･43図〕　北中原遺跡(第3次)

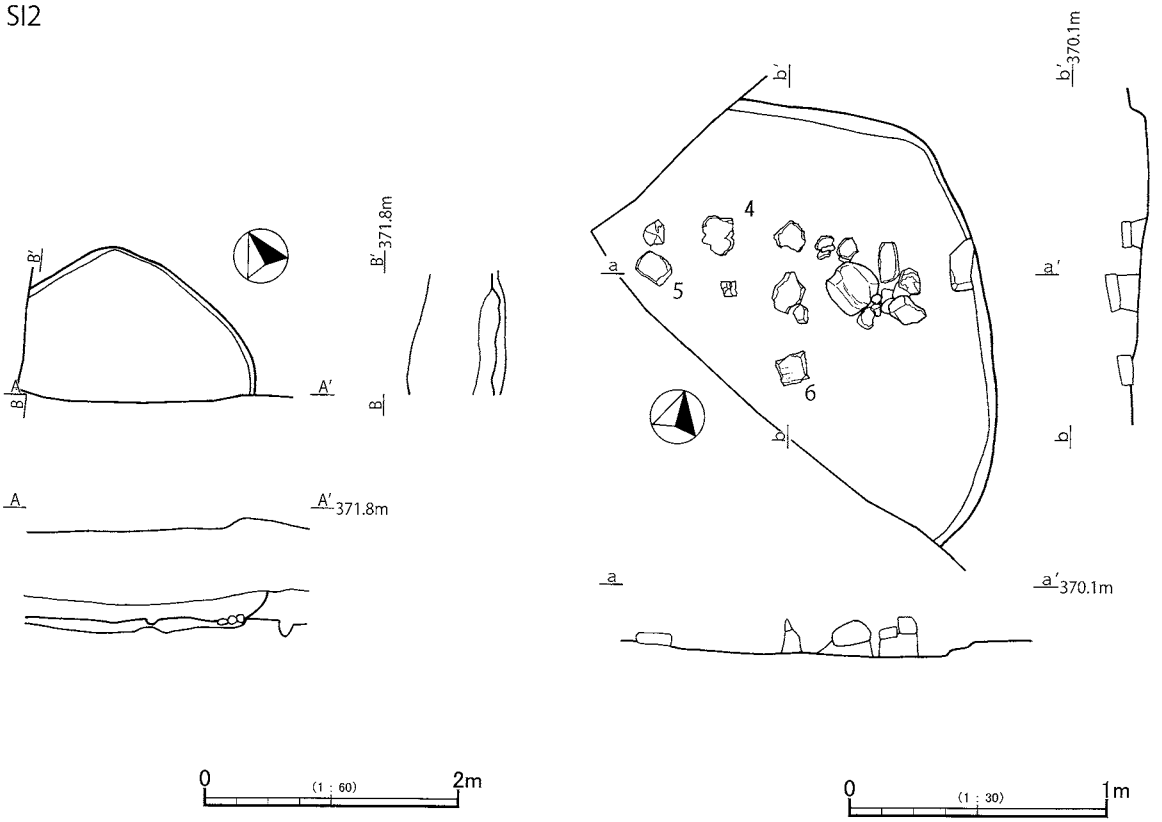
位置と検出状況　L･M-19グリッド、9-10Trの西側に位置する。重複するSI5がカマド上部を壊したと推定する。調査範囲では東壁・西壁・南壁を確認し、東西の壁間は約3m、確認面から床面までの深さは約30cmを測った。**遺構の特徴**　カマド施設は南東隅に位置する。重複するSI5の影響はほとんどみられなかった。土・炭化物と多数の礫が堆積しており、袖・東壁にかかる煙道部を確認した。**出土遺物**　遺物は少なく、土師器坏(18)、須恵器甕(19)などが出土した。18には灯明痕があり、19は両面が磨耗していた。**遺構の時期**　出土遺物の時期から、10C前半頃としておく。

SI1

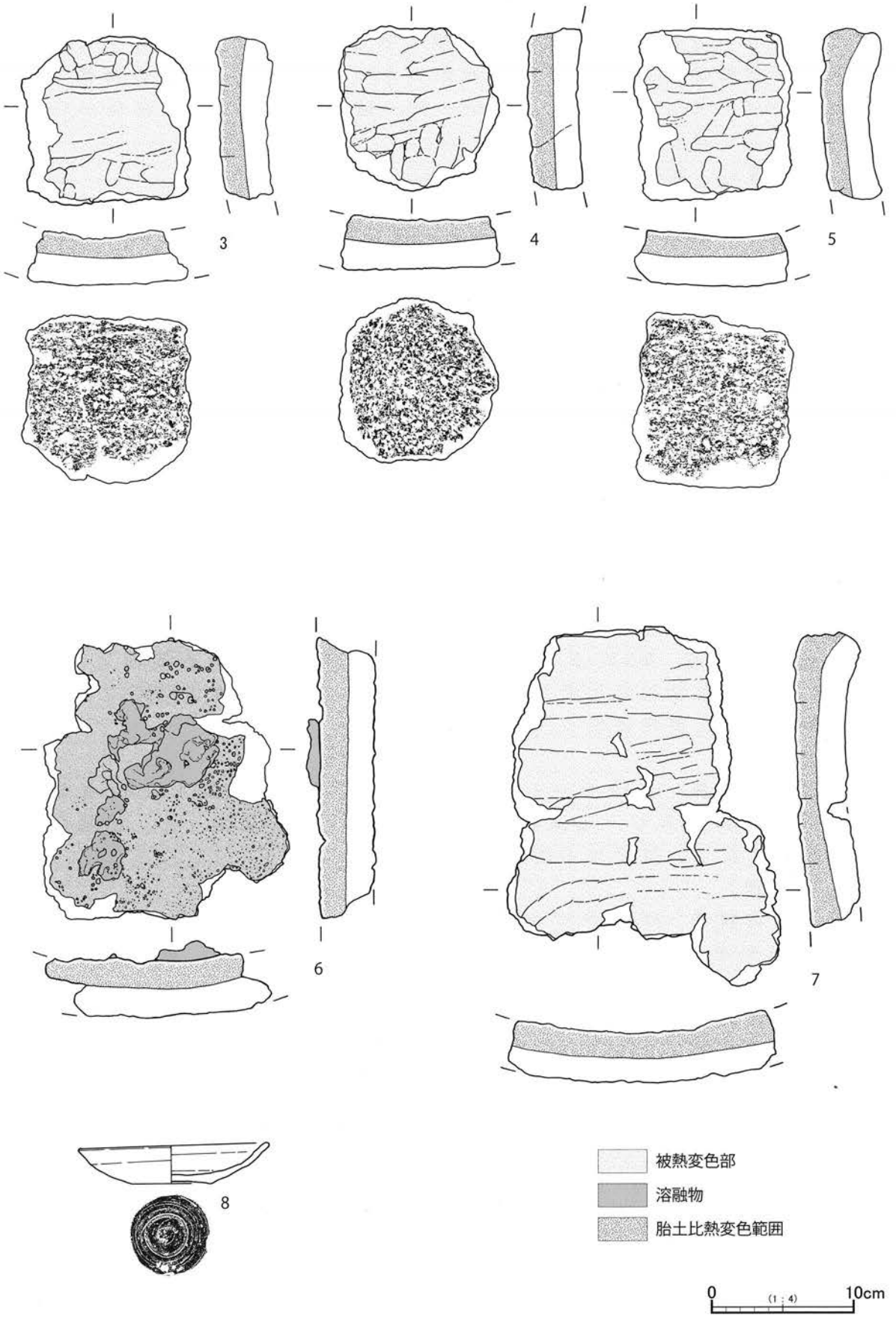




SI2



第40図　SI1・2(1)



第41図　SI2(2)

・**SI5〔第43図〕　北中原遺跡(第3次)**

位置と検出状況　M-19グリッド、9-10Trに位置する。明確な壁面は確認できず、トレンチ壁面でSI4の上層に位置することを確認した。規模は不明であるが、確認範囲では南辺約2m、西辺約0.7mを測った。**遺構の特徴**　検出した範囲では、カマド施設等はなかった。**遺構の時期**　重複関係から、SI4廃絶以降としておく。

・**SI6〔第44図〕　北中原遺跡(第3次)**

位置と検出状況　P･Q-18グリッド、9-12Trに位置する。調査範囲では西壁と東壁を確認し、調査範囲における東西の壁間は約5.5 m、確認面から床面までの深さは約18cmを測った。重複するSI7に上部を壊されていた。**遺構の特徴**　検出した範囲ではカマド施設等はなかった。**出土遺物**　灰釉陶器(20･21)が出土した。20は口縁部が僅かに外反しており、内外面は付け掛け施釉している。21は付高台で、底部には糸切痕がみられた。**遺構の時期**　出土遺物の時期から、11C中頃に位置付けておきたい。

・**SI7〔第44図〕　北中原遺跡(第3次)**

位置と検出状況　Q-18グリッド、9-12Trに位置する。重複するSI6の上部を壊していた。トレンチ壁面で確認しした遺構であり、調査範囲では東西約4.7mを測った。**遺構の特徴**　検出した範囲ではカマド施設等はなかった。**遺構の時期**　出土遺物がなく、明確な時期は不明である。SI6との重複関係から、SI6廃絶以降としておく。

・**道路状遺構〔第45図〕**

位置と検出状況　R･S-17グリッド、9-5Trに位置する。調査範囲において、黄色土ブロックを含む硬化面が部分的に確認できた。規模は明確でない。**遺構の時期**　出土遺物はなく、不明である。

・**SK1〔第45図〕**

位置と検出状況　GG-12グリッド、9-1Trに位置する。重複するSI1を壊していた。径約48cm円形で、確認面からの深さは約25cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物はなく、時期は不明である。

・**SK2〔第45図〕**

位置と検出状況　FF-10グリッド、9-2Trに位置する。重複する遺構はなく、径約60cm円形を呈し、確認面からの深さは17cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物はなく、時期は不明である。

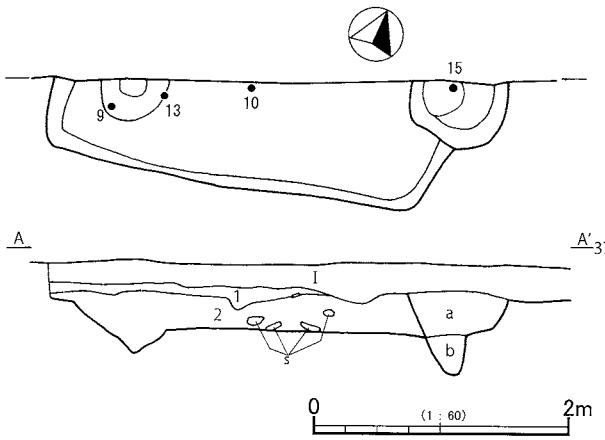
・**SK3〔第45図〕**

位置と検出状況　FF-11グリッド､9-2Trに位置する。楕円形を呈すと推定し、検出した範囲では長径約90cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物はなく、時期は不明である。

・**SK4〔第42図〕**

位置と検出状況　V-16グリッド、9-4Trに位置する。重複するSI3を壊していた。北側はトレンチ外となるため規模は明確ではないが、検出した範囲では径約75cm、確認面からの深さは約65cmを測った。**出土遺物**　土師器坏(15･16)･甕(17)が出土した。出土遺物の時期は10C後半頃であり、SI3からの混入と考えられる。**遺構の時期**　11C代としておく。段階的に、SI3廃絶後としておく。

SI3・SK4

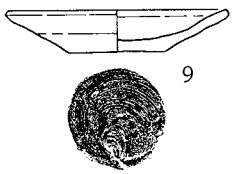


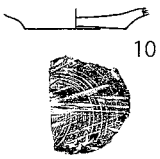
I　暗褐色土

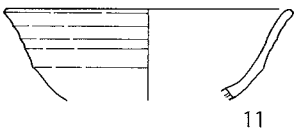
SI3
1　黒　色　土
2　暗褐色土　黄色土ブロックを含む。

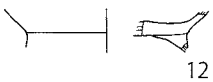
SK4
a　黒　色　土　黄色土ブロックを含む。
b　暗黄褐色土　黄色土ブロックを多量に含む。

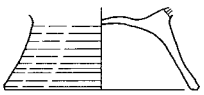
SI3

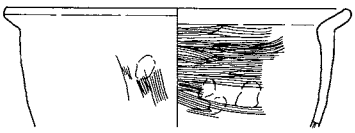






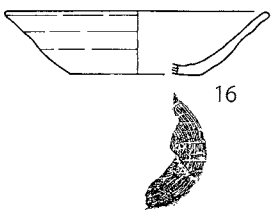






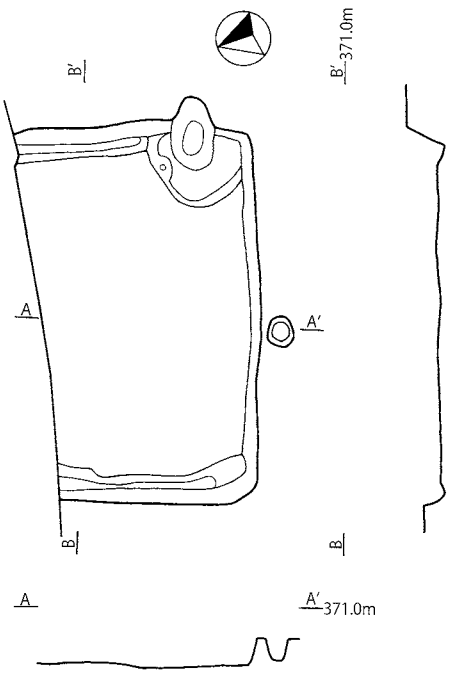
0　(1 : 4)　10cm

SK4



0　(1 : 4)　10cm

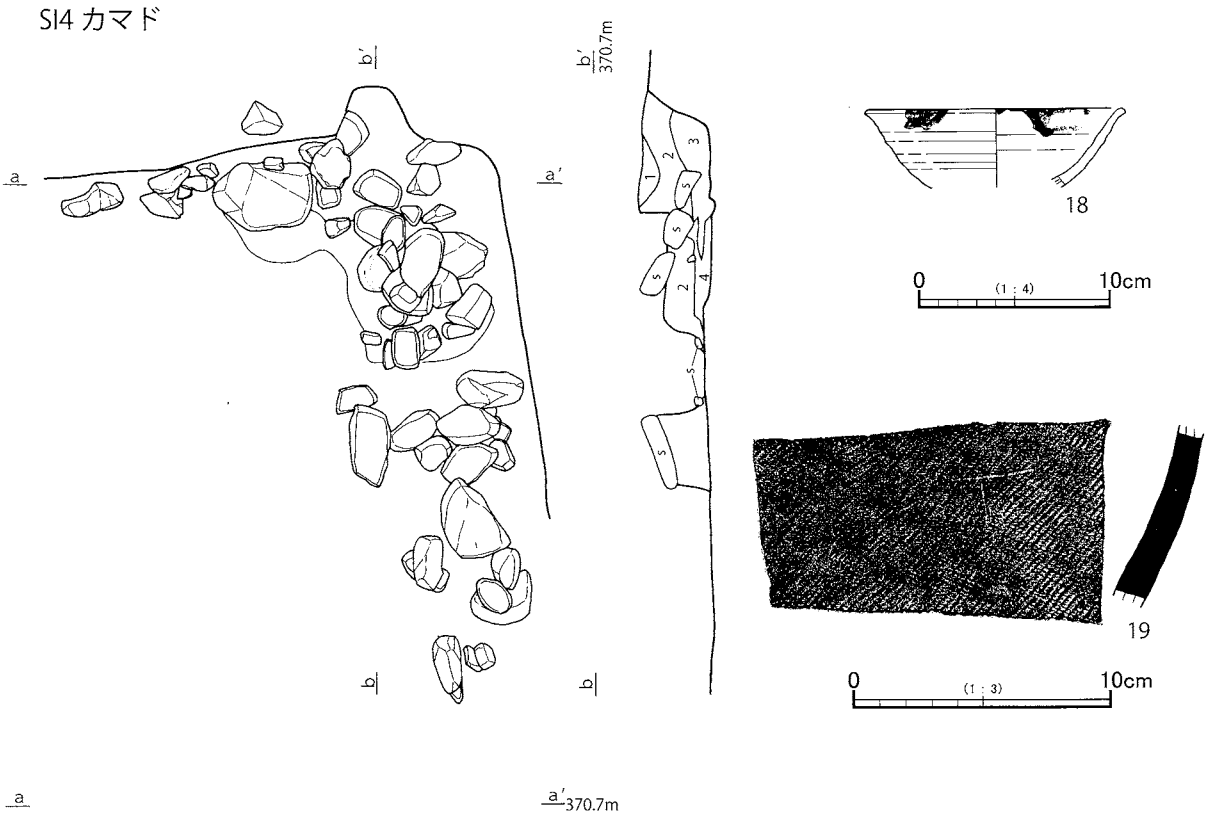
SI4



0　(1 : 60)　2m

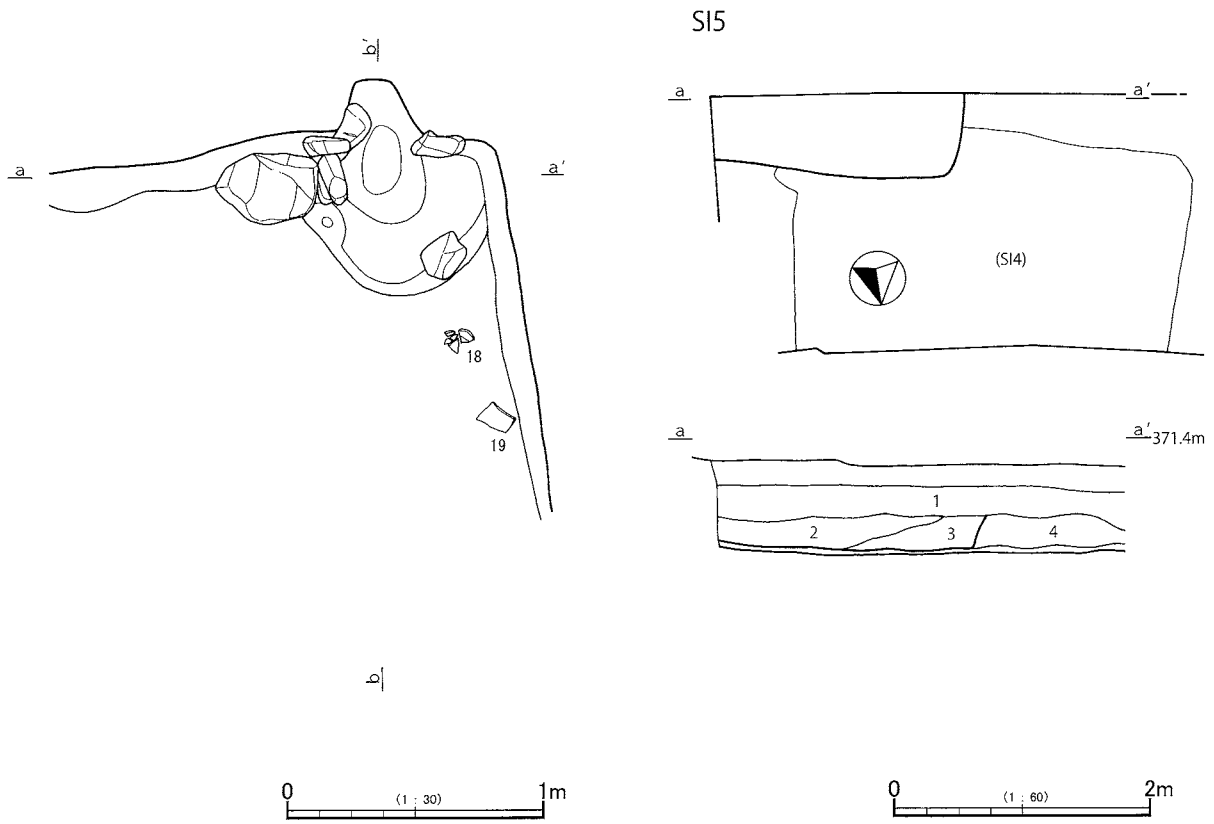
第42図　SI3・4、SK4

SI4 カマド



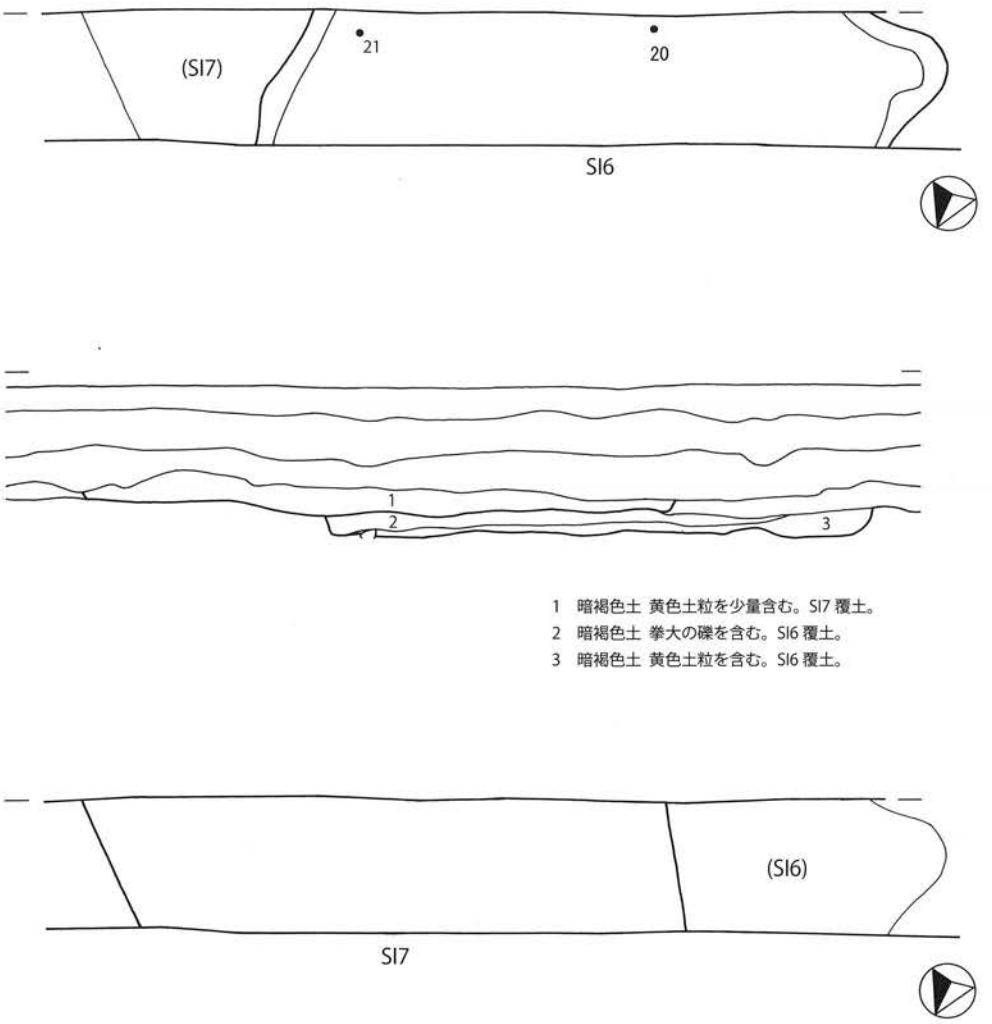
1 褐 色 土　粘土粒を含む。
2 褐 色 土　焼土ブロック。
3 暗褐色土　黄褐色土、炭化物、焼土ブロックを含む。
4 黒褐色土　焼土ブロック、炭化物を含む。

SI5

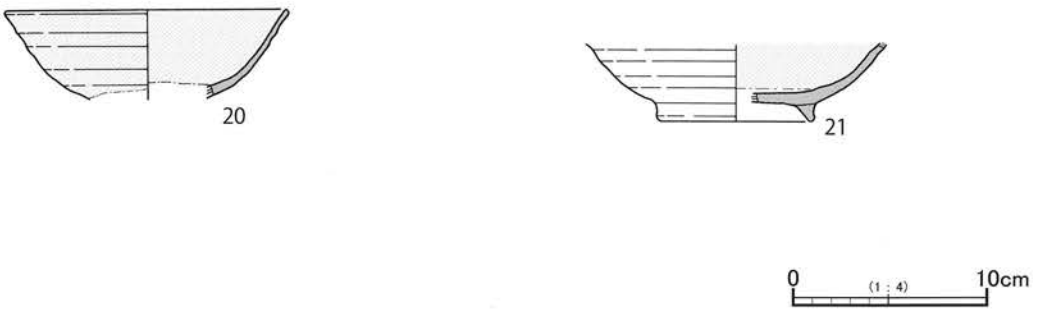


第43図　SI4(2)、SI5

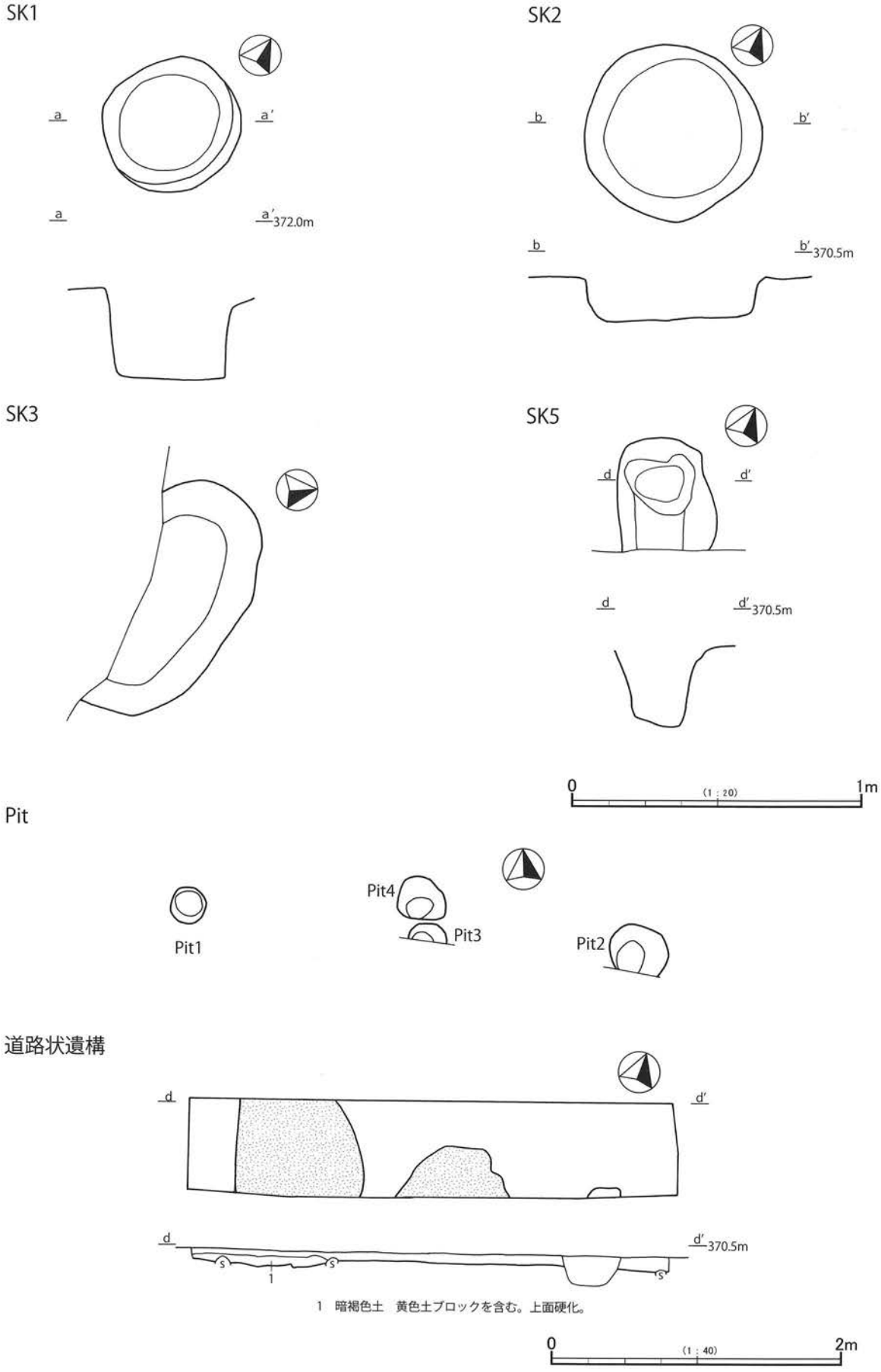
SI6・7



SI6



第44図　SI6・7



第45図 SK1～3・5、Pit、道路状遺構

・SK5〔第45図〕　北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況　Q-18グリッド、9-12Trに位置する。調査範囲では重複はなく、楕円形を呈すと推定した。検出した範囲では短径約34cm、確認面からの深さは約28cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物はなく、時期は不明である。

・Pit1～4〔第45図〕　北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況　M-19グリッド、9-10Trに位置する。いずれも調査範囲では重複はなかった。Pit1は径25cmの円形を呈す。Pit2は径34cmの不整形を呈す。Pit3は検出した範囲で径28cmを測る円形と推定する。Pit4は径41cmを測り、ほぼ円形を呈す。**遺構の時期**　出土遺物はなく、不明である。

・1号集石〔第46図〕北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況　Z-14グリッド、9-2Tr西側に位置する。調査範囲において、東西約5mの範囲で礫の堆積を確認した。規模・性格については明確ではない。出土遺物　土師器甕(22)が出土した。**遺構の時期**　出土遺物は流れ込みと考えられるため、時期は明確ではない。

・2号集石〔第46図〕北中原遺跡(第3次)

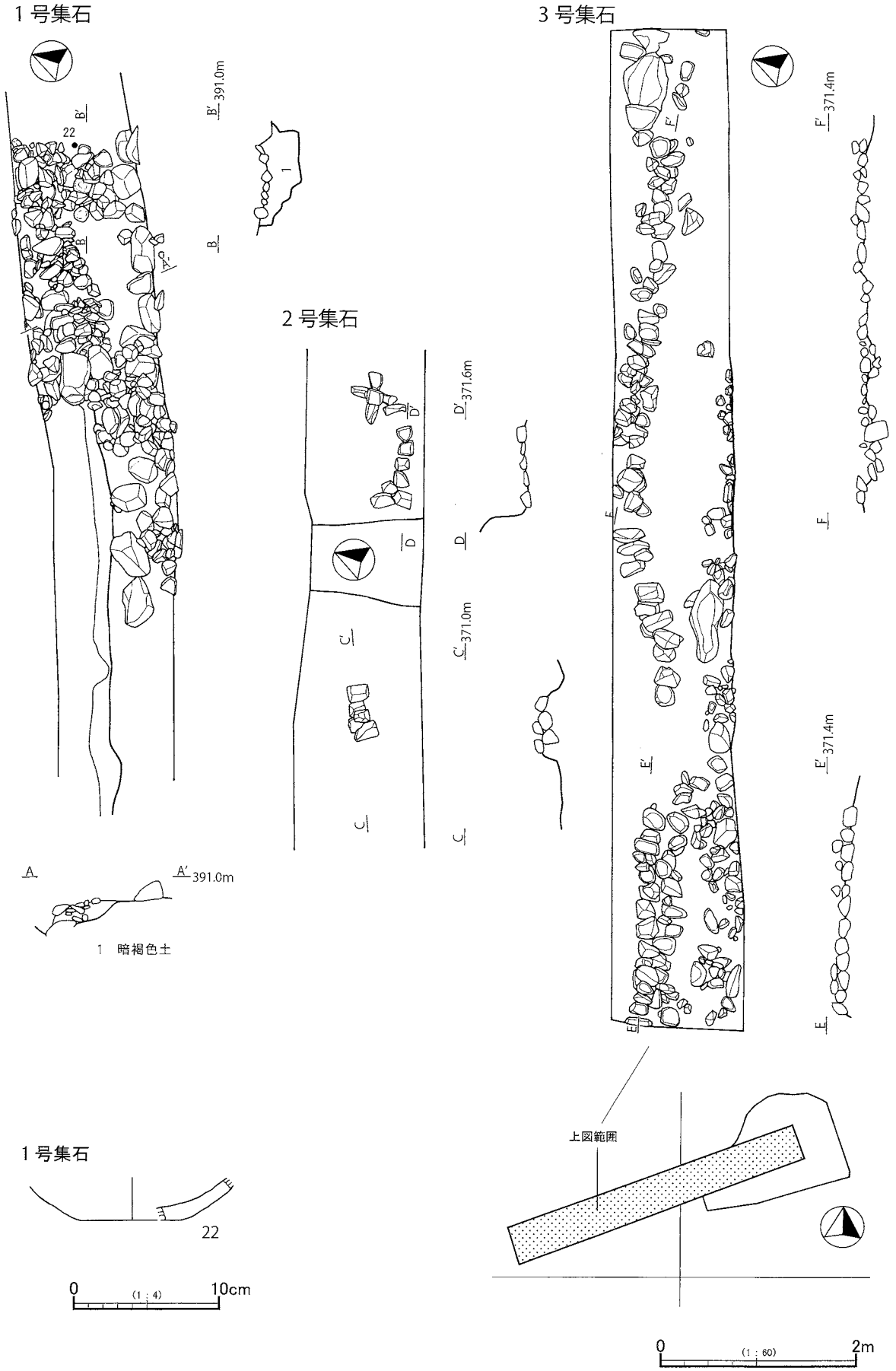
位置と検出状況　V-16グリッド、9-14Trに位置する。列状にならんだ礫を確認し、規模は明確ではないが、西壁は約3.5m、確認面から床面までの深さは約25cmを測った。**遺構の時期**　時期は明確ではない。

・3号集石〔第46図〕北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況　S･T-17グリッド、9-13Trに位置する。鋳造関連遺構の上部に位置した遺構で、確認範囲で10.5mを測った。規模は明確ではないが、旧畑地の石垣と考えられる。**遺構の時期**　集石に伴う出土遺物はなかったが、時期としては近世・近代頃まで下るものとしておく。

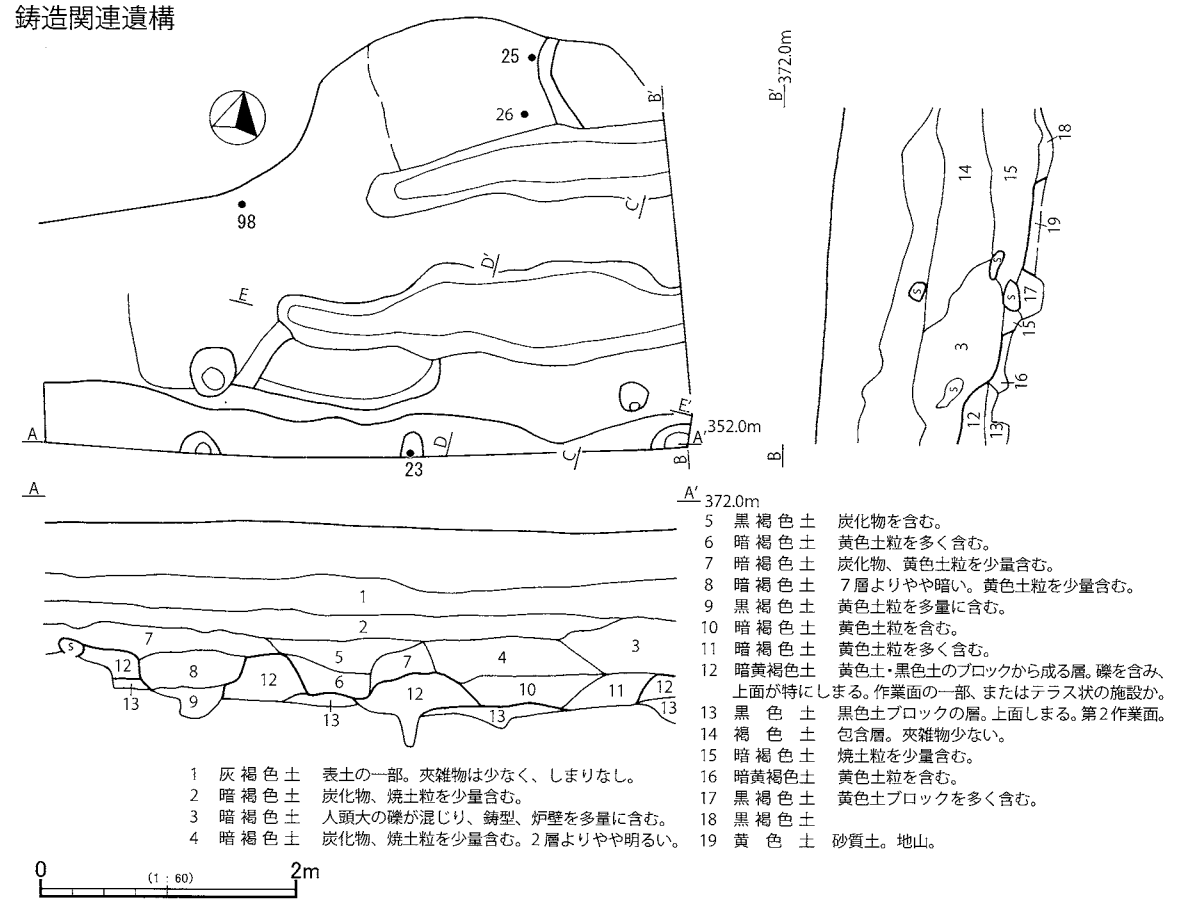
・鋳造関連遺構〔第47･48･49･50･51･52･53･54図〕北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況　T-17グリッド､9-13Trに位置する。規模は明確ではないが、調査範囲においては東西約5mの範囲に大量の鋳型が廃棄されていた。**遺構の特徴**　鋳型等の捨て場遺構の一部と考えられる。遺物包含層下には、テラス状の高まりと5基のPitがあり、最下面には2条の溝を確認した。なお、調査範囲狭小であった上、廃棄された鋳型が集積された場所と推察され、遺構範囲は明確にとらえることはできなかった。**出土遺物**　土師器小皿（23)、土師器坏(24～26)、鋳型（27～43・46・56？)、ジョウ？(43・45)、トリベ(47)、三又状土製品(48)、炉壁(49～54)、鞴羽口（58・59）等が出土した。鋳型は調査当時半分以上の形を残していたものが18点あり、内2点はほぼ完形に近い状態であった。27の鉄鍋や28の唐草文が施された鋳型は外型のみで、内子は確認できなかった。**遺構の時期**　9-13Trの遺構外遺物としては、10C後半から11C代の遺物(61～69)などが出土したが、23の土師器小皿は鋳型の堆積より下層のPitから出土した遺物であることから、少なくとも12C代以降と考えられる。ただし、27の鉄鍋や28の唐草文が施された蓋状製品もしくは茶釜と考えられる鋳型があることから、13～14cと考えられる。

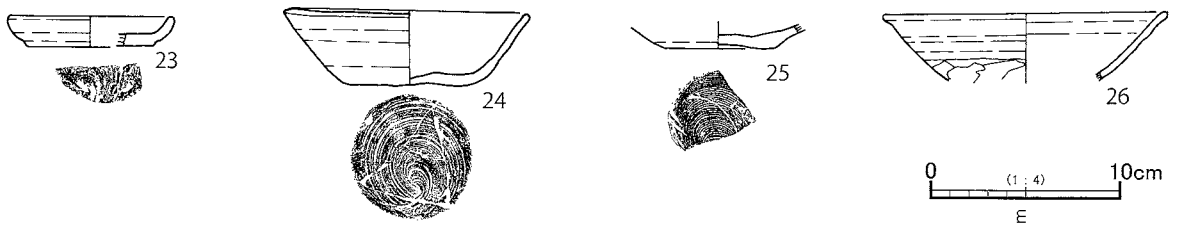

1 号集石
2 号集石
3 号集石
B' 391.0m
B
22
1
A
A' 391.0m
1 暗褐色土
D' 371.6m
D
C' 371.0m
C
F' 371.4m
F
E' 371.4m
E
上図範囲
1 号集石
22
0
(1 : 4)
10cm
0
(1 : 60)
2m

第46図　1～3号集石

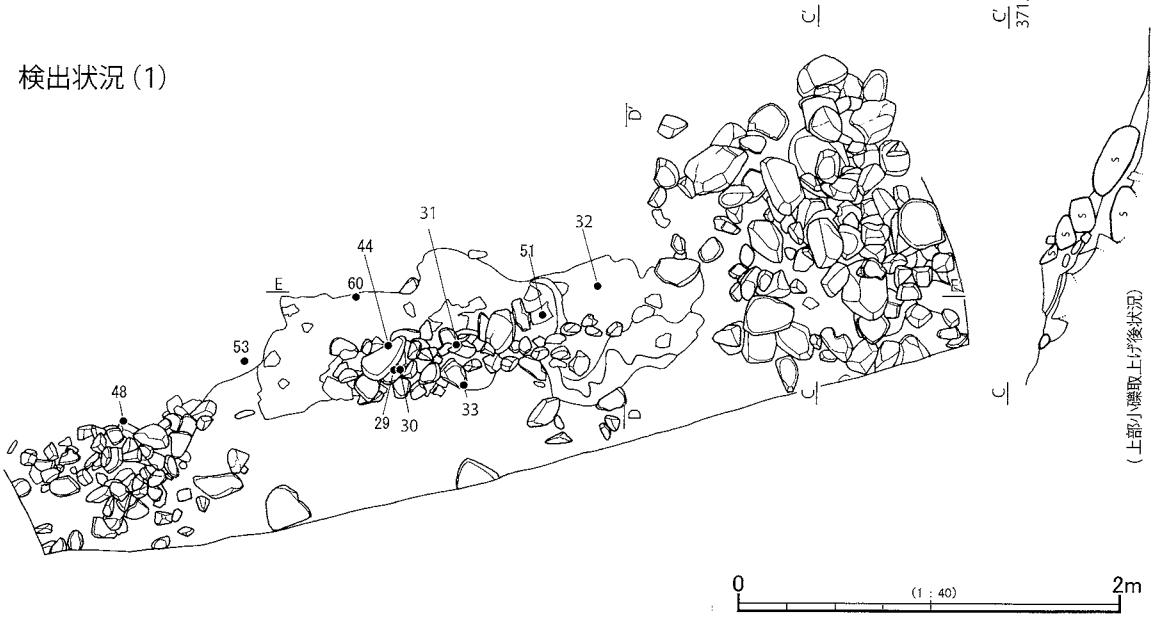
鋳造関連遺構



1　灰 褐 色 土　表土の一部。夾雑物は少なく、しまりなし。
2　暗 褐 色 土　炭化物、焼土粒を少量含む。
3　暗 褐 色 土　人頭大の礫が混じり、鋳型、炉壁を多量に含む。
4　暗 褐 色 土　炭化物、焼土粒を少量含む。2 層よりやや明るい。
5　黒 褐 色 土　炭化物を含む。
6　暗 褐 色 土　黄色土粒を多く含む。
7　暗 褐 色 土　炭化物、黄色土粒を少量含む。
8　暗 褐 色 土　7 層よりやや暗い。黄色土粒を少量含む。
9　黒 褐 色 土　黄色土粒を多量に含む。
10　暗 褐 色 土　黄色土粒を含む。
11　暗 褐 色 土　黄色土粒を多く含む。
12　暗黄褐色土　黄色土・黒色土のブロックから成る層。礫を含み、上面が特にしまる。作業面の一部、またはテラス状の施設か。
13　黒　色　土　黒色土ブロックの層。上面しまる。第 2 作業面。
14　褐　色　土　包含層。夾雑物少ない。
15　暗 褐 色 土　焼土粒を少量含む。
16　暗黄褐色土　黄色土粒を含む。
17　黒 褐 色 土　黄色土ブロックを多く含む。
18　黒 褐 色 土
19　黄　色　土　砂質土。地山。

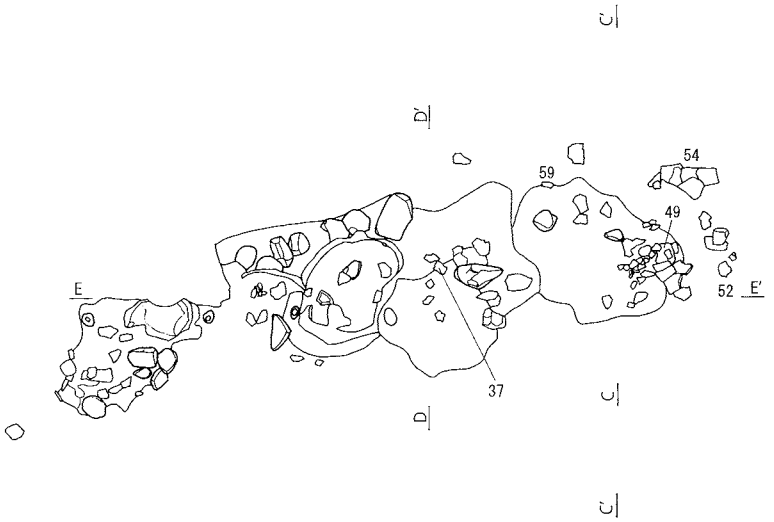


検出状況 (1)

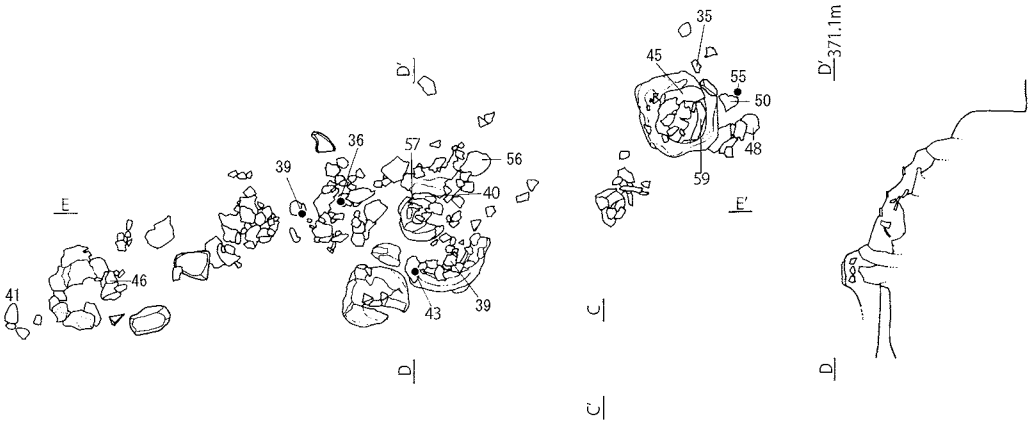


第47図　鋳造関連遺構(1)

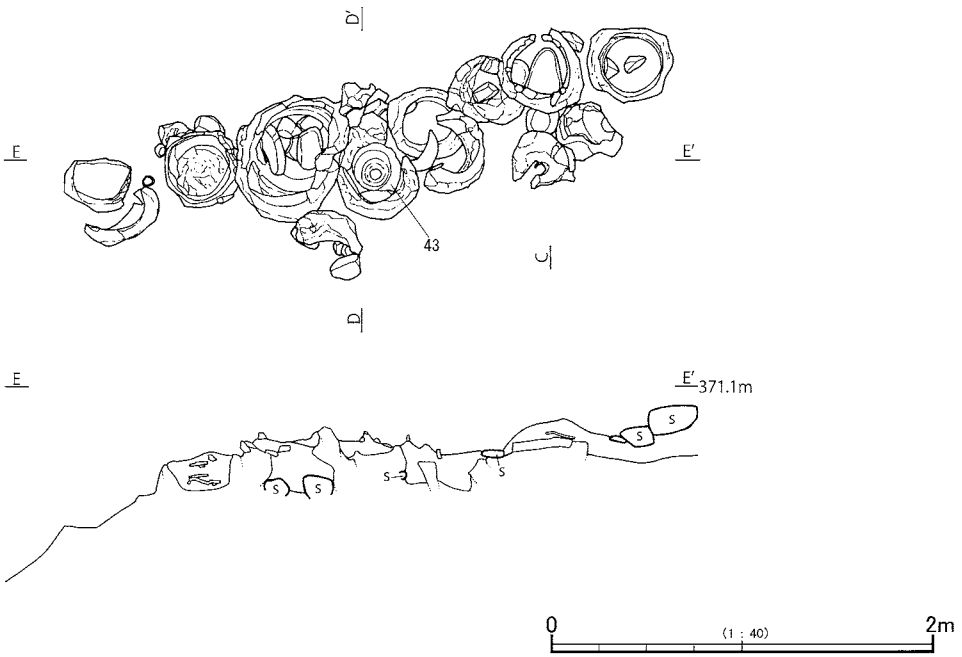
検出状況（2）



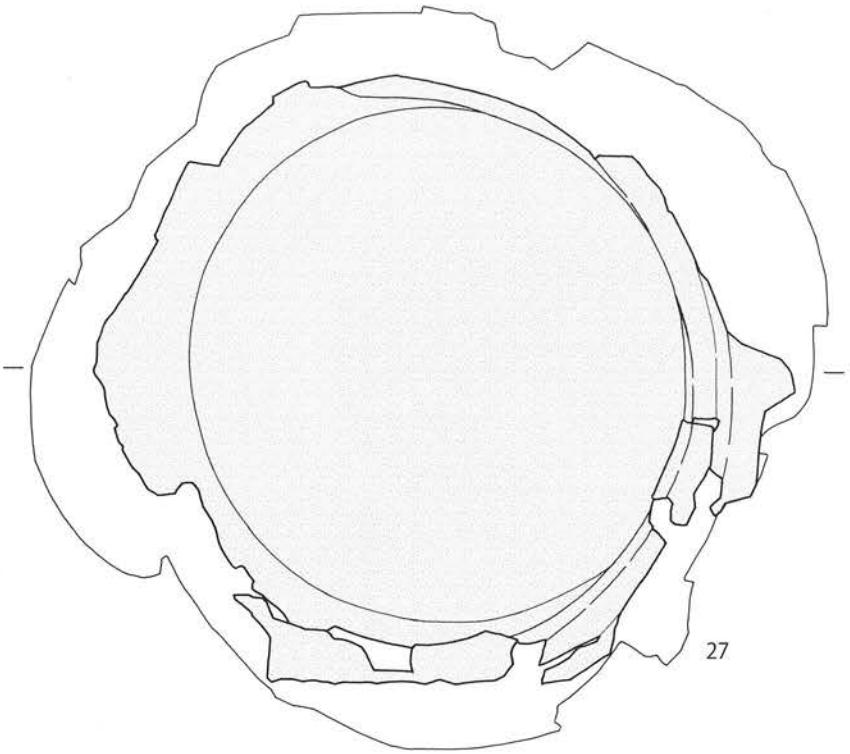
検出状況（3）

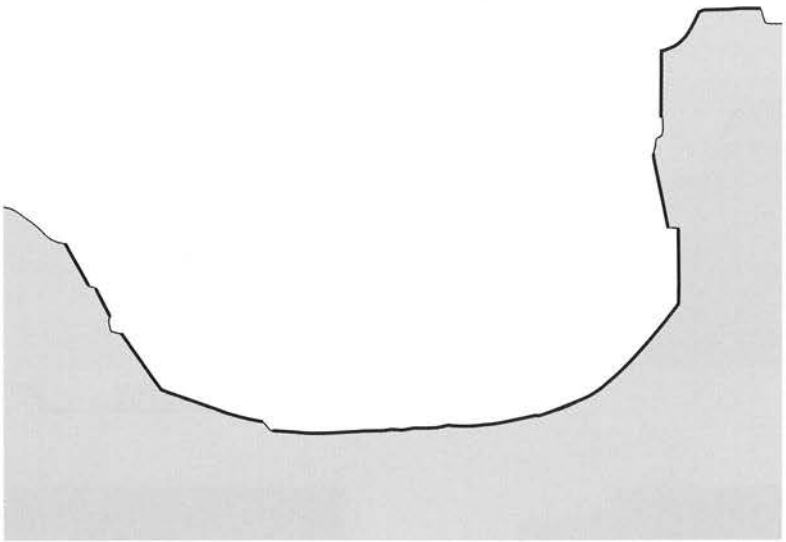


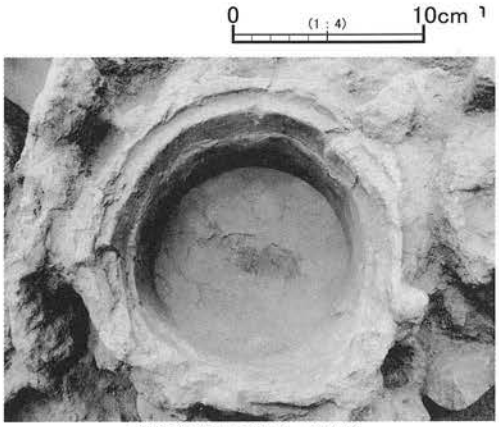
検出状況（4）



第48図　鋳造関連遺構(2)

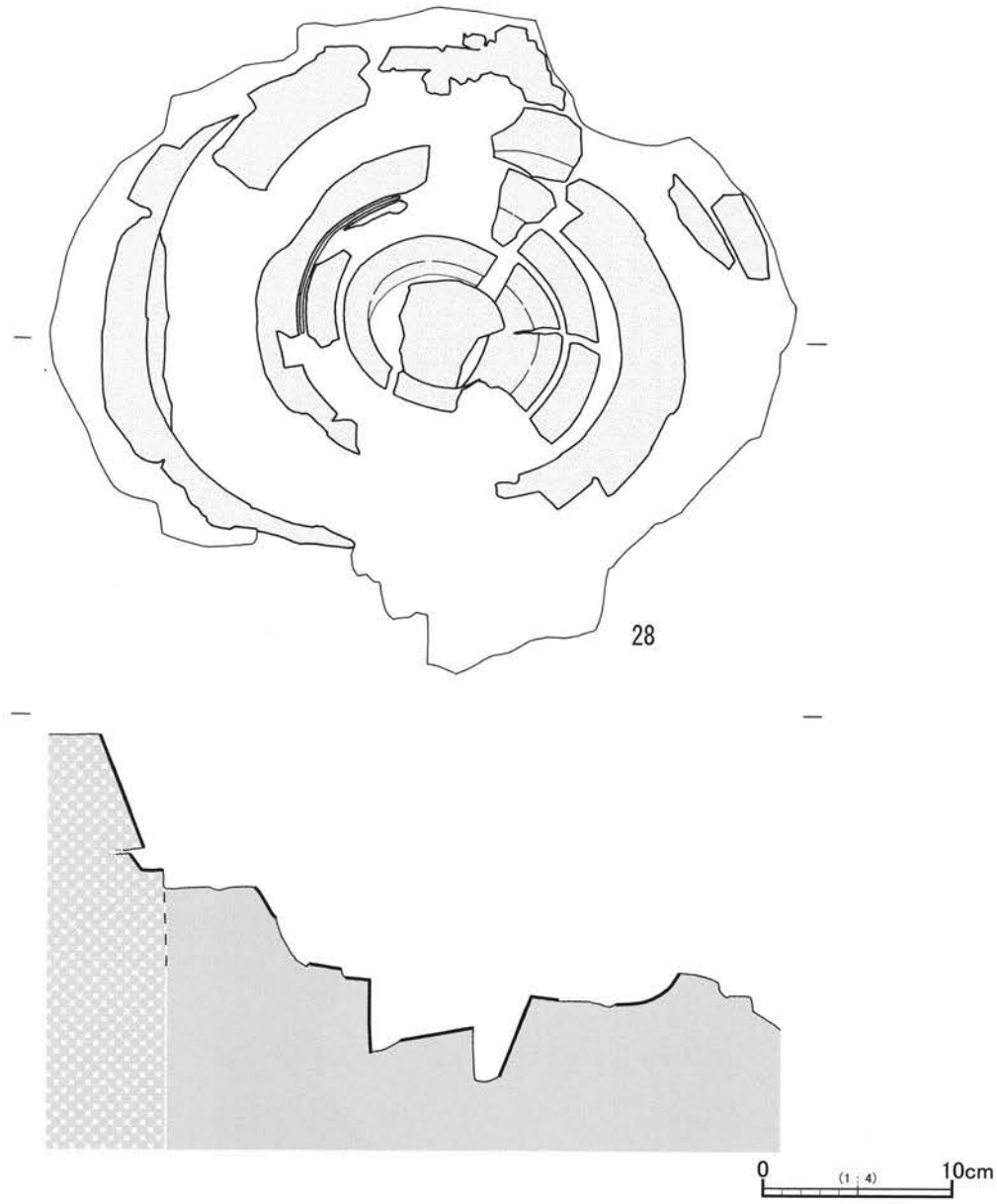




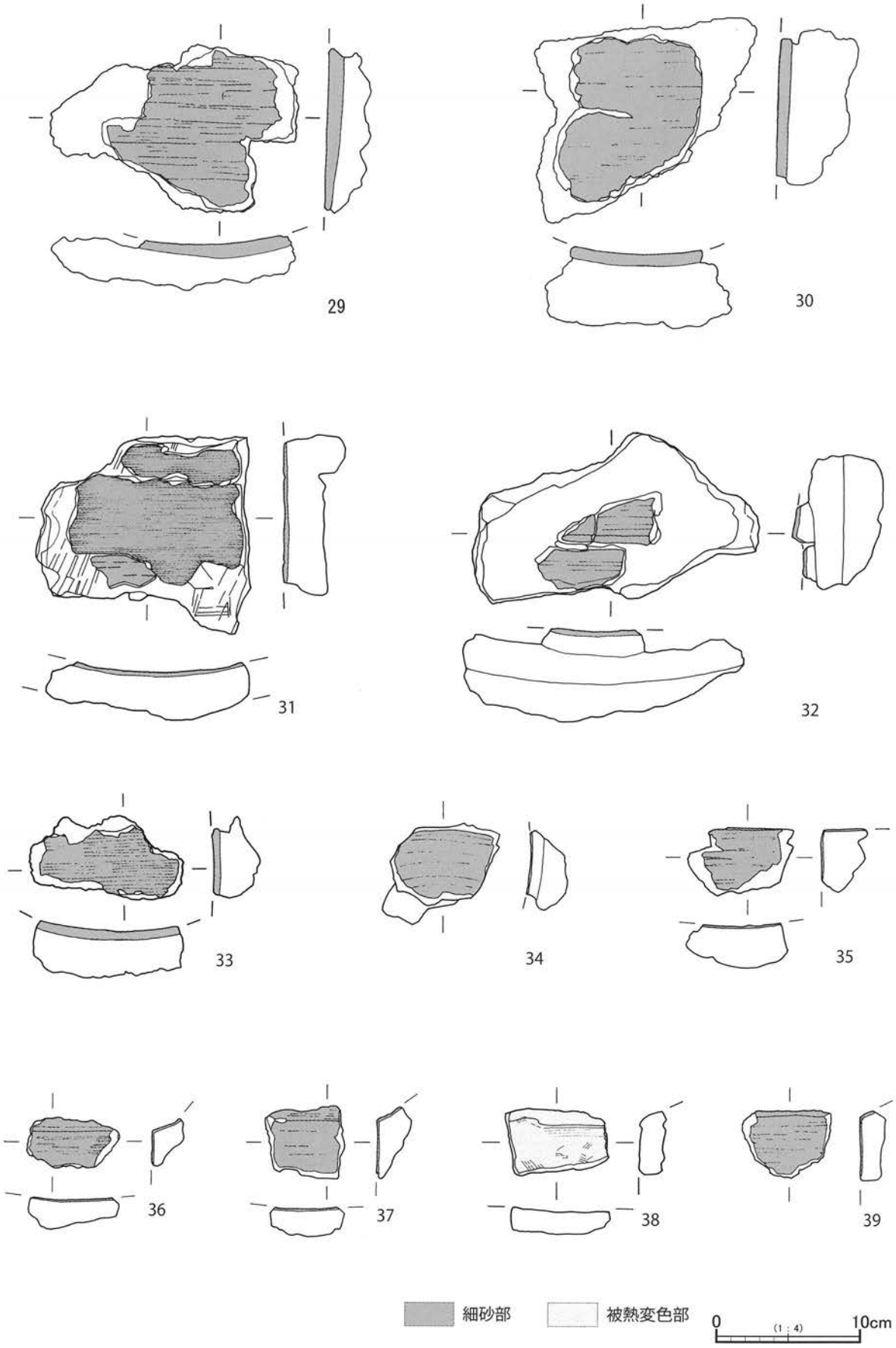


鋳造関連遺構レプリカ　27 部分

第49図　鋳造関連遺構(3)

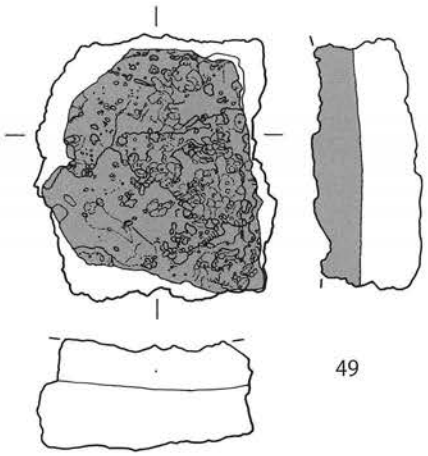


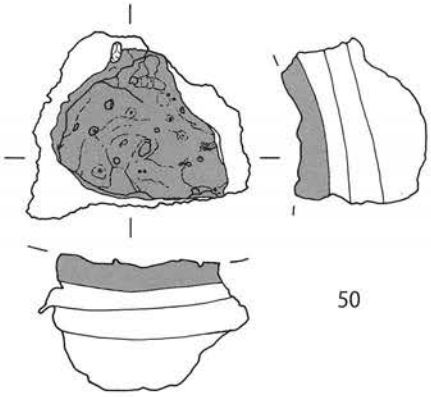
第50図　鋳造関連遺構(4)

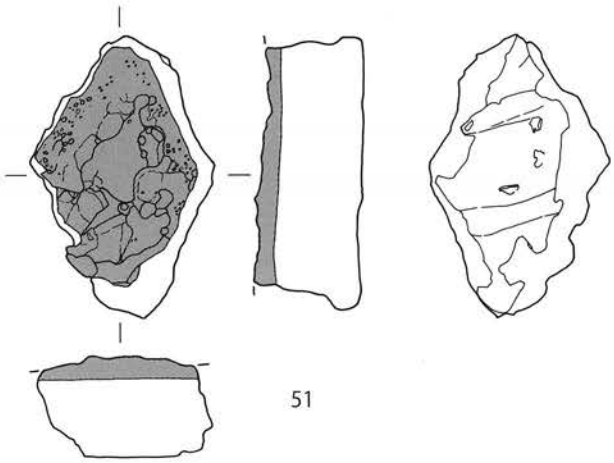


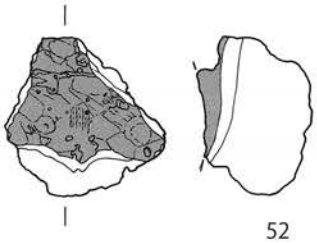
第51図　鋳造関連遺構(5)

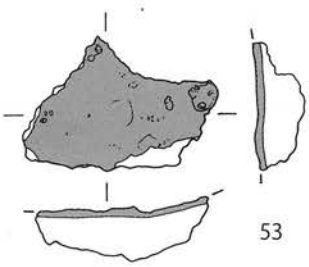
第52図　鋳造関連遺構(6)

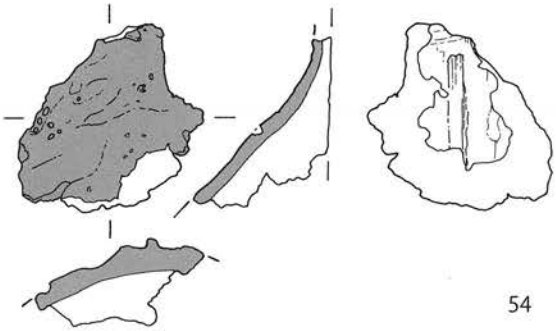


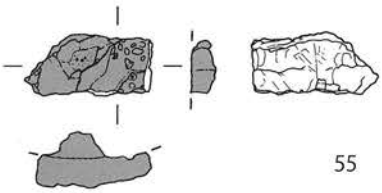


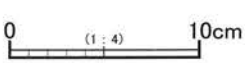




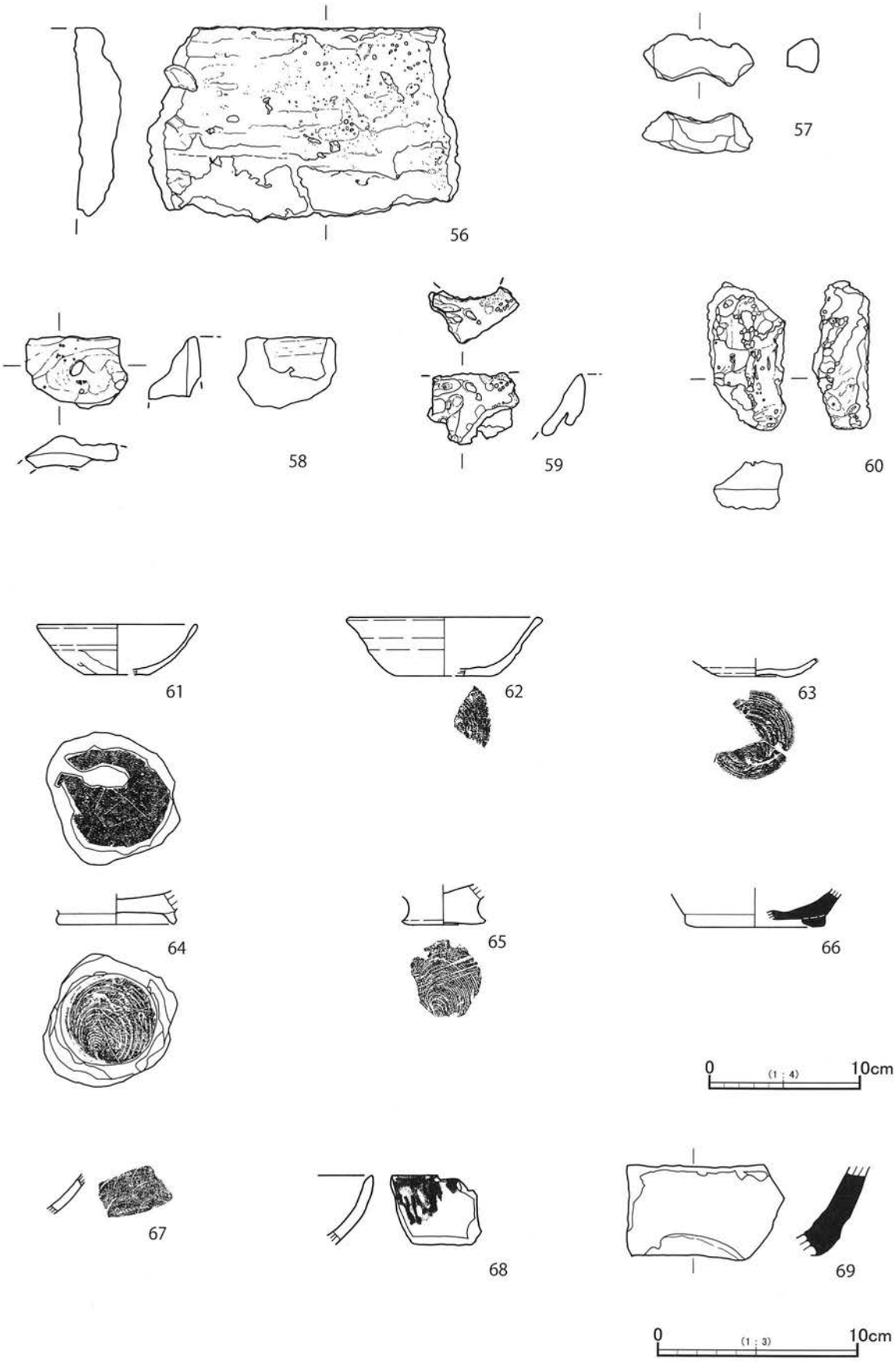








第53図　鋳造関連遺構(7)



第54図　鋳造関連遺構(8)、9-13Tr出土遺物

表 18　鋳造関連遺物観察表

図	番号	遺構	種類	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	他の測値	調整痕等	備考
41	3	SI2	炉壁	11.7	11.7	3.8	540		(外) スサ？種子痕、変色 (内) 表面発泡、指頭痕、指ナデ	2層（4層）
41	4	SI2	炉壁	11.5	11.2	3.9	490		(外) スサ、種子痕、変色 (内) 表面発泡、指頭痕、指ナデ	2層（5層）
41	5	SI2	炉壁	12.1	11.1	4.1	550		(外) スサ？種子痕、変色 (内) 表面発泡、指頭痕、指ナデ	2層（5層）
41	6	SI2	炉壁	19.8	17.3	4.1	1170		(外) スサ、種子痕、変色 (内) 表面発泡、溶融物付着	2層（5層）
41	7	SI2	炉壁	21.3	19	4.5	1640		(外) スサ、種子痕、変色 (内) 表面発泡、指頭痕、指ナデ	2層（5層）
49	27	鋳造関連遺構	鋳型・鍋	39.1	40.9				(外) (内)、	
50	28	鋳造関連遺構	鋳型・茶窯か？	35.5	39				(外) (内)、	
51	29	鋳造関連遺構	鋳型・鍋か	11.5	16.9	3.2	480		(外) スサ、種子痕 (内)、	2層（3層）
51	30	鋳造関連遺構	鋳型・鍋か	12.5	14.7	5.7	780		(外) スサ、種子痕 (内)、	2層（3層）
51	31	鋳造関連遺構	鋳型・鍋か	13.8	14.8	4.2	620		(外) スサ、種子痕 (内)、	2層（3層）
51	32	鋳造関連遺構	鋳型・鍋か	11.5	19.6	6.5	920		(外) スサ、種子痕、炭化物付着 (内)、	2層（5層）
51	33	鋳造関連遺構	鋳型・鍋か	5.6	10.6	3.4	161		(外) スサ、種子痕 (内)、	2層（5層）
51	34	鋳造関連遺構	鋳型・鍋か	7	7.2	2.7	99		(外) スサ、種子痕、種子 (内)、	2層（3層）
51	35	鋳造関連遺構	鋳型・鍋か	4.7	7.1	3	79		(外) スサ、種子痕 (内)、	2層（4層）
51	36	鋳造関連遺構	鋳型・鍋か	3.4	6.4	2.1	35		(外) スサ？種子痕 (内)、	2層（3層）
51	37	鋳造関連遺構	鋳型・鍋か	5.1	5.2	2.4	44		(外) スサ、種子痕 (内)、	2層（3層）
51	38	鋳造関連遺構	鋳型・鍋か	4.9	7.2	1.7	59		(外) スサ？種子痕 (内)、	1層（2層）
51	39	鋳造関連遺構	鋳型・鍋か	4.9	6.2	1.8	46		(外) スサ？種子痕 (内)、	2層（3層）
52	40	鋳造関連遺構	鋳型・鍋か	16.5	5.8	1.9	148		(外) スサ？種子痕 (内)、	2層（3層）
52	41	鋳造関連遺構		4.5	10.4	4.2	155		(外) スサ　種子痕 (内) 表面発泡、指頭痕、指ナデ	2層（5層）
52	42	鋳造関連遺構	鋳型・鍋か	6	7.1	4.5	100		(外) スサ？種子痕 (内)	2層（4層）
52	43	鋳造関連遺構	鋳型	6.2	5.6	2.3	72		(外) スサ　種子痕 (内)	2層
52	44	鋳造関連遺構		7.5	15.9	4.5	490	16.5、孔3	(外) スサ　種子痕 (内)	2層
52	45	鋳造関連遺構		5.4	12.8	5.2	210	15.9	(外) スサ？種子痕 (内)	3層
52	46	鋳造関連遺構		9.9	8.9	3.8	227		(外) スサ　種子痕 (内)	2層（3層）
52	47	鋳造関連遺構	とりべ・るつぼ？	7.9	9.1	4.9	308		(外) (内) スサ　種子痕	口縁に指頭痕
52	48	鋳造関連遺構	三又状土製品（サル）	4.8	7.5	3.6	86	高さ 5.3	(表) スサ？種子痕、指頭痕、変色 (裏) スサ？種子痕、指頭痕	
53	49	鋳造関連遺構	炉壁・炉底か	13.5	11.5	6	950		(外) スサ？種子痕 (内) 表面発泡、溶融物付着	2層（3層）
53	50	鋳造関連遺構	炉壁・炉底か	9	10	7	440		(外) スサ？種子痕 (内) 表面発泡、溶融物付着	4層
53	51	鋳造関連遺構	炉壁・炉底か	14.6	9.5	5.6	545		(外) スサ？種子痕、指頭痕 (内) 表面発泡、溶融物付着	2層（5層）
53	52	鋳造関連遺構	炉壁・炉底か	8.4	8.2	5.8	249		(外) スサ？種子痕、(内) 表面発泡、溶融物付着	2層（5層）
53	53	鋳造関連遺構	鞴羽口	7	9.2	2.9	108		(外) スサ？種子痕、(内) 表面発泡、溶融物付着	2層（3層）
53	54	鋳造関連遺構	炉	9.5	8.8	4	216		(外) スサ？種子痕、工具痕 (内) 表面発泡	2層（4層）
53	55	鋳造関連遺構	鋳型か	3.1	6.6	2.8	35		(外) スサ？種子痕、(内) 表面発泡、溶融物付着	1層（2層）
54	56	鋳造関連遺構	鋳型か	13.2	20.7	2.8	750	口径 28	(外) スサ？種子痕、(内) 表面発泡	1層（2層）
54	57	鋳造関連遺構	鞴羽口	3.1	7.8	2	39	口径 6.2	(外) (内)	
54	58	鋳造関連遺構	鞴羽口	4.8	5.7	2.9	73		(外) 表面発泡	2層
54	59	鋳造関連遺構	鞴羽口	4.9	5.7	1.7	53	口径 6	(外) 表面発泡 (内)	2層
54	60	鋳造関連遺構	溶融物	9.3	5	3.6	83		(外) スサ？種子痕、(内) 表面発泡	

SD1〔第 55 図〕

位置と検出状況　GG-12 グリッド、9-1Tr 西壁際で確認した。規模は明確ではないが、調査範囲においては南北約 6.2 m を測った。**遺構の特徴**　出土遺物は若干時期差が認められるものの、SD2 と平行する位置にあることから、旧道路の側溝であった可能性が考えられる。**出土遺物**　土師器坏 (70) が出土した。**遺構の時期**　出土遺物の時期から、10C 後半頃としておく。

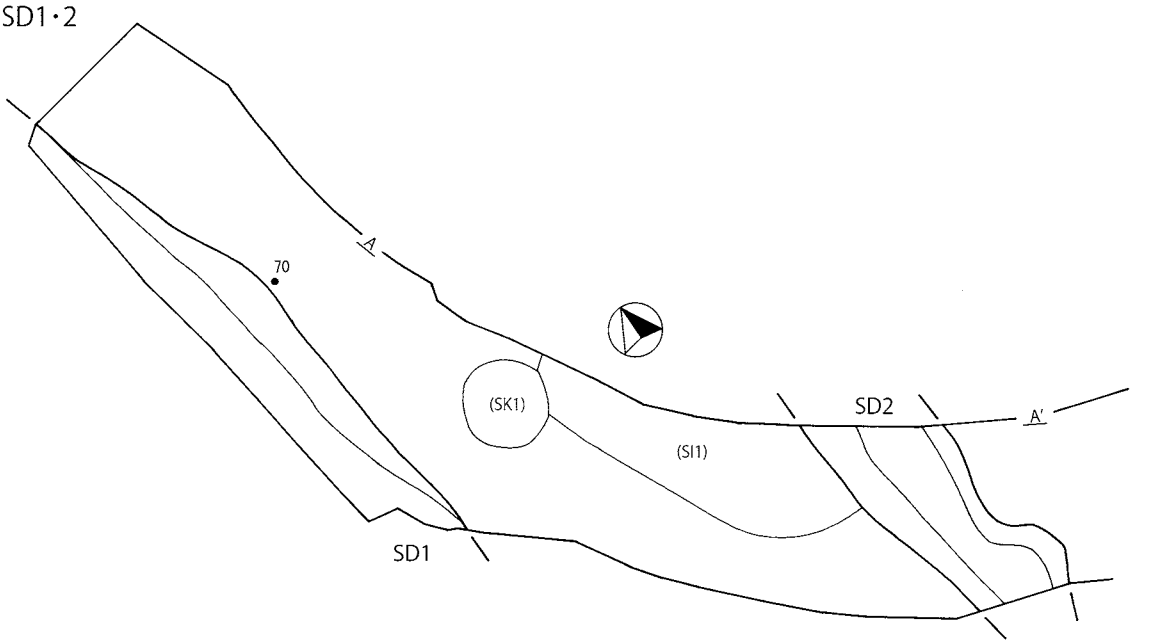
SD2〔第 55 図〕

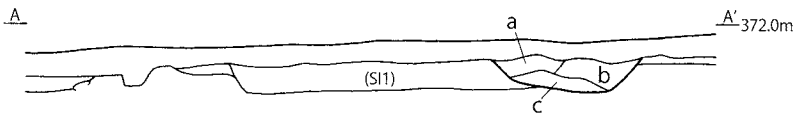
位置と検出状況　HH-12 グリッド、9-1Tr 西壁際で確認した。規模は明確ではない。**遺構の特徴**　出土遺物は若干時期差が認められるものの、SD1 と平行する位置にあり、旧道路の側溝であった可能性が考えられる。**出土遺物**　土師器坏 (71)、須恵器甕 (72) が出土した。**遺構の時期**　出土遺物が少なく明確ではないが、10C 中頃としておく。

SD3〔第 55 図〕北中原遺跡（第 3 次）

位置と検出状況　N･O-19 グリッド、9-11Tr で確認した。確認面から床面までの深さは約 22cm を測った。**遺構の時期**　出土遺物はなく、不明である。

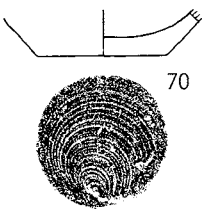
SD1・2

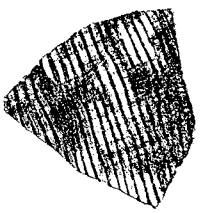


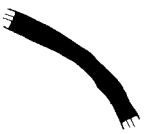


a　暗褐色土　細砂を含む。
b　暗褐色土　細砂を多量に含む。
c　砂 礫 層

0　(1：80)　4m



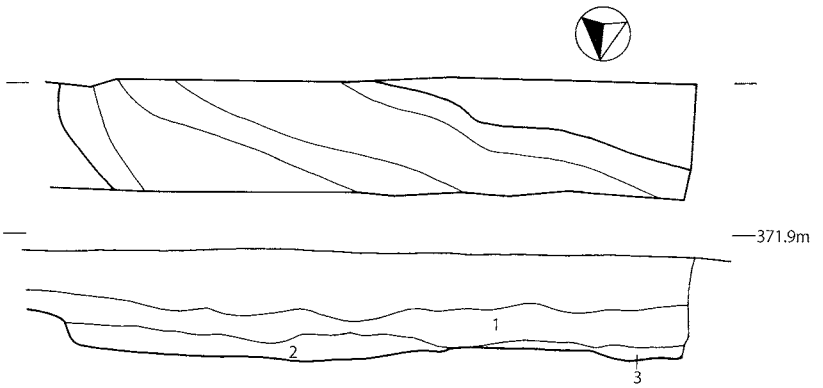




(71・72)　0　(1：4)　10cm

0　(1：3)　10cm

SD3

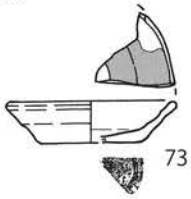


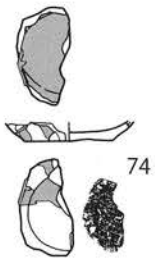
1　暗褐色土　しまりあり。
2　暗褐色土　黄色土粒を含む。
3　黄褐色土　砂質土。

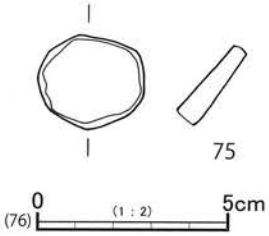
0　(1：80)　4m

第55図　SD1～3

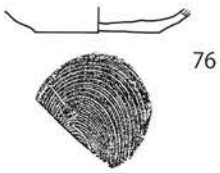
9-2Tr



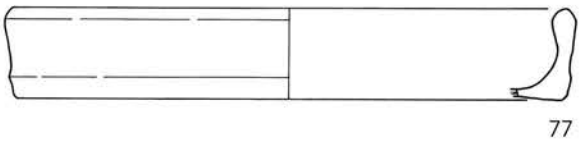




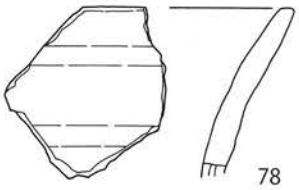
9-4Tr

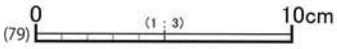


9-6Tr

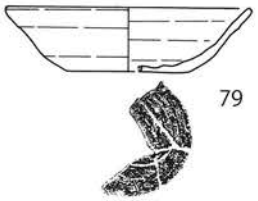


9-2Tr

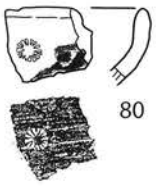


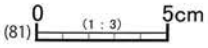


9-10Tr

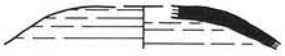


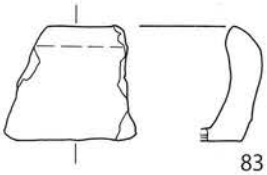
9-11Tr

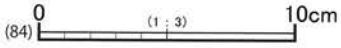




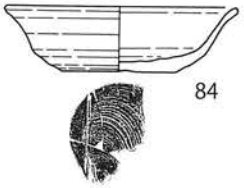
9-12Tr

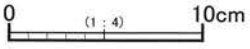






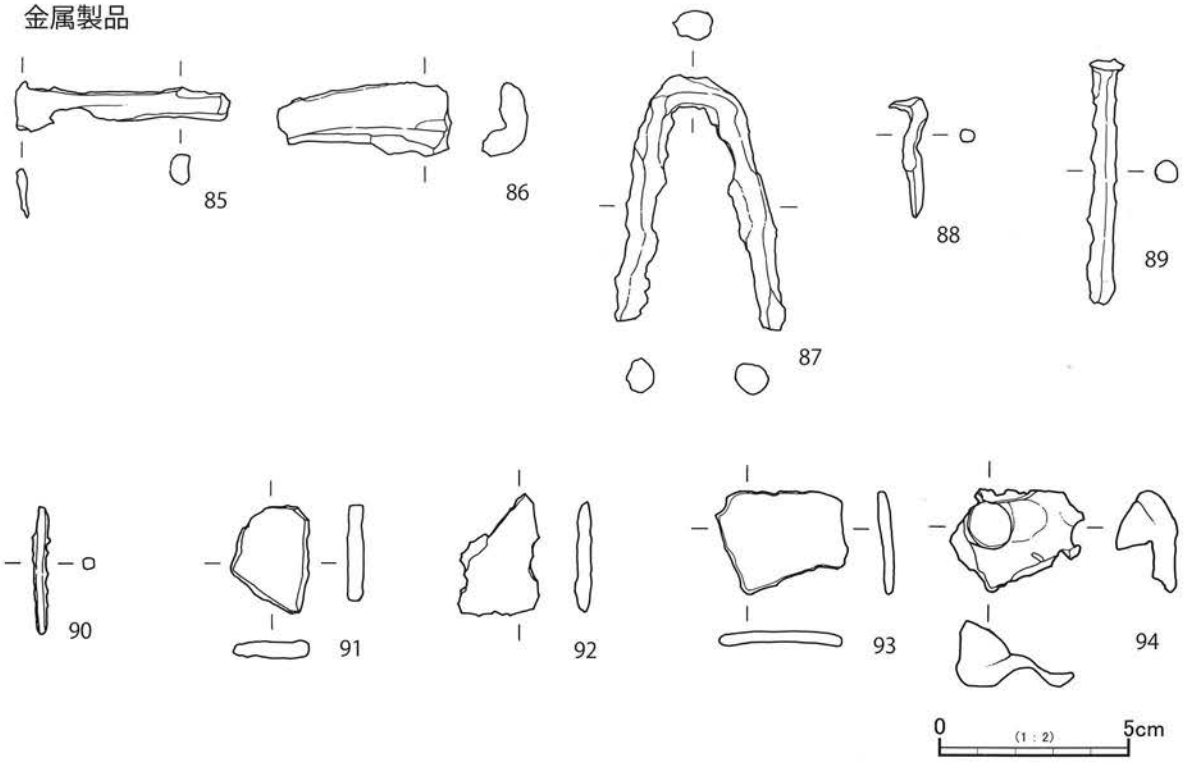
9-14Tr

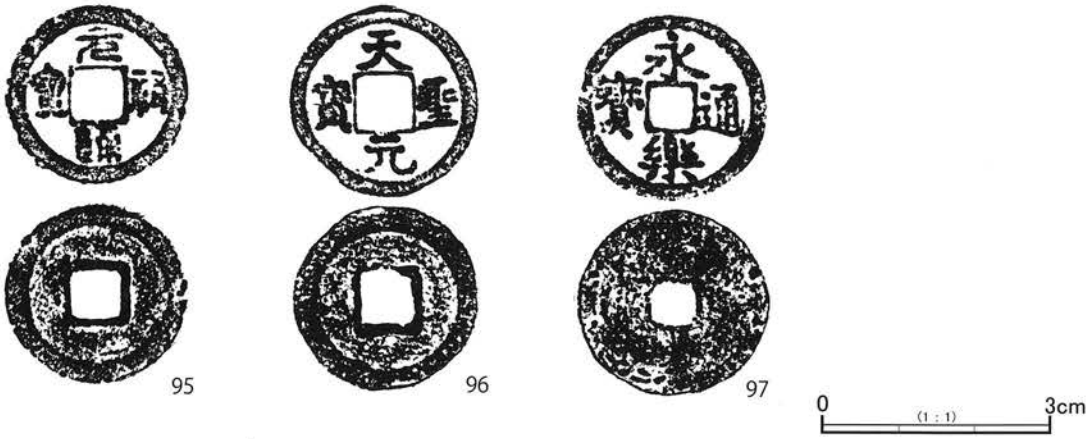




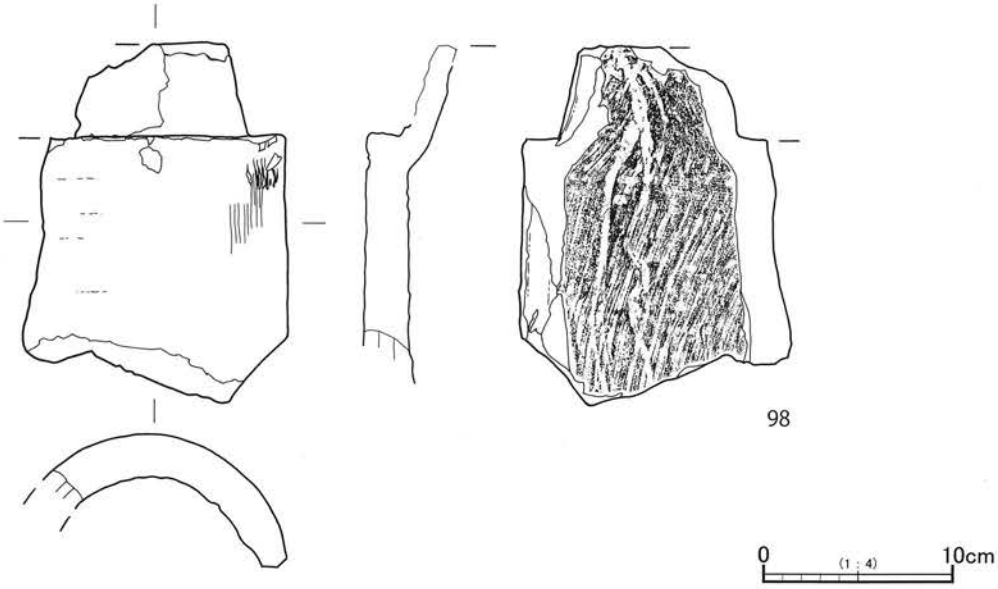
第56図　遺構外

金属製品



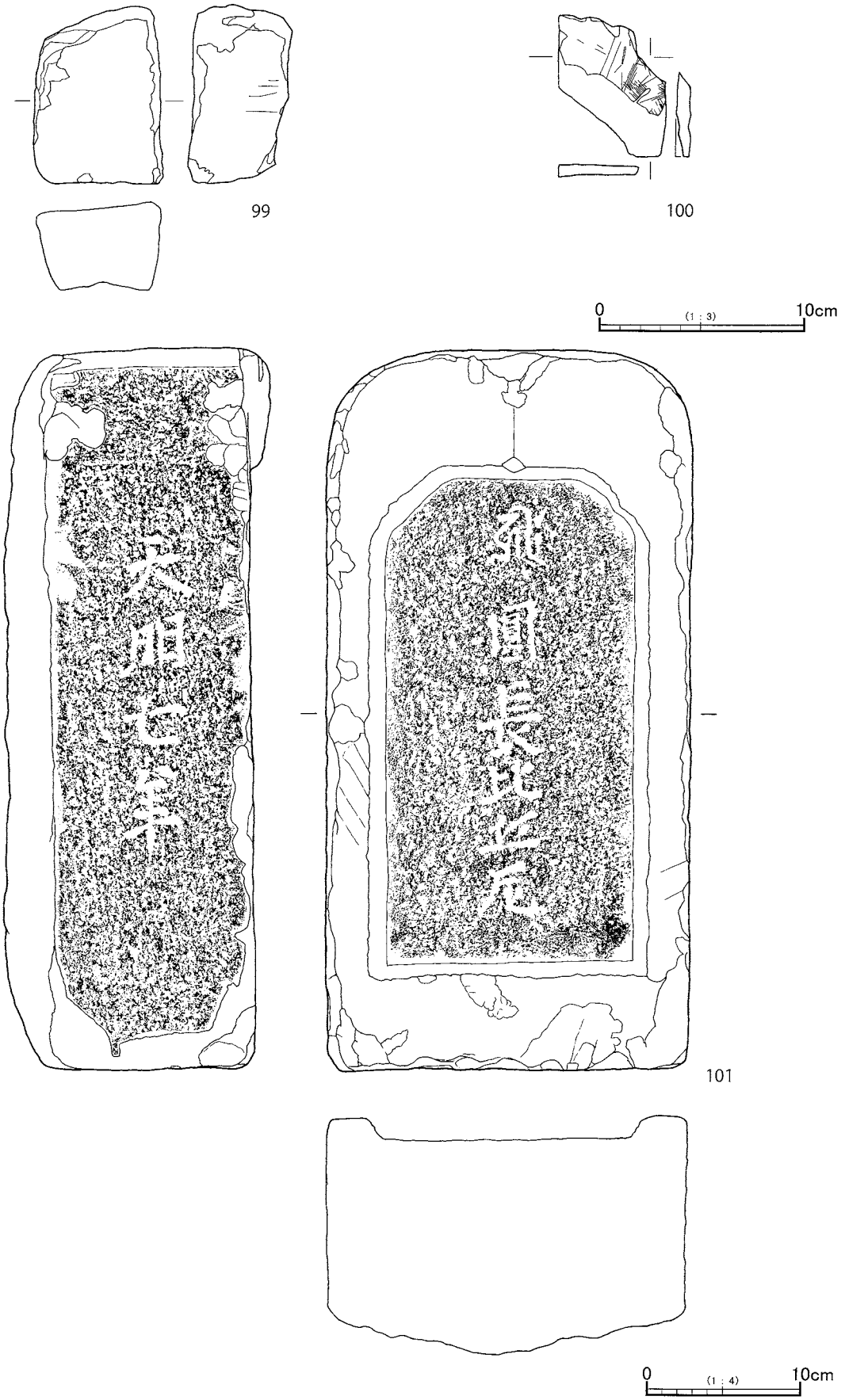


瓦



第57図　金属製品・瓦

石製品



第58図　石製品

表19　石動遺跡支線9号地区　遺物観察表

図	番号	遺構	種別	器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	焼成	胎土	整形技法	色調	備考
40	1	SI1	土師器	甕	(21.8) - -	良	やや密、白・金	(外) ロクロナデ、粘土付着 (内) ロクロナデ	明赤褐色	ロクロ調整 叩き目なし。
40	2	SI1	土師器	甕	- - (8.4)	良	粗、白・金	(外) ハケメか (内) ハケナデ (底) 木葉痕	明赤褐色	底部やや黒変 外面は劣化して表面が剥離
41	8	SI2	土師器	皿	13.2 2.7 5.6	良	やや密、赤・金	(外) ロクロナデ、回転ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転ヘラ切痕	明赤褐色	全体的に煤けている
42	9	SI3	土師器	皿	(11.6) (2.2) 5.0	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	橙色	黒班あり 口縁打ち掻き 内面やや煤けている　灯明か
42	10	SI3	土師器	坏	- - 5.4	良	密、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	橙色	
42	11	SI3	土師器	坏	(15.2) - -	良	密、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	
42	12	SI3	土師器	脚高 高台坏	- - -	良	やや密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ、付高台	橙色	黒班あり 全体的に煤けている
42	13	SI3	土師器	脚高 高台坏	- - 10.2	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ、付高台	橙色	黒班あり 口縁打ち掻き 内面やや煤けている　灯明か
42	14	SI3	土師器	小型甕	(18.4) - -	良	粗、白・金	(外) タテハケ、指頭痕 (内) ナデ、ヨコハケ、指頭痕	明赤褐色	全体的に煤けている
42	15	SK4	土師器	皿	(12.0) - -	良	密・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	内面黒変、灯明か
42	16	SK4	土師器	坏	(13.8) (3.3) (7.0)	良	やや密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	橙色	黒班あり
42	17	SK4	土師器	甕	- - (12.6)	良	やや密、赤・白	(外) ナデ (内) ナデ	橙色	黒班あり
43	18	SI4	土師器	坏	(13.6) - -	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	口縁の一部が黒変 灯明痕
43	19	SI4	須恵器	甕	- - -	良	密、白	(外) 叩き目、線刻、 (内) ナデ	灰色	外面摩耗
44	20	SI6	灰釉陶器	埦	(15.0) - -	良	緻密、白・黒	(外) ロクロナデ、施釉 (内) ロクロナデ、施釉	浅黄色	つけがけ 内面は刷け塗りか 見込み部無釉
44	21	SI6	灰釉陶器	椀	- - (8.0)	良	緻密、白・黒	(外) ロクロナデ、施釉 (内) ロクロナデ、施釉 (底) ロクロナデ、付高台	灰白色	内面は刷け塗りか 見込み部無釉
46	22	2号集石	土師器	甕	- - (7.0)	良	粗、赤・白	(外) ナデ (内) ナデ (底) ナデ	橙色	外面一部黒変 内面劣化・剥離
47	23	9－13Tr 鋳造関連遺構	土師質土器	小皿	(8.8) (1.6) (6.8)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	Pit 内出土
47	24	9－13Tr 鋳造関連遺構	土師器	坏	12.8 3.9 6.4	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕 ,、指頭痕	鈍赤褐色	歪みが大きい
47	25	9－13Tr 遺構外	土師器	坏	- - (5.4)	良	密、赤・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕 ,、指頭痕	橙色	
47	26	9－13Tr 遺構外	土師器	坏	(15.0) - -	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ	橙色	
54	61	9－13Tr 遺構外	土師器	坏	(10.8) (3.4) (4.2)	良	やや密、白	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) ヘラ削り	橙色	内・外面黒変

図	番号	遺構	種別	器種	口径 (cm) 器高 (cm) 底径 (cm)	焼成	胎土	整形技法	色調	備考
54	62	9－13Tr 遺構外	土師器	坏	(13.2) (4.0) (6.4)	良	やや粗、白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	鈍橙色	内面及び外面の一部が煤けている
54	63	9－13Tr 遺構外	土師器	坏	- - 4.8	良	やや密、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	
54	64	9－13Tr 表彩	土師器	高台付坏	- - (8.2)	やや粗	やや粗、赤・白・黒	(内) ロクロナデ、内黒、線刻 (底) 回転糸切痕、付高台、線刻	橙色	内面見込み部及び底面に線刻あり
54	65	9－13東 廃土	土師器	柱状 高台坏	- - 5.4	良	やや密、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	橙色	全体的にやや黒変
54	66	9－13Tr 遺構外	灰釉陶器	壺	- - (9.4)	良	密、白	(外) 回転ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 付高台	灰白色	
54	67	9－13Tr 遺構外	土師器	坏	- - -	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、線刻	橙色	
54	68	9－13Tr 遺構外	土師器	坏	- - -	良	密、赤・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	内面が煤けている 灯明痕
54	69	9－13Tr	須恵器	甕	- - -	良	密、白・黒	(外) 自然釉 (内) ナデ	鈍黄橙色	
55	70	SD1	土師器	坏	- - 6.8	良	やや粗、赤・白・黒	(外ロクロ) ナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	内面の一部がやや黒変
55	71	SD2	土師器	坏	- - 4.0	良	やや密、赤・白	(外) ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、ヘラ削り	橙色	外面及び底面が黒変
55	72	SD2	須恵器	甕	- - -	良	密、白	(外) 叩き目 (内) ナデ、当て具痕	灰色	内・外面がやや磨耗 転用痕か
56	73	9－2Tr 遺構外	陶器	小皿	(8.8) (2.1) (5.6)	良	密、白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	暗灰黄色	内面に溶融物付着 とりべに利用か 15C 中葉～後葉か
56	74	9－2Tr	土師質土器	皿	- - (4.6)	良	密、白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	暗灰黄色	内面から外面に溶融物（銅）付着 15C 中葉～後葉か
56	76	9－4Tr	土師器	坏	- - 6.4	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	鈍橙色	内面やや黒変
56	77	9－6Tr	土師質土器	焙烙場	(29.8) (4.8) (28.4)	やや粗	やや粗、赤・白・金・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ	鈍褐色	外面が煤けている 底部が磨耗している 近世
56	78	9－9Tr	土師質土器	内耳塝	- - -	粗	やや粗、・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	外面が劣化、煤けている 15C 末～ 16C 前半頃か
56	79	9－10Tr	土師器	坏	(12.6) (3.4) (6.2)	良	粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	全体的に劣化
56	80	9－11Tr	土師質土器	香炉	- - -	良	密、赤、白、黒	(外) ロクロナデ、押型文 (内) ロクロナデ	鈍橙色	外面がやや煤けている 中世
56	81	9－12Tr	須恵器	蓋	- - -	良	密、白	(外) ロクロナデ、回転ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転ヘラ削り	褐灰色	
56	82	9－12Tr	緑釉陶器	碗	- - (6.2)	良	緻密、白	(外) ロクロナデ、施釉 (内) ナデ、施釉 (底) 付高台	灰黄色	
56	83	9－12Tr	土師質土器	焙烙場	- - -	良	やや密、白・金・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	外面がやや煤けている 近世
56	84	9－14Tr	土師器	坏	(11.9) (3.4) (5.6)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	

表 20　石動遺跡支線９号地区　　土製品観察表

図	番号	遺　構	種類	重量（g）	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	胎　土	製作技法	色　調	備　考
56	75	9 - 4Tr	土製円盤	4.37g	2.4	0.5	2.5	密、赤・白		鈍橙色	

表 21　石動遺跡支線９号地区　金属製品観察表

図	番号	遺　構	種　類	重　量（g）	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	材　質	備　考
57	85	SI1	釘	7.65	1.3	0.5	5.7	鉄	
57	86	9 - 10Tr	滓	7.65	2.6	0.8	3.4	-	
57	87	9 - 14Tr	釘	24.9	13.8	0.9	1.0	鉄	
57	88	SI1	釘	1.83	2.2	0.4	0.9	鉄	
57	89	9 - 9Tr	釘	5.69	6.5	0.6	0.9	鉄	
57	90	9 - 13Tr	釘	24.9	3.4	0.3	0.4	鉄	表採
57	91	SI2	板状不明品	7.24	2.8	0.4	2.1	鉄	
57	92	SI2	板状不明品	24.9	2.9	0.4	2.5	鉄	
57	93	9 - 13Tr	滓	10.33	2.8	0.3	3.2	-	
57	94	9 - 13Tr	板状不明品	20.39	2.8	0.3	3.2	銅	

表 22　石動遺跡支線９号地区　瓦観察表

図	番号	遺　構	種　類	重量（g）	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	胎　土	製　作　技　法	色　調	備　考
57	98	9 - 13Tr	丸瓦	840	18.9	12.7	2.2	やや密、白・金	（凸面） （凹面）布目痕	浅黄色	

表 23　石動遺跡支線９号地区　　石製品観察表

図	番号	遺　構	種　類	重　量（g）	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	石　質	備　考
58	99	SI1	砥石	420	8.9	6.2	3.7	泥岩	1 面 但し剥離片
58	100	9 - 6Tr	砥石	25.47	6.6	5.3	0.7	花崗岩	3 面（他 2 面の一部も使用か）
58	101	表採 （石塔脇埋没）	墓石	25.47	48.5	16.0	23.9	花崗閃緑岩	『圓長比久尼』 『天明七年』（1787 年）

PL 18　石動遺跡98年度調査支線9号地区、北中原遺跡（第3次）

SI1　東から

SI1　西から

SI2　東から

SI3・SK4　南から

SK4　南から

9-10Tr・SI4　西から

SI4 カマド　西から

SI5(SI4 重複状況)　西から

SI5　北から

SI5　南から

PL19　石動遺跡98年度調査支線9号地区・北中原遺跡（第3次）

道路状遺構　南から

SK1　西から

SK2　西から

SK3　西から

SD1　南から

SD2　南から

硬化面（9-14Tr）　南から

硬化面（9-14Tr）　東から

旧河道（9-1Tr）　南から

旧河道（9-1Tr）　西から

PL 20　石動遺跡98年度調査支線9号地区、北中原遺跡（第3次）

鋳造関連遺構 確認状況　東から

鋳造関連遺構 確認状況　北から

拡張後、確認状況　北から

拡張後、確認状況　西から

鋳型検出状況　北から

鋳型検出状況　西から

検出状況（遺物 -27鍋鋳型）　北から

検出状況（遺物-28蓋？鋳型）　北から

検出状況　北から

検出状況　北から

PL21 石動遺跡98年度調査支線9号地区、北中原遺跡（第3次）

9-2Tr 東から

9-2Tr 南西から

9-2Tr 北東から

9-2Tr 集石 南西から

9-3Tr 北東から

9-4Tr 北東から

9-5Tr 北東から

9-6Tr 北東から

9-7Tr 北東から

9-8Tr 東から

PL 22　石動遺跡98年度調査支線9号地区、北中原遺跡（第3次）

9-9Tr　東から

9-11Tr　東から

9-12Tr・SD3　北東から

9-12Tr　西から

9-13Tr　東から

9-13Tr　西から

9-13Tr 上層　東から

9-14Tr　南西から

石碑　北東から

石碑　東から

PL23 石動遺跡98年度調査支線9号地区、北中原遺跡(第3次)

鋳造関連遺構 完掘状況　北西から

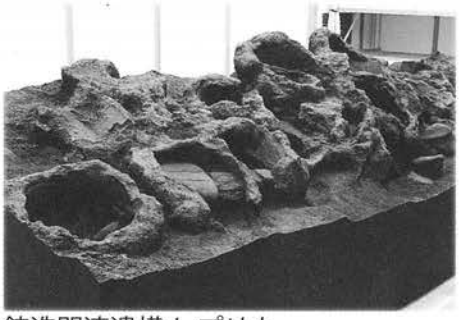
鋳造関連遺構 完掘状況　西から

鋳造関連遺構内 Pit　北から

調査後近景　西から

レプリカ作成作業状況

遺物取り上げ作業状況

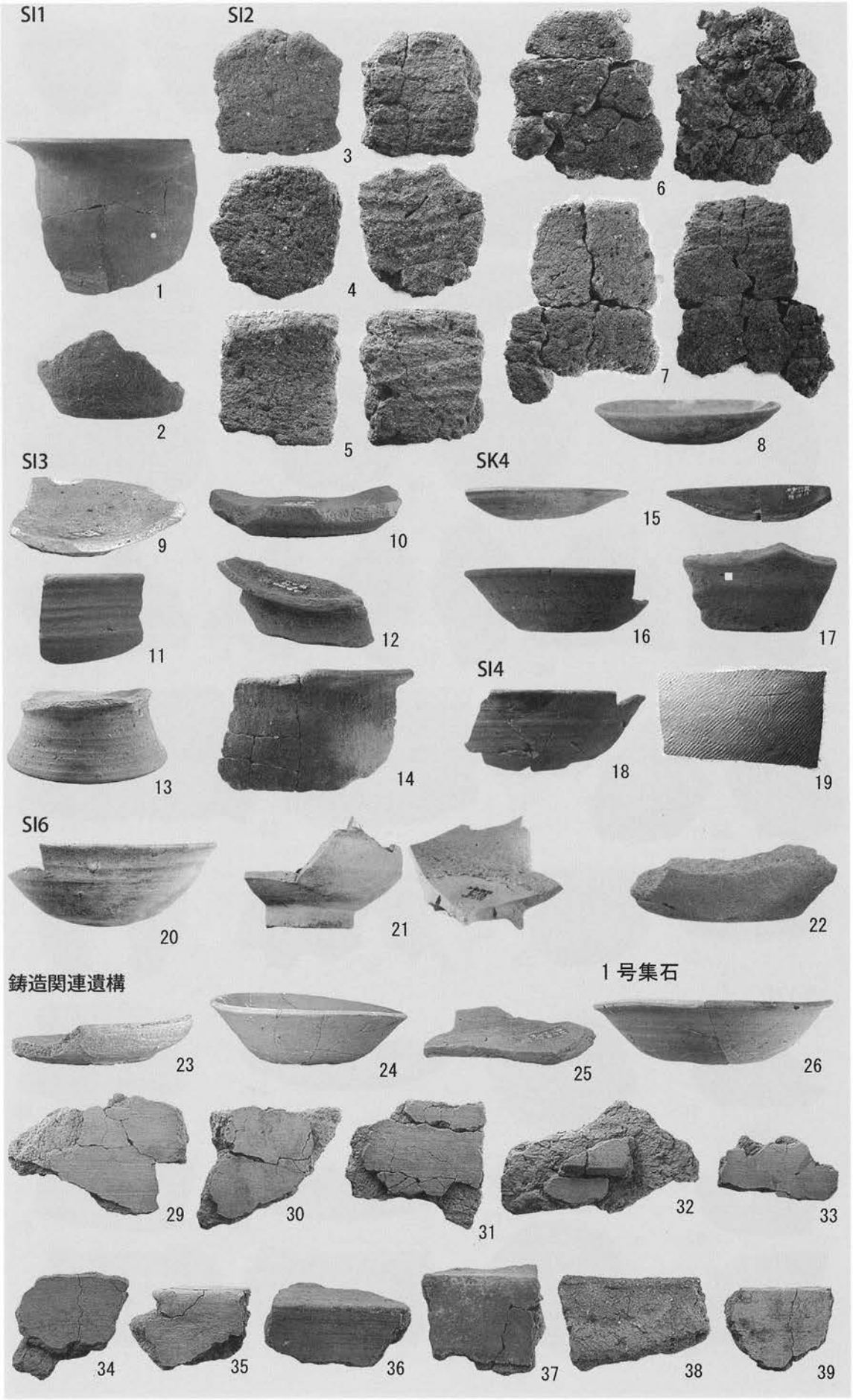

鋳造関連遺構 レプリカ

9-1Tr　南東から

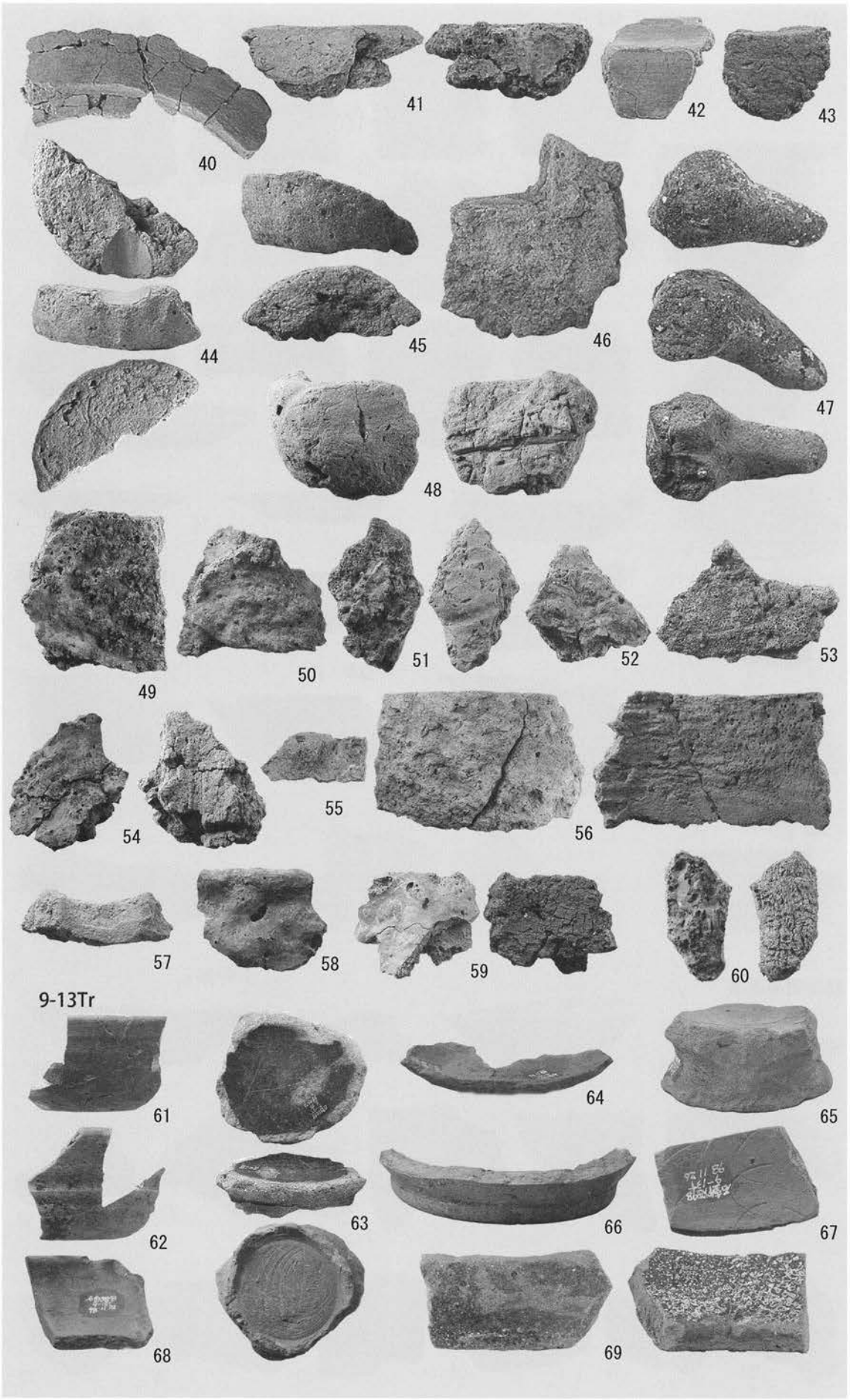
9-2Tr　北西から

9-2Tr　南東から

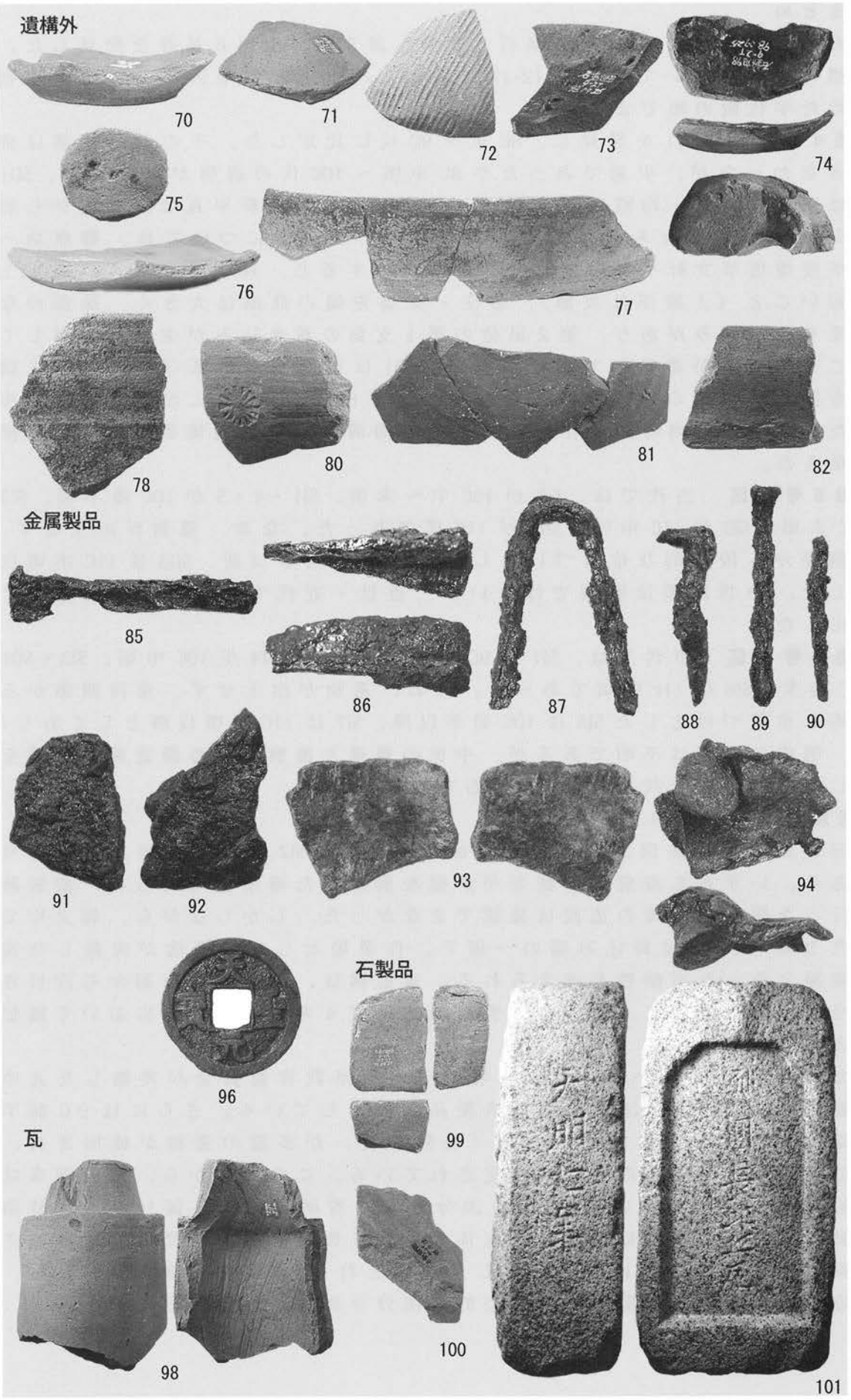
PL 24　石動遺跡98年度調査支線9号地区、北中原遺跡（第3次）



PL25 石動遺跡98年度調査支線9号地区、北中原遺跡(第3次)



PL 26　石動遺跡98年度調査支線9号地区、北中原遺跡（第3次）



Ⅴ．まとめ

調査の結果、住居跡14軒、集石3箇所、溝8条、土坑6基等を発見した。各遺構の年代については、表12･17で示した。以下、各地区ごとに出土遺物から得た年代観の順でまとめる。

・支線4号地区　SD1を発見し、8C末～9C代に比定した。その他、遺構は確認できなかったが、少量であったが8C中頃～10C代の遺物が出土した。SD1からは平瓦・丸瓦・均整唐草文軒平瓦片が出土した。軒平瓦は、側面から約10cmほどが残存したものである。瓦当面のモチーフについては、櫛原功一氏の甲斐型唐草文軒平瓦の型式分類をもとにすると、珠文帯がなく、脇・上幅が短いこと（上縁部は欠損）、各主・支葉先端の珠部は大きく、珠部のない支葉もやや厚みがあり、第2単位の第1支葉の巻き込みが主葉に対向していることなどが特徴としてあげられる。SD1は東西方向に延びで、さらに国分寺寺院地推定域の外にあたるものの、瓦や8C中頃～9Cにかけて遺物が出土したことから、同時期に存在した道路の側溝もしくは地境等であった可能性が窺えた。

・支線6号地区　古代では、SI7が10C中～末頃、SI1・4・5が10C後半頃、SI3が10C末頃、SI6が11C中頃、SD2が11C代であった。なお、遺物が出土せず、重複関係から段階的な位置づけとしたSI2は10C後半以前、SD3は11C中頃以降とした。中世段階は明確ではないが、近世・近代ではSD1、1号石列などを検出した。

・支線9号地区　古代では、SI1が9C後半～10C代、SI4が10C中頃、SI3・SD1が10C後半、SI6は11c中頃であった。なお、遺物が出土せず、重複関係から段階的な位置づけとしたSI5は10C前半以降、SI7は11C中頃以降としておく。また、明確な時期は不明であるが、中世の遺構と推察される鋳造関連遺構を検出した。近世・近代では、3号集石を検出した。

・鋳造関連遺構について

今回確認した鋳造関連遺構は、支線9号地区のSI2、9-13Trで検出した廃棄場である。いずれも廃棄後の鋳型や炉壁を廃棄した場所と考えられ、直接鋳造を行った鋳込み場等の施設は確認できなかった。しかしながら、報文中で述べたとおり、SI2は鋳込み場の一画で、作業場としての機能が廃絶した後に廃棄場となった可能性も考えられる。両遺構は、検出した当初から注目され、今回の報告までに『山梨県史資料編7中世4考古資料』等において概要紹介されている。

また、9-13Trから南へ約150mの場所で山梨県教育委員会が実施した北中原遺跡第1･2次調査では、多数の鉄製品が出土している。さらには9C前半代の遺構から、鍛冶に関連したと「被熱土塊」が多量の遺物が検出され、高熱で処理を行う工房の存在が推定されている。このことから、猪股善彦は北中原遺跡の集落について、「他の国分寺関連遺跡と同様、国分寺造営時期に連動しており、造営に関わる鉄主体の金属を製造する工集団として再編され、県営団地地区以外に居住を移したと解される」（猪股善彦2002）とし、国分寺の存続と密接に関わった典型的な国分寺集落と位置付けている。

（望月）

第四章　石動遺跡支線3号地区〔1999年度調査〕

1．調査概要

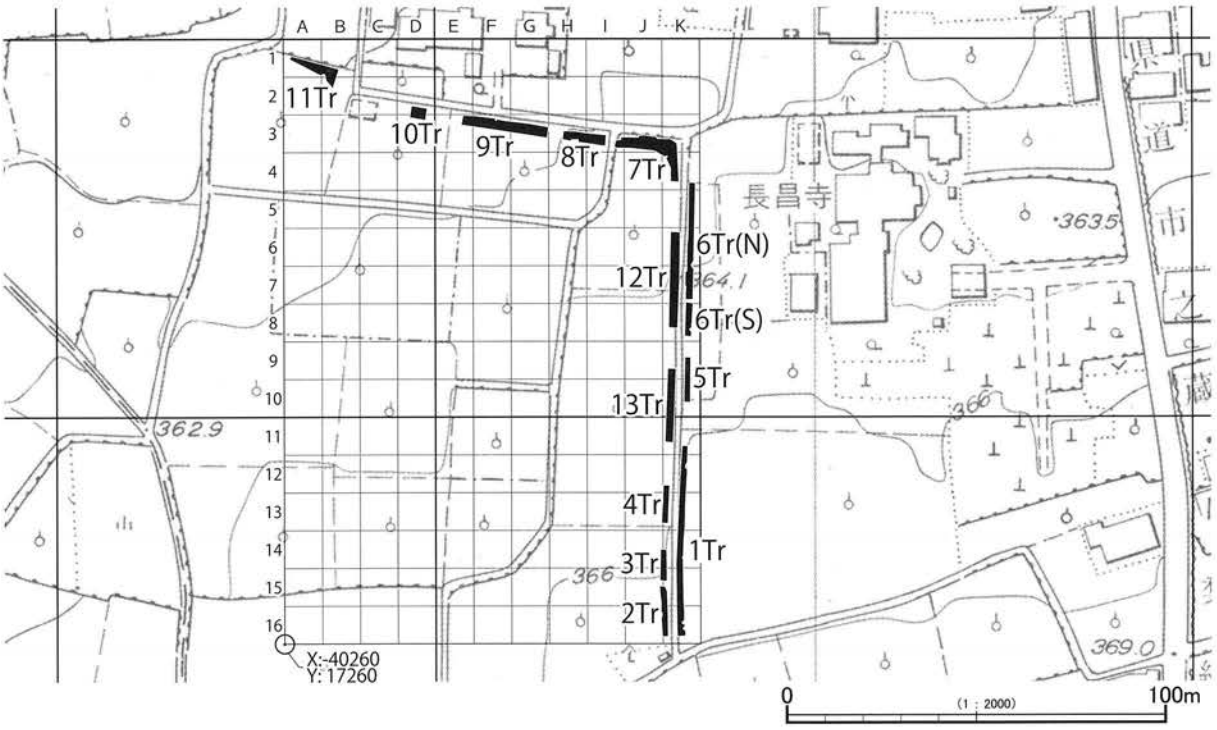
本調査は、石動遺跡地内における畑地帯総合整備事業・一般農道支線3号建設工事に先立ち、平成11年(1999)11月～12年1月に一宮町教育委員会が実施した。調査は既存道路（東西約100ｍ、南北130m）の拡幅部に13箇所のトレンチを設定し、約380㎡を調査した。対象地は、長昌寺の西側に位置しており、緩やかに北へ向かって傾斜する土地で、1･2Trから7Trまでの標高差は約5mを測った。限られた調査範囲のため遺構の規模や性格については不明点を残したものの、奈良時代～江戸時代までの遺構を発見した。

2．調査トレンチ

1Tr　K-11～16グリッドに位置する。既存道路東側の南北約50ｍ、幅約1.5ｍを調査範囲とし、地表面から最深230cmまで掘削した。地表面から約68cmの深さで暗褐色土の遺構確認面となり、土坑2基(SK2･SK3)、集石6箇所(1～4･10･11号集石)、溝1条(SD6)を確認した。他、トレンチ出土遺物として焙烙鍋(35)が出土した。

2Tr　J-15･16･K-15･16グリッドに位置する。既存道路西側の南北約13ｍ、幅約1.5ｍを調査範囲とし、最深134cmまで掘削した。地表面から約60cmの深さで暗褐色土(Ⅱ層)の遺構確認面となり、土坑1基(1Trで確認したSK2の一部)を確認した。

3Tr　J-14･15･K-14･15グリッドに位置する。既存道路西側の南北約8ｍ、幅約1.5ｍを調査範囲とし、地表面から最深30cmまで掘削した。遺構・遺物の確認はできなかった。



第59図　トレンチ位置図

4Tr J-12・13・K-12・13 グリッドに位置する。既存道路西側の南北約 10m、幅約 1.5m を調査範囲とし、最深 100cm まで掘削した。地表面から約 50cm の深さで暗褐色土（Ⅱ層）の遺構確認面となり、溝 1 条 (SD3) を確認した。

5Tr K-9・10 グリッドに位置する。既存道路東側の南北約 11.5m、幅約 1.5m を調査範囲とし、地表面から最深 110cm まで掘削した。地表面から約 28cm の深さで暗褐色土（Ⅰ層）の遺構確認面となり、土坑 1 基 (SK1)、溝 1 条 (SD 1) を確認した。

6Tr K-4 ～ 8 グリッドに位置する。既存道路西側の南北約 40.5m、幅約 1.5m を調査範囲とし、地表面から最深 85cm まで掘削した。なお、地表面から約 45cm の深さで遺構確認面となり、住居跡 2 軒 (SI1・2)、集石 1 箇所 (5 号集石)、溝 2 条 (SD1・4)、テラス 1 箇所 (テラス 2) を検出した。他、トレンチ出土遺物として焙烙塝 (36)・内耳塝 (37) が出土した。

7Tr I-3・J-3・4K-3・4 グリッドに位置する。既存道路に沿って南北約 10m、東西約 14m、幅約 2 ～ 3.5m を範囲とし、約 50㎡を調査した。掘削は地表面から最深 120cm を測った。地表面から約 40 ～ 60cm の深さで遺構確認面となり、住居跡 3 軒 (SI3 ～ 5)、土坑 1 基 (SK5)、集石 1 箇所 (9 号集石)、ピット 2 基 (Pit19・20) を検出した。他、トレンチ出土遺物として甕 (38) が出土した。

8Tr I・J-3 グリッドに位置する。既存道路南側の東西約 11m、幅約 2.5m の範囲を調査し、住居跡 1 軒 (SI6)、ピット 1 基 (Pit18) を検出した。他、トレンチ出土遺物として土師器小皿 (39) が出土した。

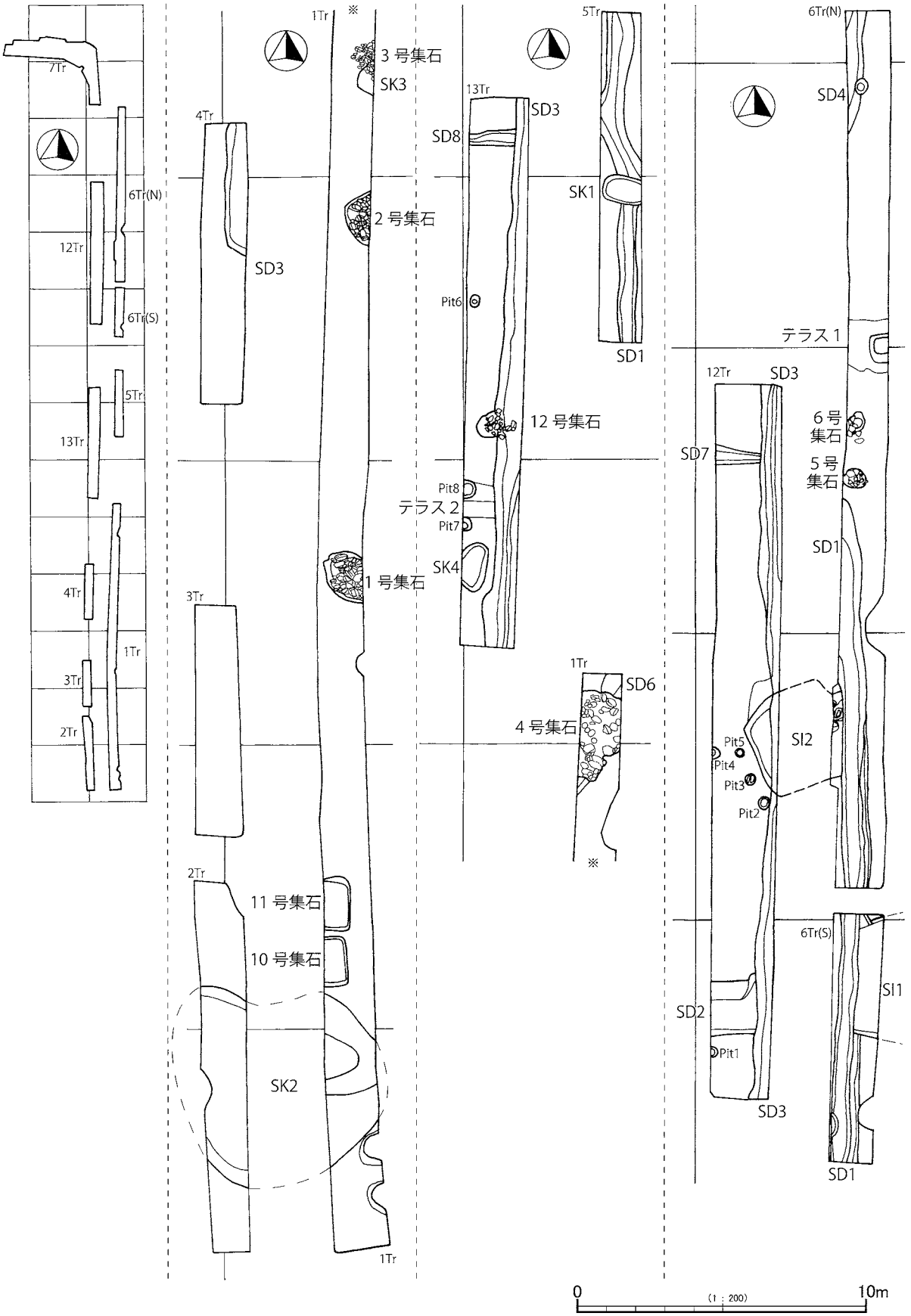
9Tr F ～ H-3 グリッドに位置する。既存道路南側の東西約 11m、幅約 2.5m の範囲を調査し、地表面から最深 110cm まで掘削した。地表面から約 42cm の深さで遺構確認面となり、住居跡 1 軒 (SI7)、土坑 2 基 (SK6・7)、ピット 9 基 (Pit9 ～ 17)、集石 2 箇所 (7・8 号集石) 溝 1 条 (SD5) を検出した。他、トレンチ出土遺物として須恵器坏 (40)、柱状高台坏 (41) が出土した。

10Tr E-2・3 グリッドに位置する。既存道路西側の南北約 8m、幅約 1.5m を調査範囲とし、地表面から最深 30cm まで掘削した。遺構は確認できなかったが、土師器坏 (42) が出土した。

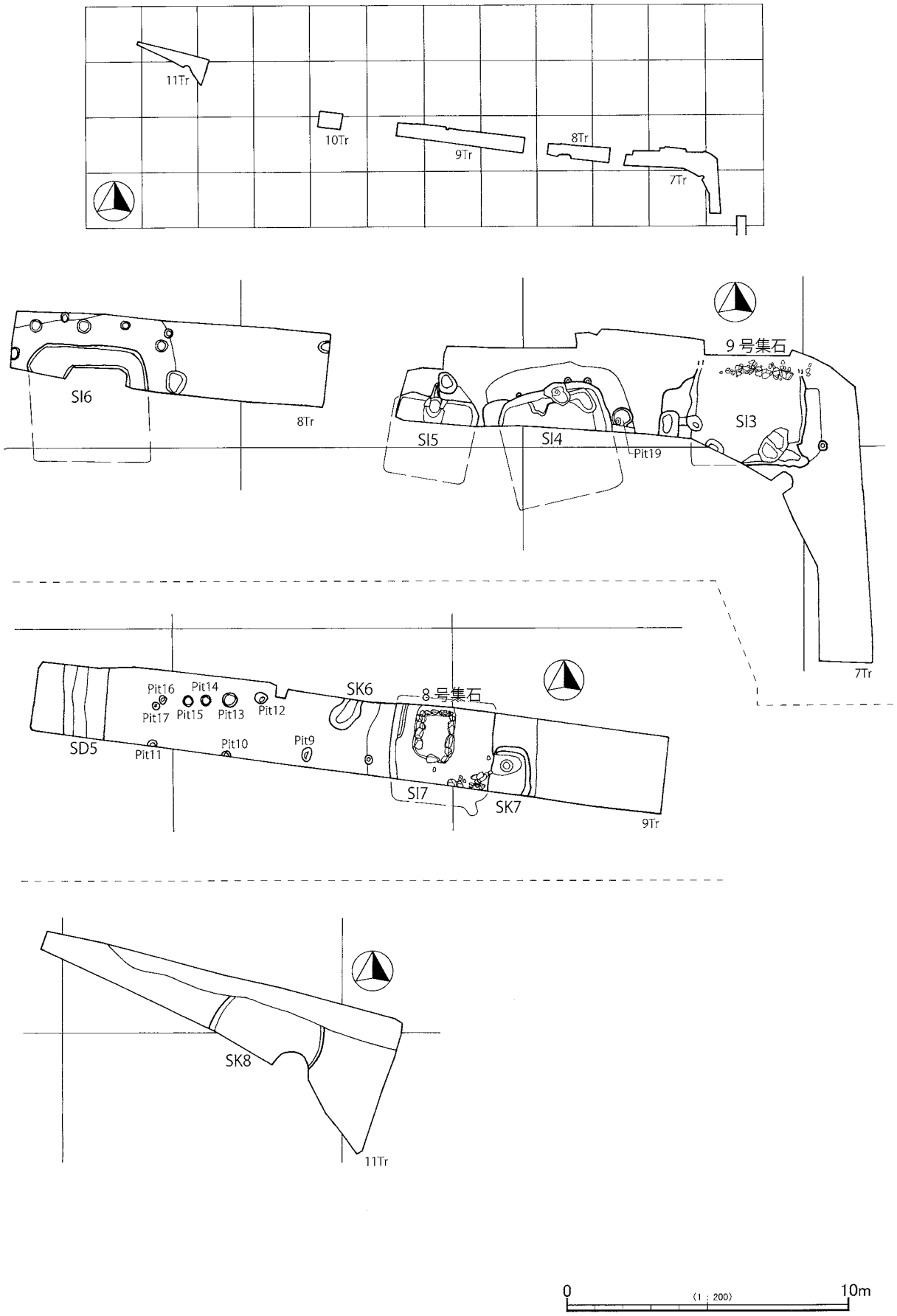
11Tr A～C-1・B・C-2グリッドに位置する。道路新設部分で、約32㎡を調査範囲とし、土坑1基(SK8)を検出した。他、トレンチ出土遺物として土師器坏(43～45)、土製の焙烙塝(46・47・49)・壺(50)・擂鉢(51)、磁器では染付碗(48)が出土した。

12Tr K-6 ～ 8 グリッドに位置する。既存道路西側の南北約 25m、幅約 2m を調査範囲とし、地表面から最深 108cm まで掘削した。地表面から約 50cm の深さで遺構確認面となり、住居跡 1 軒 (SI2)、ピット 4 基 (Pit1 ～ 3)、溝 3 条 (SD2・3・7) を確認した。他、トレンチ出土遺物として土師器小皿 (52)、須恵器壺 (53) が出土した。

13Tr K-9 ～ 11・J-11 グリッドに位置する。既存道路西側の東西約 19m、幅約 2 m を調査範囲とし、地表面から最深 102cm まで掘削した。やや起伏があったが、地表面から約 30cm の深さで遺構確認面となり、土坑 1 基 (SK4)、ピット 3 基 (Pit6 ～ 8)、集石 1 箇所 (12 号集石)、溝 2 条 (SD3・8) を検出した。他、トレンチ出土遺物として土師器坏 (54) が出土した。


7Tr
6Tr(N)
12Tr
6Tr(S)
5Tr
13Tr
4Tr
1Tr
3Tr
2Tr
1Tr
※
3 号集石
SK3
4Tr
SD3
2 号集石
1 号集石
3Tr
2Tr
11 号集石
10 号集石
SK2
1Tr
13Tr
SD3
SD8
Pit6
12 号集石
Pit8
テラス 2
Pit7
SK4
5Tr
SK1
SD1
1Tr
SD6
4 号集石
※
6Tr(N)
SD4
テラス 1
12Tr
SD3
6 号
集石
SD7
5 号
集石
SD1
SI2
Pit5
Pit4
Pit3
Pit2
6Tr(S)
SI1
SD2
Pit1
SD3
SD1
0
(1：200)
10m

第60図　遺構位置図(1)


11Tr
10Tr
9Tr
8Tr
7Tr
SI6
8Tr
SI5
SI4
Pit19
9号集石
SI3
7Tr
Pit16
Pit14
Pit17
Pit15
Pit13
Pit12
SK6
8号集石
SD5
Pit11
Pit10
Pit9
SI7
SK7
9Tr
SK8
11Tr
0
(1：200)
10m

第61図　遺構位置図(2)

3.発見した遺構・遺物

・SI1〔第62図〕

位置と検出状況　K-7・8グリッド、6Tr南側に位置する。調査範囲では重複するSD1に壊されており、北壁、南壁を確認した。なお、断面図では別遺構と重複している可能性も窺えるが、明確ではない。規模は不明だが、検出した範囲では南北の壁間は約4.1m、確認面から床面までの深さは約40cmを測った。**遺構の特徴**　検出した範囲ではカマド施設はなく、褐色ブロックを少量含む床面を確認した。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・SI2〔第62図〕

位置と検出状況　K-7グリッドに位置する。6Trと12Trで確認し、重複するSD1(6Tr)・SD3(12Tr)に壊されていた。検出した範囲では西壁・北壁、・南壁、カマドの一部を確認し、カマドの位置から推定した東壁と西壁との間は約4.2m、確認面から床面までの深さは約30cmを測った。**遺構の特徴**　カマド施設は北東隅の位置(6Tr側)で焼土と灰黄褐色の構築土(粘土)を確認した。西壁から約30cm外側にほぼ等間隔で並ぶPit2～4を検出したが、住居との関係については不明である。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・SI3〔第63・65図〕

位置と検出状況　K-3・4・L-3・4グリッド、7Tr東側に位置する。重複する9号集石に北側を壊されており、東壁・西壁・南壁の一部を確認した。検出した範囲では東西の壁間は約4.2m、確認面から床面までの深さは、約30cmを測った。**遺構の特徴**　カマド施設は北西隅に位置した。炭化物・焼土と構築材と思われる礫の堆積を確認した。他、褐色ブロックを少量含む床面を確認した。**出土遺物**　土師器小皿(1・2・3)・坏(4・5)などが出土した。**遺構の時期**　出土遺物の時期から、11C後半頃としておく。

・SI4〔第64・65図〕

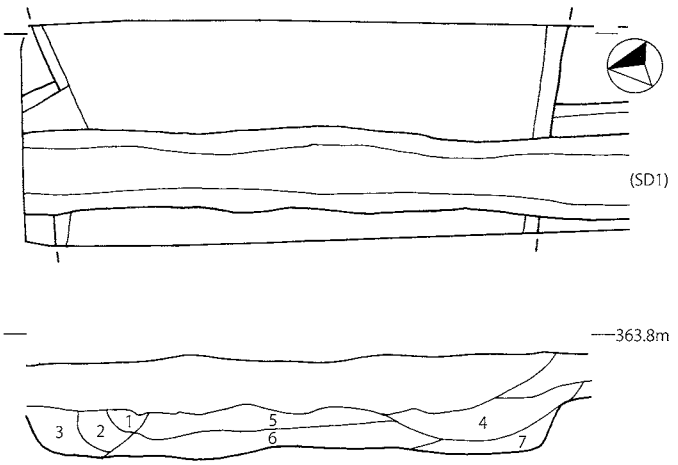
位置と検出状況　J・K-3グリッド、7Tr西側に位置する。重複するSK5に上部を壊されていた。調査範囲では西壁・東壁・北壁を確認し、東西の壁間は約3.8m、確認面から床面までの深さは、約50cmを測った。**遺構の特徴**　カマドは北壁のほぼ中央に位置し、炭化物と焼土、支柱石、袖部の構築材に用いられた礫を確認した。他、壁外周で約50～90cm幅の硬化面とPit19を確認できた。**出土遺物**　土師器坏(6～9)・皿（10）・陶器（11）・甕(12・13)・竈形土器(14・15)、須恵器甕(16)などが出土した。12は口径が大きく、甕系の鉢と称される器形に近い。14・15は竈形土器としたが、ハケメ調整がみられず、ナデや指頭痕のみが確認できる。14に関しては、縄文土器で浅鉢の一部である可能性も示唆されたが、カマドからの出土で胴部に穿孔があることから、ここでは竈形土器とした。**遺構の時期**　出土遺物の時期から、8C後半頃としておく。

・SI5〔第66図〕

位置と検出状況　J-3グリッド、7Tr西端に位置する。重複はなく、調査範囲では北壁・東壁を確認し、東西約2.9m、確認面から床面までの深さは、約60cmを測った。**遺構の特徴**　カマド施設が北壁のほぼ中央に位置し、炭化物・焼土粒を確認している。黄色土を含む貼床面を確認した。

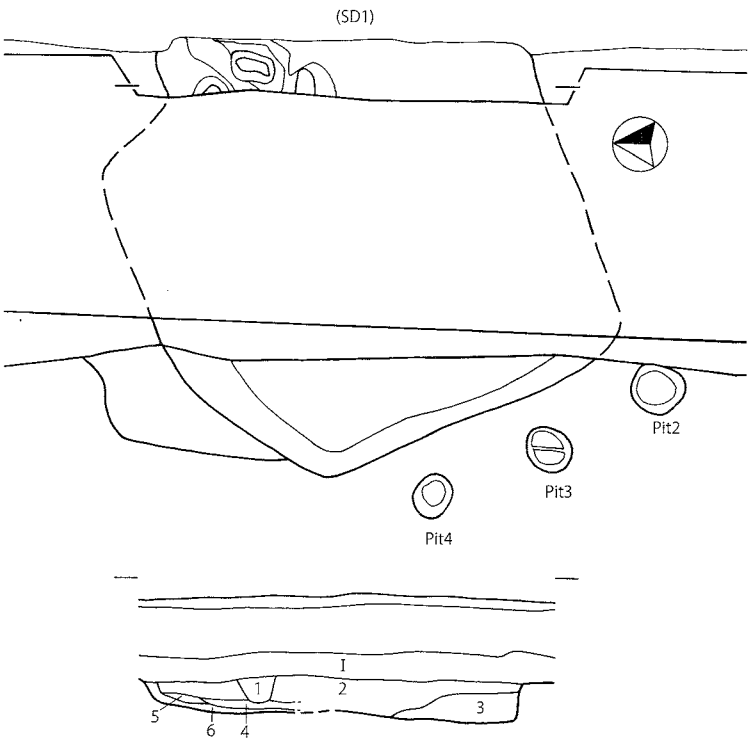
出土遺物　かわらけ(17)・甕(18・19)などが出土した。**遺構の時期**　出土遺物から、8C中頃としておく。

SI1



1　黄 褐 色 土
2　黄 褐 色 土　黄色土ブロックを多量に含む。
3　暗 褐 色 土
4　黒　色　土　東西方向の溝が切っている。
5　暗黄褐色土
6　暗黄褐色土　黄色土粒を含む。
7　暗黄褐色土　黄色土ブロック、黒色土ブロックを含む。

SI2



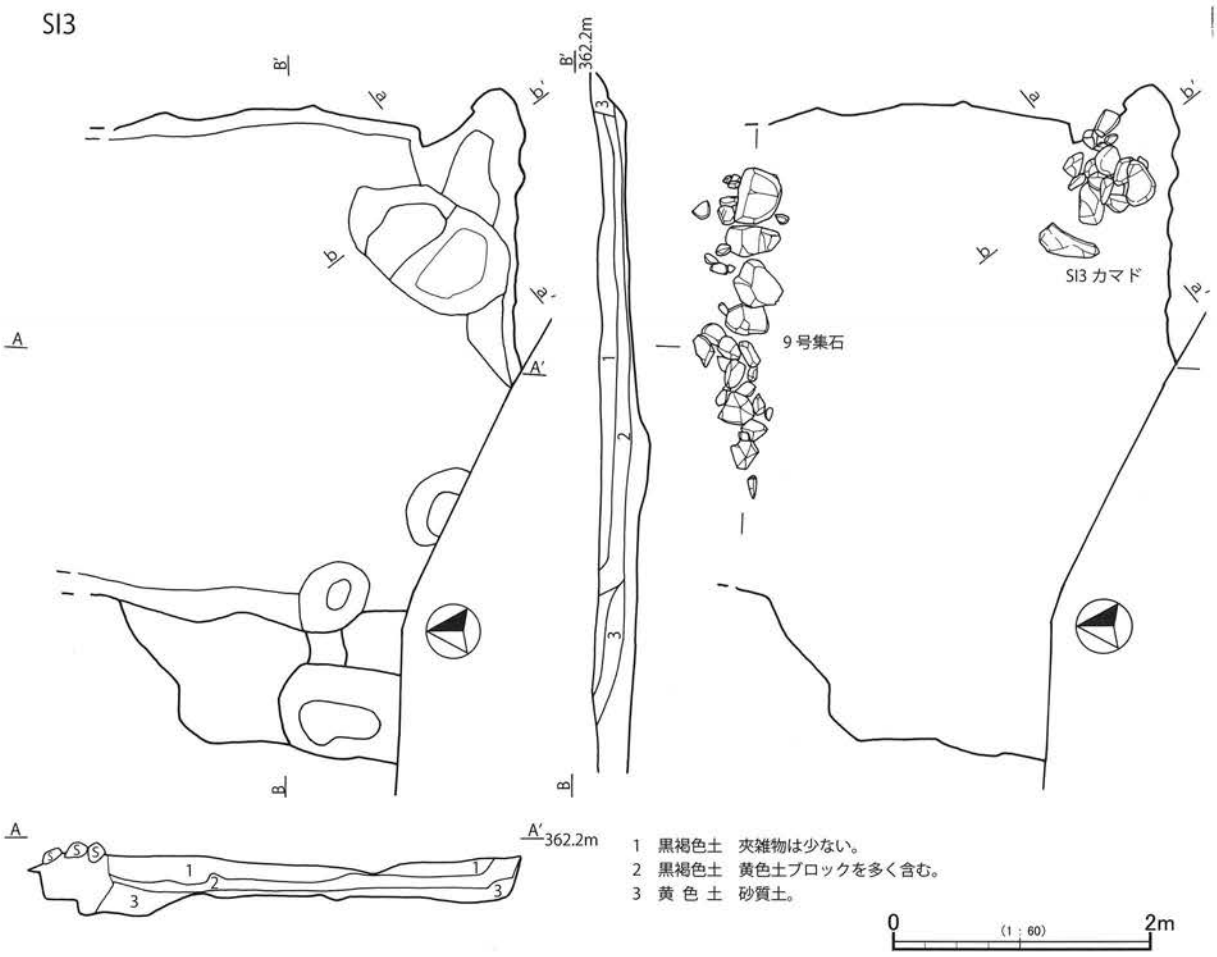
I　暗 褐 色 土　黄色土粒を含む。

1　黒 褐 色 土　炭化物粒を少量含む。SD1 に伴う Pit の可能性あり。
2　暗黄褐色土　黄色土粒を含む。
3　黒 褐 色 土　黄色土ブロックを含む。
4　灰 褐 色 土　粘土、カマド構築土、下面が焼土化。
5　暗 褐 色 土　焼土を多量に含む。
6　暗 褐 色 土　焼土粒、炭化物を含む。

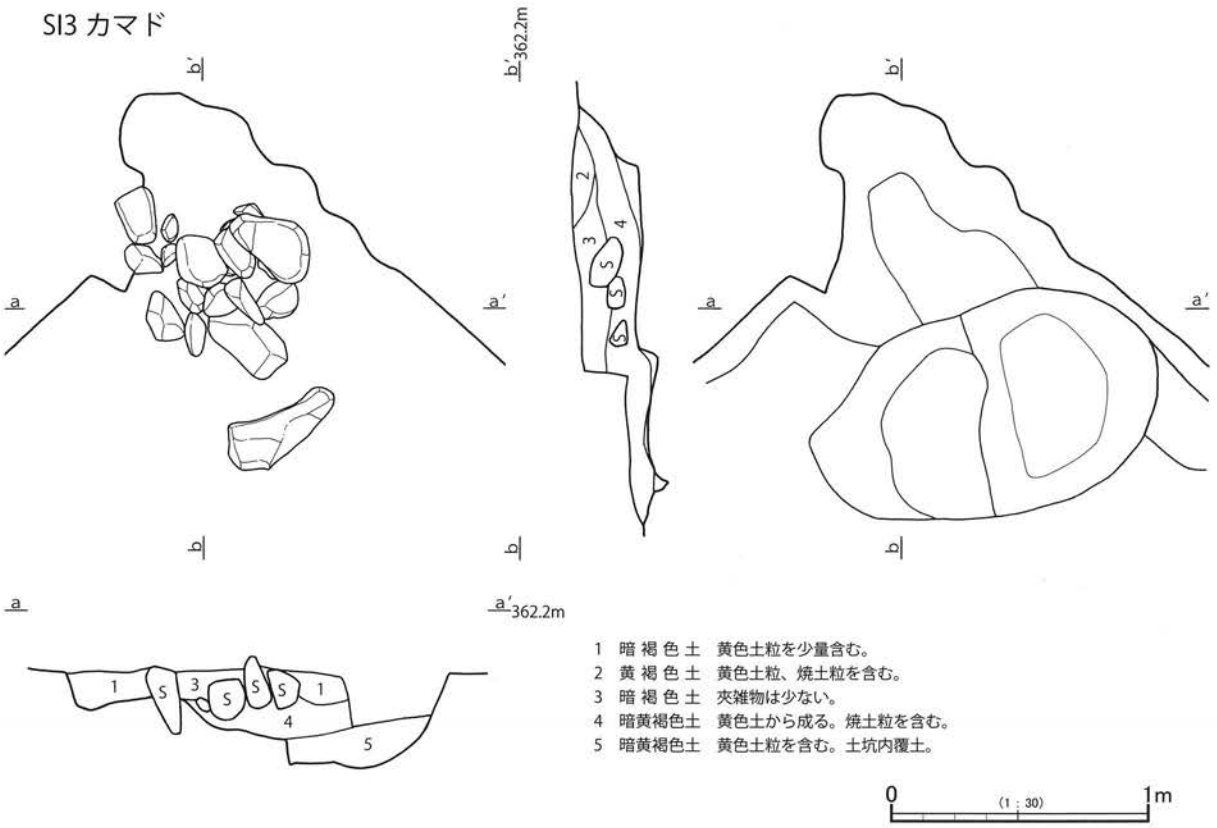
0　(1：60)　2m

第62図　SI1・2

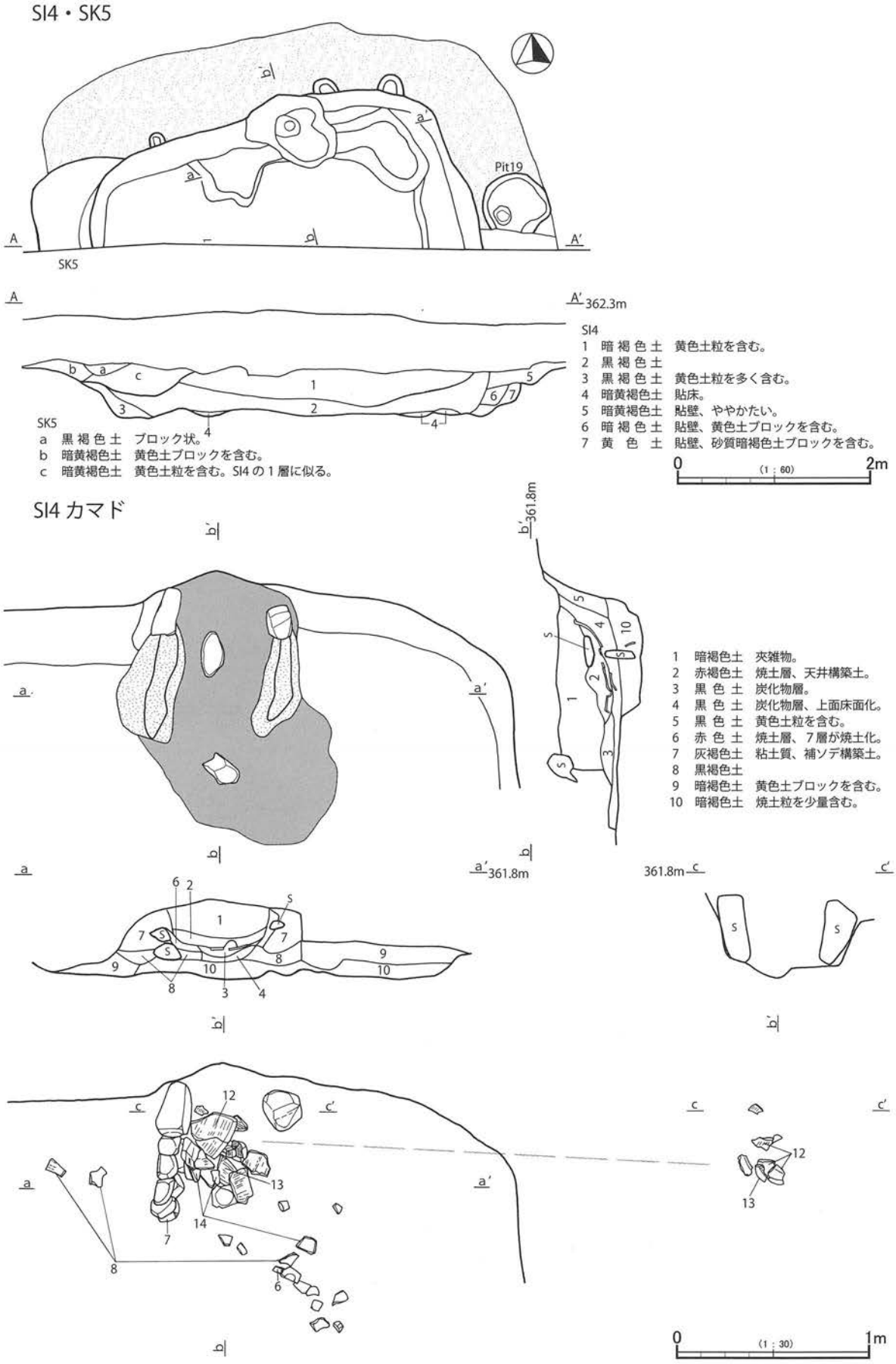
SI3



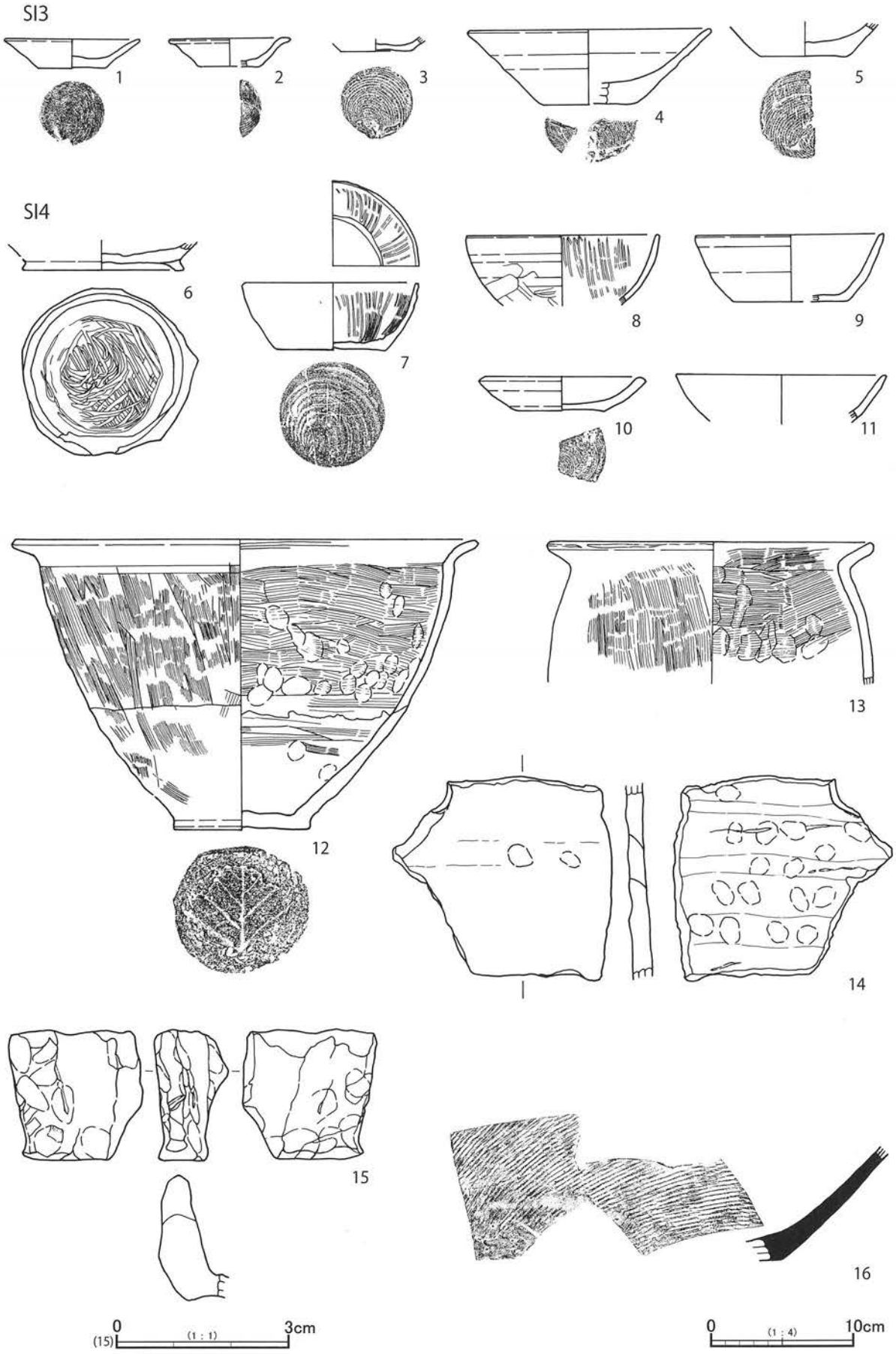
SI3 カマド



第63図　SI3(1)

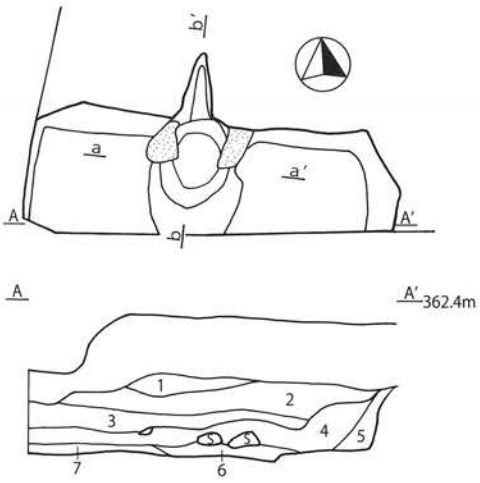


第64図 SI4(1)、SK5



第65図　SI3(2)・SI4(2)

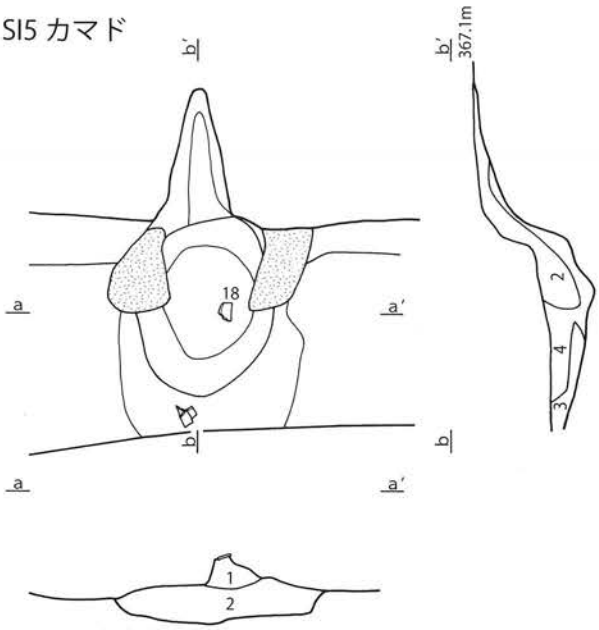
SI5



1 暗黄褐色土　黄色土粒を多く含む。
2 暗 褐 色 土
3 暗 褐 色 土　炭化物、焼土粒を含む。
4 黒 褐 色 土　やや粘性あり。
5 黒 褐 色 土　黄色土粒を含む。
6 黒　色　土　焼土粒を含む。
7 暗黄褐色土　黄色土を多く含む。貼床。

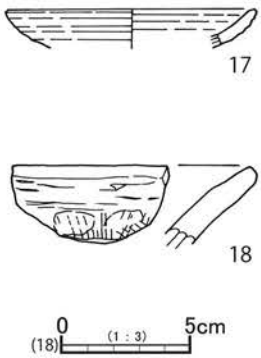
0 (1 : 60) 2m

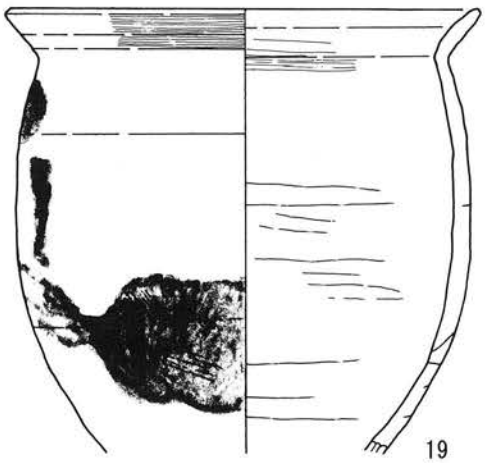
SI5 カマド



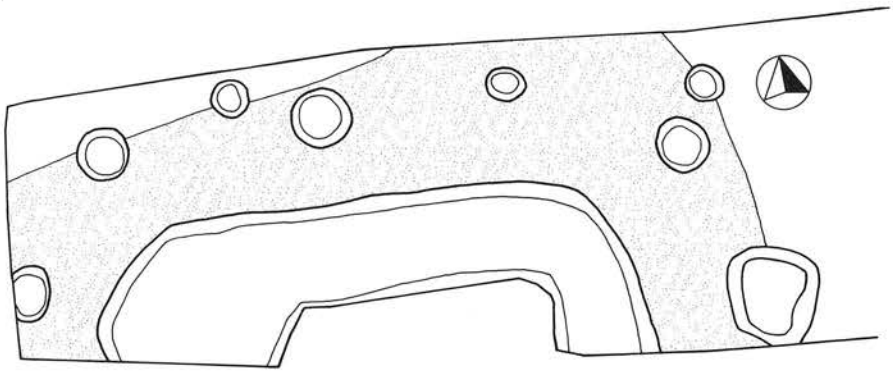
1 褐 色 土
2 褐 色 土　炭化物、焼土粒。
3 褐 色 土　2層より明るい褐色土。
4 褐 色 土　3層より明るい褐色土。粘土粒。

0 (1 : 30) 1m





SI6



0 (1 : 60) 2m

第66図　SI5・6

・SI6〔第66図〕

位置と検出状況　I-3グリッド、8Tr西端に位置する。調査範囲では重複はなく、北壁・西壁・東壁を確認し、東西約4.2mを測った。**遺構の特徴**　検出した範囲ではカマド施設等はなかったが、壁外周で幅約70～140cmの硬化面と大小8基のピットを確認した。**遺構の時期**　出土遺物がなく不明である。

・SI7〔第67図〕

位置と検出状況　G・H-3グリッド、9Trの中央からやや西に位置する。調査範囲では重複するSK7・7号集石・8号集石に壊されていた。西壁・東壁を確認し、東西の壁間は約4.6m、確認面から床面までの深さは、約50cmを測った。**遺構の特徴**　カマド施設は別遺構の重複で明確ではないが、南東隅の壁際で炭化物と焼土が確認できた。他、幅約20cmの周溝を西壁際で確認した。**出土遺物**　柱状高台坏(20)などが出土した。ただし、重複する8号集石でも同時期の遺物が出土しており、混ざり込みである可能性も考えられる。**遺構の時期**　出土遺物が少なく、明確ではないが、8号集石が12C代の集石墓と推定されるため、それ以前に廃棄されていたとしておく。

・SK1〔第76図〕

位置と検出状況　K-10グリッド、5Trのほぼ中央に位置する。SD1に上面を壊されており、遺存状況は悪かった。楕円形を呈すと推定され、検出した範囲では東西径約1.3m、南北1m、確認面からの深さ約48cmを測った。**遺構の特徴**　遺存部分が少なかったため、性格は不明である。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・SK2〔第68図〕

位置と検出状況　J-15・16・K-15・16グリッド、1Tr・2Trの南端で確認した。調査範囲では重複する遺構はなかった。規模は明確ではないが不整形を呈すと推定され、検出した範囲では北東方向に約5.4m、確認面からの深さは約35cmを測った。**遺構の特徴**　2Trの確認範囲から獣骨が出土した。獣骨については附編3に掲載した分析報告から、ウシやウマを遺棄した場所と考えられる。**遺構の時期**　遺構構築の時期については明確ではないが、獣骨（馬・牛）の分析から、近代としておく。

・SK3〔第69図〕

位置と検出状況　K-12グリッド、1Trの北側に位置する。上面には3号集石が位置した。円形を呈す土坑と考えられ、検出した範囲では南北約1.4m、確認面からの深さ約1.6mを測った。覆土には40cm大の礫が混在した。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・SK4〔第70図〕

位置と検出状況　J・K-11グリッド、13Trの南側に位置する。確認範囲では重複する遺構はなかった。不整楕円形を呈し、長径約1.3m、確認面からの深さ約10cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

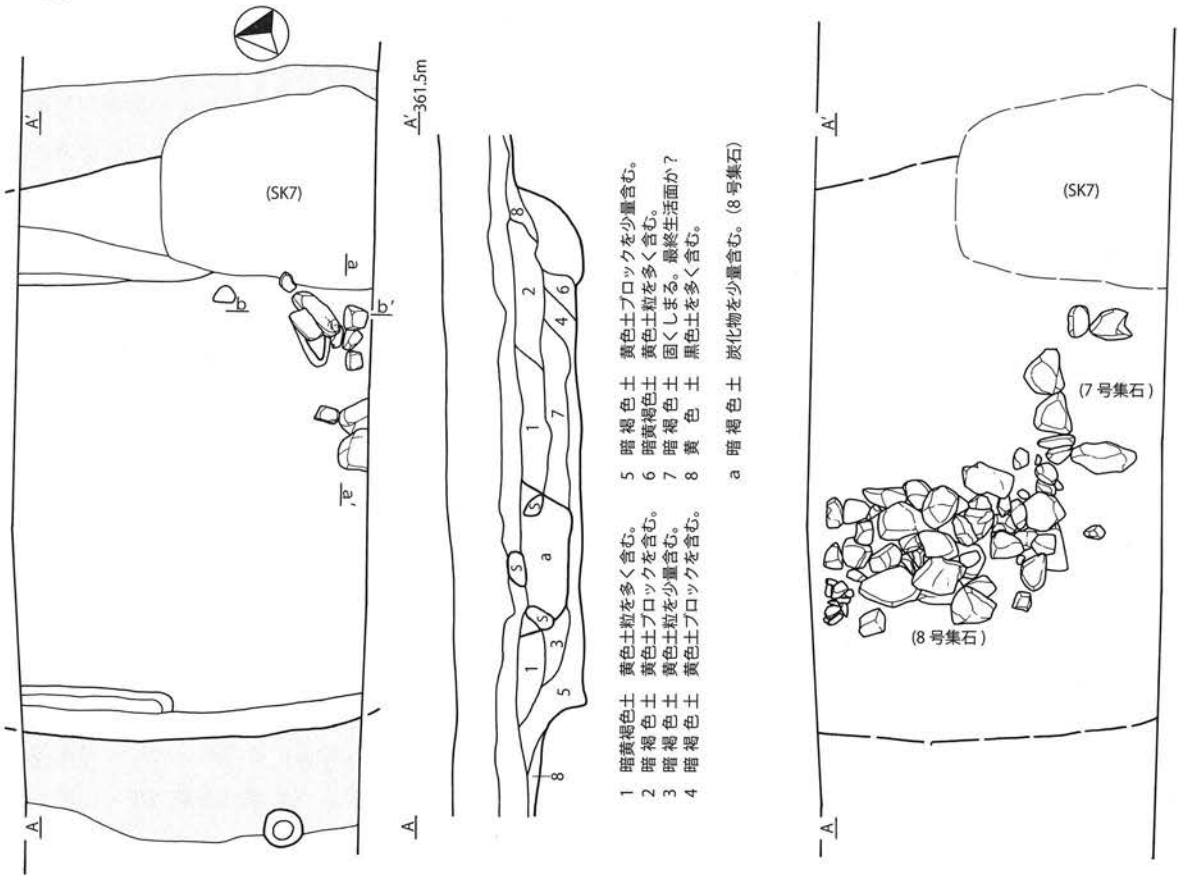
・SK5〔第64図〕

位置と検出状況　J-3グリッド、7Trの西側に位置する。重複するSI4の上面を壊していた。検出した範囲では、南北約90cm、東西約1.8m、確認面からの深さ約30cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物はなく、不明である

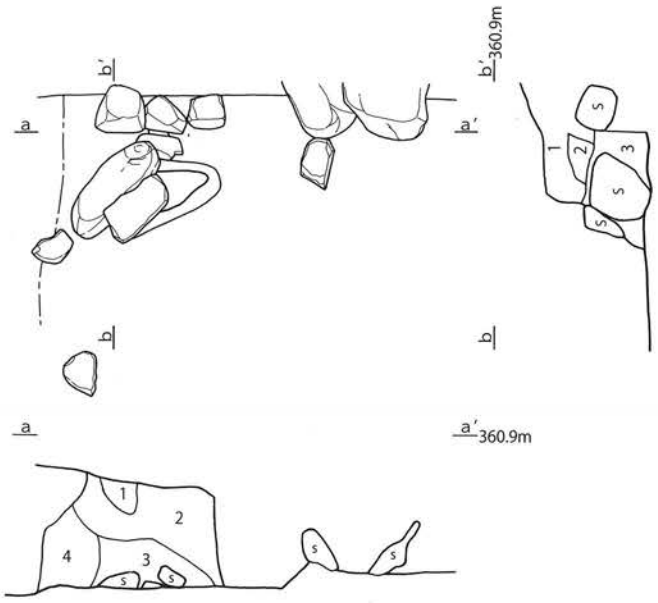
・SK6〔第70図〕

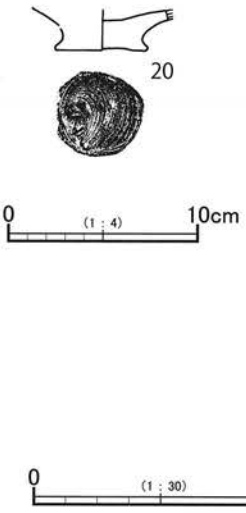
位置と検出状況　G-3グリッド、9Trの中央に位置する。重複する遺構はなく、

SI7

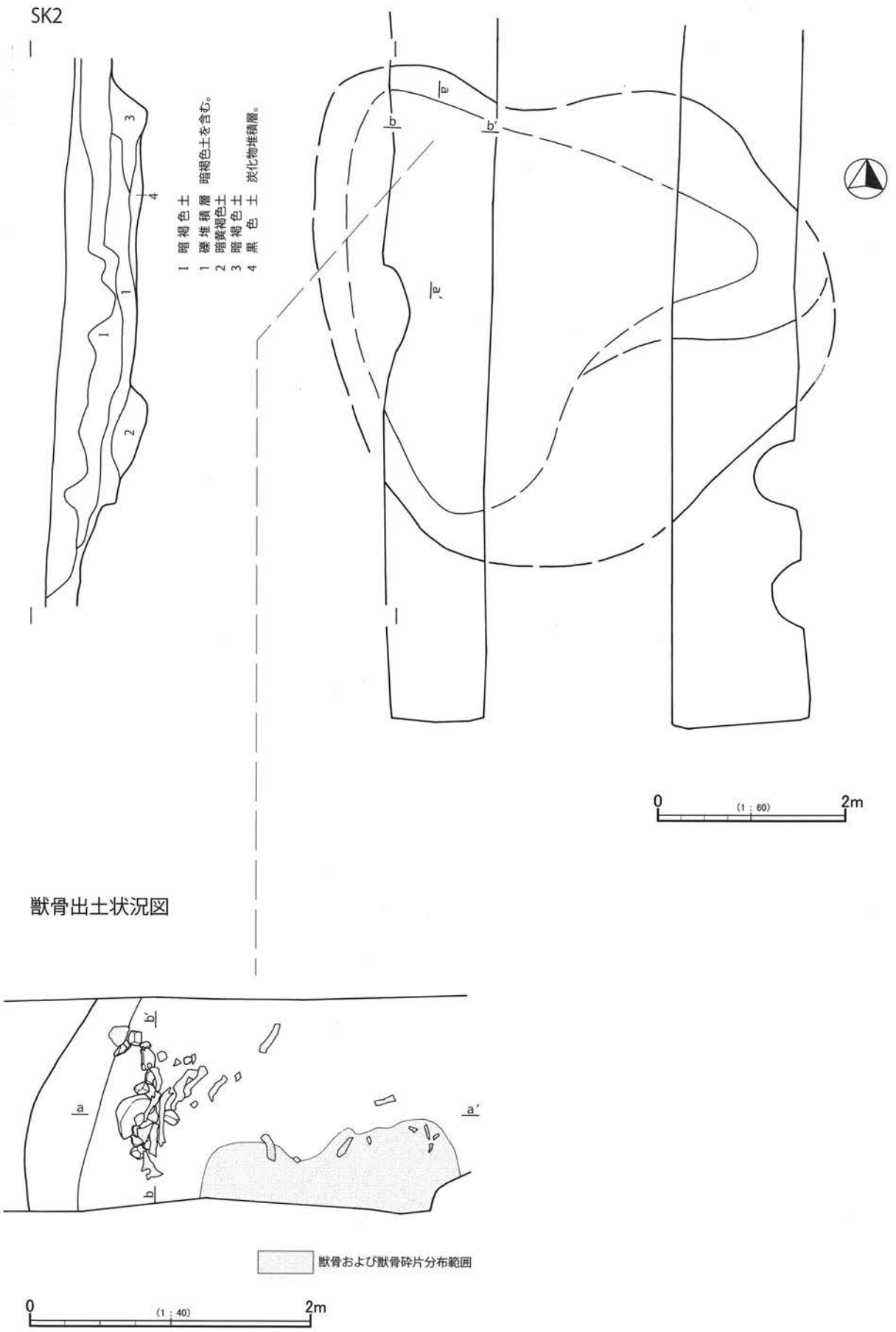


SI7 カマド



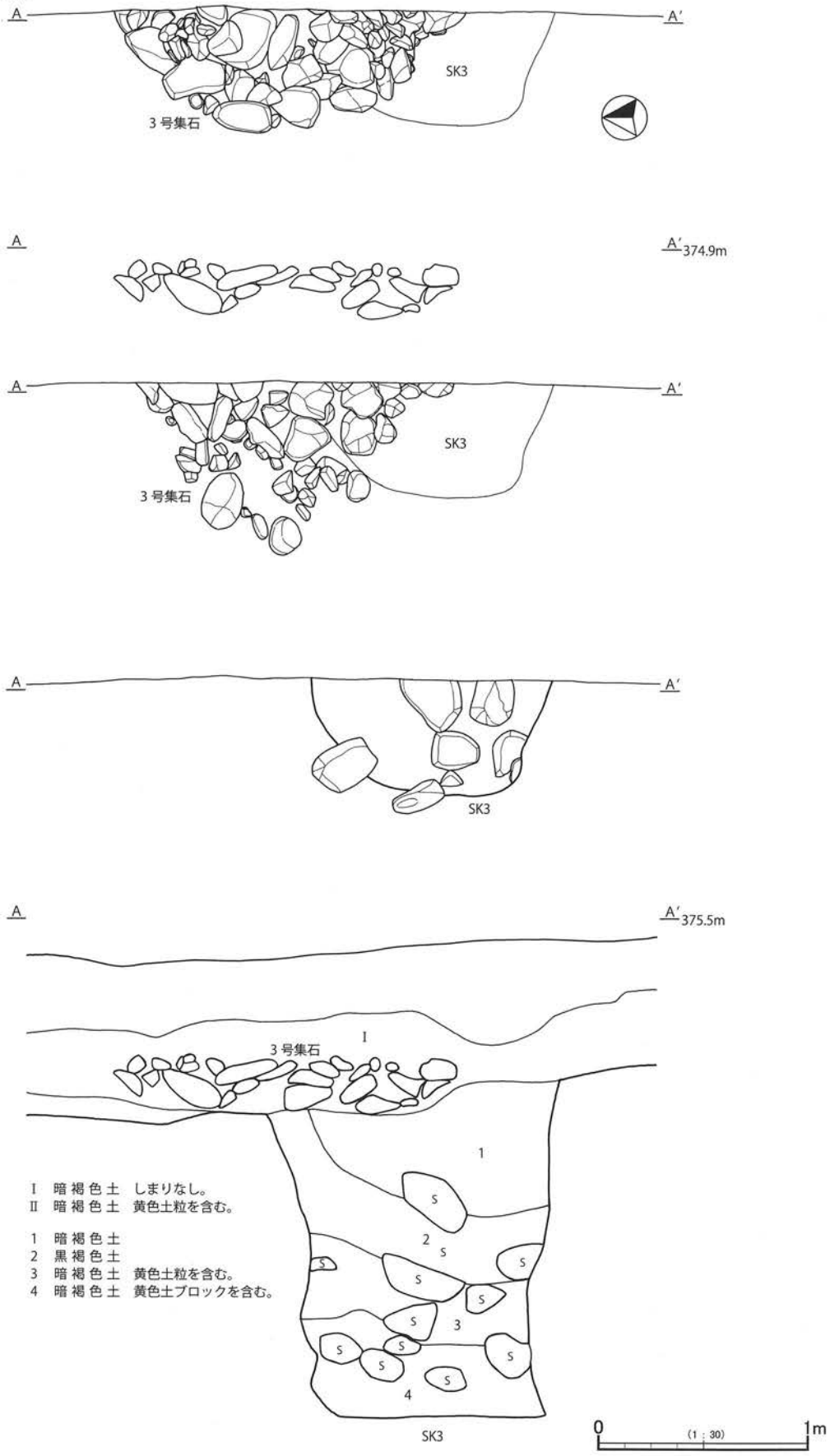


第67図　SI7


SK2
I 暗褐色土
1 礫堆積層 暗褐色土を含む。
2 暗黄褐色土
3 暗褐色土
4 黒色土 炭化物堆積層。
獣骨出土状況図
獣骨および獣骨砕片分布範囲
0 (1：60) 2m
0 (1：40) 2m

第68図　SK2

SK3・3 号集石



第69図 SK3、3号集石

確認範囲では不整楕円形で東西約75cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・SK7〔第70図〕

位置と検出状況　H-3グリッド、9Trの東側に位置する。重複する遺構はなかった。やや不整の長方形を呈し、約1.5×1.2mを測った。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・SK8〔第70図〕

位置と検出状況　B-1・2グリッド、11Trの中央に位置する。確認範囲では重複する遺構はなかった。不整楕円形を呈し、東西約1.3m、確認面からの深さ約10cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・1号集石〔第71図〕

位置と検出状況　K-14グリッド、1Trのほぼ中央に位置する。確認範囲では長径約2mの楕円形状に礫が集積しており、確認面から掘り方までの深さは約28cmを測った。上層には20～30cm大、下層には40cm大の礫を充填していた。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・2号集石〔第71図〕

位置と検出状況　K-13グリッド、1Trの北側に位置する。確認範囲では径約1.8mの半円形状に礫が集積していた。確認面から掘り方までの深さは約30cmを測り、20～40cm大の礫が充填されていた。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・3号集石〔第69図〕

位置と検出状況　K-12グリッド、1Trの北側に位置する。確認範囲ではSK3の上部に位置し、径約1.7mの半円形状に礫が集積していた。確認面から掘り方までの深さは約30cmを測り、20～40cm大の礫が充填されていた。

遺構の時期　出土遺物がなく、不明である。

・4号集石〔第72図〕

位置と検出状況　K-11・12グリッド、1Trの北端に位置する。重複するSD6を壊していた。規模は明確ではないが、調査範囲では南北約3mの範囲に礫が集積していた。確認面から掘り方までの深さは約40cmを測った。充填されていた礫は、上層では10～30cm大、下層では40～50cm大の礫が充填していた。**出土遺物**　土師器坏(21)、焼成粘土塊(22)などが出土した。**遺構の時期**　明確ではないが、礫に混在していた出土遺物から、11C代としておく。

・5号集石〔第73図〕

位置と検出状況　K-6グリッド、6Tr（N）の中央に位置する。6号集石の南側に並び、径約80cmの円形状に礫が集積していた。掘り方は明確ではなかったが、5～30cm大の礫が集積していた。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

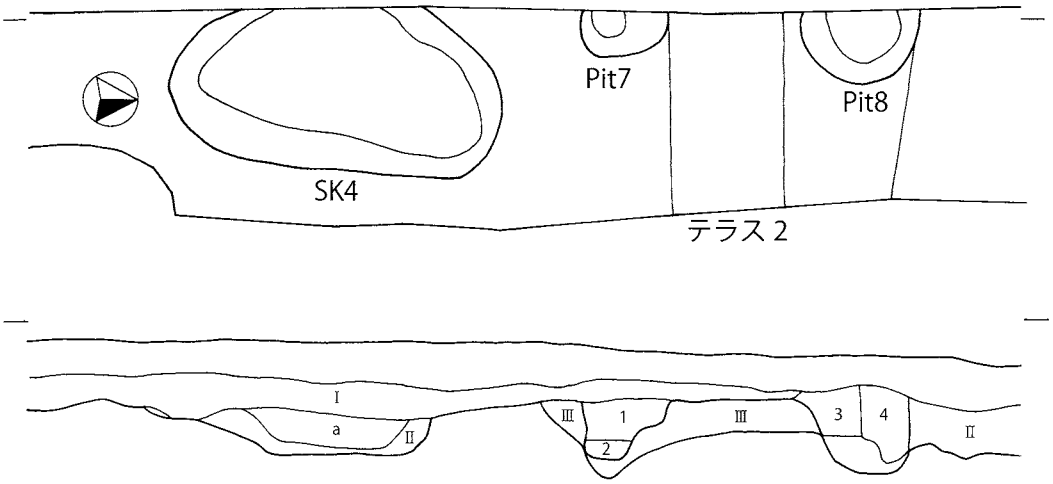
・6号集石〔第73図〕

位置と検出状況　K-6グリッド、6Tr（N）の中央に位置する。5号集石の北側に並び、不整形であるが南北約1mの範囲に礫が集積していた。堀方は明確ではなかったが、30cm大の礫が集積していた。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・7号集石〔第73図〕

位置と検出状況　G・H-3グリッド、9Trに位置する。重複するSI7の上面に位

SK4、Pit7・8、テラス 2

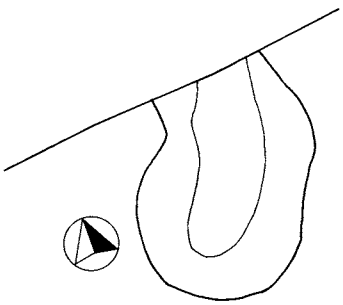


Ⅰ　暗 褐 色 土　黄色土流を少量含む。漸移層。
Ⅱ　暗 褐 色 土　黄色土はあまり含まない。

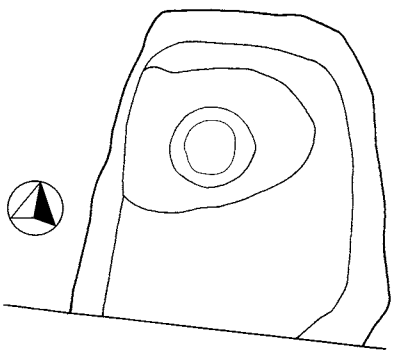
SK4
a　暗 褐 色 土　黄色土粒を含む。
テラス 2
Ⅲ　黄　色　土　砂質。

Pit7
1　黒 褐 色 土　黄色土ブロックを含む。
2　暗黄褐色土
PiT8
3　暗 褐 色 土　4 層に似るが、しまがない。
4　暗 褐 色 土　固くしまる。

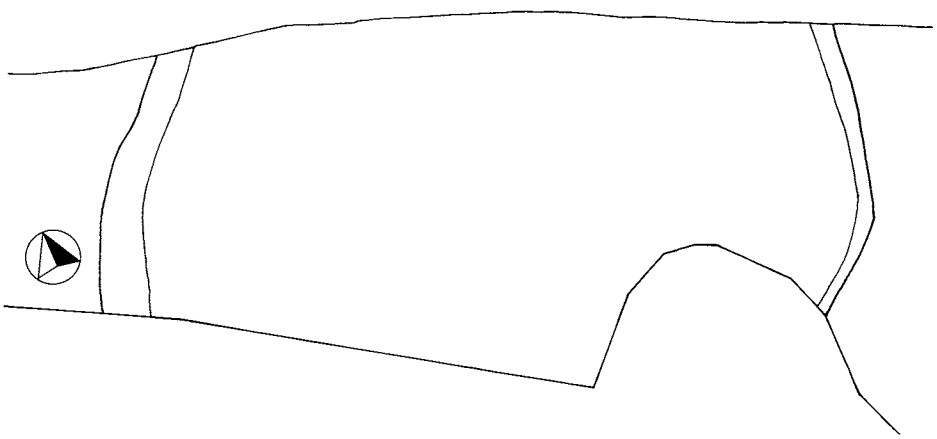
SK6



SK7



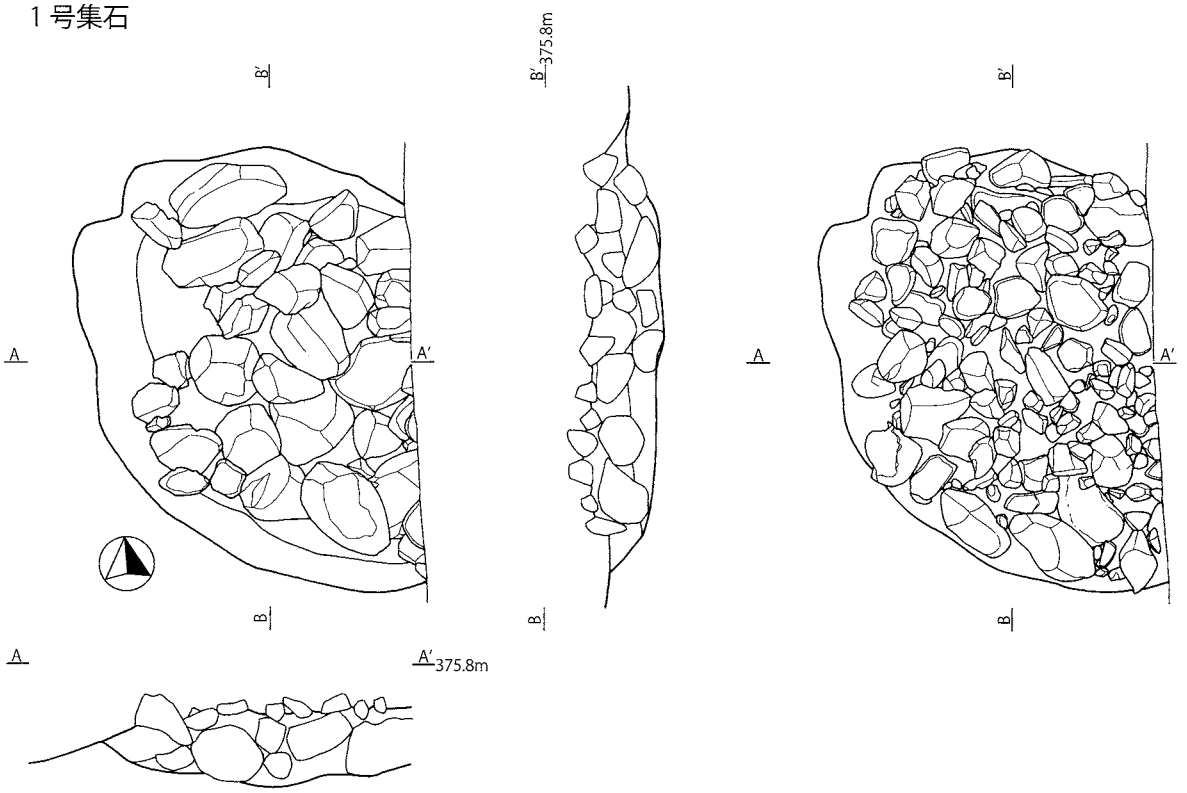
SK8



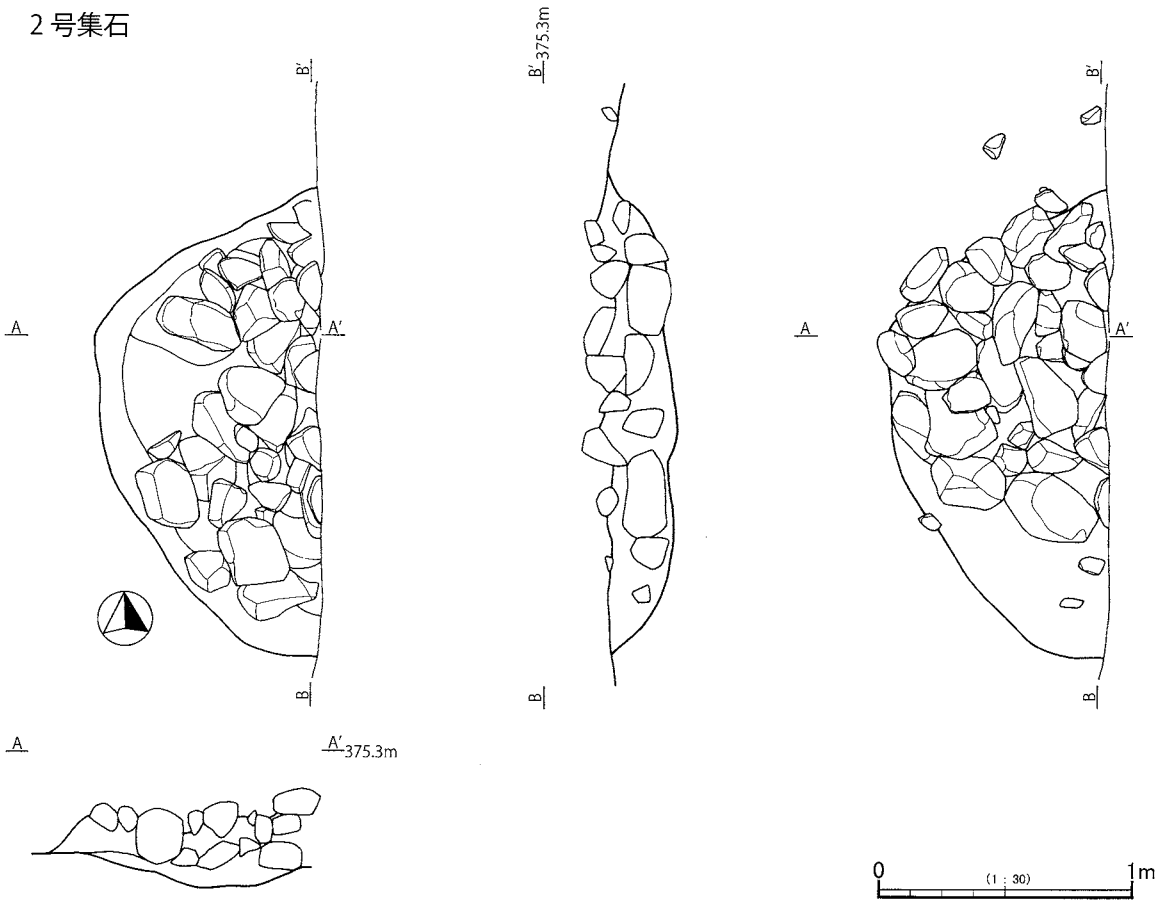
0　(1 : 30)　1m

第70図　SK4・6～8、Pit7・8、テラス2

1 号集石

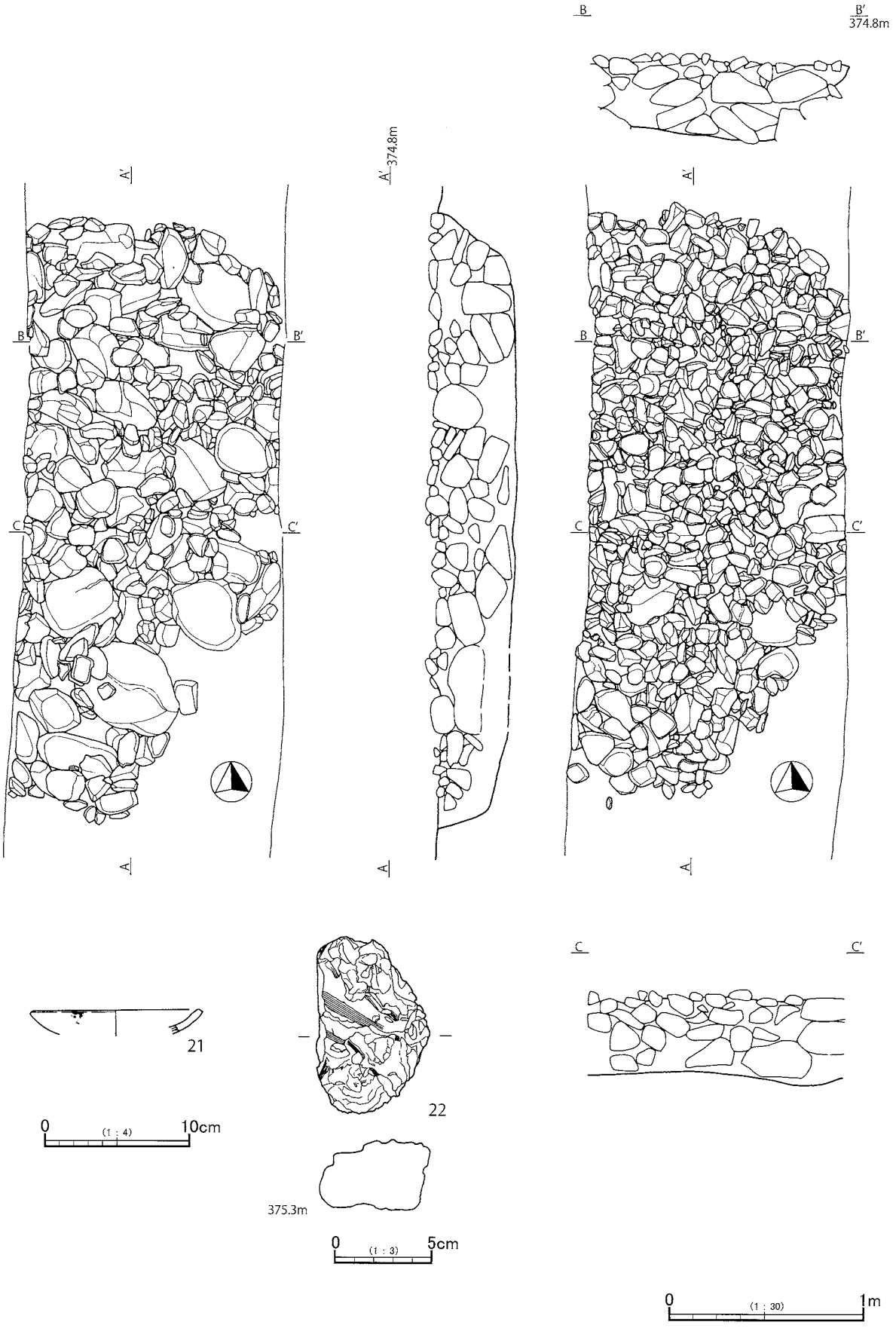


2 号集石



第71図　1・2号集石

4号集石



第72図　4号集石

置し、コの字状に配された礫を確認し、東西約1.4 m、南北約0.9mを測った。掘り方は不明であるが、20～50cm大の礫が7個配置され、内部に黒褐色土が堆積していた。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・8号集石〔第74図〕

位置と検出状況　G・H-3グリッド、9Trに位置する。重複するSI7を壊しており、確認範囲では長軸1.9 m、短軸1.5 mの方形状に礫を配石し、その間を礫で充填していた。内部からは10C～11C代の遺物が出土しており、集石墓であった可能性が窺える。確認面から掘り方までは最深約35cmを測り、20～50cm大の礫が充填されていた。**出土遺物**　土師器皿(23～30)・柱状高台皿が出土した。**遺構の時期**　出土遺物から、12C代としておく。

・9号集石〔第75図〕

位置と検出状況　K-3グリッド、7Trに位置する。重複するSI3を壊していた。礫は東西約2.5 mの範囲で列状に集積していた。確認面から掘り方までの深さは約50cmを測り、15～50cm大の礫が集積していた。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・10号集石

位置と検出状況　K-15グリッド、1Trの南側に位置する。11号集石の南側の位置に並び、南北約1.8 mの範囲に礫が集積していた。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・11号集石

位置と検出状況　K-15グリッド、1Trの南側に位置する。10号集石の北側の位置に並び、南北約1.9 mの範囲に礫が集積していた。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・12号集石〔第75図〕

位置と検出状況　K-10グリッド、13Trの中央からやや南に位置する。重複するSD3を壊しており、南北約1.1 m、東西1.4 mの範囲に礫が集積していた。掘り方は明確ではなく、10～40cm大の礫が集積していた。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・SD1〔第75図〕

位置と検出状況　K-6～10グリッド、5・6Trで確認した。南北方向の溝であり、重複するSI2、SK1を壊していた。検出した範囲では長さ約41 m、幅約1 m、確認面からの深さは約25cmを測った。**遺構の特徴**　道路に沿って延びており、旧道路跡の側溝、または12Trで確認したSD7や13Trで確認したSD8と対応し、畑地に伴う溝であった可能性が窺える。**出土遺物**　咸平元寶(61)が出土した。**遺構の時期**　出土遺物が少なく、明確ではないが、検出状況から近世・近代頃まで下る可能性がある。

・SD2〔第76図〕

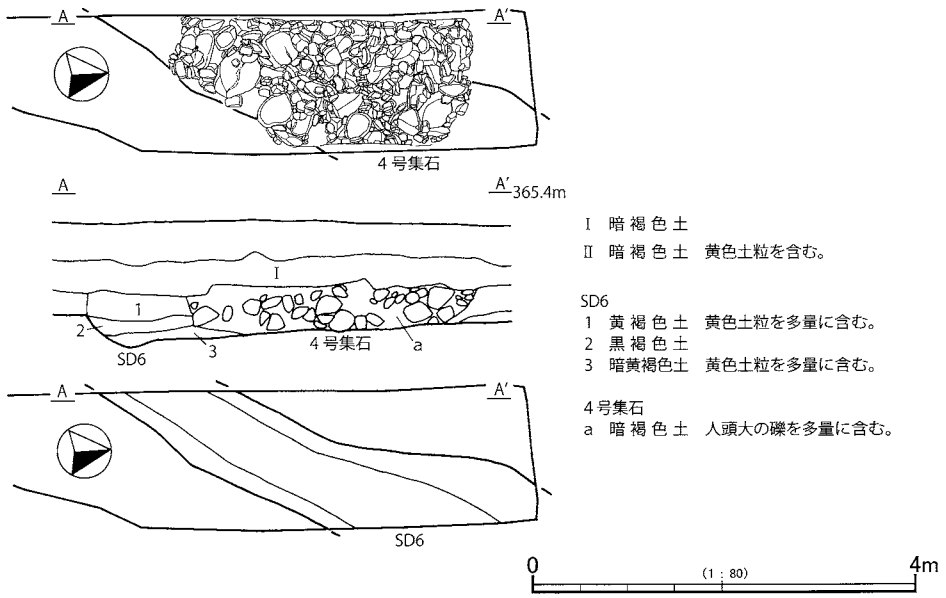
位置と検出状況　K-8グリッド、12Tr南側で確認する。東西方向の溝であり、調査範囲においては重複するSD3に壊されていた。規模は明確ではないが、検出した範囲では幅約1.9 m、確認面からの深さは約30cmを測った。

遺構の時期　出土遺物がなく、不明である。

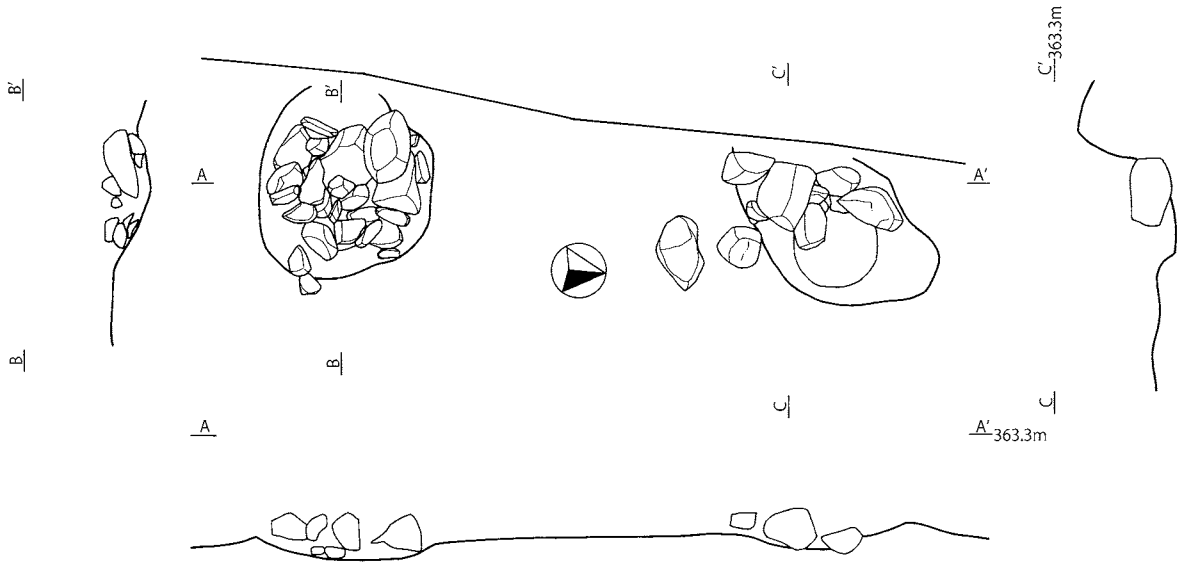
・SD3〔第76図〕

位置と検出状況　K-6～13グリッド、4・12・13Trで確認した。重複するSI2、SD2・7・8を壊し、12号集石に壊されていた。南北方向に延びる溝で、規模

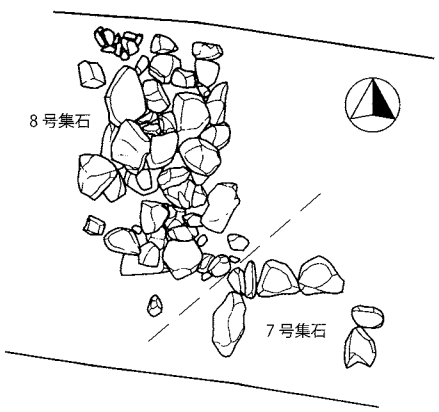
SD6



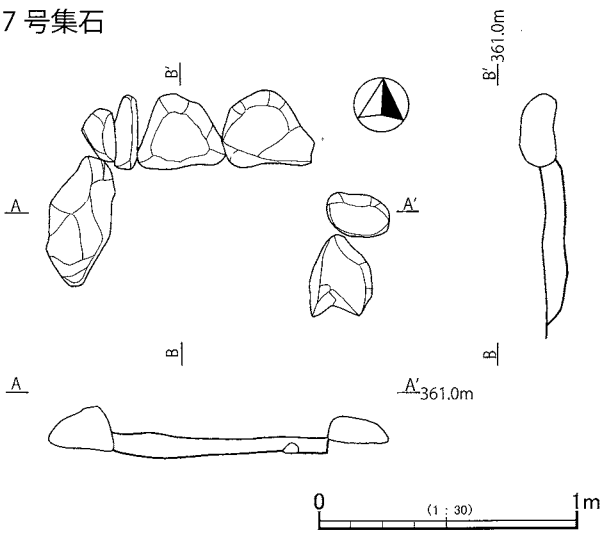
5･6号集石



7･8号集石 位置関係図

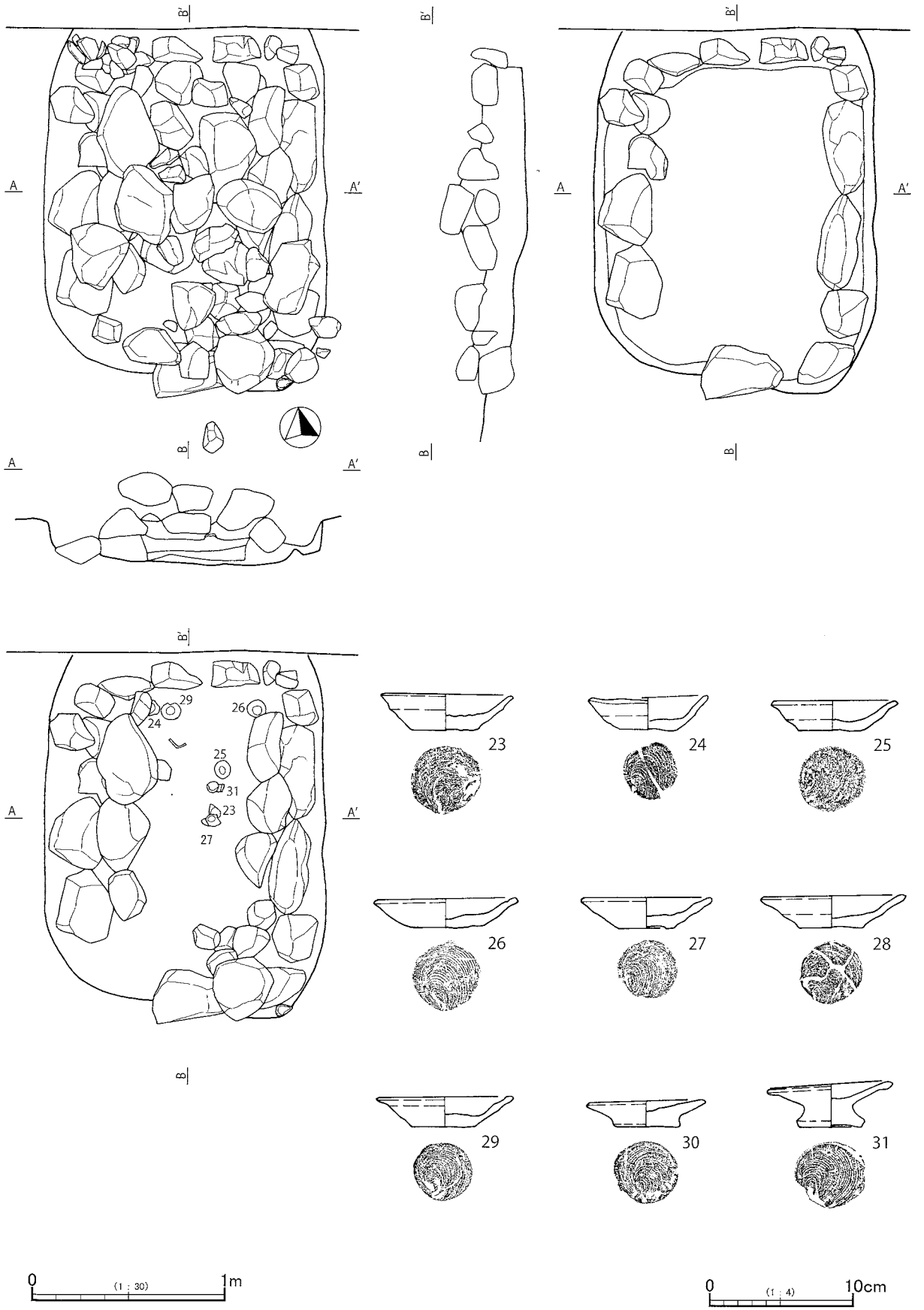


7号集石



第73図　SD6、5～7号集石

8 号集石



第74図　8号集石

は明確ではないが、確認した長さは約71 m、確認面からの深さは約70cmを測った。**遺構の特徴**　道路に沿って延びており、覆土中には黄色土を含んでいた。旧道路の側溝の可能性が考えられる。**出土遺物**　土師器皿(32)、須恵器小型甕(33)が出土した。**遺構の時期**　出土した遺物は11C頃のものと比定されるが、旧道路の側溝であれば近世・近代頃まで下る可能性が考えられる。

SD4〔第76図〕

位置と検出状況　K-4・5グリッド、6Tr(N)の北端で確認した。南北方向に延びる溝で、検出した範囲では長さ約4.2 m、確認面からの深さは約40cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

SD5

位置と検出状況　F-3グリッド、9Trの西端で確認した。南北方向の溝であり、調査範囲では重複はなかった。規模は明確ではないが、検出した範囲では幅約1.6 m、確認面からの深さは約70cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

SD6〔第73図〕

位置と検出状況　K-11グリッド、1Trの北端で確認した。北東方向に延びる溝で、重複する4号集石に壊されていた。検出した範囲では幅約90cm、確認面からの深さは約50cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

SD7〔第76図〕

位置と検出状況　K-6グリッド、12Trの北側で確認した。東西方向の溝であり、調査範囲においては重複するSD3に壊されていた。規模は明確ではないが、検出した範囲では幅約70cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

SD8〔第76図〕

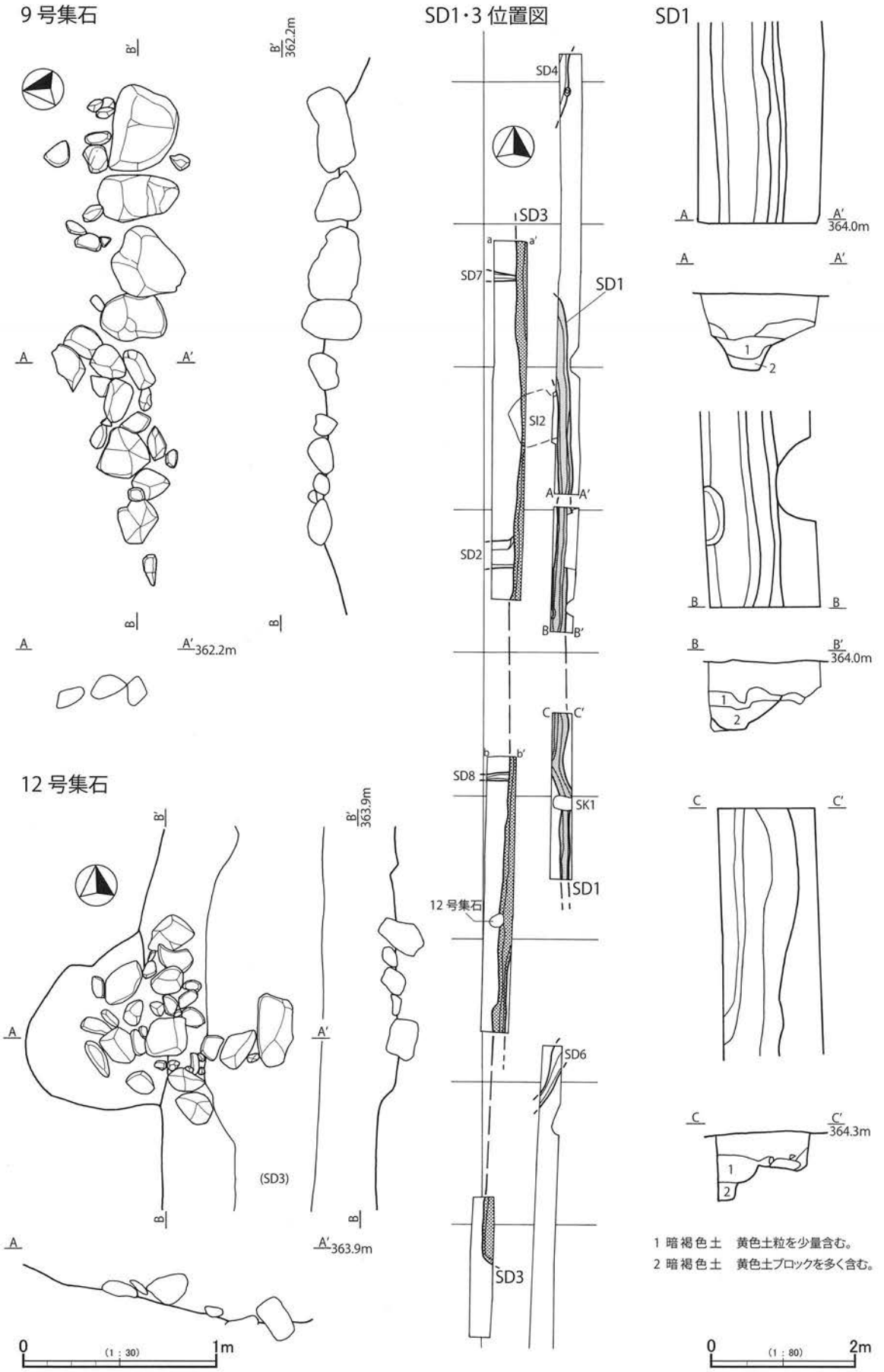
位置と検出状況　K-9グリッド、13Trの北側で確認した。東西方向の溝であり、調査範囲においては重複するSD3に壊されていた。規模は明確ではないが、検出した範囲では幅約60cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

表24　石動遺跡支線3号地区　トレンチ一覧

位置	遺構
1Tr	SK2・3、1～4・10・11号集石、SD6
2Tr	SK2
3Tr	遺構なし
4Tr	SD3
5Tr	SK1・SD 1
6Tr	SI1・2、5号集石、SD1・4、テラス1
7Tr	SI3～5、9号集石、Pit19
8Tr	SI6、Pit18
9Tr	SI7、SK6・7、8号集石、Pit9～17、SD5
10Tr	遺構なし
11Tr	SK6
12Tr	SI2、SD2・3・7、Pit1～4
13Tr	SK4、SD3・8、Pit6～8、12号集石、テラス2

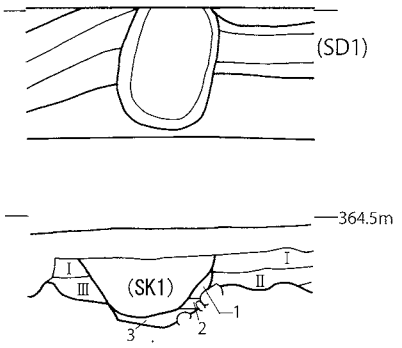
表25　石動遺跡支線3号地区　遺構一覧

遺構名	位置	推定年代
SI1	6Tr	不明
SI2	6Tr・12Tr	不明
SI3	7Tr	11C後半頃
SI4	7Tr	8C後半頃
SI5	7Tr	8C中頃
SI6	8Tr	不明
SI7	9Tr	8号集石構築以前
SK1	5Tr	不明
SK2	1・2Tr	近代
SK3	1Tr	不明
SK4	13Tr	不明
SK5	7Tr	不明
SK6	9Tr	不明
SK7	9Tr	不明
SK8	11Tr	不明
テラス1	6Tr	不明
テラス2	13Tr	不明
1号集石	1Tr	不明
2号集石	1Tr	不明
3号集石	1Tr	不明
4号集石	1Tr	11C代
5号集石	6Tr	不明
6号集石	6Tr	不明
7号集石	9Tr	不明
8号集石	9Tr	12C代
9号集石	7Tr	不明
10号集石	1Tr	不明
11号集石	1Tr	不明
12号集石	13Tr	不明
Pit1～4	12Tr	不明
Pit6～8	13Tr	不明
Pit9～17	9Tr	不明
Pit18	8Tr	不明
Pit19	7Tr	不明
SD1	5Tr・6Tr	近世・近代頃
SD2	12Tr	不明
SD3	4Tr・12Tr・13Tr	11C頃
SD4	6Tr	不明
SD5	9Tr	不明
SD6	1Tr	不明
SD7	12Tr	不明
SD8	13Tr	不明



第75図　9・12号集石、SD1

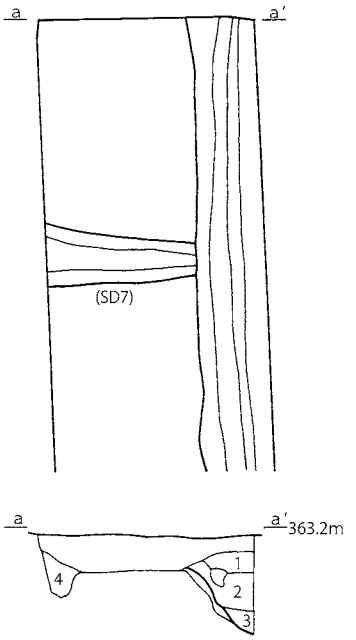
SK1



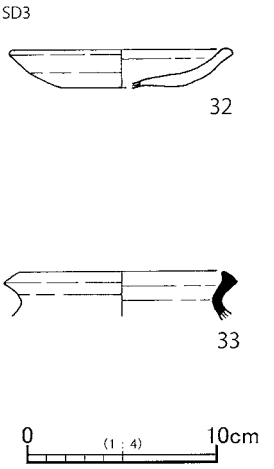
Ⅰ 暗褐色土　黄色土粒を少量含む。
Ⅱ 暗褐色土　黄色土はあまり含まない。
Ⅲ 黄色土　砂質土。

1 暗褐色土　黄色土粒を少量含む。
2 黄褐色土　黄色土粒から成る。
3 黒褐色土　粘土質、黄色土ブロックを含む。

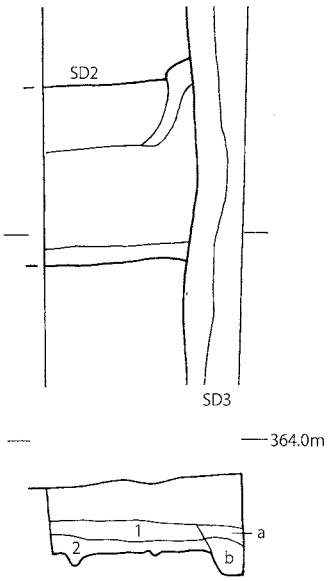
SD3



1 暗褐色土
2 暗褐色土　黄色土粒を含む。
3 暗黄褐色土　黄色土粒を含む。
4 黒褐色土　黄色土ブロックを含む。
カクランか？

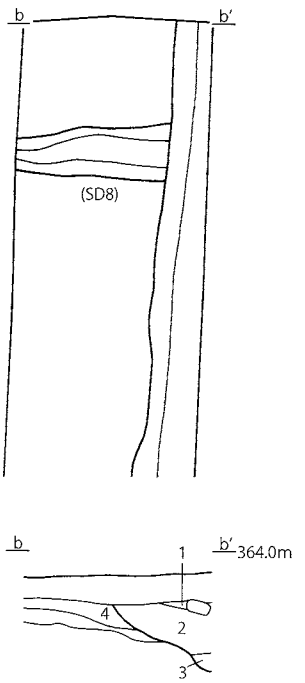


SD2



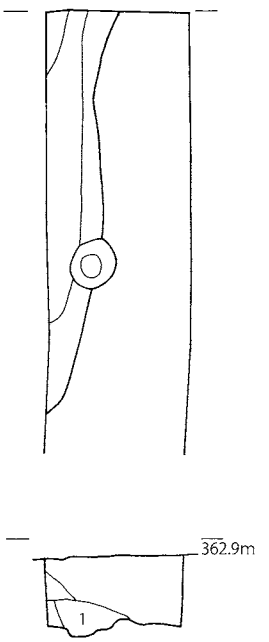
SD2
1 黒褐色土　黄色土粒を含む。
2 暗黄褐色土　やや鉄分を含む。

SD3
a 暗褐色土　黄色土粒を含む。
b 暗褐色土　黄色土ブロックを多く含む。



1 暗褐色土　しまりなし。
2 暗黄褐色土　黄色土ブロックを含む。
3 暗黄褐色土　黄色土粒を多量に含む。
4 暗褐色土　2層より黄色土ブロックが少ない。

SD4

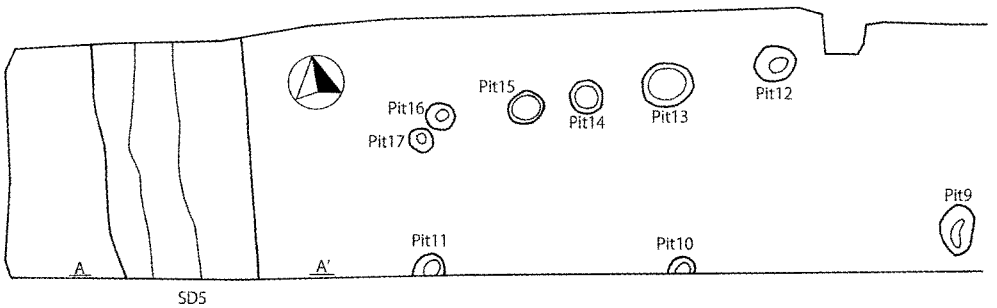


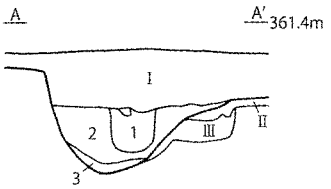
1 黒褐色土
黄色土ブロックを含む。

0 (1 : 80) 2m

第76図　SK1、SD2～4

SD5・Pit(9 ～ 17)



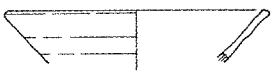


I　暗 褐 色 土　表土層。
II　暗黄褐色土　漸移層。
III　黄　色　土　砂質土。

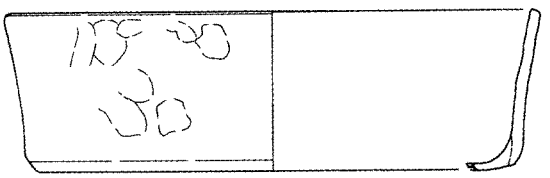
SD5
1　黒 褐 色 土　溝覆土中につくられたピットか？
2　暗 褐 色 土　黄色土粒を多く含む。
3　暗黄褐色土　黄色土粒を多く含む。

0　(1：80)　4m

Pit8

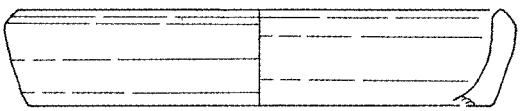


34

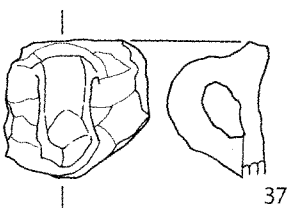


35

6Tr



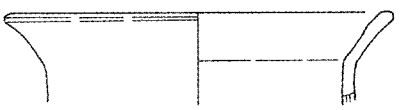
36



37

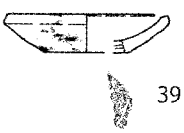
(37)　0　(1：3)　10cm

7Tr



38

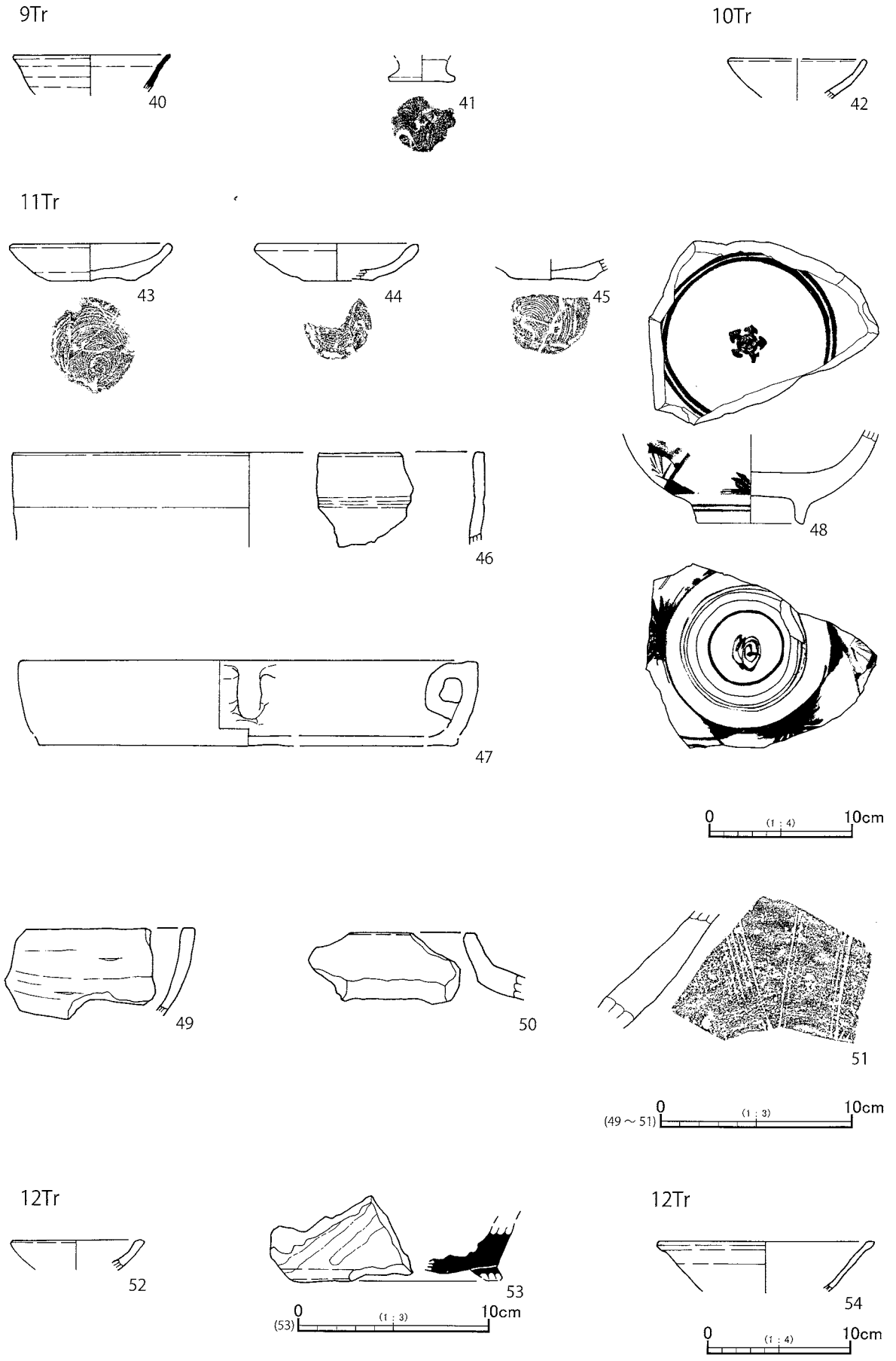
8Tr



39

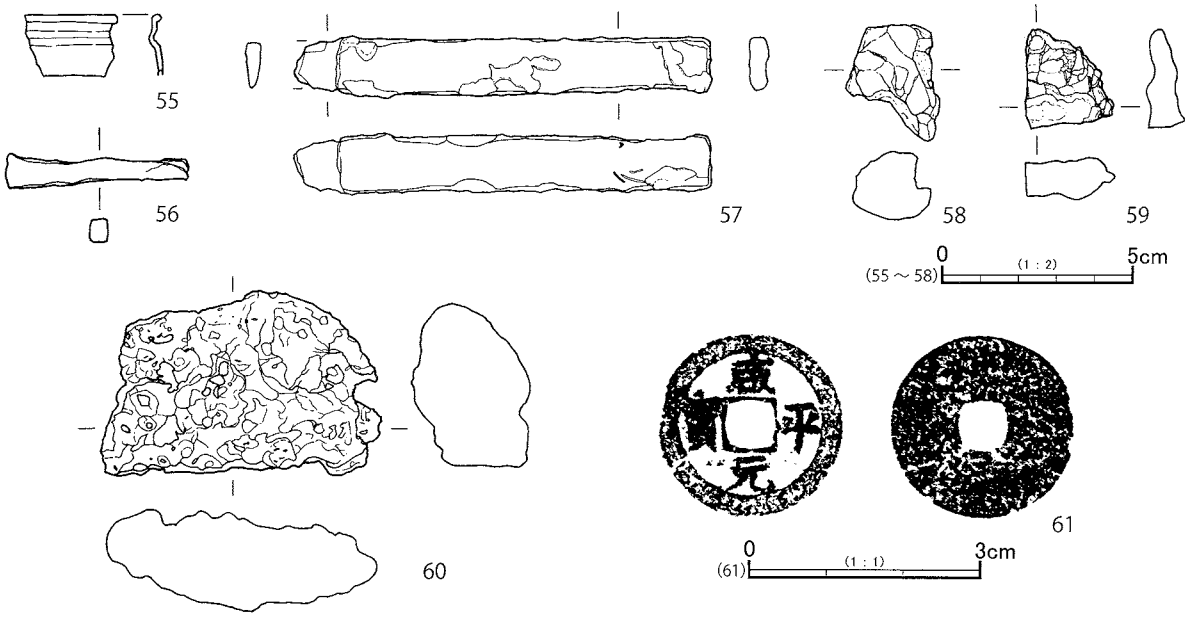
0　(1：4)　10cm

第77図　SD5・Pit、遺構外(1)

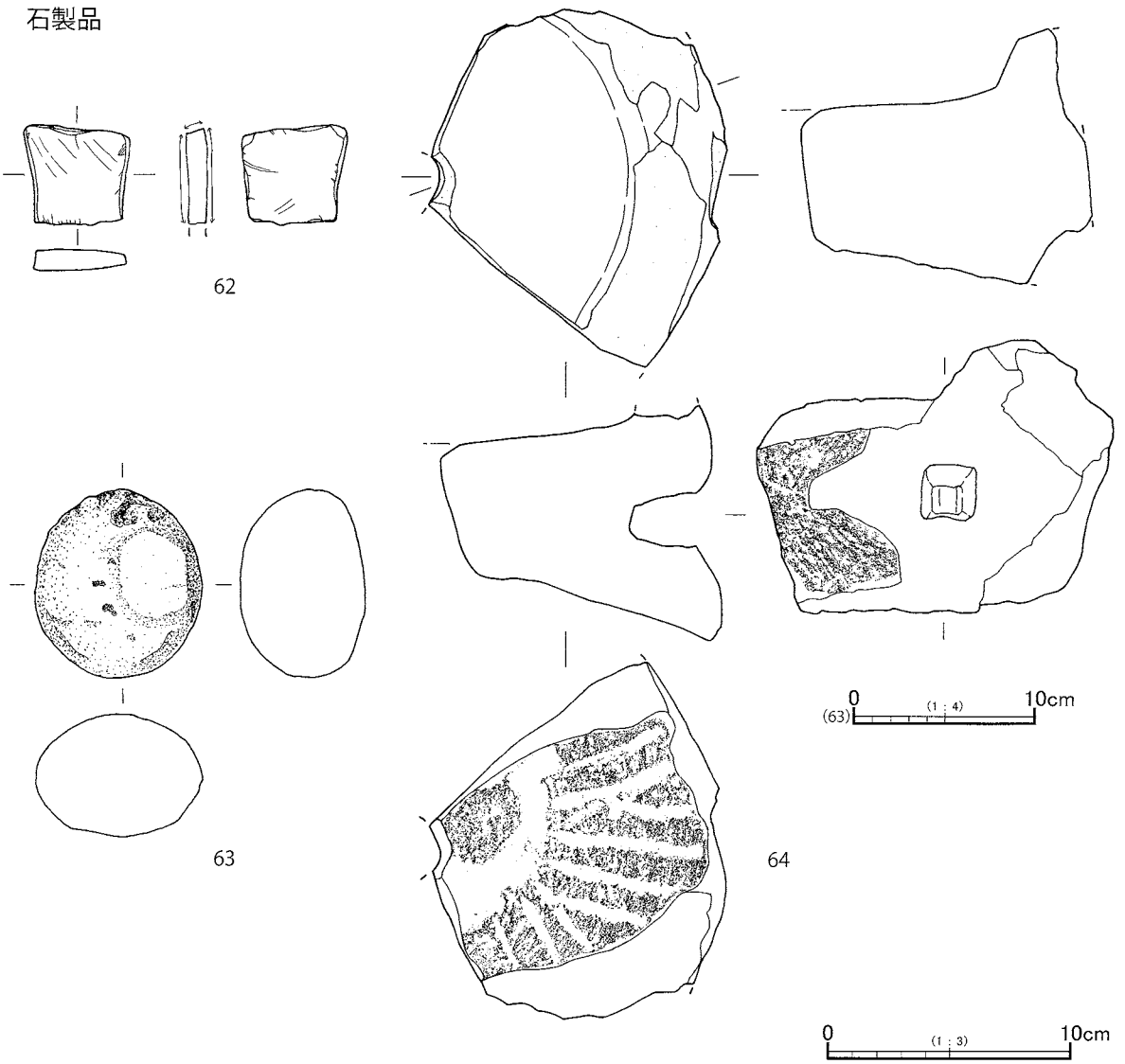

9Tr
10Tr
40
41
42
11Tr
43
44
45
46
47
48
0
(1 : 4)
10cm
49
50
51
0
(49～51)
(1 : 3)
10cm
12Tr
52
53
0
(53)
(1 : 3)
10cm
12Tr
54
0
(1 : 4)
10cm

第78図　遺構外

金属製品



石製品



第79図　金属製品・石製品

表 26　石動遺跡支線３号地区　遺物観察表

図	番号	遺　構	種　別	器　種	口径 (cm) 器高 (cm) 底径 (cm)	焼成	胎　土	整　形　技　法	色　調	備　考
65	1	SI3	土師器	皿	(9.6) (2.1) 4.6	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	内・外面の一部がやや黒変 全体的に劣化
65	2	SI3	土師器	皿	(8.4) (2.0) (4.4)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	全体的にやや黒変 内面が煤けている
65	3	SI3	土師器	皿	- - 5.0	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	
65	4	SI3	土師器	坏	(17.0) (5.3) (6.2)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	内面黒変 底面及び外面体部下半が煤けている
65	5	SI3	土師器	坏	- - 6.2	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	全体的にやや煤けている
65	6	SI4	土師器	高台付坏	- - 11.3	良	緻密、赤・白・黒	(外) ヘラ削り (内) ロクロナデ、ミガキ (底) 静止ヘラ切、付高台、ミガキ	橙色	外面黒変
65	7	SI4	土師器	坏	12.3 4.8 7.4	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ、暗文 (底) 回転糸切痕、線刻	橙色	見込み部にも暗文あり 線刻は格子状に、縦横２条・３条
65	8	SI4	土師器	坏	(13.4) - -	良	緻密、赤・白	(外) ロクロナデ、ヘラ削り、ミガキ (内) ロクロナデ、暗文	橙色	
65	9	SI4	土師器	坏	(13.2) (4.7) (8.0)	良	密、赤・白・金	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) ヘラ削り	橙色	内面が部分的に黒変
65	10	SI4	土師器	皿	(11.6) (2.4) (6.0)	良	密、白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	鈍橙色	内・外面がわずかに煤けている
65	11	SI4	陶器	坏	(14.8) - -	良	やや粗、白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	灰白色	全体的に被熱による劣化
65	12	SI4	土師器	鉢	32.6 20.7 9.5	良	やや粗、白・金	(外) 縦ハケメ、ナデ (内) 横ハケメ、ナデ、指頭痕 (底) 木葉痕	明赤褐色	甕系の鉢 破損後、部分的に黒変
65	13	SI4	土師器	甕	(22.9) - -	良	密、白・黒・金	(外) 縦ハケメ、ナデ (内) 横ハケメ、ナデ	明赤褐色	
65	14	SI4	土師器	竈形土器	- - -	良	密、白・黒・金	(外) 指頭痕、輪積痕 (内) ロクロナデ、指頭痕	橙色	体部片 穿孔部あり 内面一部黒変
65	15	SI4	土師器	竈形土器	- - -	良	密、白・黒・金	(外) ナデ、指頭痕 (内) ナデ、指頭痕	明赤褐色	鍔部の最下部
65	16	SI4	陶器	甕	- - -	良	密、白・黒	(外) 叩き目 (内) ナデ	暗灰黄	常滑か？
66	17	SI5	土師質土器	皿	(13.2) - -	良	密、赤・白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	鈍褐色	外面黒変 15C 後半～ 16C 前半か
66	18	SI5	土師器	鍋	- - -	良	密、赤・白・金	(外) 横ハケメ、ナデ指頭痕 (内) ハケメ、ナデ	明赤褐色	
66	19	SI5	土師器	甕	(25.0) - -	良	やや粗、赤・白・黒・金	(外) ナデ、ハケメ、ヘラ削り (内) ナデ	赤褐色	外面が部分的に黒変 輪積痕
67	20	SI7	土師器	柱状高台坏	- - 5.4	良	密、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	外面一部黒変 全体的に煤けている
72	21	４号集石	土師器	坏	(11.4) - -	良	密、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	鈍橙色	外面部分的に黒変 灯明か
74	23	８号集石	土師器	小皿	9.2 2.6 4.7	良	密、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、指頭痕	鈍橙色	内・外面部分的に黒変
74	24	８号集石 SI7	土師器	小皿	8.3 2.4 3.9	良	やや粗、白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	鈍橙色	全体的に劣化 外面一部黒変
74	25	８号集石	土師器	小皿	8.7 2.2 4.6	良	やや粗、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	全体的に劣化 底面ほぼ磨滅
74	26	８号集石	土師器	小皿	10.1 2.1 4.8	良	密、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	鈍橙色	黒斑あり 内面に輪積状の継目あり 成形時、口縁部に粘土紐付け足しか
74	27	８号集石	土師器	小皿	9.2 2.2 4.0	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、指頭痕	淡橙色	全体的にやや劣化
74	28	８号集石	土師器	小皿	(10.0) (2.3) 4.4	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	鈍橙色	全体的に劣化 底面ほぼ磨滅
74	29	８号集石	土師器	小皿	9.4 2.5 4.2	良	密、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	黒斑あり 見込み部周辺を強くナデ、 内面底部に段あり
74	30	８号集石	土師器	小皿	8.4 2.0 4.6	良	密、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	淡橙色	底面及び外面の一部がやや黒変 見込み部中心に凹みあり
74	31	８号集石	土師器	柱状高台皿	8.6 3.3 4.6	良	密、白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	鈍橙色	内面やや黒変 全体的にやや煤けている
76	32	SD3	土師器	皿	(11.8) (2.0) (6.2)	良	密、白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	淡橙色	歪み大
76	33	SD3	須恵器	小型甕	(12.2) - -	良	緻密	(外) ロクロナデ、自然釉 (内) ロクロナデ	灰色	
77	34	Pi t 8	土師器	小皿	(14.0) - -	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	淡橙色	黒斑あり

図	番号	遺構	種別	器種	口径 (cm) 器高 (cm) 底径 (cm)	焼成	胎土	整形技法	色調	備考
77	35	1Tr	土師質土器	焙烙鍋	(28.0) (8.5) (26.0)	良	やや粗、白・黒	(外) ナデ、指頭痕 (内) ナデ (底) ナデ	鈍橙色	底面及び外面黒変 器厚が比較的薄い 近世
77	36	6Tr	土師質土器	焙烙鍋	(26.8) (5.1) (24.2)	良	密、赤・白・金	(外) ロクロナデ、回転ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ	橙色	外面黒変 近世
77	37	6Tr	土師質土器	内耳鍋	- - -	良	密、白・黒・金	(外) ナデ、ヘラ削り (内) ナデ、指頭痕	橙色	外面黒変 近世
77	38	7Tr	土師器	甕	(20.5) - -	良	密、白・金	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ナデ	赤褐色	内面及び外面の一部が黒変
77	39	8Tr	土師器	小皿	(8.4) (2.0) (4.4)	良	密、白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	鈍橙色	内・外面部分的に黒変
78	40	9Tr	須恵器	坏	(10.9) - -	良	密、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	暗灰黄色	
78	41	9Tr SI7	土師器	柱状高台坏	- - 4.7	良	やや粗、赤・白	(外) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	全体的に劣化
78	42	10Tr	土師器	坏	(9.8) - -	良	密、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	鈍橙色	内面一部黒変
78	43	11Tr	土師器	坏	(11.4) (2.6) (6.0)	良	密、白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	鈍橙色	全体的にやや黒変
78	44	11Tr	土師器	坏	(11.2) (2.6) (4.8)	良	密、白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	
78	45	11Tr	土師器	坏	- - (5.8)	良	密、白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	内面やや黒変
78	46	11Tr	土師質土器	焙烙鍋	(33.0) - -	良	密、白	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ	暗赤褐色	外面黒変 近世
78	47	11Tr	土師質土器	焙烙鍋	(32.0) (6.0) (29.2)	良	密、白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ	橙色	耳部 3 箇所か 外面黒変
78	48	11Tr	磁器	染付碗	- - 5.6	良	緻密	全面施釉	灰白色	近世 肥前
78	49	11Tr	土師質土器	焙烙鍋	- - -	良	密、赤・白	(外) ナデ (内) ナデ、指頭痕	鈍橙色	外面黒変 近世
78	50	11Tr	土師質土器	茶釜か	- - -	良	密、白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	鈍橙色	外面がやや煤けている 15C ～近世頃か
78	51	11Tr	土師質土器	擂鉢	- - -	良	密、白・金	(外) ナデ (内) ナデ、擂り目	鈍橙色	外面がやや煤けている 15C 後半～ 16C 末か
78	52	12Tr	土師質土器	小皿	(9.4) - -	良	密、白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	鈍橙色	15C 後半～ 16C 前半か かわらけ
78	53	12Tr	灰釉陶器	壺	- - -	良	密、白・黒	(外) 回転ヘラ削り、自然釉 (内) ナデ (底) ナデ、付高台	灰黄色	
78	54	13Tr	土師器	坏	- - -	良	密、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	黒班あり

表 27　石動遺跡支線 3 号地区　土製品観察表

図	番号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	胎土	色調	備考
72	22	4 号集石	焼成粘土塊	160.8	9.3	5.9	4.5	やや密、白・金	浅黄色	スサ混在、壁材片か

表 28　石動遺跡支線 3 号地区　金製品観察表

図	番号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	材質	備考
79	55	SI7	鉄器	1.1	1.6	2.5	0.2	鉄	口径（7.8cm）
79	56	SI7	刀子か	6.9	1.4	5.0	0.6	鉄	
79	57	SD1	小柄	31.9	1.1	1.5	0.5	鉄	鍍銀、銀糸装飾あり
79	58	-	滓	97.5	4.6	2.6	3.4	-	磁石によくつく（強）
79	59	SI4	滓	31.7	3.9	1.6	3.5	-	磁石に少し反応する（弱い）
79	60	11Tr	滓	470.0	7.1	4.5	10.8	-	磁石に少し反応する（弱い）

表 29　石動遺跡支線 3 号地区　石製品観察表

図	番号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	石質	備考
79	62	SD5	砥石	25.7	4.1	0.9	4.2	花崗岩質アプサライト	4 面使用
79	63	11Tr	磨石	390.0	7.9	7.0	5.2	花崗閃緑岩	磨り面 3 箇所か
79	64	11Tr	臼		20.5	17.0	15.2	安山岩	上臼　側面に孔・敲痕あり

4. まとめ

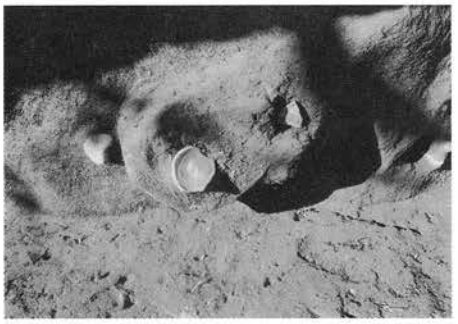
調査の結果、住居跡7軒、土坑8基、集石12箇所、溝8条、ピット20基、テラス2箇所を確認した。各遺構の時期については、本文と表25で示したが、本調査区では、出土遺物が少なく、時期不明の遺構が多かった。出土遺物から得た年代観の順に、遺構・遺物についてまとめると、古代ではSI5が8C中頃、SI4が8C後半頃、SI3･4号集石･SD3が11C代、8号集石が12C代であった。中世段階は明確ではないが、近世～近代ではSD1･SK2や鍍銀された小柄、古銭などを検出した。SD1については、調査時の所見から近世・近代頃に畑地の拡張により埋没したものと推察される。構築時期は明確ではなく、別遺構との重複関係より年代が遡る可能性も考えられ、調査区東側に所在する長昌寺の寺域と関連する可能性が窺える。なお、近代の「ウシ・ウマ捨て場」であるSK2については、附編3で詳細を分析・報告しているので参照されたい。

（望月）

PL 27　石動遺跡　支線3号地区

SI1　西から

SI1　北から

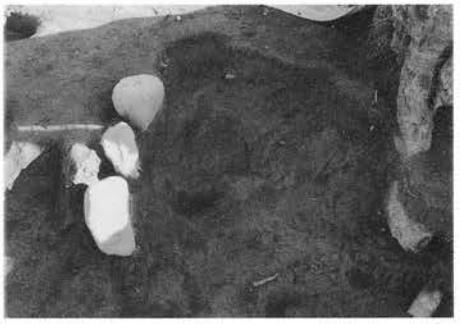

SI1 遺物出土状況　西から

SI2(12Tr)　北から

SI2(6Tr)　南から

SI2 古銭出土状況　西から

SI3　西から


SI3 カマド　西から

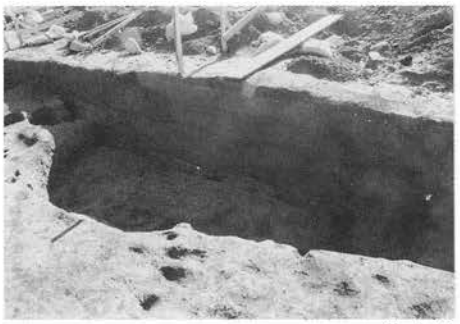
SI3・9 号集石　西から

9 号集石　南東から

PL28 石動遺跡 支線3号地区

SI4 東から

SI4 カマド 南から


SI4 北から

SI4 カマド 南から

Pit19 北から

SK5 北から

SI5 東から

SI5 西から

SI5 北から

4-1Tr 西から

PL 29　石動遺跡　支線3号地区

SI6　東から

SI6　西から

SI7　西から

SI7　東から

SI7 カマド前庭部　北から

SI7 カマド　北から

SI7 金属製品　東から

SI7 完掘状況　西から

SI7　北から

SK7　北から

PL30 石動遺跡 支線3号地区

SK1 北から

SK1 西から

SK2(1Tr) 東から

SK2(1Tr) 北から

SK2(2Tr) 南から

SK2 獣骨出土状況 東から

SK3 西から

3 号集石・SK3 西から

SK3 西から

SK4 東から

PL 31　石動遺跡　支線3号地区

SK6　南西から

SK6　西から

1 号集石　西から

1 号集石完掘状況　東から

2 号集石　西から

2 号集石完掘状況　西から

4 号集石　北から

4 号集石　北東から

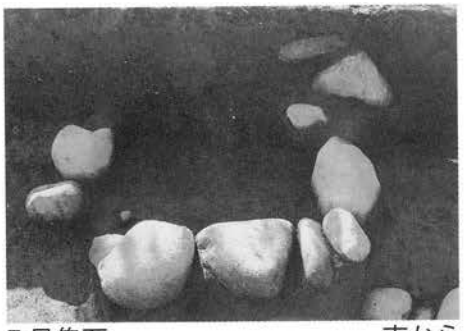
SD6（4 号集石下）　北から

SD6（4 号集石下）　南から

PL 32　石動遺跡　支線3号地区

5･6 号集石　東から

7･8 号集石　南から


7 号集石　南から

8 号集石　南から

8 号集石　東から

8 号集石　南から

10･11 号集石　東から

11 号集石　東から

10 号集石　東から

12 号集石･SD3　北から

PL 33　石動遺跡　支線3号地区

SD1(6Tr)　北から

SD1(6Tr)　北から

SD1(5Tr)　南から

SD2　東から

SD3(4Tr)　南から

SD3(12Tr)　北から

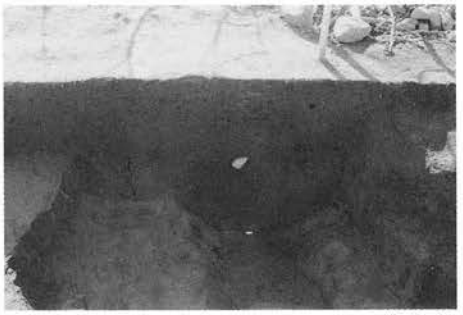
SD3(13Tr)　北から

SD2(12Tr)　西から

SD4(6Tr)　北から

PL34 石動遺跡 支線3号地区

SD5 東から

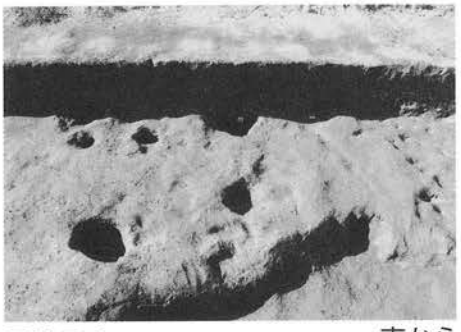

SD5 北から

SD5・Pit9 ～ 17 西から

SD7 東から

SD8 東から

テラス 1 西から

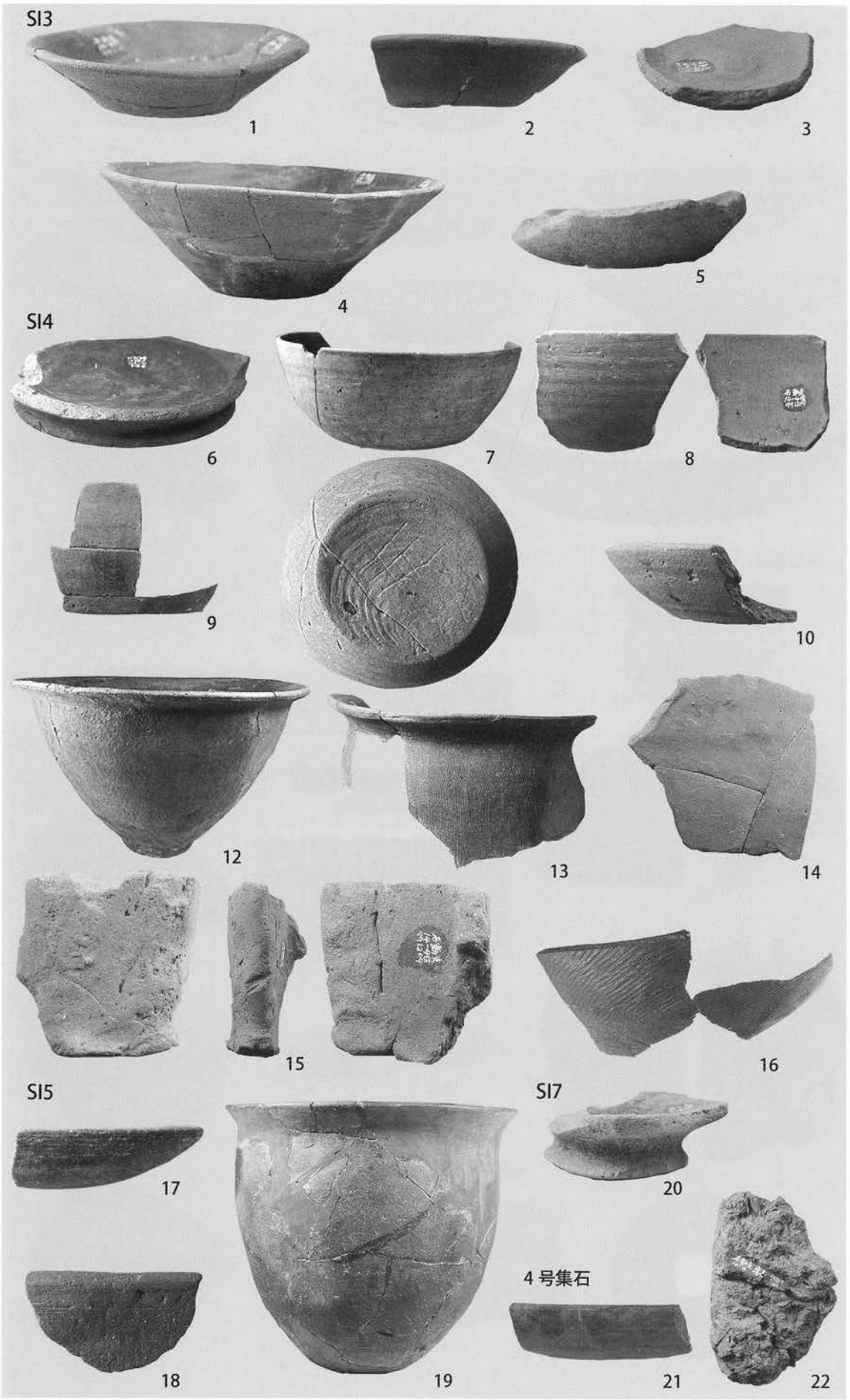

テラス 2 東から

3Tr 南から

10Tr 東から

SK8(11Tr) 東から

PL 35　石動遺跡　支線3号地区



8号集石

23 24 25

26 27 28

29 30 31

47 50 51

金属製品

55 56

57

57 X線撮影画像

58 59

銀板 銀糸

57 わずかに残る銀板・銀糸

60

(銀糸) (トリ 雁か)

57 剥離片のX線画像

64

石製品

61 62 63

第五章 石動・中新居遺跡 支線13号地区〔2000年度調査〕

1．調査概要

本調査は、石動遺跡・中新居遺跡地内における畑地帯総合整備事業の一般農道支線13号建設にに先立ち、平成12年(2000)10月～12月に一宮町教育委員会が実施した。既存道路沿いに東西方向約800mの間に8箇所のトレンチを設定し、計約310㎡を調査した。なお、支線13号線は石動遺跡・中新居遺跡の境界にあたり、道路南側に設定したトレンチ分は、中新居遺跡支線13号地区調査となる。そのため、遺構の報告については、各調査区名を付して示した。遺構一覧表(表31)・トレンチ一覧表(表32)を作成して整理したので、ご留意いただきたい。

2．調査トレンチ

～石動遺跡支線13号線地区～

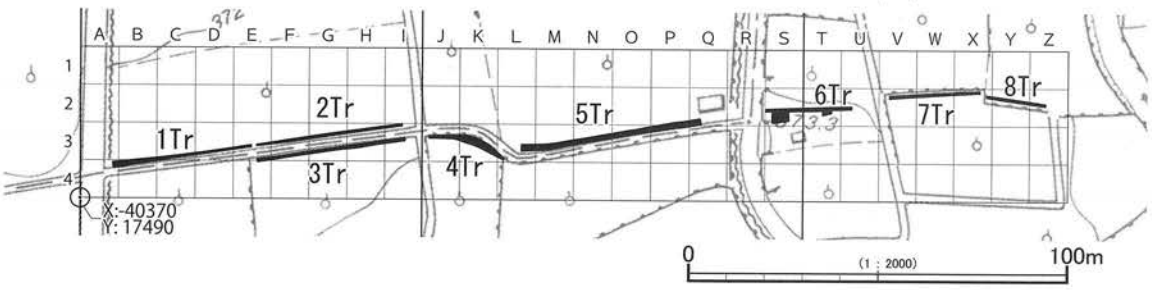
1Tr　A-3・4・B-3・4・C-3・4・D・E-3グリッドに位置する。既存道路に沿って東西約37.5m、幅約1m(拡張部2m)の範囲を調査し、地表面から最深74cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約25cmの深さであり、住居跡2軒(SI1・2)、溝2条(SD1・2)、ピット1基を検出した。他、トレンチ出土遺物として縄文土器片(61・62)が出土している。

2Tr　E～I-3・I-2グリッドに位置する。既存道路に沿って東西約39.5m、幅約1mの範囲を調査し、地表面から最深50㎝まで掘削した。遺構確認面は地表面から約20cmの深さであり、土坑1基(SK1)、埋甕、ピット1基を検出した。他、トレンチ遺物として、墨書土器の土師器坏片（53）が出土している。

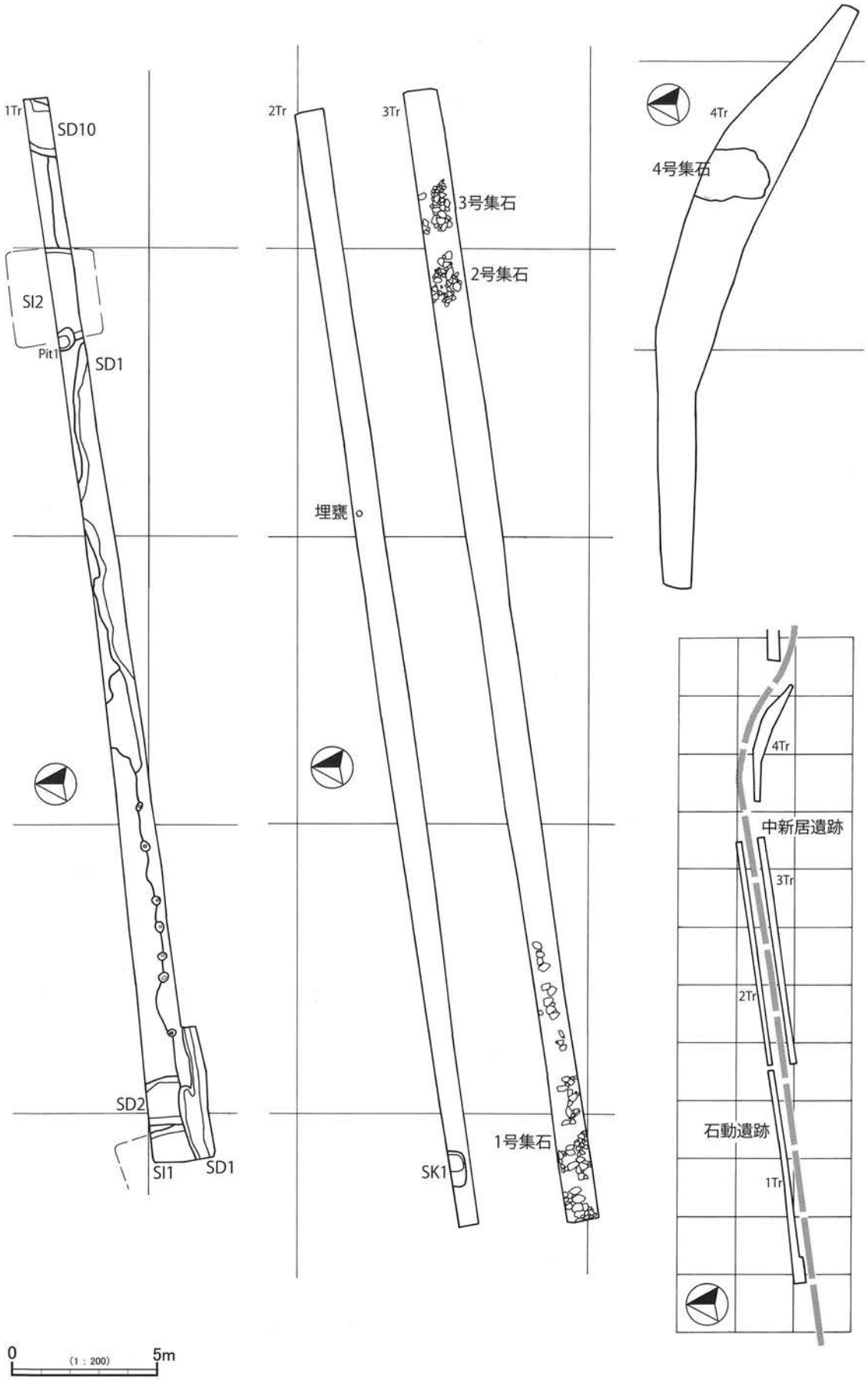
5Tr　L～Q-3・P・Q-4グリッドに位置する。既存道路に沿って東西約48m、幅約2mの範囲を調査し、地表面から最深60mまで掘削した。遺構確認面は地表面から約25cmの深さで、住居跡2軒(SI3・4)、集石1箇所(5号集石)、溝1条(SD11)、ピット1基を検出した。

6Tr　S～U-2グリッドに位置する。道路新設部分にあたり、東西方向約23m、幅約1mの範囲を調査した。なお、遺構確認部分については拡張を行い、遺構範囲及びその性格の確認を行った。地表面から最深105cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約25cmの深さであり、住居跡1軒(SI6)、溝4条(SD3～6)を検出した。

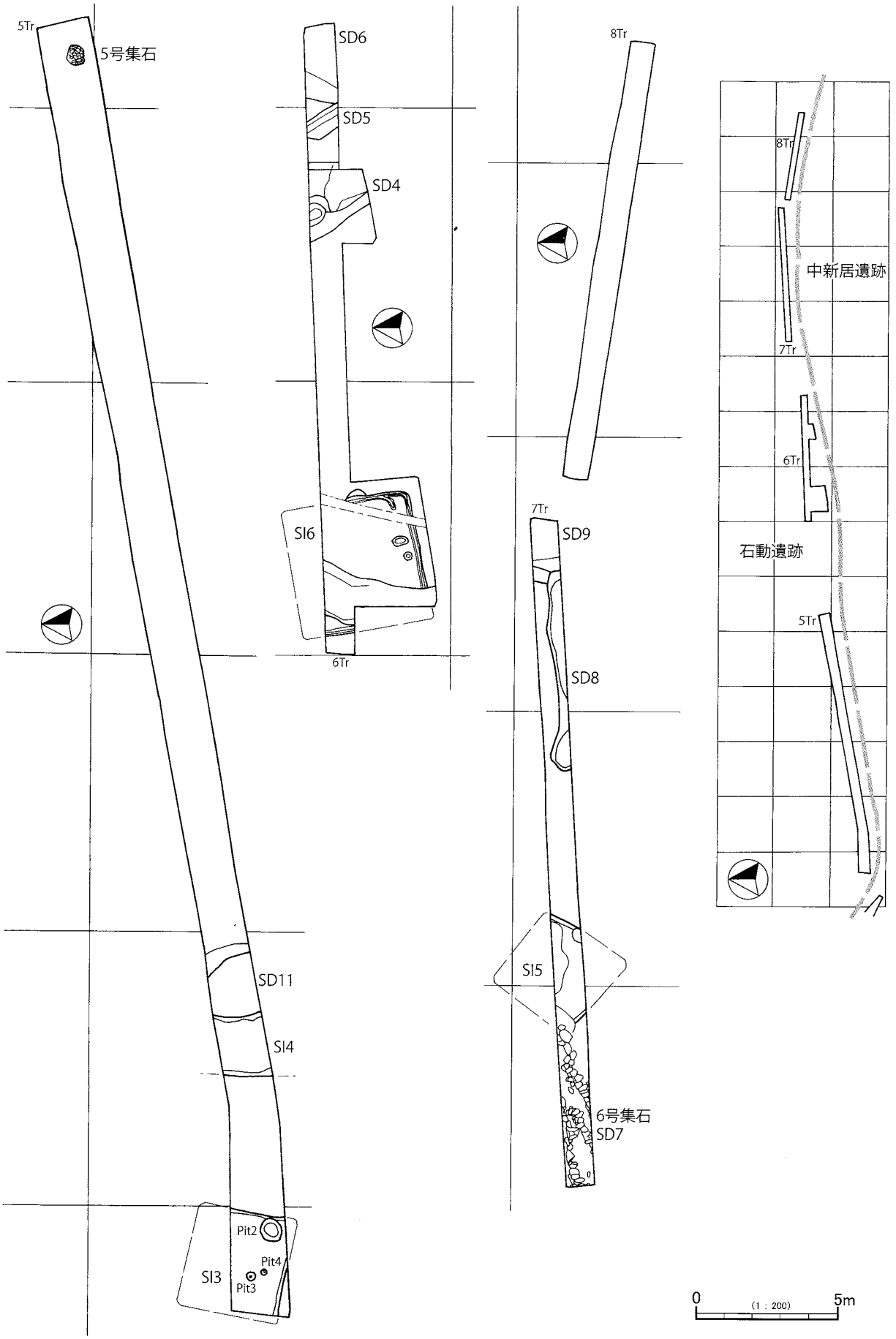
7Tr　V～X-2グリッドに位置する。道路新設部分にあたり、東西方向約24.5m、幅約1mの範囲を調査した。地表面から最深160㎝まで掘削した。遺構確認面は地表面から約60cmの深さであり、住居跡1軒(SI5)、溝2条(SD8・9)を検出した。他、トレンチ出土の遺物として、土師器皿(56)が出土した。



第80図　トレンチ位置図


1Tr
SD10
SI2
Pit1
SD1
SD2
SI1
SD1
2Tr
3Tr
3号集石
2号集石
埋甕
1号集石
SK1
4Tr
4号集石
4Tr
中新居遺跡
3Tr
2Tr
石動遺跡
1Tr
0
(1 : 200)
5m

第81図　遺構位置図(1)


5Tr
5号集石
SD6
SD5
SD4
SI6
6Tr
8Tr
7Tr
SD9
SD8
SI5
6号集石
SD7
SD11
SI4
Pit2
Pit4
SI3
Pit3
8Tr
中新居遺跡
7Tr
6Tr
石動遺跡
5Tr
0
(1 : 200)
5m

第82図　遺構位置図(2)

8Tr X～Z-2グリッドに位置する。道路新設部分あたり、東西方向約16m、幅約1mの範囲を調査したが、遺構・遺物は確認できなかった。

～中新居遺跡支線13号地区～

3Tr E-3･4･F～I-3グリッドに位置する。既存道路に沿って東西約40m、幅約1.2mの範囲を調査した。掘削は、地表面から最深60cmまで掘削した。遺構確認面は明確ではなかったが、トレンチ東側の深さ約45cmのところで、集石2箇所(1号集石･2号集石)を検出した。他、トレンチ出土の遺物として、土師器小皿(54)、土錘(63)が出土した。

4Tr J～L-3グリッドに位置する。既存道路に沿って約20m、幅約1～2mの範囲を調査した。遺構確認面は明確ではなかったが、トレンチ中央で集石1箇所(4号集石)を確認した。他、トレンチ出土の遺物として、土師器小皿(55)が出土した。

表30 石動・中新居遺跡支線13号地区 トレンチ一覧

位置	遺構	遺跡名
1Tr	SI1・2、Pit1、SD1・2・10	石動
2Tr	SK1、埋甕	石動
3Tr	1～3号集石	中新居
4Tr	4号集石	中新居
5Tr	SI3・4、5号集石、SD11	石動
6Tr	SI6、SD3～6	石動
7Tr	SI5、SD8・9	石動
8Tr	遺構なし	石動
9Tr	遺構なし	石動

表31 石動・中新居遺跡支線13号地区 遺構一覧

遺構名	位置	時期	遺跡名
4号集石	4Tr	10C後半～11C代	中新居
SD11	5Tr	10C前半頃	石動
SI1	1Tr	10世前半～中頃	石動
SI4	5Tr	11C後半	石動
SI5	7Tr	11C後半頃	石動
SI3	5Tr	11C頃	石動
SI6	6Tr	8C中頃	石動
埋甕	2Tr	縄文時代中期	石動
1号集石	3Tr	近世・近代頃	中新居
6号集石	7Tr	近世・近代頃	石動
SD1	1Tr	近世・近代頃	石動
SI2	1Tr	不明	石動
SK1	2Tr	不明	石動
2号集石	3Tr	不明	中新居
3号集石	3Tr	不明	中新居
5号集石	5Tr	不明	石動
Pit1	1Tr	不明	石動
SD2	1Tr	不明	石動
SD3～6	6Tr	不明	石動
SD8・9	7Tr	不明	石動
SD10	1Tr	不明	石動

3．発見した遺構・遺物

・SI1〔第83図〕

位置と検出状況 A-4グリッド、1Tr西端に位置する。調査範囲においては東壁を確認したが、重複するSD1、SD2に大半を壊されていた。確認範囲では東西約1.3m、確認面から床面までの深さは約35cmを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲ではカマド施設等はなかった。覆土は焼土粒を含んでいた。**出土遺物** 土師器皿(1･2)･坏(3･4)･竈形土器(5)、灰釉陶器壺(6)などが出土した。**遺構の時期** 出土遺物の時期から、10世前半～中頃としておく。

・SI2〔第83図〕

位置と検出状況 D-4グリッド、1Tr東側に位置する。調査範囲においては東壁・西壁を確認し、重複するPit1に西壁を壊されていた。規模は明確ではないが、東西の壁間は約3.3m、確認面から床面までの深さは約30cmを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲ではカマド施設等はなかった。**遺構の時期** 出土遺物はなく、不明である。

・SI3〔第83図〕

位置と検出状況 L-3グリッド、5Tr西端に位置する。調査範囲においては東壁・南壁を確認した。規模は明確ではないが、確認した範囲は東西約3.6m、南北約2m、確認面から床面までの深さは約10cmを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲にカマド施設はなく、東壁際にPit2、中央にPit3･4を検出したが、性格・重複関係については不明である。**出土遺物** 土師器坏(7)が出土した。なお、少量であるが、覆土中に縄文土器片(57･58)が混在した。**遺構の時期** 遺物が少なく明確ではないが、11C頃としておく。

・SI4〔第84･85図〕

位置と検出状況 M-4グリッド、5Tr西側に位置する。調査範囲においては

西壁を確認し、重複するSD11の上部を壊していた。規模は明確ではないが、東西約4.8m、確認面から床面までの深さは約20cmを測った。**遺構の特徴**　検出した範囲ではカマド施設等はなかったが、西壁際で遺物が集中して出土した。**出土遺物**　土師器坏(10～23･26)･皿（24･25）が出土した。10～23は11C代の坏や皿で一括廃棄されたものと考えられる。24～26は10C前半頃の坏や皿で、重複するSD11からの混入と考えられる。**遺構の時期**　出土遺物から、11C後半としておく。

・SI5〔第84図〕

位置と検出状況　V･W-2グリッド、7Tr中央からやや西側に位置する。調査範囲においては南辺・東辺を確認し、重複する6号集石・SD7に西側を壊されていた。規模は明確ではなく、確認面から床面までの深さは約35cmを測った。**遺構の特徴**　検出した範囲ではカマド施設等は確認できなかったが、覆土には焼土粒・炭化物を含んでいた。**出土遺物**　土師器坏(8・9)が出土した。**遺構の時期**　遺物が少なく明確ではないが、11C後半頃としておく。

･SI6〔第86･87図〕

位置と検出状況　S-2グリッド、6Tr西端に位置する。重複するSD3に西側を壊されており、また壁が明確ではなく、周溝によって遺構範囲を推定した。調査範囲では西辺・東辺・南辺を確認し、東西間は約5m、確認面から床面までの深さは約35cmを測った。**遺構の特徴**　東辺で焼土ブロック・粘土を確認し、カマド跡と推定した。また、南辺の中央付近でPit状の掘り込みを確認しており、袖石や入り口部の痕跡とも考えられたが、いずれも明確ではなかった。**出土遺物**　土師器坏(31～43)･甕(46･47)、須恵器坏(44)･甕(45)、鉄鏃(64)が出土した。47の甕は器面が若干磨耗していたが、胴部の内外面に指頭痕やハケメ調整の痕がなく、ロクロナデにより調整された可能性が窺える。**遺構の時期**　出土遺物から、8C中頃としておく。

・SK1〔第88図〕

位置と検出状況　E-3グリッド、2Tr西側に位置する。調査範囲では重複はなく、東西約1.2 m、確認面から床面までの深さは約50cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・1号集石〔第88図〕　中新居遺跡支線13号地区

位置と検出状況　E-3･F-3･4グリッド、3Tr西側に位置する。調査範囲においては約9.7mの範囲で確認し、部分的に列状をなしていた。調査時の所見から、旧畑地の石垣の一部と推定した。**遺構の時期**　出土遺物がなく明確ではないが、検出状況から近世・近代頃と推定しておく。

・2号集石〔第88図〕　中新居遺跡支線13号地区

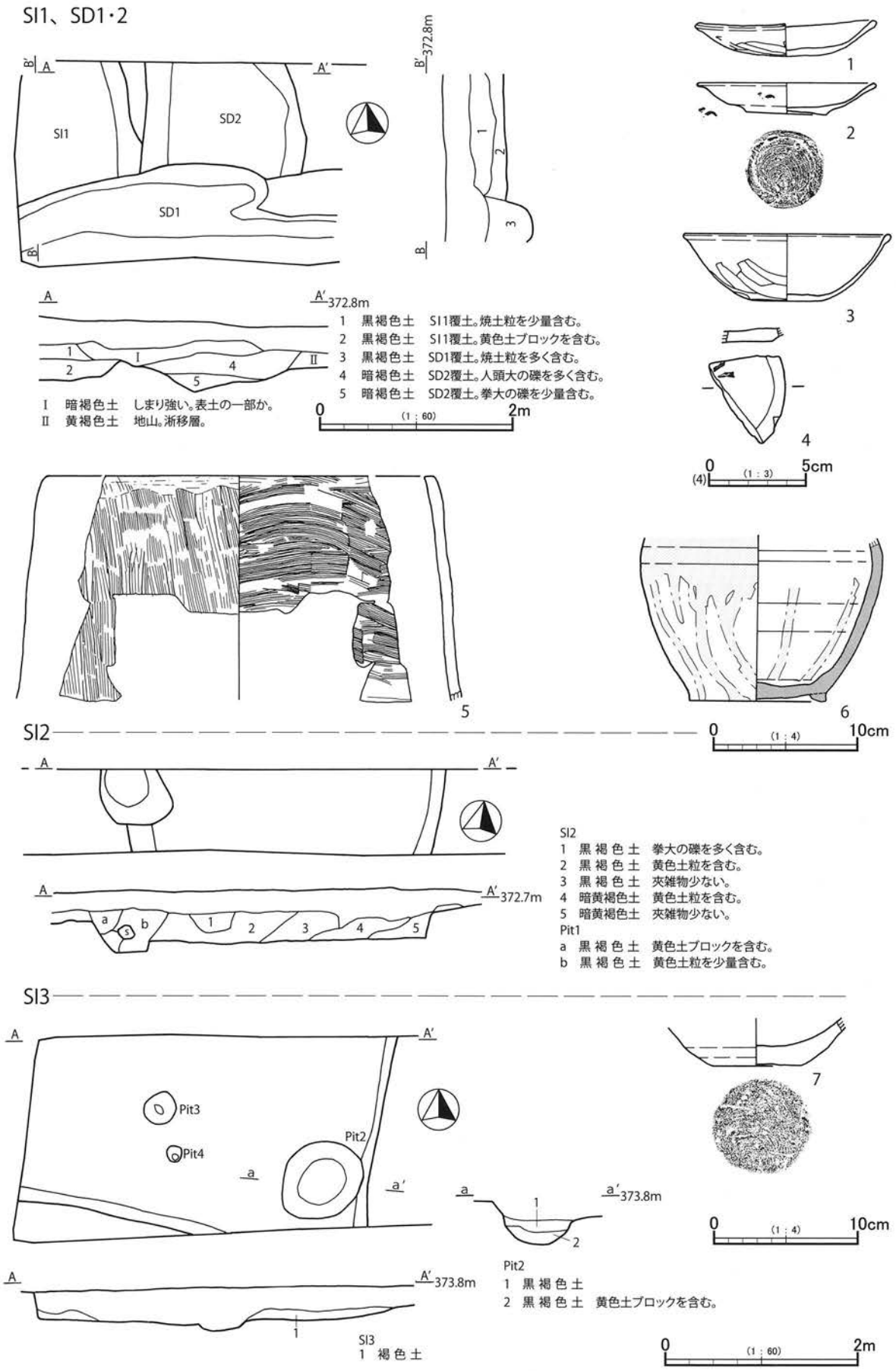
位置と検出状況　H-3グリッド、3Tr西側に位置する。調査範囲においては東西約1.9mの範囲に礫が堆積していた。性格については不明である。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・3号集石〔第88図〕

位置と検出状況　I-3グリッド、3Tr西側に位置する。調査範囲においては東西約1.8mの範囲に礫が堆積していた。性格については不明である。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

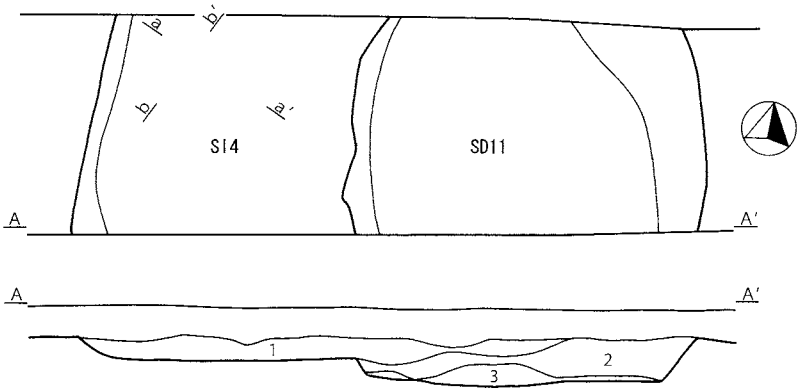
・4号集石〔第89図〕

位置と検出状況　K-3グリッド、4Tr中央に位置する。規模は明確ではないが、



第83図 SI1～3、SD1・2

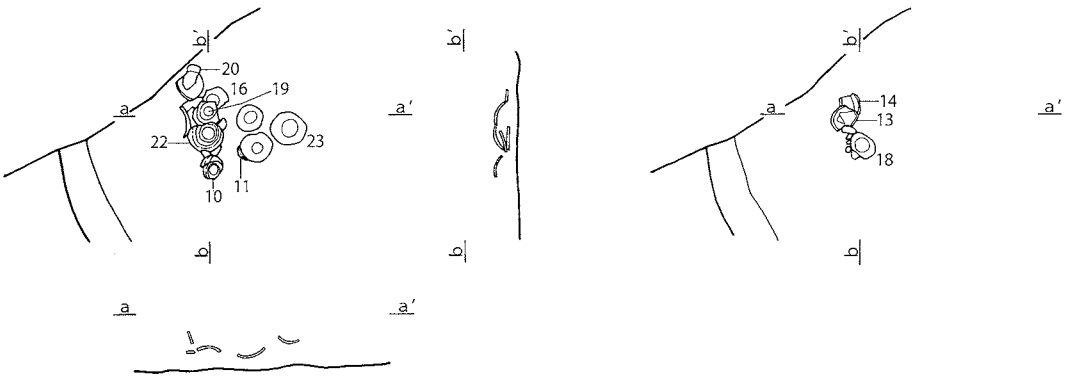
SI4、SD11



1　暗褐色土　SI4覆土。
2　暗褐色土　SD11覆土。礫を多量に含む。
3　黄褐色土　SD11覆土。砂、礫を含む。

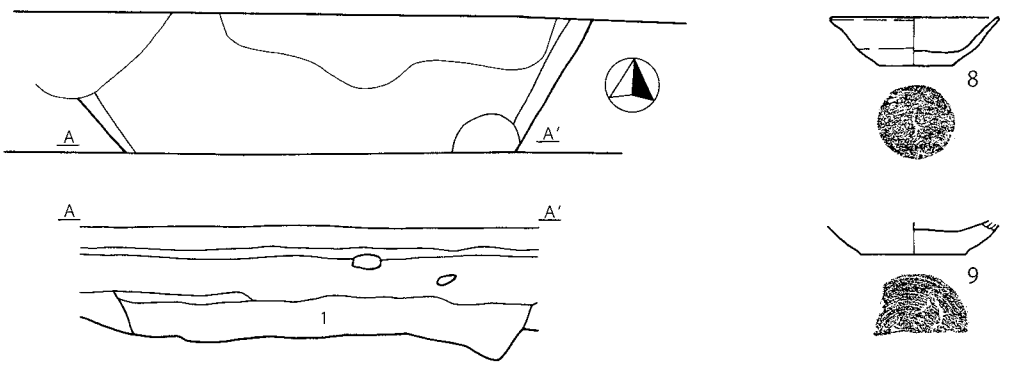
0　(1：60)　2m

SI4 遺物出土状況図



0　(1：30)　1m

SI5

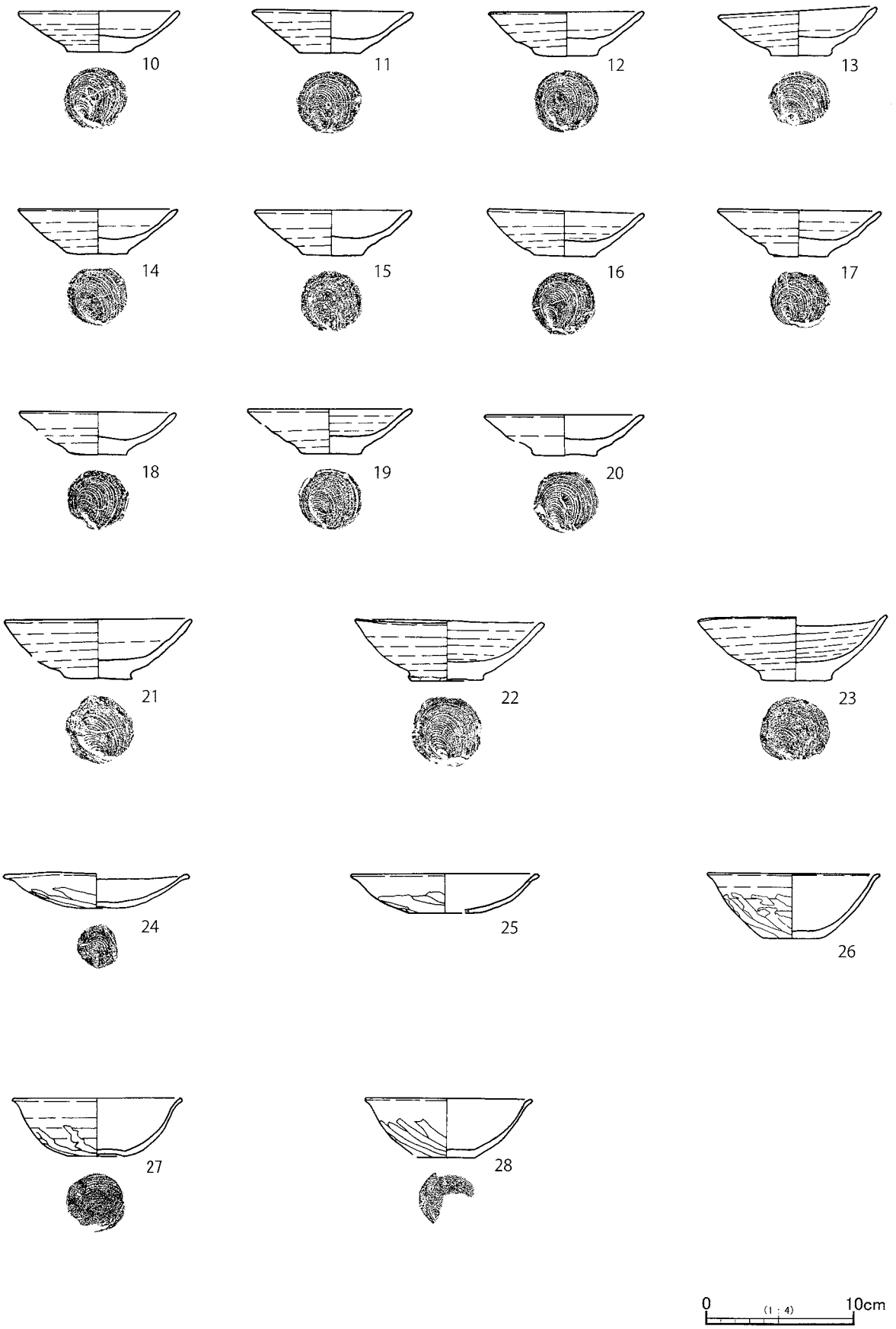


1　暗褐色土　焼土粒、炭化物を含む。

0　(1：60)　2m　　0　(1：4)　10cm

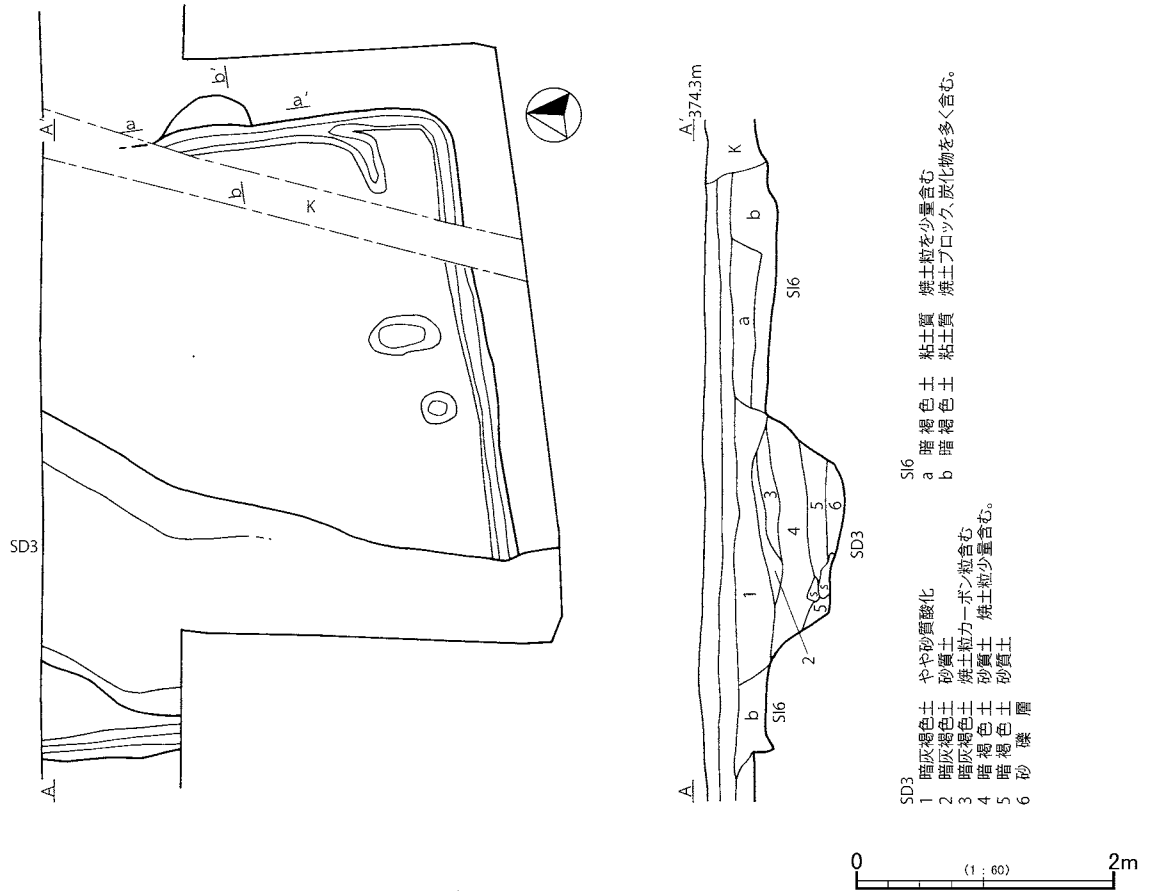
第84図　SI4(1)・SD11、SI5

SI4

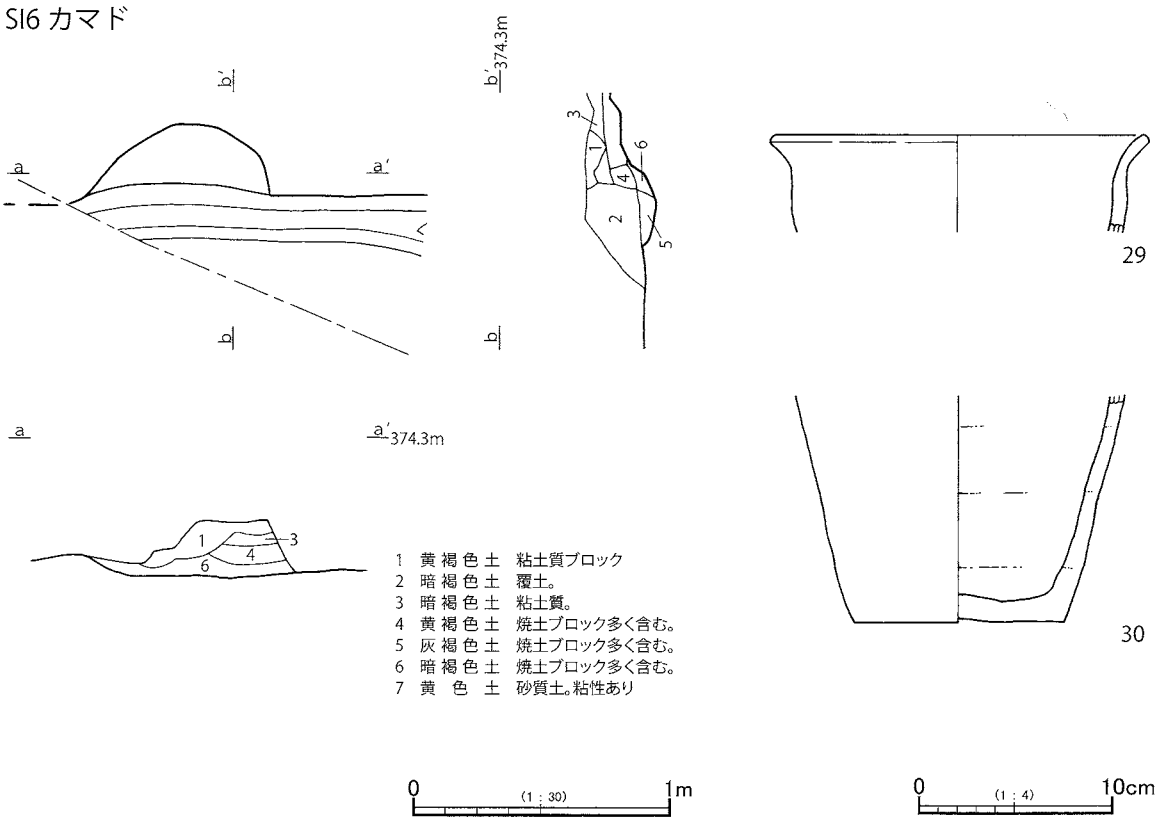


第85図　SI4(2)

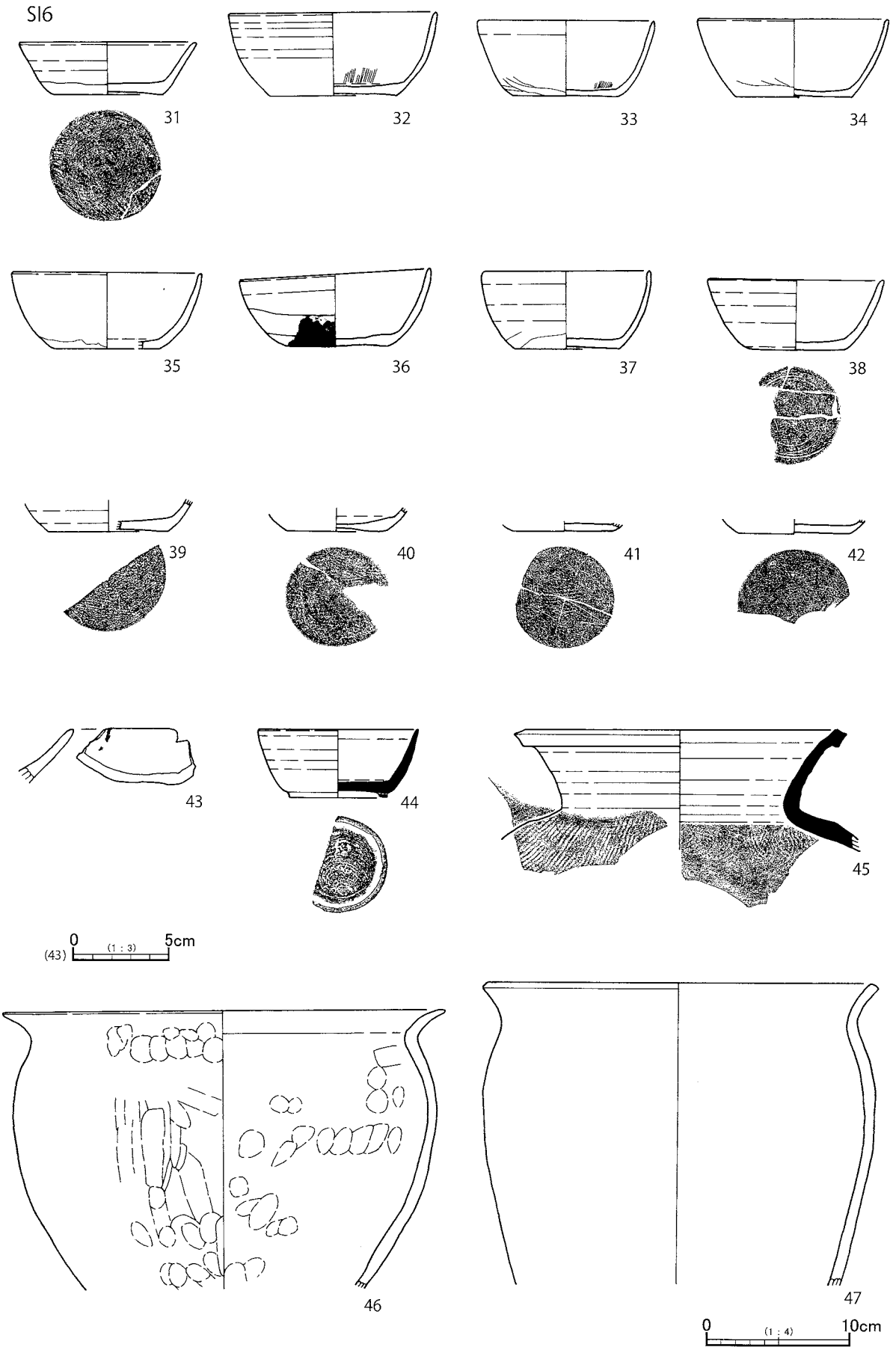
SI6、SD3



SI6 カマド



第86図　SI6(1)、SD3


SI6
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
0
(1 : 3)
5cm
(43)
46
47
0
(1 : 4)
10cm

第87図　SI6(2)

東西約1.6m、南北2mを測った。**遺構の特徴**　方形状に約30cm掘り込んでから礫を据えており、内部も礫を並べて2区画にしていた。出土遺物は少なかったが、支線3号地区検出の8号集石と類似しており、集石墓である可能性が考えられる。**出土遺物**　灰釉陶器壺(49)が出土した。**遺構の時期**　出土遺物から、10C後半～11C代としておく。

・5号集石〔第89図〕

位置と検出状況　Q-2グリッド、5Tr東側に位置する。重複はなく、長径80cm、短径60cmの楕円形を呈し、確認面から床面までの深さは約25cmを測った。**遺構の特徴**　内部には径15cmほどの礫が充填されていたが、性格は不明である。**出土遺物**　出土遺物がなく、不明である。

・6号集石〔第89図〕　中新居遺跡支線13号地区

位置と検出状況　V-2グリッド、7Tr西側に位置する。約南北6mの間に3条の石列を検出し、下層にはSD7が位置するが、重複関係については不明である。調査時の所見から、1号集石同様に旧畑地の石垣の一部と推定した。**遺構の時期**　出土遺物がなく明確ではないが、検出状況から近世・近代頃と推定しておく。

・埋甕〔第88図〕

位置と検出状況　H-3グリッド、2Tr中央からやや東側に位置する。縄文時代中期の曽利V式期の深鉢(48)が正位で据え置かれており、上部は掘削を受けて欠損していた。この他は、1Trで縄文土器の小片が出土したものの、調査範囲においては明確な遺構はなかった。

・SD1〔第83･90･91図〕

位置と検出状況　A･B-4･C･D-3グリッド、1Trで確認した。東西方向の溝で、約35mの範囲で確認し、確認面からの深さは約45cmを測った。重複するSI1、SD2を壊していた。SD10との重複関係は不明である。**遺構の特徴**　溝縁部に小ピットが伴う部分を確認したが、性格は不明である。旧道路跡または耕地に伴う側溝と推定した。**出土遺物**　土師器高台付坏(50)･小型甕(51)が出土した。なお、少量であるが覆土中に縄文土器片(60)などが混在していた。**遺構の時期**　出土遺物がなく明確ではないが、検出状況から近世・近代頃と推定しておく。

・SD2〔第83･90図〕

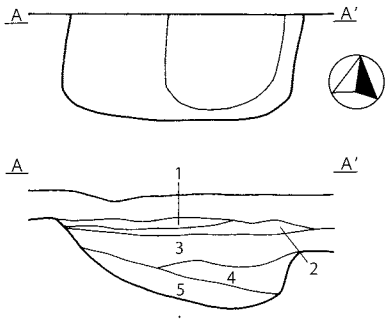
位置と検出状況　A-3･4グリッド、1Tr西側で確認した。南北方向の溝であり、調査範囲においては重複するSI1を壊し、SD1に壊されていた。規模は明確ではないが、検出した範囲では幅約1.2m、確認面からの深さは約40cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物がなく、明確な時期は不明であるが、段階的にSI1廃絶以降からSD1構築以前と位置付けておく。

・SD3〔第86図〕

位置と検出状況　S-2グリッド、6Tr西端出確認した。南北方向に延びる溝で、重複するSI6を壊していた。調査範囲では幅約2.4m、確認面から床面までの深さは約85cmを測った。**遺構の特徴**　覆土上面に焼土粒・炭化物を含んだが、重複するSI6からの混入と推定される。**出土遺物**　土師器甕(29･30)が出土したが、SI6からの流れ込みと推定する。**遺構の時期**　重複関係からSI6廃絶以降としておく。

・SD4〔第90図〕

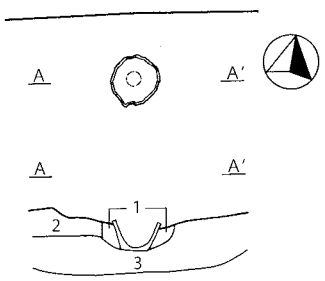
SK1



1　黄褐色土
2　暗褐色土　炭化物を多量に含む。
3　暗褐色土　黄色土粒を多く含む。
4　暗褐色土　黄色土ブロックを多く含む。
5　暗褐色土　黄色土粒を少量含む。

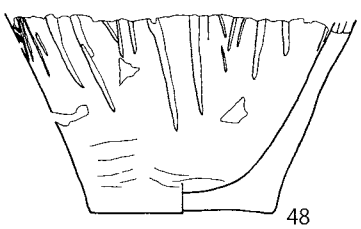
0　(1：40)　1m

埋甕



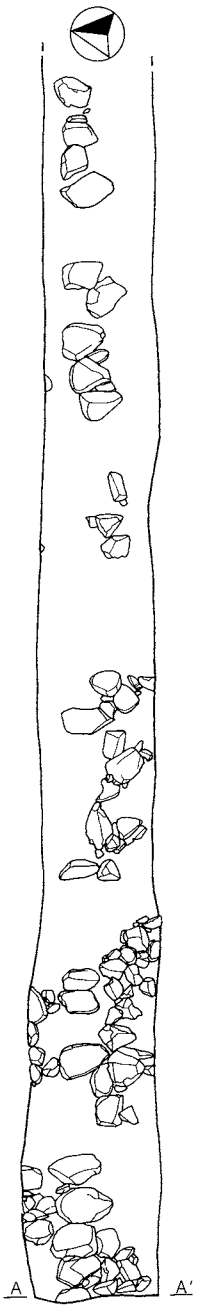
1　黄褐色土　やや暗い。
2　黄褐色土　黒色土を含む。
3　黄褐色土　地山。

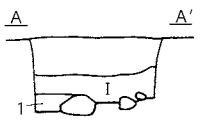
0　(1：40)　1m



0　(1：4)　10cm

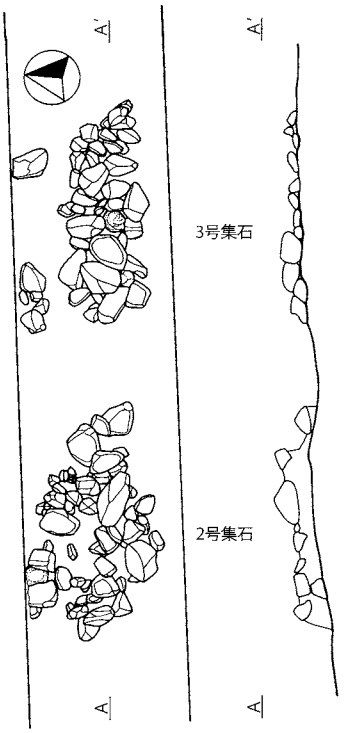
1号集石





I　暗褐色土　表土。
1　暗褐色土　夾雑物少ない。

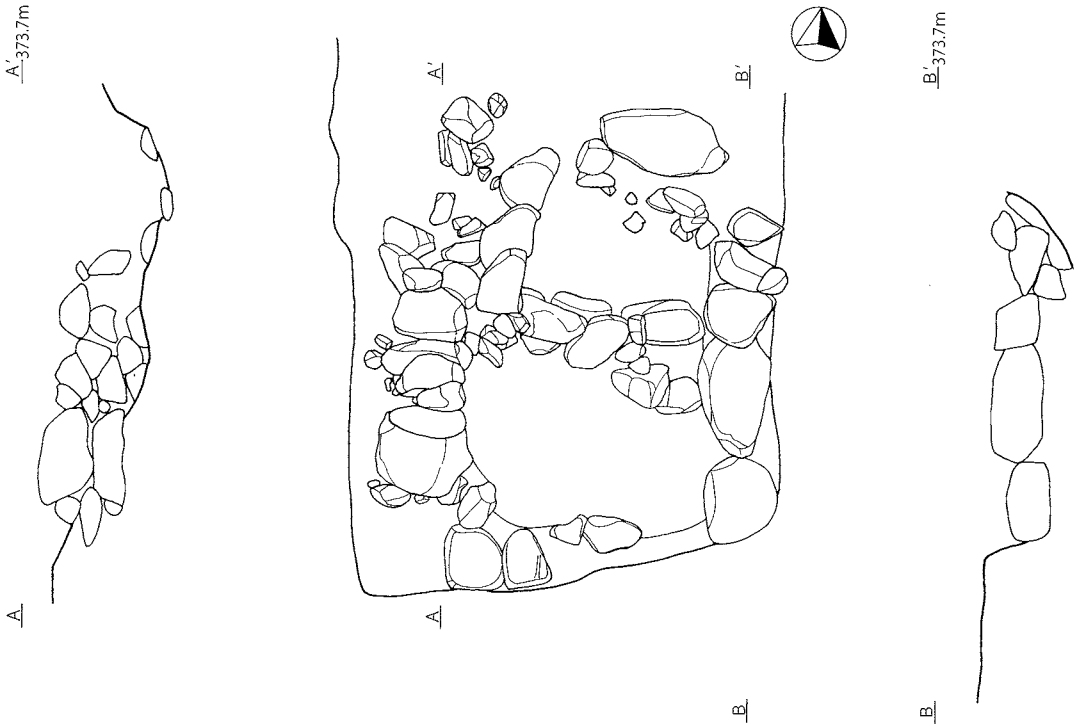
2･3号集石

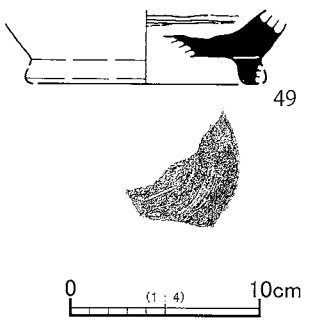


0　(1：60)　2m

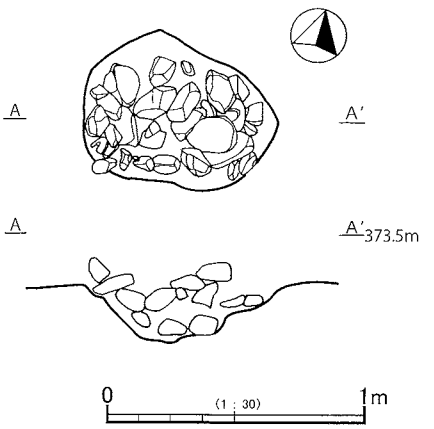
第88図　SK1、埋甕、1～3号集石

4号集石

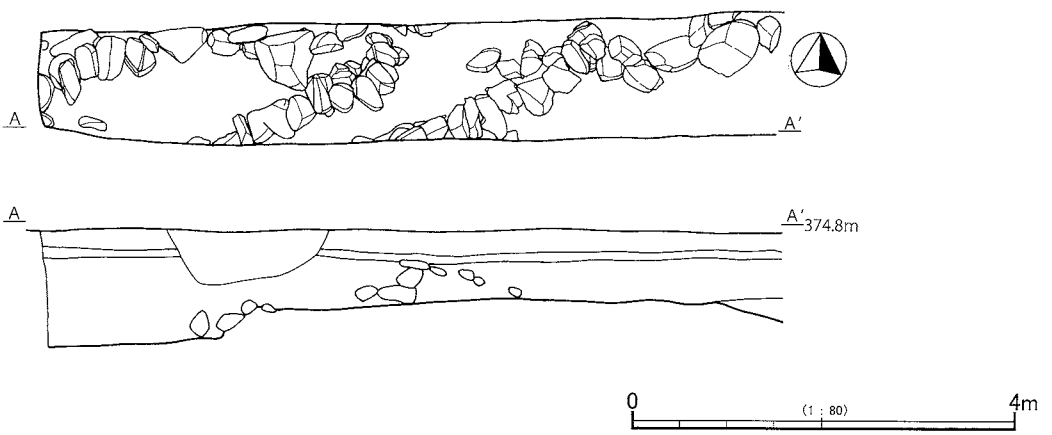




5号集石



6号集石・SD7



第89図　4～6号集石

位置と検出状況　T-2グリッド、6Tr東側で確認した。北西方向に軸をもつ溝で、撹乱の影響で明確ではなかったが、検出した範囲では確認面からの深さは約60cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・SD5〔第90図〕

位置と検出状況　T-2グリッド、6Tr東側出確認した。北西方向に軸をもつ溝で、検出した範囲では幅約80cm、確認面からの深さは約15cmを測った。性格は不明である。**遺構の時期**　出土遺物がなく明確ではないが、土層観察からはSD6と同時に埋没したと考えられる。

・SD6〔第90・91図〕

位置と検出状況　U-2グリッド、6Trで確認した。南北方向に延びる溝で、調査範囲においては幅約2.8m、確認面から床面までの深さは約50cmを測った。**出土遺物**　土師器坏(52)が出土した。**遺構の時期**　出土遺物は8C中頃に比定されるが、遺構時期については不明である。

・SD8〔第90図〕

位置と検出状況　W・X-2グリッド、7Tr東側で確認した。東西方向の溝で、重複関係は明確ではないが、SD9の上層に位置する。検出した範囲では東西約6.9m、確認面からの深さは約35cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・SD9〔第90図〕

位置と検出状況　X-2グリッド、7Tr東側で確認した。南北方向の溝で、重複関係は明確ではないが、SD8が上層に位置する。検出した範囲では東西約1.8m、確認面からの深さは約25cmを測った。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

・SD10〔第90図〕

位置と検出状況　E-3グリッド、1Tr東端で確認した。SD1との重複関係は不明である。南北方向の溝と推定したが、出土遺物もなく、規模や時期については不明である。

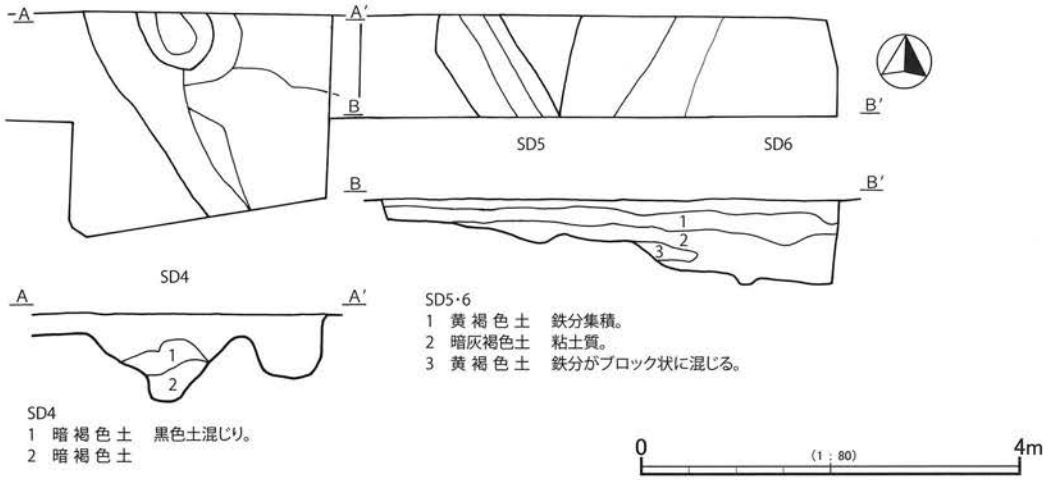
・SD11〔第84図〕

位置と検出状況　M-3グリッド、5Tr西側で確認した。南北方向に延びる溝で、調査範囲においては重複するSI4に上部を壊されていたものの、幅約2.8m、確認面から床面までの深さは約40cmを測った。**出土遺物**　土師器坏(27・28)が出土した。**遺構の時期**　出土遺物から、10C前半頃としておく。

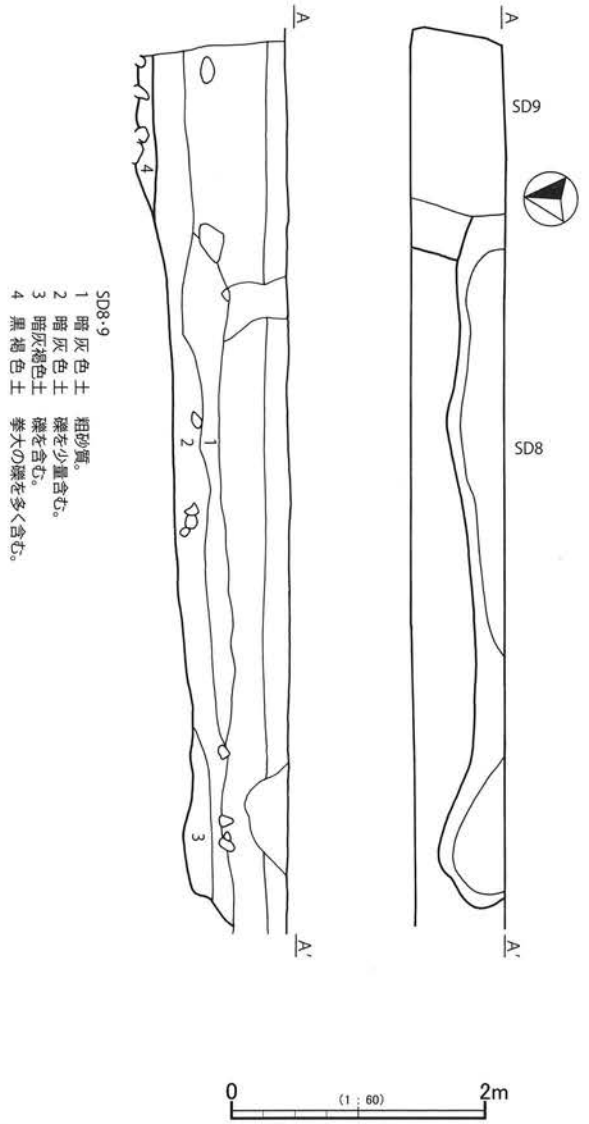
4．まとめ

調査の結果、住居跡6軒、集石6箇所、溝11条、土坑、埋甕、Pitを発見した。各遺構の年代については、表31で示した。出土遺物から得た年代観の順に遺構をまとめると、古代ではSI6が8C中頃、SD11が10C前半頃、SI1が10C前半～中頃、4号集石が10C後半～11C代、SI4・5が11C後半頃、SI2が11C頃であった。中世段階は明確ではないが、近世・近代では1・6号集石、SD1などを検出した。また、明確な遺構確認はできなかったが、縄文時代の遺物が出土しており、埋甕は中期後葉曽利V式期に比定される。その他、住居跡や溝の覆土に混在して前期後半・諸磯B式（60）、諸磯C式期（61）、前期末・十三菩提式期（57）、中期後葉・曽利IVA期（59）、加曾利E3式期（62）、後期中葉・加曾利B式期（58）に比定される土器片が出土した。（望月）

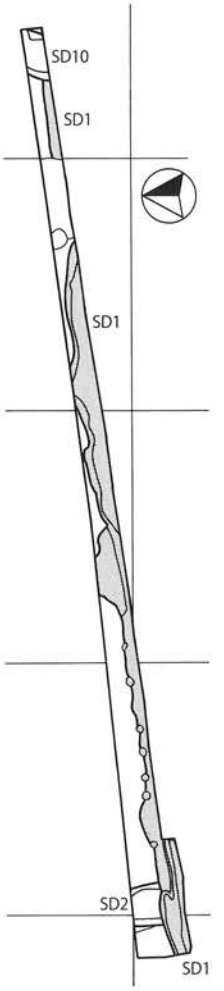
SD4・5・6



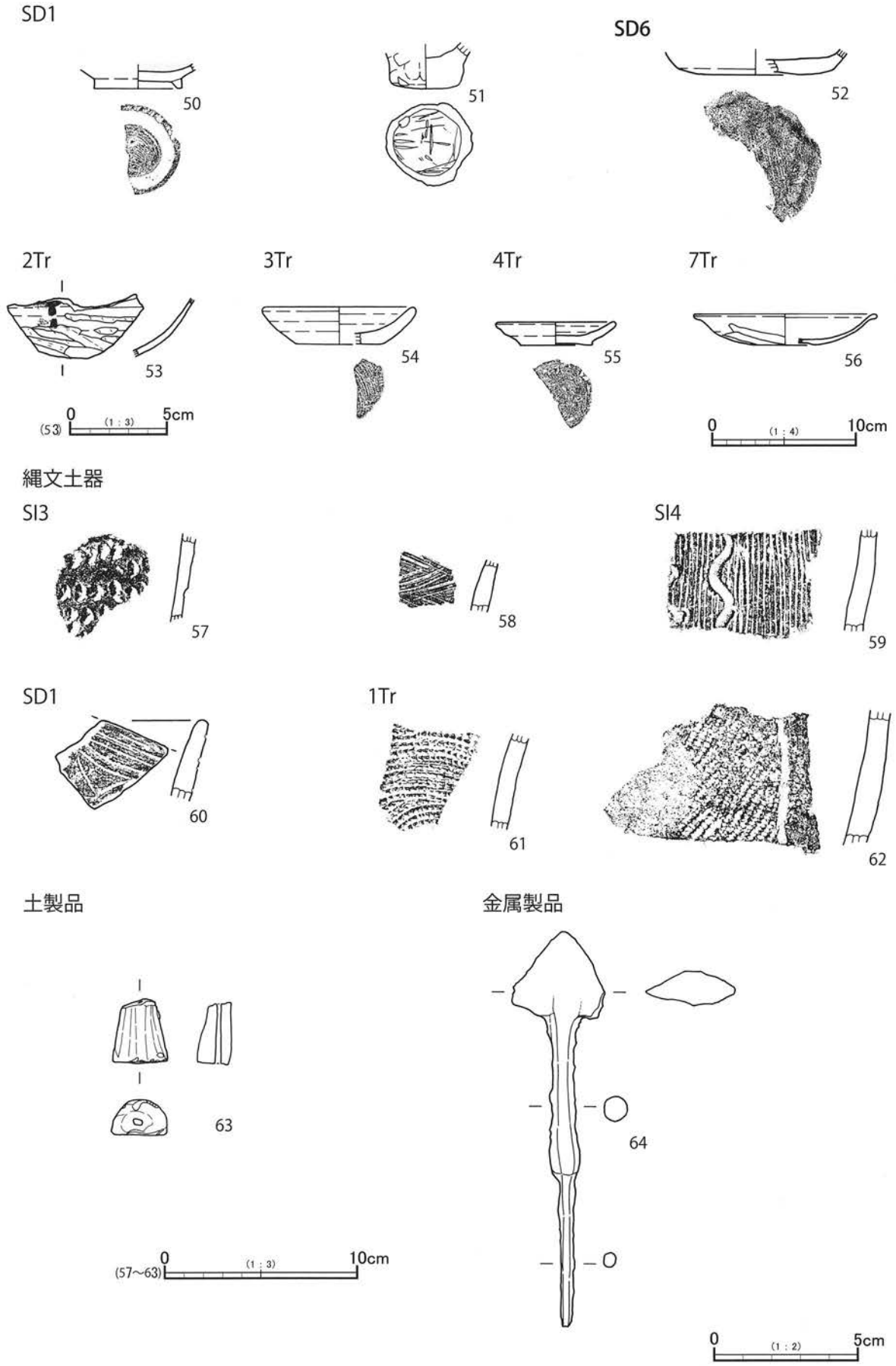
SD8・9



SD1・2・10



第90図　SD8～9



第91図　SD1(2)、遺構外・土製品・金属製品

表 32　石動・中新居遺跡支線 13 号地区　遺物観察表

図	番号	遺構	種別	器種	口径 (cm) 器高 (cm) 底径 (cm)	焼成	胎土	整形技法	色調	備考
83	1	SI1	土師器	皿	12.6 2.4 4.4	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) ヘラ削り	明赤褐色	内面がやや煤けている
83	2	SI1	土師器	皿	12.4 2.3 5.6	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、墨書「□」 (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	明赤褐色	外面がやや煤けている
83	3	SI1	土師器	坏	(14.4) (4.7) 5.4	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) ヘラ削り	橙色	黒斑あり
83	4	SI1	土師器	坏	- - -	良	緻密、赤・白・黒	(外) ヘラ削り (内) ナデ (底) 静止糸切痕、ヘラ削り、墨書「□」	橙色	
83	5	SI1	土師器	甕形土器	(26.0) - -	良	密、赤・白・黒・金	(外) タテハケ (内) ヨコハケ	明赤褐色	内面及び外面口縁部がやや黒変
83	6	SI1	須恵器	壺	- - 9.4	良	密、白・黒	(外) ロクロナデ、施釉 (内) ロクロナデ、施釉 (底) 回転ヘラ削り、付高台	灰黄色	
83	7	SI3	土師器	坏	- - 6.3	良	やや粗、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	鈍橙色	全体的に劣化 底部ほぼ磨滅
84	8	SI5	土師器	坏	9.9 2.6 4.0	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	歪み大 全体的に劣化
84	9	SI5	土師器	坏	- - (5.6)	良	やや粗、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	鈍赤褐色	内・外面及び割れ口に付着物あり
85	10	SI4	土師器	坏	10.8 3.0 4.0	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	外面一部黒変 内面がやや煤けている
85	11	SI4	土師器	坏	11.1 3.0 4.3	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	鈍橙色	内・外面一部黒変
85	12	SI4	土師器	坏	10.8 3.1 4.4	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	外面一部黒変 内面やや煤けている
85	13	SI4	土師器	坏	10.9 3.5 3.9	良	やや粗、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	外面一部黒変 内面劣化
85	14	SI4	土師器	坏	11.0 3.1 4.2	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	内面やや黒変
85	15	SI4	土師器	坏	10.8 3.2 4.2	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	全体的に劣化
85	16	SI4	土師器	坏	10.8 3.2 4.3	良	やや粗、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	内・外面一部やや黒変
85	17	SI4	土師器	坏	11.2 3.2 3.9	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	内・外面一部やや黒変
85	18	SI4	土師器	坏	10.8 2.95 4.4	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	全体的に劣化
85	19	SI4	土師器	坏	(11.4) (3.1) 4.3	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	内面がやや煤けている
85	20	SI4	土師器	坏	(11.1) (2.8) 4.4	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	内面やや黒変
85	21	SI4	土師器	坏	13.0 4.2 4.6	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	全体的に劣化
85	22	SI4	土師器	坏	13.0 4.3 5.2	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	全体的に劣化
85	23	SI4	土師器	坏	12.9 4.6 4.8	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	底部が煤けている
85	24	SI4	土師器	皿	12.8 2.5 3.2	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、ヘラ削り	橙色	黒斑あり
85	25	SI4	土師器	皿	(13.0) (2.7) (5.1)	良	やや粗、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、ヘラ削り	橙色	底面及び外面の一部黒変
85	26	SI4	土師器	坏	(11.8) (4.5) 4.0	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) ヘラ削り	橙色	
85	27	SD11	土師器	坏	(11.8) (4.1) 4.1	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、ヘラ削り、指頭痕	橙色	
85	28	SD11	土師器	坏	11.3 (4.1) (4.0)	良	やや粗、赤・白・金	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、ヘラ削り	橙色	外面一部黒変 内面がやや煤けている 黒変部近くを打ち掻き灯明か
86	29	SD3・SI6	土師器	鉢	(19.2) - -	良	密、赤・白・黒	(外) ナデか (内) ナデか	橙色	劣化著しい
86	30	SD3	土師器	甕	- - (11.2)	やや不良	やや粗、赤・白・黒・金	(外) ヘラ削り・ナデか (内) ナデか	明赤褐色	全体的に劣化 外面やや黒変 ロクロ整形か
87	31	SI6	土師器	坏	12.5 3.7 7.8	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 静止糸切痕、ヘラ削り	橙色	全体的に劣化 底面ほぼ磨滅
88	32	SI6	土師器	坏	(14.6) (5.9) 8.8	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ、暗文 (底) ヘラ削り	橙色	全体的に劣化 内面見込み部にも暗文か
88	33	SI6	土師器	坏	(12.5) (5.4) (7.6)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ、暗文 (底) ヘラ削り	橙色	表面剥離 内部暗文あり
88	34	SI6	土師器	坏	(13.2) (5.5) (8.3)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ、暗文 (底) ヘラ削り、ミガキか	鈍橙色	全体的に劣化 内・外面やや黒変
88	35	SI6	土師器	坏	(13.4) (5.3) (7.6)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) ヘラ削り	鈍橙色	全体的に劣化 外面やや黒変、内面が煤けている
88	36	SI6	土師器	坏	13.4 5.5 7.0	良	密、赤・白・黒	(外) ヘラ削り、ナデ (内) ナデ (底) ヘラ削り	橙色	全体的に劣化 底面及び外面の一部黒変

図	番号	遺構	種別	器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	焼成	胎土	整形技法	色調	備考
88	37	SI6	土師器	坏	(12.0) (5.5) (7.4)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、ヘラ削り	鈍橙色	全体的に劣化
88	38	SI6	土師器	坏	(12.4) (5.0) 6.7	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転ヘラ削り	鈍橙色	全体的に劣化 部分的にやや黒変
88	39	SI6	土師器	坏	- - (8.4)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 静止糸切痕、ヘラ削り	橙色	全体的に劣化 底面ほぼ磨滅
88	40	SI6	土師器	坏	- - 7.1	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 静止糸切痕、ヘラ削り	鈍橙色	全体的に劣化 内面及び外面の一部がやや黒変
88	41	SI6	土師器	坏	- - 7.2	良	密、赤・白・黒	(外) ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) 静止糸切痕、ヘラ削り、線刻『×』	橙色	全体的に劣化
88	42	SI6	土師器	坏	- - (8.0)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) ヘラ削り、ミガキか	橙色	全体的に劣化
88	43	SI6	土師器	坏	- - -	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	内面口縁部に灯明痕
88	44	SI6	須恵器	坏	(11.2) (4.9) 6.7	良	密、白・黒	(外) ロクロナデ、火襷か (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、付高台	灰白色	
88	45	SI6	須恵器	甕	(23.2) - -	やや不良	蜜、白・黒	(外) ロクロナデ、タタキ (内) ロクロナデ、青海波文	灰白色	ひぶくれあり
88	46	SI6	土師器	甕	31.0 - -	良	密、赤・白	(外) ヘラ削り、指頭痕 (内) ナデ、指頭痕	明赤褐色	外面が部分的に黒変
88	47	SI6	土師器	甕	(27.8) - -	やや不良	粗、赤・白・黒・金	(外) ナデ (内) ナデ	橙色	ロクロ甕か。 全体的に劣化
89	48	4号集石	須恵器	壺	- - (12.8)	良	密、白・黒	(外) 回転ヘラ削り (内) ナデ (底) 付高台	灰色 オリーブ黄色	内・外面に自然釉
91	50	SD1	土師器	高台坏坏	- - (6.2)	良	密、赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、内黒 (底) 回転糸切痕、付高台	褐色	内面黒色処理
91	51	SD1	土師器	小型甕	- - 4.7	やや不良	粗、赤・白・黒・金	(外) ナデ (内) ナデ (底) ナデ、ヘラ削りか	明赤褐色	底面に線刻状の圧痕
91	52	SD6	土師器	坏	- - (10.9)	やや不良	やや粗、赤・白・黒・金	(外) ヘラ削り (内) ナデ (底) 静止糸切後ヘラ削り、穿孔か	橙色	全体的に劣化 底面の一部が黒変 中央を穿孔か
91	53	2Tr	土師器	坏	- - -	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り、墨書『□』 (内) ロクロナデ	橙色	黒班あり
91	54	3Tr	土師器	小皿	(10.8) (2.6) (5.8)	良	密、赤・金・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	
91	55	4Tr	土師器	小皿	(8.4) (1.6) (5.0)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	
91	56	7Tr	土師器	皿	(12.4) (2.1) (4.8)	良	密、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) ヘラ削り	橙色	全体的に劣化 内・外面の一部がやや黒変

表 33　縄文土器　観察表

図	番号	遺構	器種	焼成	施文	時期・型式	胎土	色調	備考
88	48	2Tr	深鉢	良	2本の懸垂文で器面を9区分し、半裁竹管によるの綾杉文を充填	中期後葉・曽利V式期	密・白・黒・金	橙色	底径 9.6cm、内面劣化、剥離、部分的に黒変
91	57	SI3	深鉢	良	半裁竹管による刺突文	前期末・十三菩提式期		鈍い黄褐色	
91	58	SI3	深鉢	良	半裁竹管による羽状沈線文	後期中葉・加曾利B式期		鈍い黄褐色	
91	59	SI4	深鉢	良	地文に櫛歯状沈線文、蛇行沈線文	中期後葉・曽利IVA期		鈍い黄褐色	
91	60	SD1	深鉢	良	半裁竹管による押引文	前期後半・諸磯B式期		鈍い褐色	
91	61	1Tr	深鉢	良	半裁竹管による結節沈線文	前期後半・諸磯C式期		鈍い黄褐色	
91	62	1Tr	深鉢	良	地文に撚糸文（LR）、沈線文、磨消縄文	中期後葉・加曾利E3式期		鈍い黄褐色	

表 34　石動・中新居遺跡支線 13 号地区　土製品観察表

図	番号	遺構	種類	重量(g)	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	胎土	色調	備考
91	63	3Tr	土錘	14.81	3.3	2.8	1.8	やや密、白・金	浅黄色	飾りの一部か　中心に孔あり

表 35　石動・中新居遺跡支線 13 号地区　金属製品観察表

図	番号	遺構	種類	重量(g)	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	材質	備考
91	64	SI6	鉄鏃	22.43	13.7	3.1	0.9		

PL 37　石動遺跡　支線13号地区

SI1、SD1・2　西から

SI1　南から

SD2　南から

SD1・2　西から

SI1 遺物出土状況　南から

SI 1 遺物出土状況　南から

SI2　東から

SI2　南西から

1Tr　東から

SI3　西から

SI4、SD11 西から

SI4、SD11 重複部 北から

SI4 遺物出土状況 北から

SI5 西から

SI6、SD3 西から

SI6、SD 3 西から

SI6 カマド 北から

SI6 遺物出土状況 西から

SI6 鉄鏃出土状況 北から

SD3 南から

PL 39　石動遺跡　支線13号地区

埋甕　南から

埋甕　南から

SK1　西から

SK1　北から

4 号集石　北から

4 号集石　西から

4 号集石　北から

4 号集石　西から

4 号集石完掘状況　北から

6 号集石　西から

SD4 東から

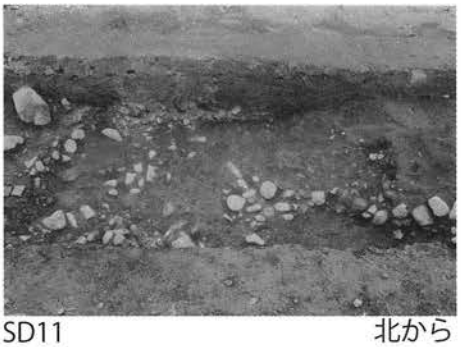
SD5・6 東から

SD8・9 東から

SD5 北東から

SD9 南から

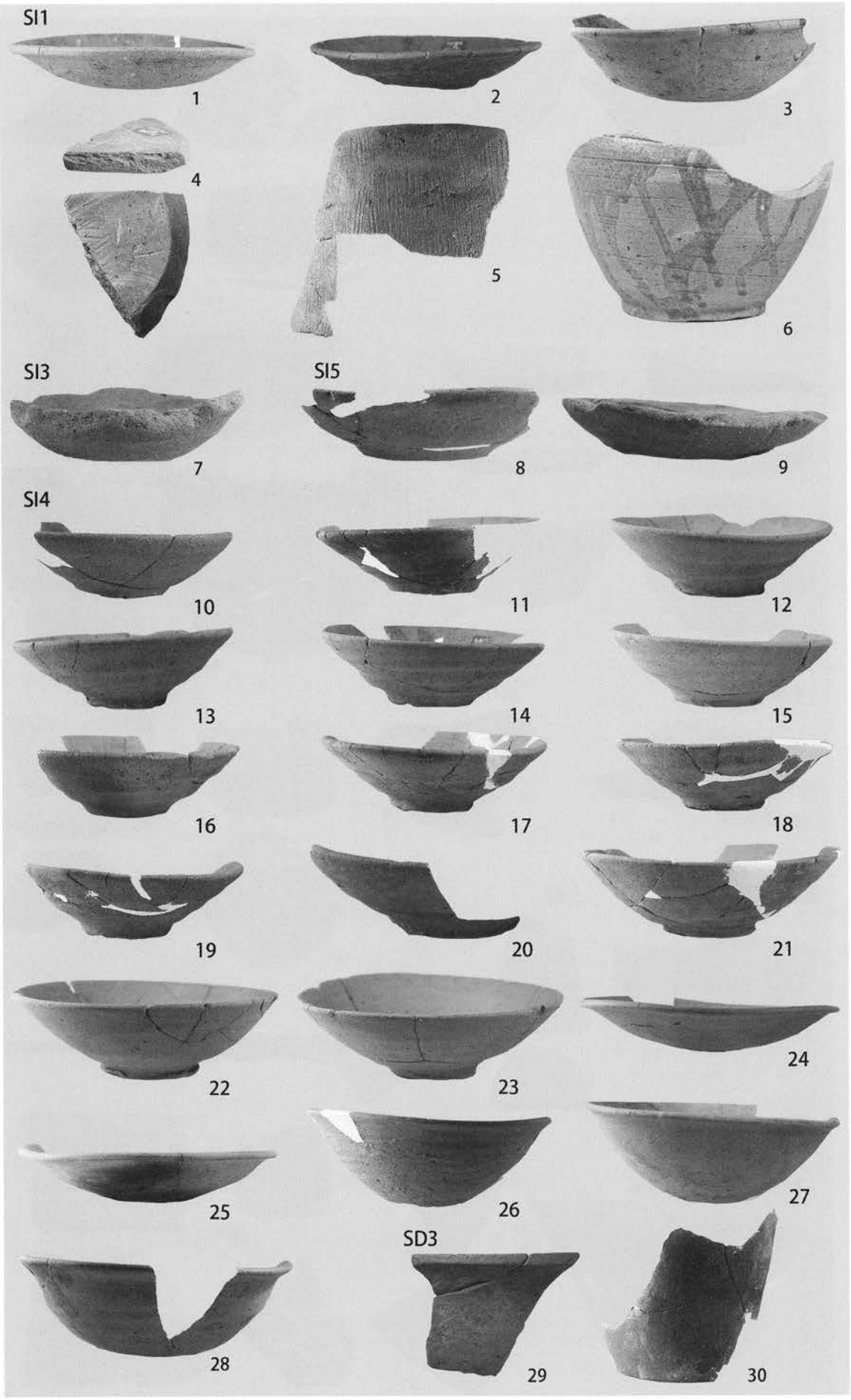
SD10 東から

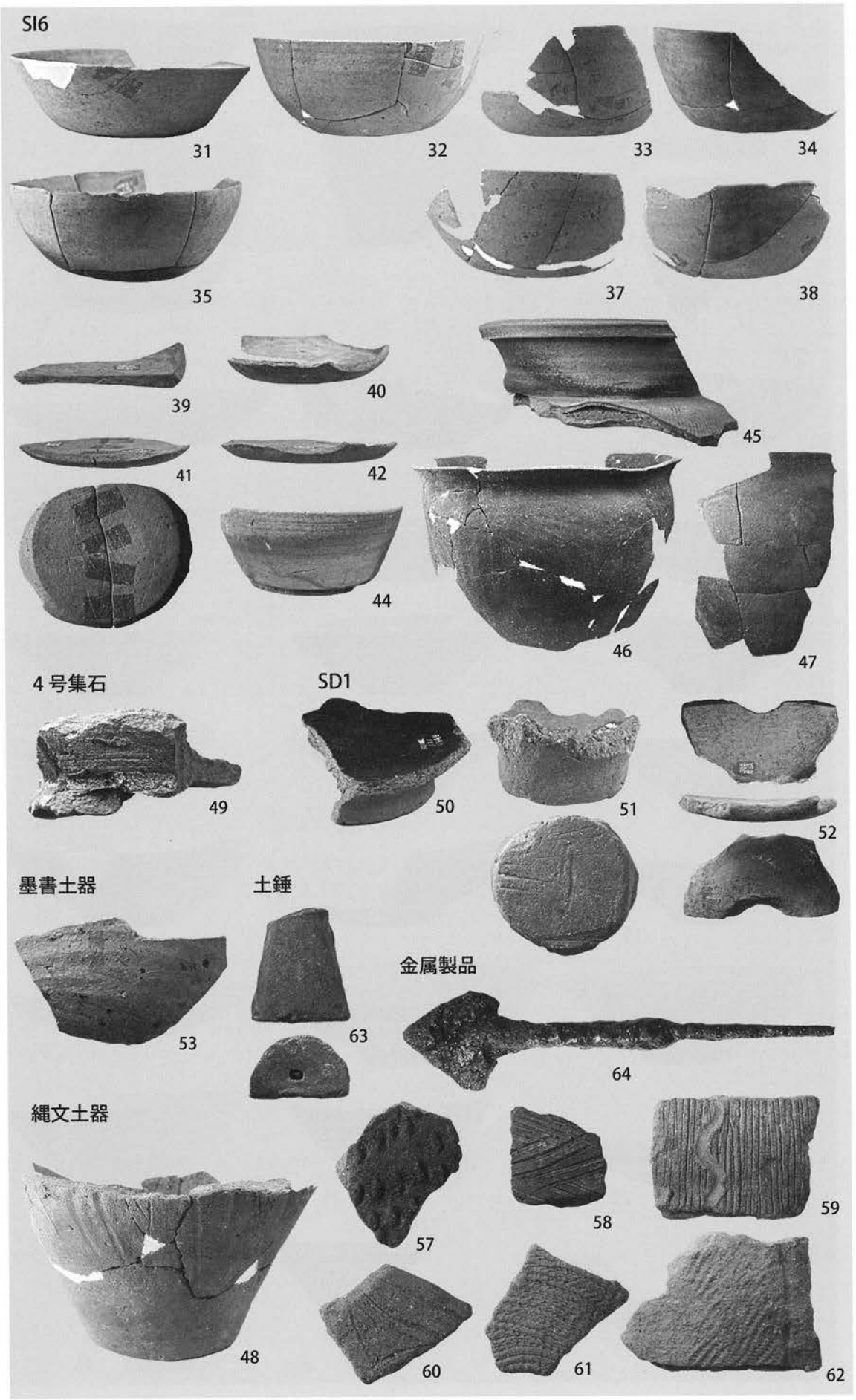

SD11 北から

4Tr Pit・硬化面 西から

硬化面 北から

PL 41　石動遺跡　支線13号地区




SI6
31
32
33
34
35
37
38
39
40
45
41
42
44
46
47
4号集石
SD1
49
50
51
52
墨書土器
土錘
金属製品
53
63
64
縄文土器
48
57
58
59
60
61
62

第六章　北中原遺跡（第4次）支線14号地区〔2005年度調査分〕

1. 2005年度調査について

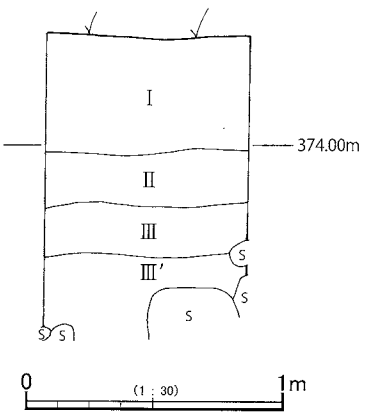
これまで報告した事業に関しては旧一宮町時代に調査に着手したが、支線道路第14号の建設箇所である本調査地点の試掘調査に着手したのは、6町村が合併し笛吹市が誕生してからである。今回の調査地点は県が実施した1・2次調査地点と、一宮町が実施した3次調査の中間地点であるため、本調査の可能性を想定しながら、平成17年1月17日から試掘調査に入った。遺構が確認された地点は随時拡張し、そのまま本調査に移行した。3月3日まで調査を実施し、一部の葡萄畑を残し、一旦調査を中断した。ところが、その後葡萄棚の杭や小張などの撤去が急きょ実施されたため、3月15日～3月31日、4月7日～4月27日にかけて追加調査を実施し、調査を完了した。調査面積は454㎡で、住居跡7軒、溝状遺構2、地下式坑1、土坑24、Pit15、道路状遺構1、抜根痕2を確認した。

尚、支線道路14号は道路幅がほぼ10mであるが、南側は簡易舗装の道路が使用中であったため、その道路箇所は掘削していない。

また、住居跡のカマドの焼土はすべて洗浄し、微細遺物の検出に努めた。その成果は、附編1･2に纏めてある。今回の調査地点に関しては、10×10mのグリッドで設定しており、注意されたい。

2. 基本層序

基本層序は、第1･2次調査の報告書で提示されているが、基本的には同様であるが、B-8グリッドで基本層序を確認したので、報告しておく。なお、Ⅳ・Ⅴ層に関しては、D-4グリッドの地下式坑の土層による。Ⅲ′層は1・2次の報告書で述べているように地点により厚さが異なり、Ⅳ層の礫が上方で確認される場合もある。



第92図　基本層序

Ⅰ　表土
Ⅱ　暗黄褐色土
Ⅲ　明黄褐色土（ローム質の土）
Ⅲ′　明黄褐色砂質土
Ⅳ　礫層
Ⅴ　砂礫層

3. 遺構

今回調査した遺構は住居跡7軒、土坑24基などである。調査区の制約から、全容が明確になった住居跡はSI6･7のみであった。また、SI7の南側における土地の地境は、1m近くの段差があることから、畑に整備された段階で大きく削り取られており、遺構が削平されてしまった可能性がある。なお、竪穴の部分的な調査にとどまった住居でも、SI2･5のカマド周りからの遺物出土状態がよく、良好な知見を得られた。

･SI1（第94･95図、PL43）

C-12グリッド。道路の東側で確認するが、西壁については既存道路の下に存在するものと思われ、東壁は調査区外に展開する。本住居跡は床面が3面、

カマドが2基確認されており、3軒分の住居跡の重複である。土層観察から新しい住居跡から番号を付した。SI1Aは主軸が4.5m程度で、確認面からの深さは最大で25cmである。SI1BはAの住居跡の下層で確認されたもので、Cはこれら2軒により大半が壊されるが、南壁付近をわずかに残すものである。SI1Aのカマドは北壁に付設され、確認時に石が散乱して原型をほとんど留めいていない。このカマドの硬化面の下からさらに1基カマドを確認しており、これがSI1Bのカマドと思われる。

遺物はあまり多く出土せず、3軒分で土器189点、2,378gである。出土状態を記録した土器で、住居跡の所属を明らかにできたものは、明示した。

出土遺物から平安時代Ⅵ期（10C前半）と想定しておきたい。

・SI2（第96・97図、PL43）

B-8グリッドで確認。住居跡の西半分は調査区外に展開する。南北は3.4mで、ほぼ方形を呈すると思われ、確認面から床面までの深さは約50cmである。貼床が2面、カマドが2基確認されたことから、建替えがなされたものと想定しておきたい。カマドは東壁に付設され、中央よりやや南壁に寄っている。床面はほぼ平坦で堅緻であり、周溝は全周していない。カマドの右の北東隅に、浅い土坑状の掘り込みを確認した。旧カマドには両袖に袖石が埋設されていたと思われ、その掘り込みを確認したが、新カマドには袖石の痕跡は認められなかった。土器は589点、3,445gがカマドの周辺に集中して出土し、特に右袖（南壁）寄りに集中して見られた。

出土遺物から平安時代Ⅵ期（10C前半）と想定しておきたい。

・SI3（第98・99図、PL43・44）

C-11グリッドで確認。東・西壁は調査区外に展開し、結果的に住居跡をトレンチ調査した形となり、形状・規模は不明である。当初、地境付近で確認されたため、地境溝かと思われた遺構である。南北3.3m程の住居跡で、北壁に周溝を確認したが、床面は所々堅緻な貼床が施されているが、全面には及んでいない。カマドは一部調査し、東壁に付設されていることを確認した。袖石や天井石を確認したが、原位置を維持していない。カマド前面で確認した石は被熱しているが、これらの被熱箇所がバラバラの方向に散乱しており、石の下から完形の坏（59）が出土していることから、廃棄時にカマドが破壊された可能性がある。土器は291点、2,614gが出土し、カマド周辺に集中していた。覆土から、縄文時代中期前葉の五領ヶ台式の土器片が出土している。

出土遺物から平安時代Ⅵ期（10C前半）と想定しておきたい。

・SI4（第100図、PL44）

C-9グリッドで確認。住居跡の大半は東側の調査区外に展開する。深さ35cm程で、南北3.3　mを測り、方形を呈するものと思われる。床面は貼床が施され、平坦で堅緻であった。床面下で径60cm程の楕円形の土坑を1基確認した。土坑の中央に巨石があり、この上面が平坦で、ほぼ床面の高さであることから、人為的に床面に高さを揃えるように設置されたものと思われる。坏（68）はこの土坑の石の下から出土している。南壁よりに比較的石が集中していたが、カマドの残骸なのかは不明である。土器は110点、949gとあまり多くない。

出土遺物から平安時代Ⅵ期（10C前半）と想定しておきたい。

・SI5（第 101・102・103 図、PL44）

B-7 グリッドに位置する。住居跡のほぼ東半分を調査したのみで、西側は調査区外に展開する。北側に遺構が重複しており、この遺構は床面を確認したことから住居跡と思われ、覆土はⅢ層のブロックを含む土で、埋め戻したかのような印象を受けたため、住居跡の建替えを想定しておきたい。床下から北側に土坑、カマド前面に焼土が入ったPitを確認した。これらはいずれも旧住居（B）に伴うものと考えられる。カマドは東壁に付設され、大きな立石を1つずつ袖石に使用した両袖と支脚が原位置を維持していた。カマドの袖石は燃焼部側が熱を受けているが、構築財に使用された石には不自然な被熱が認められ、別のカマドに使用されたものを転用した可能性が高い。カマドの両脇には、棚状の浅い掘り込みが確認された。78・88は右袖の構築財に使用されていた。特に88は右袖内、右袖燃焼部側、覆土とバラバラに出土している。特に口縁部は袖の構築財に使用されていた。87はB（旧住居跡）から出土している。カマドの燃焼部から磨石が熱を受けた状態で出土している。土器は386点、8,361 gが出土し、カマド周辺に集中している。

出土遺物から平安時代Ⅵ期（10C前半）と想定しておきたい。

・SI6（第 104・105 図、PL44）

C-7 グリッド。東西2.45 m、南北2.4 mのほぼ方形を呈し、主軸方向はN－100°－Eである。南東、南西隅で土坑（SK10、SK11）でそれぞれ重複するが、住居跡の方が新しい。床面はほぼ平坦で、ほぼ全面に貼床が施されていた。確認面から床面までの深さは約30cmであった。カマドは東壁に付設され、袖（特に右袖）には構築財として礫や土器が使われていた。燃焼部から炭化物の層は認められたが、焼土はない。左袖の下から炭化物の層が確認され、カマドの掘り型から、袖石を設置したと思われる小Pitを確認したことから、カマドの作り替えが行われたと思われる。また、カマドの中央に巨石が置かれていたことから、カマド封じの祭祀が行われた可能性がある。土器は180点、2,007 gが出土している。

出土遺物から平安時代Ⅵ期（10C前半）と想定しておきたい。

・SI7（第 106・107 図、PL44）

D・E-5 グリッド。南北3.4 m、東西4.3 mの長方形を呈し、主軸方向は真北である。5基の土坑によって壊され、段々畑の耕作により削平されているため、覆土も概ね10cm程度しか残っていなかった。当初西側で周溝が確認されなかったが、他の壁際に周溝が巡っていることから、よく精査したところ、西壁から50cm程内側で周溝が確認できた。覆土が薄いため土層でよく観察できなかったが、最初に周溝が巡る小さな住居跡が構築され、西側に拡張された可能性が高い。床面は北側に向かって傾斜し、部分的に貼床が施されている。カマドは北壁に付設されている。カマドは土坑により左袖を壊されており、残存状態は悪い。土器は37点、655 gが出土し、遺構の遺存状態も悪いこともあって、出土量は少ない。

出土遺物から平安Ⅳ期（9C前半）と想定しておきたい。

・地下式坑（第 109 図、PL45）

D-4 グリッド。ブドウ畑の支柱が撤去できなかったため、完掘できなかった。1.7 m × 1.4 mの洋ナシ形の入口部は、地表面から深さ40cm程である。方形部は東西1.6mで、地表面から1.4 mの深さである。地主からこの辺りが以

前陥没し、ゴミを埋めたと聞いたが、この地下式坑は自然堆積であることから、別の遺構と考えられる。側壁は被熱により、赤色硬化していた。

・SD1（第 108 図、PL45）

B・C-12 グリッドで確認された。確認された範囲で規模は、巾 40 ㎝、深さ 5 ㎝であった。土器は 143 点、1,735 g が出土した。

・SD2

C-1、D-2 グリッドで確認したが、道路の拡張幅が狭く、溝状遺構が存在することだけを確認したに過ぎない。

SK とピットについては、表 36・37 にまとめてある。

4. 遺物（第 110 ～ 118 図、表 38 ～ 40、PL46 ～ 49）

今回の調査で出土した土器は、2,264 点、約 26kg である。その大半は土師器であるが、須恵器、灰釉陶器、青磁、陶器、縄文土器も僅かながら出土している。その他、瓦、土製品、石製品も少量出土している。SI4 からは、図示できなかったが須恵器の坏の底部片の内面に、ベンガラが付着しており、転用されたものと思われる。

土器・瓦については、表 38 ～ 40 表にまとめてある。

・石製品

3 点を報告する。1 は SI5 のカマドの支脚で、花崗岩製の自然石である。尖った方を地中に埋めており、上部は熱を受け黒変している。長さ 19.4cm、最大幅 9.4cm、厚さ 6.2cm、重量 1450g である。2 は花崗閃緑岩製である。当初砥石かと想定したが、砥石にあまり使用しない石材であるため、磨石としておきたい。長さ 12.3cm、最大幅 8.4cm、厚さ 7.7cm、重量 973g で、被熱により黒変している。SI5 のカマド内から出土しており、カマドの右袖の構築財に転用されていた。3 は打製石斧で粘板岩製である。長さ (5.2)cm、幅 5.4cm、厚さ 1.2cm、重量は 37.4g である。

（野﨑）

表 36　北中原遺跡 (第 4 次) 支線 14 号地区　土坑一覧表

遺構	グリッド	平面形	規模 大きさ 長径 (cm)	規模 大きさ 短径 (cm)	規模 深さ	重複関係	備考
SK1	C-13	不明	84	―	17		
SK2	C-13	楕円形	120	―	16		
SK3	C-13	不明	112	―	33	SK4	
SK4	C-12	不明	―	―	28	SK3、5	
SK5	C-12	不明	142	―	38	SI1C、SK4	
SK6	C-10	ほぼ円形	82	80	22		
SK7	C-10	楕円形	110	92	27		
SK8	B-8	楕円形	92	―	57		
SK9	C-8	不明	―	―	50		
SK10	C-7	ほぼ円形	80	76	30	SI6	
SK11	B-7	楕円形	86	66	45	SI6	
SK12	C-7	長楕円形	138	75	69		
SK13	C-7	楕円形	93	〔65〕	22		
SK14	E-5	楕円形（円に近い）	128	115	37	SI7	
SK15	E-5	ほぼ円形	120	118	18	SI7	
SK16	D-5	楕円形	160	112	31	SI7、SK17、SK18	
SK17	D=5	不明	―	―	14	SI7、SK16、SK18	
SK18	D-5	楕円形	〔224〕	180	48	SI7、SK16、SK19	
SK19	D-5	不明	―	―	〔43〕	SI7、SK16、SK18	
SK20	D-5	不明	〔160〕	―	〔56〕	SK21、SK24	
SK21	D-5	不明	―	―	〔11〕	SK22	
SK22	D-5	不明	〔120〕	―	〔54〕	SK21、SK23	テラス有り
SK23	D-5	不明	〔95〕	―	〔12〕	SK19、SK22	
SK24	D-5	楕円形	160	―	44	SI7、SK20	

表 37　北中原遺跡支線 14 号地区 ピット一覧表

遺構	グリッド	平面形	規模 大きさ 長径 (cm)	規模 大きさ 短径 (cm)	規模 深さ	備考
P1	C-13	不明	28	―	30	
P2	C-13	不明	30	―	不明	
P3	C-13	不整楕円形	40	―	35	
P4	C-10	楕円形	65	48	23	
P5	C-10	不明	44	―	15	
P6	C-10	不明	54	―	25	
P7	C-10	楕円形	42	34	51	
P8	C-8	不明	46	―	22	
P9	B-8	円形	43	43	20	
P10	B-8	ほぼ円形	54	52	43	
P11	B-8	不整円形	52	44	21	
P12	B-8	楕円形	58	45	11	
P13	B-8	不整円形	45	40	17	
P14	B-8	ほぼ円形	68	62	46	
P15	C-7	円形	37	36	45	

表 38　北中原遺跡 (第 4 次) 支線 14 号地区　遺物観察表

図	番号	遺構	種別	器種	口径 (cm) 器高 (cm) 底径 (cm)	焼成	胎土	整形技法	色調	備考
110	1	SI1	土師器	坏	10.9 3.6 5.7	良	密　白・黒・赤・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ (底) 指頭痕・スノコ状圧痕	(内) 茶褐色 (外) 茶褐色	打ち欠き後割れ口研磨
110	2	SI1	土師器	坏	(12.0) ― ―	普通	密　白・黒	(内)ナデ (外)ナデ→ヘラケズリ	(内) 暗橙褐色 (外) 暗橙褐色	
110	3	SI1	土師器	高台付坏	― - 6.0	良	密　白・黒・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ (底) 糸切り→高台貼付け・ナデ	(内) 橙褐色 (外) 橙褐色	打ち欠き後胴部は一部研磨
110	4	SI1	土師器	坏		普通	密　白・黒・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ (底) 糸切り・指頭押え	(内) 橙褐色 (外) 橙褐色	
110	5	SI1	土師器	皿	6.4 ― ―	良	密　白・黒・赤	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 明褐色 (外) 明橙褐色	
110	6	SI1	土師器	甕	(35.8) ― ―	普通	密　白・雲母	(内) ヨコハケ・ヨコナデ・指頭痕 (外) ヨコナデ・タテハケ→ナデ・指頭痕有・輪積み痕有	(内) 暗茶褐色 (外) 茶褐色	(内) 口縁ヘラ状ｏｒハケ状工具による押捺？
110	7	SI1	土師器	甕	(27.2) ― ―	普通	密　白・黒・金	(内) ヨコナデ (口縁)・細かいヨコハケ (外) ヨコナデ→指頭・粗いナナメハケ一部指頭痕有り	(内) 暗茶褐色 (外) 暗茶褐色	
110	8	SI1	土師器	羽釜	(20.0) ― ―	普通	密　白・黒・金	(内) ハケナデ→ヨコナデ (外) ナデ→指頭仕上げ・ヨコナデ・指頭痕	(内) 茶褐色 (外) 暗茶褐色	
110	9	SI1	土師器	甕	- - (13.8)	普通	密　白・雲母・金	(内) クシ目 (外) ナデ・指頭痕 (底) ナデ?	(内) 暗灰褐色 (外) 暗灰褐色	擂鉢？中世か？
110	10	SI1	須恵器	―	― ― ―	良	密　白	(内) ナデ (外) ナデ	(内) 濃青灰褐色 (外) 暗褐色	
110	11	SI1	土師器	置きカマド	― ― ―	普通	密　白・金	(内) ヨコナデ・指頭痕 (外) ヨコナデ・タテハケ→弱いナデ	(内) 暗灰褐色 (外) 暗茶褐色	
110	12	SI2	土師器	坏	12.8 2.4 3.7	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) 回転糸切り→ヘラケズリ	(内) 橙褐色～明褐色 (外) 橙褐色～明褐色	(底) 糸切り後半分一定方向のヘラケズリ (指頭による歪み有) 当初蓋を作る予定が坏 (皿) になったものか？
110	13	SI2	土師器	皿	(13.4) 2.6 ―	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) ヘラケズリ	(内) 暗褐色 (外) 明褐色～暗茶褐色	掴り方と接合
110	14	SI2	土師器	坏	13.0 2.7 3.4	普通	密　白・雲母	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) ヘラケズリ	(内) 暗橙褐色、明褐色 (外) 暗橙褐色、明褐色	スス付着、種入り

110	15	SI2	土師器	坏	13.0 2.5 4.2	普通	密　白・黒・赤	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) ヘラケズリ	(内) 明褐色、明橙褐色 (外) 明褐色～黒褐色	
110	16	SI2	土師器	坏	(13.4) (2.5) 3.6	良	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) ヘラケズリ、糸切り痕、指頭痕	(内) 明橙褐色 (外) 明橙褐色	ある方向のヘラケズリ後直交方向のヘラケズリ、指頭痕部に糸切り痕
110	17	SI2	土師器	坏	12.6 2.5 4.1	良	密　白・黒・赤・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) ヘラケズリ (一定方向)	(内) 明褐色～明橙褐色 (外) 明褐色	体部一部欠。　前の土器制作時の糸切り痕が内面に残る。かつ, この土器の製作時に糸切りが深く底部に穴があいたため粘土を貼付して指頭、ヘラケズリしているのか?
110	18	SI2	土師器	皿	13.0 2.4 4.9	普通	やや粗　白・黒・赤	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) ヘラケズリ	(内) 暗茶褐色 (外) 暗茶褐色	
110	19	SI2	土師器	皿	(13.0) (2.1) (3.0)	良	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) ヘラケズリ	(内) 明橙褐色 (外) 明橙褐色	
110	20	SI2	土師器	坏	12.4 2.6 5.0	普通	密　白・黒・赤・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) ヘラケズリ	(内) 明褐色～明橙褐色 (外) 明褐色～明橙褐色	内面に墨痕
110	21	SI2	土師器	皿	(13.0) (2.0) (6.0)	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) ヘラケズリ	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	
110	22	SI2	土師器	坏	13.0 2.8 5.6	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 明褐色 (外) 橙褐色	底部竹管状の痕跡有り。乾燥時に竹管の上に置いたものか?
110	23	SI2	土師器	皿	(14.0) (2.6) (4.6)	普通	密　白・黒・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 暗茶褐色 (外) 明褐色	
110	24	SI2	土師器	坏	13.1 2.9 6.3	やや良	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ナデ (外) ロクロナデ (底) 回転糸切り痕	(内) 明褐色、黒褐色 (外) 明褐色～黒褐色	スス付着。底部中央指頭痕有 (意図的に押している)
110	25	SI2	土師器	坏	(16.0) — —	普通	密　黒・赤・金 (微)	(内)) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(内) 明橙褐色 (外) 明白褐色	
110	26	SI2	土師器	皿	(12.6) — —	やや良	密　白・雲母	(内)) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(内) 明橙褐色 (外) 明橙褐色	
110	27	SI2	土師器	坏	(12.0) (2.1) (6.8)	普通	密　赤・雲母 (微)	(内) ロクロナデ→ヘラケズリ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 茶褐色 (外) 茶褐色	
111	28	SI2	土師器	坏	16.7 5.7 (5.3)	良	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) ヘラケズリ	(内) 明茶褐色 (外) 明茶褐色	
111	29	SI2	土師器	坏	(16.5) 5.3 6.3	普通	密　白・黒・赤・雲母	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズ (底) 回転糸切り (指頭により残る) →ヘラケズリ	(内) 明橙褐色～黒褐色 (外) 明橙褐色～黒褐色	割れた痕二次焼成
111	30	SI2	土師器	坏	12.6 4.0 5.0	普通	密　白・黒・赤・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) 回転糸切り→ヘラケズリ (一定方向) 指頭痕	(内) 茶褐色～暗茶褐色 (外) 茶褐色～暗茶褐色、外面黒変	指頭痕部に糸切り痕
111	31	SI2	土師器	坏	12.8 (3.7) 3.1	普通	密　白・黒・赤	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) ヘラケズリ	(内)) 茶褐色 (外) 茶褐色	(底) ある方向に削った後、直交するように削りなおし。指頭痕の箇所のみ糸切り痕有。ほぼ完形
111	32	SI2	土師器	坏	12.6 4.1 3.9	良	密　白・黒・赤	(内) ナデ (外) ハケ→ヘラナデ (底) 回転糸切り→ヘラケズリ	(内) 暗茶褐色、ムラ有り (外) 暗茶褐色、ムラ有り	ヘラケズリがミガキ状、墨書土器
111	33	SI2	土師器	坏	(14.0) 4.4 5.0	良	密　赤・雲母 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→2方向のヘラケズリ (ある方向にやってからまた別方向に) (底) ヘラケズリ	(内) 茶褐色～暗茶褐色 (外) 茶褐色～暗茶褐色	
111	34	SI2	土師器	坏	(12.0) (3.9) 4.2	良	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) 糸切り痕	(内) 明橙褐色 (外) 明橙褐色	
111	35	SI2	土師器	坏	(13.0) — —	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 明褐色 (外) 明橙褐色	
111	36	SI2	土師器	坏	13.2 3.7 (6.0)	普通	密　赤・雲母 (微)	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ→ヘラケズリ	(内) 暗橙褐色 (外) 暗茶褐色	
111	37	SI2	土師器	坏	13.4 — —	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 明褐色 (外) 明褐色	
111	38	SI2	土師器	坏	(15.6) — —	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 明茶褐色 (外) 明茶褐色	
111	39	SI2	土師器	?	— — 5.5	普通	密　白・黒	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) 糸切り→一部外周ヘラケズリ	(内) 明褐色 (外) 明茶褐色、スス付着	打ち欠き?　内面スス付着、底部完形

111	40	SI2	土師器	坏	― ― 5.9	普通	密　白・黒・赤	(内) ロクロナデ (外) ヘラケズリ (回転？) (底) 糸切り→ヘラケズリ (直交するように２方向に)	(内) 暗橙褐色 (外) 暗橙褐色	指頭により糸切り痕残
111	41	SI2	土師器	坏	― ― 5.2	良	密　白・赤	(内) ロクロナデ (外) ヘラケズリ (底) 糸切り→若干外周ヘラケズリ、指頭押えナデ	(内) 黒褐色 (外) 明橙褐色	内黒、糸切り指頭痕による残、外周にも指頭有
111	42	SI2	土師器	坏	― ― 5.8	良	密　白	(内) ロクロナデ (外) ヘラケズリ (底) 糸切り→ヘラケズリ (直交する方向)	(内) 明褐色～橙褐色 (外) 明褐色～橙褐色	糸切り指頭による残
111	43	SI2	灰釉陶器	埦	(16.2) ― ―	良	密　白・黒	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(内) 灰白色 (外) 灰白色	内外施釉
111	44	SI2	土師器	坏？	― ― ―	良	密　白・黒・赤	(内) 暗文	(内) 明黄褐色 (外) 明黄褐色	墨書土器
111	45	SI2	土師器	羽釜	(24.2) ― ―	普通	密　白・金	(内) ヘラナデ (外) ヨコナデ→タテハケ	(内) 茶褐色～暗茶褐色 (外) 茶褐色～暗茶褐色	
111	46	SI2	土師器	置きカマド	― ― ―	普通	密　白・黒・金	(内) ヨコハケ (粗)・指頭痕 (外) タテハケ (粗)・指頭痕	(内) 茶褐色 (外) 茶褐色	把持孔有
111	47	SI2	土師器	置きカマド	― ― ―	普通	密　白・黒・金	(内) ヨコハケ (粗)・指頭痕 (外) タテハケ (粗)・指頭痕	(内) 茶褐色 (外) 茶褐色	
111	48	SI3	土師器	坏・皿	12.8 2.5 4.2	普通	密　白・黒	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) 糸切り→２方向のヘラケズリ	(内) 橙褐色 (外) 暗褐色	スス付着
111	49	SI3	土師器	坏	(12.0) (2.3) 4.6	良	密　黒・赤・金 (少)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) ヘラケズリ	(内) 明褐色～茶褐色 (外) 明褐色～茶褐色	底部の作り出し不明瞭
111	50	SI3	土師器	坏	(18.0) 5.0 (6.0)	普通	密　黒・赤	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) 直交するヘラケズリ	(内) 明褐色～明橙褐色 (外) 明褐色～明橙褐色	
111	51	SI3	土師器	坏	(17.0) (5.4) (4.0)	良	密　白・黒・赤	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) 糸切り→ナデ・指頭	(内) 橙褐色 (外) 橙褐色	52 と同一個体か？　指頭による歪み有
112	52	SI3	土師器	坏	(17.0) ― ―	良	密　白・黒・赤	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 橙褐色 (外) 橙褐色	51 と同一個体か？
112	53	SI3	土師器	坏	(14.8) 4.3 4.8	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) ヘラケズリ	(内) 明茶褐色 (外) 明茶褐色	
112	54	SI3	土師器	坏	12.6 4.0 5.2	良	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) 糸切り→ヘラケズリ	(内) 褐色 (外) 褐色	指頭により糸切り痕残
112	55	SI3	土師器	坏	(12.8) (3.6) (6.0)	良好	密　白・黒・赤	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) 糸切り→ヘラケズリ	(内) 明褐色～橙褐色 (外) 明褐色～橙褐色	底部指頭による歪み有
112	56	SI3	土師器	坏	12.5 4.1 4.3	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底)2 方向のヘラケズリ	(内) 茶褐色～暗褐色 (外) 茶褐色～暗褐色	
112	57	SI3	土師器	坏	(12.6) ― ―	普通	密　白・黒・赤	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 明褐色 (外) 明褐色	
112	58	SI3	土師器	坏	(12.8) ― ―	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 明茶褐色～茶褐色 (外) 明茶褐色～茶褐色	内面　墨痕？
112	59	SI3	土師器	坏	(12.6) ― ―	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 明褐色～暗褐色 (外) 明褐色～暗褐色	
112	60	SI3	土師器	坏	13.0 ― ―	普通	密　白・黒・赤	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 明茶褐色 (外) 明茶褐色	口縁　スス付着 (灯明か?)
112	61	SI3	須恵器	坏	― ― ―	良	密　白・黒	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(内) 明灰褐色 (外) 灰褐色	内面　赤彩 (ベンガラ) パレットとして使用
112	62	SI3	土師器	甕	(30.0) ― ―	普通	やや粗　白・黒・金 (多)	(内) ヨコハケ・指頭痕 (外) ナデ・タテハケ・指頭痕	(内) 茶褐色～暗褐色 (外) 茶褐色～暗褐色	
112	63	SI3	土師器	甕	(28.0) ― ―	普通	やや粗　白・黒・赤・金	(内) ヨコハケ・指頭・接合痕 (外) ナデ・タテハケ→指頭	(内) 茶褐色～暗茶褐色 (外) 茶褐色～暗茶褐色	
112	64	SI3	土師器	甕	(10.6) ― ―	普通	密　白・黒・雲	(内) ヨコナデ・ハケナデ (外) ナデ	(内) 茶褐色 (外) 茶褐色	胴部剥落のため不明

112	65	SI3	縄文土器	深鉢	ー ー ー	普通	やや粗　白・黒・金	(外)集合沈線文	(内)明茶褐色 (外)明茶褐色	五領ヶ台(集合沈線文)
112	66	SI3	縄文土器	深鉢	ー ー ー	普通	やや粗　白・黒・金 (微)	(外)集合沈線文	(内)明茶褐色 (外)橙褐色	五領ヶ台(集合沈線文)65と同一か?
112	67	SI3	縄文土器	深鉢	ー ー ー	普通	密　白・黒・金(微)	(内)ナデ (外)R 1の無節縄文	(内)明茶褐色 (外)明茶褐色	縄文中期
112	68	SI4	土師器	灯明皿	(13.0) (3.6) (4.6)	普通	密　白・赤・金	(内)ナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ(底)糸切り→部分的ヘラケズリ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	(内)　スス付着　(外)巻き上げ痕有
112	69	SI4	土師器	坏	(14.8) (4.3) 5.0	普通	密　白・黒・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)回転糸切り→ヘラケズリ	(内)明橙褐色 (外)明橙褐色	糸切り後部分的に一定方向のヘラケズリ
112	70	SI4	土師器	坏	(14.0) ー ー	普通	密　白・黒・赤・雲	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ	(内)明茶褐色～褐色 (外)明茶褐色～褐色	口縁に指で挟んだことによる歪み痕有
112	71	SI4	土師器	坏	ー ー 3.6	普通	密　白・赤	(内)ロクロナデ (外)ヘラケズリ (底)一定方向のヘラケズリ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	
113	72	SI4	土師器	甕	ー ー (6.4)	普通	密　白・金	(内)ヘラナデ (外)ヘラケズリ→指頭押え、ヘラの当て痕有 (底)木葉痕(2葉か?)	(内)茶褐色～暗褐色 (外)茶褐色～暗褐色	割れ口に炭化物付着(二次的なもの)
113	73	SI5	土師器	皿	(12.6) - -	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ	(内)明褐色 (外)橙褐色	(底)剥離
113	74	SI5	土師器	坏	(15.6) (5.2) (5.6)	普通	密　白・黒・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)一定方向のヘラケズリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	(外)ススｏｒ黒色処理(底)棒状工具による押捺?
113	75	SI5	土師器	坏	12.2 4.5 4.6	普通	密白・黒・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)糸切り(指頭痕)→直交方向ヘラケズリ	(内)明褐色～明橙褐色 (外)明褐色～明橙褐色	
113	76	SI5	土師器	坏	(12.0) (4.2) (4.0)	普通	密　白・黒・赤・雲・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)ヘラケズリ?	(内)明褐色～明黄褐色 (外)明褐色～明黄褐色	(外)巻上げ痕有　部分的黒変(黒斑)
113	77	SI5	土師器	坏	(12.2) (3.9) (3.4)	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)ヘラケズリ	(内)明橙褐色 (外)明橙褐色	
113	78	SI5	土師器	坏	(14.8) (5.0) 5.4	良	密　白・黒・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)回転糸切り(指頭押え)→直交方向に部分的にヘラケズリ	(内)暗褐色 (外)明褐色	
113	79	SI5	土師器	坏	(12.0) (3.8) 3.8	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)ヘラケズリ	(内)明茶褐色～暗褐色 (外)明茶褐色～暗褐色	(外)巻上げ痕有(底)3方向のヘラケズリ、最後はミガキ状になっている
113	80	SI5	土師器	坏	(13.4) ー ー	普通	密　白・金(微)	(内)ロクロナデ→ヘラケズリ (外)ロクロナデ	(内)暗褐色 (外)茶褐色	
113	81	SI5	土師器	坏	(12.0) ー ー	普通	密　白・黒・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ	(内)明橙褐色 (外)明褐色	墨書
113	82	SI5	土師器	坏	(12.8) ー ー	普通	密　白・黒・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	スス?黒変
113	83	SI5	土師器	皿	ー - (5.2)	良	密　白・黒・赤・金 (微)	(内)ロクロ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)一定方向?のヘラケズリ	(内)明黄褐色 (外)明黄褐色	
113	84	SI5	土師器	坏	ー ー (4.0)	普通	密　白・黒・赤・金 (微)	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)回転糸切り	(内)明橙褐色 (外)明茶褐色	
113	85	SI5	灰釉	椀	ー ー 7.2	良	密　白・黒	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ (底)回転ヘラ→貼り付け高台	(内)明灰褐色 (外)明灰褐色	
113	86	SI5	土師器	坏	ー ー ー	普通	密　白・黒・赤	(内)暗文ー放射状(花弁状?) (外)ロクロナデ	(内)黒褐色 (外)明黄褐色	(内)黒色処理
113	87	SI5	土師器	坏	11.5 (4.5) (4.0)	普通	密　白・黒・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)糸切り(指頭痕)→外周ヘラケズリ	(内)暗褐色 (外)暗茶褐色	(外)ヘラケズリ:やや乾いた状態で(ヘラミガキに近い)、左下りのヘラケズリ
113	88	SI5	土師器	小型甕	17.8 13.9 8.0	普通	やや粗　白・金	(内)ヨコハケ・指頭痕 (外)タテハケ (底)木葉痕	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
113	89	SI5	土師器	甕	(25.6) ー ー	普通	密　白・黒・金	(内)ヨコハケ・指頭痕 (外)ナナメハケ・指頭痕	(内)茶褐色 (外)茶褐色～黒褐色	
113	90	SI5	土師器	小型甕	(17.0) ー ー	普通	やや粗　白・金	(内)ヨコハケ(粗い)指頭痕 (外)タテハケ→ナデ、タテハケ・指頭痕	(内)暗茶褐色 (外)暗茶褐色	

113	91	SI5	土師器	甕	ー ー ー	普通	やや粗　白・金	(内)ヨコハケ(粗い)・指頭痕 (外)タテハケ・指頭痕 (底)木葉痕・種子痕・指頭痕	(内)暗褐色 (外)暗茶褐色	
113	92	SI5	土師器	甕	ー ー 9.9	普通	やや粗　白・黒・金	(内)ヨコハケ・ナデ・指頭痕 (外)タテハケ・指頭押え (底)指頭痕有	(内)茶褐色～暗褐色 (外)茶褐色～黒褐色	(底)木葉痕　置き直しているのか、二重となっている
113	93	SI5	土師器	甕	ー ー ー	普通	やや粗　白・金(多)	(内)ヨコハケ・指頭痕 (外)タテハケ・指頭痕	(内)茶褐色～暗褐色 (外)茶褐色～暗褐色	
114	94	SI5	土師器	甕	ー ー ー	良	やや粗　白・黒・金(多)	(内)ヨコハケ・指頭痕 (外)タテハケ・指頭痕	(内)茶褐色～暗褐色 (外)茶褐色～暗褐色	
114	95	SI5	土師器	羽釜	(23.0) ー ー	良	やや粗　白・黒・金	(内)ヨコハケ・指頭痕 (外)タテハケ・ハケ→ナデ・指頭押え	(内)茶褐色～暗褐色 (外)茶褐色～黒褐色	つばより下は,黒変
114	96	SI5	土師器	置カマド	ー ー (30.0)	普通	やや粗　白・金	(内)ヨコハケ→ナデ (外)タテハケ	(内)暗褐色 (外)茶褐色	
114	97	SI5	土師器	置カマド	ー ー ー	普通	やや粗　白・金	(内)ヨコハケ→ナデ (外)タテハケ	(内)暗褐色 (外)茶褐色～暗褐色	
114	98	SI6	土師器	皿	(12.8) (2.2) 5.6	普通	密　白・黒・赤	(内)ナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)回転糸切り→ヘラケズリ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	(底)糸切り後直交方向のヘラケズリ。ヘラケズリによる底部作り出し
114	99	SI6	土師器	皿	(13.0) ー ー	普通	密　白・黒・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ	(内)明茶褐色～暗褐色 (外)明茶褐色～暗褐色	(内)スス付着
114	100	SI6	土師器	坏	(13.4) ー ー	普通	密　白・黒・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ	(内)明褐色 (外)明褐色	
114	101	SI6	土師器	坏	14.0 4.4 4.8	良	密　白・赤	(内)ロクロナデ→一部ヘラミガキ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)回転糸切り→外周不定方向ヘラケズリ	(内)黒褐色 (外)茶褐色	墨書有り。打ち欠き　内面黒色処理
114	102	SI6	土師器	坏	(12.6) (3.9) (4.6)	良	密　白・黒・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ(非時計回り) (底)ヘラケズリ	(内)茶褐色 (外)明橙褐色	非時計回りのヘラケズリ
114	103	SI6	土師器	坏	(13.0) ー ー	普通	密　白・黒・赤・金(微)	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ	(内)明茶褐色 (外)明茶褐色	
114	104	SI6	土師器	坏	(15.0) (4.6) (6.2)	良	密　白・黒・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	糸切り後(指頭痕により残る)直交(2方向)のヘラケズリ
114	105	SI6	土師器	坏	(16.4) (4.9) (5.2)	普通	密　白・黒・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)ヘラケズリ	(内)暗茶褐色 (外)茶褐色	
114	106	SI6	土師器	坏	(14.6) ー ー	普通	密　白・黒・赤	(内ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ	(内)橙褐色 (外)橙褐色	
114	107	SI6	土師器	坏	(15.8) ー ー	普通	密　白・黒・赤	(内)ナデ (外)ヘラケズリ	(内)橙褐色 (外)橙褐色	
114	108	SI6	土師器	坏	(17.0) ー ー	良	密　白	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ	(内)暗茶褐色 (外)暗茶褐色	
114	109	SI6	土師器	坏	(14.0) ー ー	普通	密　白・黒・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	(内)(外)　黒変
115	110	SI6	土師器	坏	(15.6) ー ー	普通	密　白・黒・赤	(内ロクロ)ナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ	(内)明橙褐色 (外)明橙褐色	
115	111	SI6	土師器	坏	ー ー (5.0)	普通	密　白・黒・赤・雲母(微)	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ、指頭押え (底)糸切り→部分的ヘラミガキ	(内)明黄褐色 (外)茶褐色	指頭は、内外面で指の位置が異なるためかなりゆがんでいる
115	112	SI6	土師器	坏	ー ー 4.0	良	密　白・黒・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)糸切り(指頭により判明)→外周ヘラケズリ	(内)明黄褐色 (外)茶褐色	(底)糸切り痕(指頭により判明)外周ヘラケズリ
115	113	SI6	土師器	坏	ー ー 4.4	普通	密　白・黒・赤・金(微)	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラケズリ (底)ヘラケズリ	(内)暗褐色 (外)茶褐色	
115	114	SI6	土師器	坏	ー ー (2.6)	普通	密　白・黒・赤	(内)ロクロナデ (外)ヘラケズリ (底)ヘラケズリ	(内)明橙褐色 (外)明橙褐色	墨書あり
115	115	SI6	土師器	高台付坏	(16.0) 8.8 9.6	普通	密　白・黒・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→部分的にヘラケミガキ (脚)ロクロナデ→ヘラケズリ	(内)明橙褐色～暗褐色 (外)明橙褐色～暗褐色	(内)50ヶ所以上の爪のあて痕有、(底)一定方向のヘラケズリ(脚)接合後ナデ、3ヶ所爪のあて痕有

115	116	SI6	土師器	高台付坏	― ― 10.0	良	密　白・黒・赤・金 （微）	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(内) 明橙褐色 (外) 暗褐色	(内) 爪痕？有　(40ヶ所以上) 脚内面墨痕、打ち欠き、爪痕？(外) ヘラ状具のあて痕有
115	117	SI6	須恵器	高台付坏	― ― 8.7	良	密　白・黒	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ (底) 回転糸切り→外周回転ヘラケズリ	(内) 明灰褐色 (外) 明灰褐色	転用硯か　　底部貼付高台　接合痕有
115	118	SI6	土師器	小型甕	12.0 ― ―	普通	密　白・金 (多)	(内) ヨコハケ→ハケ状工具によるナデ・指頭痕 (外) ナデ (口唇部)・指頭痕→タテハケ・指頭痕	(内) 暗茶褐色 (外) 茶褐色	
115	119	SI6	土師器	甕	― ― (9.0)	普通	密　白・黒・金	(内) 粗いヨコハケ・指頭痕 (外) 口唇部ナデ・指頭痕→タテヘラケズリ・指頭痕→ナデ (底) 木葉痕・別の圧痕有り	(内) 褐色～暗褐色 (外) 褐色～暗褐色	
115	120	SI6	須恵器	蓋	(14.4) ― ―	良	密　白・黒	(内) ロクロナデ (外) 回転ヘラケズリ、ロクロナデ	(内) 灰褐色 (外) 灰褐色	
115	121	SI6	土師器	甕	(30.0) ― ―	普通	密　白・金 (多)	(内) ヨコハケ (外) ヨコナデ→タテハケ・指頭痕	(内) 明褐色～黒褐色 (外) 明褐色～黒褐色	
115	122	SI6	土師器	甕	― ― (10.0)	普通	密　白・金 (多)	(内) タテハケ・指頭押え (外) ヨコナデ→粗いタテハケ・指頭痕有 (底) 木葉痕	(内) 茶褐色～暗茶褐色 (外) 茶褐色～暗茶褐色	
115	123	SI7	土師器	坏	11.4 4.4 6.2	良	密　白・黒・赤・金 （微）	(内) 暗文 (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) 回転糸切り→ヘラケズリ・指頭痕	(内) 橙褐色 (外) 茶褐色～暗褐色	
115	124	SI7	土師器	坏	11.5 4.3 6.8	良	密　白・黒・赤・金	(内) 暗文 (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) 回転糸切り→ヘラケズリ・線刻 (焼成後)	(内) 橙褐色 (外) 茶褐色～黒褐色	
115	125	SI7	土師器	坏	(14.0) ― ―	普通	密　白・金 (微)	(内) ナデ (外) ナデ	(内) 明黄褐色 (外) 明黄褐色	墨書あり
115	126	SI7	土師器	坏	― ― (7.0)	普通	密　白	(内) ロクロナデ→みこみ部花弁状暗文 (外) 回転糸切り→外周ヘラミガキ (底) ロクロナデ	(内) 橙褐色 (外) 橙褐色	墨書あり
116	127	SI7	土師器	甕	(30.0) ― ―	普通	密　白・黒・金 (多)	(内) ヨコハケ・指頭痕 (外) 口縁ヨコハケ・指頭痕、タテハケ	(内) 茶褐色～暗褐色 (外) 暗褐色	
116	128	SI7	土師器	鉢	― ― (6.8)	普通	密　白・金 (多)	(内) ヨコハケ→指頭押え (外) タテハケ→指頭押え (底) ナデ？	(内) 茶褐色 (外) 暗褐色	
116	129	SI7	土師器	甕	(30.0) ― ―	普通	密　白・黒・金 (多)	(内) ヨコハケ・指頭痕 (外) 口縁ヨコハケ・指頭痕、タテハケ	(内) 茶褐色 (外) 暗褐色	
116	130	SD1	土師器	皿	14.2 2.9 6.8	普通	密　白・黒・赤・金	(内) ナデ (外) ロクロナデ (底) 回転糸切り	(内) 明黄褐色～明橙褐色 (外) 明黄褐色～明橙褐色	
116	131	SD1	土師器	坏	(12.0) - -	良	密　白・黒・金	(内) 暗文 (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 明黄褐色 (外) 明黄褐色	
116	132	SD1	土師器	坏	― ― (8.4)	普通	密　白・黒・赤	(内) ロクロナデ (底) 回転糸切り	(内) 明橙褐色 (外) 明灰褐色～明橙褐色	
116	133	SD1	須恵器	坏	(13.6) - -	良	密　白	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(内) 灰褐色～黄褐色 (外) 灰褐色～黄褐色	
116	134	SD1	土師器	小型甕	(12.0) - -	普通	密　白・黒・金 (多)	(内) ロクロナデ→ヘラケズリ (外) ロクロナデ→指頭痕、タテハケ	(内) 黄褐色 (外) 暗茶褐色	
116	135	SD1	土師器	甕	― ― (8.0)	普通	密　白・黒・金	(内) ナデ (外) 指頭痕、タテハケ (底) 木葉痕	(内) 橙褐色 (外) 褐色	
116	136	SD1	青磁	碗	― ― ―	良好	密　白	(内) 施釉　蓮弁 (外) 施釉	(内) 青緑 (外) 青緑	
116	137	SD1	土師器	甕	(18.6) ― ―	普通	密　白・黒・金 (多)	(内) ヨコハケ・指頭痕 (外) タテハケ・指頭痕	(内) 茶褐色 (外) 茶褐色～黒褐色	
116	138	地下式坑	土師器	坏	― ― 5.0	良	密　白・金	(内) ロクロナデ (底) 回転糸きり・スノコ状圧痕	(内) 橙褐色 (外) 橙褐色	
116	139	抜根痕	須恵器	蓋	(16.0) ― ―	良	密　白	(内) ロクロナデ (外) 回転ヘラケズリ・ロクロナデ	(内) 青灰褐色 (外) 灰褐色	

116	140	抜根痕	灰釉陶器	坏	― ― (9.4)	良	密　白	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(内) 灰白色 (外) 灰白色	
116	141	SK3	土師器	坏	(11.4) ― ―	良	密　白・黒・赤・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 明橙褐色 (外) 明橙褐色	
116	142	SK3	土師器	坏	― ― (8.7)	良	密　白・黒・赤・金	(内) ロクロナデ (底) 糸切り→ヘラナデ、ヘラケズリ	(内) 茶褐色 (外) 茶褐色	
116	143	SK3	須恵器	甕	― ― ―	良	密　白・金	(内) あて具痕 (外) タタキ	(内) 明灰褐色 (外) 明灰褐色	(内) にあて具痕あり。(外) に自然釉
116	144	Sk8	土師器	坏	― ― (6.4)	良	密　白・金	(内暗文 (底) 回転糸切り→ヘラナデ	(内) 明褐色 (外) 茶褐色～黒褐色	
116	145	SK9	須恵器	甕	― ― ―	良	密　白・黒・赤	(内) ロクロナデ (外) 櫛形波状文	(内) 灰黒色 (外) 灰黒色	
116	146	SK16・17	須恵器	蓋	― ― ―	良	密　白・黒・赤	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(内) 灰褐色 (外) 灰褐色	
116	147	SK18・19	土師器	坏	― ― (5.8)	良	密　白・黒・赤・金	(内) ロクロナデ (底) 回転糸切り	(内) 明橙褐色 (外) 明橙褐色	
116	148	SK20	土師器	坏	(11.9) ― ―	良	密　白・黒・赤・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(内) 明褐色 (外) 明橙褐色	
116	149	SK22	須恵器	坏	(14.8) ― ―	普通	密　白・黒	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(内) 明褐色～灰褐色 (外) 明褐色～灰褐色	
116	150	遺構外	土師器	皿	(14.6) ― ―	良	密　白・黒・赤・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(内) 明褐色 (外) 明褐色	
116	151	遺構外	土師器	坏	(13.4) ― ―	良	密　白・黒・赤・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 茶褐色 (外) 茶褐色	
116	152	遺構外	土師器	坏	(12.4) ― ―	良	密　白・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ	(内) 橙褐色 (外) 橙褐色	
116	153	遺構外	土師器	坏	― ― (7.2)	良	密　白・赤・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) ヘラケズリ	(内) 明茶褐色 (外) 暗茶褐色 (底) 暗褐色	
116	154	遺構外	土師器	皿	― ― (7.2)	良	密　白・黒・金	(内) ロクロナデ (外) ヘラケズリ (底) ヘラケズリ	(内) 茶褐色 (外) 茶褐色 (底) 茶褐色	
116	155	遺構外	土師器	坏	― ― (5.7)	良	密　白・金	(内) 暗文 (底) 回転糸切り→ヘラケズリ	(内) 明黄褐色 (底) 橙褐色	墨書あり
116	156	遺構外	土師器	鉢	― ― (4.8)	良好	密　白・黒・赤	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ、指頭痕 (底) 回転糸切り、指頭痕、ヘラケズリ	(内) 明褐色 (外) 明褐色 (底) 明褐色	
116	157	遺構外	土師器	坏	― ― (2.8)	良	密　白・黒・赤・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) 回転糸きり、ヘラケズリ	(内) 暗茶褐色 (外) 暗茶褐色 (底) 暗茶褐色	
116	158	遺構外	土師器	高台付坏	― ― (7.6)	良	密　白・赤	(内) ロクロナデ (底) 糸切り→高台貼付け、ナデ	(内) 茶褐色～暗茶褐色 (底) 茶褐色～暗茶褐色	
116	159	遺構外	須恵器	坏	― ― (7.3)	良	密　白・赤	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ→ヘラケズリ (底) 回転糸きり、ヘラケズリ	(内) 灰褐色 (外) 灰褐色 (底) 灰褐色	
117	160	遺構外	須恵器	蓋	(18.0) ― ―	良	密　白・黒	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(内) 灰褐色 (外) 灰褐色	
117	161	遺構外	須恵器	蓋	(16.0) ― ―	良	密　白・黒	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(内) 青灰褐色 (外) 青灰褐色	
117	162	遺構外	須恵器	坏	― ― (7.6)	良	密　白・黒・赤・金	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ (底) 回転ヘラケズリ	(内) 青灰褐色 (外) 青灰褐色 (底) 青灰褐色	
117	163	遺構外	須恵器	高台付坏	― ― (8.6)	良	密　白・黒	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ (底) 糸切り→高台貼付け	(内) 青灰褐色 (外) 青灰褐色 (底) 青灰褐色	
117	164	遺構外	灰釉陶器	碗	― ― (8.0)	良	密　白	(内) ロクロナデ (外) 回転ヘラケズリ (底) 糸尻	(内) 白黄褐色～緑灰色 (外) 白黄褐色 (底) 灰色	
117	165	遺構外	陶器	碗	― ― (4.4)	良	密　白・黒	(内) ロクロナデ (底) 回転糸切り→高台貼付け	(内) 緑褐色 (底) 白黄褐色	
117	166	遺構外	須恵器	甕	― ― ―	良	密　白・赤・金	(内) ナデ (外) タタキ	(内) 灰褐色 (外) 黒褐色	

117	167	遺構外	須恵器	壷	ー ー ー	良	密　白・金	(内)ヘラケズリ (外)凸帯	(内)灰褐色 (外)灰褐色	
117	168	遺構外	須恵器	壷	ー ー ー	良	密　白・赤・金	(内)ナデ (外)タタキ	(内)青灰褐色 (外)青灰褐色	

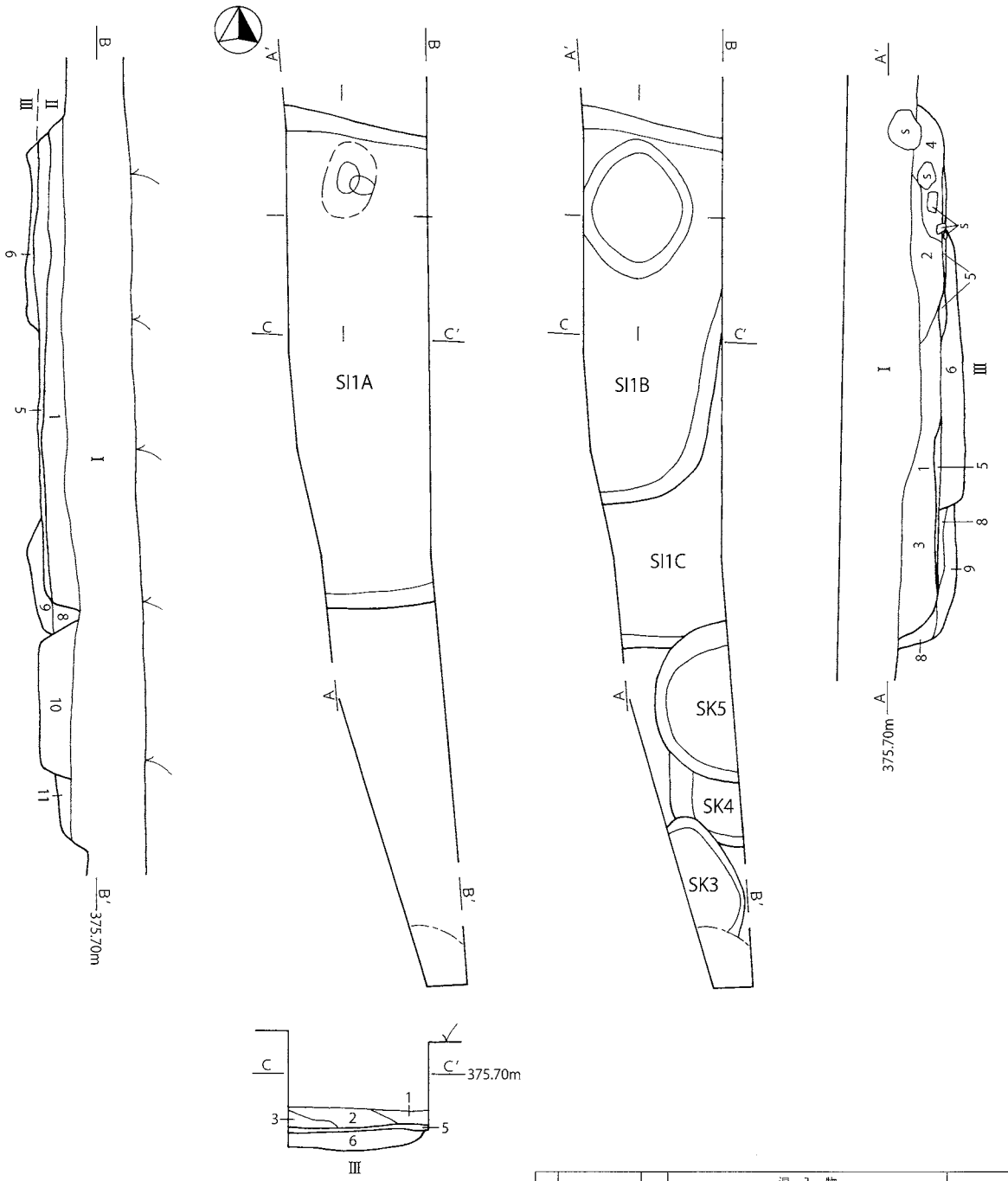
表 39　北中原遺跡（第 4 次）支線 14 号地区　縄文土器観察表

図	番　号	遺　構	種　別	器　種	備　考
117	169	遺構外	縄文土器	深鉢	五領ケ台Ⅰ式古段階　集合沈線
117	170	遺構外	縄文土器	深鉢	堀之内２式

表 40　北中原遺跡 (第 4 次) 支線 14 号地区　瓦観察表

図	番号	遺　構	器　種	大きさ	整　形　技　法	胎　土	焼成	色　調	備　考
117	1	SI1	瓦・丸瓦	タテ　5.4	(内)布目 (外)ナデ	やや粗　白・黒・金	良		須恵質
117	2	SI4	瓦・丸瓦	タテ　10.0	(内)布目 (外)ヘラケズリ	密　白・黒・赤・金	良		
117	3		瓦・丸瓦	ー	(内)布目 (外)ナデ　ケズリ？	密　白・金	〃	(内)(外)明黄褐色	
117	4	？	瓦・丸瓦	ー ー (2.2)	(内)布目・指頭痕	密　白・黒・赤・金(微)	普通	(内)(外)明褐色～灰褐色	
117	5		瓦・平瓦	ー	(内)布目 (外)ナデ　ケズリ？	密　白・黒	〃	(内)(外)明黄褐色	
117	6		瓦・丸瓦	タテ４．２	(外)布目	密　白・黒・赤・金	良	(内)(外)茶褐色	
117	7	SI4	瓦・平瓦	タテ　4.0	(内)タタキ (外)タタキ	密　白	〃	(内)(外)濃青灰褐色	
117	8	SI4	瓦・平瓦	タテ 4.2	(内)布目	密　赤・白・金(微)	〃	(内)(外)明黄褐色	
117	9		瓦・平瓦	タテー	(内)布目 (外)タタキ	密　金	普通	明黄褐色	
117	10		瓦・平瓦	タテー	(内)布目 (外)タタキ	密　金	〃	濃青灰褐色	

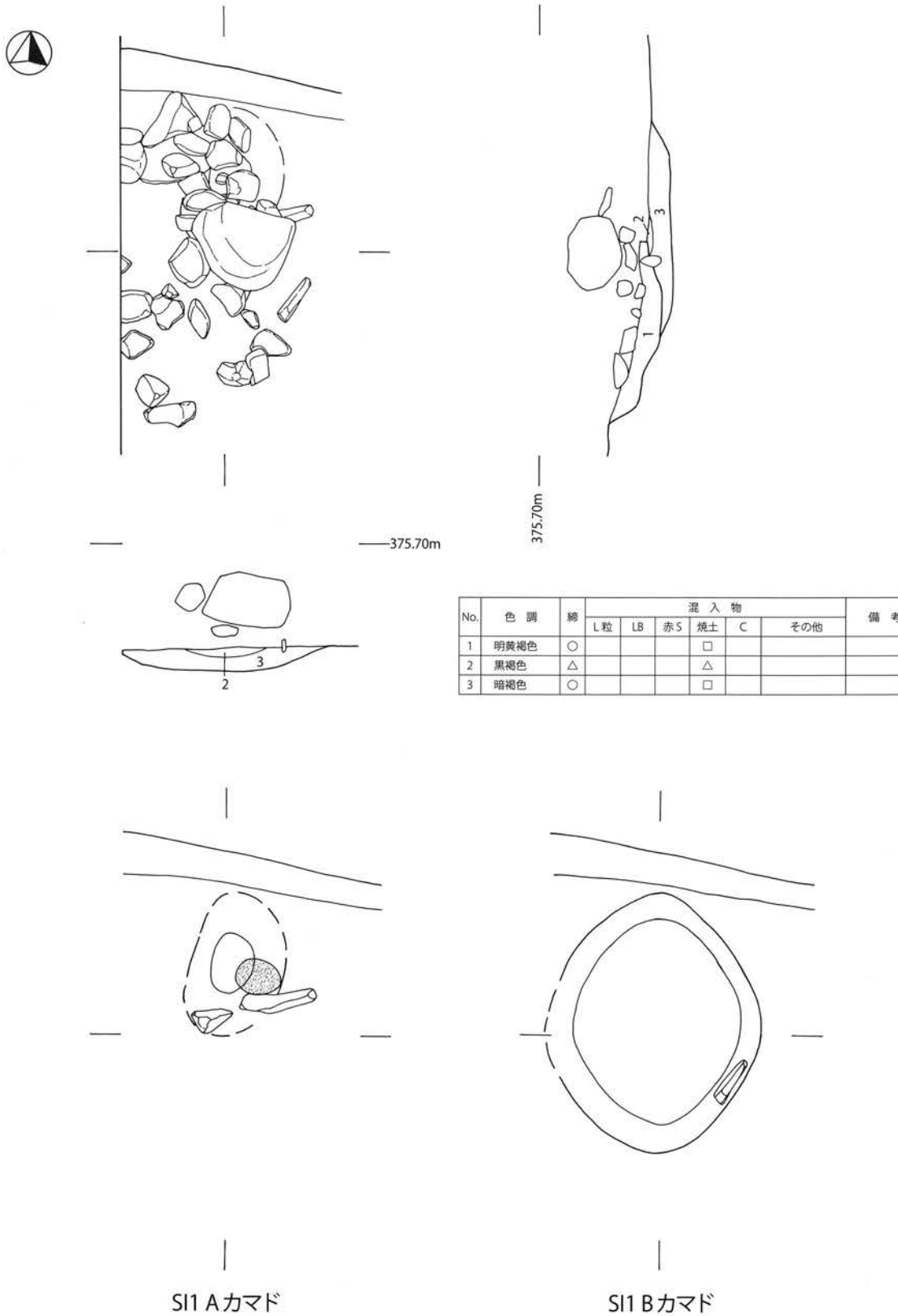
第93図　第４次調査区と遺構分布図



No.	色調	締	混入物						備考
			L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	
1	暗褐色	○	△		△				A
2	暗褐色	◎	△			△	△		A
3	暗茶褐色	◎	□	□		△	△		A
4	暗茶褐色	○		○		△			A
5	暗茶褐色	◎						褐色土B◎	Aの貼床
6	明褐色	◎	□	□					A
7	暗茶褐色	△	○	○					A
8	暗褐色	○	○	○					A
9	明褐色	△	□	□					A
10	明褐色	○	□	□					A

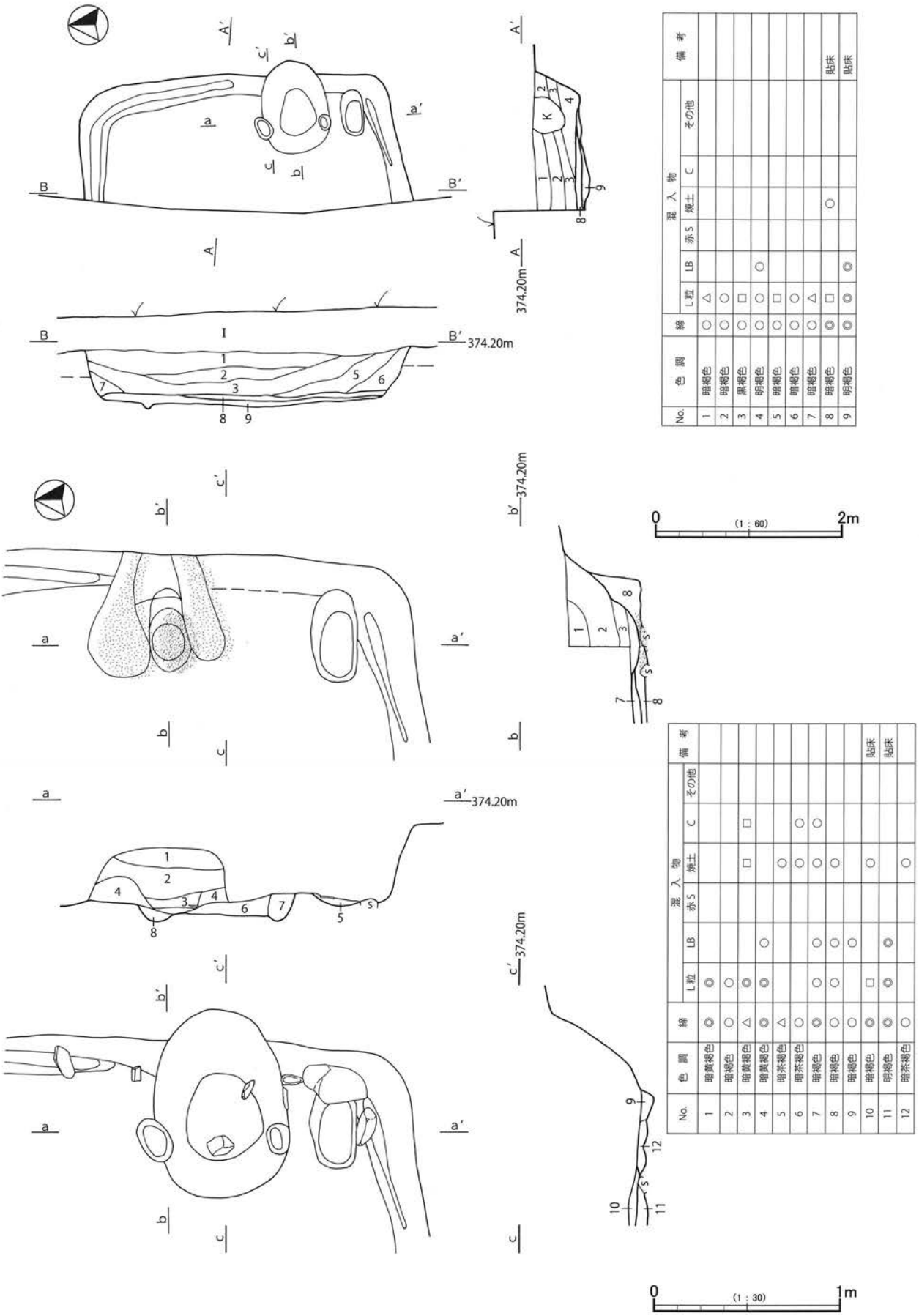
0 (1：60) 2m

第94図　SI1、SK3～5実測図



No.	色調	締	混入物						備考
			L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	
1	明黄褐色	○				□			
2	黒褐色	△				△			
3	暗褐色	○				□			

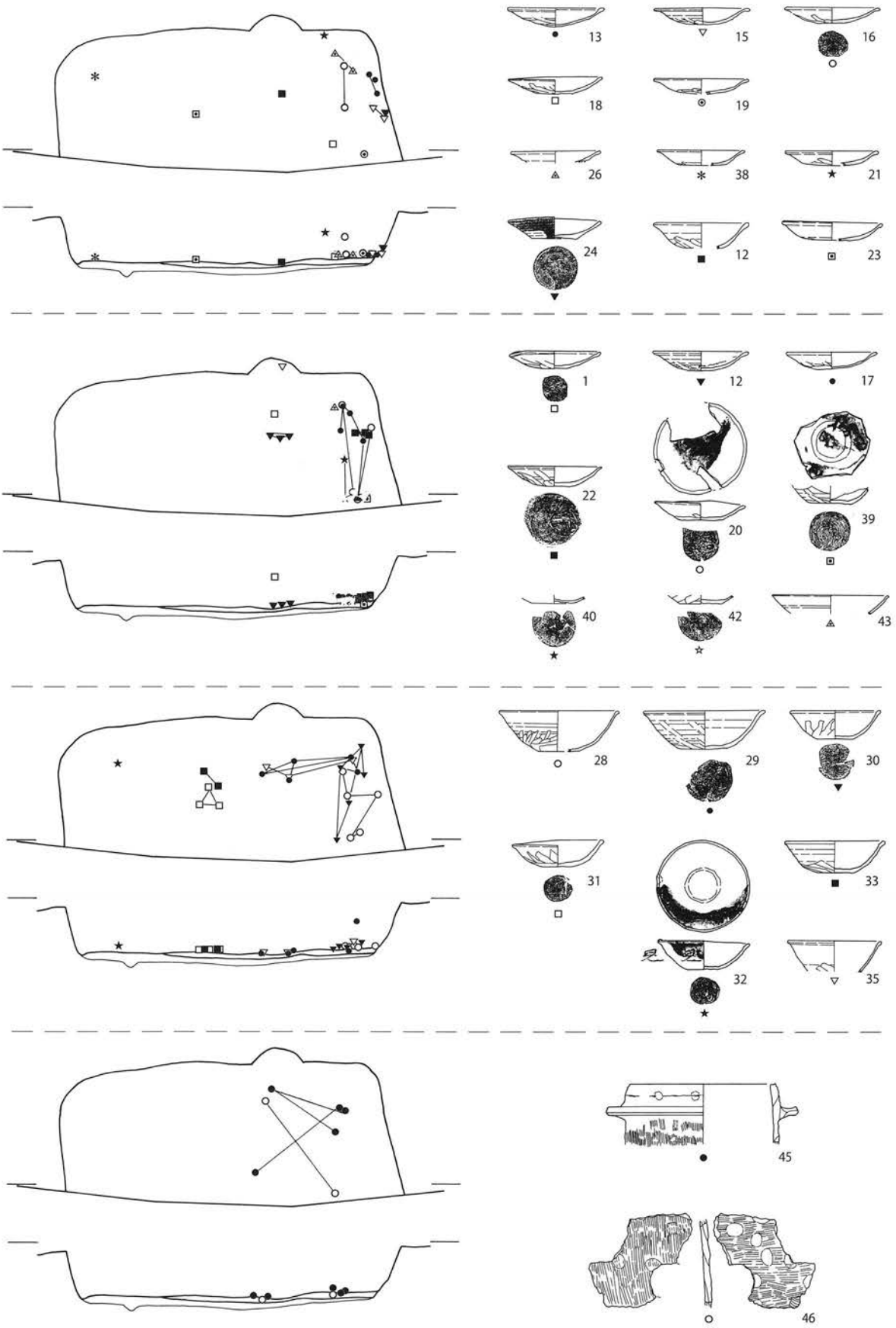
第95図　SI1カマド実測図



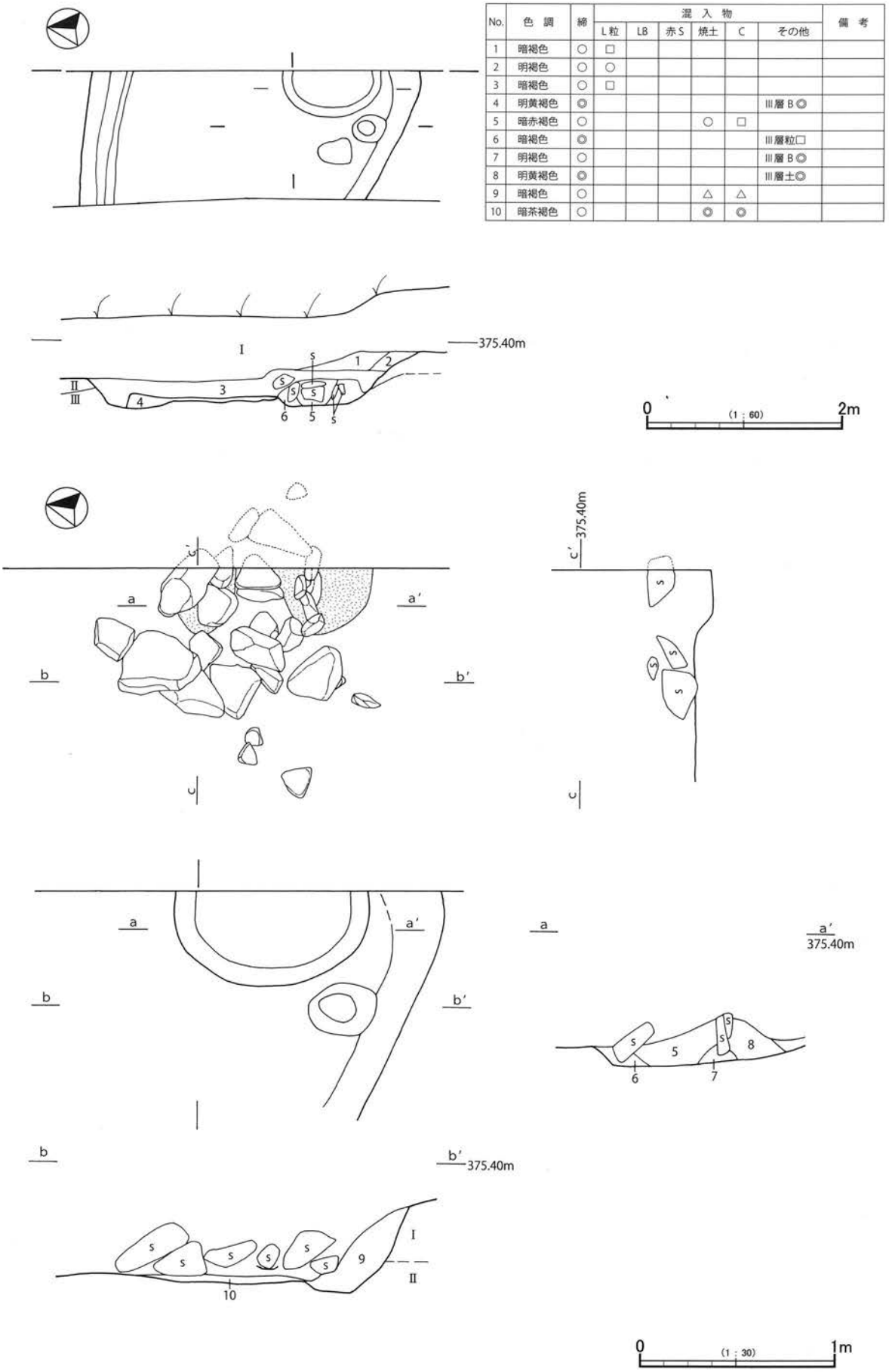
No.	色調	締	混入物 L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	備考
1	暗褐色	○	△						
2	暗褐色	○	○						
3	黒褐色	○	□						
4	明褐色	○	○	○					
5	暗褐色	○	□						
6	暗褐色	○	○						
7	暗褐色	○	△						
8	暗褐色	◎	□			○			貼床
9	明褐色	◎	◎	◎					貼床

No.	色調	締	混入物 L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	備考
1	暗黄褐色	◎	◎						
2	暗褐色	○	○						
3	暗黄褐色	△	◎			□	□		
4	暗黄褐色	◎	◎	○					
5	暗茶褐色	△				○			
6	暗茶褐色	○				○	○		
7	暗褐色	◎	○	○		○	○		
8	暗褐色	○	○	○		○			
9	暗褐色	○	○	○					
10	暗褐色	◎	□			○			貼床
11	明褐色	◎	◎	◎					貼床
12	暗茶褐色	○				○			

第96図　SI2実測図、同カマド実測図

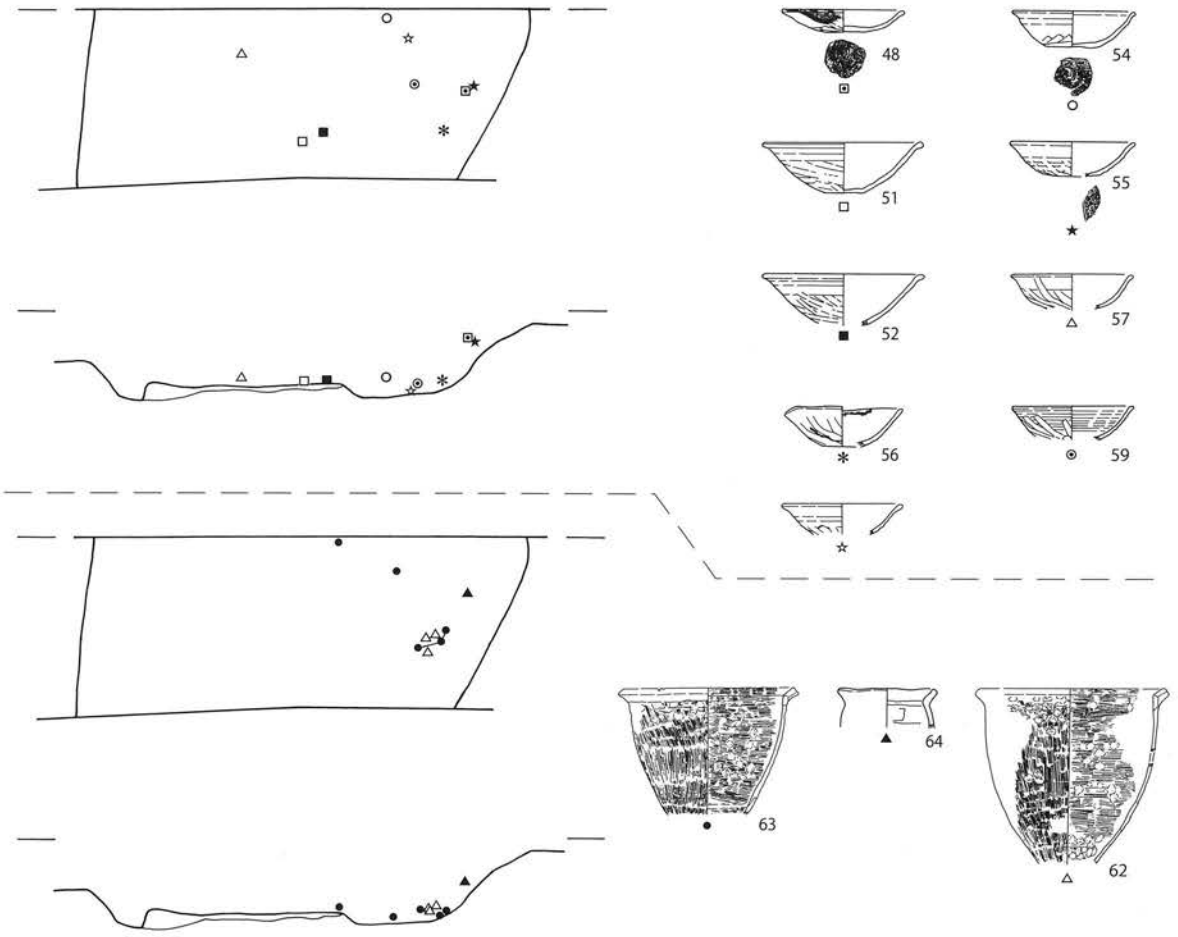


第97図　SI2個体別分布図

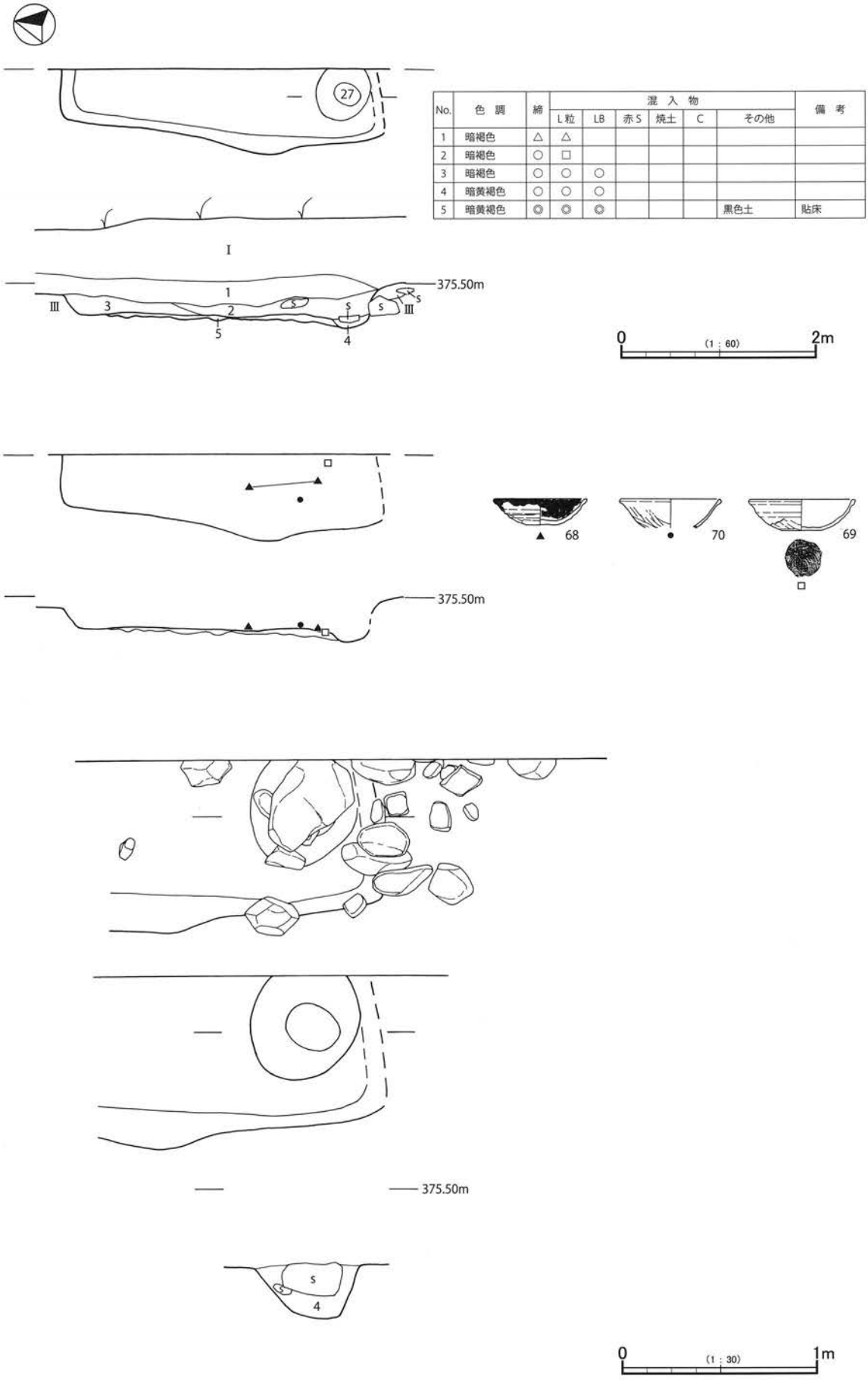


No.	色調	締	混入物						備考
			L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	
1	暗褐色	○	□						
2	明褐色	○	○						
3	暗褐色	○	□						
4	明黄褐色	◎						III層B◎	
5	暗赤褐色	○				○	□		
6	暗褐色	◎						III層粒□	
7	明褐色	○						III層B◎	
8	明黄褐色	◎						III層土◎	
9	暗褐色	○				△	△		
10	暗茶褐色	○				◎	◎		

第98図　SI3実測図、同カマド実測図

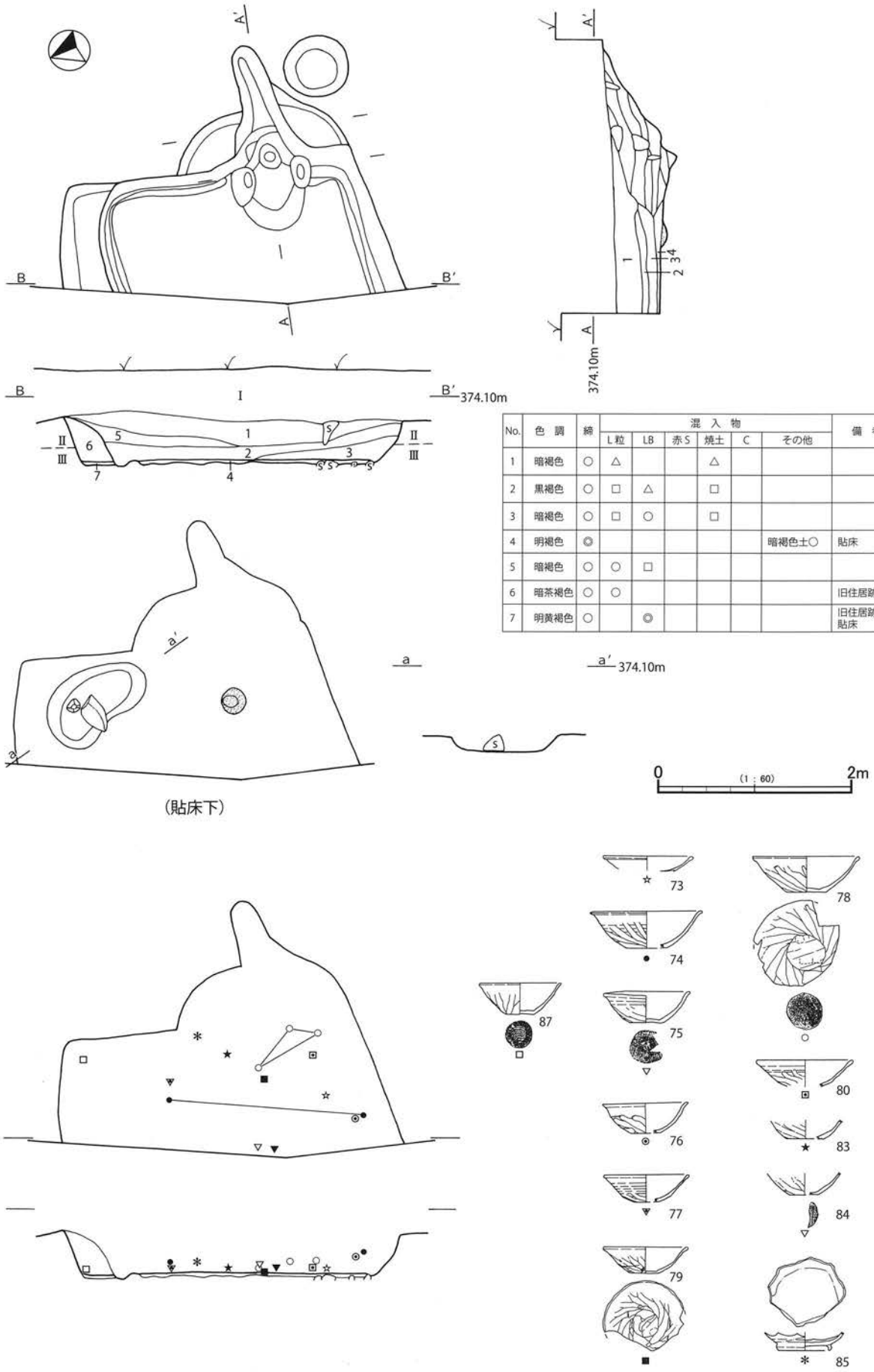


第99図　SI3個体別分布図



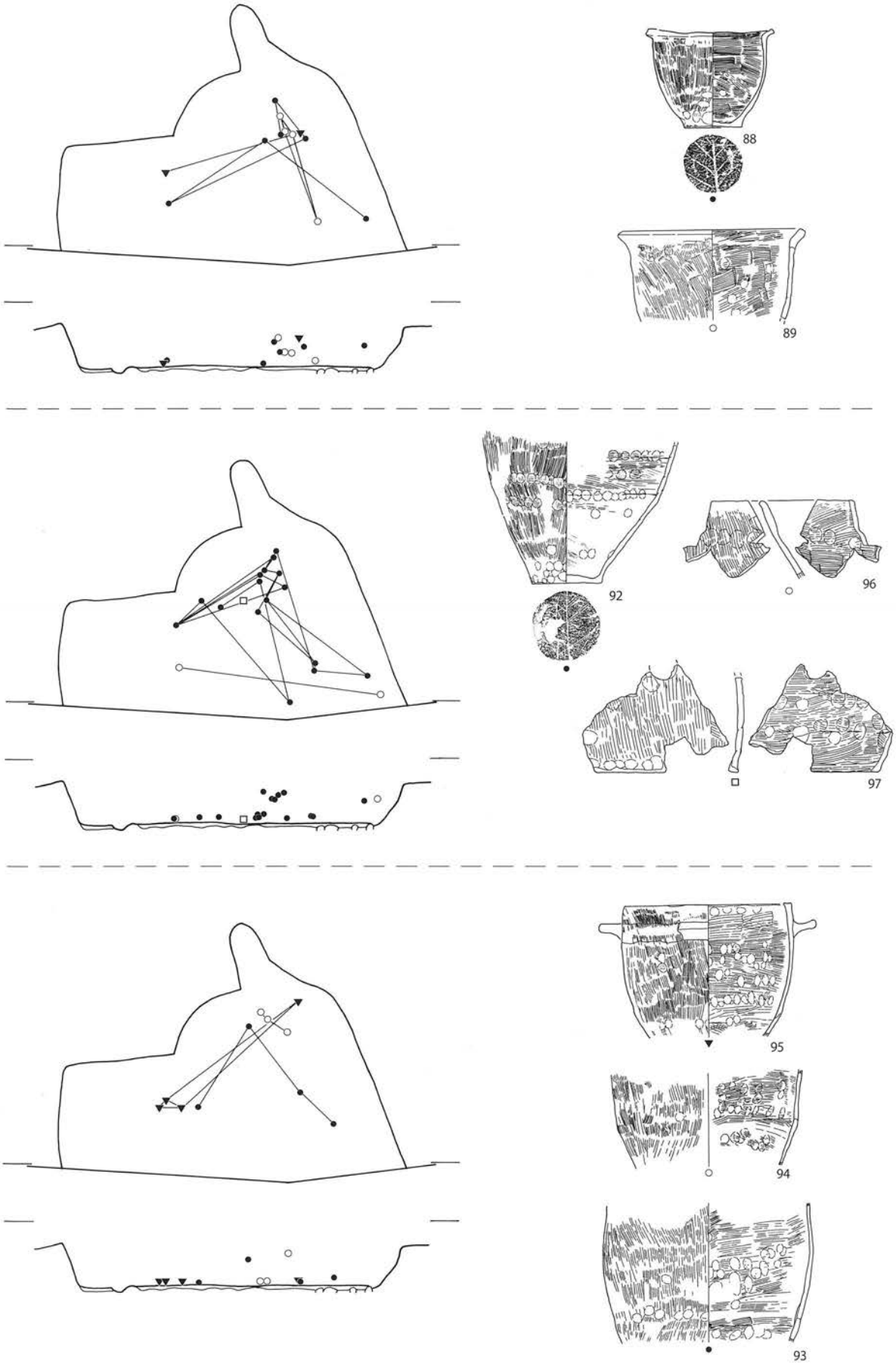
No.	色調	締	混入物						備考
			L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	
1	暗褐色	△	△						
2	暗褐色	○	□						
3	暗褐色	○	○	○					
4	暗黄褐色	○	○	○					
5	暗黄褐色	◎	◎	◎				黒色土	貼床

第100図　SI4実測図



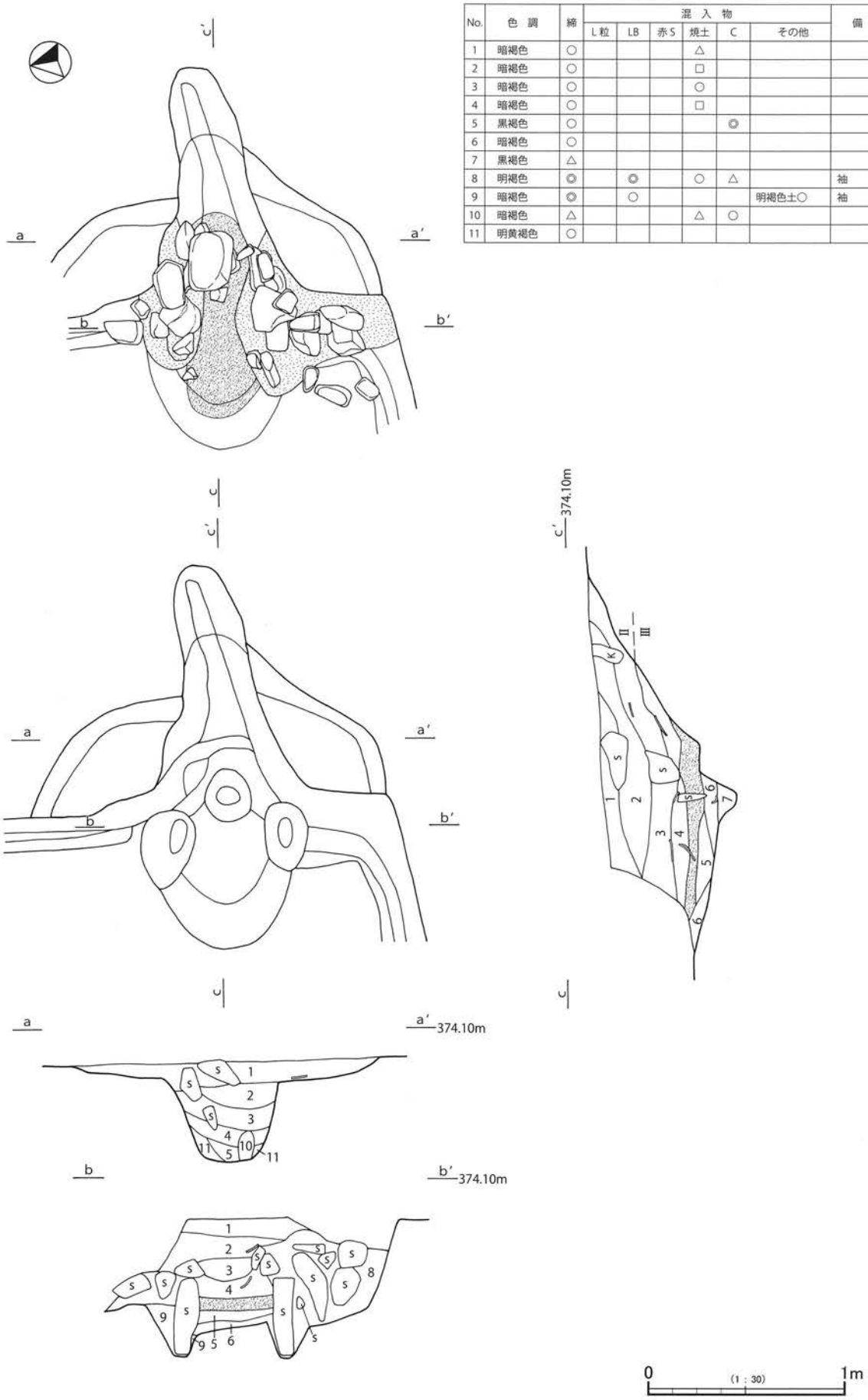
No.	色調	締	混入物						備考
			L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	
1	暗褐色	○	△			△			
2	黒褐色	○	□	△		□			
3	暗褐色	○	□	○		□			
4	明褐色	◎						暗褐色土○	貼床
5	暗褐色	○	○	□					
6	暗茶褐色	○	○						旧住居跡
7	明黄褐色	○		◎					旧住居跡 貼床

第101図　SI5、P14実測図、同個体別分布図①

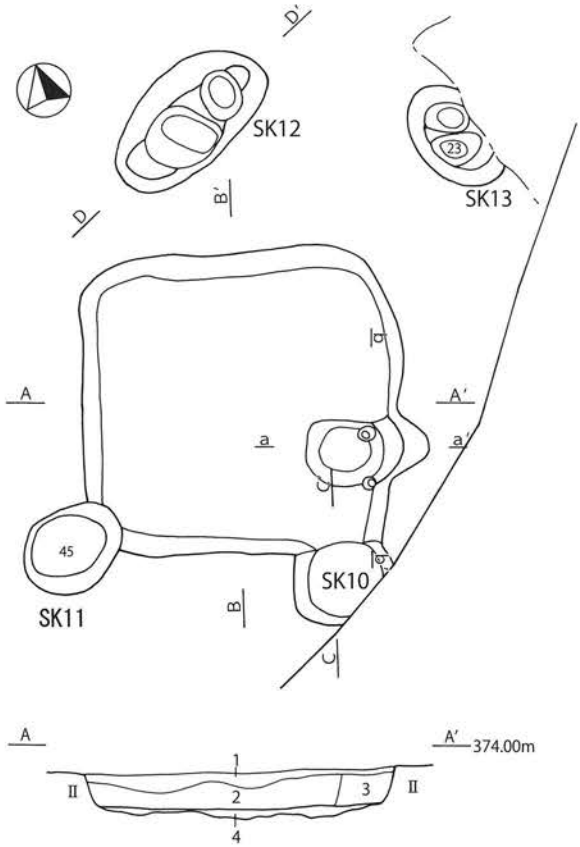


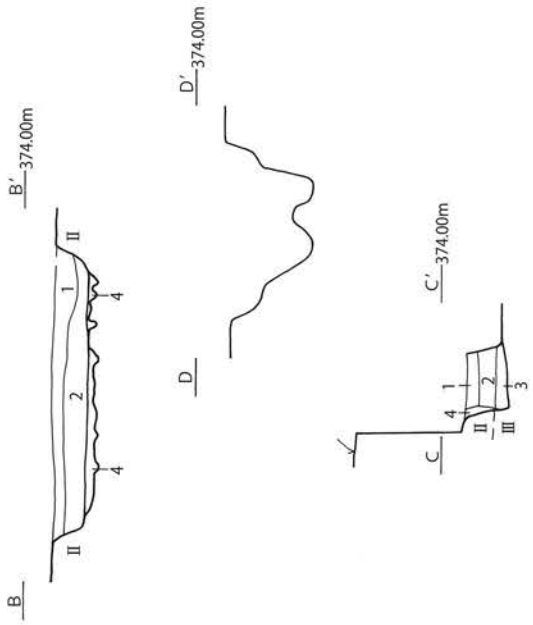
第102図　SI5個体別分布図②

No.	色　調	締	混入物						備　考
			L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	
1	暗褐色	○				△			
2	暗褐色	○				□			
3	暗褐色	○				○			
4	暗褐色	○				□			
5	黒褐色	○					◎		
6	暗褐色	○							
7	黒褐色	△							
8	明褐色	◎		◎		○	△		袖
9	暗褐色	◎		○				明褐色土○	袖
10	暗褐色	△				△	○		
11	明黄褐色	○							

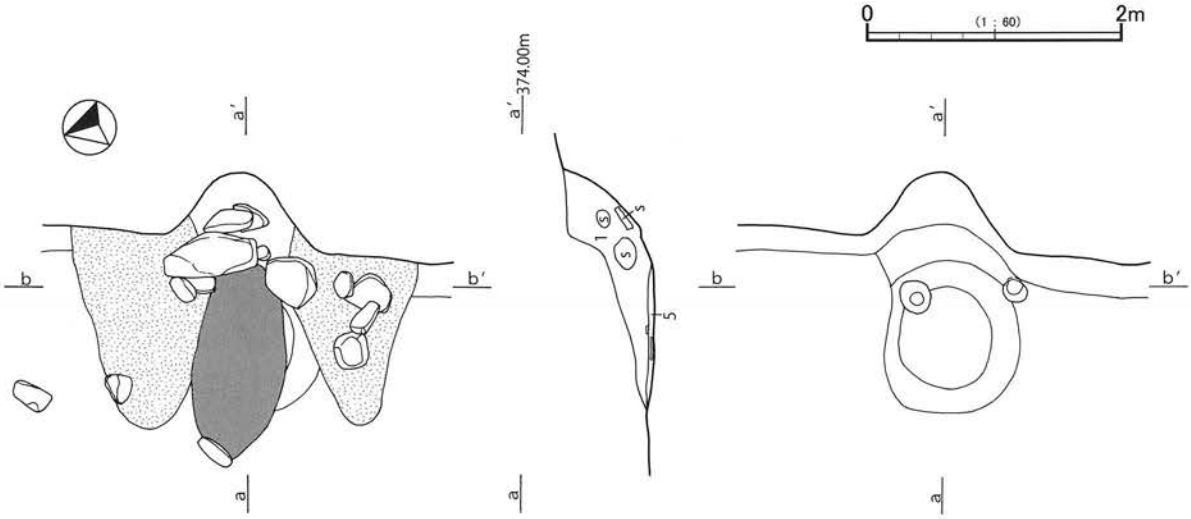


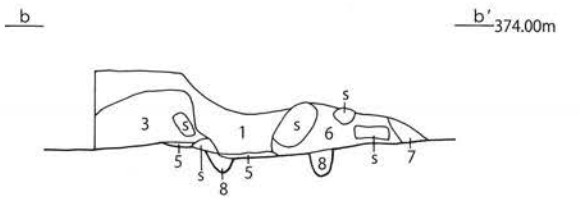
第103図　SI5カマド実測図





No.	色調	締	混入物						備考
			L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	
1	明褐色	○	◎						
2	暗褐色	○	○						
3	暗褐色	○	○	○					
4	暗黄褐色	△	○	○					黒褐色土○

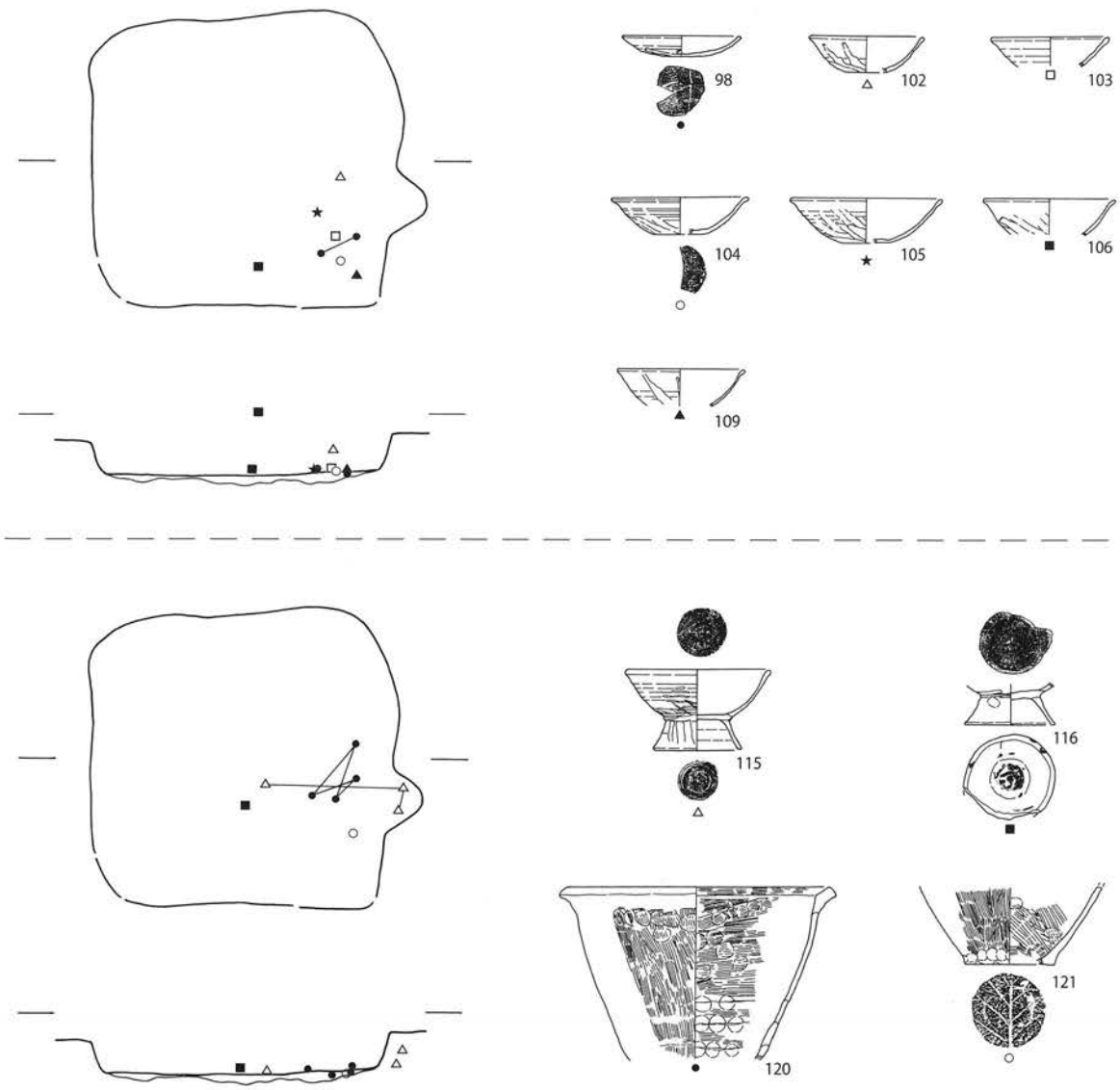




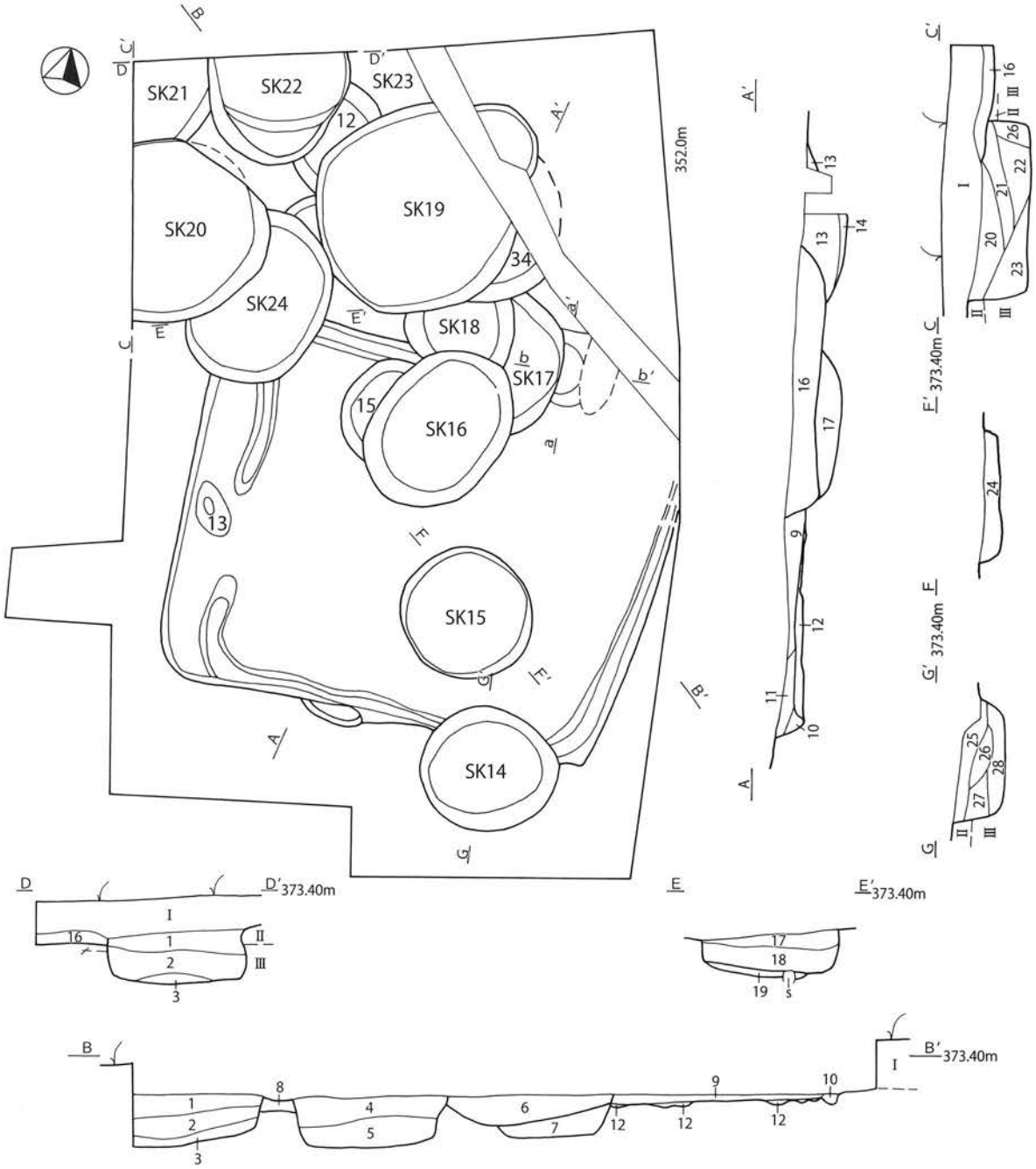
No.	色調	締	混入物						備考
			L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	
1	暗褐色	○	□						
2	暗茶褐色	○	□	□					
3	明黄褐色	◎	○	○					左袖
4	明褐色	◎	○	○					貼床
5	黒褐色	○				□	◎		
6	暗黄褐色	◎	◎	◎					右袖
7	暗褐色	○				□			
8	暗褐色	○	○						

0 (1 : 30) 1m

第104図　SI6・SK10～13実測図、同カマド実測図



第105図　SI6個体別分布図

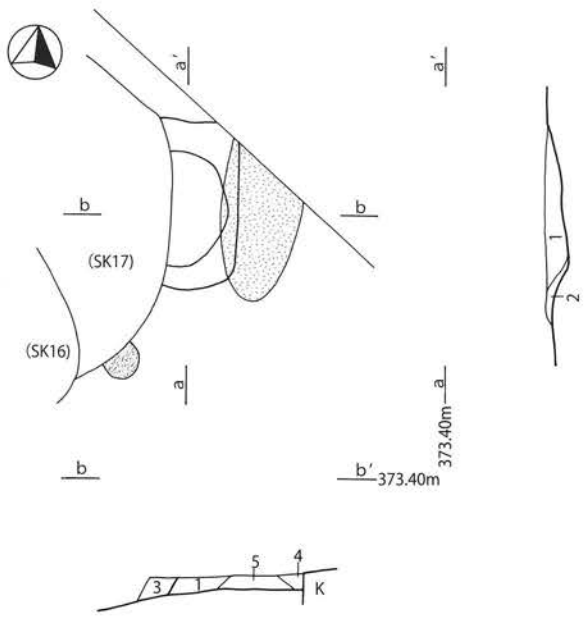


No.	色調	締	混入物						備考
			L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	
1	暗茶褐色	○	△						SK22
2	暗褐色	○	□	△					SK22
3	暗褐色	◎	□						SK22
4	暗褐色	○	□						SK18
5	暗褐色	◎	□	□					SK18
6	暗褐色	○	△						SK17
7	暗褐色	◎	△						SK16
8	暗黄褐色	○	△						SK23
9	明褐色	○	◎	◎					SI7
10	明褐色	○	○	○					SI7
11	黒褐色	○	△						SI7
12	暗褐色	◎						III層B◎	SI7貼床
13	暗褐色	○	□	□					SK19
14	暗褐色	◎	○	○					SK19

No.	色調	締	混入物						備考
			L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	
15	明黄褐色	○	○	○					SK21
16	暗褐色	△		○					SK24
17	暗褐色	○	○						SK24
18	暗黄褐色	◎	○						SK24
19	暗褐色	○	△	△					SK20
20	暗褐色	◎	□	□					SK20
21	暗褐色	○	△	△					SK20
22	暗褐色	◎							SK20
23	暗褐色	△	○	○					SK15
24	明褐色	○	□						SK14
25	明褐色	◎	○	○					SK14
26	明褐色	○	□						SK14
27	明褐色	○	□	□					SK14

0 (1：60) 2m

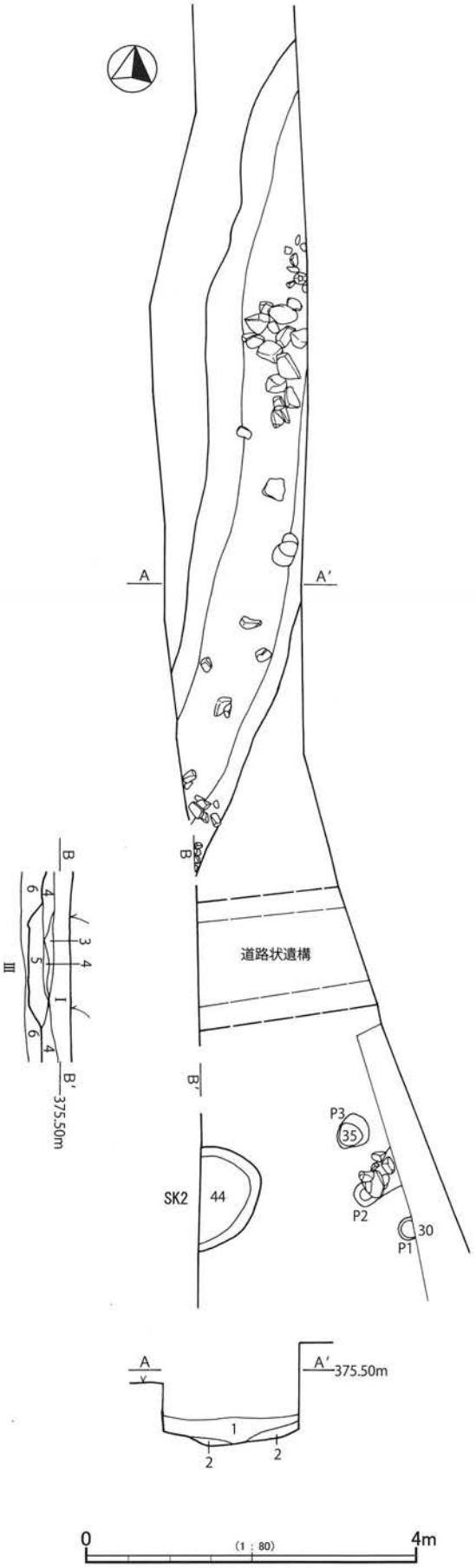
第106図　SI7、SK14～24実測図



No.	色調	締	混入物						備考
			L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	
1	暗褐色	○	□						SK17
2	暗褐色	○				○	□		
3	暗褐色	○	□						
4	暗褐色	○	□			□			
5	明褐色	◎	◎	◎					右袖

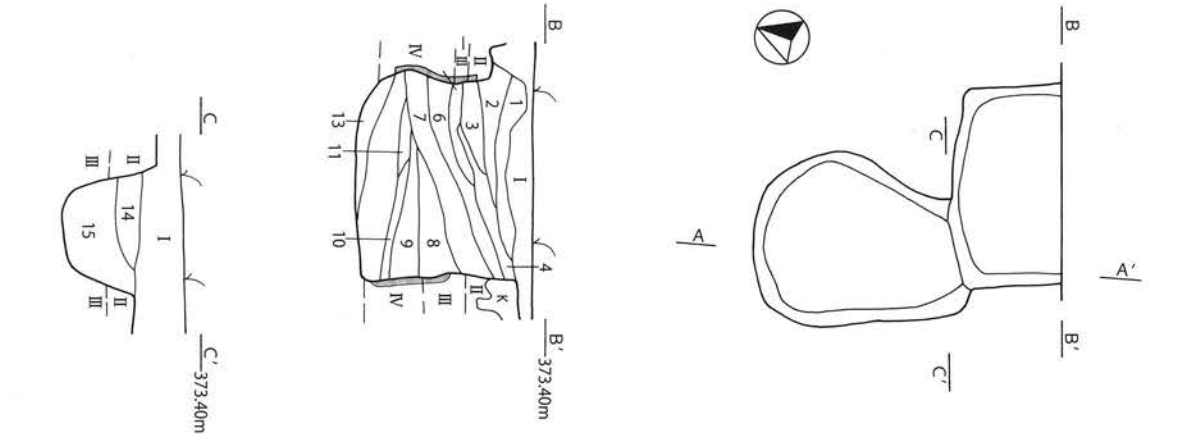
0　(1：30)　1m

第107図　SI7カマド実測図



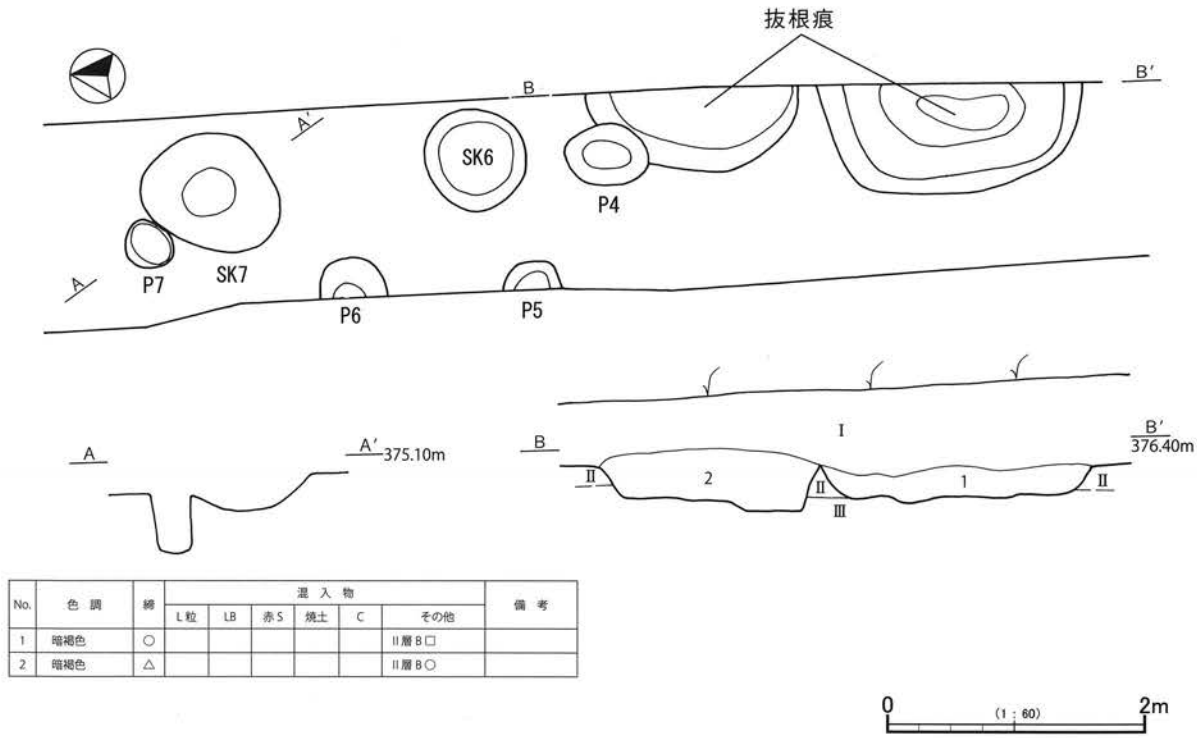
No.	色調	締	混入物						備考
			L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	
1	暗褐色	△	△		□				
2	暗褐色	○	○	○					SD1
3	黄褐色	◎	◎	◎				礫○	ローム主体
4	暗黄褐色	○	△					礫△	
5	暗褐色	◎	○					礫○	
6	暗褐色	△	□	□					

第108図　SD1、SK2、P1～P3実測図



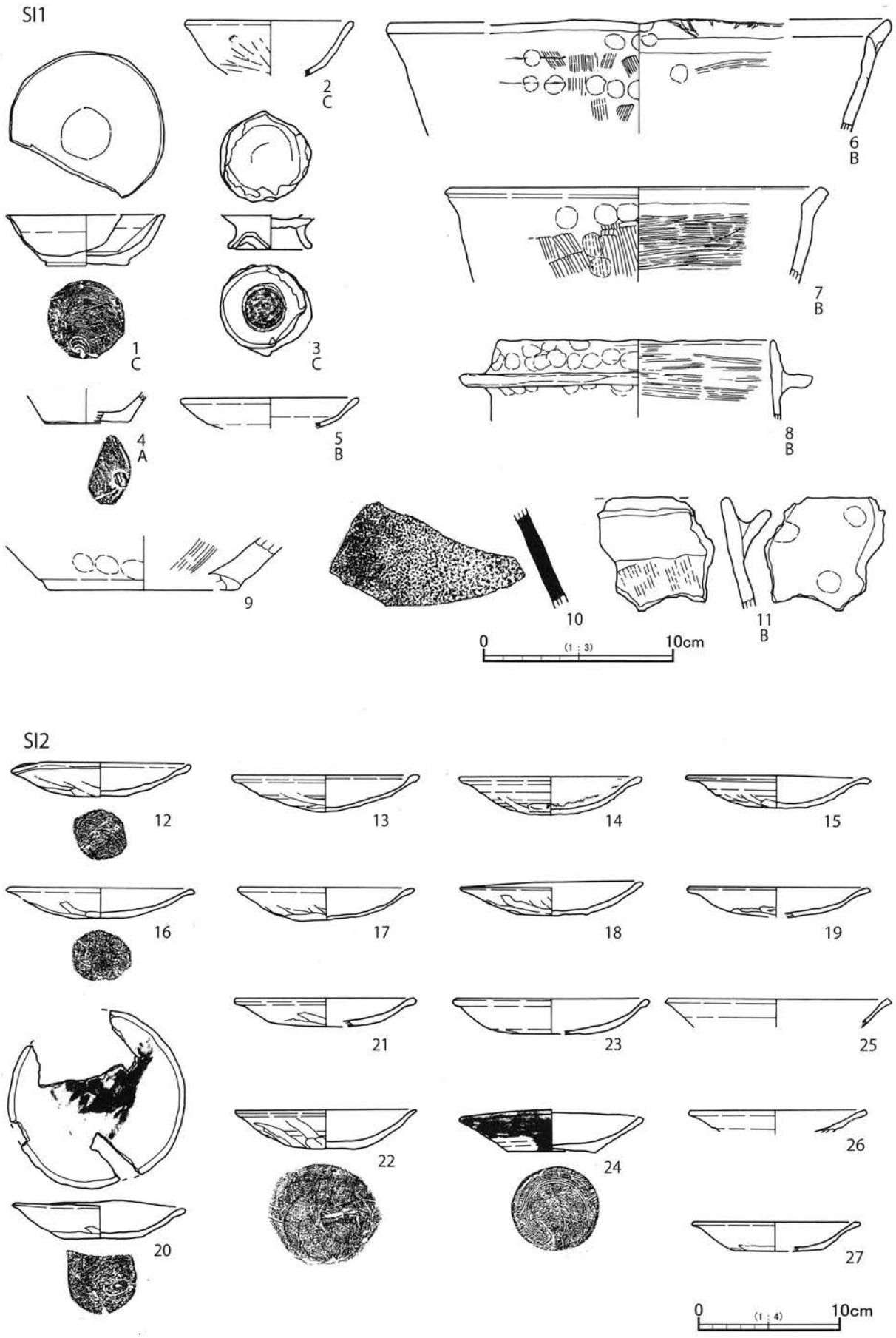
No.	色調	締	混入物						備考
			L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	
1	黄褐色	◎	△						
2	暗褐色	△						小礫○	
3	暗褐色	△						小石○(2より小さい石)	
4	黄褐色	△						小石○(2より小さい石)	
5	暗褐色	○						小石○(2より小さい石)	
6	暗褐色	△	○					小石○(2より小さい石)	
7	黄褐色	○						暗褐色土○	
8	暗褐色	○	○				△		
9	暗褐色	○	□						
10	黄褐色(砂)	○							
11	暗褐色(砂)	○							
12	暗褐色	○				○	○		
13	(炭化層)						◎		
14	黒褐色	○							
15	暗褐色	○						ローム粒○礫□	

第109図　地下式坑実測図

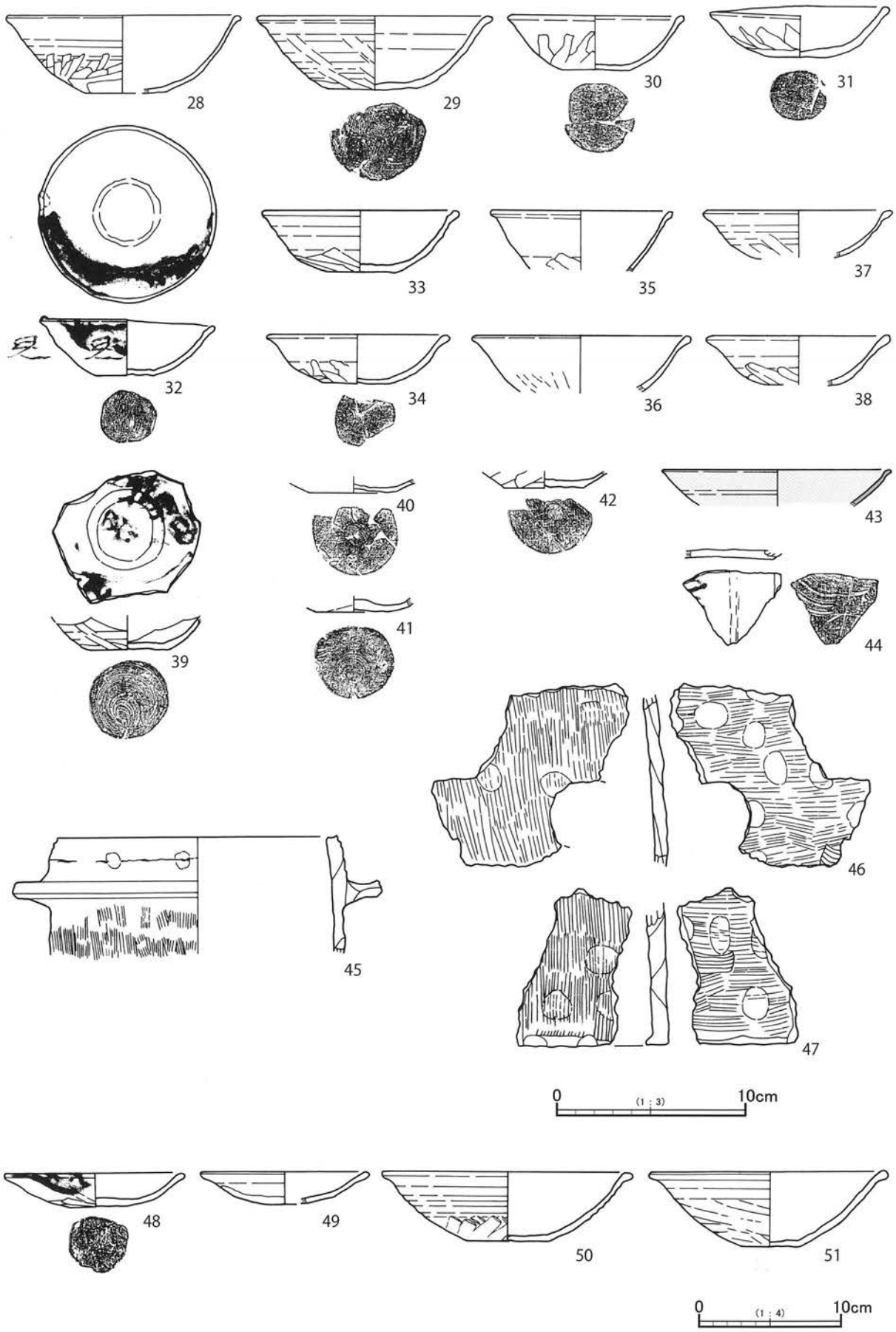


No.	色調	締	混入物						備考
			L粒	LB	赤S	焼土	C	その他	
1	暗褐色	○						II層B□	
2	暗褐色	△						II層B○	

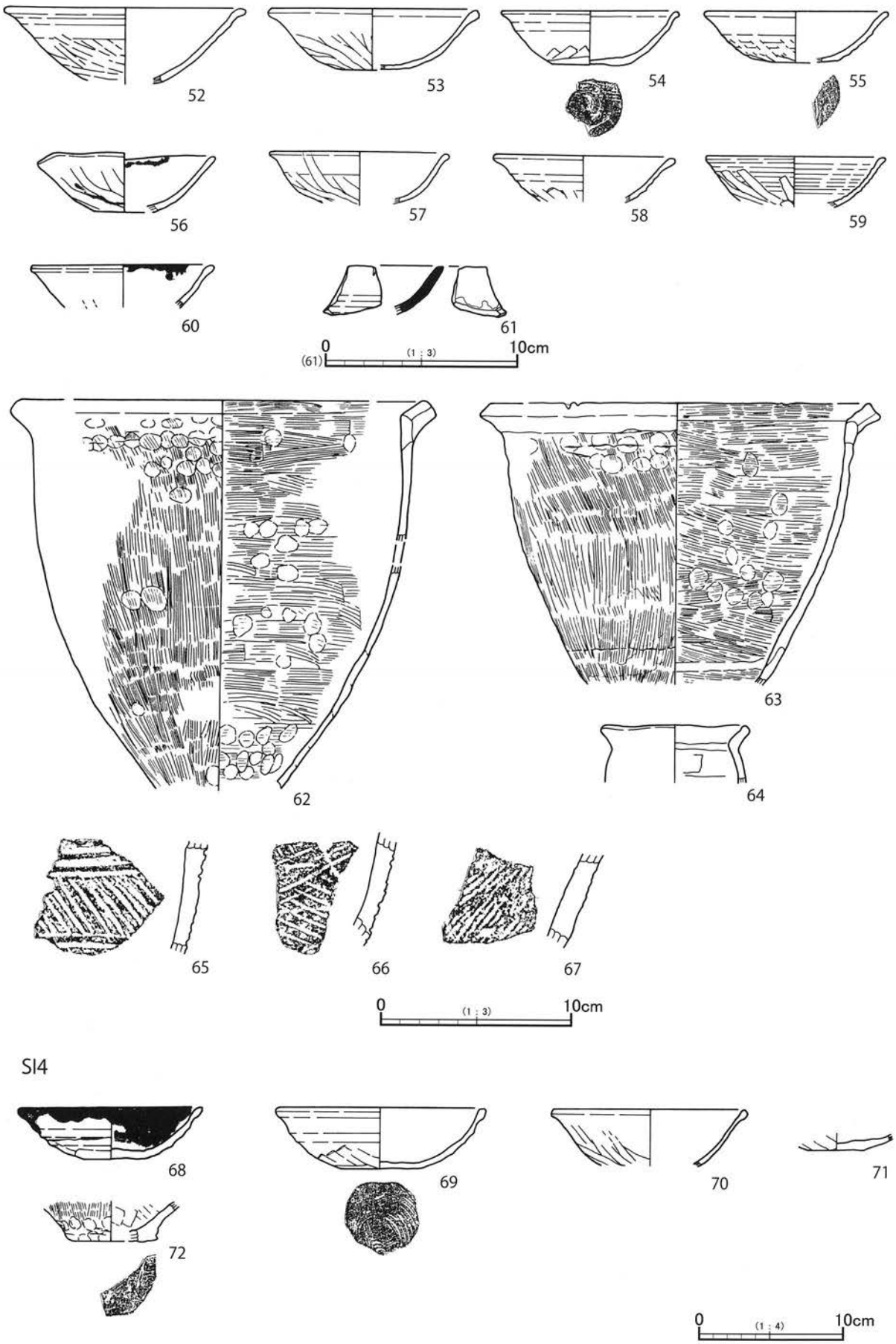
第110図　抜根痕、SK6・7、P4～7実測図



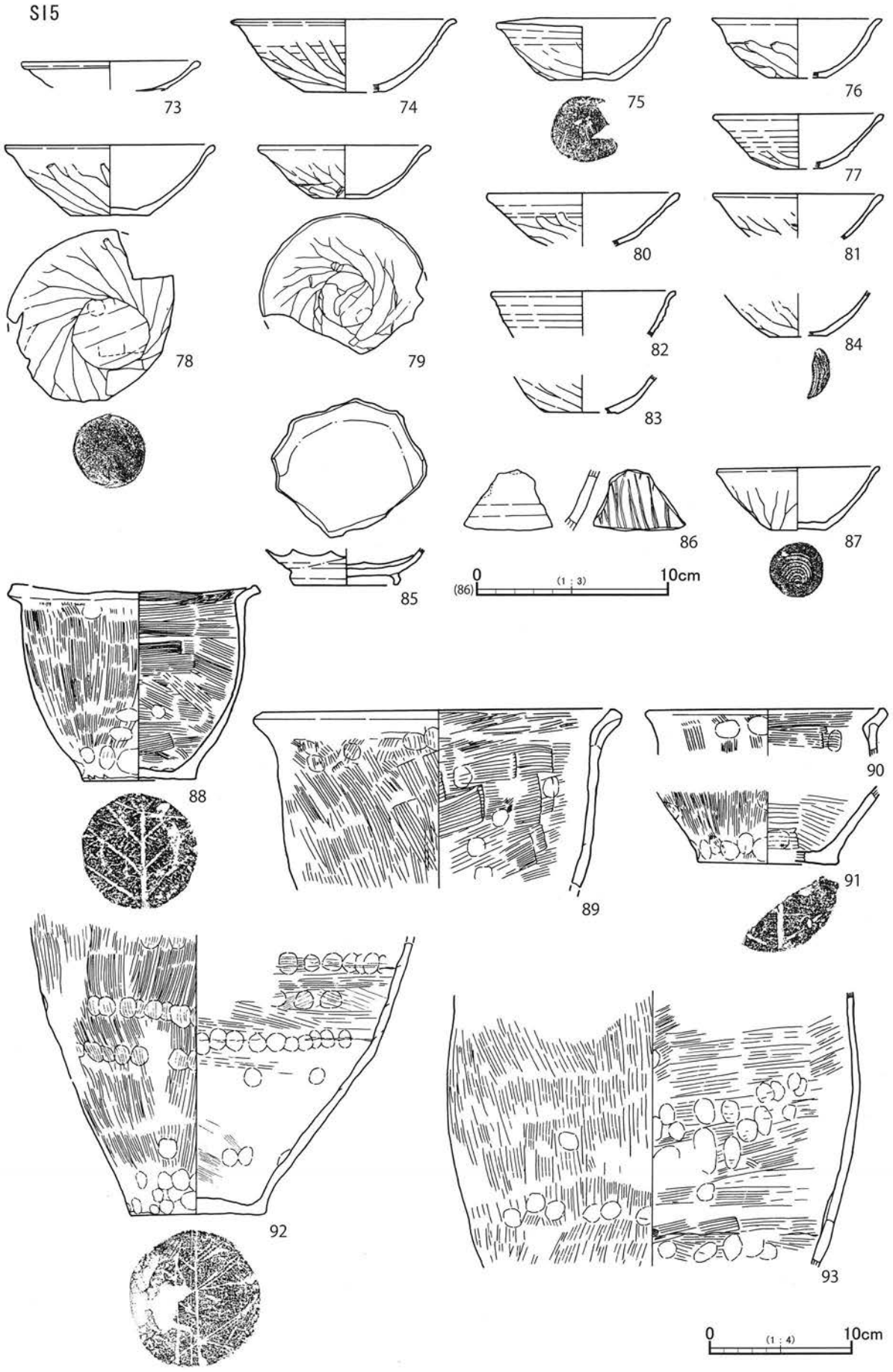
第110図　土器（1）SI1・2①



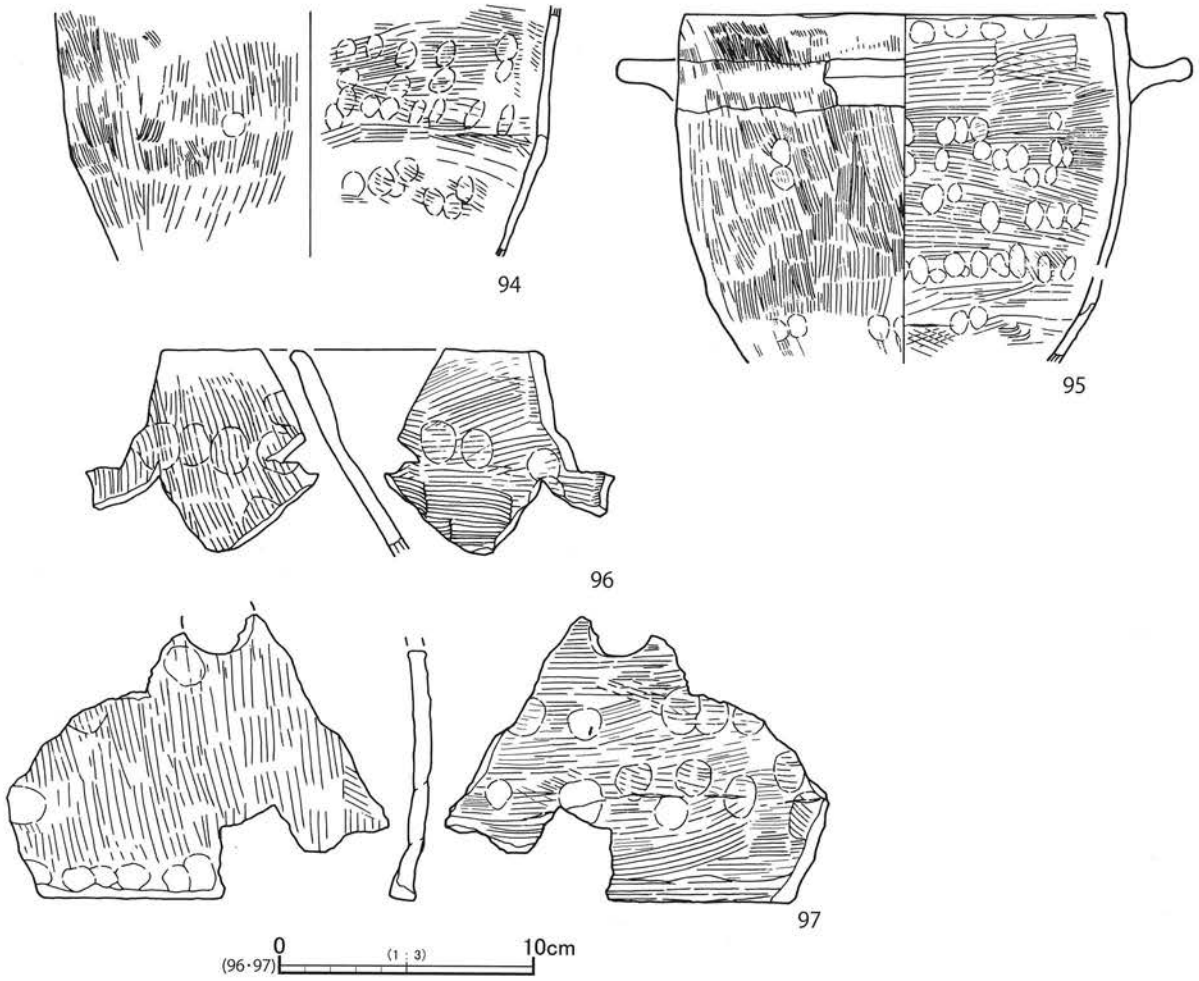
第111図　土器(2) SI2②・3①



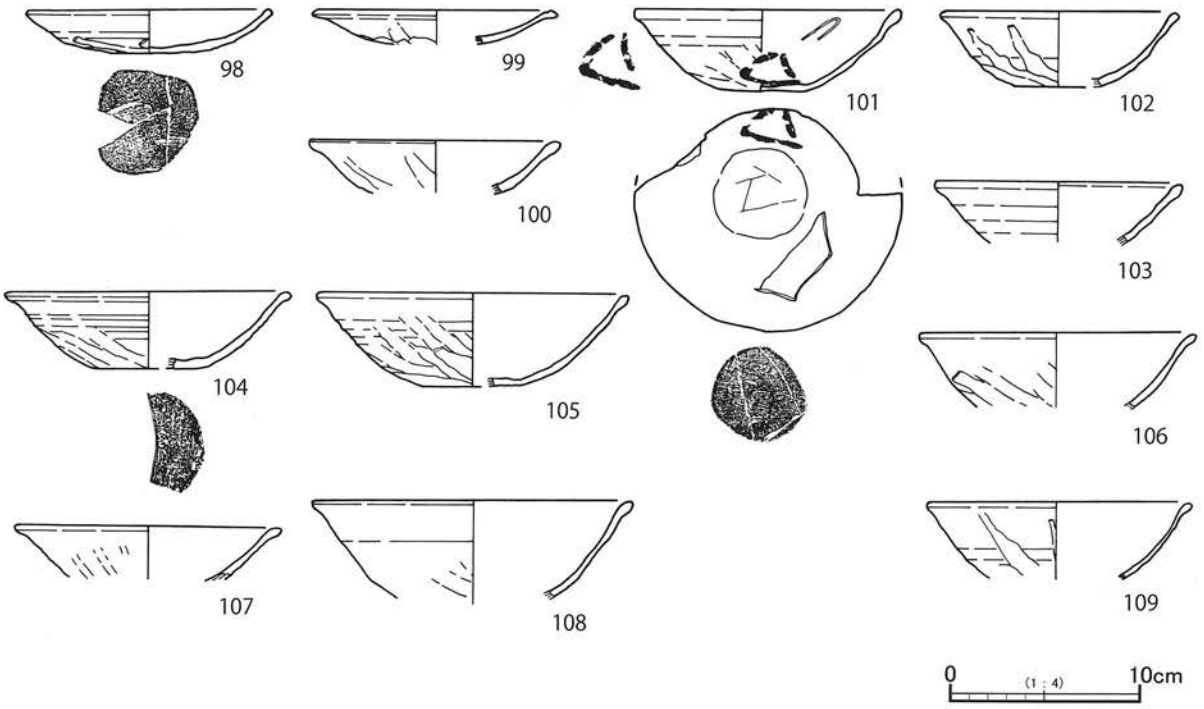
第112図　土器(3) SI3③・4



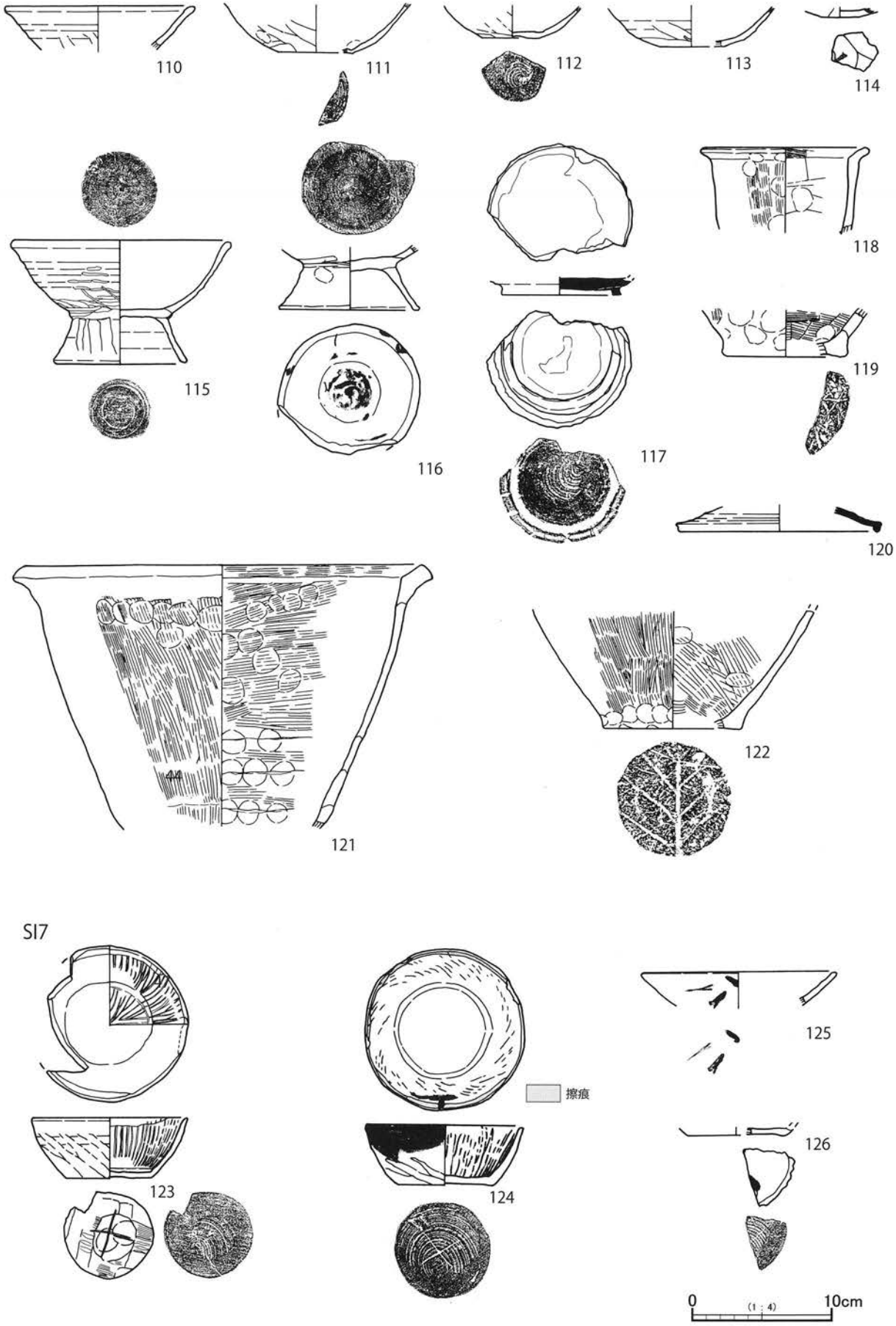
第113図　土器(4) SI5①



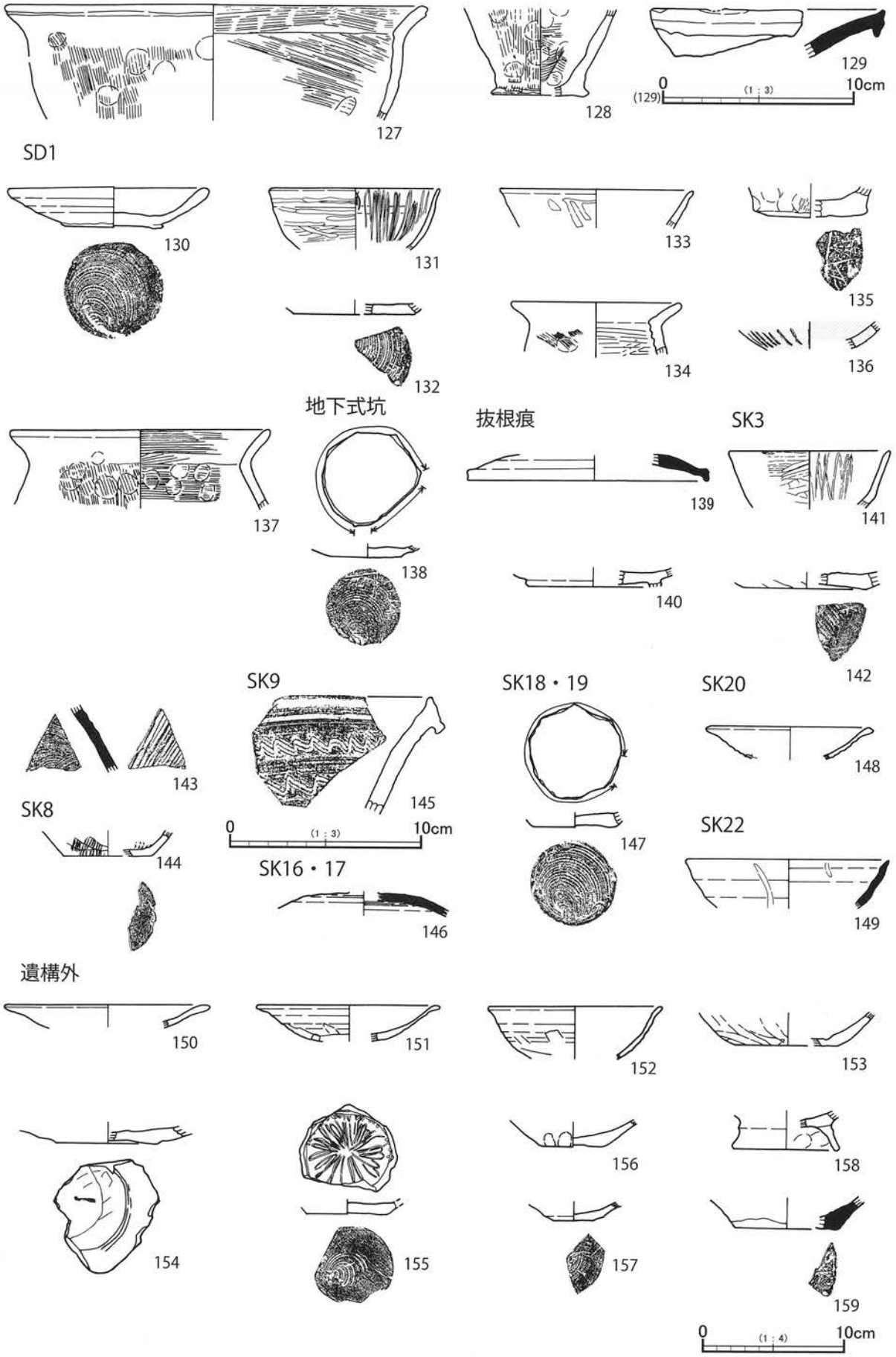
SI6



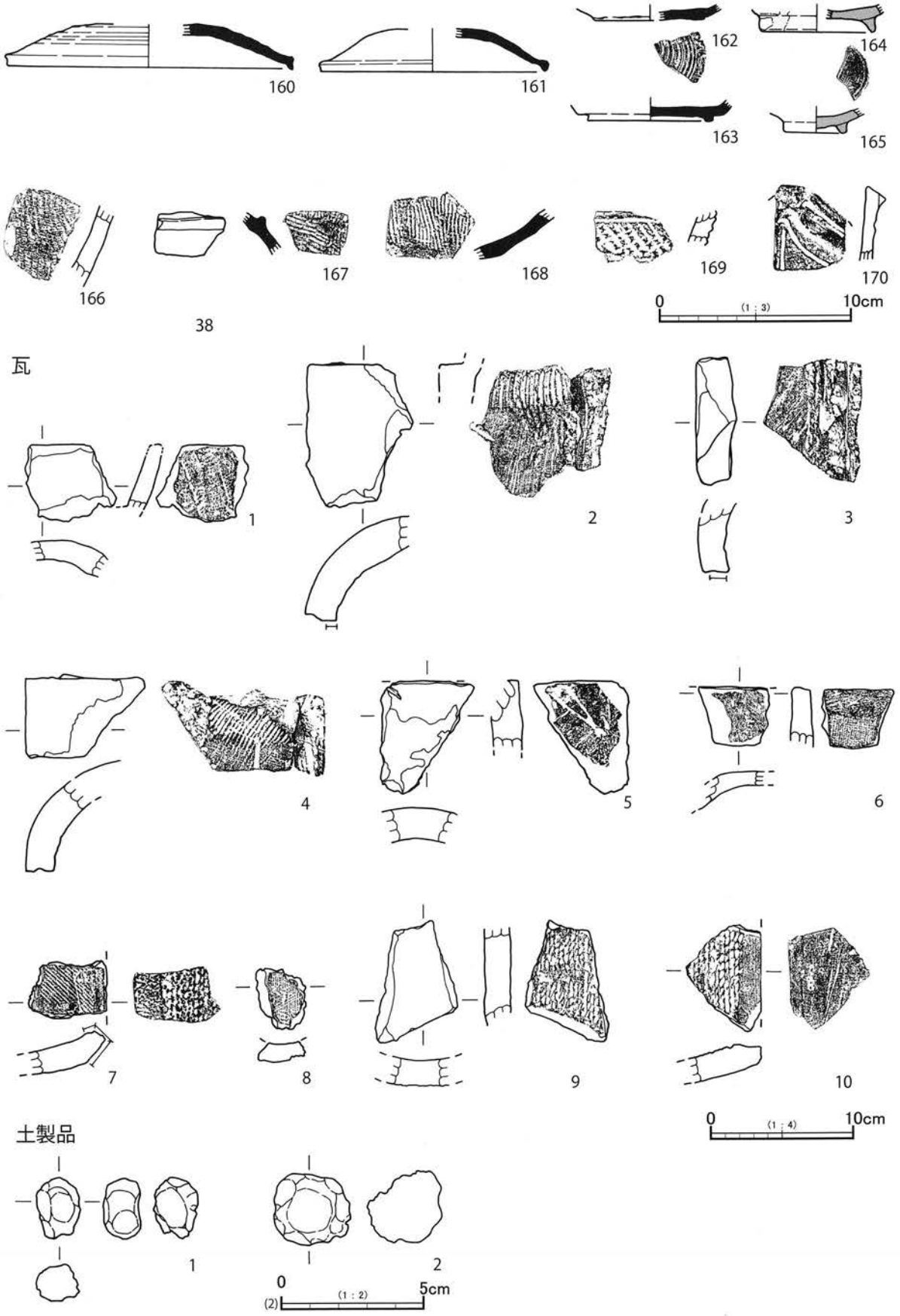
第114図　土器(5) SI5②・6①



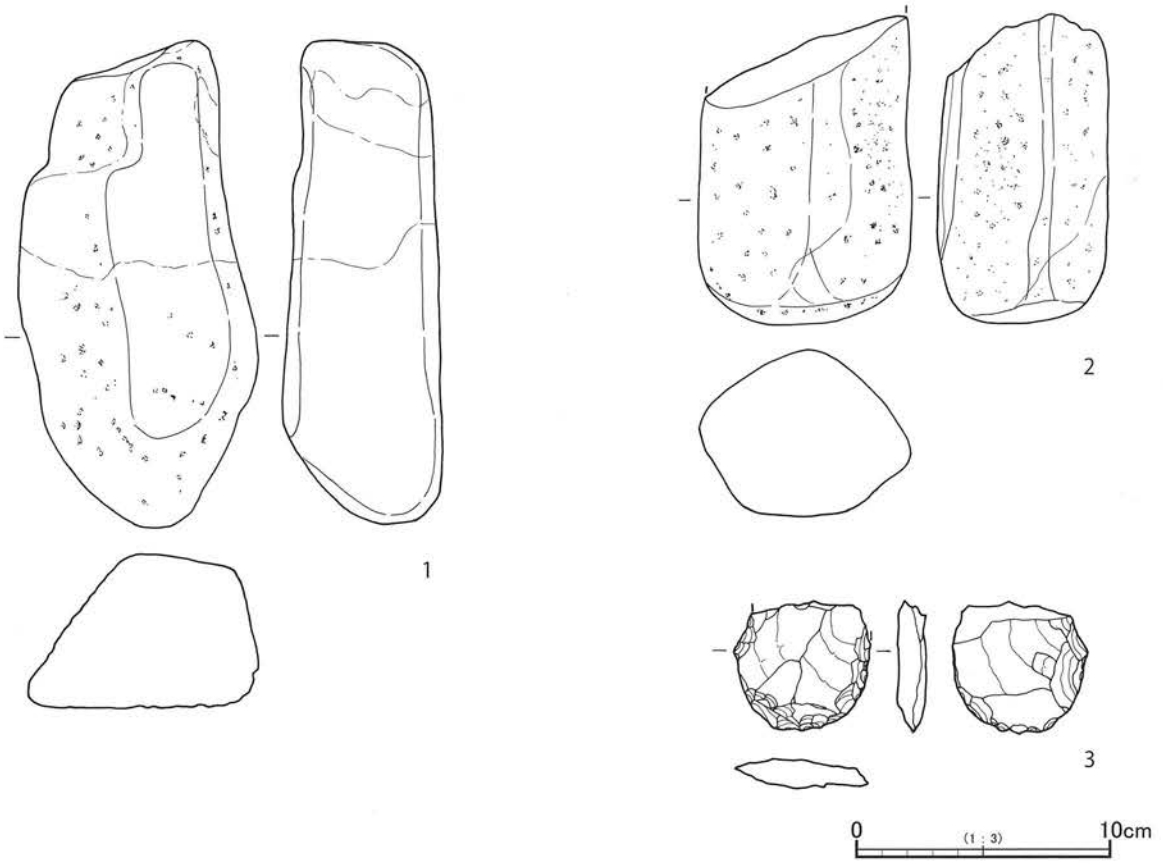
第115図　土器(6) SI6②・7①



第116図　土器（7）SI7②、SD1、SK、遺構外①



第117図　土器(8)遺構外②、瓦、土製品



第118図　石製品

調査着手前　南から

調査区全景　南から

調査区全景　北から

SI1　北から

SI1 カマド　東から

SI1 堀り型　北から

SI2　西から

SI2 掘り型　西から

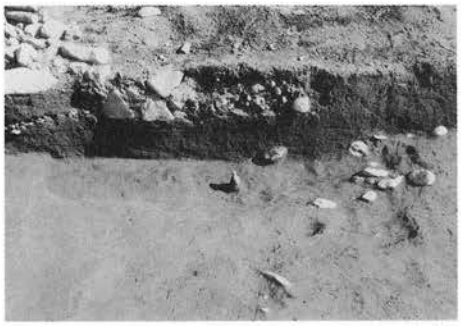
SI3 遺物出土状況　北から

SI3　北から

PL 44　北中原遺跡（第４次）

SI3 カマド　南から

SI3 カマド　西から


SI4　西から

SI4 掘り型　北から

SI5　遺物出土状況　西から

SI5　西から

SI6 遺物出土状況　西から

SI6　北から

SI7　北から

SI7 遺物出土状況　北から

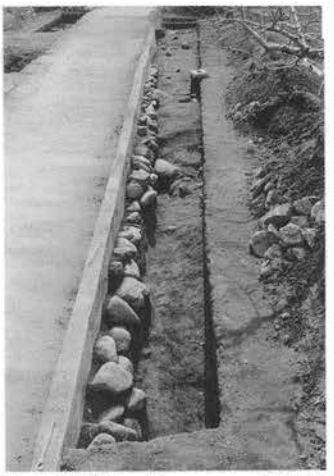
SD1　北から

地下式坑　北から

SK16～19

SK19～24　東から

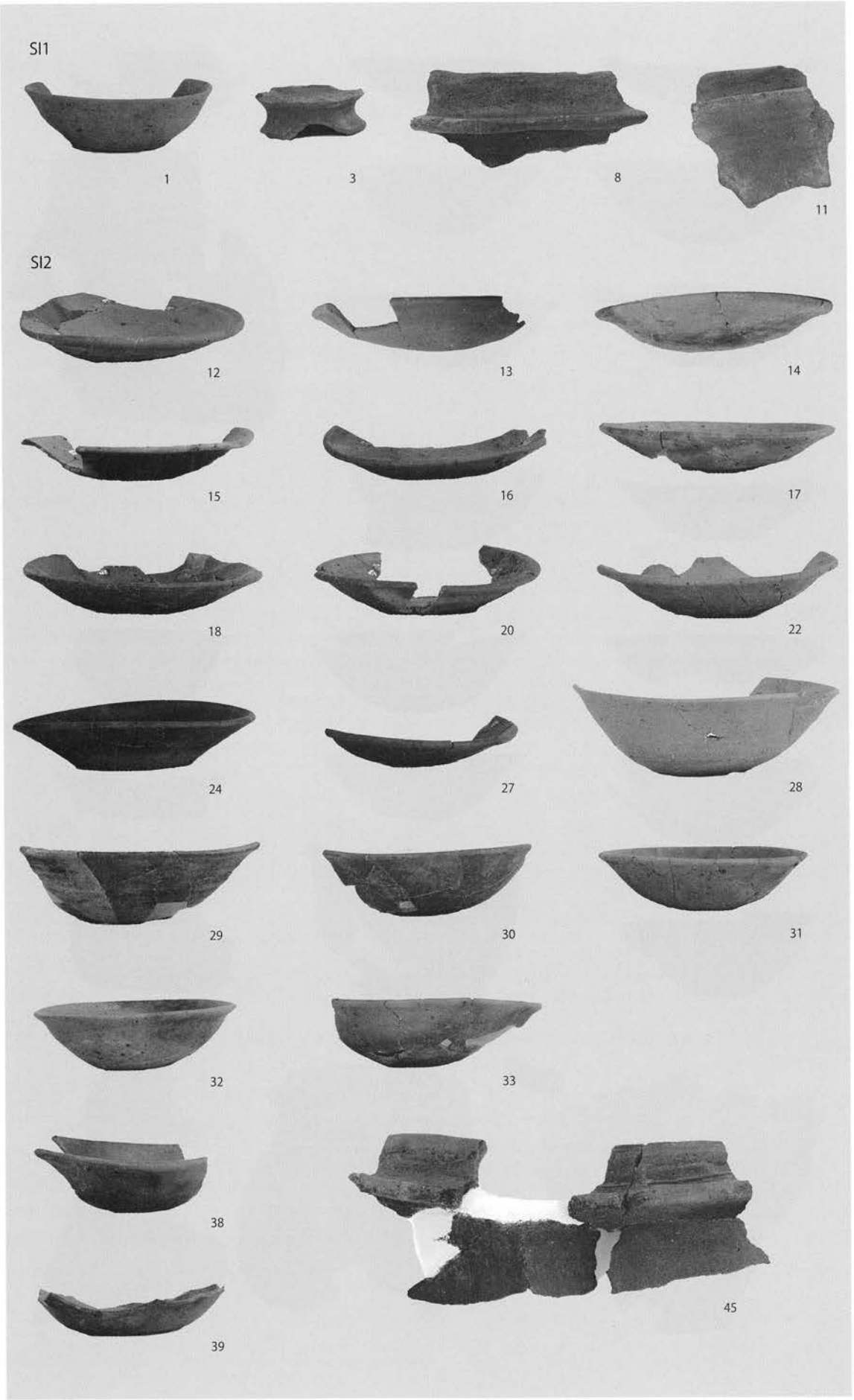
SK16～19　北から

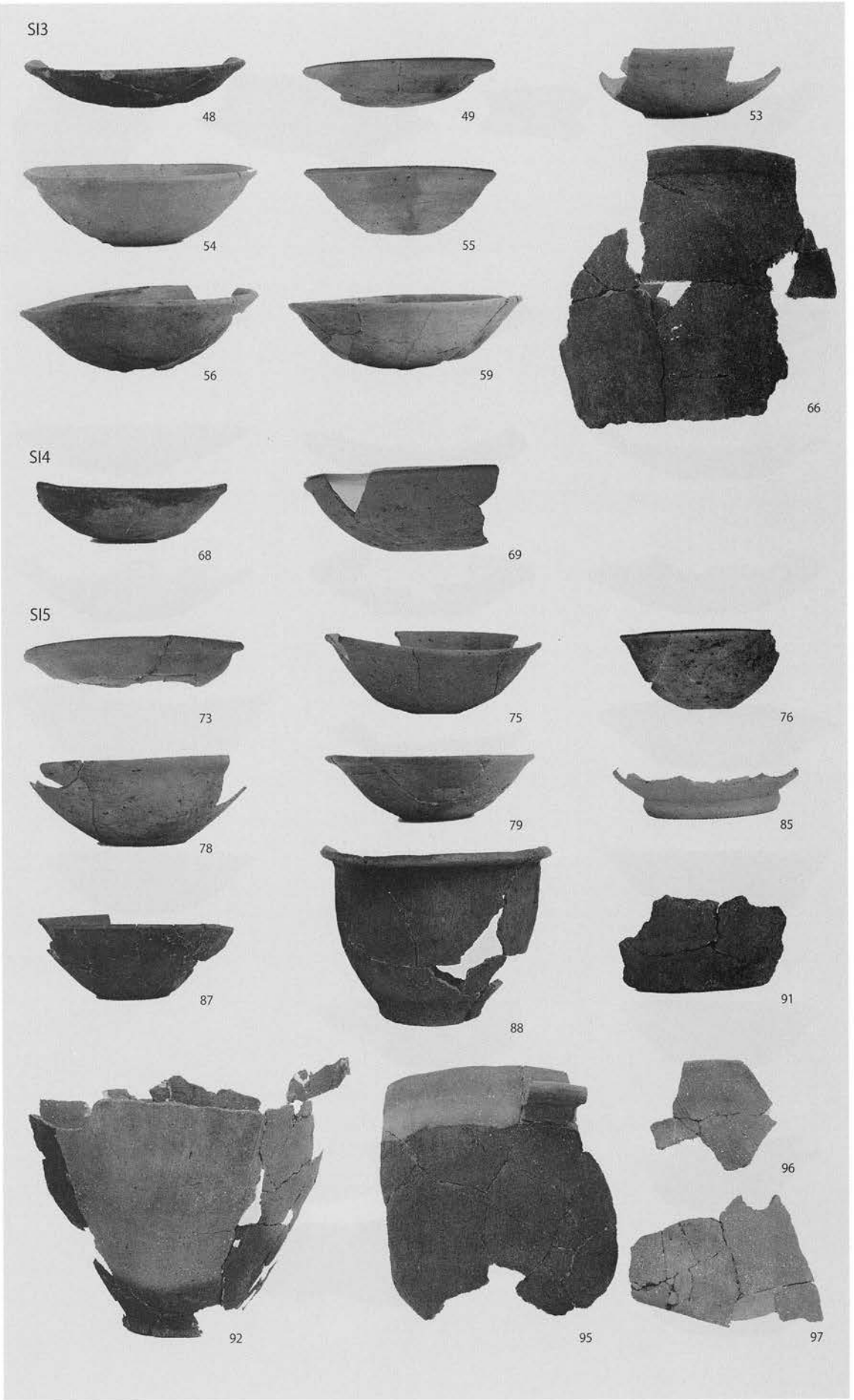

C-1・2グリッド　北から

SD2　北から

D-2・3グリッド　北から

PL 46　北中原遺跡（第4次）




SI3
48
49
53
54
55
56
59
66
SI4
68
69
SI5
73
75
76
78
79
85
87
88
91
92
95
96
97

PL 48　北中原遺跡（第4次）

SI6

98

101

104

115

120

SI7

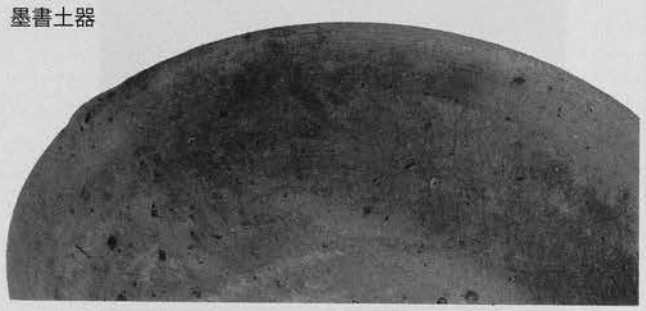
122

123

116

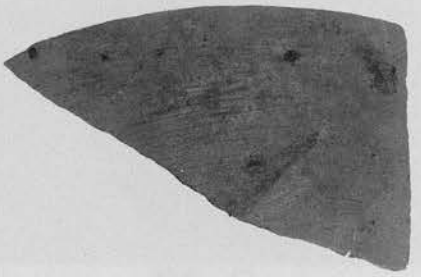
127

墨書土器

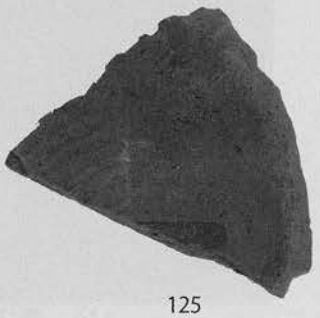

32

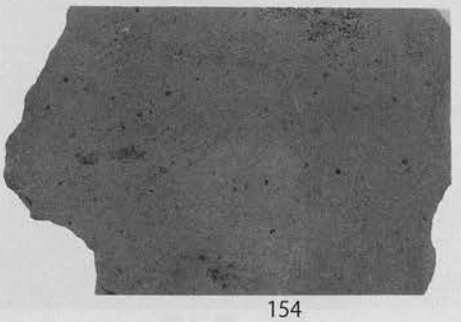
44

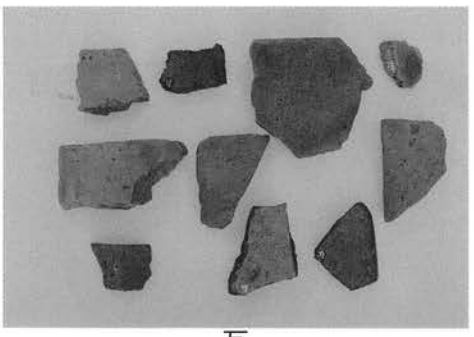
101


124

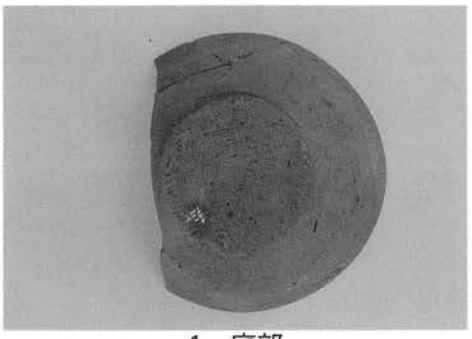
114


125

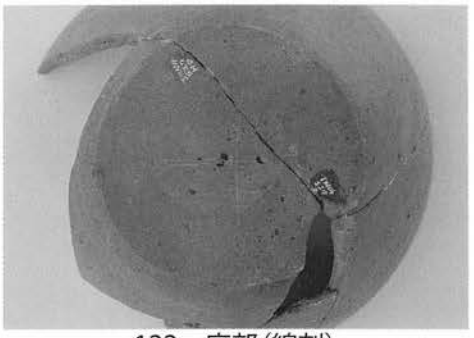

154


瓦

石製品

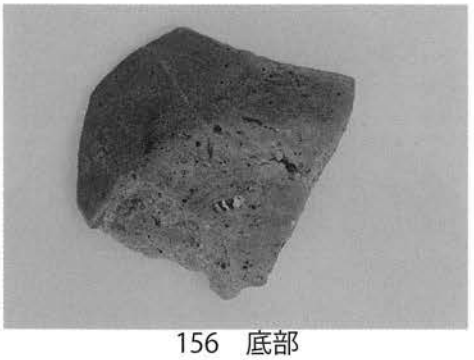

1　底部

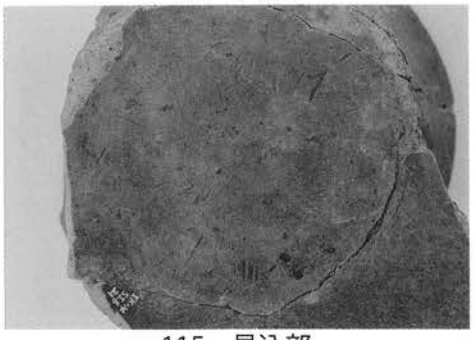
24　底部


122　底部(線刻)

123　底部(線刻)

42　底部


156　底部


115　見込部

116　見込部

附編1　笛吹市一宮畑総末木地区金属分析調査

JFEテクノリサーチ株式会社
分析・評価事業部　埋蔵文化財調査研究室

1．はじめに

山梨県笛吹市教育委員会から笛吹市一宮畑総末木地区に所在する石動遺跡、北中原4次遺跡から出土した鉄関連遺物について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査を依頼された。調査の観点として、出土鉄滓の化学成分分析、外観観察、ミクロ組織観察、X線回折、耐火度に基づき、資料の製造工程上の位置づけおよび始発原料などを中心に調査した。その結果について報告する。

2．調査項目および試験・観察方法

(1)　調査項目

調査資料の記号、出土遺構・注記および調査項目を表1に示す。

(2)　調査方法

(i)重量計測、外観観察および金属探知調査

資料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点2位で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に、資料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。資料の出土位置や資料の種別等は提供された資料に準拠した。

着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、6mmを1単位として35cmの高さから吊した磁石が動きは始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機（MC：metal checker）を用いて調査した。金属検知にあたっては参照標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱（1.5mm φ x1.5mmH、2.0mm φ x2.0mmH、3.8mm φ x3.8mmH、5mm φ x5mmH、10mm φ x10mmH、16mm φ x16mmH、20mm φ x20mmH、30mm φ x30mmH）を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

(ii)化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

・全鉄（T.Fe）：三塩化チタン還元－二クロム酸カリウム滴定法。
・金属鉄(M.Fe)：臭素メタノール分解－EDTA滴定法。
・酸化第一鉄(FeO)：二クロム酸カリウム滴定法。
・酸化第二鉄(Fe2O3)：計算。・化合水(C.W.)：カールフィッシャー法。
・炭素(C)、イオウ(S)：燃焼－赤外線吸収法。
・ライム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化マンガン(MnO)、酸化ナトリウム(Na2O)、珪素(Si)、マンガン(Mn)、リン(P)、銅(Cu)、ニッケル(Ni)、コバルト（Co）、アルミニウム(Al)、ヴァナジュム(V)、チタン(Ti)：ICP発光分光分析法。
・シリカ(SiO2)、アルミナ(Al2O3)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、二酸化チタン(TiO2)、酸化リン(P2O5)、酸化カリウム(K2O)：ガラスビード蛍光X線分析法。但しCaO, MgO, MnOは含有量に応じてICP分析法またはガラスビード蛍光X線分析法を選択。
・酸化ナトリウム(Na2O)：原子吸光法。なお、鉄滓中成分は、18成分（全鉄T.Fe、金属鉄M.Fe、酸化第一鉄FeO、酸化第二鉄Fe2O3、シリカSiO2、アルミナ

Al2O3、ライムCaO、マグネシアMgO、酸化ナトリウムNa2O、酸化カリウムK2O、二酸化チタンTiO2、酸化マンガンMnO、酸化リンP2O5、コバルトCo、化合水C.W.、炭素C、ヴァナジウムV、銅Cu）を化学分析している。分析は各元素について分析し、酸化物に換算して表示している。

羽口・胎土成分は、13成分（全鉄T.Fe、酸化鉄FeO、シリカSiO2、アルミナAl2O3、ライムCaO、マグネシアMgO、化合水C.W.、灼熱減量Ig. Loss、二酸化チタンTiO2、酸化マンガンMnO、酸化ナトリウムNa2O、酸化カリウムK2O、炭素C、）を化学分析している。なお、粘土については産地検討のためルビジュウムRb　とストロンチュウムSrについても分析した。

鉄製品中成分の化学分析は、13成分（炭素C、シリコンSi、マンガンMn、リンP、イオウS、銅Cu、ニッケルNi、コバルトCo、アルミニウムAl、ヴァナジウムV、チタンTi、カルシウムCa、マグネシウムMg）を化学分析している。

（ⅲ）顕微鏡組織観察

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上げ）する。炉壁・羽口・粘土などの鉱物性資料については顕微鏡で観察しながら代表的な鉱物組織などを観察し、その特徴から材質、用途、熱履歴などを判断する。滓関連資料も炉壁・羽口などと同様の観察を行うが特徴的鉱物組織から成分的な特徴に結びつけ製・精錬・鍛造工程の判別、使用原料なども検討する。金属鉄はナイタール（5％硝酸アルコール液）で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物（不純物、非金属鉱物）の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍および400倍で撮影を行う。必要に応じて実体顕微鏡（5倍～20倍）による観察もする。

（ⅳ）X線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射（回折）された特性X線を検出（回折）できることを利用して、試料中の未知の化合物を同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。

測定装置　理学電気株式会社製　ロータフレックス（RU-300型）

測定条件

①	使用X線	Cu- Kα（波長＝1.54178Å）
②	Kβ線の除去	グラファイト単結晶モノクロメーター
③	管電圧・管電流	55kV・250mA
④	スキャニング・スピード	4.0°/min
⑤	サンプリング・インターバル	0.020°
⑥	D.S.スリット	1°
⑦	R.S.スリット	0.15mm
⑧	S.S.スリット	1°
⑨	検出器	シンチレーション・カウンター

（ｖ）耐火度試験

耐火物及び耐火物原料の耐火度試験は、JIS R 2204（耐火物及び耐火物原料の耐火度試験方法）及びJIS R 8101（耐火度試験用標準コーン）に準拠して測定する。

遺物資料を粉砕し、規定（量的に少量であるから寸法は第2種の小型：幅7mm、高さ27mm）のゼーゲルコーンを成型する。このゼーゲルコーンを傾斜80°で受台に装着し、毎分5℃で加熱する。コーンの先端が曲がり始め、受台に接触したときの温度を耐火度とする。

なお、耐火度を測定していない資料については146資料の耐火度（ゼーゲルコーン溶倒温度）の試験結果をについて整理した下記の式により推算した。耐火度は、y = 110.98 f(x)+927.82 の関係が得られた。ここで、f(x)=(25.8Al2O3+5.2SiO2)/(146MgO+448MnO+12.5T.Fe+10.4TiO2+78.6CaO)

3．調査結果および考察

分析調査結果を図表にまとめて240頁～242頁に示す。表1に調査資料と調査項目をまとめた。表2～表4に資料の化学成分分析結果を、表5にX線回折結果、表6に耐火度測定結果をそれぞれ示す。

全資料の外観写真を237頁～238頁に、鉱物組織の英文、化学式は一括して5．参考に示した。

各資料の調査結果をまとめ、最も確からしい推定結果を最後にまとめる。以下、資料の番号順に述べる。

資料番号No.1　炉壁付着滓、着磁度：0、メタル反応：無し

外観：外観を外観写真1に示す。重量12.7g、長さ46.5mm、幅25.7mm、厚さ17.3mm。流動の先端が、2又に分かれたガラス質の流動滓である。滓そのものは黒色のガラス質で、表面に暗褐色の泥土が薄く付着している。下面は床の形状を映し直径25mm位に湾曲し、その表面には小さな気泡が見られる。割欠面は3ヶ所あり断面で見ると0.5mm以下の気泡が多く見られる。また断面には微細な乳白色の長石類と思われる粒子が多く巻き込まれている。着磁はなくメタル反応もない。調査試料は試料採取位置1に示すように中央付近から切断し、採取した。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を滓組織写真1に示した。写真に見られるように大小の気泡が多く観察される発泡したガラス質である。非常によく融けたことは明らかである。白く輝く微細な金属鉄粒が無数に分散している。金属鉄はほぼ完全な球形になっていることから鉄の融点1500℃近くまで温度が上がっていたと推察される。

化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。全鉄分は7.17％と鉄滓としては少ない。金属鉄は1.11％と少ないがT.Feが7.17％に対する比率は大きい。FeOは5.49%、Fe2O3は2.56%である。ガラス質滓であることを反映し、SiO2は60.8％と多く、Al2O3も18.6％と多く含まれる。CaO、MgOも3.03％、2.71％で比較的多い。造滓成分（SiO2+Al2O3+CaO+ MgO+K2O+Na2O）は88.76％である。TiO2は0.87％含まれている。T.Feに対するTiO2の高さからは始発原料は砂鉄の可能性があるが、表3の胎土類の成分でもT.FeとTiO2が滓と同程度に含まれており、胎土成分そのもののに起因する可能性もある。このため、始発原料を砂鉄と判断できない。

図1、2、3はTiO2とT.Feの関係、造滓成分とT.Feの関係、MnO/TiO2とTiO2/T.Feの関係を示し、鉄滓の成分的特徴から製造工程を検討する図である。本資料は図1、図2では炉壁付着滓のグループにある。図3では精錬鍛冶滓群のデータとは外れたMnO/TiO2が高い領域にあり、精錬鍛冶滓とは別なグループの滓と思われる。

以上の結果を総合すると本資料は1500℃位まで温度が上昇し炉壁と反応してガラス質化した炉壁付着滓と推察される。資料の生成した製鉄・鍛冶工程は判断できない。

資料番号No.2　炉壁付着滓、着磁度：2、メタル反応：無し

外観：外観を外観写真2に示す。重量40.8g、長さ58.7mm、幅44.8mm、厚さ33.5mm。激しく発泡した流動滓で基地は黒色のガラス質である。上面には流動の痕跡が見られる。下面には写真に見られるようなヘラ状の工具で突いたような痕もある。小さな木炭痕も3ヶ所ある。破断面で見ると小さな気泡が非常に多くカルメラ状である。このため大きさの割りに軽量である。上の写真の左側には着磁度2の磁着があるが右側にはない。メタル反応はない。着磁のある側を調査する。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を滓組織写真2-1、2-2に示す。資料全面が発泡したガラス質である。写真2-1に見られるようにガラス質の中に部分的に珪石と思われる溶融しかけた耐火材が見られる。資料1と異なり金属鉄粒は観察されない。また、写真2-2のような鉱物粒が観察されるところがあるがほとんど反応しておらず相当高融点の鉱物と思われる。

化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。全鉄は12.4％と鉄滓としては少ない。金属鉄は0.36％である。FeOは8.43%、Fe2O3は7.85%である。ガラス質滓であることを反映し、SiO2は56.0％と多く、Al2O3も17.2％と多く含まれる。CaO、MgOも3.20％、1.91％で比較的多い。造滓成分（SiO2+Al2O3+CaO+MgO+K2O+Na2O）は80.98％である。TiO2は0.77％含まれている。T.Feに対するTiO2は高いが、資料1と同様に胎土類の成分による可能性があり、T.Feに対するTiO2の高さから始発原料を砂鉄と判断する事ができない。

図1、2、3はTiO2とT.Feの関係、造滓成分とT.Feの関係、MnO/TiO2とTiO2/T.Feの関係を示し、鉄滓の成分的特徴から製造工程上の分類を検討する図である。なお、図1、図2では炉壁付着滓のグループにある。図3では精錬鍛冶滓のデータに比べMnO/TiO2が高い領域に外れており、精錬鍛冶滓とは判断できない。

以上の結果を総合すると本資料は炉壁と反応して激しく発泡・ガラス質化した炉壁付着滓と推察される。資料の生成した製鉄・鍛冶工程は判断できない。

資料番号No. 3　炉壁、着磁度：0、メタル反応：無し

外観：外観を外観写真3に示す。重量89.7g、長さ70.8mm、幅56.8mm、厚さ38.2mm。厚さが約35mmの炉壁片で、厚み方向の中央付近まで熱影響を強く受けている。胎土には茍痕が多く見られる。内面側はやや灰白色を帯び小さく発泡している。（下側の写真）全体にやや焼き締まっており、長石類と思われる白濁した0.5ｍｍ以下の粒子が散見される。試料採取位置3に示す被熱を受けてない側から試料を採取する。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を滓組織写真3-1、3-2に示す。溶融しかけた炉壁胎土である。基地は気孔の多い粘土質で長石類などの粒子が混合されている。熱影響の少ない部分を観察したが3-1の写真のように溶融を開始した部分も存在している。顕微鏡観察では珪石よりも長石類が多く混合されているように思われる。

X線回折：結果を表5とX線回折チャート1（資料No.3）に示す。石英（Quartz：SiO2）が強い回折線を示し、ハーシナイト（Hercynite：FeO・Al2O3）の弱い回折線が認められる。そのほかには、アノーサイト（Anorthite：(Ca,Na)（Si,Al）4O8）、ムライト（Mullite：3Al2O3・2SiO2）、金属鉄、コージェライト（Cordierite：2MgO・2Al2O3・5SiO2）の微弱な回折線が見られる。いずれも一般的な胎土の鉱物相である。

化学成分：化学成分分析結果を表3に示す。SiO2は62.4％で炉壁胎土としてはやや低い。耐火度に有利に働くAl2O3は19.0％とやや多く含まれる。耐火度に不利な軟化性成分であるCaO、MgOも1.55％、1.32％でCaO+MgOは2.87％でやや多い。また、融点を下げるアルカリ金属であるK2O、Na2Oは1.94％、1.02％含まれ、K2O+Na2Oは2.96％で通常の耐火材の範囲にある。耐火度に不利な全鉄は7.64と相当多く含まれている。金属鉄がふくまれているのは鉄滓が少量反応しているためとおもわれる。造滓成分（SiO2+Al2O3+CaO+MgO+K2O+Na2O）は87.23％である。

耐火度：耐火度は表6に示すように約1110℃である。Al2O3が高い割りには耐火度が十分高くないのは全鉄分やアルカリ土類成分などの軟化性成分が多いためであろう。推算耐火度は1108℃で実測値とほぼ一致している。

以上の結果を総合すると本資料はSiO2を62.4％、Al2O3を19.0％含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が1110℃の炉壁胎土である。

資料番号No. 4　鋳型、着磁度：0、メタル反応：無し

外観：外観を外観写真4に示す。内面ににぶい銀色の微粒子が1.5～2mmの厚さに塗布されている厚さ約15mmの鋳型片である。胎土は茶褐色の粘土で苫痕が多く見られる。内面の塗布材表面には掃目も見られる。塗布材を剥して鋳型材と別々に調査する。耐火度は茶褐色の鋳型材についてのみ行う。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を組織写真4-1、4-2に示した。4-1は鋳型の外側の褐色の胎土部分で、4-2は銀色の塗布材部分である。鋳型の茶褐色をしている胎土部分は写真に見られるように非常によく溶融しており半透明なガラス質になっている。この中に未溶融の石英や長石の粒子が散見される。ほとんど気泡は観察されない。塗布材の部分である写真4-2ではわずかに溶融しかけている部分もあるが基本的には固体状態を維持しており大小の粒子が弱く固結している状態である。溶融状態の観点からは塗布材の方が明らかに融点は高く、融けにくいと判断される。

X線回折：結果を表5とX線回折チャート2、3（資料No.4-1、4-2）に示す。胎土部分の試料4-1と塗布材と見られる試料4-2ではX線回折結果はほぼ同一であり、鉱物相はほぼ同一と判断される。石英（Quartz：SiO2）とアノーサイト（Anorthite：(Ca,Na)（Si,Al）4O8）が強い回折線を示し、ヘマタイト（Hematite：Fe2O3）、金属鉄、コージェライト（Cordierite：2MgO・2Al2O3・5SiO2）の微弱な回折線が見られる。

化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。試料4-1と4-2で基本的な差は見られない。SiO2は試料4-1で62.7％、試料4-2では60.1％で通常の炉壁胎土に比べ低い。耐火度に有利に働くAl2O3は試料4-1で16.0％、試料4-2では17.4％でやや試料4-2の方がやや多く含まれる。耐火度に不利な軟化性成分であるCaO、MgOも試料4-1で2.89％と1.97％で試料4-2では3.02％と2.18％で両者に差があるとはいえない。CaO+MgOは4.86％と5.20％でいずれも高く、軟化性の点では不利な成分である。融点を下げるアルカリ金属であるK2O、Na2Oは試料4-1で1.26％と1.77％で試料4-2では1.41％と1.73％で差はない。K2O+Na2Oは3.03％と3.14で通常の耐火材の範囲にある。耐火度に不利な全鉄は7.39と7.97と多く含まれている。造滓成分（SiO2+Al2O3+CaO+MgO+K2O+Na2O）は86.59％と85.84％である。化学成分的には鋳型材と塗布材の間に大きな差はない。化学分析用に粉末にした試料も4-1は茶褐色で、4-2は白を帯びた薄褐色で、明瞭な差がある。念のため、蛍光X線分析にて成分を分析チェックしたが大きな差はなかった。

耐火度：試料4-1の耐火度は表6に示すように約1070℃である。耐火材としてはやや低いと思われる。推算耐火度は1047℃で実測値と30℃以内で一致している。

外観観察と顕微鏡観察では鋳型の母材と塗布材とでは色、溶融性に差が認められたが化学成分的には顕著な差は認められない。この理由はあきらかでない。

以上の結果を総合すると本資料は溶融性に勝る塗布材を塗布した鋳型で鋳型の母材の耐火度は1070℃で耐火材料としてはやや耐火度が低い。塗布材と耐火材の成分的な大きな差は認められない。

資料番号No. 5　炉壁（滓付着）、着磁度：3、メタル反応：5mm大

外観：外観を外観写真5に示す。重量314.9g、長さ136.0mm、幅74.2mm、厚さ49.1mm。黒色の滓が厚さ10mm～15mmに付着して発泡している炉壁片である。滓部分には所々に鉄銹の暗い茶褐色（いわゆる黒銹）部が観察される。その1ヶ所に5mm大のメタル反応がある（試料採取位置5を参照）。炉壁胎土は灰色で、苫痕も認められる。メタルは小さいため顕微鏡観察のみ行う。胎土部分、滓部分それぞれ調査し、胎土については耐火度も測定する。試料は採取位置5に示す位置から採取した。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を組織写真5-1、5-2に示す。写真5-1は炉壁胎土部分である。多孔質で粘土に長石類が混合している一般的な炉壁に良く見られる胎土組織である。一部に溶融しかけてところも見られるがその割合はあまり多くない。写真5-2は滓の部分で写真に見られるように発泡したガラス質になっている。この中に半透明な珪石と思われる溶融しかけの粒子が観察される。また、写真のような海綿鉄が銹化鉄になってい部分も見られる。

5mm大の金属鉄の顕微鏡組織を金属鉄組織写真1に示す。パーライト基地（炭素が0.02％以下のフェライト（α鉄）とセメンタイト（Cementite：Fe3C）の層状組織）と針状の初析セメンタイトからなる過共析鋼（C：08％～2.1％）の組織である。組織からはC濃度は1％よりもやや高いと推察される。

化学成分：滓の部分と炉壁胎土部分について成分分析を行った。滓の化学成分分析結果を表2に示す。全鉄は6.88％と鉄滓としては少ない。金属鉄は0.42％である。FeOは2.07%、Fe2O3は6.94%である。ガラス質滓であることを反映し、SiO2は59.3％と多く、Al2O3も17.4％と多く含まれる。CaO、MgOも3.86％、2.21％

で比較的多い。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は87.87％である。$TiO_2$は0.91％含まれている。$TiO_2$/T.Feは高いが、資料1、2と同様な理由で始発原料が砂鉄か否かは判断できない。

鉄滓の成分的特徴から製造工程上の分類を検討する図である図1、2、3で見ると、図1、図2では炉壁付着滓のグループにある。図3では精錬鍛冶滓のデータに比べMnO/TiO_2が高い領域に外れており、精錬鍛冶滓とは判断できない。

炉壁胎土部分の分析結果を表3に示す。SiO_2は61.3％で通常の炉壁胎土に比べ低く、耐火度に有利に働くAl_2O_3は18.7％とやや多く含まれる。耐火度に不利な軟化性成分であるCaO、MgOも1.94％、2.30％で$CaO+MgO$は4.21％と多い。また、融点を下げるアルカリ金属であるK_2O、Na_2Oは1.13％、1.16％でK_2O+Na_2Oは2.29％で通常の耐火材の範囲にある。耐火度に不利な全鉄は8.38と相当多く含まれている。金属鉄がふくまれているのは鉄滓が少量反応しているためとおもわれる。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は87.23％である。

耐火度：耐火度は表6に示すように約1100℃である。耐火材としてはやや低いと思われる。推算耐火度は1056℃で測定値と50℃くらいの範囲で一致している。

以上の結果を総合すると本資料はSiO_2を61.3％、Al_2O_3を18.7％含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が1100℃の炉壁胎土である。

資料番号No. 6　鋳型、着磁度：2、メタル反応：無

外観：外観を外観写真6に示す。重量147.9g、長さ113.4mm、幅83.6mm、厚さ34.7mm。厚さ約20mmのゆるやかに湾曲した鋳型片に鉄滓が付着している資料である。内面の3mm～5mmは滓との反応層で発泡しており表面は鉄酸化物の暗褐色を呈している。内面の一部には10～15mm位にわたって滓と炉壁の反応物が付着している。外面の胎土には茍痕が多くみられ、茶褐色を呈している。滓と胎土についてそれぞれ検鏡・分析する。試料は試料採取位置6に示す位置から採取した。

顕微鏡組織：鋳型胎土部分の顕微鏡組織を組織写真6-1に示す。溶融がかなり進んでおりガラス化した基地の中に石英粒やおそらく鉄分を多く含むと思われる赤褐色の粒子が分散している。粘土や粒子の混合物が融けかけている状態である。滓部分の顕微鏡組織を組織写真6-2、6-3に示す。滓そのものは写真6-2に見られるように発泡したガラス質滓である。基地中には乳白色の薄いファイヤライトと思われる微細な組織が観察される。試料の端部には写真6-3の組織が観察される。乳白色のウスタイト（Wustite：FeO）と思われる組織とこれよりもやや灰色がかった多角形が崩れたようなウルボスピネル（Ulvospinel：$FeO\cdot TiO_2$）とが観察される。高TiO_2含有鉱物であるウルボスピネルが観察されることは始発原料が砂鉄であったことを示唆する。

化学成分：滓の部分と鋳型胎土部分について成分分析を行った。滓の化学成分分析結果を表2に示す。全鉄は9.97％と鉄滓としては少ない。金属鉄は0.45％含まれている。FeOは3.22%、Fe_2O_3は10.0%である。ガラス質滓であることを反映し、SiO_2は55.8％と多く、Al_2O_3も19.2％と多く含まれる。CaO、MgOも3.36％、2.05％で比較的多い。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は83.76％である。$TiO_2$は0.92％含まれている。$TiO_2$/T.Feの比は約0.1で鉄に対する$TiO_2$は高いが、資料1、2、5と同様な理由により始発原料が砂鉄か否かは判断できない。

鉄滓の成分的特徴から製造工程上の分類を検討する図1、2、3で見ると、図1、

図2では炉壁付着滓のグループにある。図3では精錬鍛冶滓のデータに比べMnO/TiO_2が高い領域に外れており、精錬鍛冶滓とは判断できない。
炉壁胎土部分の分析結果を表3に示す。SiO_2は61.0％で通常の炉壁胎土に比べ低く、耐火度に有利に働くAl_2O_3は18.5％とやや多く含まれる。耐火度に不利な軟化性成分であるCaO、MgOは1.95％、2.24％で$CaO+MgO$は4.19％で多い。また、融点を下げるアルカリ金属であるK_2O、Na_2Oは1.11％、1.22％でK_2O+Na_2Oは2.33％で通常の耐火材の範囲にある。耐火度に不利な全鉄は8.21と相当多く含まれている。金属鉄がふくまれているのは鉄滓が少量反応しているためとおもわれる。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は86.02％である。
耐火度：推算耐火度は1058℃で資料4の鋳型と同程度である。耐火材としてはやや低いと思われる。
以上の結果を総合すると本資料はSiO_2を61.0％、Al_2O_3を18.5％含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が1058℃と推算される鋳型である。付着滓中にTiO_2含有鉱物相が観察されることから砂鉄を始発原料とする鉄を鋳込んだ可能性がある。

資料番号No. 7　鋳型、着磁度：0、メタル反応：無し
外観：外観を外観写真7に示す。重量82.5g、長さ66.9mm、幅63.2mm、厚さ32.3m。厚さ約35mmの鋳型片で、内面は平面で湾曲しているようには見えない。資料6に比べると胎土の粒子は粗く暗い。茍痕も多く見られる。内面側15mm位は熱影響を受けており、内面側3～5mm位は小さく発泡している。内面は滓と反応して黒色を呈している部分もあるが、大部分は鉄銹の褐色で、なめられたように滑らかである。試料は資料採取位置7に示す位置から胎土を採取し調査した。
顕微鏡組織：顕微鏡組織を組織写真7に示す。溶融が進行しており溶融した滓の中に珪石やその他の粒子が混在している状態になっている。
化学成分：胎土部分の分析結果を表3に示す。SiO_2は59.6％で通常の炉壁胎土に比べ低く、耐火度に有利に働くAl_2O_3は19.1％とやや多く含まれる。耐火度に不利な軟化性成分であるCaO、MgOは2.13％、2.51％で$CaO+MgO$は4.64％と多い。また、融点を下げるアルカリ金属であるK_2O、Na_2Oは1.00％、0.93％でK_2O+Na_2Oは1.93％で通常の耐火材の範囲にある。耐火度に不利な全鉄は8.42と相当多く含まれている。金属鉄がふくまれているのは鉄滓が少量反応しているためとおもわれる。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は85.27％である。
耐火度：耐火度は1070℃である。耐火材としてはやや低いと思われる。推算耐火度は1048℃で実測値と比較的良く一致している。
以上の結果を総合すると本資料はSiO_2を約60％、Al_2O_3を約19％含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が1070℃の鋳型である。

資料番号No. 8　鉄塊（鋳型が付着した鉄塊）、着磁度：5、メタル反応：5～10ｍｍ大
外観：外観を外観写真8に示す。重量62.6g、長さ78.5mm、幅53.7mm、厚さ18.3mm。鋳型が付着した鉄塊である。背面には僅かに赤褐色の鋳型粘土が付着している。資料そのものは厚さ10mm前後の湾曲した板状の鉄が銹化している状態

である。内面は暗褐色の鉄銹そのもので、小さな銹化瘤が多く見られる。資料全体に5mm大相当のメタル反応があり上側の外観写真の右より約1/4に10mm大くらいのメタル反応がある。この部分から試料を採取する。着磁度は4である。
顕微鏡組織：金属鉄の顕微鏡組織を金属鉄組織写真8に示す。炭素をほとんど含まないフェライト（C<0.02%）組織となっており、結晶粒のなかには小さな欠陥が多数見られる。ほとんど純鉄に近い鉄である。資料全体としては銹化が進行している。写真には示していないが周囲はゲーサイトなどの銹化鉄である。
化学成分：化学成分分析結果を表4に示す。Cは0.02％で、顕微鏡観察と一致する。その他の成分としてはSiが0.058％含まれているがおそらく介在物によるものと思われる。

以上の結果を総合すると本資料は鋳型に鋳込まれた0.02％Cの低炭素の鉄とその銹化物と推察される。

資料番号No. 9　ガラス質滓、着磁度：0、メタル反応：無
外観：外観を外観写真9に示す。重量27.6g、長さ51.2mm、幅31.4mm、厚さ27.6mm。黒色に輝くガラス質滓で、炉壁片が隋伴している。著しく発泡しており、断面には長石類などの小さな粒子が多く巻き込まれている。滓部分について調査する。着磁、メタル反応ともにない。
顕微鏡組織：顕微鏡組織を滓組織写真9-1、9-2に示す。全面がガラス質になっている。外観状ほど気泡は多くない。一部に写真のような未溶融部分が見られる。未溶融部には珪石と思われる半透明な粒子が多い。
化学成分：滓の化学成分分析結果を表2に示す。全鉄は8.85％と鉄滓としては少ない。金属鉄は0.28％含まれている。FeOは6.35%、Fe_2O_3は5.20%である。SiO_2は60.5％と非常に多く、Al_2O_3も15.6％と多く含まれガラス質滓であることを示している。CaO、MgOも3.88％、2.03％で比較的多い。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は85.92％である。$TiO_2$は0.73％含まれている。$TiO_2$/T.Feの比は約0.1で鉄に対する$TiO_2$は高いが、前記の鉄滓同様に始発原料が砂鉄か否かは判断できない。
鉄滓の成分的特徴から製造工程上の分類を検討する図1、2、3で見ると、図1、図2では炉壁付着滓のグループにある。図3では精錬鍛冶滓のデータに比べMnO/TiO_2が高い領域に外れており、精錬鍛冶滓とは判断できない。

以上の結果を総合すると本資料は炉壁と反応してガラス質化した炉壁付着滓と推察される。資料の生成した製鉄・鍛冶工程は判断できない。

資料番号No.11　椀型鍛冶滓、着磁度：2、メタル反応：無し
外観：外観を外観写真10に示す。重量226.3g、長さ97.6mm、幅50.1mm、厚さ37.1mm。典型的な2段の椀型滓である。破面は1である。上面はなめられたように滑らかで、底側は炉床の砂を映し湾曲している。また上面の2ヶ所には、鉄が銹化している。資料全体は着磁度2であるがこの部分は3程度の磁着がある。メタル反応はない。破面で見ると大きな空隙が多くみられる
顕微鏡組織：顕微鏡組織を組織写真11に示した。視野の大部分は乳白色の繭玉状のウスタイトに覆われ、その背後に沈むようにうす褐色を帯びた灰色のファイヤライトが観察される。典型的な鍛冶系の滓組織で、ウスタイトの多さからは鍛錬鍛冶滓のように思われる。
化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。全鉄は63.8%と高く、金属鉄は1.98％

含まれている。結合水は0.75％と少なく、ゲーサイトなどの銹化鉄はあまり多くないと見られる。FeOは67.3%、Fe2O3は13.6%、SiO2は9.76％、TiO2は0.16％とわずかである。FeO、Fe2O3の比は83.2：16.8でFeO-Fe2O3-SiO2の3成分系に換算するとFeOは74.2％、Fe2O3は15.0％、SiO2は10.8％となり参考のFeO-Fe2O3-SiO2系の平衡状態図ではウスタイ領域にある。ウスタイト、ファイヤライトが鉱物相として現れると考えられる。平衡状態図上の位置は顕微鏡観察と一致する。造滓成分は14.39％と少ない。原料に含まれていたと思われるTiO2は0.16％と少なく始発原料が砂鉄であるかは判断できない。成分的特徴から製造工程上の分類を検討する図1、2、3における位置づけでは、いずれも鍛錬鍛冶滓に分類される位置づけにある。

以上の結果を総合すると本資料は鍛冶工程で生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。始発原料は明らかでない。

資料番号No.12　椀型鍛冶滓、着磁度：2、メタル反応：無し

外観：外観を外観写真11に示す。重量76.4g、長さ58.4mm、幅40.1mm、厚さ32.3mm。酸化土砂がやや厚く付着した小さな椀型滓で上面は窪みが深い。下面は炉内の推積状態を写し、木炭痕や砂礫痕が多く、深い窪みも多い。大きさの割りには重量感がある。酸化土砂をよく落とし、試料を採取する。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を滓組織写真12に示す。資料11よりもさらにウスタイトの多い組織で凝集ウスタイトになっている。ウスタイトの背後にファイヤライトが観察される。鍛錬鍛冶滓と思われる組織である。

化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。全鉄は64.8%と高く、金属鉄は0.25％とわずかである。結合水は0.69％と少なく、ゲーサイトなどの銹化鉄はあまり多くないと見られる。FeOは72.0%、Fe2O3は12.3%、SiO2は8.78％、TiO2は0.16％とわずかである。FeO、Fe2O3の比は85.4：14.6でFeO-Fe2O3-SiO2の3成分系に換算するとFeOは77.3％、Fe2O3は13.2％、SiO2は9.4％となり参考のFeO-Fe2O3-SiO2系の平衡状態図ではウスタイ領域の資料11とほとんど同じ位置にある。ウスタイト、ファイヤライトが鉱物相として現れると考えられる。平衡状態図上の位置は顕微鏡観察と一致する。造滓成分は13.21％と少ない。原料に含まれていたと思われるTiO2は0.16％と少なく始発原料が砂鉄であるかは判断できない。成分的特徴から製造工程上の分類を検討する図1、2、3における位置づけでは、いずれも鍛錬鍛冶滓に分類される位置づけにある。

以上の結果を総合すると本資料は鍛冶工程で生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。始発原料は明らかでない。

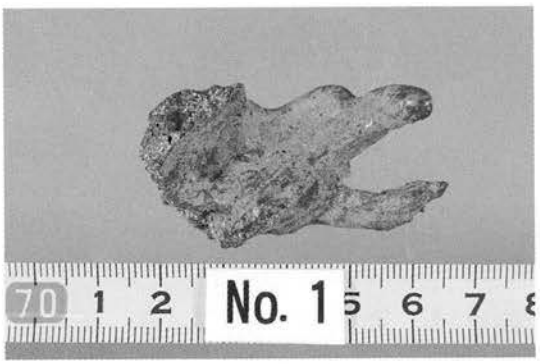
資料番号No.13　鍛冶滓、着磁度：2、メタル反応：3mm大

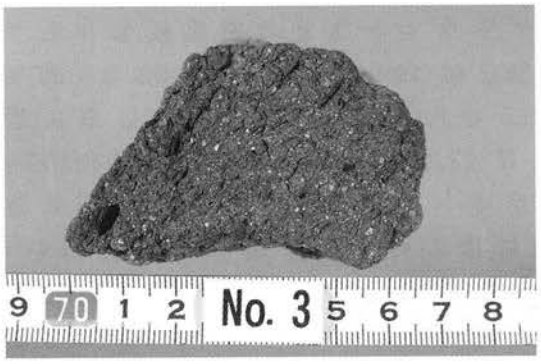
外観：外観を外観写真12に示す。重量55.6g、長さ58.0mm、幅35.7mm、厚さ20.3mm。重量感のある扁平な鍛冶滓である。精錬後期のもので鉄分が多いと思われる。全体に凹みが多く、酸化土砂が浸入している。下面は推積状態を写して砂礫による凹凸が多い。一部に弱いメタル反応があり、着磁度は2である。

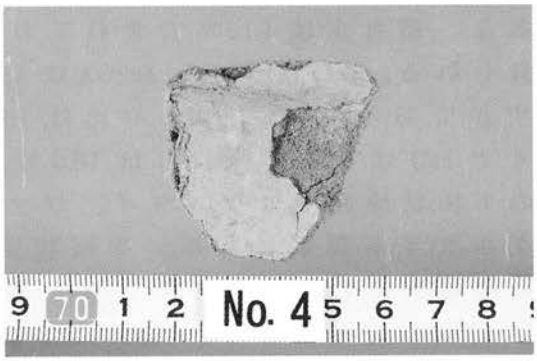
顕微鏡組織：顕微鏡組織を滓組織写真13に示す。資料11、12に比べ繭玉状のウスタイトは少なく、相対的にファイヤライトが多くなっている。ウスタイトの形態ではやや樹枝状のものも観察される。

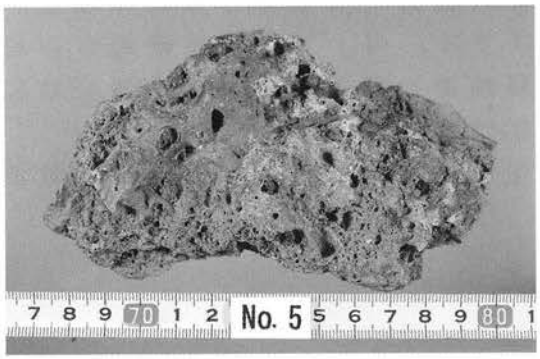
化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。全鉄は52.3%と高く、金属鉄は0.78％

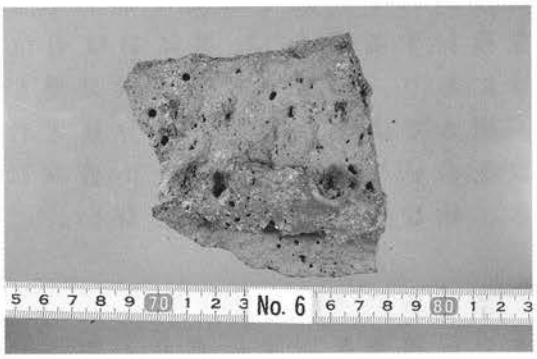
試料　外観写真（1）

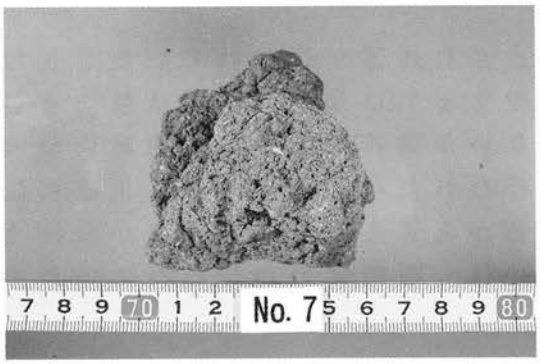


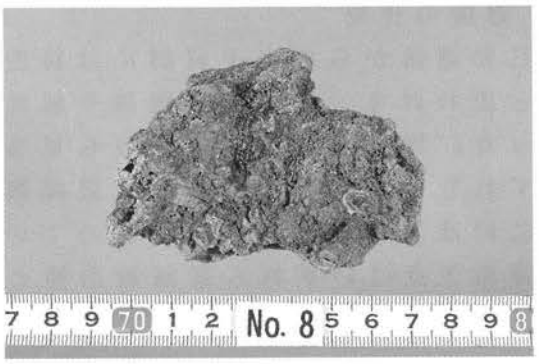


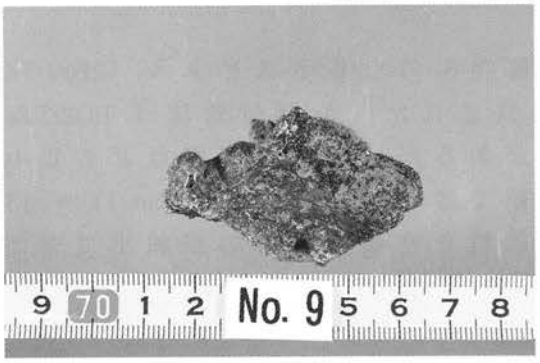


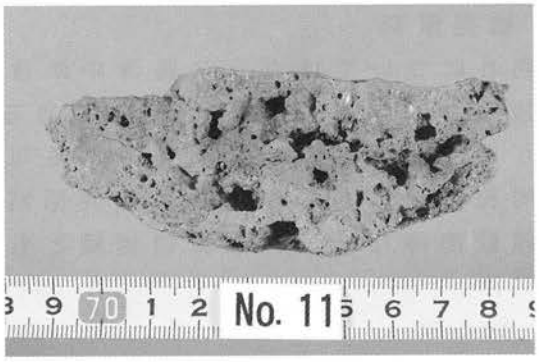


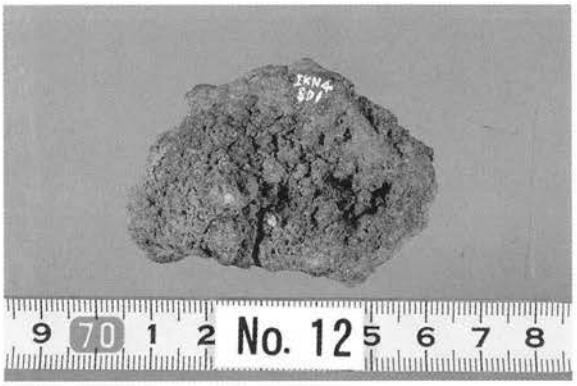












試料　外観写真(2)

である。結合水は1.13％含まれており、ゲーサイトなどの銹化鉄も存在すると見られる。FeOは52.1%、Fe2O3は15.8%、SiO2は19.4％と多く、TiO2は0.27％とわずかである。FeO、Fe2O3の比は76.8：23.2でFeO-Fe2O3-SiO2の3成分系に換算するとFeOは59.6％、Fe2O3は18.0％、SiO2は22.2％となり参考のFeO-Fe2O3-SiO2系の平衡状態図ではウスタイ、ファイヤライト、マグネタイトの境界に近いマグネタイト領域にある。平衡状態図的にはこの3相が現れると見られる。顕微鏡観察でのウスタイトはマグネタイトとの混晶の可能性がある。造滓成分は27.66％とやや多い。原料に含まれていたと思われるTiO2は0.27％と少なく始発原料が砂鉄であるかは判断できない。成分的特徴から製造工程上の分類を検討する図1、2、3における位置づけでは、図1では鍛錬鍛冶滓の位置づけにあり、図2では造滓成分量が多く精錬鍛冶滓と思われる位置づけにある。図3では鍛錬鍛冶滓に分類される位置づけにある。

以上の結果を総合すると本資料は鍛冶工程で生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。始発原料は明らかでない。

4．まとめ

本分析調査を以下にまとめた。

1）遺跡の性格

石動遺跡からの出土資料には鋳型が検出され鋳造が行われていたことは確かと思われる。しかし、製錬や精錬を示唆するTiO2が高い資料は検出されなかった。鍛錬を示唆する資料も見当たらないが隣接する北中原遺跡の資料はいずれも鍛錬鍛冶滓であり、鍛錬鍛冶が行われた可能性はある。正確にはさらに鍛造薄片の検出などに務めていく必要があろう。北中原4次から出土した資料3点はいずれも鍛錬鍛冶滓と判断され、鍛錬鍛冶が行われていたものと推察される。

2）始発原料

資料6についてはガラス質滓中に含TiO2鉱物相のウルボスピネル（2FeO･TiO2）が観察され、始発原料が砂鉄であると推察された。炉壁付着滓はTiO2/T.Feの比が高く、砂鉄が始発原料である可能性があるが、炉壁、鋳型などもこれらと同程度の含有量があり、始発原料は判断できなかった。資料No. 11 ～ 13の鍛錬鍛冶滓は成分、顕微鏡組織とも始発原料を推察するものが検出できていない。

3）胎土類

胎土類には平均的な炉壁胎土に比べアルカリ土類成分、鉄分が多い傾向が顕

著に認められ、耐火度に有利なAl_2O_3が多いにもかかわらず耐火度は1070℃～1110℃と低い。

4）個別資料

(1) 資料1：炉壁と反応してガラス質化した炉壁付着滓と推察される。資料の生成した製鉄・鍛冶工程は不明である。

(2) 資料2：炉壁と反応して激しく発泡・ガラス質化した炉壁付着滓と推察される。資料の生成した製鉄・鍛冶工程は不明である。

(3) 資料3：SiO_2を62.4％、Al_2O_3を19.0％含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が1110℃の炉壁胎土である。

(4) 資料4：溶融性に勝る塗布材が塗布されている耐火度1070℃の胎土で作られた鋳型である。しかし、塗布材と耐火材の成分的な大きな差は認められない。SiO_2を62.4％、Al_2O_3を19.0％含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い耐火度が1110℃の炉壁胎土である。

(5) 資料5：SiO_2を61.3％、Al_2O_3を18.7％含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が1100℃の炉壁胎土である。

(6) 資料6：SiO_2を61.0％、Al_2O_3を18.5％含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が1058℃と推算される鋳型である。付着滓中にTiO_2含有鉱物相が観察され、砂鉄を始発原料とする鉄を鋳込んだ可能性がある。

(7) 資料7：SiO_2を59.6％、Al_2O_3を約19.1％含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が1070℃の鋳型である。

(8) 資料8：0.02％Cの低炭素の鉄とその錆化物と推察される。

(9) 資料9：炉壁と反応してガラス質化した炉壁付着滓と推察される。資料の生成した製鉄・鍛冶工程は不明である。

(10) 資料11：鍛冶工程で生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。始発原料は明らかでない。

(11) 資料12：鍛冶工程で生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。始発原料は明らかでない。

(12) 資料13：鍛冶工程で生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。始発原料は明らかでない。

5．参考

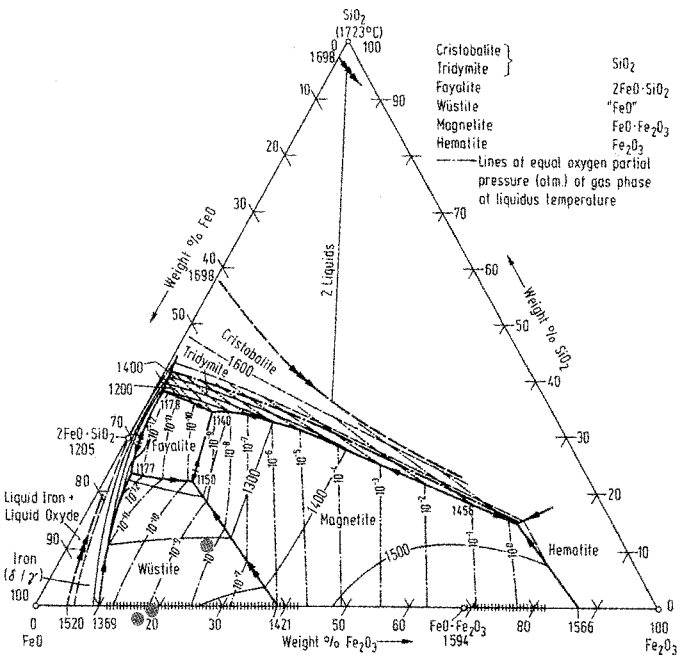
(1) 鉄滓の顕微鏡組織について：　鉄滓を構成する化合物結晶には、一般的

に表A1のような鉱物組織がある。酸化鉄（Fe2O3、Fe3O4、FeO）、二酸化ケイ素（シリカ：SiO2）、アルミナ（Al2O3）および二酸化チタン（TiO2）を組み合せた化合物（固溶体）が多く、これら鉱物結晶は含有量にも依存するが、X線回折により検出され確認できる。鉄滓中の低融点化合物がガラス相（非晶質）を形成することがあり、X線回折では検出されない。

表A1　鉄滓の顕微鏡鉱物組織とその観察状況

鉱物組織名（和）	鉱物名（英）	化学式	偏光顕微鏡観察状況
ヘマタイト	Hematite	α -Fe_2O_3	赤褐色～赤紫色
マーゲマイト	Maghemite	γ -Fe_2O_3	赤紫色～黒紫色
マグネタイト	Magnetite	Fe_3O_4	白青色、四角または多角盤状
ウスタイト	Wustite	FeO	灰白色、繭玉状または樹枝状
ファイヤライト	Fayalite	$2FeO \cdot SiO_2$	薄い青灰色、短冊状の長い結晶
シデライト	Siderite	$FeCO_3$	
ウルボスピネル	Ulvospinel	$2FeO \cdot TiO_2$	白色、四角～角形板状結晶
イルメナイト	Ilmenite	$FeO \cdot TiO_2$	白色、針状・棒状の長い結晶
シュードブルッカイト	Pseudobrookite	$FeO \cdot 2TiO_2$	白色、針状の結晶
ハロイサイト	Halloysite	$Al_2O_3 \cdot 2SiO_2 \cdot 2H_2O$	組織は不明
ハーシナイト	Hercynite	$FeO \cdot Al_2O_3$	ウスタイト中に析出、ごま粒状。
リューサイト	Leucite	$K_2O \cdot Al_2O_3 \cdot 4SiO_2$	
アカゲナイト	Akagenite	β -FeOOH	組織は不明
ゲーサイト	Goethite	α -FeOOH	白～黄色、リング状が多い。
アノーサイト	Anorthite	$CaO \cdot Al_2O_3 \cdot SiO_2$	
石英（シリカ）	Silica	α -SiO2	白色～半透明
クリストバライト	Cristobalite	β -SiO2	白色
コーエナイト（セメンタイト）	Cohnite(Cementite)	Fe_3C	

（2）FeO-Fe2O3-SiO2 平衡状態図



FeO-Fe_2O_3-SiO_2系状態図（by Osborn and Muan）:Slag Atlas
［ドイツ鉄鋼協会］(1981) [Verlag Stahleisen] Düsseldorf, Fig. 106, p.76

（3） ゼーゲルコーン溶倒温度比較表

温度 (℃)	コーン番号	温度 (℃)	コーン番号	温度 (℃)	コーン番号	温度 (℃)	コーン番号
600	022	960	07a	1,280	9	1,650	29
650	021	980	06a	1,300	10	1,670	30
670	020	1,000	05a	1,320	11	1,690	31
690	019	1,020	04a	1,350	12	1,710	32
710	018	1,040	03a	1,380	13	1,730	33
730	017	1,060	02a	1,410	14	1,750	34
750	016	1,080	01a	1,435	15	1,770	35
790	015a	1,100	1a	1,460	16	1,790	36
815	014a	1,120	2a	1,480	17	1,825	37
835	013a	1,140	3a	1,500	18	1,850	38
855	012a	1,160	4a	1,520	19	1,880	39
880	011a	1,180	5a	1,530	20	1,920	40
900	010a	1,200	6a	1,580	26	1,960	41
920	09a	1,230	7	1,610	27	2,000	42
940	08a	1,250	8	1,630	28		

6．図表・写真

表 1　調査資料と調査項目

資料 No.	遺跡名 遺構名	資料 種別	着磁度	MC反応	外観写真	化学成分	組織写真	X線回折	耐火度
1	石動（いするぎ） 9-13T9-1 炉	ガラス質滓	○	○	○	○	○		
2	石動（いするぎ） 9-13T9-1 炉	ガラス質滓	○	○	○	○	○		
3	石動（いするぎ） 9-2 号住	炉壁	○	○	○	○	○	○	○
4	石動（いするぎ） 9-13T9-1 炉	鋳型	○	○	○	○	○	2	○
5	石動（いするぎ） 廃棄場	炉壁付着滓	○	○	○	○	○		○
6	石動（いするぎ） 廃棄場	鋳型	○	○	○	○	○		
7	石動（いするぎ） 廃棄場	鋳型	○	○	○	○	○	○	○
8	石動（いするぎ） 廃棄場	銹化鉄	○	○	○	○	○		
9	石動（いするぎ） 廃棄場	ガラス質滓	○	○	○	○	○		
11	北中原 4 次 SC	椀型滓	○	○	○	○	○		
12	北中原 4 次 SD1	椀型滓	○	○	○	○	○		
13	北中原 4 次 SD1	鍛冶滓	○	○	○	○	○		

種別は外観観察した結果で、提供されたものではない

表 2　鉄滓の化学成分分析結果 (%)

資料 No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	K_2O	Na_2O	比率 (%)	
											FeO	Fe_2O_3
1	7.17	1.11	5.49	2.56	60.8	18.6	3.03	2.71	2.55	1.07	68.2	31.8
2	12.4	0.36	8.43	7.85	56.0	17.2	3.20	1.91	1.65	1.02	51.8	48.2
5	6.88	0.42	2.07	6.94	59.3	17.4	3.86	2.21	3.61	1.49	23.0	77.0
6	9.97	0.45	3.22	10.0	55.8	19.2	3.36	2.05	2.25	1.10	24.3	75.7
9	8.85	0.28	6.35	5.20	60.5	15.6	3.88	2.03	2.00	1.91	55.0	45.0
11	63.8	1.98	67.3	13.6	9.76	2.19	0.88	0.51	0.88	0.17	83.2	16.8
12	64.8	0.25	72.0	12.3	8.78	2.36	1.07	0.33	0.52	0.15	85.4	14.6
13	52.3	0.78	52.1	15.8	19.4	4.46	1.53	0.90	0.96	0.41	76.8	23.2

資料 No.	TiO_2	MnO	P_2O_5	Co	C.W.	C	V	Cu	TiO_2/ T.Fe	MnO/ TiO_2	造滓 成分%
1	0.87	0.19	0.094	0.039	0.38	0.21	0.027	0.005	0.121	0.218	88.76
2	0.77	0.17	0.176	0.017	0.30	0.10	0.036	0.022	0.062	0.221	80.98
5	0.91	0.18	0.121	0.004	0.74	0.09	0.025	0.007	0.132	0.198	87.87
6	0.92	0.18	0.179	0.005	0.43	0.07	0.025	0.009	0.092	0.196	83.76
9	0.73	0.15	0.086	0.006	0.37	0.06	0.020	0.006	0.082	0.205	85.92
11	0.16	0.04	0.148	0.016	0.75	0.05	0.004	0.012	0.003	0.250	14.39
12	0.16	0.04	0.106	0.004	0.69	0.08	0.004	0.004	0.002	0.250	13.21
13	0.27	0.08	0.139	0.013	1.13	0.10	0.008	0.009	0.005	0.296	27.66

C.W.= 化合水、造滓成分 = SiO2+ Al2O3+ CaO+ MgO+ Na2O+ K2O

表 3　炉壁・鋳型の化学成分分析結果 (%)

資料 No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	K_2O	Na_2O	TiO_2	MnO	C.W.	C	強熱 減量
3	7.64	0.11	1.61	8.98	62.4	19.0	1.55	1.32	1.94	1.02	0.94	0.18	0.64	0.09	-0.33
4-1	7.39	0.33	1.29	8.66	62.7	16.0	2.89	1.97	1.26	1.77	0.93	0.16	1.34	0.15	1.61
4-2	7.97	0.22	2.43	8.38	60.1	17.4	3.02	2.18	1.41	1.73	0.99	0.16	1.39	0.21	0.87
5	8.38	0.17	1.90	9.63	61.3	18.7	1.94	2.30	1.13	1.16	1.03	0.20	0.84	0.15	0.29
6	8.21	0.17	0.72	10.7	61.0	18.5	1.95	2.24	1.11	1.22	1.02	0.19	1.03	0.13	0.74
7	8.42	0.11	1.18	10.6	59.6	19.1	2.13	2.51	1.00	0.93	0.93	0.20	1.35	0.22	1.93

C.W.= 化合水

表 4　金属鉄の化学成分

資料 No.	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ni	Co	Al	V	Ti	Ca	Mg
8	0.02	0.058	0.001	0.40	0.031	0.071	0.020	0.026	0.057	0.003	0.003	0.047	0.012

X 線回折

表 5　鉄滓の X 線回折鉱物と製造工程の分類

No	種別	X 線回折結果
3	ガラス質滓？	Q 強、Hc 弱、An 微、Ml 微、Fe 微、Cor 微
4-1	鋳型胎土	Q 強、An 強、Cor 弱、Fe 微、H 微
4-2	鋳型塗布材	Q 強、An 強、Cor 微、Fe 微、H 微
7	鋳型	Q 強、An 弱、Ml 弱、H 微、Fe 微、Cor 微

Q：石英、An：アノーサイト、Hc：ハーシナイト、Ml：ムライト、Fe：金属鉄、H：ヘマタイト、Cor：コージェライト

最強、強、中、弱、微は回折強度を示し、微は鉱物相が同定できる程度の回折強度であることを示す。

表 6　耐火度試験結果

資料番号	耐火度（SK）＊		色調	膨張・収縮	試験錐の状況
No. 3	2a-	1,110℃	茶	普通	アバタ状
No. 4	02a+	1,070℃	茶	普通	アバタ状
No. 5	1a	1,100℃	茶	普通	アバタ状
No. 7	01a-	1,070℃	茶	普通	アバタ状

[備考] 試験方法：耐火煉瓦の耐火度の試験方法（JIS　R2204）に準拠
試験条件：酸素プロパン炉法
＊耐火温度：下記のゼーゲルコーン溶倒温度比較表を参照

附編2　北中原遺跡出土の鋳型に混入された植物遺体について

山梨県立博物館　中山誠二

1 分析試料

本分析試料は、北中原遺跡第3次調査において発見されたもので、試料00～05はSI2（2号住居跡）から出土した炉壁（溶解炉）、試料35は鋳造関連遺構から出土した鉄製鍋の鋳型である。

炉壁とされる試料00～05は、SI2覆土中の床面よりやや浮いた位置から出土している。伴出遺物はほとんどなく、古代末（11世紀頃）の土師器皿1点が出土したのみである。調査時所見から住居跡として報告するが、トレンチ調査であったこともあり、鋳造に関連する「鋳込み場」の一部に当たる可能性も考えられる。

試料35は、鋳造関連遺構（鋳型廃棄場）から発見されているが、最下面で確認したピット内から11世紀頃の土師器小皿が出土している。その他、同時期頃の土師器が覆土中から検出しているが、明確な時期決定は困難である。最下面には溝状の落ち込み、先述のピット等を確認しており、作業場（鋳込み場）であった可能性も窺えるが、いずれにせよ鋳造関連遺物の捨て場となったことが想定される。なお、廃棄された鋳型は、鍋や茶釜などがあり、中世段階まで下ることも考えられている。

鋳型、炉壁は高い熱を受け硬く窯変しているが、型となる内面は丁寧に表面が仕上げられている。鋳型および炉壁の外側には、籾殻と思われる植物が混ぜられており、肉眼観察でその痕跡が認められる試料について、さらに実体顕微鏡およびレプリカ・セム法による観察を行った。

2 分析手法

鋳型6点について、まず実体顕微鏡での観察を行い、その一部の試料についてレプリカ・セム法による分析を行った。レプリカ・セム法とは、土器などの表面に残る圧痕の凹部にシリコーン樹脂を流し込んでレプリカを作成し、その表面を電子顕微鏡で観察するものである（注1）。

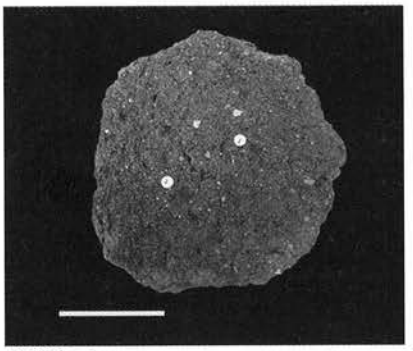
作業は、まず鋳型に残る圧痕を写真撮影した後、実体顕微鏡で観察した。さらに、各圧痕部分に離型剤を塗布し、シリコーン樹脂の充填を行った。離型剤にはアクリル樹脂（パラロイドB－72）をアセトンで薄めた5％溶液を用い、印象剤には東芝シリコーンTSE350を使用した。印象剤の初期充填の後、シリコーンに増粘剤を加え、走査電子顕微鏡用の試料台に載せ、初期充填した圧痕部分にかぶせレプリカ転写作業を行った。これを乾燥させ、圧痕レプリカを離脱させた（注2）。

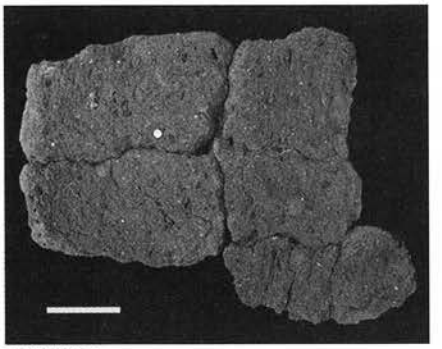
転写したレプリカ試料は、ニコン製環境制御型電子顕微鏡Quanta600を用い、表面観察を実施した。

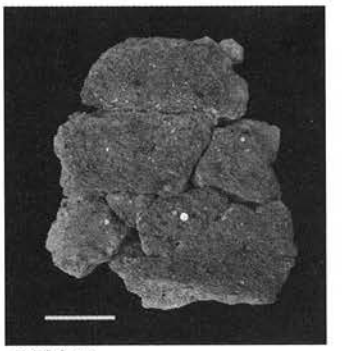
3 分析結果

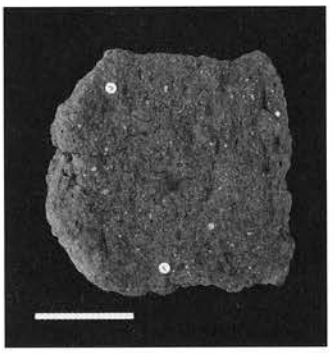
（1）　試料00　00－1は長さ6.8㎜、幅3.1㎜、00－2は長さ5.5㎜、幅3.3㎜のイネ籾痕である。いずれも内外穎を明瞭に残す。

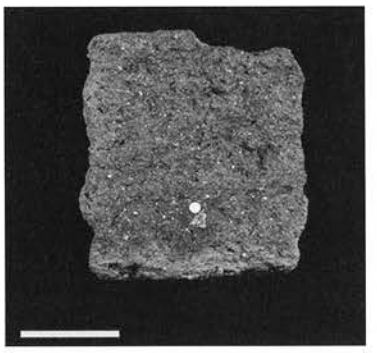
（2）　試料01　長さ7.2㎜、幅3.0㎜のイネ籾痕である。籾の先端部、基部を欠損しているが、内外穎および表皮の顆粒状（乳房状）突起列が観察される。SEM観察レベルでは突起列の先端がやや摩耗している。

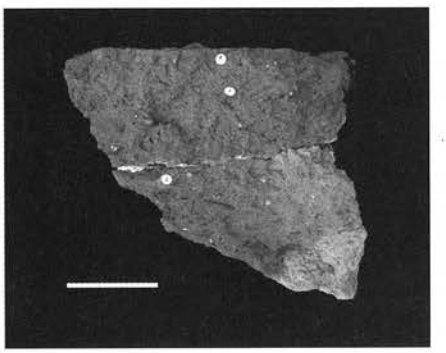

試料00


試料01


試料02


試料04


試料05


試料35

(3) 試料 02 長さ 7.0㎜、幅 3.0㎜のイネ籾痕である。籾の先端部を欠損しているが、内外穎および表皮の顆粒状（乳房状）突起列が観察される。SEM レベルでは突起列の先端は摩耗が著しい。

(4) 試料 04 04 − 1 は長さ 5.8㎜、幅 2.8㎜、04 − 2 は長さ 7.3㎜、幅 2.6㎜のイネ籾痕である。いずれも内外穎を明瞭に残す。

(5) 試料 05 05 − 1 は長さ 7.4㎜、幅 3.9㎜のイネ籾痕である。SEM 観察した試料の中でもっとも籾の痕跡が明瞭で、顆粒状突起列の摩耗はほとんど見られない新鮮な状態でつけられた圧痕であることがわかる。内外穎および基部の小穂軸が確認される。

(6) 試料 35 35 − 1 は長さ 6.4㎜、幅 3.0㎜、35 − 2 は長さ 7.3㎜、幅 2.4㎜、35 − 3 は長さ 7.9mm、幅 3.5mm のイネ籾痕である。いずれも内外穎が明瞭に確認できるが、電子顕微鏡観察では顆粒状突起の摩耗が著しく、剛毛（稃毛）は認められない。

4 小結

本調査を通して、鋳型には粘土の混和材として多量のイネ籾を使用していることが判明した。この理由として、鋳型となる粘土が高温のために急激に収縮し破損することを防ぐ目的があると推定され、珪酸分を多く含むイネ籾が混和材として選択されている点は、技術史的な側面から興味深い。

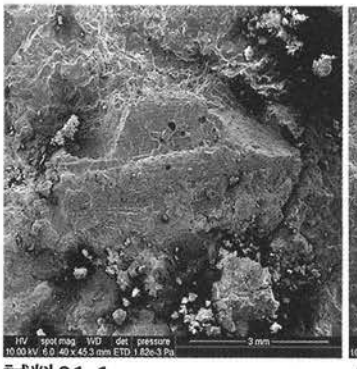
これらのイネ籾は、粘土と混ぜ合わせる段階で破損したものが非常に多い

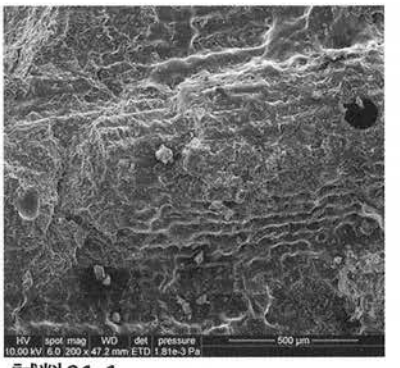
試料00-1

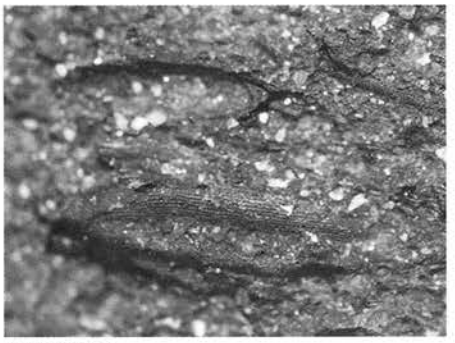
試料00-2

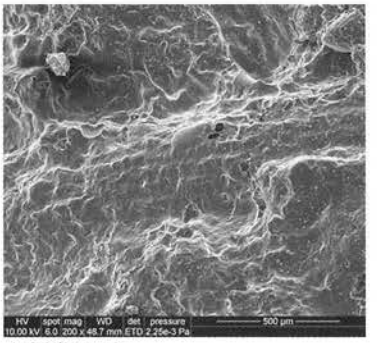
試料00

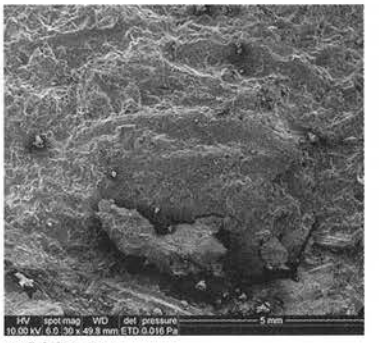
試料01-1

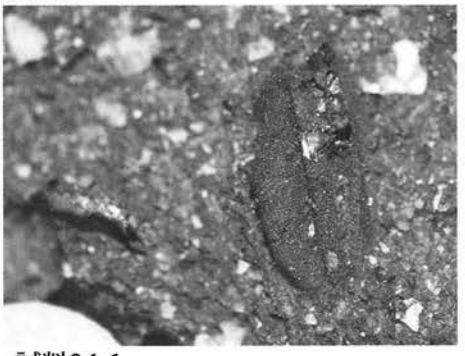

試料01-1

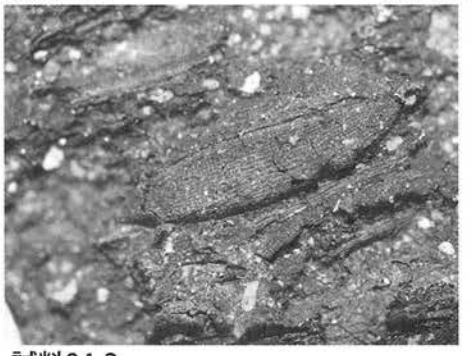

試料01-1


試料02-1


試料02-1


試料02-1


試料04-1


試料04-2

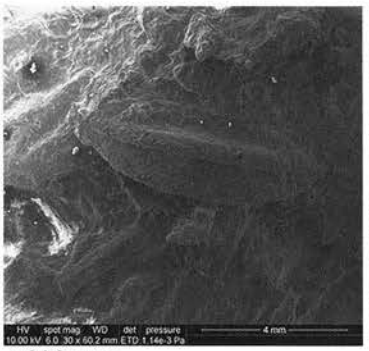
試料04

試料05-1

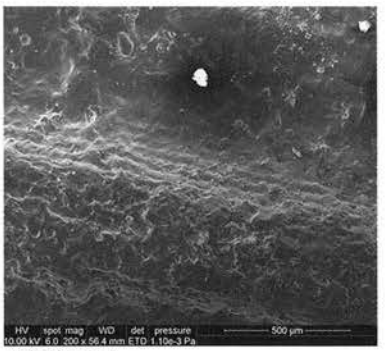
試料05-1

試料05-1

試料35-1

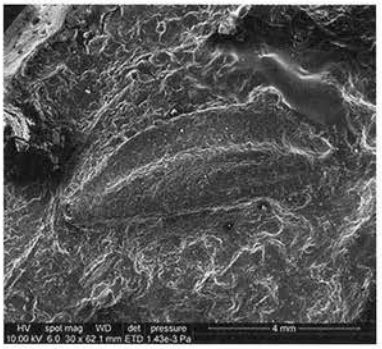


試料35-1

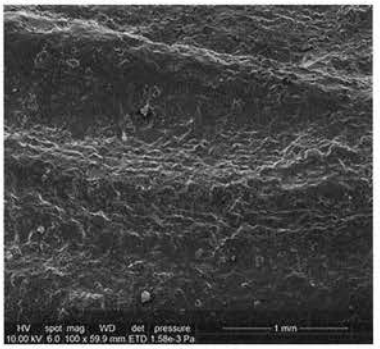


試料35-1

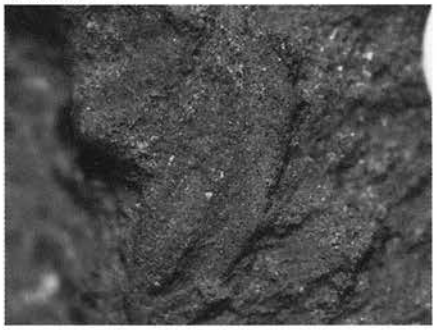
試料35-2



試料35-2



試料35-2



試料35-3

試料35

が、内外穎および小穂軸を残すほぼ完全な形の籾圧痕も認められる。走査型電子顕微鏡を用いたレプリカ観察では、鋳型である試料35で摩耗が著しい状況が看取され、炉壁の試料05では非常に新鮮な籾の状況を外面に残している。圧痕の磨耗が著しい試料は、鋳型そのものが廃棄状態で表面が露出していた時期が比較的長期間に及んだことが原因と考えられると同時に、炉壁の場合はより高温を受けたために表面が硬く窯変し磨耗しにくいことに起因する。

検出された籾は、形状からいずれもジャポニカタイプの栽培イネ（Oryza sativa）と判断される。籾痕試料は、弥生時代ものが比較的多く報告されているが、古代から中世の観察例はむしろ少例である。これらのイネがどのような品種に属するかを含め、今後同時代の籾などとの比較研究によって明らかになる情報をこれらの試料は潜在的に有している。

注

1　中山誠二 2007「レプリカ・セム法による植物圧痕土器の分析－山梨県油田遺跡出土土器の圧痕－」『山梨県立博物館研究紀要』1　pp.35 － 47

2　比佐陽一郎、片田雅樹 2006『土器圧痕のレプリカ法による転写作業の手引き（試作版）』福岡市埋蔵文化財センター

附編3　笛吹市石動遺跡より出土した動物遺体

植月　学（山梨県立博物館）

石動遺跡では長径約5.4mと推定される深さ約35cmの不整形の土坑内から、ウマとウシの骨が集中して出土した。トレンチ内の限られた調査であったため、遺構の詳細な形態や規模については明確でない。時代についても確実な遺物を伴っていないため不明だが、周辺の状況により近世以降に属すと推測されている。以下では動物遺体の分析により遺構の性格に関する若干の検討をおこなう。

1．分析結果

資料はいずれも風化が進み、かなり脆くなっている。同定できたのはウマ23点、ウシ6点、ウシもしくはウマ2点である（表）。

最小個体数　ウマでは右寛骨が2点、左橈骨が2点ある。これに推定体高を加味すると、橈骨で118cm前後（009）、121cm前後（003）が各一体あり、寛骨では121cm前後（008）の他に124cm前後（022）の個体が存在するので、最低3個体となる。ウシでは重複する部位はないが、推定体高では約98cm（大腿骨001）と約110cm（橈骨011）の個体が存在するので、最低2個体と推測される。

年齢・性別　ウマは臼歯の歯根中心部からの高さを用いた年齢推定によれば（西中川編1991）、12歳程度と、16～19歳程度の少なくとも2個体が存在する。雌雄については、上顎犬歯が1点あることから雄が最低1個体含まれる。ウシは歯がなく、詳細は不明だが、体高約98cmと推定された大腿骨は比較的若い個体のものと推測される。

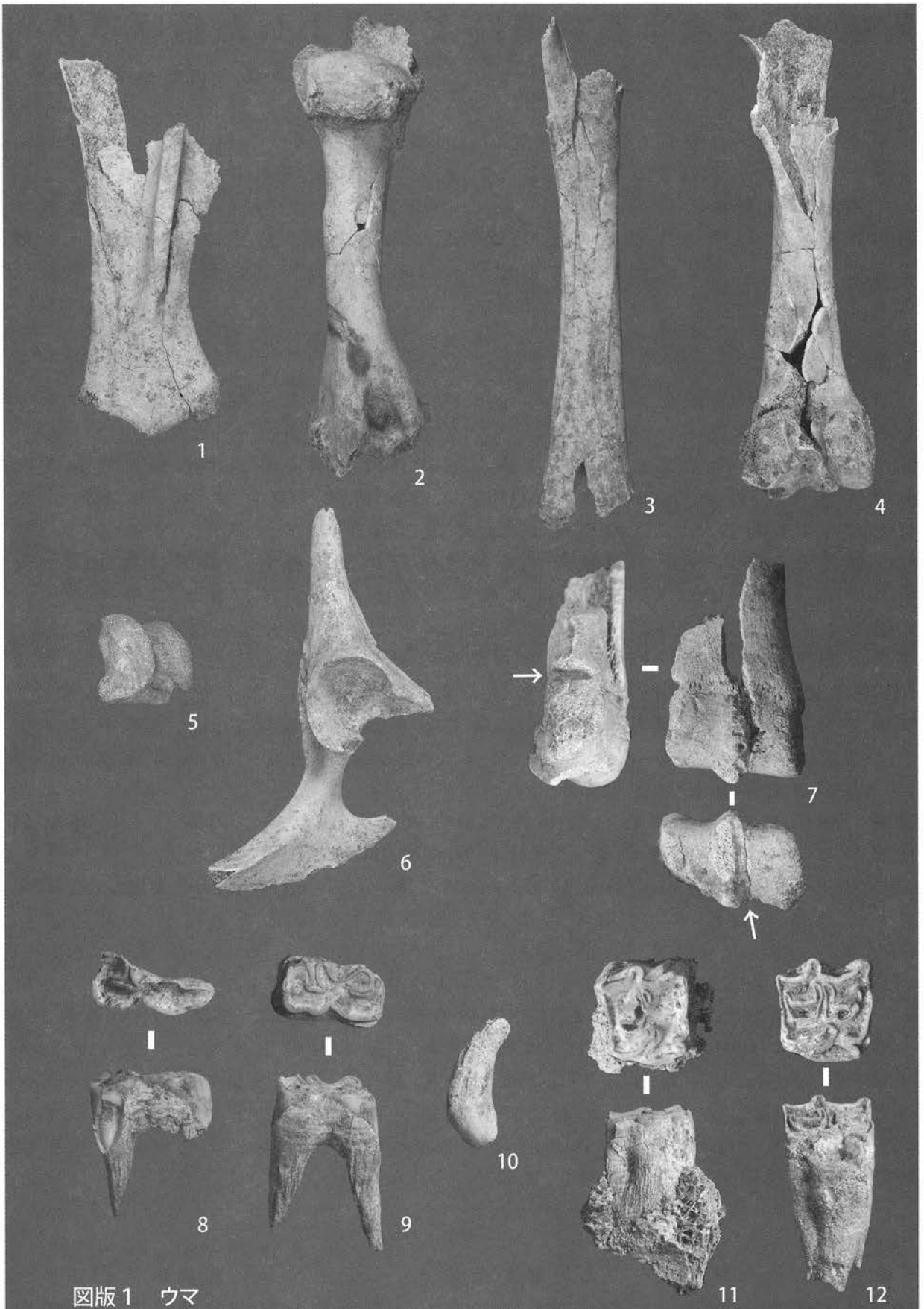
分布　同定結果を遺物分布図と照合したが、解剖学的位置を保ち、連結した状態であった可能性があるのは、ウマの009、010（左上腕骨と橈尺骨）、018、022、023（左右の寛骨と仙骨）のみであった。残りは同一個体の可能性がある部位でも散在しており、かつ一部の部位が検出されているに過ぎない。

その他、特筆すべき点として、資料029のウマ中足骨の遠位端に、水平（前後）方向および垂直（上下）方向に擦切ろうとしたような痕跡が認められた。いずれも断面はU字形を呈し、鋭利な刃物によるものではない。水平方向は内側面の滑車より上の部分で上下に分割しようとしたようである。幅・深さ共に3mm前後、長さ13mmにわたる。垂直方向は縦稜付近の中心部より左右に分割しようとしたようである。長さ20mmで、幅・深さは破損により不明だが、ほぼ水平方向と同規模である。

2．考察

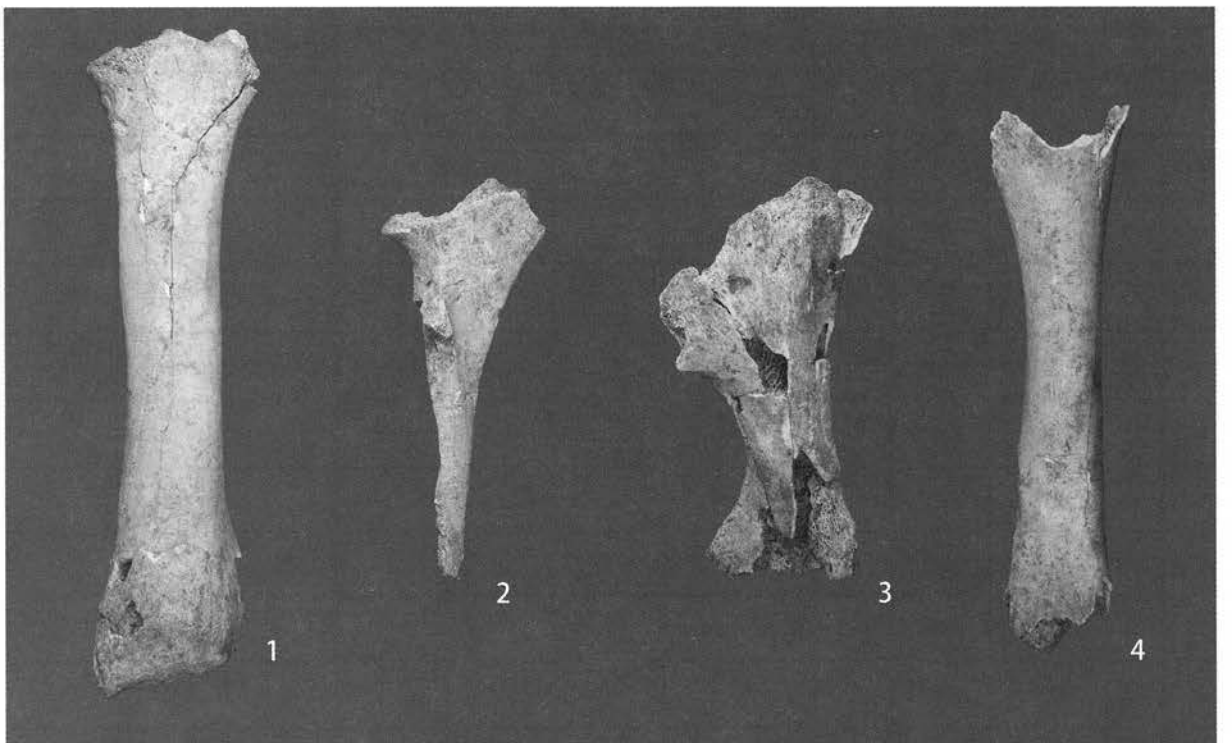
出土したのはウマとウシの複数の個体で、しかも細かい部位単位に分かれていた。切痕の存在により、埋葬ではなく、ウシやウマが解体された後に廃棄される場であった可能性が高い。ウマは中型の在来種であり、推定3個体中、2個体は老齢であったことから、駄馬として用いられていたと推測される。

本遺構は県内における弊牛馬処理を考える上で、興味深い遺構である。た



図版1　ウマ
1. 肩甲骨・右(016)　2. 上腕骨・右(021)　3. 橈尺骨・左(003)
4. 大腿骨・左(014)　5. 距骨・左(004)　6. 寛骨・右(008)　〔S=1/3〕

7. 中足骨・左(029)　8. 下顎P2・右(025)　9. 下顎P3/P4・右(019)
10. 上顎犬歯・左(031)　11. 上顎M1・右(005)　12. 上顎M1・右(013)　〔S=2/3〕



図版２　ウシ　1. 橈骨・左(011)　2. 尺骨・左(012)　3. 寛骨・左(002)　4. 大腿骨・右(001)〔S＝1/3〕

表　ウシ・ウマ遺体一覧

整理番号	現場No.	種	部　位	左右	位　置	計測値(mm)	推定骨長(cm)	推定体高(cm)	推定年齢	個体識別	備　考
001	7	ウシ	大腿骨	右	近位部－遠位部	SD:28.3		98.2		ウシB	
002	9	ウシ	寛骨	左	腸骨						
003	10	ウマ	橈尺骨	左	近位部－遠位端	SD:32.6	30.4	120.9		ウマA	
004	11	ウマ	距骨	左	完存	GH:53.5 GB:54.0					
005	12	ウマ	上顎骨	右	[M1]	H;15.9 ± L:21.6 B:26.5			17.3	ウマ②	
006	12	ウマ	膝蓋骨	左	完存						
007	12	ウシ？	腰椎								
008	14	ウマ	寛骨	右	完存	LAR:54.4	36.6	121.1		ウマA	
009	15	ウマ	橈尺骨	左	近位端－遠位部	SD:31.2	29.6	118.0		ウマB	
010	16	ウマ	上腕骨	左	近位端－遠位部	SD:28.3	25.7	118.0		ウマB	２分割
011	17	ウシ	橈骨	左	完存	GL:256		109.7		ウシA	012と同一
012	17	ウシ	尺骨	左	完存						011と同一
013	17	ウマ	上顎M1	右		H:29.2 L:22.0 B:25.3			12.0	ウマ①	
014	18	ウマ	大腿骨	左	近位端－遠位部	Bd:76.5+	34.5	117.5		ウマB	
015	18	ウシ／ウマ	腰椎								

整理番号	現場No.	種	部位	左右	位置	計測値(mm)	推定骨長(cm)	推定体高(cm)	推定年齢	個体識別	備考
016	19	ウマ	肩甲骨	右	近位端	GLP:81.9 BG:39.5	65.4	172.2			
017	19	ウシ	腰椎								
018	20	ウマ	寛骨	右	完存					ウマC	022と同一か
019	20	ウマ	下顎P3/P4	右		H:13.8 L:25.5 B:16.2			17.7/19.0	ウマ②	
020	20	ウマ	大腿骨	右	近位端						大腿骨頭。014と同一か？
021	21	ウマ	上腕骨	右	完存	GLI:261+ GLC:236 Bp:75.3+	26.1	120.3		ウマA	
022	22	ウマ	寛骨	左	完存	LAR:55.2	37.3	123.9		ウマC	018と同一か
023	22	ウマ	仙骨								
024	24	ウマ	腰椎								
025	25	ウマ	下顎P2	右		H:13.4 L:30.1 B:15.0			16.1	ウマ②	
026	25	ウマ	腰椎								
027	25	ウシ	腰椎								
028	一括	ウマ	上腕骨	右	完存	SD:30.2	25.6	117.5		ウマB	3分割
029	一括	ウマ	中足骨	左	近位部ー遠位端	Bd:38.2+					擦り切り痕？
030	1	ウマ	中足骨	?	近位端						
031	一括	ウマ	上顎C	左							♂

計測方法はDriesch(1976)による。
ウマの体高復元は林田・山内(1957)による。
ウマの骨長復元、年齢推定、ウシの体高復元は西中川編(1991)による。
個体識別は体高（アルファベット）、もしくは年齢（数字）による大まかな区分である。
整理番号は分析にあたってふり直したもの。

だ、年代が確定できないのが難点である。調査地点は近世においては末木村に属していた。村明細帳を見る限り、天保11年（1840）、安政2年（1855）ともに馬捨場の存在は確認できない。したがって、江戸時代後期に属する可能性は低くなる。なお、隣接する塩田村では天保8年、天保13年ともに「損馬置場」の記載が確認できる（上野・中川1967、山梨県教育委員会学術文化財課県史編さん室編1996）。

さらに、本遺構が近代以降に属する可能性を示唆するのがウシの存在である。今福（2004・2005）は江戸時代後期に編纂された『甲斐国志』の分析をもとに、近世甲斐国においてウシが西郡地方などの一部を除いてほとんど飼われていなかったことを明らかにした。『甲斐国志』によれば、末木村で飼われていたのはウマ3頭で、ウシは皆無である。また、旧一宮町にあたる村々でもウシは皆無である。旧一宮町においては、ウシ飼育の記録は明治に入って一部（御代咲村）で見られ、本地点が属する一宮村では大正7年の町村取調抜書でようやく確認できる（中村他1967）。したがって、本遺構は大正時代以降に属する可能性もある。

注目されるのは加工痕のある馬骨が確認されたことである。江戸や大阪などの近世都市遺跡では牛馬の長骨を用いた製品の加工工程が多く確認されているが、県内においては未確認である。また、近世においては斃牛馬を処理する集団が存在し、特定の土地内で死んだ牛馬を取得する権利を持っていたことが知られるが、明治4年の解放令とともに、そうした権利は消滅する(喜田1924、山本1989)。近世～近代の県内農村において、牛馬が死後どのように処理、あるいは利用されていたのか検討する材料を持ち合わせていないが、本遺構はその手がかりとなる可能性もあるため、時代は不確実ながらあえて報告をおこなった。骨の分布は調査区外にも続くと考えられ、今後周辺部分の調査により年代が明らかになることを期待したい。

謝辞　望月秀和氏（帝京大学山梨文化財研究所）には分析にあたり便宜をはかっていただくとともに、調査に関してご教示をいただいた。髙橋修氏（山梨県立博物館）には関連文献についてご教示いただいた。記して感謝申し上げる次第である。

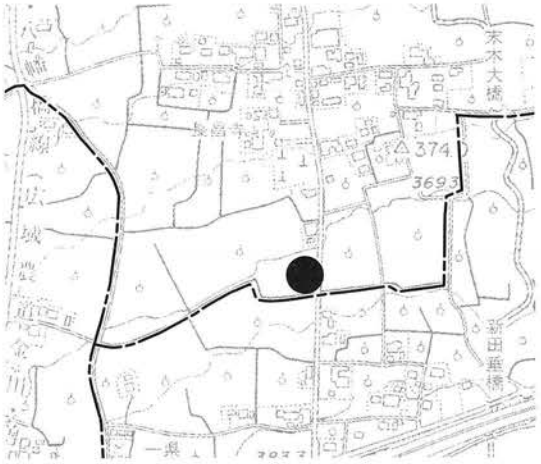
引用文献

今福理恵　2004「甲斐国巨麻郡における古代牧についての一視点」『研究紀要』20　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
今福理恵　2005「甲斐国山梨郡・八代郡・都留郡における古代牧についての一視点」『研究紀要』21　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
上野晴朗・中川金策　1967「町の歴史」『一宮町誌』　一宮町
喜田貞吉　1924「牛捨場馬捨馬」『歴史地理』43－5
林田重幸・山内忠平　1957「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第6号
中村広行　他　1967「産業と経済」『一宮町誌』　一宮町
西中川駿　編　1991『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』　平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書
山梨県教育委員会学術文化財課県史編さん室　編　1996『山梨県史資料叢書　村明細帳　八代郡編』　山梨県
山本尚友　1989「斃牛馬処理」『近世の民衆と芸能』
Driesch, A. A guide to the measurements of animal bones from archaeological sites. Pub. Peabody Museum, Harvard Univ.

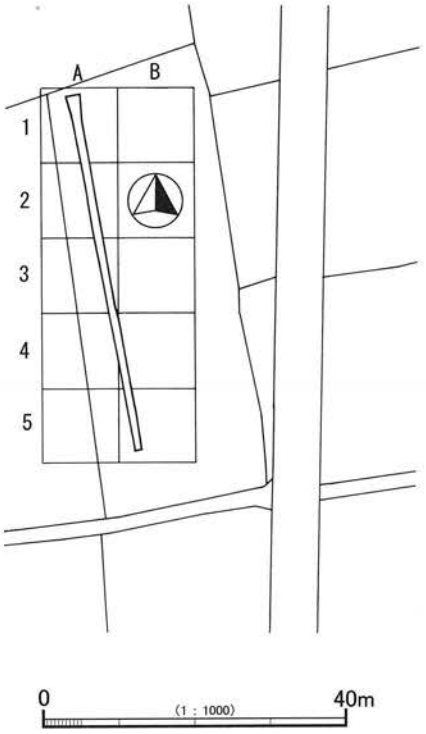
附編４　石動遺跡　南西興業地区発掘調査報告

１．調査概要

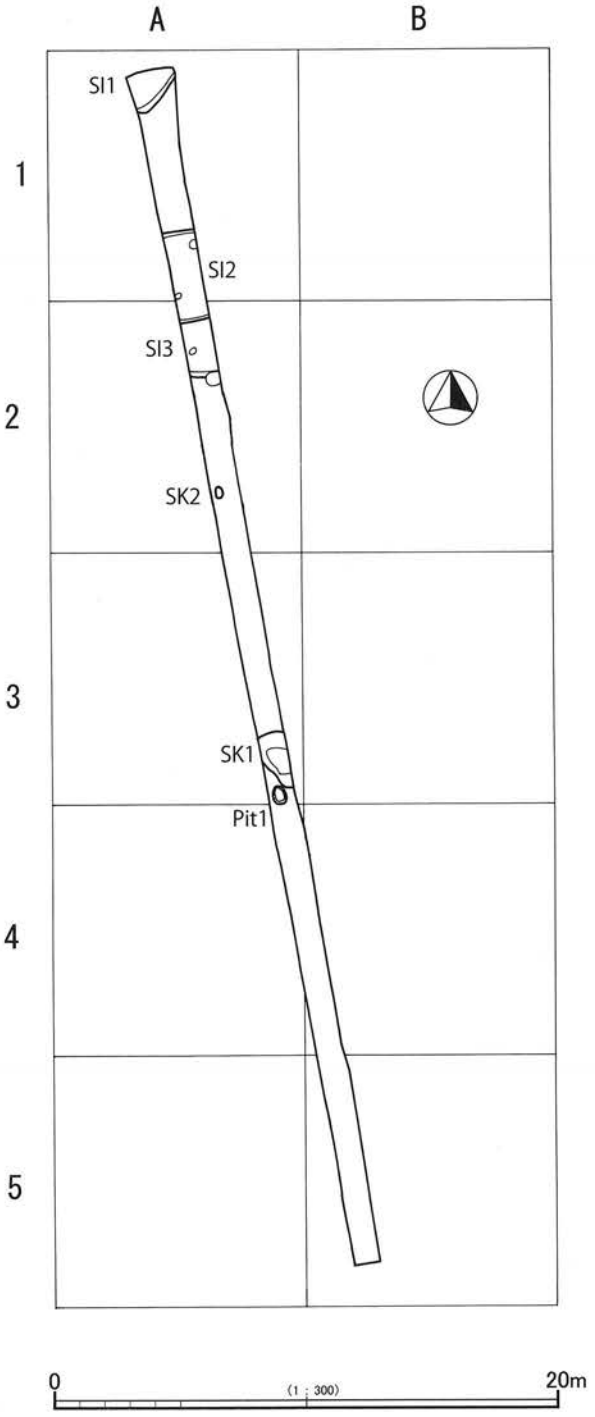
本調査は、石動遺跡地内における南西興業建設に先立ち、平成10(1998)年９月８日～９月15日に一宮町教育委員会が実施した。調査は南北約100m、幅約２ｍのトレンチを設定し、遺構確認面は地表面から約70cmの深さであり、住居跡３軒、土坑２基、ピット１基など、平安時代の遺構・遺物を発見した。



第1図　調査区位置図



第2図　トレンチ位置図



第3図　遺構位置図

2．遺構・遺物

・SI1〔第4図〕

位置と検出状況　A-1グリッド、トレンチの北端に位置する。調査範囲では床・周溝・壁の一部を確認した。確認面からの深さは約80cmを測った。検出した範囲ではカマド施設はなかった。**出土遺物**　土師器（1・2）、甕(3～5)が出土した。**遺構の時期**　明確ではないが、出土遺物から8C前半ごろとしておきたい。

・SI2〔第4図〕

位置と検出状況　A-1～2グリッド、トレンチの北側に位置する。調査範囲では北壁・南壁を確認し、重複するSI3の北側を壊していた。南北の壁間は約3.6 m、確認面からの深さは約80cmを測った。検出した範囲ではカマド施設はなく、遺構内でピット2基を検出したが性格は不明である。他、北側は床面が12cmほど高く、段状になっていた。**遺構の時期**　遺物が少なく明確ではないが、SI3との重複関係から、10C後半以降としておく。

・SI3〔第4図〕

位置と検出状況　A-2グリッド、トレンチの北側に位置する。調査範囲では南壁を確認したが、重複するSI2に北側を壊されいた。規模は不明であるが、南北約2.3 m、確認面からの深さは約30cmを測った。検出した範囲ではカマド施設はなく、ピット1基を検出し、長径40cm、短径23cmを測った。**出土遺物**　土師器坏(6～8)、金属製品(9)があり、7・8はPitから出土した。9は銅製の板状製品で、塗金がみられる。X線による分析では、鋳造物にしては素が少なく、鍛造された可能性も窺えるものの、明確ではなかった。**遺構の時期**　出土遺物から、10C後半頃としておく。

・SK1〔第5図〕

位置と検出状況　A-3グリッド、トレンチ中央よりやや南に位置する。確認範囲では、南北約2.5 m、確認面からの深さは約80cmを測る。遺物は少なく、金属製品・釘(10)が出土した。**遺構の時期**　出土遺物が少なく、については不明である。

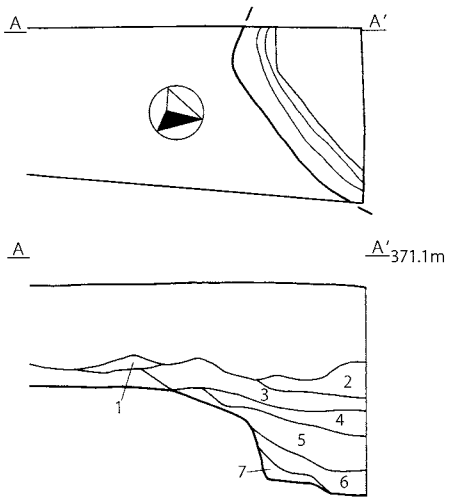
・SK2〔第5図〕

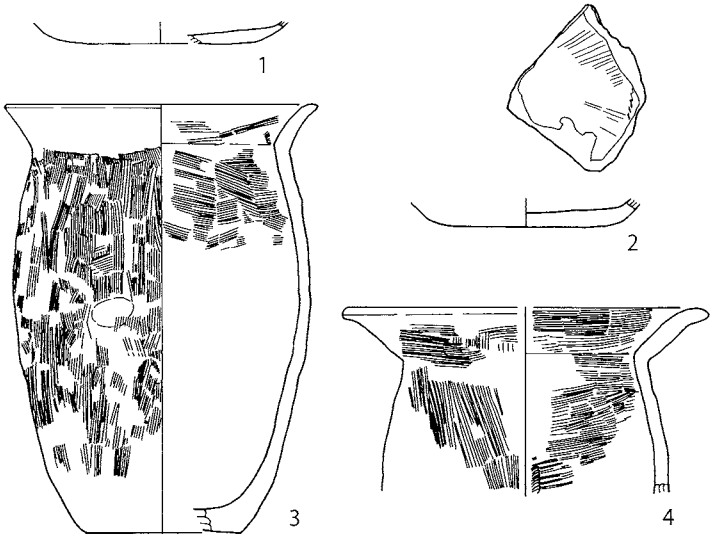
位置と検出状況　A-2グリッド、トレンチ中央よりやや北に位置する。不整円形で径は約1 m、確認面からの掘り込みは明確ではなく、深さは約5cmであった。礫が集積していたが性格は不明である。**遺構の時期**　出土遺物がなく不明である。

・Pit1〔第5図〕

位置と検出状況　A-3グリッド、SK1の南に位置する。平面形は長径80cm、短径70cmの楕円を呈している。確認面からの深さは、約40cmを測る。内部底には平石が据えてあり、なんらかの柱穴であった可能性が考えられる。**遺構の時期**　出土遺物がなく、不明である。

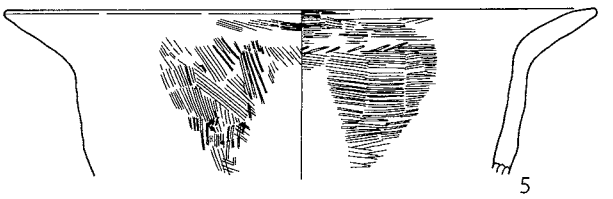
SI1





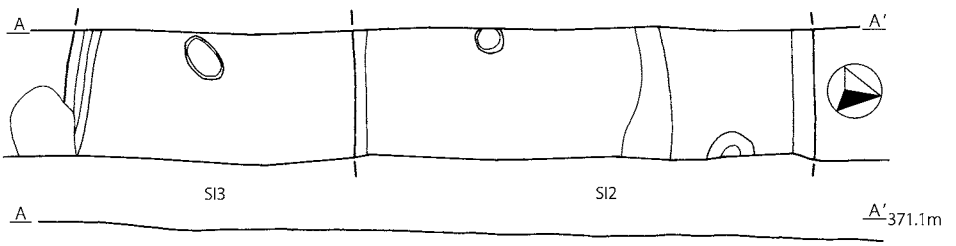
1 黒褐色土　黄色土ブロックを含む。
2 暗黄褐色土　しまりなし。小石を含む。
3 黒褐色土　しまりなし。
4 黄褐色土　砂質。黄色土粒を含む。
5 暗黄褐色土　拳大の礫を含む。
6 暗褐色土　黄褐色土風呂九を含む。
7 暗褐色土　黄色土粒を少量含む。

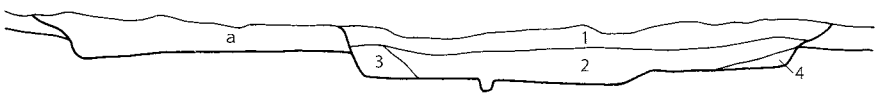
0 (1：60) 2m



0 (1：4) 10cm

SI2・3

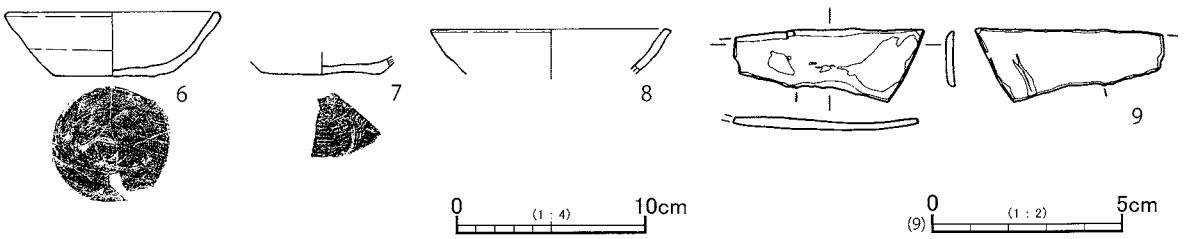




a 黒褐色土　黄色土ブロックを含む。

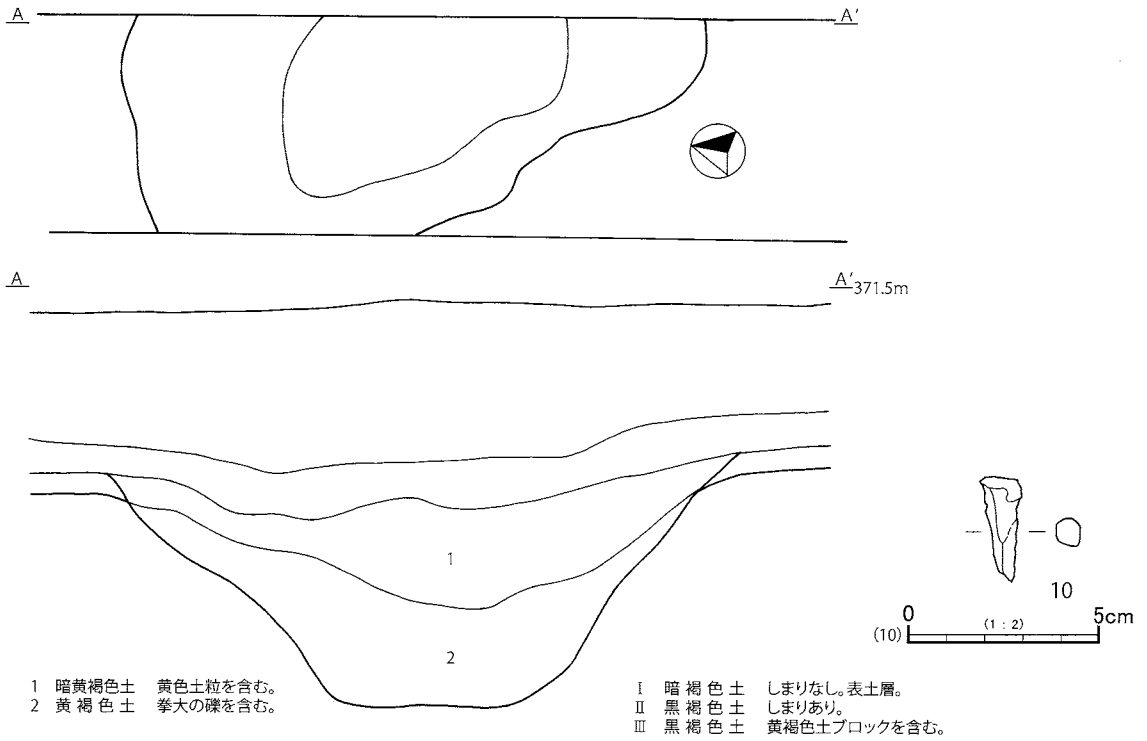
1 黒褐色土　しまりなし。
2 黒褐色土　しまりなし。1cm大の小石を含む。
3 暗褐色土　黄色土ブロックを含む。
4 暗褐色土　黄色土粒を含む。

0 (1：60) 2m

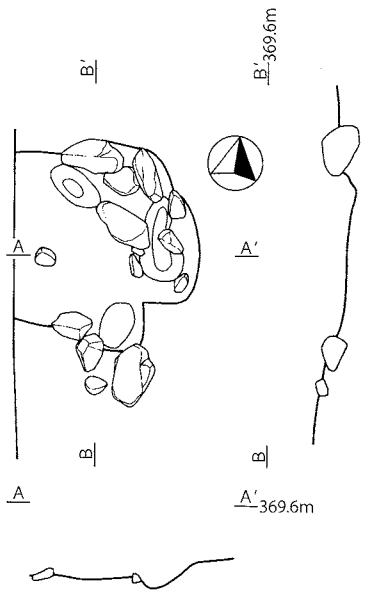


第4図　SI1・2・3

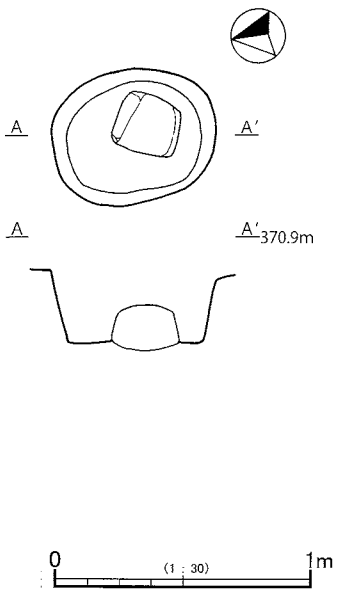
SK1



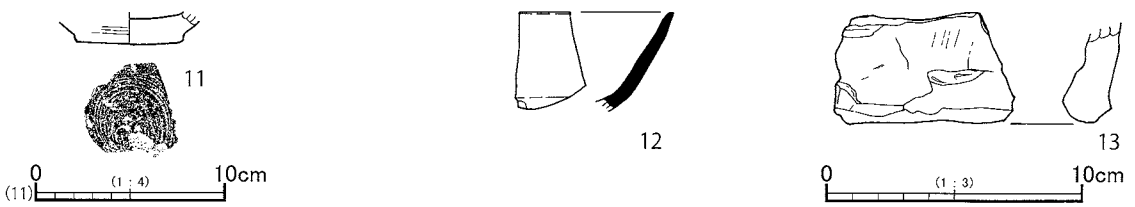
SK2



Pit1



遺構外



第5図　SK・Pitおよび遺構外出土遺物

表１　石動遺跡南西興業地区　遺物観察表

図	番号	遺構	種別	器種	口径 (cm) 器高 (cm) 底径 (cm)	焼成	胎土	整形技法	色調	備考
4	1	SI1	土師器	坏	- - (10.0)	良	密、赤・白・黒・金	(外) ヘラ削り (内) ロクロナデ (底) ヘラ削り、静止糸切り痕	浅黄橙色	全体的に劣化 内面磨耗、擦痕か 盤状坏
4	2	SI1	土師器	坏	- - (10.0)	良	密、赤・白・黒・金	(外) ヘラ削り、ミガキ (内) ロクロナデ、暗文 (底) ヘラ削り、ミガキ	橙色	黒斑あり 盤状坏
4	3	SI 1	土師器	甕	- - (16.4)	良	密、赤・白・金	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ (底) 木葉痕	にぶい赤褐色	外面及び内面口縁が やや黒変
4	4	SI1	土師器	甕	(19.2) - -	良	密、赤・白・金	(外) ハケメ (内) ハケメ	赤色	
4	5	SI1	土師器	甕	(31.2) - -	良	密、赤・白・金	(外) ハケメ、指頭痕 (内) ハケメ	明赤褐色	
4	6	SI2・3	土師器	坏	11.5 3.4 6.3	良	密、赤・白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、スノコ状圧痕	橙色	歪み大 黒斑あり 内面が煤けている
4	7	SI3 Pi t	土師器	坏	- - (6.2)	良	密、赤・白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕、指頭痕	橙色	
4	8	SI3 Pi t	土師器	坏	(12.8) - -	良	密、赤・白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	橙色	黒斑あり
5	11	1Tr	土師器	坏	- - (5.8)	良	密、赤・白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切痕	橙色	内・外面がやや煤けている
5	12	1Tr	須恵器	坏	- - -	良	密、白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	灰白色	
5	13	1Tr	土師器	竈形土器	- - -	良	密、赤・白・金	(外) ナデ、指頭痕 (内) ナデ	赤褐色	

表２　石動遺跡南西興業地区　金属製品観察表

図	番号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	材質	備考
4	9	SI2	不明	9.65	2.0	5.0	0.2	銅	金メッキ 水煙の一部か
5	10	SK1	釘	2.47	2.0	1.0	0.7	鉄	

３．まとめ

遺物については、調査範囲が狭小であったこともあり、全体的に出土量が少なく、ほとんどが土師器・須恵器などの小片であった。

（望月）

写真１　石動遺跡　南西興業地区

SI1　北から

SI1　東から

SI2・3　南から

SI2　南から

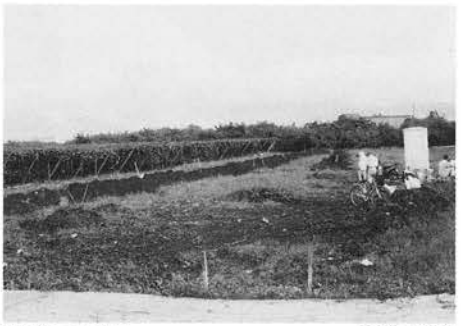
SK1　北から

SK1　西から

SK2　西から

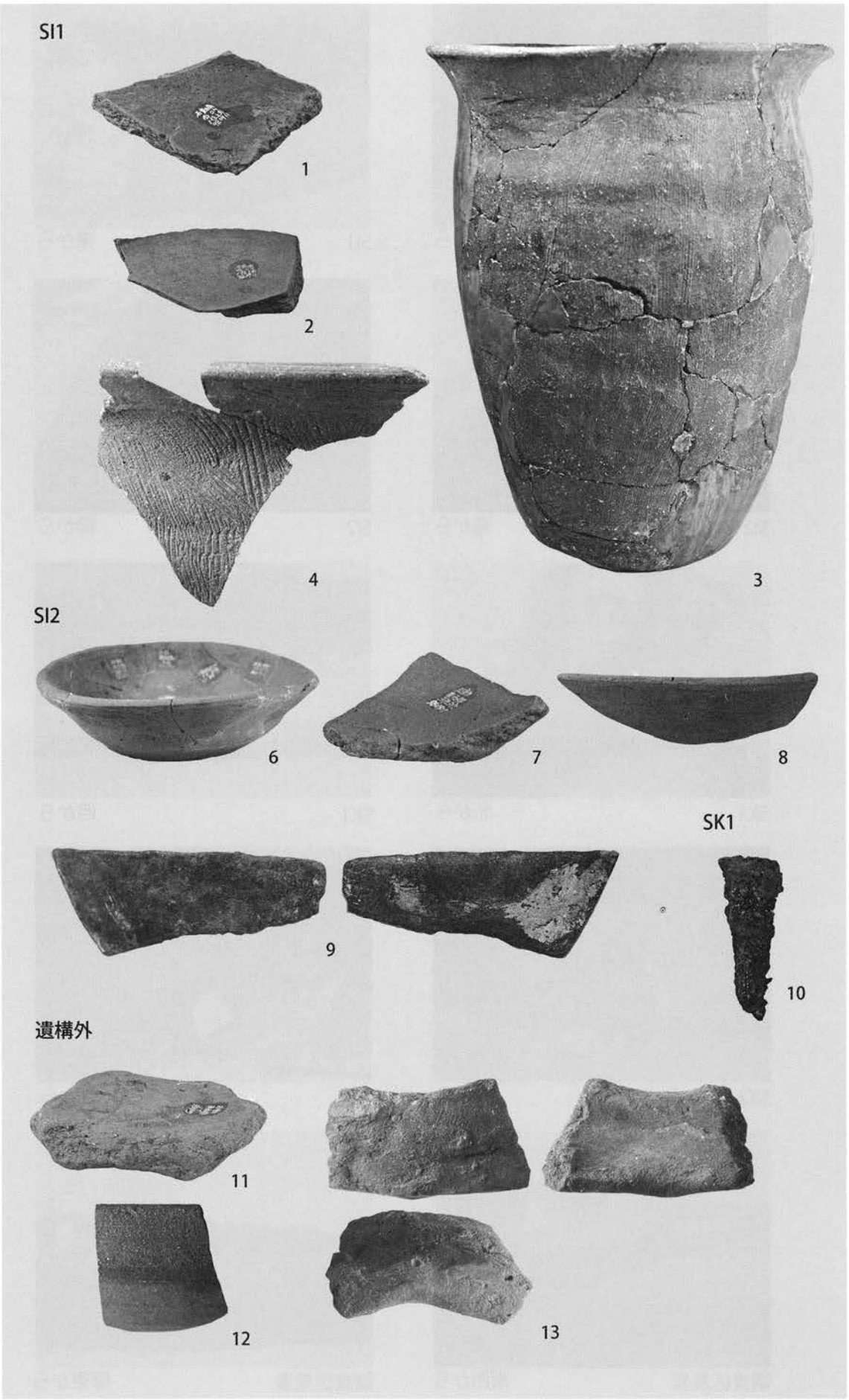
Pit1　西から

調査区風景　南西から



調査区風景　南東から

写真2　石動遺跡　南西興業地区



報告書抄録

ふりがな	くるまじぞういせき・いするぎいせき・きたなかはらいせき・なかあらいいせき
書　　名	車地蔵遺跡・石動遺跡・北中原遺跡・車地蔵遺跡・中新居遺跡
副書名	一宮町末木地区畑総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告書
シリーズ番号	第11集
編著者名	瀬田正明・野崎進・望月秀和
編集機関	笛吹市教育委員会
所在地	〒406 - 0031　山梨県笛吹市石和町市部809－1　TEL 055-261-3342
発行年月日	2010年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		国家座標		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
石動(いするぎ)遺跡	山梨県笛吹市 一宮町末木 字　石動	(19201)	一宮47	35度 38分 53秒	138度 41分 49秒			農道建設工事
北中原(きたなかはら)遺跡	山梨県笛吹市 一宮町塩田 字　北中原	(19201)	一宮119	35度 38分 41秒	138度 41分 48秒			
車地蔵(くるまじぞう)遺跡	山梨県笛吹市 一宮町末木 字　車地蔵	(19201)	一宮48	35度 38分 41秒				
中新居(なかあらい)遺跡	山梨県笛吹市 一宮町末木 字　中新居	(19201)	一宮52					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
車地蔵(くるまじぞう)遺跡	集落跡	奈良～中世	住居跡・土坑・道路跡	土師器 灰釉陶器 瓦	
石動(いするぎ)遺跡	集落跡	奈良～中世	住居跡・土坑・溝・道路跡	土師器 灰釉陶器	
北中原(きたなかはら)遺跡	集落跡・生産遺跡	平安時代～中世	住居跡・土坑・鋳造遺構・溝	土師器 炉壁 鋳型 鞴羽口	
中新居(なかあらい)遺跡	集落跡	平安時代	集石	土師器	

笛吹市文化財調査報告書　第 11 集

石動遺跡・北中原遺跡・車地蔵遺跡・中新居遺跡

発　行　日　2010 年 3 月 30 日

編集・発行　笛吹市教育委員会

印　　刷　相互印刷株式会社

Fuefuki City Archaeologicaal Report Vol.11

The Report of Archaeological Research of KURUMAJIZO, ISURUGI, KITANAKAHARA and NAKAARAI Sites

Archaeological Surveys prior to the Prefecture-run Integrated Rural Improvement of SUEKI region Ichinomiya

March, 2010
Aguricultural Department, Yamanashi Prefecturl
Development Office of Kyoto Area
Fuefuki City Board Education